

西新町遺跡 II

—福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第12次調査報告 1—

福岡県文化財調査報告書第154集

2000

福岡県教育委員会

西新町遺跡 II

—福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第12次調査報告 1—

福岡県文化財調査報告書第154集

2000

福岡県教育委員会



調査区全景（南上空から）



22号堅穴住居跡（南から）



81号堅穴住居跡（南から）

序

本書は福岡県教育委員会が平成10年度に実施した福岡県立修猷館高校改築事業に係る福岡市早良区所在西新町遺跡の埋蔵文化財の発掘調査報告書です。今回の調査では古墳時代前期の集落とその遺物、近世・近代の遺構・遺物を明らかにすることができましたが、本書はその調査報告書の第1冊目にあたり、古墳時代前期の集落の一部について報告したものです。

福岡県地域は古来より中国大陸、朝鮮半島との交流が盛んであったと考えられています。今回の西新町遺跡の調査では古墳時代前期の竈付き竪穴住居跡、朝鮮半島製土器、ガラス玉鑄型など同時代の他遺跡ではほとんど例を見ない遺構・遺物が発掘されました。これらは朝鮮半島の文化の影響の色濃い遺構・遺物であり、当遺跡が古墳時代において東アジア地域との交流の窓口のひとつとなっていることを示すものと考えられます。これらの成果は福岡県と東アジア地域との交流の歴史の貴重な資料になると思われま

す。本書が福岡県と東アジア地域の交流史の研究、学校教育ならびに生涯学習の資料として活用され、文化財愛護思想の普及の一助となれば幸いに存じます。また調査の円滑な進行のために様々な御理解と御協力をいただきました修猷館高校の生徒、教職員の皆様に感謝します。

平成12年3月31日

福岡県教育委員会
教育長 光安 常喜

例 言

- 1 本報告書は平成10年度に福岡県教育委員会が実施した福岡県立修猷館高校改築事業に係る埋蔵文化財の発掘調査記録であり、修猷館高校内の埋蔵文化財調査報告の2冊目にあたる。なお第1冊は福岡県文化財調査報告書第72集である。
- 2 本書に掲載した遺跡は福岡市早良区西新6-1-10に所在する西新町遺跡で、福岡市発掘調査分と合わせて第12次の調査にあたる。福岡市教育委員会の調査番号は9804である。
- 3 本報告書では、第12次調査の成果のうち弥生時代以前の遺物と古墳時代の竪穴住居跡の一部とその出土土器・石器、古墳時代の青銅器・金属器・玉類・ガラス玉鑄型・漁具を報告したものである。それ以外は次年度の報告を予定している。また、本書には遺跡全景写真と古墳時代の竪穴住居跡全ての写真を図版として掲載した。次年度報告では近世遺構写真と出土遺物を図版として掲載する予定である。
- 4 本書に掲載した遺構写真は調査担当者が、空中写真は（有）空中写真企画に委託し、気球による撮影を行った。
- 5 本書に掲載した遺構図の作製は調査担当者の他、林潤也、松崎卓郎、福本寛、辻田淳一郎の協力を得た。
- 6 出土遺物の整理・復元は岩瀬正信の指導のもとで九州歴史資料館で行った。
- 7 出土遺物の実測は平田春美、棚町陽子、田中典子、久富美智子、坂田順子、若松三枝子、堀江圭子、藤原さとみ、堀之内久美子、辻田淳一郎、岸本圭、今井涼子、岡寺良、加藤和歳と調査担当者が行った。
- 8 遺構の製図は豊福弥生、原カヨ子が、遺物の製図は豊福、原と調査担当者が行った。
- 9 本書の執筆分担は次のとおりである。

第1章	重藤 輝行
第2章第1節	大庭 孝夫
第2章第2節	重藤
第2章第3節	森井 啓次
第3章第1節	重藤
第3章第2・3節	重藤・森井・大庭（各文末に分担を記載）
第4章	重藤
- 10 本書の編集は森井、大庭の協力を得て重藤が行った。

凡 例

- 1 本書図面の方位は特に断らない限りは座標北である。
- 2 参考文献は各章末にまとめた。

本文目次

卷頭図版	
序	
例言	
本文目次	
図版目次	
挿図目次	
表目次	

第1章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査・整理の関係者	2
第3節	調査の経過	3
第2章	遺跡の位置と環境	6
第1節	遺跡の地理的環境	6
第2節	周辺の歴史的環境	6
第3節	既往の調査概要	13
第3章	調査の内容	18
第1節	調査の概要	18
第2節	縄文時代～弥生時代の遺物	21
	1. 縄文時代～弥生時代中期の石器	21
	2. 弥生土器	22
第3節	古墳時代の遺構と遺物	23
	1. 古墳時代の住居跡と出土土器	23
	2. 青銅器	249
	3. 鉄器	250
	4. 玉類	252
	5. ガラス玉鑄型	258
	6. 漁具	259
	7. 石器	264
第4章	おわりに	273

図版目次

卷頭図版1	調査区全景（南上空から）
卷頭図版2	1 22号竪穴住居跡（南から）
	2 81号竪穴住居跡（南から）
図版1	1 修猷館高校校舎（調査前、南から）
	2 修猷館高校校舎本館（調査前、南東から）
	3 修猷館高校本館車寄
図版2	1 1区校舎基礎遺構（北から）
	2 1区西部近世～近代遺構全景（南から）
	3 1区近世～近代遺構全景（東から）
図版3	1 2南区近世～近代遺構全景（東から）
	2 3北1区近世～近代遺構全景（西から）
	3 3北2区近世～近代遺構全景（東から）
図版4	1 3中1・南3区校舎基礎遺構（北から）

- 2 3 西拡張区近世～近代遺構全景（北から）
 3 3 西拡張区近世～近代遺構全景（南から）
- 図版 5 1 1 区古墳時代遺構空中写真
 2 1 区東部古墳時代遺構空中写真
- 図版 6 1 2 区古墳時代遺構空中写真
 2 3 東区古墳時代遺構空中写真
- 図版 7 1 3 中央区古墳時代遺構空中写真
 2 3 西拡張区古墳時代遺構空中写真
- 図版 8 1 調査地点遠景（南から）
 2 調査地点遠景（西から）
- 図版 9 1 1 区中央部古墳時代遺構（北から）
 2 1 区西部古墳時代遺構全景（南から）
 3 1 東拡張区古墳時代遺構全景（北から）
- 図版10 1 2 南区古墳時代遺構全景（東から）
 2 3 北1・中1区古墳時代遺構全景（東から）
 3 3 北1・中1区古墳時代遺構全景（北から）
- 図版11 1 3 中3区古墳時代遺構全景（北から）
 2 3 西拡張区古墳時代遺構全景（南から）
 3 3 西拡張区古墳時代遺構全景（南西から）
- 図版12 1 1・2号竪穴住居跡（北東から）
 2 3号竪穴住居跡（北から）
 3 3号竪穴住居跡（西から）
- 図版13 1 4号竪穴住居跡（南から）
 2 5号竪穴住居跡（南から）
 3 6号竪穴住居跡（南から）
- 図版14 1 6号竪穴住居跡カマド断面（南から）
 2 6号竪穴住居跡カマド（南から）
 3 7号竪穴住居跡（南から）
- 図版15 1 8号竪穴住居跡（東から）
 2 12号竪穴住居跡（南から）
 3 13号竪穴住居跡（西から）
- 図版16 1 14号竪穴住居跡遺物出土状況（西から）
 2 14号竪穴住居跡（西から）
 3 15号竪穴住居跡（南から）
- 図版17 1 15号竪穴住居跡北半（北から）
 2 16号竪穴住居跡（北から）
 3 17号竪穴住居跡（東から）
- 図版18 1 18号竪穴住居跡（南から）
 2 19号竪穴住居跡（北から）
 3 21・23・24号竪穴住居跡遺物出土状況（南から）
- 図版19 1 21・23・24号竪穴住居跡（南から）
 2 22号竪穴住居跡（南から）
 3 22号竪穴住居跡カマド（西から）
- 図版20 1 25号竪穴住居跡（南から）
 2 26号竪穴住居跡（南から）
 3 26・27号竪穴住居跡（東から）
- 図版21 1 27号竪穴住居跡（東から）
 2 29号竪穴住居跡（北から）

- 3 29号竪穴住居跡蛸壺出土状況（東から）
 図版22 1 30号竪穴住居跡遺物出土状況（南から）
 2 30号竪穴住居跡（南から）
 3 31号竪穴住居跡（南から）
 図版23 1 32号竪穴住居跡（北から）
 2 35号竪穴住居跡（北から）
 3 36号竪穴住居跡（北から）
 図版24 1 37号竪穴住居跡（北から）
 2 38号竪穴住居跡（南から）
 3 38号竪穴住居跡（東から）
 図版25 1 39・40・42号竪穴住居跡（南から）
 2 39号竪穴住居跡カマド（南から）
 3 40号竪穴住居跡焼土集中部（南から）
 図版26 1 41号竪穴住居跡（北から）
 2 42号竪穴住居跡カマド（南東から）
 3 43号竪穴住居跡（東から）
 図版27 1 44号竪穴住居跡（南から）
 2 45号竪穴住居跡（南から）
 3 49号竪穴住居跡（南から）
 図版28 1 49号竪穴住居跡鉄器出土状況
 2 50号竪穴住居跡（北から）
 3 52・53号竪穴住居跡（北から）
 図版29 1 52号竪穴住居跡（南西から）
 2 53号竪穴住居跡カマド（北から）
 3 55・56号竪穴住居跡（西から）
 図版30 1 63号竪穴住居跡（東から）
 2 64号竪穴住居跡（南から）
 3 65・66号竪穴住居跡（北から）
 図版31 1 68号竪穴住居跡（南から）
 2 69号竪穴住居跡（北から）
 3 71号竪穴住居跡（北から）
 図版32 1 72号竪穴住居跡（南から）
 2 73号竪穴住居跡（北から）
 3 74・75号竪穴住居跡（東から）
 図版33 1 75b号竪穴住居跡（東から）
 2 75b号竪穴住居跡カマド（南から）
 3 76号竪穴住居跡（南から）
 図版34 1 77号竪穴住居跡カマド（南から）
 2 77号竪穴住居跡（南から）
 3 78・129号竪穴住居跡（南から）
 図版35 1 79・80号竪穴住居跡（南から）
 2 80号竪穴住居跡（北から）
 3 81号竪穴住居跡（南から）
 図版36 1 81号竪穴住居跡カマド（南から）
 2 81号竪穴住居跡甗出土状況（南から）
 3 82号竪穴住居跡（北から）
 図版37 1 83号竪穴住居跡（北から）
 2 84号竪穴住居跡（北から）

- 図版38 3 86号竪穴住居跡（北から）
 1 87・44号竪穴住居跡（北から）
 2 88号竪穴住居跡（南から）
 3 89号竪穴住居跡（北から）
- 図版39 1 89号竪穴住居跡カマド（北東から）
 2 90号竪穴住居跡（西から）
 3 91号竪穴住居跡（北東から）
- 図版40 1 92号竪穴住居跡（南東から）
 2 93号竪穴住居跡（北西から）
 3 96号竪穴住居跡（東から）
- 図版41 1 96号竪穴住居跡P 3 玉原石・未製品出土状況（西から）
 2 97号竪穴住居跡（南から）
 3 98号竪穴住居跡（北西から）
- 図版42 1 99号竪穴住居跡（北東から）
 2 100号竪穴住居跡（北から）
 3 101号竪穴住居跡（南から）
- 図版43 1 102号竪穴住居跡（北から）
 2 103・117号竪穴住居跡（北西から）
 3 104号竪穴住居跡（南から）
- 図版44 1 105号竪穴住居跡（南西から）
 2 106号竪穴住居跡（南から）
 3 107号竪穴住居跡（南から）
- 図版45 1 108号竪穴住居跡（東から）
 2 108号竪穴住居跡碧玉製紡錘車形石製品出土状況（東から）
 3 109号竪穴住居跡（南西から）
- 図版46 1 110号竪穴住居跡（西から）
 2 110号竪穴住居跡カマド（西から）
 3 111号竪穴住居跡（北から）
- 図版47 1 112号竪穴住居跡（西から）
 2 113・115号竪穴住居跡（東から）
 3 114号竪穴住居跡（東から）
- 図版48 1 116号竪穴住居跡西半（東から）
 2 116号竪穴住居跡東半（西から）
 3 119号竪穴住居跡（西南から）
- 図版49 1 120号竪穴住居跡（東から）
 2 121号竪穴住居跡（南から）
 3 122～124号竪穴住居跡（東から）
- 図版50 1 125号竪穴住居跡（南から）
 2 125号竪穴住居跡カマド（西から）
 3 126号竪穴住居跡（東から）
- 図版51 1 128号竪穴住居跡（南から）
 2 130号竪穴住居跡（南から）
 3 131号竪穴住居跡（東から）
- 図版52 1 133号竪穴住居跡（西から）
 2 134号竪穴住居跡（西から）
 3 133・135号竪穴住居跡（東から）
- 図版53 1 137号竪穴住居跡（東から）
 2 138号竪穴住居跡（西から）

	3	139号竪穴住居跡（東から）
図版54	1	139号竪穴住居跡（南から）
	2	140号竪穴住居跡（南から）
	3	141号竪穴住居跡（西から）
図版55	1	142号竪穴住居跡（南から）
	2	143号竪穴住居跡（西から）
	3	144・145号竪穴住居跡（南西から）
図版56	1	146号竪穴住居跡（東から）
	2	147号竪穴住居跡（南東から）
	3	148号竪穴住居跡（北から）
図版57	1	149号竪穴住居跡（東から）
	2	150号竪穴住居跡（南から）
	3	151・152号竪穴住居跡（東から）
図版58	1	153号竪穴住居跡（北東から）
	2	155・156号竪穴住居跡（東から）
	3	157号竪穴住居跡（南から）
図版59	1	157号竪穴住居跡カマド（南から）
	2	162号竪穴住居跡（東から）
	3	165号竪穴住居跡（南から）
図版60	1	調査風景（1）
	2	調査風景（2）
	3	調査風景（3）

挿図目次

第1図	西新町遺跡の位置	1
第2図	調査風景	4
第3図	『西新町遺跡たより』	5
第4図	周辺遺跡分布図（1/50000）	7
第5図	藤崎遺跡出土弥生時代早期小壺（1/4、福岡市第137集より）	9
第6図	藤崎遺跡方形周溝墓分布図（1/1500、福岡市第573集より）	10
第7図	藤崎遺跡6号方形周溝墓出土三角縁二神二車馬鏡 （1/4、福岡市第80集より）	11
第8図	藤崎遺跡1・2号方形周溝墓出土土器（1/6、福岡市第80集より）	12
第9図	発掘調査区の位置と周辺調査地（1/4000）	13
第10図	2次10号甕棺（1/40、福岡市第79集より）	14
第11図	3次2号住居跡出土半島系土器（1/8、福岡県第72集より）	14
第12図	5次SC04（1/100、福岡市第375集より）	15
第13図	8次SC45と出土土器（1/120、1/8、福岡市第484集より）	15
第14図	8次SX40出土ガラス片（1/2、福岡市第484集より）	16
第15図	9次SC85出土土器・鉄器（1/8、1/6、福岡市第505集より）	16
第16図	調査風景（2）	17
第17図	調査区周辺地形図（1/1500）	18
第18図	近世～近代遺構配置図（1/250）	折り込み
第19図	古墳時代遺構配置図（1/250）	折り込み
第20図	3西拡張区南壁土層図（1/60）	19
第21図	調査区区割図（1/1500）	20
第22図	縄文時代～弥生時代の石器実測図（1/2、2/3）	21

第23図	弥生時代前期～後期の出土土器実測図 (1/3、1/4、1/6)	23
第24図	1・8号竪穴住居跡実測図 (1/60)	25
第25図	1・2号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	26
第26図	2号竪穴住居跡実測図 (1/60)	27
第27図	3・4号竪穴住居跡実測図 (1/60)	29
第28図	3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4)	30
第29図	3号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3、1/4)	31
第30図	4・5号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	33
第31図	5号竪穴住居跡実測図 (1/60)	34
第32図	6・7号竪穴住居跡実測図 (1/60)	35
第33図	6号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	36
第34図	6号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	37
第35図	7・8号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	38
第36図	9・24号竪穴住居跡実測図 (1/60)	39
第37図	9号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4、1/6)	40
第38図	12号竪穴住居跡実測図 (1/60)	41
第39図	10・12号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	41
第40図	13・14・151号竪穴住居跡実測図 (1/60)	42
第41図	13号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	43
第42図	14号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	44
第43図	15・16号竪穴住居跡実測図 (1/60)	45
第44図	15・16号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	46
第45図	17・20号竪穴住居跡実測図 (1/60)	48
第46図	17・20号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	48
第47図	18・19号竪穴住居跡実測図 (1/60)	49
第48図	18号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	50
第49図	19号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	51
第50図	21・25号竪穴住居跡実測図 (1/60)	52
第51図	21号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4)	54
第52図	21号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3、1/4)	55
第53図	21号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/3)	56
第54図	21号竪穴住居跡出土土器実測図 (4) (1/3)	57
第55図	10・22号竪穴住居跡実測図 (1/60)	59
第56図	22号竪穴住居跡カマド実測図 (1/60)	59
第57図	22号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	60
第58図	23号竪穴住居跡実測図 (1/60)	61
第59図	23号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4)	63
第60図	23号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3、1/4)	64
第61図	23号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/3)	65
第62図	24・25号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	66
第63図	26～28号竪穴住居跡実測図 (1/60)	67
第64図	26号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	68
第65図	27・28号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	69
第66図	29号竪穴住居跡実測図 (1/60)	70
第67図	29号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	71
第68図	30号竪穴住居跡実測図 (1/60、1/30)	72
第69図	30号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4)	75
第70図	30号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3、1/4)	76

第71図	30号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/3、1/4)	77
第72図	31・35号竪穴住居跡実測図 (1/60)	79
第73図	32号竪穴住居跡実測図 (1/60)	79
第74図	35号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	80
第75図	36・38号竪穴住居跡実測図 (1/60)	81
第76図	36号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4)	82
第77図	36号 (2)、36・38・43号竪穴住居跡上層出土土器実測図 (1/3、1/4)	83
第78図	36・38・43号竪穴住居跡上層出土土器実測図 (1/3、1/4)	84
第79図	37号竪穴住居跡実測図 (1/60)	85
第80図	37号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	87
第81図	37・38号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	88
第82図	38号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	89
第83図	39号竪穴住居跡実測図 (1/60)	90
第84図	39号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	91
第85図	39号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	92
第86図	40・47号竪穴住居跡実測図 (1/60)	93
第87図	40号竪穴住居跡焼土集中部分実測図 (1/40)	93
第88図	40号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	94
第89図	40号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	95
第90図	41号竪穴住居跡・47号土坑実測図 (1/60)	96
第91図	41号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	97
第92図	42号竪穴住居跡実測図 (1/60)	98
第93図	42号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	98
第94図	42号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	99
第95図	43号竪穴住居跡実測図 (1/60)	100
第96図	43号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4、1/6)	101
第97図	43号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3、1/4)	102
第98図	43号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/3)	103
第99図	44号竪穴住居跡実測図 (1/60)	104
第100図	44号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	105
第101図	44・45号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	105
第102図	45・61号竪穴住居跡実測図 (1/60)	106
第103図	48・49号竪穴住居跡実測図 (1/60)	107
第104図	47・48号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	108
第105図	49号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	109
第106図	50・51号竪穴住居跡実測図 (1/60)	110
第107図	50号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	111
第108図	52・53号竪穴住居跡実測図 (1/60、1/30)	112
第109図	52号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	114
第110図	51・52・53・55号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	115
第111図	55・56号竪穴住居跡実測図 (1/60)	116
第112図	63・155・156号竪穴住居跡実測図 (1/60)	117
第113図	63号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4、1/6)	119
第114図	63号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3、1/4)	120
第115図	63号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/3)	121
第116図	64号竪穴住居跡実測図 (1/60、1/30)	122
第117図	64号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	123
第118図	65・66号竪穴住居跡実測図 (1/60)	125

第119図	65号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4、1/6)	127
第120図	65号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3、1/4)	128
第121図	65号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/3、1/4)	129
第122図	68号竪穴住居跡実測図 (1/60)	129
第123図	66・68号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/2、1/3、1/4、1/6)	130
第124図	69号竪穴住居跡実測図 (1/60)	131
第125図	70号竪穴住居跡実測図 (1/60)	132
第126図	71号竪穴住居跡実測図 (1/60)	133
第127図	69・70・71号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	134
第128図	72・73号竪穴住居跡実測図 (1/60)	135
第129図	72号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4)	137
第130図	72号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3、1/4)	138
第131図	72号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/2、1/3)	140
第132図	74・158号竪穴住居跡実測図 (1/60)	142
第133図	73・74 (1) 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	143
第134図	74 (2) 号竪穴住居跡上層出土土器実測図 (1/3、1/4)	144
第135図	75・75 b 号竪穴住居跡実測図 (1/60)	145
第136図	75 b 号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	146
第137図	75・75 b 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	147
第138図	76・159号竪穴住居跡実測図 (1/60)	149
第139図	76号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	150
第140図	77号竪穴住居跡実測図 (1/60)	151
第141図	77号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	152
第142図	77号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4)	153
第143図	77号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3、1/4)	154
第144図	78・129号竪穴住居跡実測図 (1/60)	155
第145図	78・79号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	156
第146図	79号竪穴住居跡実測図 (1/60)	157
第147図	80号竪穴住居跡実測図 (1/60)	158
第148図	80号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	159
第149図	81・161号竪穴住居跡実測図 (1/60)	160
第150図	81号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	161
第151図	81号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/4)	162
第152図	81号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3、1/4)	164
第153図	81号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/3、1/4)	165
第154図	81号竪穴住居跡出土土器実測図 (4) (1/3)	166
第155図	81号竪穴住居跡出土土器実測図 (5) (1/3、1/4)	167
第156図	82・83号竪穴住居跡実測図 (1/60)	168
第157図	82号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	169
第158図	84・85号竪穴住居跡実測図 (1/60)	170
第159図	84・85号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	171
第160図	86・87号竪穴住居跡実測図 (1/60)	172
第161図	86号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	173
第162図	88号竪穴住居跡実測図 (1/30)	175
第163図	87・88号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	176
第164図	89号竪穴住居跡実測図 (1/60)	177
第165図	89号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	178
第166図	89号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4)	179

第167图	89号竖穴住居跡出土土器実測图 (2) (1/3、1/4)	180
第168图	89号竖穴住居跡出土土器実測图 (3) (1/3)	181
第169图	89·90号竖穴住居跡上層出土土器実測图 (1) (1/3、1/4)	182
第170图	89·90号竖穴住居跡上層出土土器実測图 (2) (1/3)	183
第171图	90号竖穴住居跡実測图 (1/60)	184
第172图	90号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/3、1/4)	184
第173图	91·94号竖穴住居跡実測图 (1/60)	185
第174图	91号竖穴住居跡出土土器実測图 (1) (1/3、1/4)	186
第175图	91号竖穴住居跡出土土器実測图 (2) (1/3、1/4)	187
第176图	92号竖穴住居跡実測图 (1/60)	188
第177图	92号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/3)	189
第178图	93号竖穴住居跡実測图 (1/60)	190
第179图	93号竖穴住居跡出土土器実測图 (1) (1/3、1/4)	191
第180图	93号竖穴住居跡出土土器実測图 (2) (1/3、1/4)	192
第181图	93号竖穴住居跡出土土器実測图 (3) (1/3、1/4)	193
第182图	93号竖穴住居跡出土土器実測图 (4) (1/3、1/4)	195
第183图	93号竖穴住居跡出土土器実測图 (5) (1/3)	196
第184图	95号竖穴住居跡実測图 (1/60)	197
第185图	94·95号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/3、1/4)	197
第186图	96号竖穴住居跡実測图 (1/60)	198
第187图	96号竖穴住居跡出土土器実測图 (1) (1/3、1/4)	199
第188图	96号竖穴住居跡出土土器実測图 (2) (1/3)	200
第189图	97号竖穴住居跡実測图 (1/60)	201
第190图	97号竖穴住居跡出土土器実測图 (1) (1/4)	203
第191图	97号竖穴住居跡出土土器実測图 (2) (1/3)	204
第192图	97号竖穴住居跡出土土器実測图 (3) (1/4)	205
第193图	97号竖穴住居跡出土土器実測图 (4) (1/3、1/4)	206
第194图	97号竖穴住居跡出土土器実測图 (5) (1/3)	207
第195图	97号竖穴住居跡出土土器実測图 (6) (1/3、1/4)	208
第196图	97号竖穴住居跡出土土器実測图 (7) (1/3、1/4)	209
第197图	98号竖穴住居跡実測图 (1/60)	210
第198图	98号竖穴住居跡出土土器実測图 (1) (1/3、1/4)	212
第199图	98号竖穴住居跡出土土器実測图 (2) (1/3)	213
第200图	99号竖穴住居跡実測图 (1/60)	213
第201图	99号竖穴住居跡出土土器実測图 (1) (1/3、1/4)	214
第202图	99号竖穴住居跡出土土器実測图 (2) (1/3、1/4)	215
第203图	100号竖穴住居跡実測图 (1/60)	216
第204图	100号竖穴住居跡出土土器実測图 (1) (1/3、1/4)	217
第205图	100号竖穴住居跡出土土器実測图 (2) (1/3、1/4)	218
第206图	100号竖穴住居跡出土土器実測图 (3) (1/3、1/4)	219
第207图	101号竖穴住居跡実測图 (1/60)	220
第208图	101号竖穴住居跡出土土器実測图 (1) (1/4、1/6)	221
第209图	101号竖穴住居跡出土土器実測图 (2) (1/3、1/4)	222
第210图	101号竖穴住居跡出土土器実測图 (3) (1/3)	223
第211图	101号竖穴住居跡出土土器実測图 (4) (1/3)	224
第212图	102~104·106·117号竖穴住居跡実測图 (1/60)	225
第213图	102·103号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/3、1/4)	226
第214图	104号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/3、1/4)	228

第215図	105・107号竪穴住居跡実測図 (1/60)	230
第216図	105号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4、1/8)	231
第217図	105号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3、1/4)	232
第218図	105 (3)・106号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	233
第219図	107号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4、1/6)	235
第220図	107号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3)	236
第221図	108号竪穴住居跡実測図 (1/60)	236
第222図	108号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	237
第223図	109号竪穴住居跡実測図 (1/60)	238
第224図	109号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4)	239
第225図	109号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3、1/4)	240
第226図	109号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/3)	241
第227図	110号竪穴住居跡実測図 (1/60)	241
第228図	110号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	242
第229図	110号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (1/3、1/4)	243
第230図	110号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3)	244
第231図	111・112号竪穴住居跡実測図 (1/60)	245
第232図	111～113号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4、1/6)	246
第233図	113・115号竪穴住居跡実測図 (1/60)	247
第234図	114号竪穴住居跡実測図 (1/60)	248
第235図	114・115号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3、1/4)	248
第236図	青銅器実測図 (実大)	249
第237図	鉄器実測図 (1) (1/2)	250
第238図	鉄器実測図 (2) (1/2)	251
第239図	玉類実測図 (1) (2/3)	253
第240図	玉類実測図 (2) (2/3)	254
第241図	ガラス玉鑄型実測図 (1/2、2/3)	258
第242図	漁撈具実測図 (1) (1/2)	260
第243図	漁撈具実測図 (2) (1/2)	261
第244図	漁撈具実測図 (3) (1/2)	262
第245図	石器実測図 (1) (1/2)	265
第246図	石器実測図 (2) (1/2)	266
第247図	石器実測図 (3) (1/2)	267
第248図	石器実測図 (4) (1/2、1/3)	268
第249図	石器実測図 (5) (1/2、1/3)	269
第250図	石器実測図 (6) (1/2)	270
第251図	石器実測図 (7) (1/2、1/3)	271

表目次

第1表	玉原石計測表	255～257
-----	--------------	---------

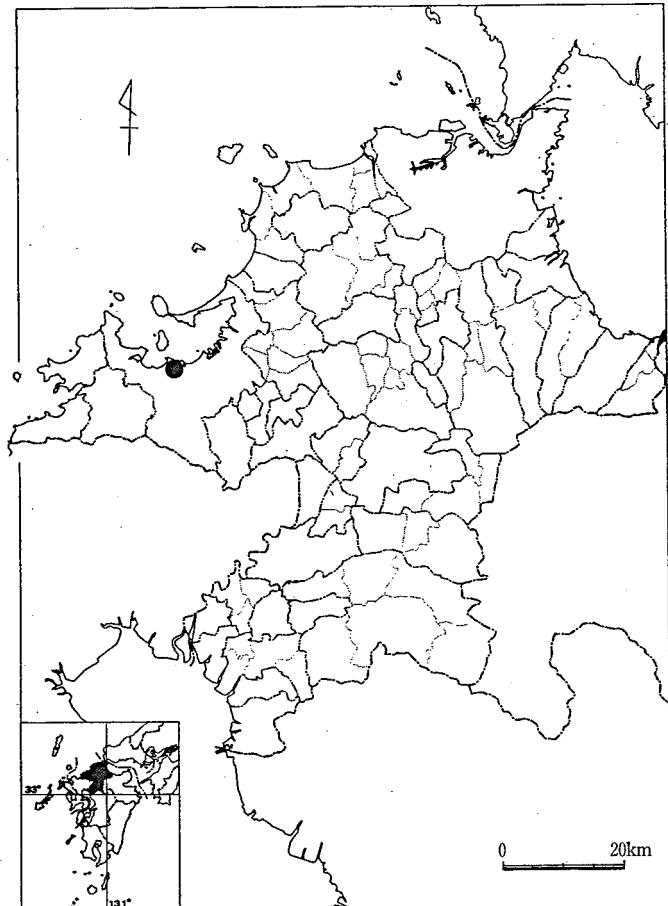
第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

西新町遺跡は福岡市早良区西新に位置する弥生時代～古墳時代の遺跡で博多湾に面した砂丘上に位置している。極座標北緯33度35分、東経130度20分、国土調査法第2座標系X=+64290～64730m、Y=-59100～59870mに位置し、地形図（50000分の1）では図幅名「福岡」に含まれる（第1図）。現在までの知見で遺跡範囲とされるのは国道202号線「脇山口」交差点の西側の南北300m、東西800mの範囲である。その西新町遺跡のほぼ中央部に福岡県立修猷館高校が位置している。

福岡県立修猷館高校は天明4年（1784）に福岡市中央区大名に開設され廃藩置県まで続いた福岡藩藩校修猷館を復興する形で明治18年に「英語専修修猷館」として創設された。その後明治22年に「福岡県立尋常中学修猷館」、明治32年には「福岡県中学修猷館」と改称し、明治33年に現在の位置に移転するとともに翌、明治34年に「福岡県立中学修猷館」と改称した。昭和14年には本館を新築し、昭和23年には「福岡県立高等学校修猷館」と改称し新制高校に移行し、現在に至る長い歴史をもつ学校である。また、昭和14年に建築の教室棟を初めとする伝統ある校舎は在校生、卒業生に愛されるとともに、西新の町の象徴のひとつとして地域住民にも親しまれてきた。しかしながら、その校舎の多くが軽微な改築程度では対処できないまでに老朽化が進行していたために、平成10年度より8ヶ年の計画で全面改築されることとなった。

修猷館高校内では後述するように図書館（「菁莪会館」）建築にともなって、昭和59年度に福岡県教育委員会によって発掘調査がすでに実施されており、今回の改築工事においても埋蔵文化財の取り扱いについて教育庁施設課から照会があった。そこで教育庁施設課と教育庁文化財保護課は平成9年に協議を行い、平成10～11年度の改築工事にともなう発掘調査を平成10年度に実施することとし、あわせて平成12年度以降、継続して行われる改築にかかわる各種工事に対しても随時、埋蔵文化財の取り扱いについて協議することを申し合わせた。平成10年度の発掘調査は第1期改築工事により遺跡が破壊される部分、および今後、調査の実施が難しい中庭などを対象に記録保存の処置を講じることとなった。最終的な平成10年度の発掘調査実施面積は5214㎡を測る。



第1図 西新町遺跡の位置

第2節 調査・整理の関係者

調査は教育庁総務部文化財保護課が教育庁教育企画部施設課から執行委任をうけ、修猷館高校の御協力をいただき平成10年4月22日～12月28日に実施した。解体工事と調査との調整においては福岡県建築都市部営繕課および福岡土木事務所と随時、協議を行った。当初の計画では全期間、文化財保護課の埋蔵文化財担当職員2名を充てて実施する予定であった。しかし担当者の1人が研修等で1ヶ月程、調査を離れることになったため2名体制での維持が難しくなった。そこで、その間は福岡教育事務所生涯学習課文化財担当職員の応援も受けた。さらに、調査終了直前には、予定期間内での終了を確実にするために担当職員を4名とした。

また、当調査に係る報告書は出土遺物が多量のために、平成11、12年度の2ヶ年に作成することになった。

調査・整理の関係者は次の通りである。

西新町遺跡第12次発掘調査関係者

	平成10年度	平成11年度
福岡県教育委員会	教育長 光安 常喜 教育次長 藤吉 純一郎	光安 常喜 藤吉 純一郎
教育企画部	部長 森山 良一	森山 良一
施設課	課長 岩本 誠 課長補佐 中原 一憲 課長技術補佐 中村 邦明 参事補佐(兼)施設係長 岡崎 豊明 主任技師 山本 哲也	安野 義勝 参事兼課長補佐 中原 一兼 中村 邦明 岡崎 豊明 山本 哲也
福岡県立修猷館高等学校	校長 船津 正明 参事(兼)事務長 権藤 邦彦 事務主査 大村 久美	前川 昭治 柏木 茂弘 大村 久美
総務部	部長 富永 勲	岩本 誠
文化財保護課	課長 石松 好雄 参事 柳田 康雄 参事兼課長技術補佐 井上 裕弘 課長補佐(兼)管理係長 角 伸幸 (庶務) 事務主査 鶴我 哲夫 主任主事 田中 利幸 主任主事 佐藤 雅二 (調査) 参事補佐(兼)調査第1係長 橋口 達也 参事補佐 中間 研志 主任技師 吉村 靖徳(調査担当) 重藤 輝行(調査担当) 吉田 東明(整理担当) 技師 森井 啓次(調査担当) 岸本 圭(調査担当) 大庭 孝夫(調査担当)	柳田 康雄 井上 裕弘 橋口 達也 角 伸幸 吉武 祐二 田中 利幸 佐藤 雅二 児玉 真一 中間 研志 重藤 輝行(報告書作成) 森井 啓次(報告書作成) 岸本 圭(報告書作成) 大庭 孝夫(報告書作成)
福岡教育事務所生涯学習課	参事補佐 池辺 元明(調査担当)	

発掘調査と改築工事との調整にあたっては建築都市部営繕課、福岡土木事務所建築課の御配慮をいただいた。作業員の募集、発掘調査作業には福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課の二宮忠司調査第2係長、田中壽夫事前審査係長、杉山富男氏、宮井善朗氏、屋山洋氏、中村啓太郎氏、福岡市博物館の横山浩一館長、常松幹雄氏、山崎龍雄氏を始めとする皆様に様々な御協力と御助言をいただいた。

発掘調査に参加されたのは次の方々である。

阿比留 治 井上 八郎 井上 ヒデ子 甲斐 正耕 川岡 涼子 菊地 昭一
菊地 榮子 柴田 勝子 柴田 春代 島崎 昭二 杉村 文子 橋 良平
土斐崎 初栄 中村 文雄 榎崎 耕助 林 末孝 林 チセ子 原 幸子
平井 和子 平野 義光 峯 不二夫 宮原 邦江 吉川 春美 吉川 順岳
脇坂 レイコ 金子 ヨシ子 坂本 ハツ子 金子 ユリ子 吉岡 員代 坂本 隆二
能美 須賀子 伊藤 美知子 谷 吉美 永井 鈴子 大浦 シゲコ 山崎 裕満
永末 京子 坂口 和子 木戸 和子 石田 照江 近藤 ノリ子 那賀 久子
三苫 ヨシ子 中村 シゲ子 山崎 シズエ 柴田 種美 木藤 幸三郎 木藤 猛美
浅井 伸一 徳重 忠子 堀田 昭 井上 強
坂元 雄紀(早稲田大学学生) 松尾尚哉 岩崎千香 笹栗 葉子(以上福岡大学学生)
能登原 孝道(九州大学学生)
調査補助員 林 潤也 松崎 卓郎 福本 寛 辻田 淳一郎(九州大学大学院生)

調査期間中に下記の方々の来訪があり、調査方法、出土資料について現地で有益な御教示をいただいた。

西谷 正(九州大学) 小田 富士雄 武末 純一(福岡大学) 高倉 洋彰(西南学院大学)
岩永 省三(奈良国立文化財研究所) 北條 芳隆(徳島大学) 広瀬 和雄(奈良女子大学)
田崎 博之(愛媛大学) 下村 智(別府大学) 杉井 健(熊本大学) 渡辺 貞幸(島根大学)
李正鎬(木浦大学校) 尹根一 鄭桂玉(韓国国立文化財研究所) 崔秉鉉(崇実大学校)
塚本 敏夫(元興寺文化財研究所) 岡部 裕俊 角 浩行(前原市教委) 村上 敦(二丈町教委)
舟山 良一(大野城市教委) 神保 公久(久留米市教委) 林 日佐子(大阪府立弥生博物館)
森 弘子(福岡県文化財保護審議会民俗部会)、渋谷 格(佐賀県教委)

また報告書作成にあたって次の方々の御教示を得た。

林永珍(全南大学校) 宮本 一夫(九州大学) 植野 浩三(奈良大学) 高久 健二(埼玉大学)
白井 克也(東京国立博物館)

第3節 調査の経過

発掘調査開始の協議が整い、工事担当との引き継ぎが成立するとともに、文化財保護課の調査体制、準備が整って発掘調査に着手したのは平成10年4月22日のことである。その時点では講堂のみが解体されており発掘が可能であったが、特別教室棟、本館跡は解体されていなかった。そこで、講堂跡を中心とする調査区を1区、特別教室棟を中心とする調査区を2区、本館跡を中心とする調査区を3区と大きく3分割することとし、その順に発掘調査を進めることとした。また、校舎基礎の解体は遺構に損傷を及ぼす恐れがあったため、既存の校舎基礎を残した状態で発掘せざるを得なかった。そのため基礎の形態、及び調査区の形態から各調査区を細分した名称を付して、発掘調査を行った。以下の記述でも遺構の位置を示す場合等にこの地区名を用いたが、出土遺物の整理時に

もこれを使用しているのので、参考にしていただきたい（第21図）。

記録は全体に1/20の縮尺の図面を作成するとともに、遺存の良好な遺構では1/20、1/10大の個別図を作成した。また、古墳時代の主要遺構は個別の遺構写真を撮影することに努めた一方で、近世・近代の遺構は時間的都合もあり、遺構の残存度、出土遺物等から見た重要性に応じて個別写真の撮影はかなり選択せざるを得なかった。さらに建物基礎のために写真撮影台をたてることができず、基礎の上からの写真撮影で済まざるを得なかった場所も多く、満足できる調査記録を残すことができなかつた遺構も生じた。

調査経過は次のとおりである。

平成10年

- 4月14日 施設課、高校と現地協議
- 4月22日 1区の重機による表土除去開始（4月30日まで）
- 5月6日 作業員を投入、1区近世遺構発掘開始
- 6月10日 1区古墳時代遺構の発掘調査開始（7月15日まで）
- 7月21日 1東拡張区の重機による表土除去とともに発掘調査開始（8月19日まで）
- 7月31日 1北拡張区の重機による表土除去開始、あわせて1区41号土坑の発掘開始
- 8月10日 41号土坑発掘終了、重機による2区の表土除去開始（8月25日まで）
- 8月11日 1北拡張区近世遺構の調査開始（8月21日まで）
- 8月25日 1北拡張区古墳時代遺構の調査開始（10月7日まで）
- 9月1日 2区発掘調査開始（10月7日まで）
- 10月8日 3区の重機による表土除去と近世遺構発掘調査開始（11月10日まで）
- 10月22日 福岡教育事務所生涯学習課による視察と発掘調査体験参加
- 10月25日 福岡市博物館にて開催された「庄内式土器研究会」に出土遺物を展示
- 11月16日 3区古墳時代遺構の発掘調査開始（調査終了まで日平均5箱土器出土）
- 12月21日 文化財保護課定例会議の日にあたるが調査終了間際のため現地作業行う
- 12月28日 御用納め日によりようやく調査終了、出土遺物を伴出

平成11年

- 1月5日 調査区壁の一部を基本土層として実測するための補足調査を行う
- 1月6日 機材伴出



第2図 調査風景

なお、高校内での発掘調査であり、高校生を中心に地域の歴史や発掘調査に関心をもってもらうための普及活動にも配慮した。具体的な活動としては調査期間中、高校生および修猷館高校教職員を対象として調査経過を記した『西新町遺跡たより』(第3図)を11回、発行して配布するとともに、文化祭、運動会等の学校行事に合わせるなどして6回の現地説明会を開催した。



第3図 『西新町遺跡たより』

それぞれ好意的な反応を得たが、参加者、読者との対話に欠く一方向的な活動であった点、授業との連携が考慮されていなかった点、調査の進行が遅れると普及活動も一時休止せざるをえなかった点などの課題は残された。

さて、調査の結果としては後述するように当初、予想していた古墳時代の遺構以外にも近世、近代の遺構を発掘し、古墳時代の竪穴住居跡は158棟と高い密度で確認され、出土遺物も整理箱536箱に達した。また、古墳時代前期のカマド付住居や玉製作関係資料、朝鮮半島製土器などの貴重な資料が多数、得られた。校舎基礎や最近の攪乱のために、十分な調査ができなかった部分が多いが予想以上の成果を得たと言えるだろう。調査の円滑な実施に御協力いただいた生徒、教職員を始めとする高校関係者に感謝申し上げるとともに、調査中に様々な御迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げたい。

また、調査は解体工事と平行して行ったり、軟弱な砂地の上や狭い校舎基礎の上を人力によりベルトコンベアーや基礎コンクリート塊を移動する非常に危険な作業を伴った。また、遺構保存のために残した校舎基礎がさらに発掘作業を難しくした。しかしながら、大きな事故もなく無事調査を終了することができたことは幸いであった。これはひとえに調査に作業員として、参加していただいた皆様のおかげである。この場を借りて感謝申し上げたい。

第2章 位置と環境

第1節 遺跡の地理的環境

西新町遺跡は早良平野の東北端、博多湾に面した古砂丘上に立地する。早良平野は東を飯倉丘陵、南を背振山系、西は背振山地から南に派生した飯盛山などの山地に三方囲まれており、北は博多湾に面する。早良平野は南北約8km、東西約4.5kmで南北に主軸を持つ。平野中央は室見川、西は十郎川、東は樋井川が支流を集めて貫流し、沖積平野を形成する。遺跡の東約500mに樋井川、西約170mに室見川があり、百道地区が埋め立てられる以前は北約400mほどで海岸汀線に至る状況であった。遺跡北側には国指定史跡元寇防塁跡が存在し、中世には海岸汀線が近かったことがわかる。ここでは『福岡平野の古環境と遺跡立地』〔小林他編1989〕を参考にして遺跡の立地する砂丘の形成についてまとめてみたい。

西新付近には博多湾に平行する方向に3列の砂丘が存在し、西新町遺跡の範囲は中央の砂丘上とその北側との砂丘間低地に及んでいる。この砂丘列は博多湾南岸に沿って、東区箱崎から堅粕、天神、百道まで細長い分布を示す箱崎砂層に属する。この層は石英質、マサ質が主体となる粗砂層で構成され、しばしば砂礫をまじえる。

この3列の砂丘の最も南側の砂丘は約6000～3000年前の最大縄文海進期に形成されたものと考えられる。中央の砂丘は中央区今川の鳥飼神社付近で幅約170m、標高約8mと最も発達し、早良区西新から藤崎まで連続して、長さ約2.5kmに達する。西新付近では標高約5～6mに達する。中央砂丘は約3000～2000年前の時期にむかえた小海退期に、沿岸州の離水による海岸砂州の形成と浜堤の発達により形成されたものと考えられる。この砂丘が陸化した時期は藤崎遺跡では弥生時代前期初頭の甕棺が出土し、西新では砂丘上に弥生時代中期の集落が形成されていることから、下限がおさえられる。北側の砂丘は西公園から百道にかけての元寇防塁線に沿って形成される。

今回の調査区が位置する北側と中央の砂丘間は海浜砂のみから構成されており、風成砂はほとんど分布していない。この砂丘間低地は、藤崎では弥生時代中期、西新では古墳時代前期に陸化している。西新町遺跡は今回や既往の発掘調査結果から、古墳時代前期には標高4.5m前後の国道202号線から今回の調査区北端の標高3.5m前後までの北から南に傾斜する、新たに形成された砂丘上に遺跡が形成されたことがわかる。

現在の西新町は国道202号線に沿って地下鉄が通り、東西に西新商店街が広がる福岡市西部の副都心的様相を呈す。調査地点北側には西南学院大学・高校があり、埋め立て地の百道地区には福岡市博物館、図書館などの文教施設が集まる。また近年は福岡ドームや福岡タワーなどのレジャー施設や近代的なオフィスビルやマンションなどが多く立ち並ぶ。

第2節 周辺の歴史的環境

西新町遺跡の立地する早良平野は福岡市の中では比較的、水田、畑地などの田園風景が残された地域である。しかし、近年は福岡市の人口増に伴い宅地、商業地が増加し、それに関係して福岡市教育委員会等により、多くの発掘調査が実施されている。ここでは、古墳時代までの早良平野の遺跡を中心とした歴史的環境について、福岡市教育委員会による発掘調査成果を中心に述べてみたい。なお（）内番号は第4図に一致し、[]内は福岡市教育委員会埋蔵文化財調査報告書番号である。



1. 西新町遺跡 2. 野芥遺跡 3. 有田遺跡 4. 次郎丸高石遺跡 5. 四箇遺跡群 6. 田村遺跡
7. 入部遺跡群 8. 免遺跡 9. 松木田遺跡 10. 有田七田前遺跡 11. 藤崎遺跡 12. 四箇船石
13. 拾六町平田遺跡 14. 橋本一丁田遺跡 15. 石丸・古川遺跡 16. 拾六町ツイジ遺跡 17. 吉武遺跡群
18. 姪浜遺跡 19. 都地遺跡 20. 飯倉遺跡群 21. 長峰遺跡 22. 野方中原遺跡 23. 野方久保遺跡
24. 野方塚原遺跡 25. 拝塚古墳 26. 樋渡古墳 27. 梅林古墳 28. 五島山古墳 29. 宮ノ前遺跡
30. クエゾノ遺跡 31. 鳥越古墳群 32. 七隈古墳群 33. 倉瀬戸古墳群 34. 大谷古墳群 35. 山崎古墳群
36. 重留古墳群 37. 三郎丸古墳群 38. 金武古墳群 39. 羽根戸古墳群 40. 広石古墳群 41. 笠間古墳群
42. 野方古墳群 43. 草場古墳群 44. 広石遺跡

第4図 周辺遺跡分布図 (1/50000)

旧石器時代の遺跡としてはっきり調査されたものは少ない。金屑川右岸、油山北麓に位置する野芥遺跡7次調査(2)は旧石器時代の遺構が調査された例として貴重である[第576集]。この調査ではナイフ形石器文化期の不定形土坑2基が検出されている。また、早良平野のほぼ中央に位置する有田遺跡(3)は良好な洪積世独立丘陵となっており、10数ヶ所の調査区でナイフ形石器、尖頭器、細石刃石核などが出土している。このほか羽根戸原遺跡では旧石器が表採され、吉武遺跡群4次調査でも旧石器の包含層が調査されている。なお、次郎丸高石遺跡第2次調査(4)[第467集]では旧石器時代の層位に伴わないものであるが、完形の局部磨製石斧が出土している。

早良平野中央部の四箇遺跡群(5)は縄文時代前期～晩期の遺物がまとまって出土した早良平野の代表的な縄文時代遺跡である[第42・47・51・63・100・172・196・199・261・428・482集]。遺跡は標高22m前後の室見川中流域右岸の沖積微高地上に位置している。四箇遺跡B地点と第18次調査では曾畑式土器、轟式土器などが出土し、18次調査では当該期の不整形竪穴、ピットも検出されている。四箇遺跡A地点の調査では三日月状の地形に形成された縄文時代後期の泥炭層が認められ、獣骨、木製品、植物遺存体などの多様な遺物が出土した。四箇遺跡の北に隣接する田村遺跡(6)では包含層等から縄文時代早期～晩期の遺物が認められる[第104・167・200・216集]。四箇遺跡の南に隣接する入部遺跡群(7、重留・岩本・東入部遺跡)でも縄文時代中期～晩期の埋甕などの遺構、包含層が散在的ではあるが検出されており[第235・343・381・383・424・485・577・613集]、特に重留遺跡第1次調査では晩期前半の竪穴住居跡5棟、貯蔵穴1基、埋甕1基、土坑1基が検出され[第235集]、東入部遺跡第1次調査では鐘崎式期の竪穴住居跡が1棟検出されている。田村遺跡・重留・岩本・東入部遺跡は四箇遺跡に隣接するのみならず、遺跡の立地もやはり沖積微高地と共通する。これらは非常に密接に関連して展開した遺跡群と考えられ、縄文時代を通じて遺跡立地の展開をたどれ、さらには弥生時代へのつながりを知ることのできる良好な遺跡群を形成している。

田村遺跡の東北、室見川東岸の標高10m程の沖積平野中の低位段丘上に位置する免遺跡2次調査地(8)ではアカホヤ火山灰が検出され、その上下から縄文時代の遺物が出土している[第536集]。有田遺跡でも各調査区で縄文時代の遺物が出土しているが、特に注目されるのは5・116・170次調査で検出された縄文時代中期の92基の貯蔵穴群である[第113・308・473集]。これらの貯蔵穴群は長径60m、短径40mの環状配置が推測されており、貯蔵穴自体の用途も合わせて当該期の北部九州の集落構造、生業を論じるうえで非常に注目される資料である。また、早良平野の南部油山山塊と飯盛一長垂山山塊が最も迫った狭隘地に位置する松木田遺跡(9)は石組炉、集石遺構が検出され、多数の遺物が出土した縄文時代早期の撚糸文土器単純の遺跡である[第578集]。このほか平野最奥部の脇山地区のほ場整備事業等に関する調査で縄文時代各時期の遺物が出土し、飯盛山東麓の羽根戸遺跡、北麓の広石遺跡でも出土ないしは表採の縄文時代早期、前期、晩期の遺物がある。

早良平野は弥生時代早期、前期の農耕社会成立の鍵となる遺跡が多い。有田遺跡では刻目突帯文土器～板付I式段階の環濠、板付I式土器段階の環濠、板付II a式の環濠が検出されている。特に最古の環濠は南の台地中央に位置し[第96・139・234・427・471集]、長径300～短径200mの規模が推測されている。有田台地西側の沖積地に位置する有田七田前遺跡(10)では溝が検出され、石器・土器などが多数出土し、突帯文単純期の標式遺跡となっている[第95集]。また、重留遺跡でも刻目突帯文土器の環濠集落の存在が指摘され[高倉1991]、近接する岩本遺跡[第343集]でも板

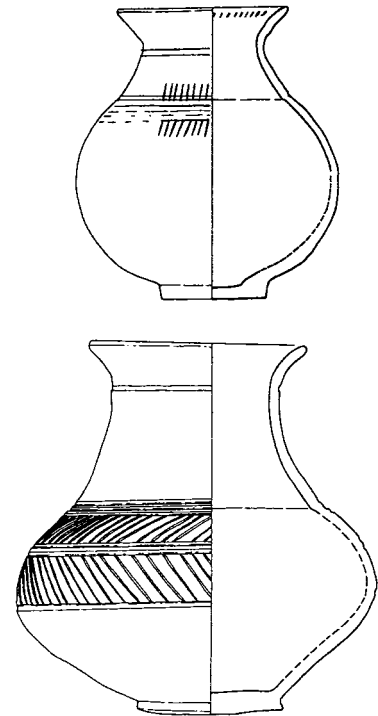
付Ⅰ～Ⅱ式の竪穴住居跡が検出されている。

当該期の墓地としては東入部遺跡第2次調査の突帯文期にほぼ限定される甕棺墓16基、土壙墓2基からなる墓地群〔第613集〕、田村遺跡の弥生時代前期の18基からなる甕棺墓群が良好な事例であり〔第200集〕、他に入部遺跡群ではほ場整備に伴う第3次調査で板付Ⅰ式前後の甕棺墓8基からなる墓群が検出されている〔第268集〕。西新町遺跡の西に隣接する藤崎遺跡(11)では第13次調査で前期末～中期の甕棺墓中より弥生時代前期初頭まで遡ると考えられる甕棺が出土している〔第232集〕。また弥生時代早期～前期初頭の彩文壺などが早くから採集されていることからこれらを副葬した土壙墓、石棺墓の存在が想定されている〔第137集〕。平野のほぼ中央に位置する四箇船石(12)は早良平野唯一の支石墓で、現在のところ玄界灘沿岸における支石墓の東限を画する例である。

室見川左岸、十郎川右岸では沖積地中に立地する拾六町平田遺跡(13)で刻目突帯文期の流路と板付Ⅰ式まで遡る可能性の高い方形区画の小規模水田が検出されている〔第305・349集〕。そのすぐ南に隣接する橋本一丁田遺跡(14)では早期～前期の河川とそれに伴う土器溜まり、杭列などが検出され、当該期の遺物が多量に出土した〔第582集〕。また拾六町平田遺跡の西に隣接する石丸・古川遺跡(15)でも多数の突帯文期の遺物が出土している〔吉岡完祐編1982〕。十郎川の左岸に位置する拾六町ツイジ遺跡(16)では土坑から良好な状態で突帯文期の木器が出土している〔第92集〕。

弥生時代前期末～中期は有田遺跡、重留・岩本・東入部遺跡等入部遺跡群で遺構数が増加するとともに、飯盛山東麓台地上に新たに集落、墓地からなる大遺跡である吉武遺跡群(17)〔第437・514集他〕の形成が始まり、さらに西新町遺跡〔第484・505集〕、姪浜遺跡(18)〔第387集〕のような砂丘上、松木田遺跡〔第578集〕のような平野最奥部にまで集落が展開している。早良平野におけるほぼ居住可能な遺跡全体に集落が営まれるような状況である。中でも吉武遺跡群では当該期の大形掘立柱建物群が発見され、当時の早良平野の中でも拠点的な集落として位置づけられるであろう。また、有田遺跡、西新町遺跡〔第79集〕、藤崎遺跡〔第62・137・138・232集〕、吉武遺跡群〔第187・461・580集〕とその南に隣接する都地遺跡(19)〔第186集〕、入部遺跡群、飯倉遺跡群(20)の飯倉唐木遺跡〔第379集〕、早良平野の最奥部に位置し松木田遺跡に近接する長峰遺跡(21)〔第462集〕などで大規模な甕棺墓群が形成されている(早良平野の甕棺墓地については詳しくは福岡市第462集を参照)。

当該期の青銅器、鉄器等を副葬した墓地として著名なものが、吉武遺跡群高木地区墓地群、大石地区墓地群、樋渡地区墳丘墓である〔第461集〕。吉武遺跡群高木地区では前期末～中期初頭の甕棺墓34基と木棺墓4基が検出され、7基の甕棺墓、全ての木棺墓で副葬品が出土した。このうち中期初頭に位置づけられる3号木棺では細形銅剣2点、細形銅矛1点、細形銅戈1点、多鈕細文鏡1点、翡翠製勾玉1点、碧玉製管玉95点が出土した。同時期の北部九州の中で最も豊富な副葬品のセット



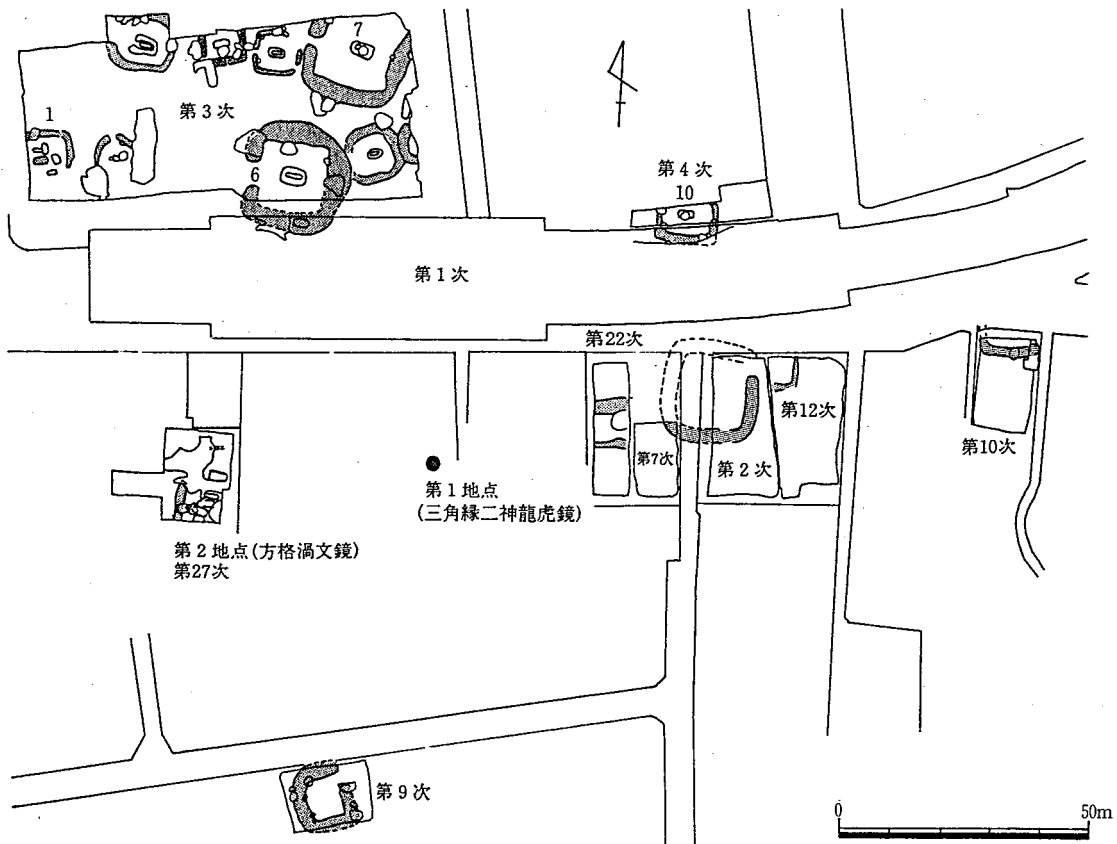
第5図 藤崎遺跡出土弥生時代早期小壺(1/4、福岡市第137集より)

である。また、大石地区では前期末～中期後葉の甕棺墓203基、木棺墓8基、土壙墓13基が検出され、各種青銅器などの副葬品が出土している。樋渡地区墳丘墓は後に古墳時代中期の樋渡古墳として墳丘が利用されるような25×27mの長方形の大形墳丘をなす。墳丘内からは甕棺墓30基以上、石棺墓1基、木棺墓2基が検出され、細形銅剣、鉄剣、素環頭大刀、重圈文星雲鏡が出土している。甕棺墓は中期中葉～末のもので、高木地区、大石地区よりは墓地の始まりが遅い。吉武遺跡群の北に位置する野方久保遺跡でも甕棺墓より細形銅剣、玉類が出土している。

東入部遺跡第2次調査8区では前期後半～後期初頭の甕棺墓130基、土壙・木棺墓30基が調査されているが、中期中頃の16×14m、10×11mの墳丘墓2基の存在が注目される。副葬品も豊富で、銅剣、銅釧、素環頭刀子、鉄矛、鉄剣、鉄刀などが出土した。このほか有田遺跡では西福岡高校校庭内で細形銅戈を副葬した甕棺が出土し〔有田遺跡調査団1968〕、177次調査では中期末のST001号甕棺に前漢鏡である異体字銘帯鏡が、後期初頭のST002号甕棺に重圈文日光鏡系倣製鏡が副葬されていた〔第513集〕。飯倉唐木遺跡では前期末の甕棺から細形銅剣が、中期後葉の甕棺から素環頭大刀が出土している。また同遺跡からは1963年の宅地造成時にも細形銅剣を副葬した甕棺が出土している〔第379集〕。

このほかに朝鮮半島、中国大陆とのつながりを推測させる遺物としては姪浜遺跡出土の無文土器、漢式系三翼鏃がある〔第387集〕。また西新町遺跡第8次調査出土の弥生時代中期のガラス製容器も日本では出土例の少ない舶載品と思われる〔第484集〕。

後期になると吉武遺跡群は住居跡、掘立柱建物、溝などが確認され、集落は継続していると思わ



第6図 藤崎遺跡方形周溝墓分布図 (1/1500、福岡市第573集より)

れるが、中期以前の遺構数と比べると縮小している感がある。また入部遺跡群でも後期終末に至るまで遺構が希薄である。有田遺跡では後期の井戸などが検出されているが、やはり後期終末までは遺構数が少ない。

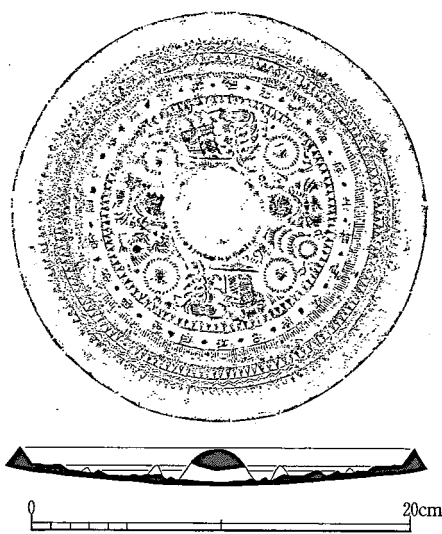
これに対して叶岳東麓の吉武遺跡群の北に位置する台地では弥生時代後期～古墳時代にかけての大集落である野方中原遺跡(22)がある。野方中原遺跡では弥生時代後期の楕円形(長軸110m以上、短軸90m)と方形(25×30m)の環濠が掘削されており、楕円形環濠内部では多数の竪穴住居が、方形環濠内部では3棟の掘立柱建物が検出された。同遺跡内では箱式石棺10基、甕棺3基などの墳墓も検出され、獣帯鏡片、内行花文鏡片、玉類が出土している[第30集]。また隣接する野方久保遺跡(23)1・4次調査においても弥生時代後期後半～古墳時代前期の竪穴住居跡が検出されている[第348・438集]。野方塚原遺跡(24)は後期後半～終末の石棺墓・甕棺墓群であり、弥生時代終末の1号甕棺墓からは後漢の獣帯鏡片が出土した[第490集]。

また、飯倉丘陵に位置する飯倉遺跡群飯倉D遺跡では後期中頃～終末の竪穴住居28棟等からなる集落で、弥生時代小形倣製鏡の鋳型が2点出土したことが特筆される[第440集]。隣接する飯倉F遺跡でも弥生時代後期の住居跡が多数検出されている[第379集]

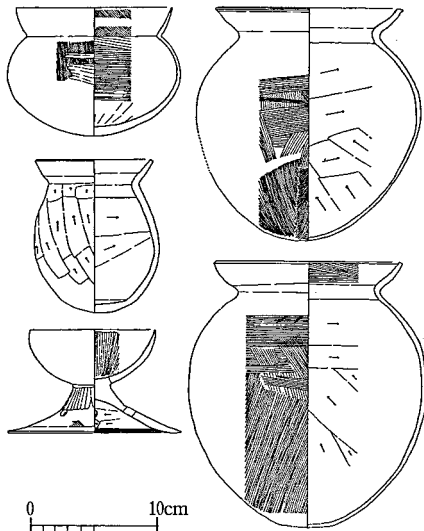
古墳時代になると早良平野では隣接する福岡平野、糸島半島と比較すると首長墓級古墳の数は少ないとされる。前方後円墳として全長75mで中期初頭～前葉に比定できる重留遺跡中の拝塚古墳(25)[第235集]、全長40mの帆立貝形を呈し、中期中葉に比定できる吉武遺跡群樋渡古墳(26)[第143集]、中期後葉の初期横穴式石室を内部主体とする全長27mの梅林古墳(27)[第240集]があるが、前期、後期の明確な前方後円墳はほとんど知られていない。

古墳時代前期には西新町に隣接する藤崎遺跡において16基の古墳時代初頭の方形周溝墓が検出されており、西新町遺跡との関連で重要である。方形周溝墓は大形(21～22m)、中形(12～16m)、小形(10m以下)に分かれるが、大形に属する第3次調査6号方形周溝墓では主体部となる割竹形木棺から三角縁二神二車馬鏡と素環頭大刀などが出土し、早良平野を代表する前期古墳となっている[第80集]。その他、3次調査7号方形周溝墓周溝から珠文鏡が、10号方形周溝墓主体部から変形文鏡が出土している。出土遺構の詳細は不明であるが、第1地点より明治45年に倣製三角縁二神龍虎鏡が出土し、第2地点で昭和5年に方格渦文鏡が出土している。この藤崎遺跡方形周溝墓は西新町遺跡と同一砂丘上に位置するだけでなく、出土土器も同時期であるので、集落域である西新町遺跡に対応する墓域となると考えて間違いない。

室見川の左岸、姪浜遺跡の南の独立丘陵上には箱式石棺を主体部とし、二神二獣鏡2面、鉄剣、銅鏃などを出土した五島山古墳(28)があり、これも副葬品の内容から考えて古墳時代初頭前後に位置づけられる[有田遺跡調査団1968]。また、十郎川の左岸、叶岳の北東麓台地に位置する宮ノ前遺跡(29)のC地点1号墳は長軸14m、短軸12mの不整楕円形の墳丘を呈し、墳頂に大形の箱式石棺、墳裾に3基の箱式石棺



第7図 藤崎遺跡6号方形周溝墓出土三角縁二神二車馬鏡(1/4、福岡市第80集より)



第8図 藤崎遺跡1・2号方形周溝墓
出土土器(1/6、福岡市第80
集より)

を配している。供献状態で出土した土器はいわゆる弥生時代終末の西新式で早良平野のみならず北部九州における古墳出現過程において重要な意義をもつものとして注目されている〔下篠・沢編1971〕。

集落遺跡としては本書で報告する西新町遺跡の他に、有田遺跡、入部遺跡、野方久保遺跡で上述した弥生時代の集落に引き続いて、古墳時代前期の竪穴住居跡が多数営まれている。次節であらためて述べるように、西新町遺跡はこれら集落のなかであって朝鮮半島製の土器が多量に出土しており、渡来人の存在も十分想定される集落である。この時期にあつては北部九州と朝鮮半島、中国大陸との交通の門戸として機能していたのであろう。

古墳時代中期になると西新町遺跡、野方久保遺跡では竪穴住居跡が消滅している。入部遺跡群では集落が継続している

が、古墳時代前期とは集落域が異なっている。一方、有田遺跡ではこの時期にも集落が継続し、各調査地点より陶質土器、軟質土器、初期須恵器が比較的、多く出土している。また吉武遺跡では甕棺墓群の北、300m程のところの位置する県道関係の調査地点において、多数の当該期の掘立柱建物が検出され、土坑、溝などから陶質土器、初期須恵器がまとも出土している〔第127・194集〕。これら2遺跡は引き続いて拠点的性格を維持していると思われる。

古墳時代中期の古墳としては有田遺跡第178次調査で中小の円墳からなる古墳群が検出されている〔第512集〕。またクエゾノ遺跡(30)は梅林古墳の南、油山北麓に位置し、5基の古墳が調査されている。このうち1号墳は古墳時代前期で22m程の前方後円墳となる可能性がある。残りの4基は古墳時代中期後半で、4号墳は朝鮮半島南部の「竪穴式石槨」に類似する狭長な石室を主体部としていることが特筆される〔第420集〕。

古墳時代後期になると油山北麓から西麓と飯盛山から叶岳にかけての東麓に群集墳が集中的に築造され、県下でも有数の群集墳集中地区を形成している。油山北麓から西麓の群集墳には鳥越古墳群(31)〔第124集〕、七隈古墳群(32)〔第124集〕、倉瀬戸古墳群(33)〔倉瀬戸古墳群調査団1972〕、大谷古墳群(34)〔第19・122集〕、山崎古墳群(35)〔第380集〕、重留古墳群(36)〔財団法人古代学協会1984〕〔第178集〕、三郎丸古墳群(37)〔第380集〕などがある。一方、飯盛山から叶岳にかけての東麓の古墳群には金武古墳群(38)〔第15集〕、羽根戸古墳群(39)〔第180・198・345～347集〕、羽根戸南古墳群、広石古墳群(40)〔第195・226集〕、広石南古墳群〔第214集〕、笠間谷古墳群(41)〔第226集〕、野方古墳群(42)〔第226集〕、草葉古墳群(43)〔第301集〕などがある。このうち金武古墳群、羽根戸古墳群はそれぞれ150基を越える大群集墳をなしている。山崎古墳群では2次調査において3基の後期古墳とともに4基の7世紀後半の土壙墓が検出されており、この地域における群集墳の終焉を考える上で興味深い資料となっている。

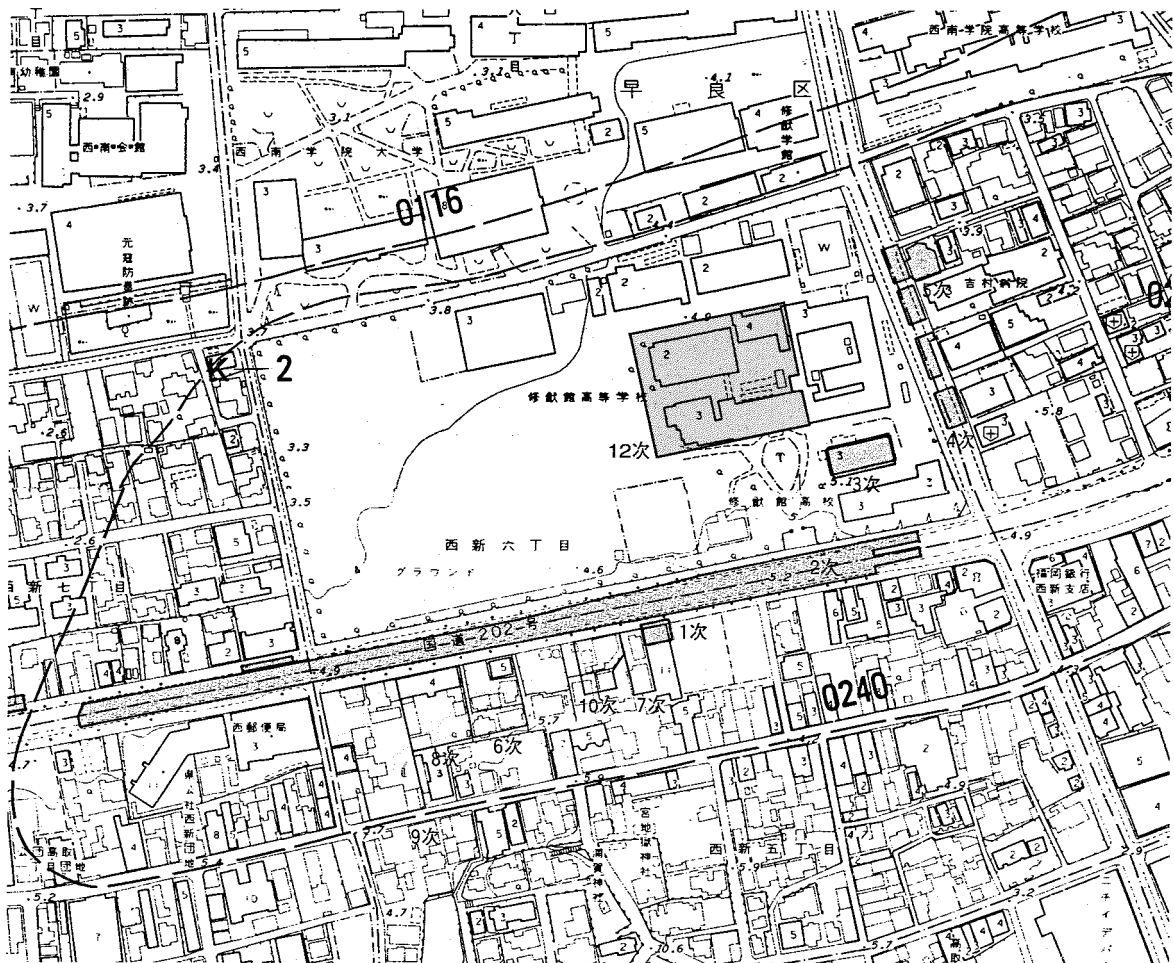
また、古墳時代後期の製鉄遺跡、関連遺物が多いのも早良平野の特徴である。クエゾノ遺跡では6世紀末を上限とする箱形炉が検出され、多量の鉄滓が出土している。同遺跡内のクエゾノ5号墳では鉄鎚、鉄鉗などの鍛冶道具が出土し、隣接する梅林古墳でも鑿が出土している。また、広石遺

跡(44) C地点では6～7世紀の竪穴住居跡38棟とあわせて、同時期の掘立柱建物21棟、焼土坑30基が検出され、多量の鉄滓が出土した。このような掘立柱建物の比率の高さも考慮するならば、製鉄に関連した特殊な集落と評価すべきであろう[第226集]。一方、大谷古墳群では横穴式石室内に鉄滓を副葬する古墳が多く、製鉄集団の奥津城的性格が想像される。

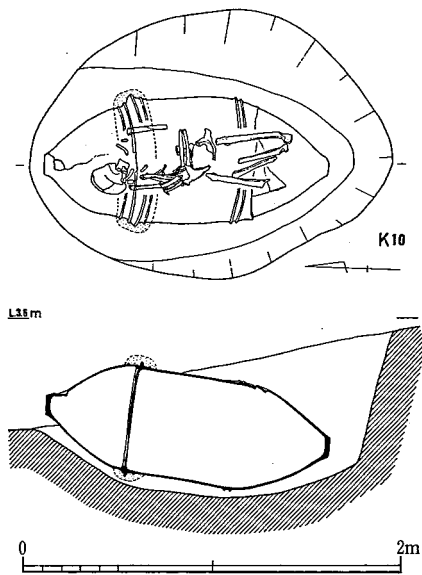
このように見ると早良平野は前方後円墳の数は少ないが、弥生時代～古墳時代にかけて北部九州の古代史を語るうえで欠くべからざる重要な遺跡が多数、存在しているといえる。また弥生時代の始まり、弥生時代中期～後期の青銅器の副葬、生産、弥生時代後期～古墳時代中期にかけての朝鮮半島製土器の出土、鉄生産の開始などに示されるように朝鮮半島の技術、文化をいち早く取り入れていたことにこの地域の歴史的特質が認められる。このような中であって古墳時代前期の大集落であり朝鮮半島製土器が多数出土する西新町遺跡は、早良平野ひいては北部九州の古代史において極めて重要な位置を占めるものと考えられるであろう。

第3節 既往の調査概要

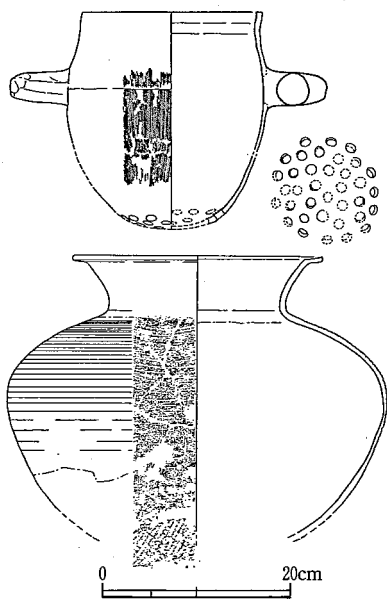
西新町遺跡の範囲に関しては前節まで述べたように、現在の県立修猷館高校を中心とした地域であると考えられている。古くは弥生時代終末の土器型式として知られる「西新町式土器」として著名であり、調査が進むにつれ、半島系の陶質土器や軟質土器を包含し、最古期のカマドを有する竪穴住居跡群からなる集落遺跡として知られることとなる。



第9図 発掘調査区の位置と周辺調査地 (1/4000)



第10図 2次10号甕棺 (1/40、福岡市第79集より)



第11図 3次2号住居跡出土半島系土器 (1/8、福岡県第72集より)

西新町遺跡の遺跡としての継続時期は大きく5時期が確認されている。弥生時代中期～後期・弥生時代終末～古墳時代前期・中世・近世・近現代である。

遺跡の南側には弥生時代中期後半～末の集落、国道下～修猷館高校南半には弥生時代中期～後期にかけての甕棺墓群が広がり、甕棺墓群と一部重なり国道から北側には弥生時代終末～古墳時代の集落域がある。古墳時代集落に伴う墳墓はこれまでのところ認められず、遺跡の西側にあたる藤崎遺跡が墳墓域にあたると考えられている。中世の遺構は修猷館高校内で土坑があり、近世遺物は江戸時代後期の高取焼を中心としてほぼ全域にわたり認められている。本章では西新町遺跡に関して既往の調査の中でも弥生時代及び古墳時代の調査成果を中心に記述する。なお、西新町遺跡の発掘調査実施以前の研究史に関しては『西新町遺跡4』[福岡市第483集]に簡潔に記されておりここでは譲り、発掘調査に関して調査次数順に記述する。遺構番号は報告書の記述通りである。

1次調査 国道南側の民間開発に伴う発掘調査が実施され、弥生時代中期の甕棺墓数基が検出されている。

2次調査 [福岡市第79集] 修猷館高校南側、国道202号線下において昭和51～53年にかけて福岡市教育委員会によって実施された高速鉄道(福岡市営地下鉄)建設に先立つ発掘調査である。東西方向に総延長450m、幅約10～15mに及ぶ遺跡を横断するトレンチ状の調査である。

この調査では甕棺墓30基とそれに伴う祭祀遺構、竪穴住居跡57棟が検出された。また、本調査で西新集落の東端がほぼ修猷館高校の東辺であることが指摘されている。

甕棺墓は弥生時代中～後期を中心とするもので10号甕棺よりゴホウラ貝輪、19号甕棺より銅剣切先が出土。竪穴住居跡は弥生時代終末～古墳時代前期に限られる。竪穴住居跡には炉を有する住居とカマド付住居が認められるが、カマド付住居は最も東の調査区で検出されており、この調査では西側住居群は屋内炉、東側住居群にはカマドといった差が認められ

る。カマド付住居は2次調査では2棟検出された。いずれも隅カマドであるが、明確な構造に関しては残存状況が悪かったのか報告されていない。

他に特筆される遺物としては銅剣鑄型片が出土しているほか、E2号竪穴住居から陶質土器、D1・17・F2号住居から半島系の土師質土器が出土している。

3次調査 [福岡県文化財調査報告書第72集] 昭和59年に福岡県教育委員会を調査主体として実施された修猷館高校図書館改築に先立つ発掘調査で、古墳時代前期の竪穴住居跡7棟が検出された。

1号住居跡から陶質土器壺、2号住居跡から軟質土器の壺・甕、3号住居跡から軟質土器の壺、4号住居跡から軟質土器片、5号住居跡から瓦質の壺、軟質の甕、6号住居跡から軟質土器片が出土している。3次調査ではカマドは確認されていないが、遺跡の東側に半島系遺物もしくは遺構が集中する状況が確認された。第12次調査においても調査区の東にカマド付住居が集中する状況がみられる。

なお、この報告では修猷館高校体育館建設時、高校教諭により採集された土師器が紹介されており、現時点における古墳時代遺跡の存在を示す北限の資料となっている。

4次調査〔福岡市第203集〕 昭和62年に道路拡幅に先立つ発掘調査が実施された。南北方向に総延長約100m、幅7～8mの調査区内に古墳時代前期竪穴住居跡8棟と土坑21基が検出された。竪穴住居には炉を有する住居とカマド付住居とが混在する状況が認められる。

遺物としては竪穴住居跡SC39からはほぼ完形の陶質土器、SC40から鉄刀子、大溝SD44から玉砥石・鉄ノミ、土坑SK24から陶質土器片、SK29から鉄刀子が出土した。

この調査の中で炉跡と報告されているものは第12次調査で検出したような竪穴住居に伴う隅カマドの可能性がある。

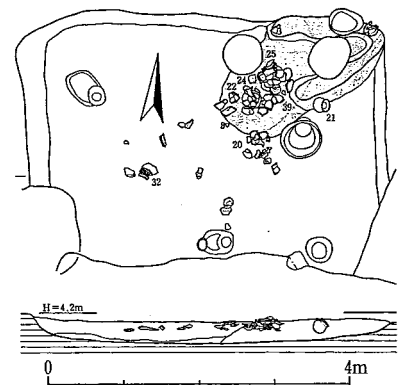
5次調査〔福岡市第375集〕 平成4年、民間開発に伴う発掘調査。4次調査隣接地で、ほぼ遺跡の北東端にあたる。竪穴住居跡9棟、土坑などを検出し、竪穴住居8棟にはカマドも付設されていた(第12図)。2次調査の成果からも遺跡東側の集落にカマド付住居が認められる傾向があり、本調査もそれを裏付ける結果となった。SC02からはほぼ完形の板状鉄斧も出土している。SC06からはほぼ完形の陶質土器とその破片、袋状鉄斧が出土している。

6次から10次調査まではいずれも国道南側と旧道に挟まれた地域で実施されている。

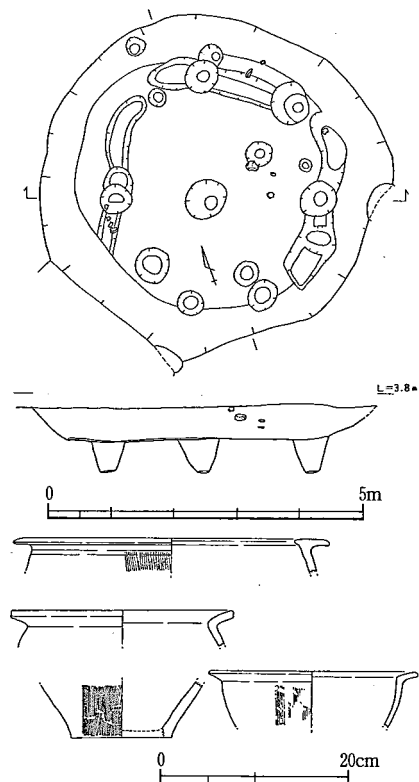
6次調査〔福岡市第483集〕 平成6年民間開発に伴い発掘調査が実施された。弥生時代終末の竪穴住居跡9棟と土坑1基が検出されている。

7次調査〔福岡市第483集〕 6次調査に引き続き平成6年民間開発に伴う発掘調査が実施された。5基の甕棺墓と2棟の竪穴住居跡・4基の土坑を検出。他に不明焼土遺構1基が検出されているが、削平された住居跡に伴うカマドであろうか。SC01覆土からは碧玉製の管玉、SK05からは鍛造の袋状鉄斧が出土している。

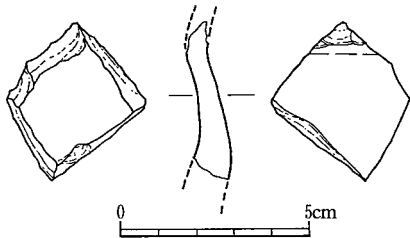
8次調査〔福岡市第484集〕 平成6年、民間開発に伴う発掘調査で6次調査地点と9次調査地



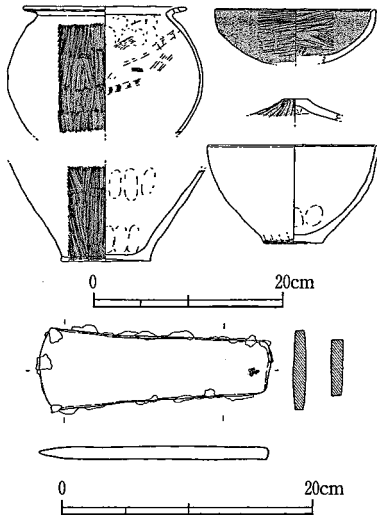
第12図 5次SC04 (1/100、福岡市第375集より)



第13図 8次SC45と出土土器 (1/120、1/8、福岡市第484集より)



第14図 8次SX40出土ガラス片
(1/2、福岡市第484集より)



第15図 9次SC85出土土器・鉄器
(1/8、1/6、福岡市第505集より)

点に挟まれた位置にある。竪穴住居跡4棟と土坑38基などが検出されている。この調査での特筆すべき遺構は西新町遺跡範囲内では初めて検出された弥生時代中期後半の円形住居跡SC45である。この後9次調査で同時期の住居跡が12棟検出され、国道202号バイパス以南に弥生時代中期後半～末にかけての集落が存在していることが判明した。遺物では弥生時代中期の土器溜まり(SX40)から含鉄精錬鍛冶滓3点と鉄器片3点、ガラス片の出土が注目される。他に半島系無文土器片なども見られる。

9次調査〔福岡市第505集〕平成7年に実施された民間開発に伴う発掘調査。弥生時代中期後半～末の集落が検出され、竪穴住居跡12棟、土坑23基、不整形土坑3基、土器溜まり2カ所が確認された。大型住居があり、弥生集落の中心が本調査地点周辺にあたると思われる。特筆すべき遺物としてはSC85から板状鉄斧1点が出土している。弥生時代終末～古墳時代初頭の住居跡は検出されておらず、古墳時代集落の南西限は8次調査地点と考えられる。

また、本調査では古墳時代後期の土壙墓が検出されており、鉄刀・鉄鏃・滑石白玉が副葬されていた。西新町遺跡では珍しい例である。

10次調査〔福岡市埋蔵文化財年報Vol.10 1995年度〕平成7～8年、民間開発に伴う発掘調査。甕棺墓38基・竪穴住居跡3棟他が検出されている。

以上の発掘調査の成果から弥生時代中期後半～末の集落は9次調査地点を中心とした南西端、墳墓域は1・7・10次調査地点から修猷館高校現テニスコート付近、古墳時代の集落は修猷館高校を中心に全域に広がり、中でも半島系遺物や遺構は東半に偏る傾向を示している。

ここまで遺物に関しては特徴的な遺物のみを記述してきたが、在地の遺物に関しても極めて多くの成果を挙げている。土器に関しては土壌が砂ということもあって非常に残りがよく、完形に近い土器が他遺跡に比べて圧倒的に多い。また量に関しても大量であることも付記しておかなければなるまい。搬入品も多くみられ、畿内系・山陰系土器などは珍しくない。その他の特殊遺物としては海岸沿いという立地から蛸壺、石錘や浮子の出土量が多い。今回の調査でも相当数の漁撈具が出土している。

以上の調査から弥生時代中期後半～末に国道南から旧道までの間に集落域があり、国道から修猷館高校グランド付近にかけて甕棺墓を中心とする墳墓域として展開する。その後遺跡は弥生時代終末～古墳時代前期にかけてきわめて特殊な集落として発展する。しかし、その後この集落は継続せず、古墳時代の土壙墓がわずかに認められる程度で、中世段階でわずかに土壙墓・木棺墓が認められるが近世まで目立った遺構はほとんど認められない。

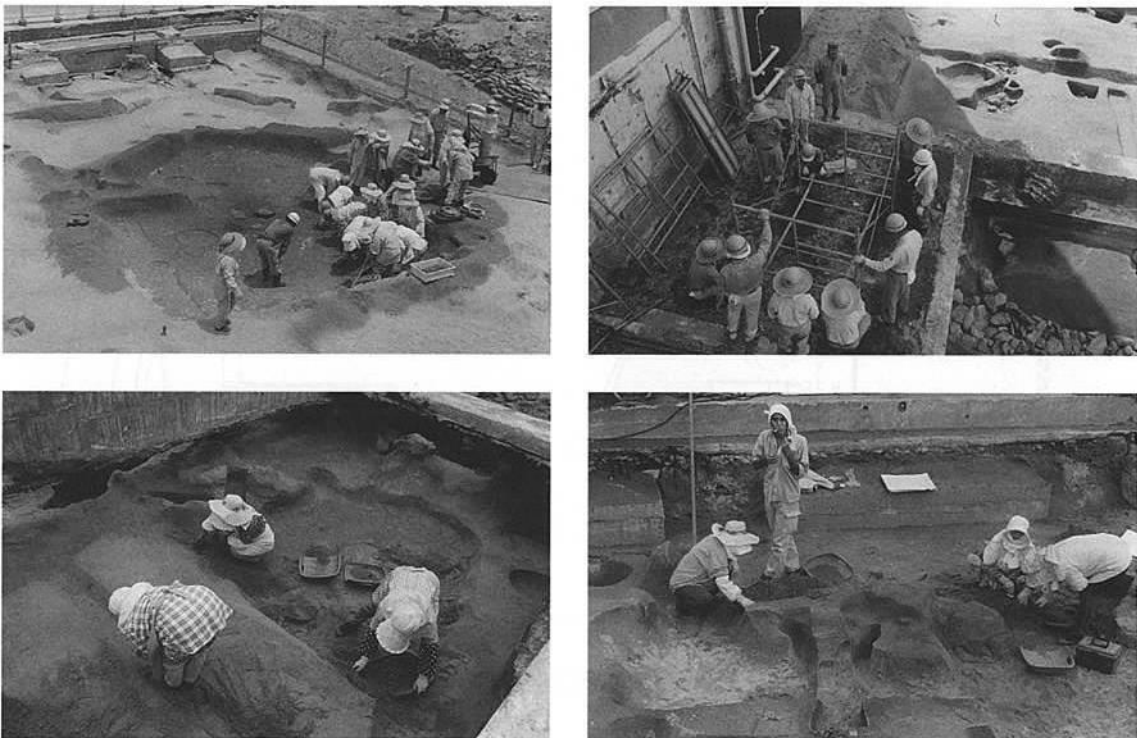
調査では大量の弥生土器や土師器に混じり半島系土器が認められること、鉄器や砥石などが多く

出土すること、また竪穴住居からカマドが検出されるなど極めて特徴的な遺跡である。

なお、これまでの調査では検出されながらも報告されていないのが中世～近世の遺構・遺物である。中世の土壙墓と考えられる遺構が3次調査で検出されている他、高取焼の窯も近く、今回の調査でも多くの窯道具が出土している。出土の状況は藤崎遺跡調査例に近い。第12次調査での近世以降の遺構と遺物は来年度報告を予定している。

参考文献

- 有田遺跡調査団 1968 『有田遺跡』
倉瀬戸古墳群調査団 1972 『倉瀬戸古墳群』
小林茂・磯望・佐伯弘次・高倉洋彰編 1998 『福岡平野の古環境と遺跡立地』九州大学出版会
下條信行・沢皇臣編 1971 『宮の前遺跡（A～D地点）』福岡県労働者住宅生活共同組合
吉岡 完祐編 1982 『十郎川』住宅・都市整備公団
高倉 洋彰 1991 『稲作出現期の環濠集落』
『横山浩一先生退官記念論文集2 日本における初期弥生文化の成立』文献出版



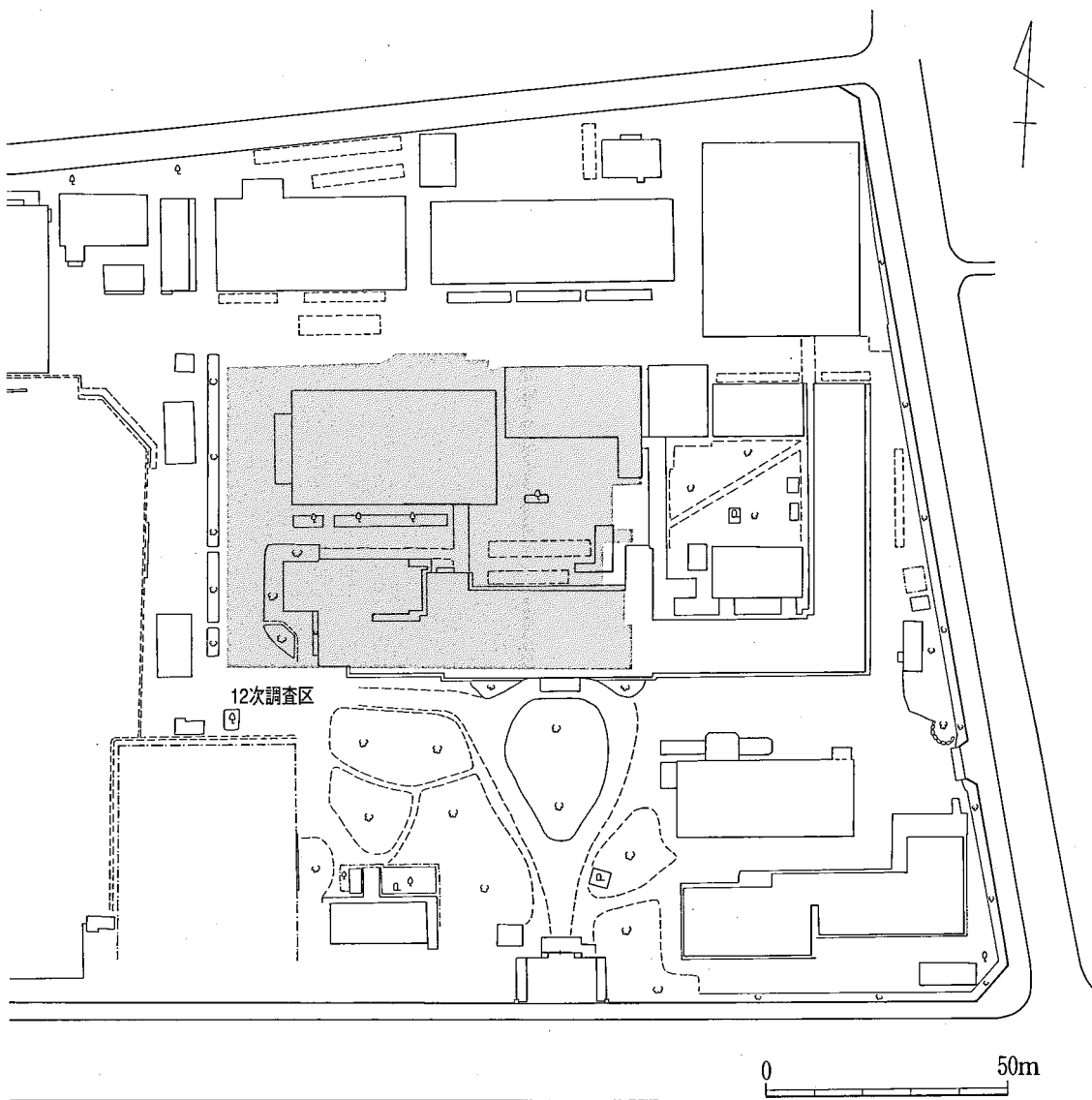
第16図 調査風景（2）

第3章 調査の内容

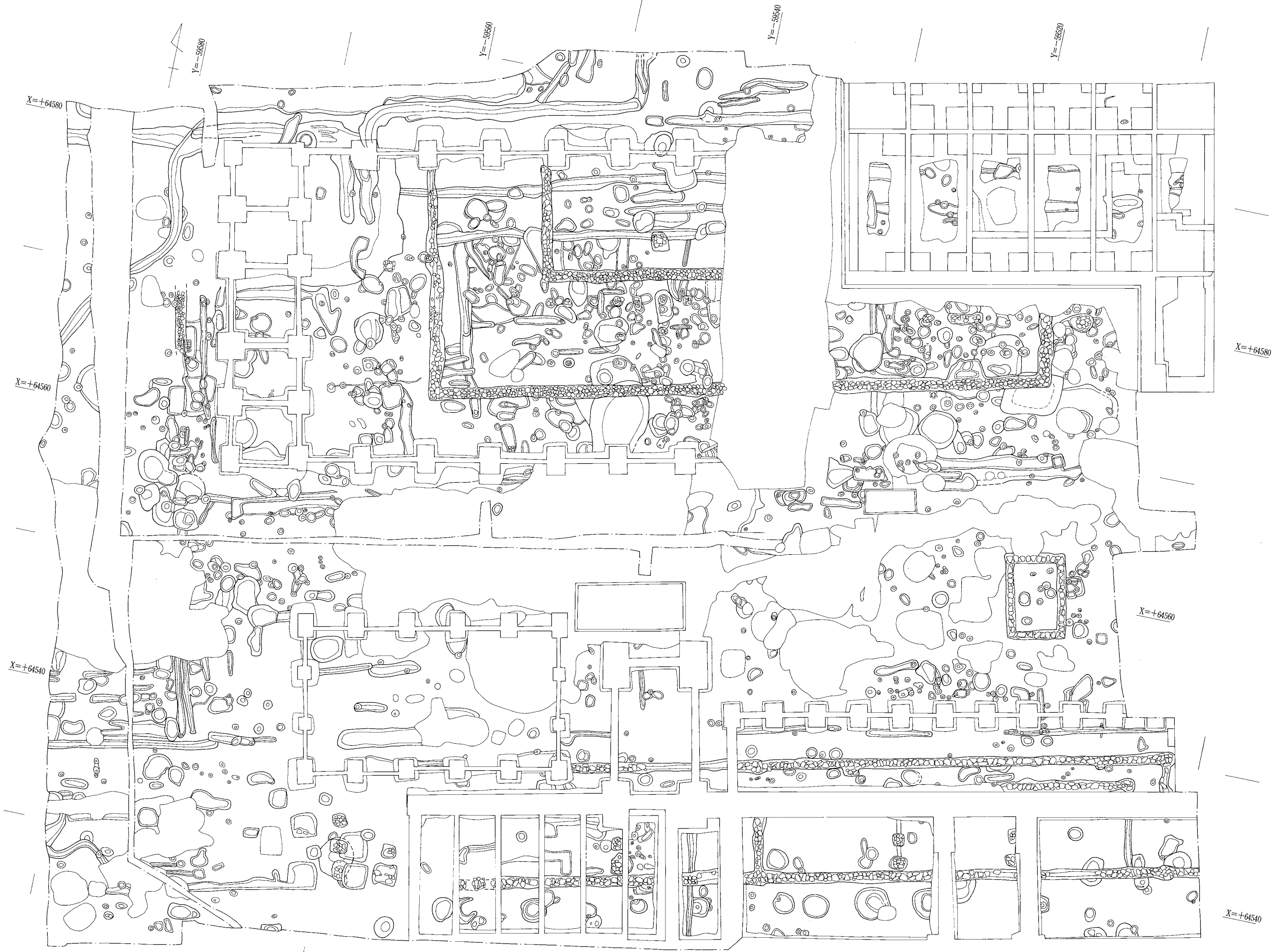
第1節 調査の概要

調査で検出された遺構は古墳時代の竪穴住居跡を中心とする遺構と、江戸時代の廃棄土壌を中心とする遺構、明治～昭和にかけての修猷館中学・高校関係の遺構に分かれる。また出土遺物ではこれらの遺構に伴うもののほかに、近辺の遺跡、遺構から二次的に移動したものと考えられる縄文時代の石器、および弥生土器がある。本書は縄文時代～弥生時代後期前半の遺物と古墳時代の竪穴住居跡の一部とその出土遺物の一部を報告したものである。

第20図は調査区西南（3西拡張区）の南壁土層図である。1層は近現代整地層、3～6層は古墳時代～近世の包含層、7層は古墳時代包含層、8・9層は古墳時代竪穴住居跡埋土、10層は明黄白

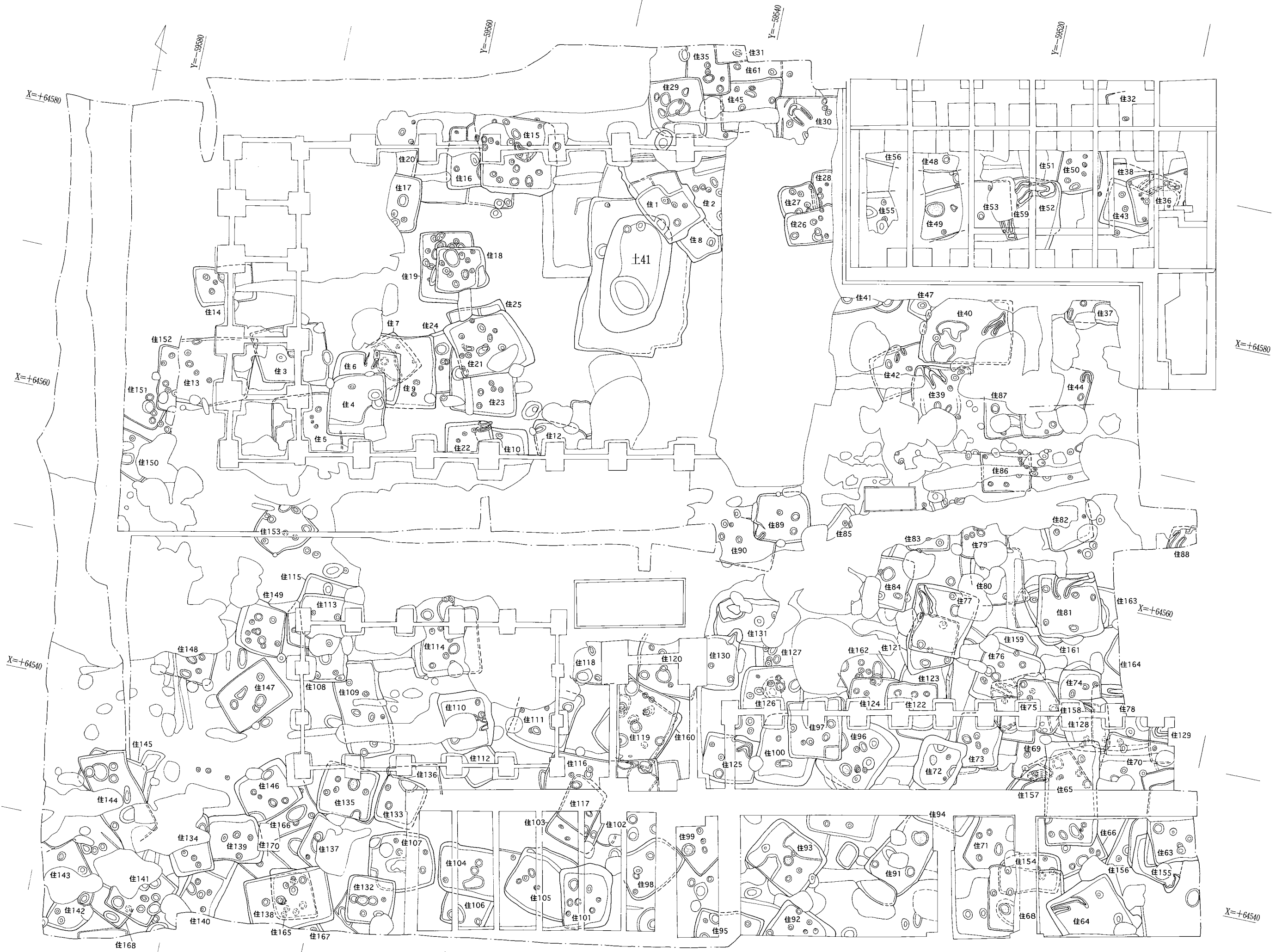


第17図 調査区周辺地形図 (1/1500)

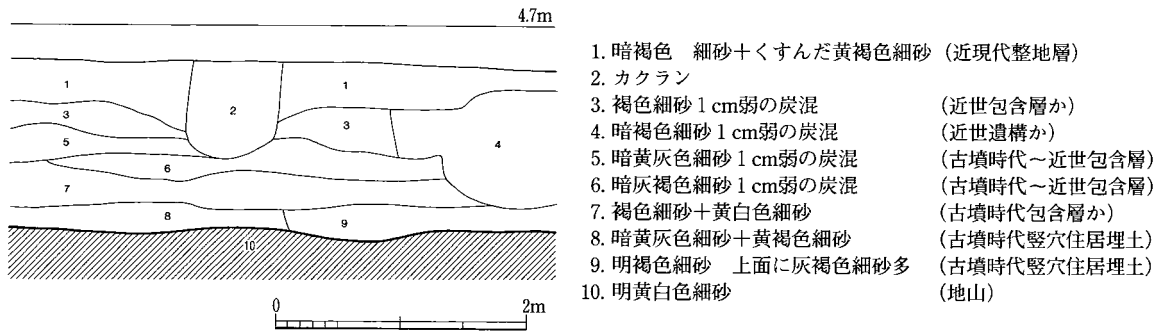


第18図 近世～近代遺構配置図 (1/250)

0 20m



第19図 古墳時代遺構配置図 (1/250)



第20図 3 西拡張区南壁土層図 (1/60)

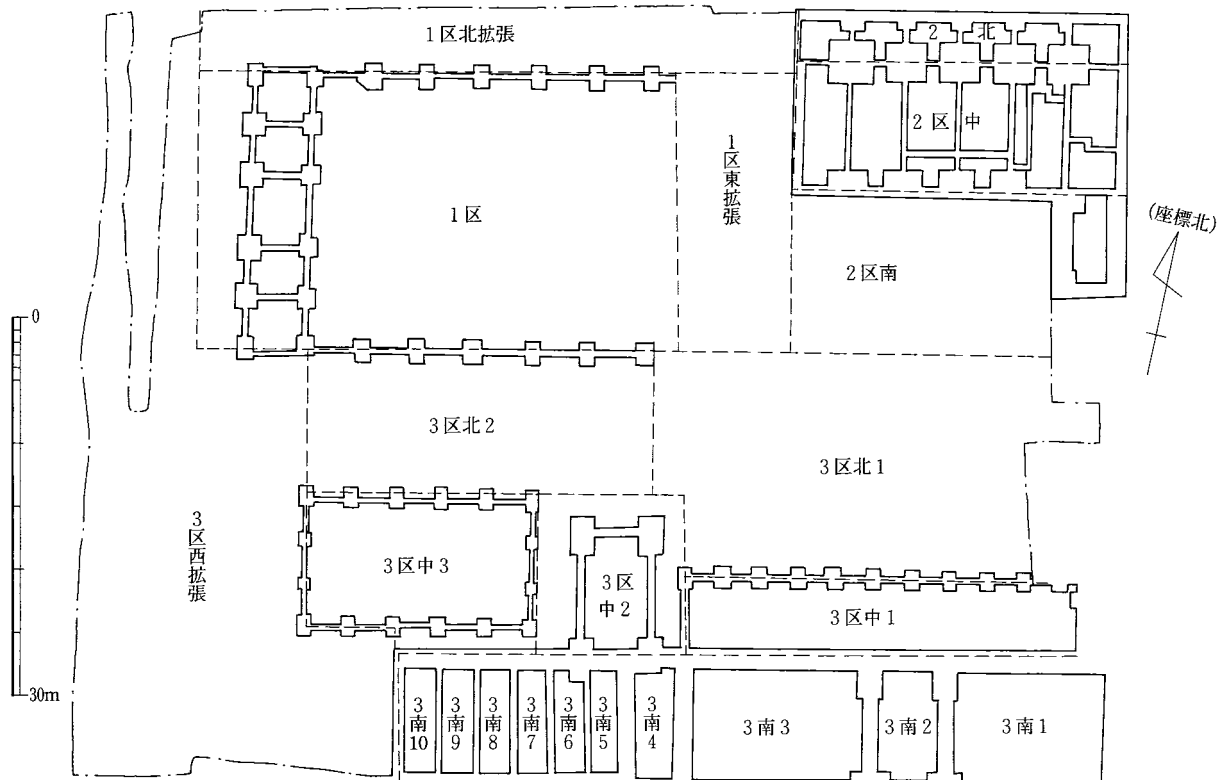
色細砂の地山である。近世～近代の遺構面は本来は3層上面、あるいは3～6層中で検出されるものである。ただ、包含層が厚いため、古墳時代遺構面上になってようやく近世～近代の遺構の輪郭がはっきりすることが多い。調査は近世遺構の面と古墳時代遺構面に分けて行ったが、場所によっては同一遺構面で検出される時期の異なる遺構を覆土、遺物の違いから分けて、発掘、記録を行った所もある。

古墳時代の遺構は集落跡の一部を構成するものであり、前章第3節で述べた既往の調査で検出された古墳時代の集落の中心域にあたるものと考えられる。検出した遺構は竪穴住居跡158棟（1～170号、内11・33・34・46・54・57～60・62・67・169号は欠番）と土坑4基（整理中のため古墳時代土坑の数には前後があると思われる）である。本書ではこのうち整理が終了し、今年度に報告が可能な1～115号竪穴住居跡とその関連遺物を報告し、116号以降の竪穴住居跡と古墳時代の土坑は次年度に報告することにした。

これらの遺構の中で古墳時代前期としては全国的に例の少ないカマド付き住居跡の存在が特に注目される。また、今回の調査分を加えると西新町遺跡で調査された弥生時代終末～古墳時代前期の竪穴住居は250棟を越え、福岡市内でも同時代としては最大規模の遺跡である。また次年度に報告する予定であるが、41号土坑は集落の中に位置する南北11m、東西7.5mの長方形を呈し、検出面からの深さ3mを超える他に例を見ない巨大な土坑である。覆土からは整理箱40個を超える多量の土器が出土した。なお遺構面および近世、近代の攪乱坑からも多数の古墳時代遺物が出土し、注目すべきものが少なくないが、これらも次年度に報告する予定である。

これら古墳時代の各遺構から出土した遺物は土師器がほぼ9割を占める。土師器は住居の覆土から出土したものが大半であるが、カマド廃棄行為などに伴う確実な一括遺物もあり、さらに砂丘遺跡という条件も幸いして、調整技法を観察するのに有利な遺物も多い。これらの土師器は今後、古墳時代前期の土師器編年においては重要な意味をもつと思われる。

また遺跡の性格を物語るものとしては、朝鮮半島製の陶質土器、軟質土器、玉生産に関する遺物、漁撈具がある。これらから推測して、遺跡では活発な漁撈活動とともに玉生産、朝鮮半島との交易を行っていたものと思われる。また、半島出身の人間が遺跡内に居住していた可能性も考慮しなければならないだろう。この他に96号住居跡から出土した五銖銭は弥生時代～古墳時代の発掘資料としては九州では3例目の出土であり、108号住居跡から出土した碧玉製紡錘車形石製品は福岡県内では初の出土例である。114号住居跡からはガラス勾玉鑄型、131号住居跡と45号土坑からはガラス



第21図 調査区区割図 (1/1500)

小玉鋳型が出土しているが、ガラス小玉鋳型は九州では初の出土であり、両者が同一遺跡で共伴した例は全国的にも非常に珍しい。また、41号土坑からは鏡破片が出土している。

一方、江戸時代の遺構はピットと廃棄土坑、溝を中心として構成され、埋土は古墳時代の遺構にはほとんど含まれない径1 cm程の炭化物を含むため明瞭に区別できた。これらの廃棄土坑から出土した遺物には各種窯道具が含まれており、江戸時代享保元年（1716）に開窯した西皿山、東皿山の高取焼窯に伴うものと考えられ、江戸時代高取焼の編年において重要な資料となると思われる。修猷館中学・高校以前に存在したとされる江戸時代の福岡藩屋敷との関係も問題を提起している。また、修猷館中学・高校関係の遺構も福岡県の近代の歴史を物語るものとして重要である。これら江戸時代以降の遺構・遺物については次年度以降に報告を行うことにしたい。

修猷館高校の北側、西南学院大学の北端には元寇防塁が遺存していて、西南学院大学の南辺に沿って東西に延びるものと推測されているが、今回の調査では古墳時代中期・後期、古代、中世の遺構、遺物はほぼ皆無である。

なお、前述のように、調査区は校舎解体、発掘調査の順番にあわせて全体を3区に分け、さらに校舎基礎の形、調査区の形をもとに各調査区を細分した（第21図）。遺構に帰属しない包含層、遺構面出土遺物などはこの調査区名称を付して取り上げを行っている。本書でも遺構の位置、遺物出土地点などを示す場合にこれを用いることとした。

以上のようなことから今年度報告（本書）と次年度報告分を整理すれば次のとおりである。

平成11年度報告

縄文時代～弥生時代の石器

弥生時代前期～後期土器

平成12年度報告

1～115号住居跡とその出土土器

116～170号住居跡と出土土器

古墳時代土坑とその出土遺物

近世・近代土坑とその出土遺物（概要）

遺構面・近世遺構等出土古墳時代土器等

古墳時代青銅器

古墳時代遺構出土鉄器

古墳時代玉類・ガラス玉鋳型

古墳時代漁撈具

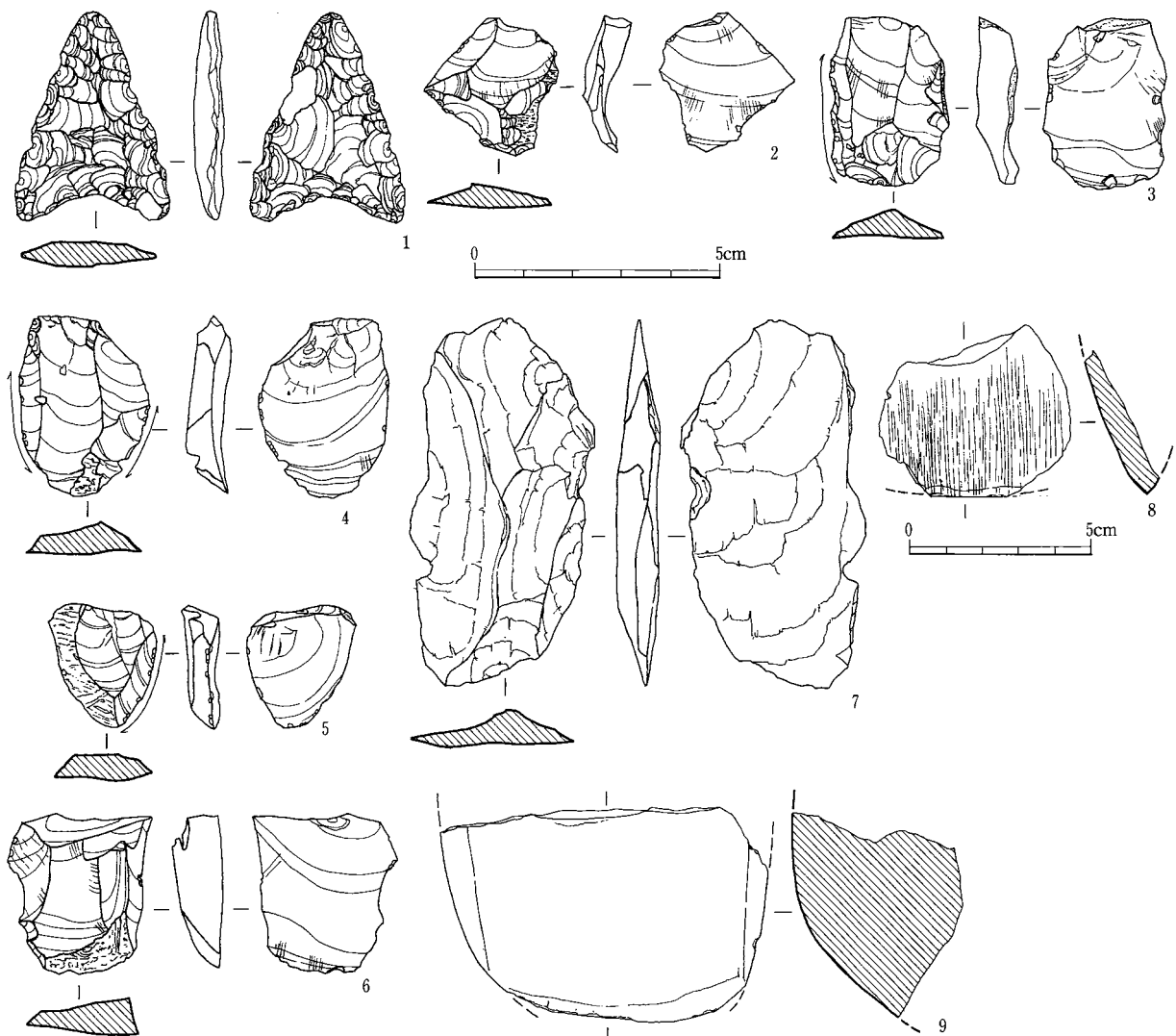
1～115号住居跡出土石器

116～170号住居跡出土石器

第2節 縄文時代～弥生時代の遺物

1. 縄文時代～弥生時代中期の石器（第22図）

縄文時代～弥生時代中期に属する遺構として明確なものはないが、調査区の各所からこれらの時期の石器が出土し、その全てを図示した。



第22図 縄文時代～弥生時代の石器実測図（8・9は1/2、他は1/3）

1は黒耀石製の西北九州型石銚先の完形品で重さ7.3gを測る。確実に縄文時代に属する資料である。表裏面の剥離面間の稜、刃部とも波に洗われたかのように摩滅しているが、側縁は意識的に鋸歯状に整形した可能性が高い。縄文時代の西北九州型石銚としては恐らく東限となる貴重な例である。2～6は使用痕のある黒耀石製の剥片で、7は安山岩製の剥片である。2は側縁の裏表に微細剥離が見える。3は上面に自然面を残し、左縁刃部に微細剥離が多い。4は1と同様な程度にかなり摩滅が進んでいるが、左右側縁下半に微細剥離が見える。5は上部に打面を作出し、右側縁に微細剥離が見える。6は上端が折り取られたような感じでさほど使用に伴う微細剥離は観察されない。7は摩滅が比較的進行している。

8・9は太型蛤刃石斧の刃部近くの破片である。いずれも今山産と考えられる玄武岩製で、8は表面全体に細かな擦痕が残る。

なお縄文時代に属するものはこれらの石器のみであり、縄文土器はほとんどない。これらの石器が周辺の遺跡から後世の自然作用、あるいは人間の活動により移動したものとも推測できないわけではないが、土器がないことから考えてむしろ海浜での漁撈、狩猟活動及び食物の加工に伴うものであった可能性が高いと考えている。(重藤)

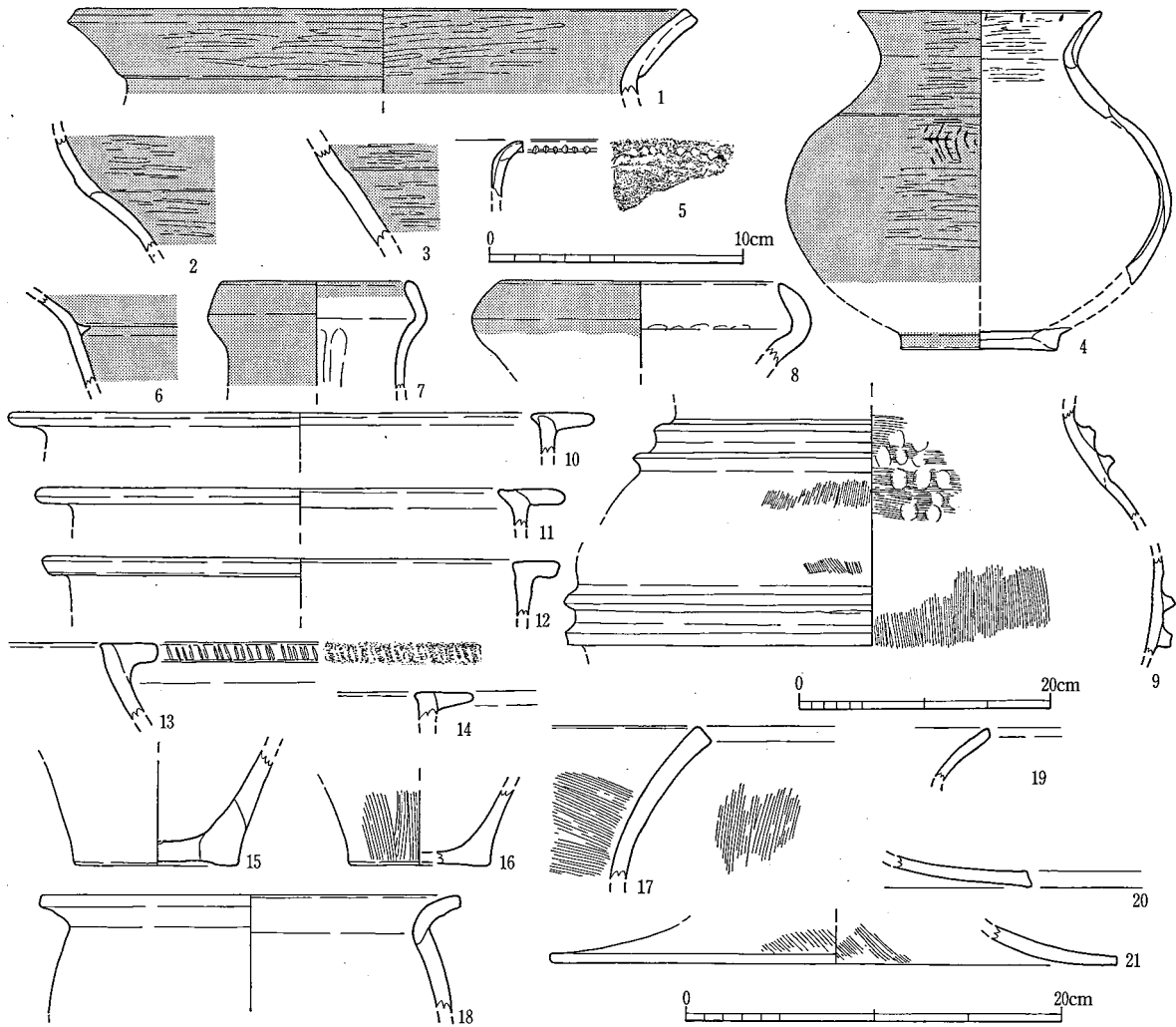
2. 弥生土器 (第23図)

縄文時代と同様に、今回の調査では弥生時代の遺構はほとんどみられなかった。しかしながら調査区各所から新しい遺構に混入した状態でいくつか弥生土器が出土している。これらの弥生土器は摩滅が顕著であるので、近隣の弥生時代以降から二次的に移動したものと考えられる。なお弥生時代後期末の土器は竪穴住居跡などの遺構との関連が想定されるものもあるので、遺構別に後述することにした。

1～5は前期に属する。1～3は大型丹塗磨研壺である。1は81号住居跡出土。口縁の外側に粘土帯を貼付し、肥厚部をつくる。内外面は太い横ミガキのち暗赤褐色の丹塗を施す。2は143号住居跡出土。肩部の破片で、頸・肩の境には不明瞭な段をつくる。外面は太い横ミガキのち暗赤褐色の丹塗を施す。3は74号住居跡出土。図示してないが、他に同一個体の胴部片が3点ある。肩部の破片で、頸・肩の境には不明瞭な段をつくる。外面は太い横ミガキのち暗赤褐色の丹塗を施す。

4は板付Ⅰ式に相当すると思われる丹塗磨研の小壺である。116号住居跡出土。図面上で完形に復元した。胴が張る、やや寸胴の壺である。口縁部には粘土帯を貼り付けない。頸・肩の境には不明瞭な段をつくる。底部は円盤貼り付けである。肩部に赤彩の有軸羽状文を施し、口縁端部内面にも文様のあった可能性がある。口縁内面から外面は太い横ミガキのち暗赤褐色の丹塗を施す。5は甕口縁部である。106号住居跡出土。短く外反する口縁端部に棒状工具による刻目を施す。黄褐色を呈す。

6～16は中期に属する。6は21号住居跡出土。壺肩部の破片で、三角形の突帯を巡らす。外面は横ナデのち暗赤褐色の丹塗を施す。7は122・123号住居跡上層出土。複合口縁壺の口縁部の破片である。口縁内面から外面は横ナデのち暗赤褐色の丹塗を施す。頸部内面は縦ナデで調整する。8は41号土坑出土。複合口縁壺の口縁破片である。内面には工具跡が残る。9は大型壺の肩部から胴部の破片である。103・117・119号住居跡の破片が接合した。他に図示してない同一個体が1点確認した。外面には突帯を巡らす。10～14は甕の口縁である。10は3中1区遺構面出土。11は77号住居



第23図 弥生時代前期～後期の出土土器実測図（4は1/3、9は1/6、他は1/4）

跡出土。12は27号住居跡と29～31住居跡遺構面出土が接合した。13は3北1区遺構面出土。口縁外面に浅い刻目を施す。14は93号住居跡覆土上層出土。15・16は甕の底部である。15は89・90号住居跡上層出土。16は26号住居跡上層出土。内面には炭化物が付着する。9・15は橙褐色、12は暗褐灰色、他は淡黄褐色を呈す。

17～21は後期に属する。17は97号住居跡出土。壺の口縁である。口縁端部は面取りする。18は132号住居跡出土。短く外反する口縁をもつ小型の甕である。外面には煤が付着する。19は3中1区遺構面出土。小型の甕の口縁か。20・21は高杯の脚裾である。20は129号住居跡出土。21は101号住居跡出土。いずれも淡黄褐色～黄褐色を呈す。（大庭）

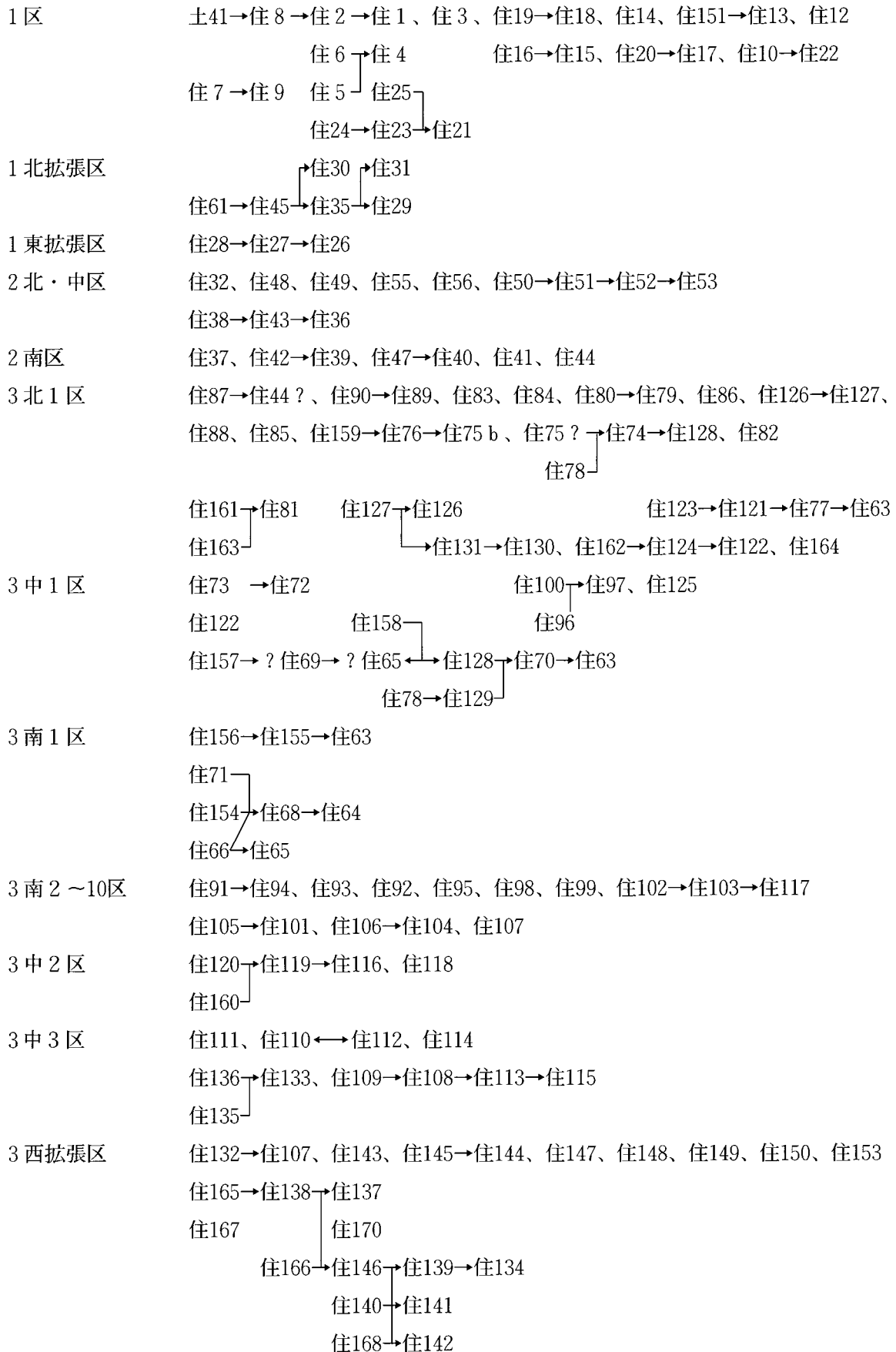
第3節 古墳時代の遺構と遺物

1. 古墳時代の住居跡と出土土器

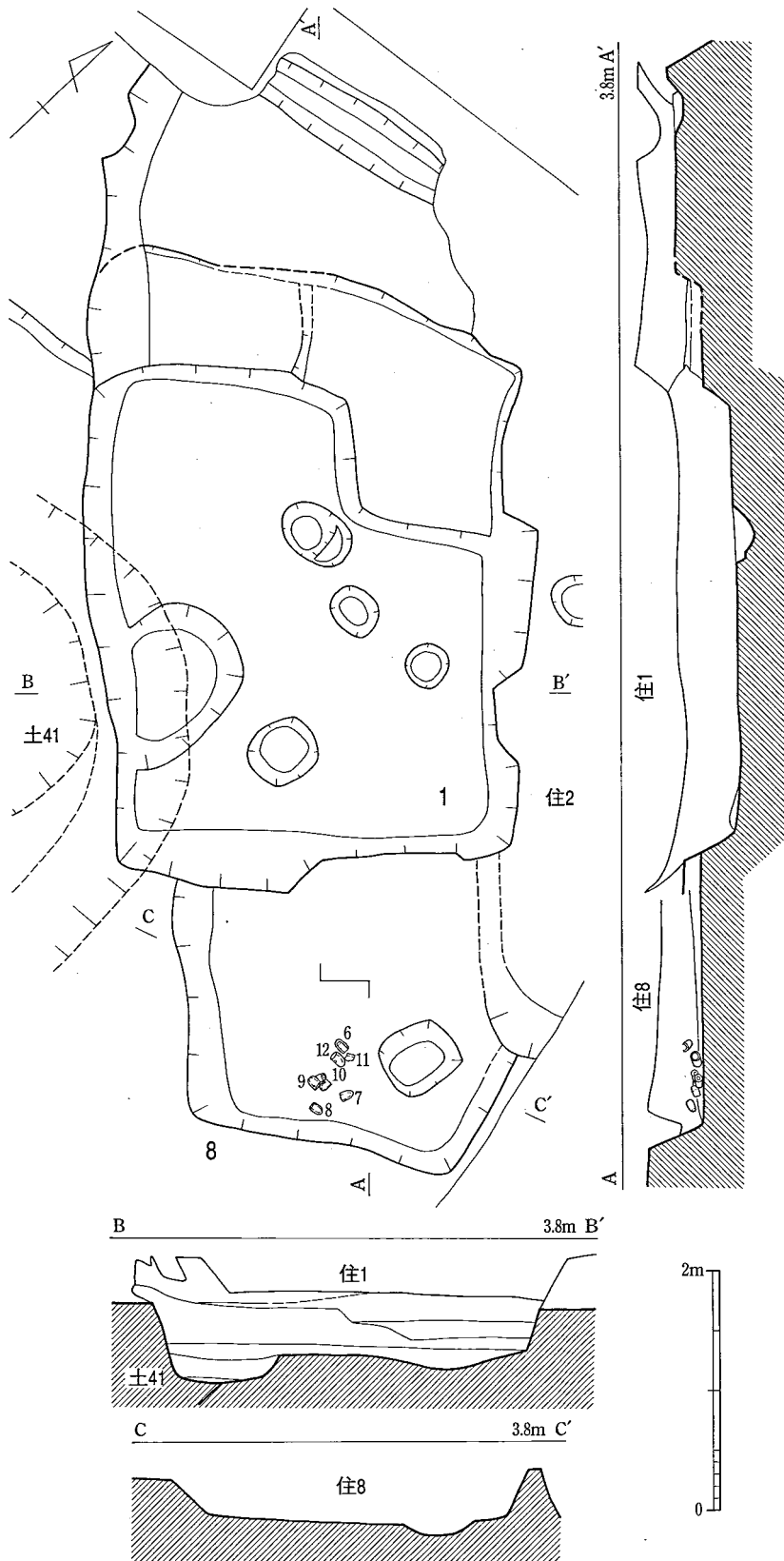
古墳時代の遺構は竪穴住居跡158棟と土坑数基からなる。本書では整理の終了した115号竪穴住居跡までとその出土土器を中心に報告することにした。残りの竪穴住居跡とその出土土器、土坑については次年度報告の予定である。

なお以下で報告する竪穴住居跡の番号は発掘調査順に付したため、分布とは余り関連がない。第1節（第21図）で述べた調査区分に則して竪穴住居跡を分け、現地調査段階でのそれらの切合い

関係の認識を示すと次のようになる。



以下、番号順に竪穴住居跡とその出土土器の説明を行うことにしたい。

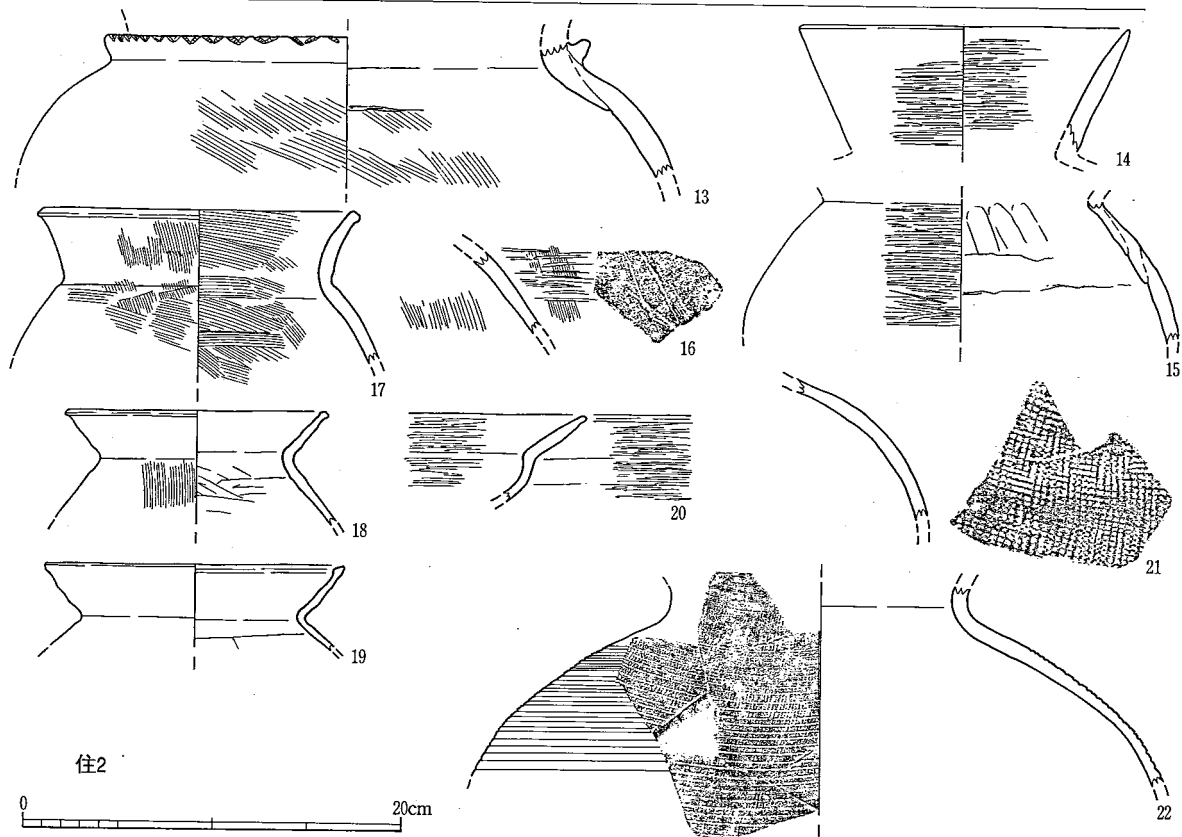
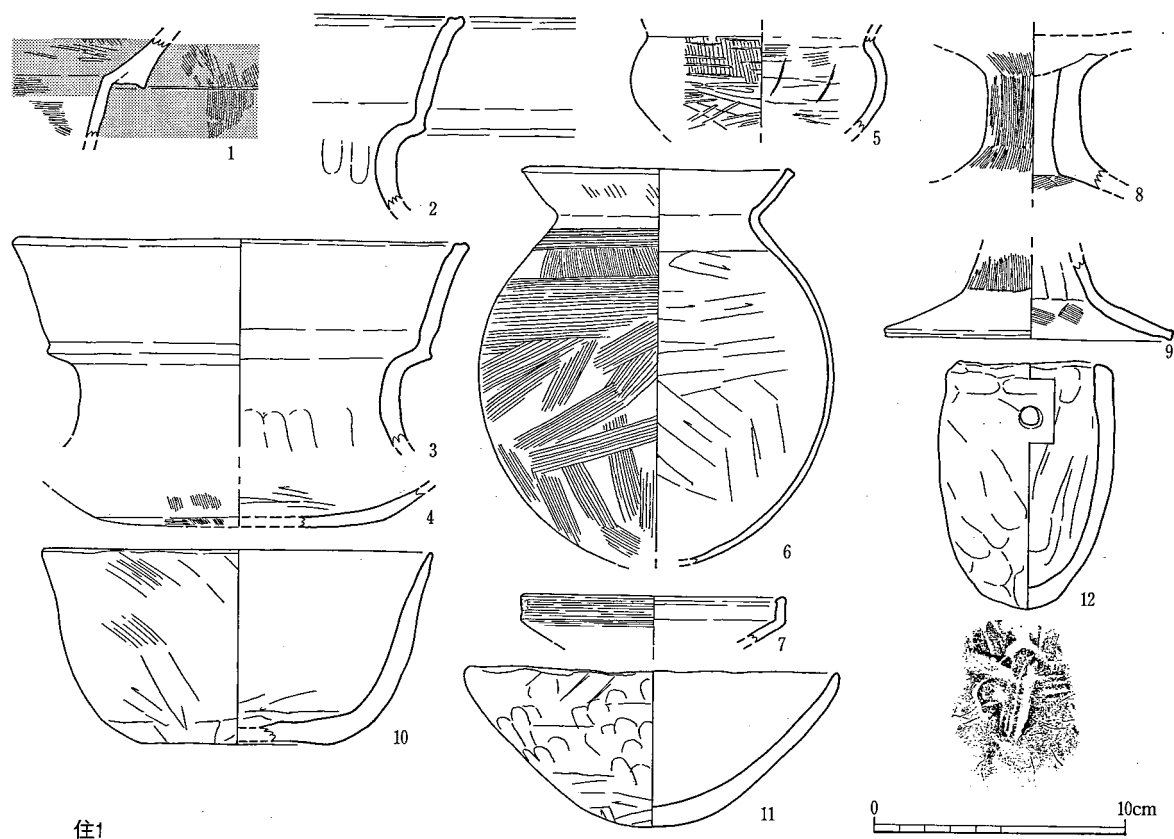


第24図 1・8号竪穴住居跡実測図 (1/60)

1号竪穴住居跡 (図版12、第24図)

2・8号竪穴住居跡を切る長方形の竪穴住居跡と考えて発掘を進めた。しかしながら、床面西北部に住居としては不自然なテラス面が生じている。また、床までの深さも80cmに達し、他の住居と比較すると非常に深いのでやはり住居跡としては不自然である。この1号住居跡の位置はちょうど古墳時代の巨大な土坑である41号土坑の壁立ち上がりと一致している。1号住居跡覆土は上部が褐色細砂、下部が灰褐色細砂で、いずれも41号土坑覆土との区別は難しかった。1号住居跡自体が41号土坑の覆土の一部を誤って発掘したか、住居であったとしても西北部テラス面程の高さが床面であった可能性が高い。土器以外に刀子 (第237図22)、砥石 (第240図1) が出土。他に覆土下部から石錘 (第243図32) が出土しているが、これは本来41号土坑に伴うものか。

出土土器 (第25図) 1～5は壺である。1は畿内系の二重口縁壺で、外折する一次口縁の外面に粘土を貼付け突出部としている。外面と内面屈曲部まで丹塗りを施している。2・3は口



第25図 1・2号竖穴住居跡出土土器実測図 (5・8~12・14~16・20~22は1/3、他は1/4)

縁部上面が水平に近くわずかに凹む山陰系の二重口縁壺である。4は大きな平底片で2・3のような山陰系二重口縁壺の底部となると思われる。5は小形丸底壺で外面胴上半をハケメ、下半をヘラケズリで成形した後、全体を粗いミガキで仕上げている。内面にはミガキと縦方向の工具痕が観察される。

6・7は甕である。6は甕で胴部外面は上半がヨコハケ、下半が斜め～縦方向のハケメで仕上げている。内面は下半が左上りの斜め方向ヘラケズリ、上半がやや右斜め上のヘラケズリである。肩部に櫛描直線文を施し、胴部内外面に大きな黒斑がある。7は直立する二重口縁をなし、壺としても良いか。口縁外面は強いナデの細かな条痕が観察され、端部は内側に丸く肥厚している。瀬戸内系のものであろう。

8・9は高杯脚部である。8は外面をハケメで仕上げ、脚筒部内面はナデである。上部は接合面より剥離し、粘土を充填して杯部と接合した可能性が高い。9は高杯脚裾部で脚筒部外面はハケメ、内面はヘラケズリで仕上げている。

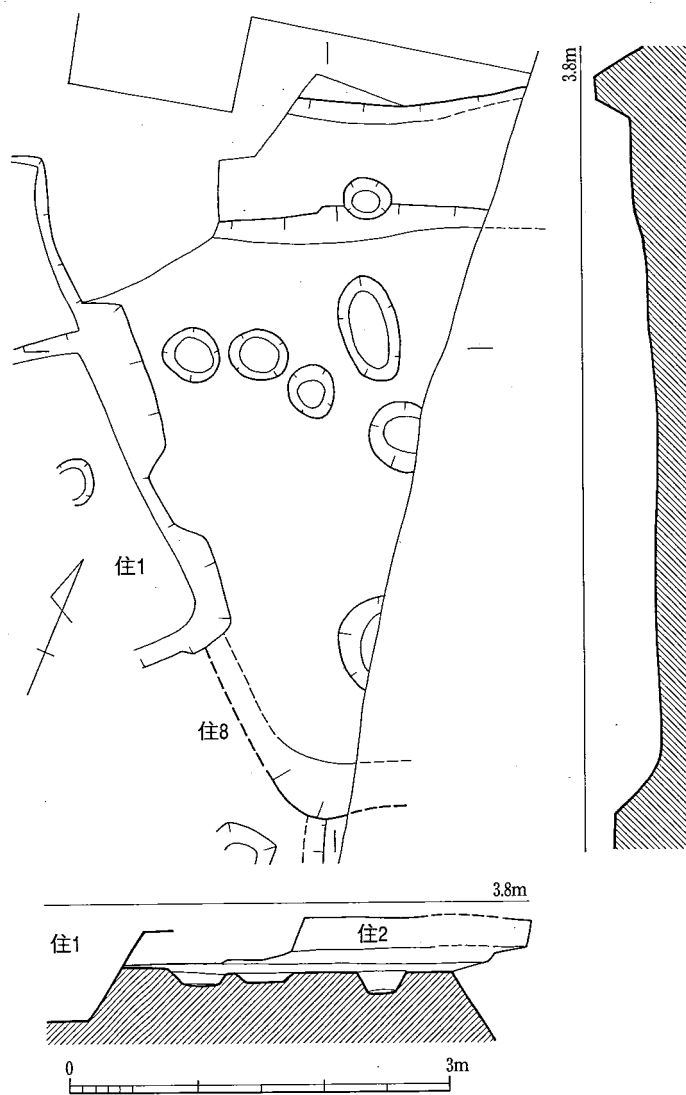
10・11は鉢で、10は平底、11は丸底をなす。10は外面上半を斜め方向のハケメ、下半～底部をヘラケズリで仕上げる。11は外面を調整が粗く、外面口縁部近くに板状圧痕、底部にヘラケズリが観察できる。いずれも内面はナデである。

12は蛸壺である。底部には工具による調整と思われる粗い条痕が見える。

これらの土器は白黄褐色、灰黄褐色を呈するものが多いが、1は暗褐色、5は茶褐色、7は明褐色を呈して他と異なる。また、上述したようなこの1号住居跡の状況から考えて、本来は41号土坑に属する土器も間違っして1号住居跡とした可能性が大きい。(重藤)

2号竖穴住居跡 (図版12、第26図)

1号竖穴住居跡の北東に位置し、1号竖穴住居跡に切られ、8号竖穴住居跡を切ると考えたものである。また、東を攪乱に大きく破壊されているので明確に平面形を捉えることができなかつた。床面北東部にテラス状に高くなった部分があるが、ベット状遺構となるかあるいは住居平面形を間違っして発掘したためか判断が難しい。床面では5基のピットを検出したが、明確に炉として捉えられるものはなかつた。遺物は第25図22のように41号土坑出土土器と接合したのものもあるので、一括性



第26図 2号住竖穴住居跡実測図 (1/60)

はやや不安が残る。他に石器（第245図2）も出土。

出土土器（第25図13～22） 13～15は壺である。13は在地系の壺で頸部外面に頂部の丸い突帯を貼付する。14は畿内系の中形直口壺で、15は同器種の胴部であろう。14は内外に細かいヘラミガキを施し、15は外面ヘラミガキであるが内面の調整はやや雑で粘土紐の接合痕を明瞭に残している。16は壺胴上部の破片か。縦方向の2条の平行線の線刻を施している。13は淡橙色、14・15は橙褐色、16は淡黄褐色を呈す。

17～19は甕である。17は小振りの在地系甕で内外をハケメで仕上げる。口縁部はやや丸く外反し、端部は面をなす。18は口縁部が直線的に外折し、端部が厚くなるやや特異な器形であるが、口縁内外の横ナデから考えて布留系の甕。胴部内面は頸部近くまでヘラケズリを施す。19は布留甕で口縁端部が内傾した面をなして肥厚する。17は明茶褐色、18は灰黄褐色、19は黄橙色を呈す。

20は外反口縁の鉢で内外にミガキを施す。茶褐色を呈している。

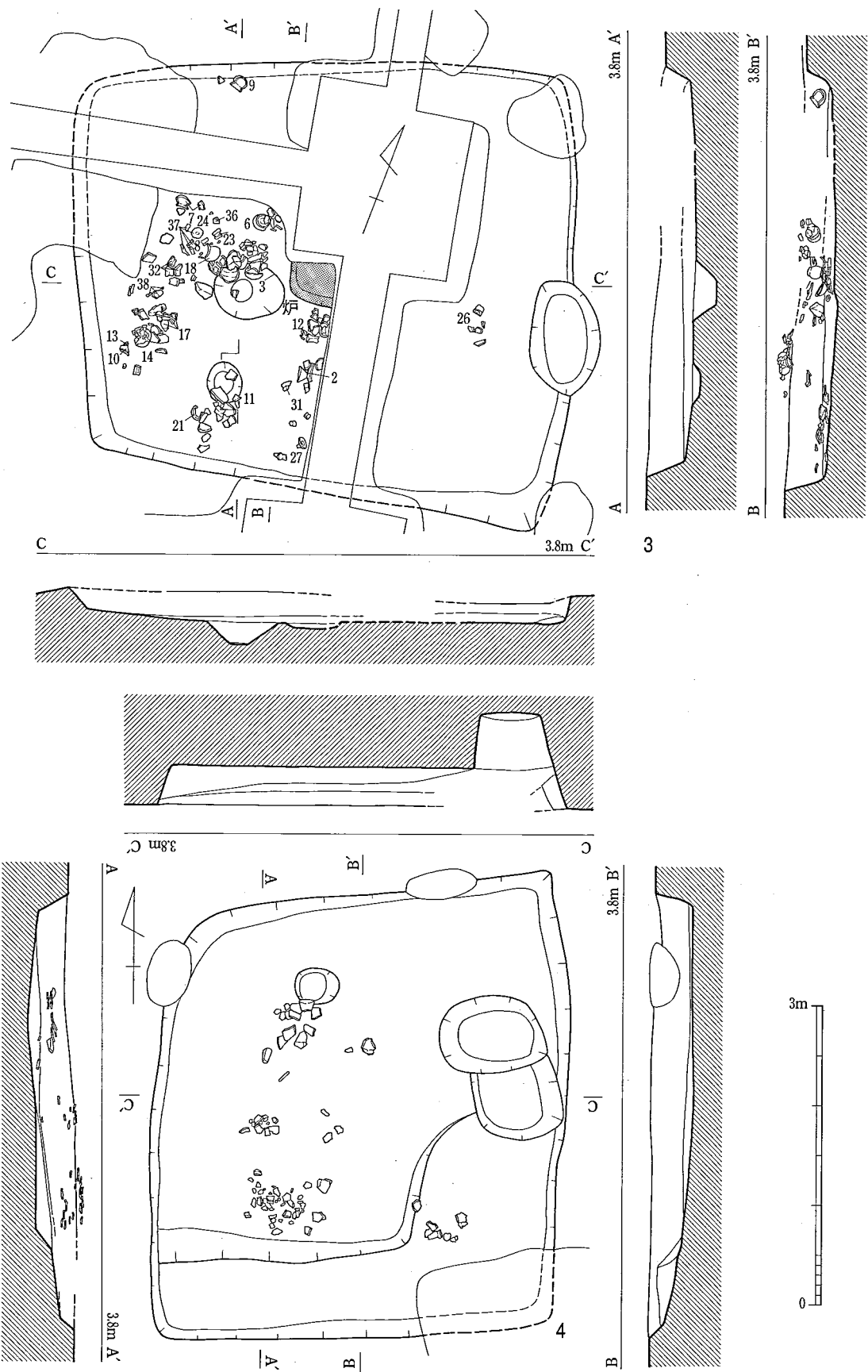
21・22は半島系土器である。21は2号住居跡と18号住居跡の破片が接合したものである。外面に小さな格子タタキを施したもので、壺胴上部の破片か。焼成はやや甘く、生焼けの須恵器のようである。灰色を呈する。22は平行タタキの後、密に平行沈線を巡らした壺胴上部から頸部の破片である。胎土は精良、焼成は堅緻で、陶質焼成である。この破片は2号住居跡と1号住居跡覆土下部、41号土坑のものが接合しており、本来は41号土坑に帰属するものか。（重藤）

3号竪穴住居跡（図版12、第27図）

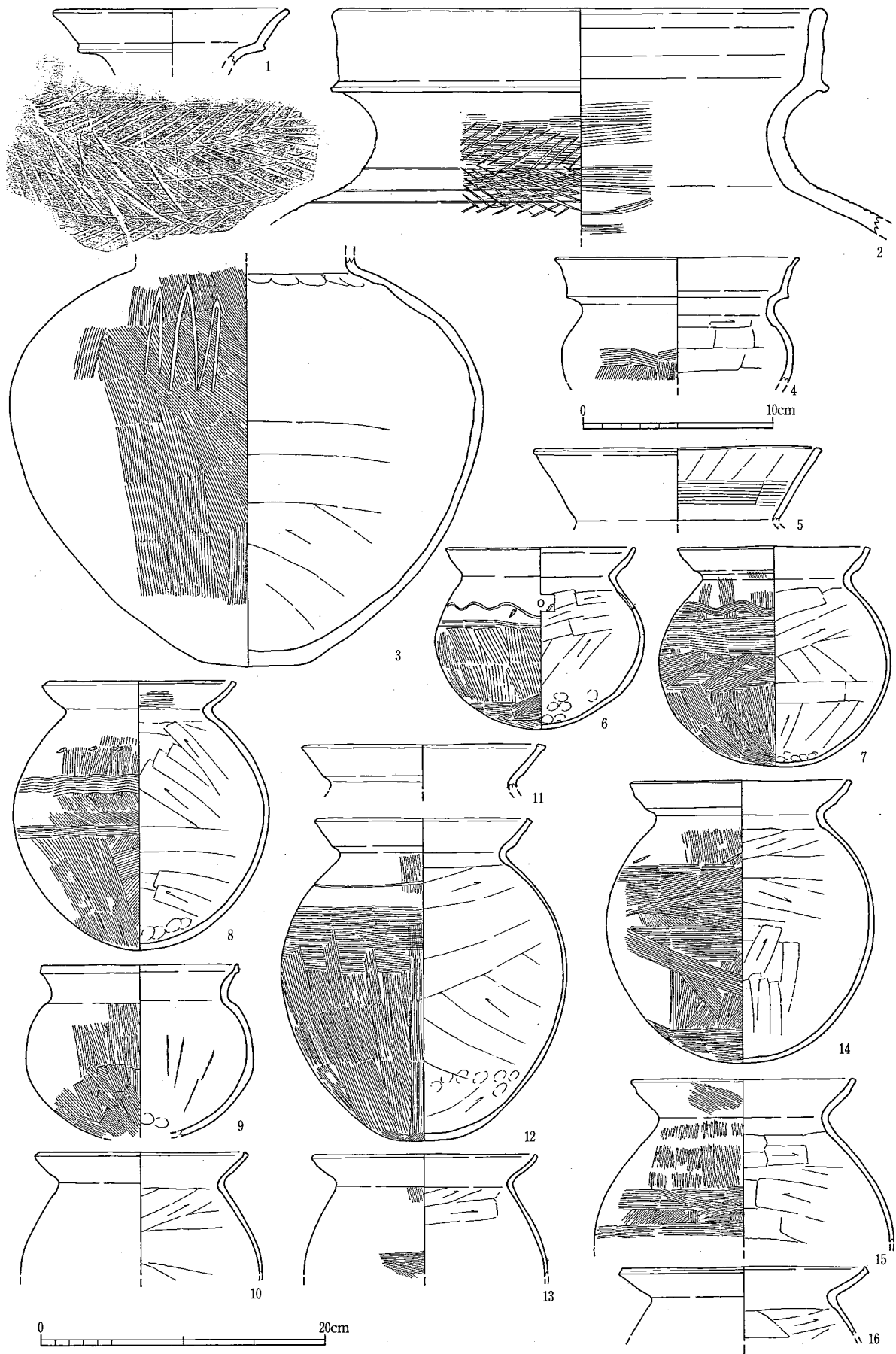
1区の西に位置し、5号竪穴住居跡の北に隣接する。他の住居とは切り合わないが講堂基礎で大部分を攪乱されている他、近世土坑によっても攪乱を受けている。南北約4.1m、東西5.0mを測り、深さ0.4mを測る。中央付近に焼けた浅いピットがあり、炉跡と考えられる。現位置を保ったと思われる完形土器が多く出土し、手鎌2点（第237図15・16）が重なった状態で出土した。他に蛇紋岩製勾玉（第239図5）、台石等（第245図3～6）と釘・不明鉄器（第238図34・35・46）も出土しているが、釘は混入か。

出土土器（第28・29図） 1・2は二重口縁壺である。1は口縁片で褐色を呈する。2は口縁から肩部片で約1/4片、赤褐色を呈する。口縁がほぼ直立し、頸部にヘラ描きの綾杉文、3条の沈線文を有する。3は壺で頸部上を欠損する。赤褐色～暗赤褐色を呈し、底部はややふくらむものの平底に近い。肩部にヘラで櫛描きがある。4は二重口縁鉢か。底部欠損のため不明。5は在地系の壺か。6は小型の壺で完形。赤褐色を呈する。肩部に1条の波状文、1ヶ所のみ列点文を付す。径5mmの焼成後穿孔がある。

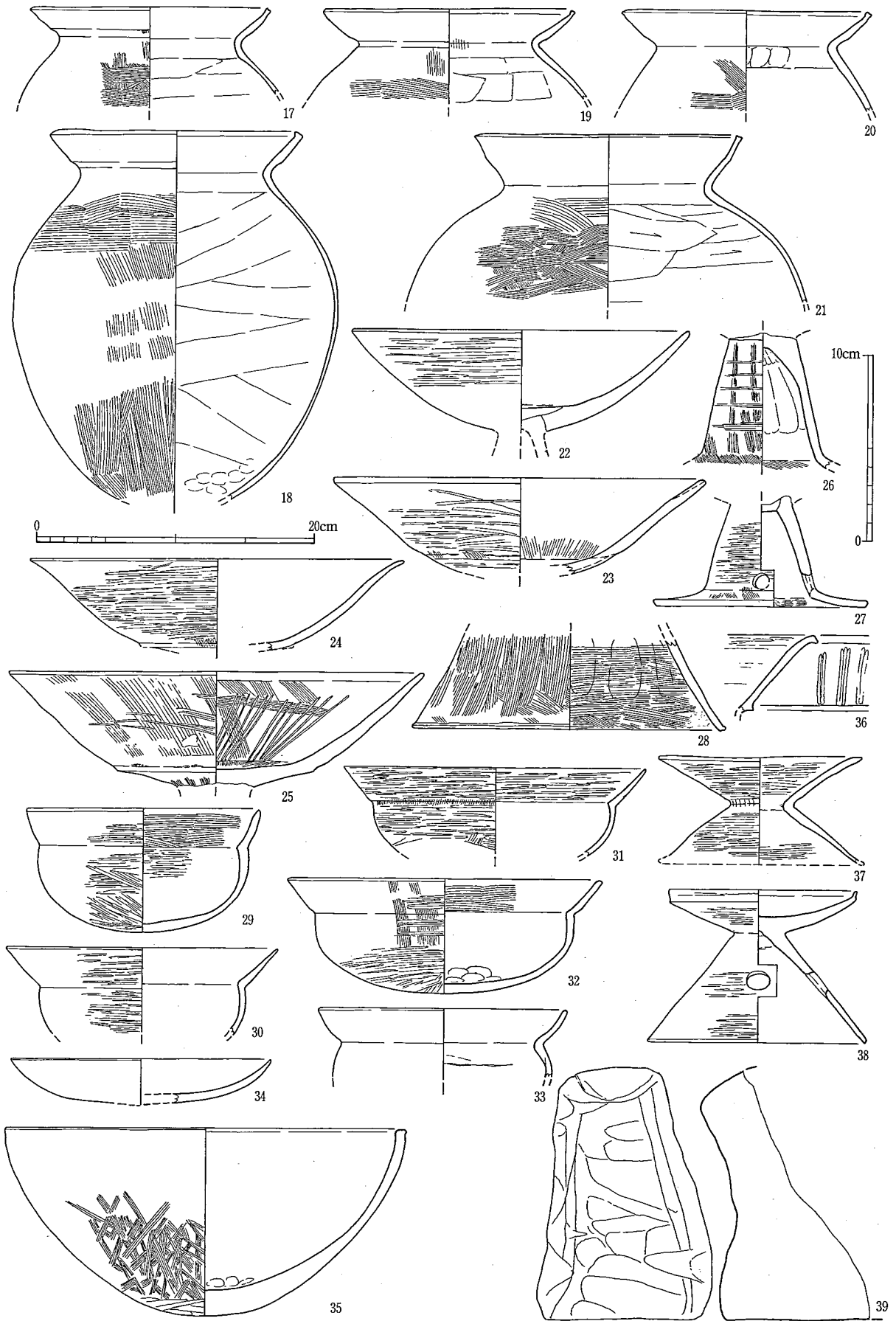
7～16はいずれも甕である。7はほぼ完形。乳白色を呈し、頸部は強いナデで段をなす。8もほぼ完形。胴部最大径がほぼ中央部にあり球形を呈する。肩部に列点文、胴部中央よりやや上方に3～4条の波状文を付す。9は小型の甕。約1/2で底部を欠損するもほぼ完形に復元できた。頸部から肩部に浅い段を有し、底部外面付近のハケメは極めて粗く、内面に工具の静止痕が残る。11の頸部は強いナデで段をなす。12は約2/3で完形に復元できた。外面淡黄白色、内面赤褐色を呈し、頸部は強いナデで段をなす。胴部はやや卵形を呈する。肩部に一状の沈線を巡らす。14は内外面とも乳白色を呈し、頸部は強いナデで段をなす。胴部最大径がほぼ中央部にあり球形を呈する。肩部に列点文を巡らす。15は口縁端部は稜をなさない。胴部最大径が中央部よりやや下半にある。16は



第27图 3·4号竖穴住居迹实测图 (1/60)



第28図 3号竖穴住居跡出土土器実測図(1)(4は1/3、他は1/4)



第29図 3号竖穴住居跡出土土器実測図(2) (17~21は1/4、他は1/3)

口縁片約1/5。外面白色に煤で黒ずみ、内面灰白色を呈す。

17～21も甕である。17は内外面ともに淡黄白色を呈す。18は底部欠損するもほぼ完形に復元。内外面ともに黄褐色から黒色を呈し、工具による列点文が巡る。20は内外面とも黄褐色から黒色。21は口縁から肩部、外面黒色、内面乳白色を呈し、外面ハケ、内面ヘラケズリである。

22～27は高杯で22～25は杯部のみ、26・27は脚部である。23はタテハケ後ミガキ。杯部にやや不明瞭な段を有す。24は口縁端部は緩やかに外反する。25は全体的にシャープな作りで、やや摩耗するも外面はハケメ後ミガキ、内面ハケメ後ミガキ調整。26は脚柱部のみ残存し、外面ハケメ後横方向のミガキ。27は脚部は完存する。明褐色を呈し、やや中ぶくれ気味で広がる。外面は化粧土を施す。穿孔は2方向である。

29・30は小型丸底壺。29は完形の個体。30は口縁から胴部約1/6で内外面ともに明橙色を呈す。

31・32は鉢。32は完形である。33は鉢か。口縁から肩部で内外面とも茶褐色を呈す。34・35は椀である。35は約2/3でほぼ完形に復元。内外面ともに淡黄白色で外面黒斑残る。外面下半は不定方向のハケメを施し、底部はケズリ調整。内面底部に棒状圧痕が認められ、甕の整形に近い。

36は鼓形器台の口縁片。外面黄白色、内面灰黄褐色を呈し、外面ヨコナデ後タテミガキ。

37・38は小型器台。37は脚端部を欠損するもほぼ完形。内外面とも乳白色を呈す。38は完形の個体である。

39は土製支脚。約半分で内外面とも赤褐色。外面は指による整形痕が顕著に残る。(森井)

4号竪穴住居跡 (図版13、第27図)

1区にあり、6号竪穴住居跡と5号竪穴住居跡を切っている。南半にベッド状遺構と考えられる高まりを有する。一部を近世の土坑で攪乱されているが残りは良い。南北4.4m、東西4.1m、深さ0.15～0.4mを測る。有溝石錘(第243図14)の他に砥石等(第246図7～10)、混入と思われる石鉚(第22図1)、住居跡内攪乱からガラス小玉(第240図36・37)が出土している。

出土土器 (第30図1～25) 1は壺(二重口縁?)か。肩部約1/6で内外面とも橙色を呈し、やや蛇行する突帯を付す。2は直口壺で口縁約1/6。内外面とも茶褐色～灰褐色を呈し、緩やかに直立する口縁を有す。在地系か。3は二重口縁壺で内外面とも灰褐色～黒色を呈す。4は壺底部。外面灰茶色～黒色、内面暗黄褐色を呈し、平底に近い。

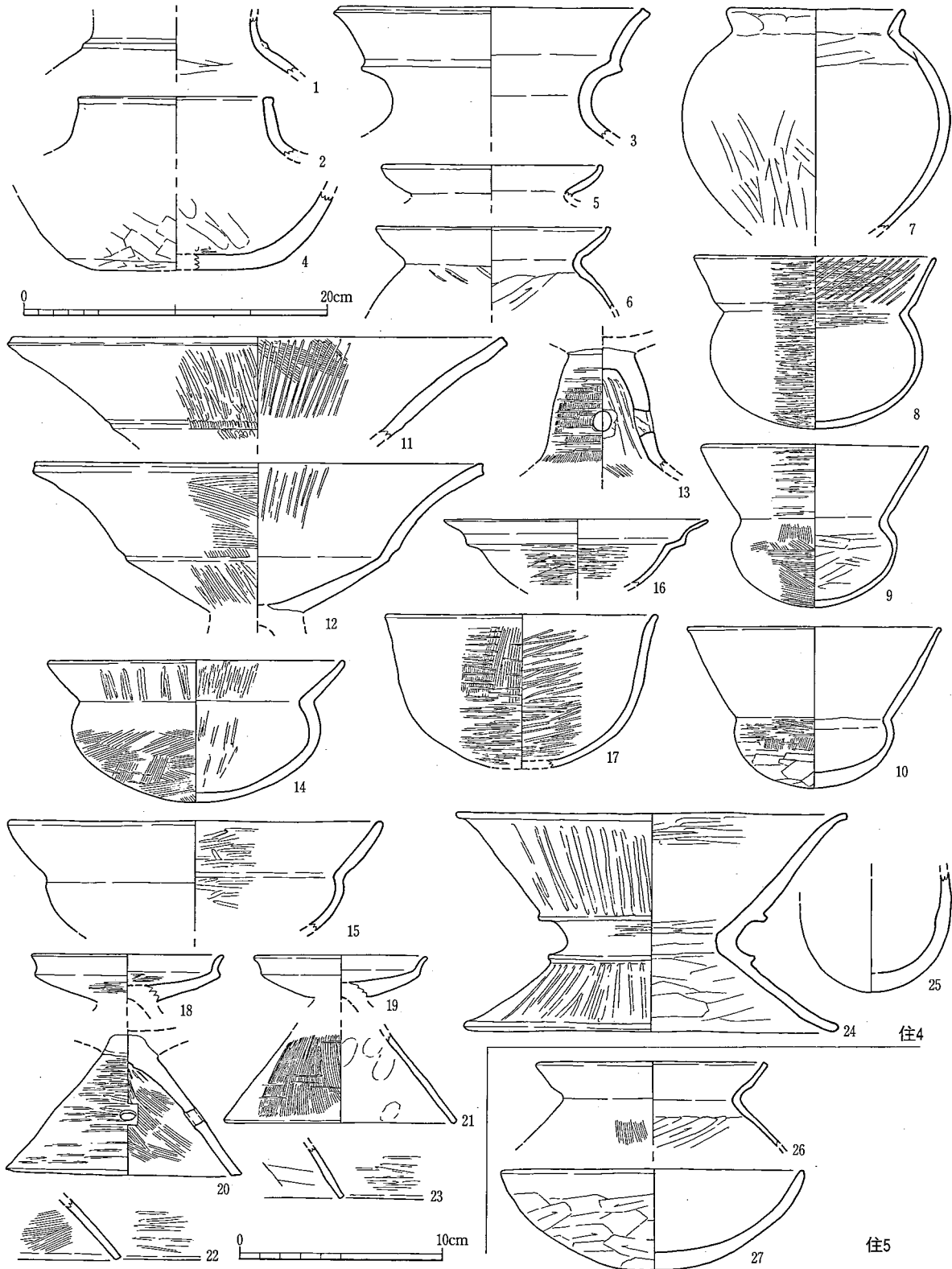
5・6は甕。5は口縁約1/6で内外面とも灰黄褐色～黒茶色を呈す。6は口縁約1/4で内外面とも淡黄茶褐色。

7は壺約1/3で底部欠損するもほぼ完形に復元できた。外面茶褐色～暗茶褐色、内面明褐色。球形の胴部に極めて短く外方向に直線的に開く頸部をもつ。

8～10は小型丸底壺。8は完形の個体で外面茶褐色～黒色、内面茶褐色。9は完形で内外面とも灰黄褐色を呈す。10は完形で内外面とも淡茶褐色。

11～13は高杯である。11は杯部1/6。内外面とも黄茶褐色を呈す。12は杯部1/8で外面黄茶褐色～茶褐色、内面暗茶褐色。口唇部に丹塗りが残る。13は高杯の脚柱部で内外面とも淡橙色を呈す。タテハケ後横方向ミガキ、2方向に円孔を有する精製土器である。

14～17は鉢で、14は完形。外面灰黄褐色～黒色、内面淡茶褐色。15は口縁から胴部約1/3で内外面とも黄茶褐色～橙褐色。16は口縁から胴部約1/6で胎土に金雲母目立ち、口縁下で強く屈曲



第30図 4・5号竪穴住居跡出土土器実測図（1～6・26は1/4、他は1/3）

し、明瞭な段を有する。17は深鉢で底部欠損するもほぼ完形に復元。外面灰黄褐色～茶褐色、内面茶褐色。外面ハケメ後全面ミガキ。緩やかに立ち上がり端部近くで外反し、口唇部は外を向く。

18～23は小型器台。18・19は杯部片、20～23は脚部片である。

24は鼓形器台。約1/4で完形に復元。内外面とも灰黄褐色～灰色を呈す。

25は蛸壺の底部。内外面とも灰黄褐色～暗茶褐色。(森井)

5号竪穴住居跡 (図版13、第31図)

1区南西で検出した。4号竪穴住居跡に北東隅を切られ、中央を基礎により攪乱されており、残りは良好とは言えない。北西に10cm程度の高まりがあるが、攪乱等でベット状遺構と断定できる状況ではない。残存長で南北4.2m、東西5.0m、深さ0.15～0.35mを測る。

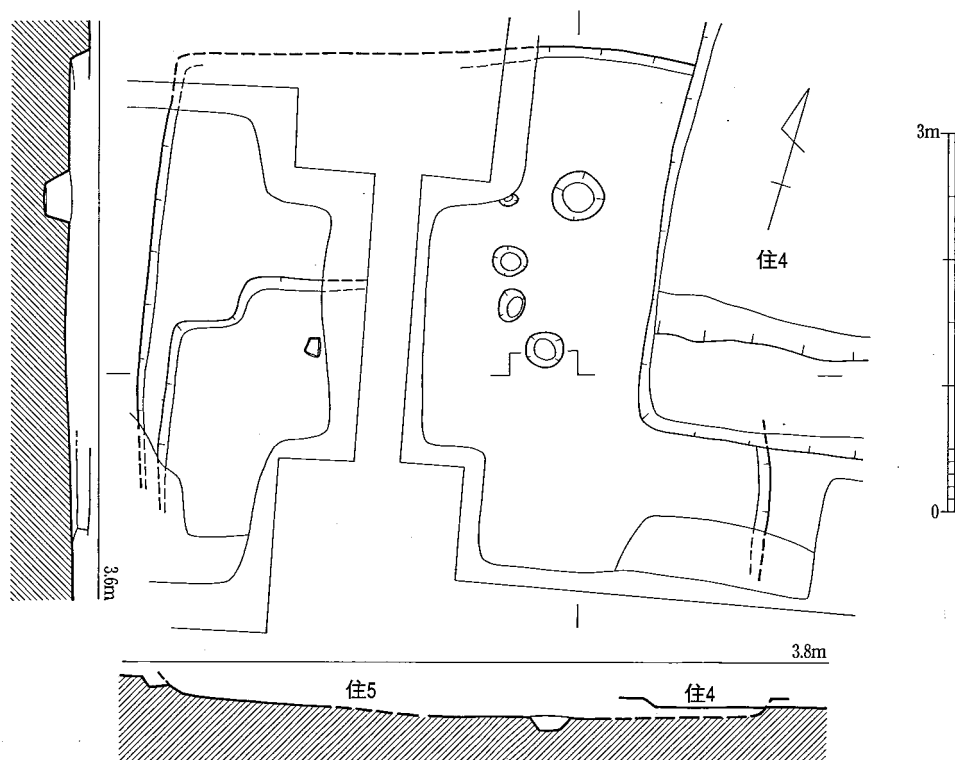
出土土器 (第30図26・27) 26は甕で口縁から肩部約1/6。黄褐色と灰褐色がむらになっている。27は椀。約2/3で完形に復元された。(森井)

6号竪穴住居跡 (図版13、第32図)

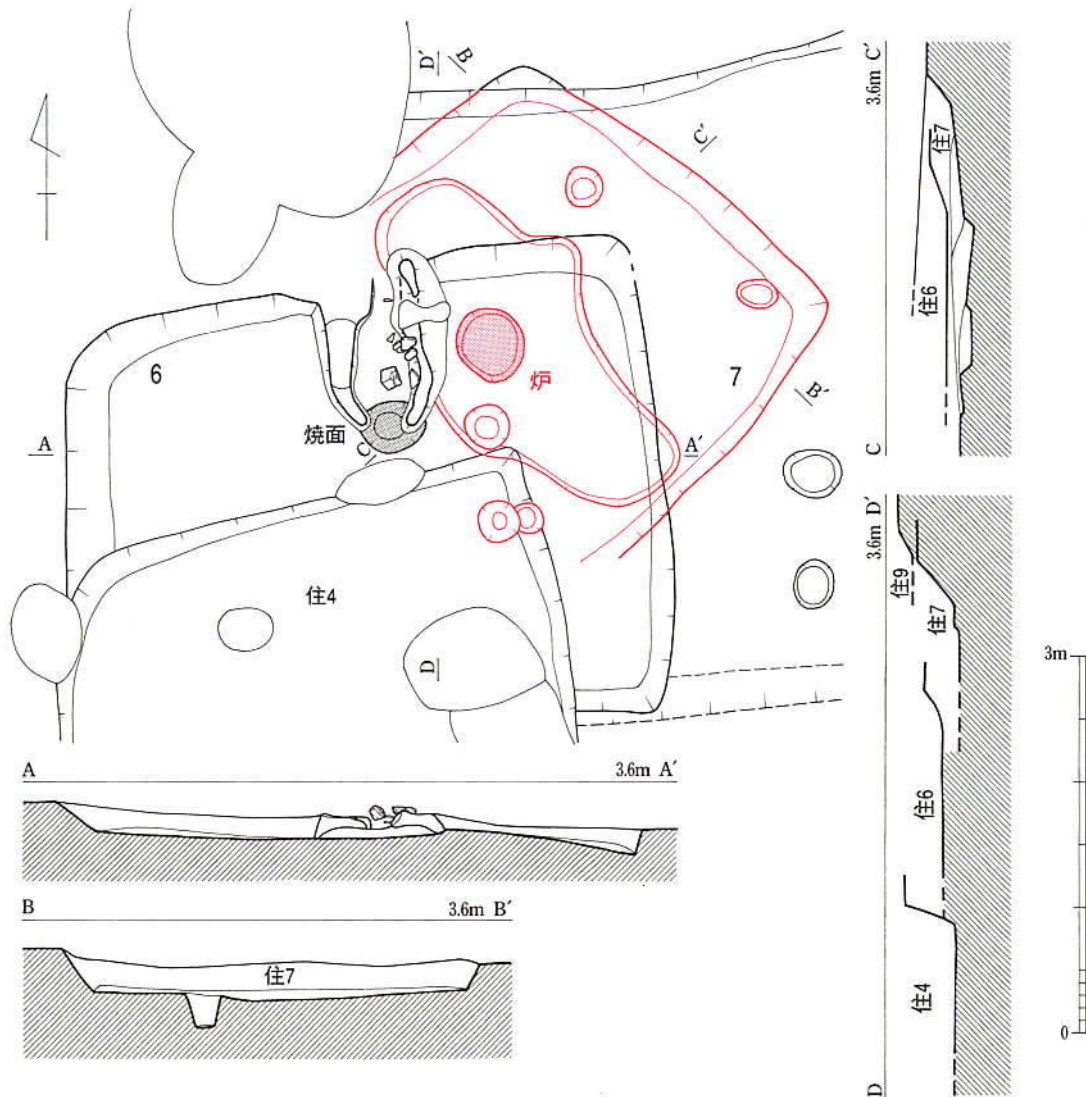
1区で最初に検出したカマドを付す住居跡である。北側を近世の土坑により攪乱されており若干変形している。7・9号竪穴住居跡に後出するが、4号竪穴住居跡に先行する。南北3.8m東西4.7mを測る。土器の他に石器 (第246図11) が出土。

カマド (図版14、第33図) カマドは北壁中央に沿って構築されている。他のカマドに比べて袖部が硬質になっており、高温を受けたことが解る。近世の攪乱を受け袖部の残りは悪い。煙道はやや外に突出する。

出土土器 (第34図) 1は壺か。内外面ともに暗黄茶褐色を呈す。2は短頸壺。内外面ともに茶褐色を呈し、扁平で球形の胴部に短く緩やかに外反する頸部を付す。3～5は小型丸底壺。3は内外面とも茶褐色を呈し、4は内外面とも淡黄褐色。5はミニチュアの小型丸底壺であり、内外面とも



第31図 5号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第32図 6・7号竪穴住居跡実測図 (1/60)

暗赤褐色を呈す。小型だが丁寧な調整を施す。

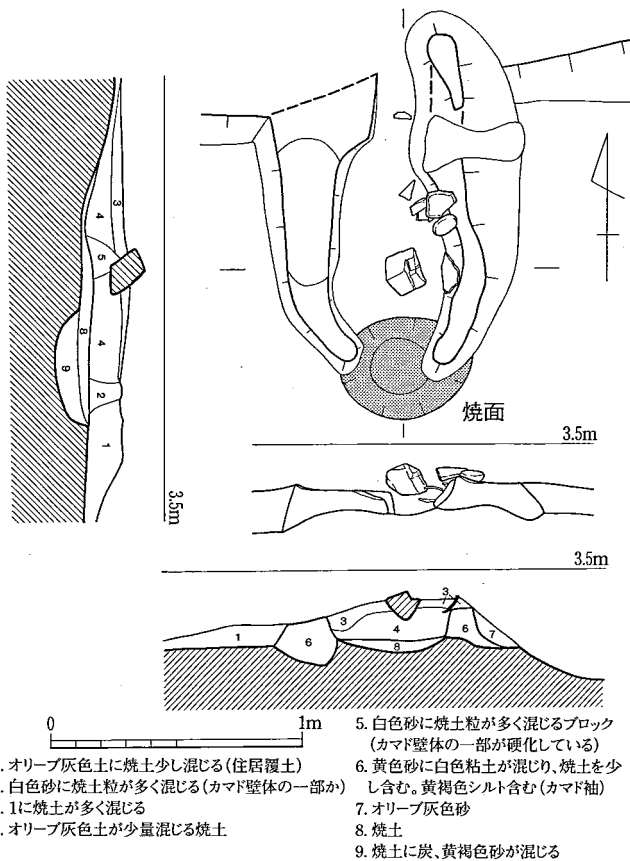
6～20はいずれも甕。6は内外面とも淡黄褐色を呈する在地系の甕か。7は内外面とも橙褐色。突帯を付し、工具による×状の刻目を有す。8は内外面とも暗黄茶褐色～橙褐色。9は外面灰黄褐色～黒色、内面灰黄褐色。10は外面黄茶褐色、内面黄茶褐色。11は内外面とも黄茶褐色を呈する。12は外面黄橙色、内面灰黄褐色。13は内外面とも乳白色。14は外面灰黄褐色～黒色、内面灰黄褐色。15は内外面とも黄橙色。16は内外面とも灰黄褐色。17は内外面とも灰黄褐色。18は内外面とも黄茶褐色～黒色。19は内外面とも茶褐色。20は外面灰黄褐色～黒色、内面灰黄褐色。

21は甕もしくは鉢か。外面黄褐色、内面黄褐色～黒色。内面工具静止痕が顕著に残る

22・23は鉢。22は内外面とも黄褐色。23は内外面とも淡黄褐色～橙褐色を呈し、口唇部を上方につまみあげる。24は椀で外面淡黄褐色～灰黄褐色、内面淡黄褐色を呈す。

25・26は小型器台。25は内外面とも黄茶褐色。26は内外面とも黄褐色～黄橙色を呈す。

27は半島系の鉢で内外面とも黄褐色。短く屈曲する口縁部を有し、胴部は格子目タタキの後沈線を巡らす。28は半島系の壺か。頸部片で暗灰褐色。29は鉢で内外面とも茶褐色を呈す。30は半島系



第33図 6号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

土器片で内外面黄褐色。格子目タタキ後横方向の沈線。27と同一個体か。(森井)

7号竪穴住居 (図版14、第32図)

6・9号竪穴住居跡下に完全に埋没された住居で、他の住居検出段階では全く存在が解らなかった住居跡である。9号竪穴住居跡をほぼ完掘した状態で検出されたために遺物の一部は混入している可能性がある。1区南西で検出されたこの住居とも軸線が異なっており、時期的な差があるか。南北方向に3.3mを測り、床面中央付近に炉跡と考えられる径0.6mのピットを検出した。土器の他に砥石 (第242図12) が出土。

出土土器 (第35図1・2) いずれも甕破片である。1は胴部片で内外面とも赤茶褐色を呈する半島系土器。上方粗いタタキ、下方ヨコナデ。焼成は良好で硬質である。も甕胴部片で、内外面とも灰褐色を呈する半島系土器。外面タタキ。(森井)

8号竪穴住居跡 (図版15、第24図)

1号竪穴住居、2号竪穴住居跡に切られると考えたものである。深さは25cm程で明確な地山面が検出でき、これを床面と考えた。したがって、41号土坑とは切合関係になく、住居であることはほぼ間違いなからう。ただ、平面プランは東壁、西壁が平行しない歪な形となっている。南東壁近くの床面から完形に復元される蛸壺が7点がまとまって出土した。

出土土器 (第35図3~12) 3~5は壺である。3は頸部から直立し、口縁端部近くでわずかに外反するもので、端部を丸く仕上げている。外面はタテハケが残る。4は直立する短い二重口縁をなす小形のものである。5は小形の山陰系二重口縁壺である。

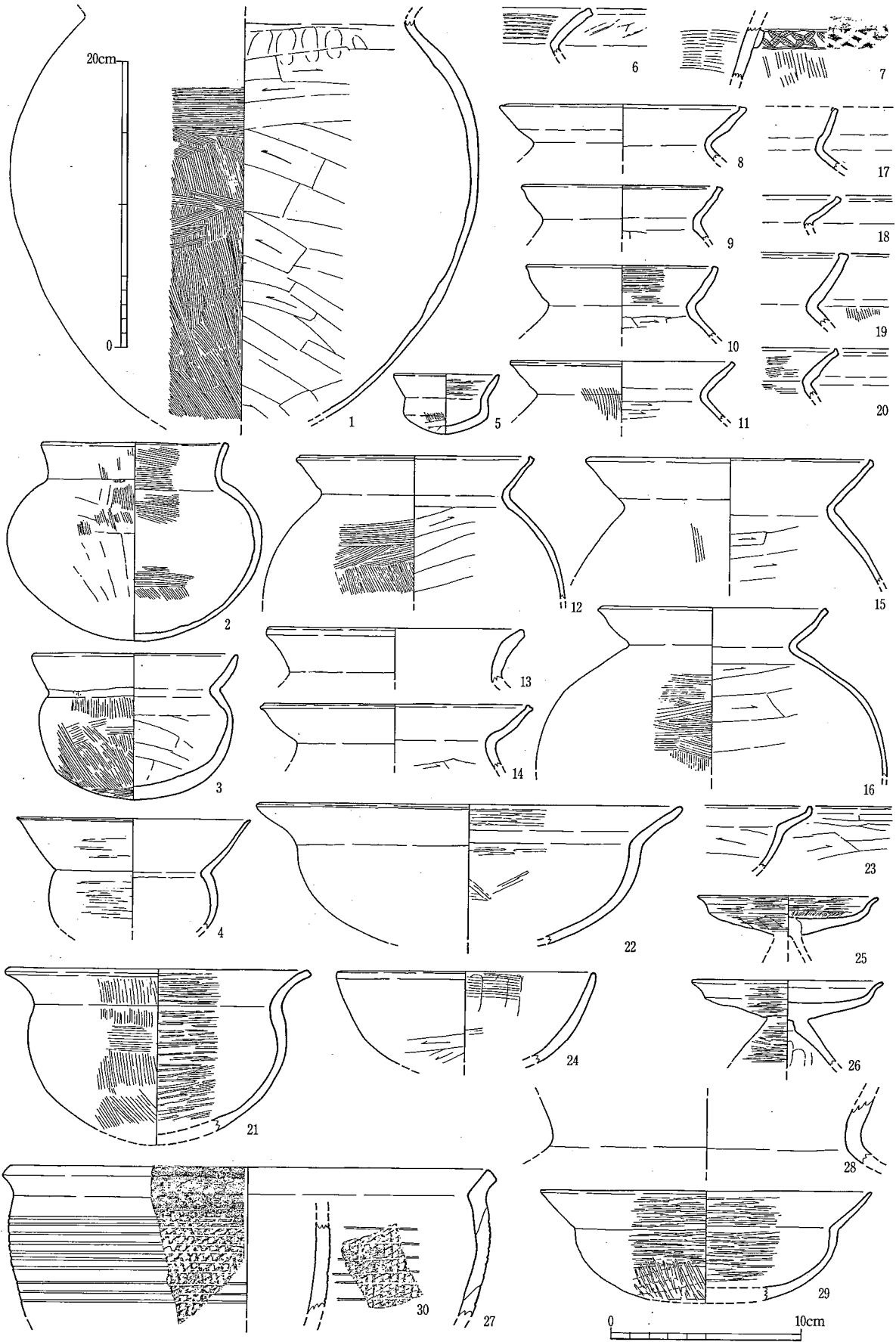
6~12は蛸壺である。いずれも口縁よりやや下に外側から焼成前に紐孔を穿ち、8・9は底部に水抜きの小孔がある。6は底部に雑な調整痕が残り、7は底部に太い線刻を施すとともに、直径0.15cmの貫通する小孔が2孔ある。

蛸壺も含めて淡黄褐色、灰白色を呈するものが多いが、6・7はやや橙褐色を帯びる。(重藤)

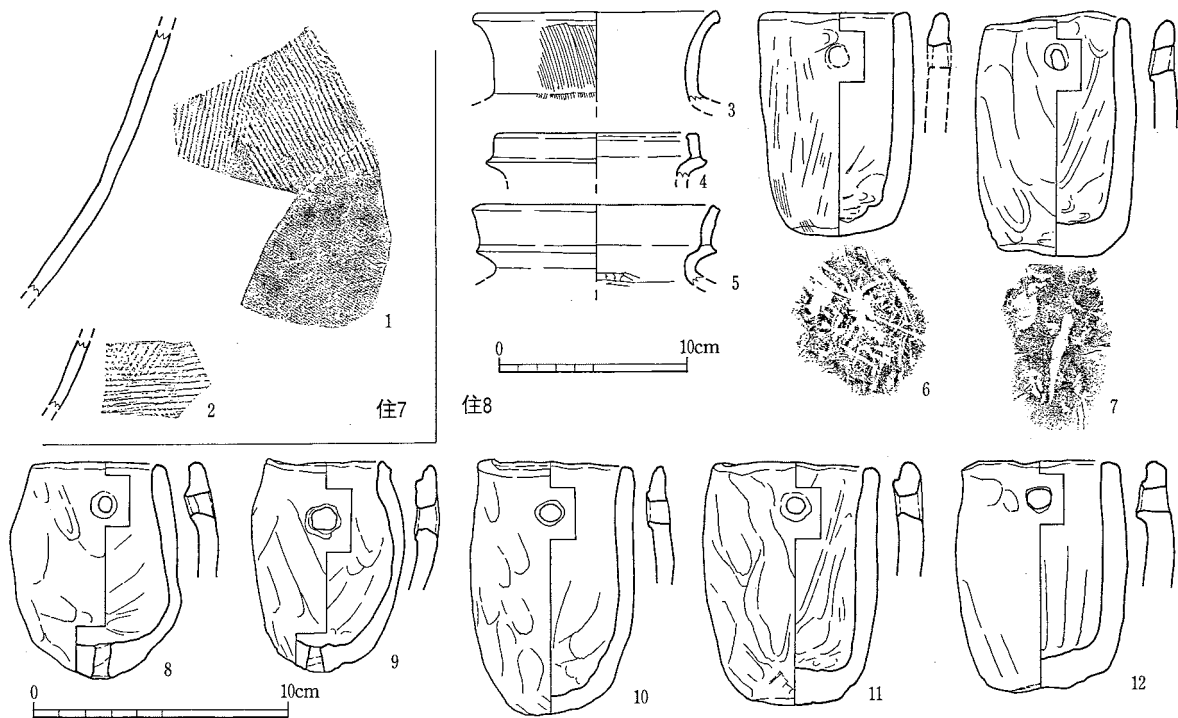
9号竪穴住居跡 (第36図)

1区に位置し、6・21・23・24号竪穴住居跡に切られ一部が検出されるにとどまった。出土遺物の一部は前述の7号住居と多少混入している可能性がある。南北5.2mを測る。

出土土器 (第37図) 1・2は壺である。1は内外面とも黄褐色を呈す。2は内外面とも暗黄褐色



第34図 6号竖穴住居跡出土土器実測図（3～5・21～30は1/3、他は1/4）



第35図 7・8号竪穴住居跡出土土器実測図（3～5は1/4、他は1/3）

を呈し、口径に比して胴部最大径が大きい。3・4は二重口縁壺。3は外面黄褐色、内面橙褐色を呈す。4は内外面とも灰黄褐色を呈し、頸部に綾杉文を施す。5は壺で外面赤褐色、内面黄褐色を呈す。6～8は丸底壺である。6は内外面とも赤褐色を呈し、7は内外面とも黄褐色～暗褐色、8は内外面とも黄褐色を呈す。

9～16は甕である。9は外面黄褐色～黒灰色、内面橙褐色、10は外面黄褐色～灰黄色、内面灰黄色、11は外面黄褐色、内面黄茶褐色を呈し、連続しないへら描きで波状の沈線文を施す。12は内外面とも黄茶褐色、13は外面灰黄褐色～黒色、内面灰黄褐色、14は外面灰黒色～灰色、内面灰黄色、15は内外面とも黄茶褐色を呈す。16は内外面とも黄褐色を呈す。

17～23は鉢である。17は内外面とも橙褐色、18は内外面とも明黄褐色、19は内外面とも橙褐色、20は内外面とも橙褐色、21は内外面とも橙褐色を呈す。22は二重口縁の大型鉢であろう。内外面とも暗灰黄色を呈し、底部は欠損するがおそらく平底を呈する鉢になろう。23は底部片。外面灰黄褐色、内面灰黄褐色～黒色を呈す。24は小型器台で内外面とも黄褐色を呈す。

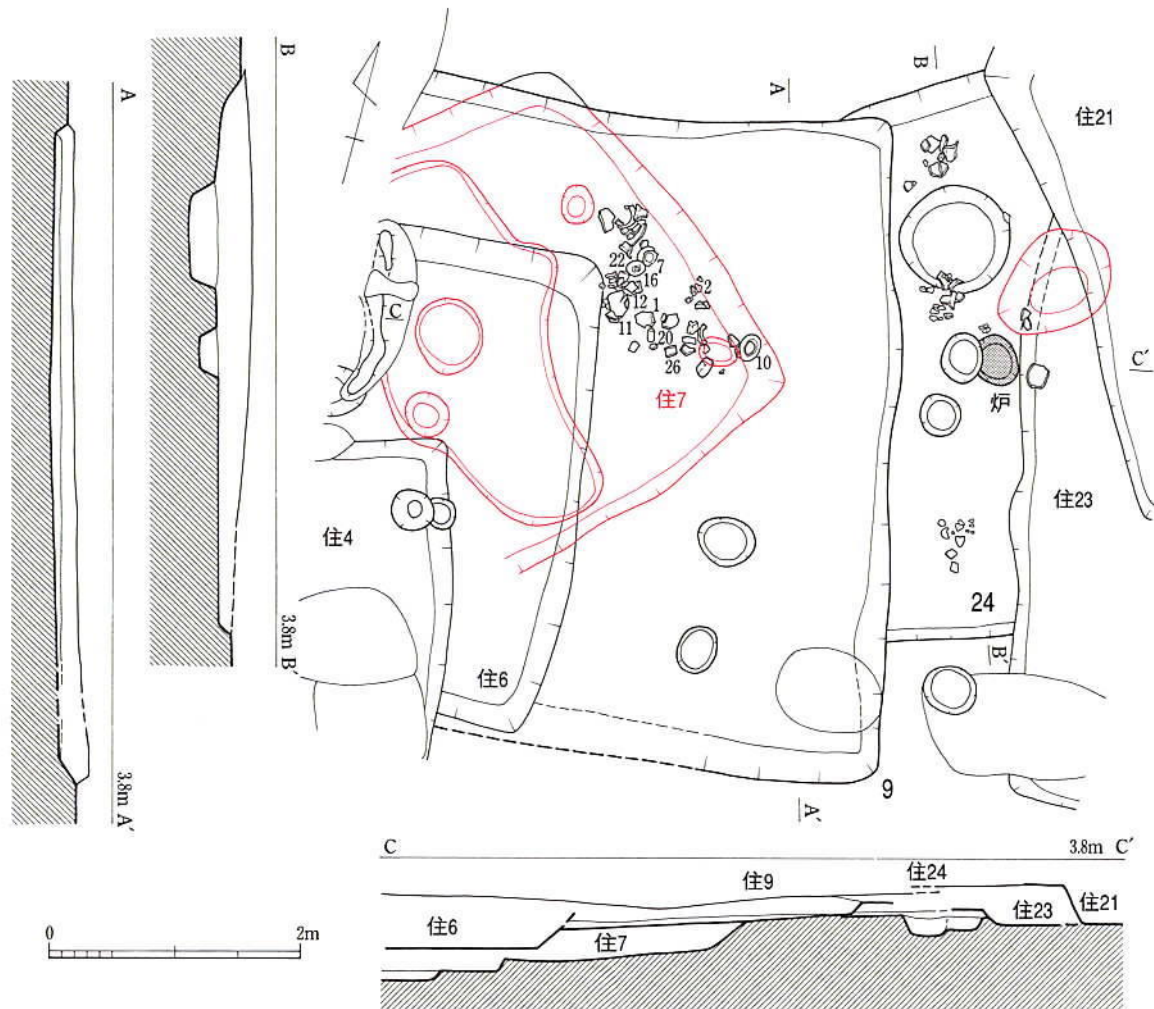
25は甕把手。黄褐色を呈し、全面ナデ。

26は蛸壺底部か。外面黄褐色、内面淡茶褐色。内面に工具の静止痕が残る。（森井）

10号竪穴住居跡（第55図）

1区中央南端で検出された住居跡で22号竪穴住居跡に一部を切られるが、下層にあるため床面は残存していた。12・22号竪穴住居跡と同様に講堂基礎等による攪乱のため南半は確認されていない。東西3.7mを測る。

出土土器（第39図1・2） 1・2は甕である。1は外面乳白色に黒斑、内面淡黄白色。肩部に3～4条の波状文を施す。2は内外面とも乳白色。（森井）



第36図 9・24号竪穴住居跡実測図 (1/60)

12号竪穴住居跡 (図版15、第38図)

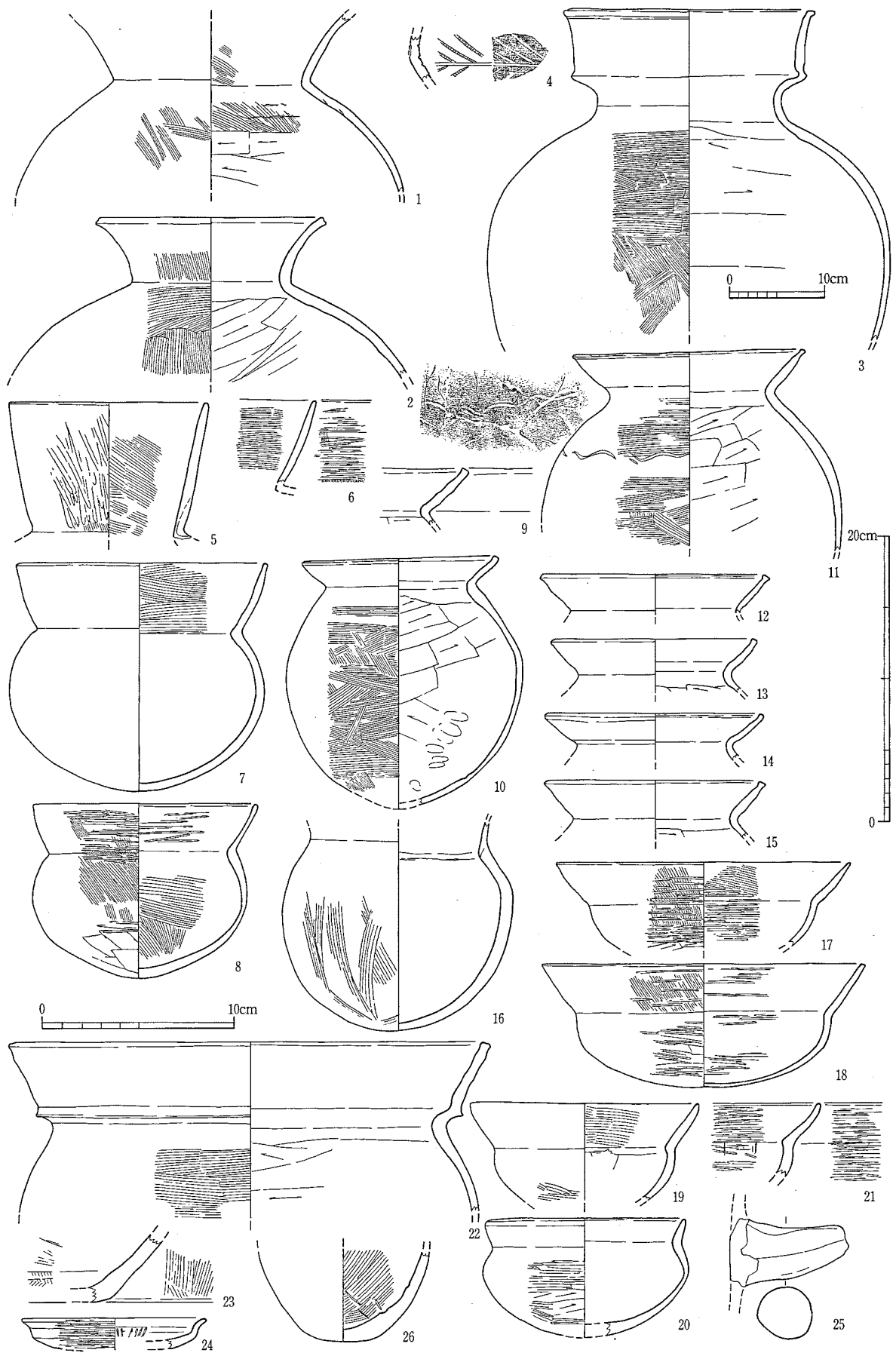
南半は講堂基礎及び現代の攪乱により攪乱され確認されていない。現状で東西3.6mを測る比較的小型の住居だが、南北方向に長い長方形住居の可能性もあろう。かなり攪乱を受けているために本住居に伴うピット等は確認されていない。

出土土器 (第39図3～5) 3は壺口縁で内外面とも淡黄褐色。4は甕口縁で内外面とも灰白色。5は蛸壺で円孔を有す。(森井)

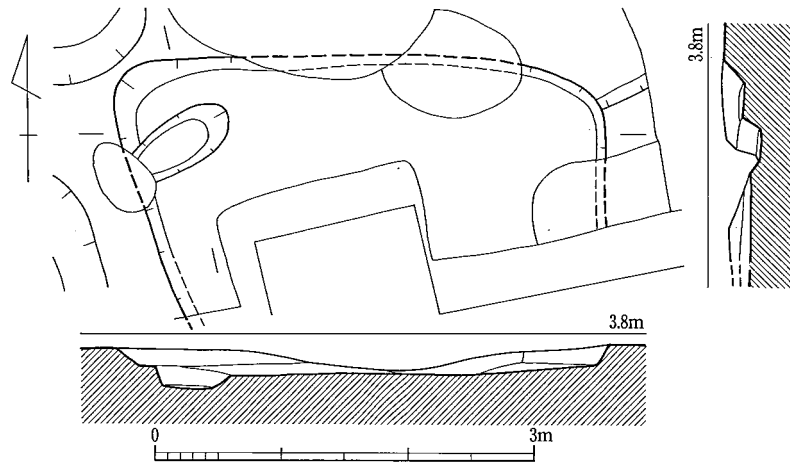
13号竪穴住居跡 (図版15、第40図)

1区東端付近に位置する。151号竪穴住居跡とは調査段階が別でありつながらないが、同一の住居である可能性もある。その場合は東西で6.6mを越える大形住居となる。152号住居跡に西北隅を切られる。南北で4.8mを測る。中央より西側に寄った位置で0.4～0.5mのやや楕円形の炉跡と考えられるピットを検出している。

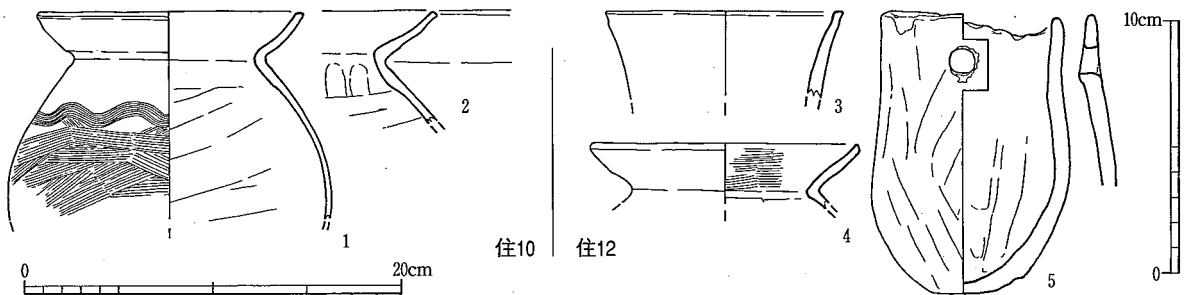
出土土器 (第41図) 1・2は壺。1は内外面とも明茶褐色を呈す。2は内外面とも黄褐色～淡橙色を呈し、内傾気味に直立し、端部が水平となる口縁を有する。口唇部に刻み目を有する。3・4は二重口縁壺。3は内外面とも淡茶褐色、4は内外面とも黄褐色を呈し、口頸部に丹塗りが残る。



第37図 9号竖穴住居跡出土土器実測図（3は1/6、5～8・16～21・24～26は1/3、他は1/4）



第38図 12号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第39図 10・12号竪穴住居跡出土土器実測図 (3・5は1/3、他は1/4)

5・6は小型丸底壺で内外面とも淡黄褐色、6は内外面とも赤褐色を呈す。

7～10は甕である。

11～17は高杯である。11は内外面とも明赤褐色。外面ハケメ調整後全面ミガキ、内面もミガキで仕上げる精製土器。円孔2カ所。12はほぼ完形の有段高杯である。外面暗褐色、内面明褐色外面ハケメ調整後全面ミガキ、内面もミガキで仕上げる精製土器。各端部もシャープに仕上げる。14は内外面とも明赤褐色。15は淡黄褐色を呈す。

18は鉢で内外面とも明赤褐色～黄褐色を呈す。

19～21は碗である。19は外面淡黄褐色、内面明赤褐色、20は赤褐色、21は乳白色を呈す。

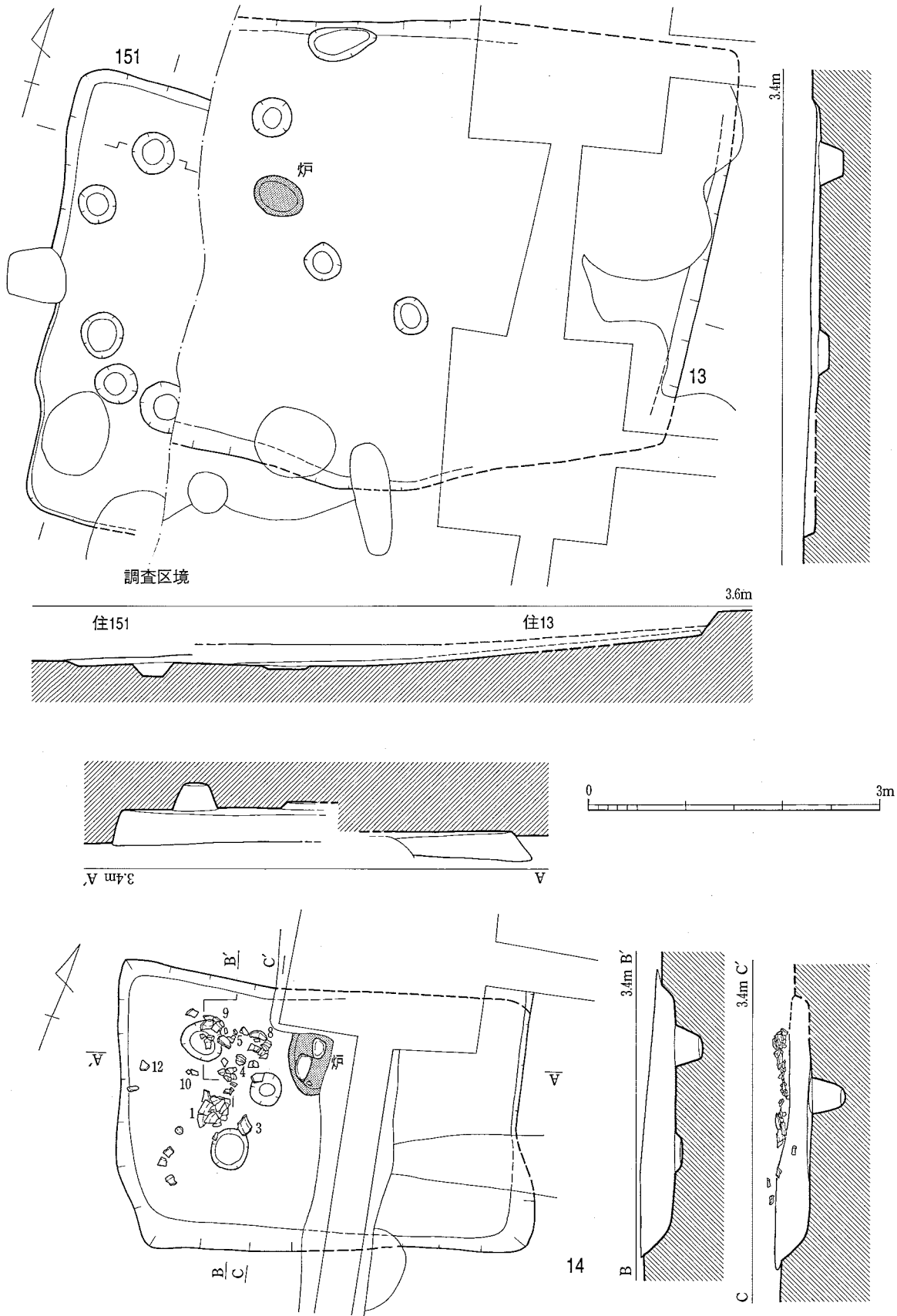
22～24は碗形高杯か。22は内外面とも赤褐色を呈す。23は橙色、24は赤褐色を呈する。25は小型器台である。

26・27は蛸壺である。(森井)

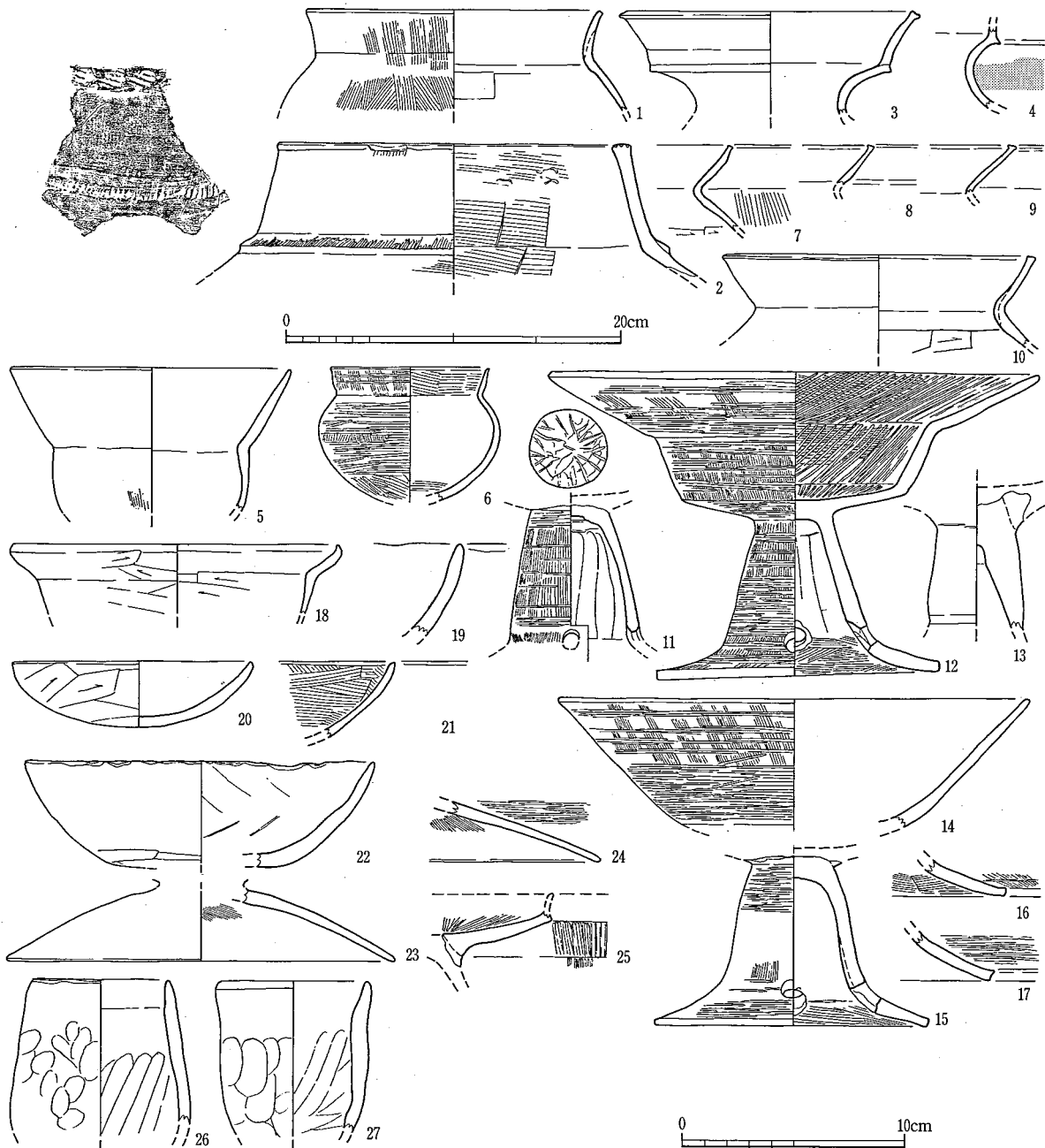
14号竪穴住居跡 (図版16、第40図)

1区北西部で検出された竪穴住居跡で、現状では最も北西に位置している。南北2.9m、東西4.1m、深さ0.3mを測る。中央よりやや北に寄った位置で炉跡と考えられるピットを検出している。

出土土器 (第42図) 1は壺。内外面とも赤褐色を呈し、肩部に1状の沈線、その下に列点文を付す。2～5は二重口縁壺。2は内外面とも黄灰褐色を呈す。3は内外面とも灰黄褐色を呈し、肩部



第40図 13・14・151号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第41図 13号竪穴住居跡出土土器実測図（1～4・7～10は1/4、他は1/3）

に丹塗りが残る。4は内外面とも灰黄褐色を呈し、肩部に波状文を付す。5は内外面とも灰白色で外面には黒班が残る。6は小型丸底壺。外面橙褐色～黒色、内面橙褐色を呈す。

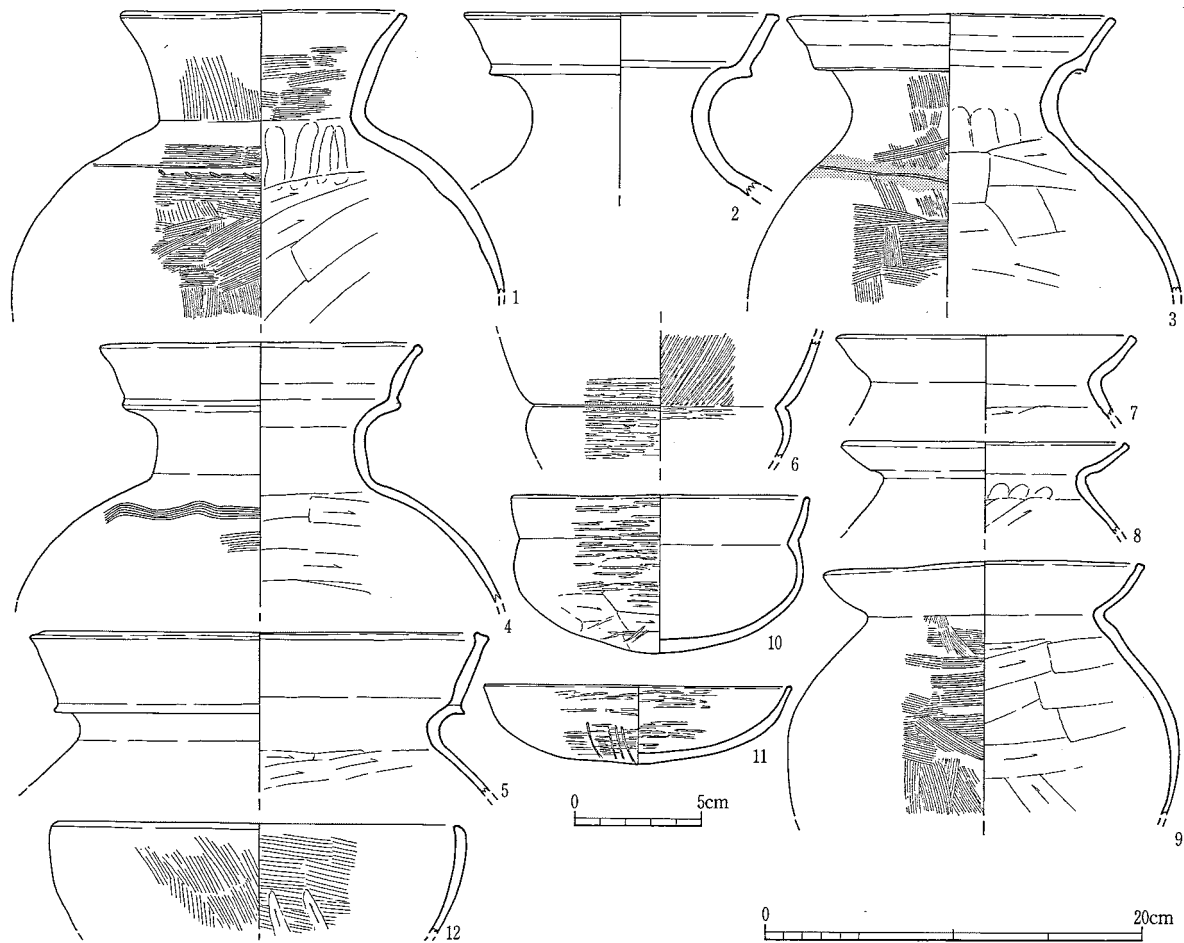
7～9は甕。7は外面灰黄褐色～黒色、内面淡橙褐色。8は外面灰黄色～黒色、内面灰黄色を呈し、口頸部は強いナデで緩やかな段を呈する。9は内外面とも黄褐色を呈す。

10は小型丸底壺で、内外面とも橙褐色を呈す。

11は椀で内外面とも橙褐色、12は鉢で内外面とも淡茶褐色を呈す。（森井）

15号竪穴住居跡（図版16・17、第43図）

1区中央部、41号土坑の北東で検出したもので、16号竪穴住居跡を切っている。校舎の基礎に中

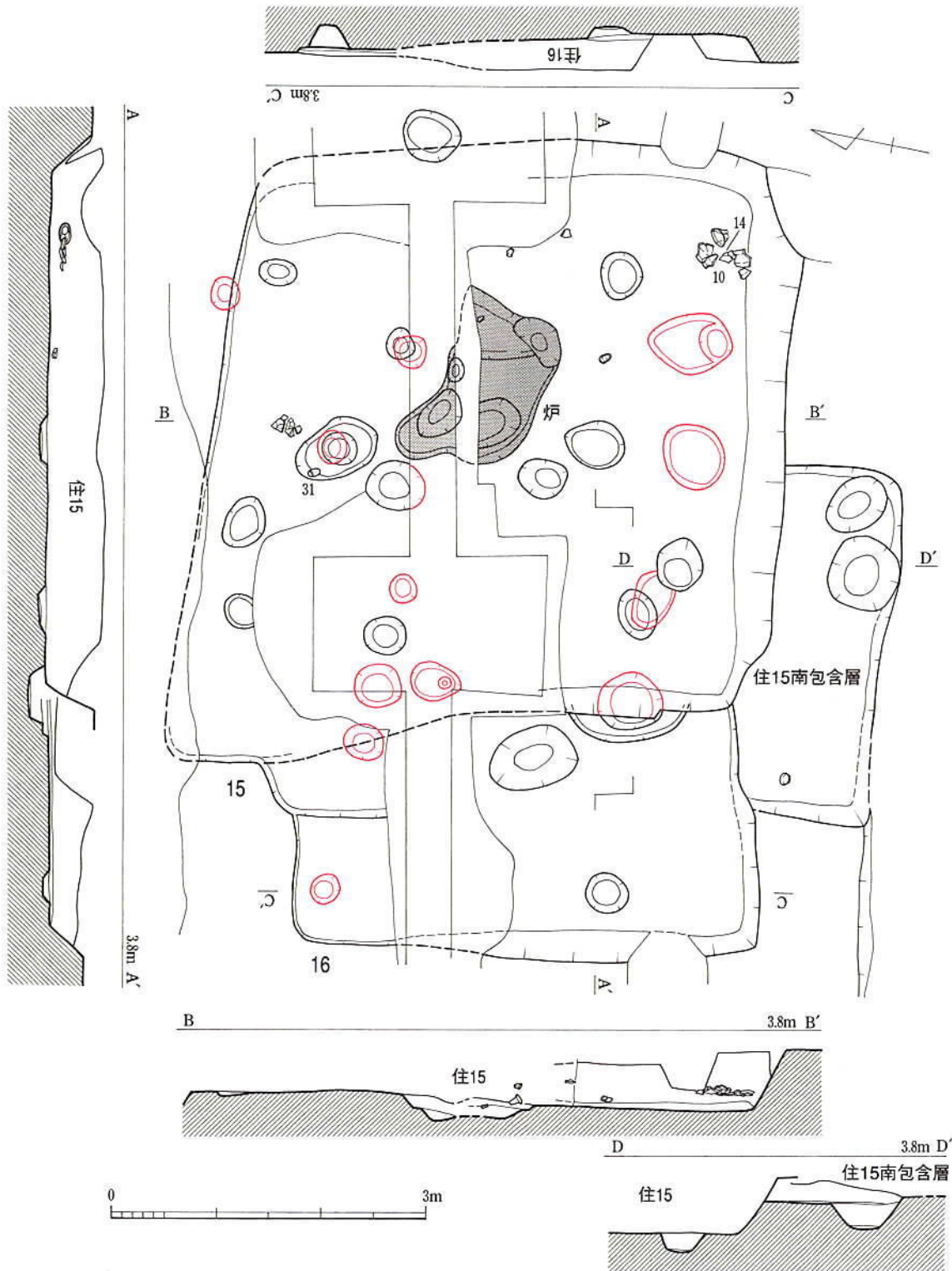


第42図 14号竪穴住居跡出土土器実測図（6・10・11は1/3、他は1/4）

央を壊されているが、ほぼ東西、南北に主軸をおく正方形を呈するものと思われる。南側の床面を誤って下げすぎたために、床面高が北半より10cm程低くなっている。床面中央部やや東寄りでは長さ1.5m、幅1.0mの炉を検出したが、他住居跡での例と比較すると大きいため何度か炉を作り替えた可能性が考えられる。床面では多数のピットを検出したが支柱穴と考えられるものはない。16号住居跡との切合関係は確実であり、出土遺物の一括性も比較的高いものと思われる。中でも10・14は比較的床面に近いと想定される位置から出土したもので、これが本住居の廃絶時期を示す確実な土器であろう。土器の他に鉄器（第237図3・4）、砥石（第246図14）が出土。

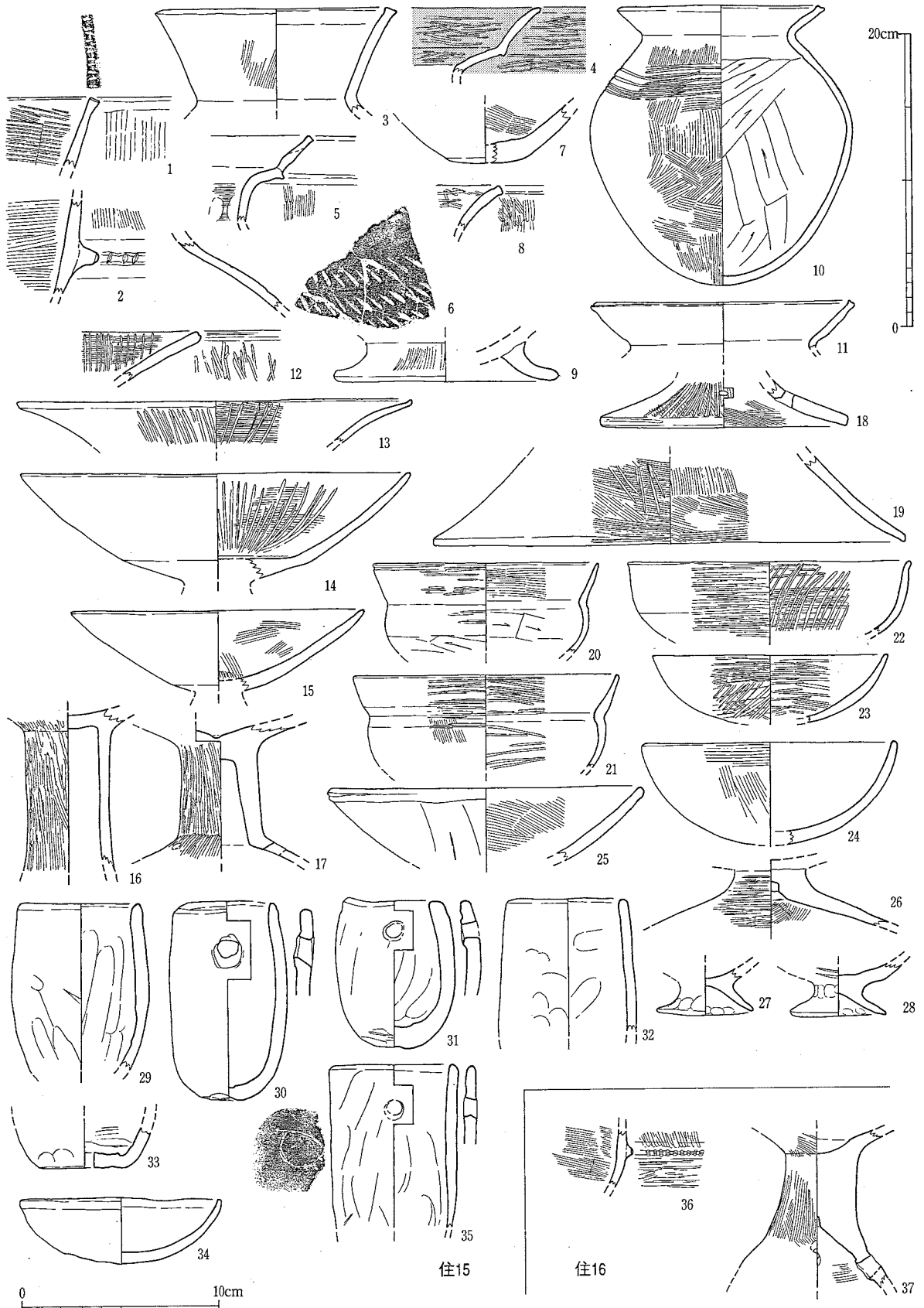
出土土器（第44図1～35） 1～33が本住居に伴うもので、34は15号住居跡南の包含層から出土し、35は15・16号住居跡の上層から出土したものである。

1は恐らく在地系の直口壺で、内外面を粗いハケメで仕上げ、口縁部上面にハケメ原体による密な刻み目を施す。2は壺胴部の突体部分で、刻み目を施す。3は畿内系の直口壺口縁部である。4は内外にミガキを施した後丹塗りした口縁部で、畿内系二重口縁壺であろう。5は山陰系の二重口縁壺で、肩部にヘラによる刻み目を3段にわたって巡らす6は恐らく山陰系二重口縁壺の肩部と考えられる。7はややレンズ状底をなすもので壺底部か。8は壺口縁部で内面に横ミガキ、外面に縦ミガキを施す。9は脚片で在地系の小形壺に伴うものであろう。1は黄褐色、4は明褐色、8・9は橙褐色を呈し、他は灰黄褐色～淡黄褐色。



第43図 15・16号竪穴住居跡実測図 (1/60)

10はほぼ完形に復元できる甕である。口縁部は上部がやや内湾し、端部は外傾する面をなす。肩部に5条からなる櫛描平行線文を巡らしている。11は直線的に外傾する甕口縁部で、端部は外傾する面をなす。いずれも灰黄褐色を呈す。



第44図 15・16号竖穴住居跡出土土器実測図（1～8・10・11は1/4、他は1/3）

12～19は高杯片でいずれも黄橙色、橙褐色を呈する。12は在地系高杯の口縁部で、内面はヨコハケの後暗文風の縦ミガキを施し、外面は縦ミガキである。13は内外面の縦ミガキから在地系高杯と考えたが、やや薄い作りである。14の外面は摩滅している。16・17は脚柱部破片で、16は在地系のもの。17は裾部に3ヶ所、穿孔がある。18は脚裾部片で裾部に1ヶ所穿孔が施される。19は大きく開いた脚裾部で、ハケメで仕上げた部分が多いが、外面に縦ミガキが一部残る。

20・21は外反口縁の鉢である。いずれも外面をハケメ・ヘラケズリ後に横ミガキする。内面は20が口縁部にヨコハケ、胴部に工具による擦過を施し、21が部分的にミガキである。22～25は直口の鉢である。22は口縁部を小さく外反させ、内面に暗文風の縦ミガキを施している。23は内外横ミガキする。24・25はミガキを施さず、24は外面ハケメ、内面ナデ、25は外面ヘラケズリ後ナデ、内面ハケメで仕上げている。26は外面にミガキを施す脚付鉢脚部で、内面はハケメが残る。20～23は橙褐色、24は灰黄褐色、25は外面橙褐色、内面灰黄褐色、26は茶褐色を呈する。

27・28は褐色を呈し、指頭圧痕を良く残す脚部片で、恐らく製塩土器と思われる。28は胴部外面にタタキ痕がわずかに残る。

29～33は蛸壺で、30・31は口縁下に焼成前穿孔の紐孔が、33は底部に水抜孔がある。

34は直口の鉢で内外ともナデで仕上げ、灰黄色を呈す。

35は蛸壺口縁部片で、外面に円形の線刻が見られる。(重藤)

16号竪穴住居跡 (図版17、第43図)

東側を15号竪穴住居跡に大きく切られ、校舎基礎が中央を壊している。そのため平面形の全体を把握することができないが、15号住居跡と同様にほぼ東西、南北に主軸をおくものと考えられる。床面は掘り過ぎにより南側が低くなっており、北側が本来の高さであろう。床面で2基のピットを検出しているが炉跡はなく、恐らく15号住居跡により失われたものと考えられる。

出土土器 (第44図36・37) 36は突帯貼付した壺と思われる胴部片で、突帯上に密な刻み目を施す。37は高杯脚部片。脚柱部はほとんど中実で、杯底は凹み、脚内面上部に深さ1cm余りの孔がある。粘土のまだ軟らかいうちに4ヶ所、外側から穿孔をほどこす。外面はハケメで仕上げ。(重藤)

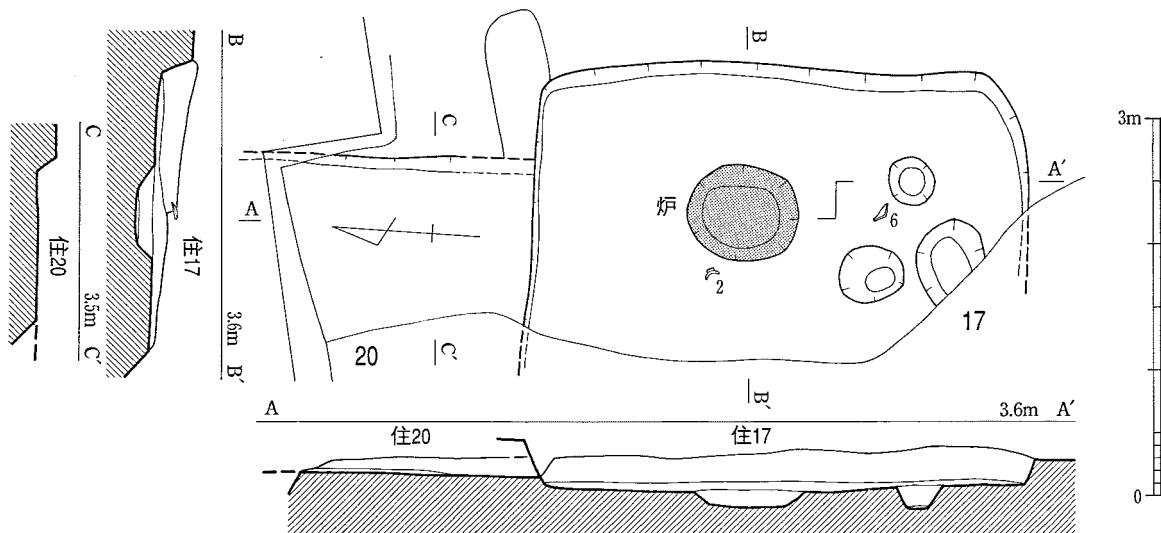
17号竪穴住居跡 (図版17、第45図)

16号竪穴住居跡の西南に位置し、近世遺構により西部が失われている。20号竪穴住居跡を切ると考えたが、両者の切合いが想定される位置にちょうど近世の溝がかかっており、やや心許ない。主軸は隣接する15・16号住居跡と同様にほぼ南北方向である。床面では南部に3基のピットが検出され、中央東寄りに直径0.9m程の炉跡が検出された。

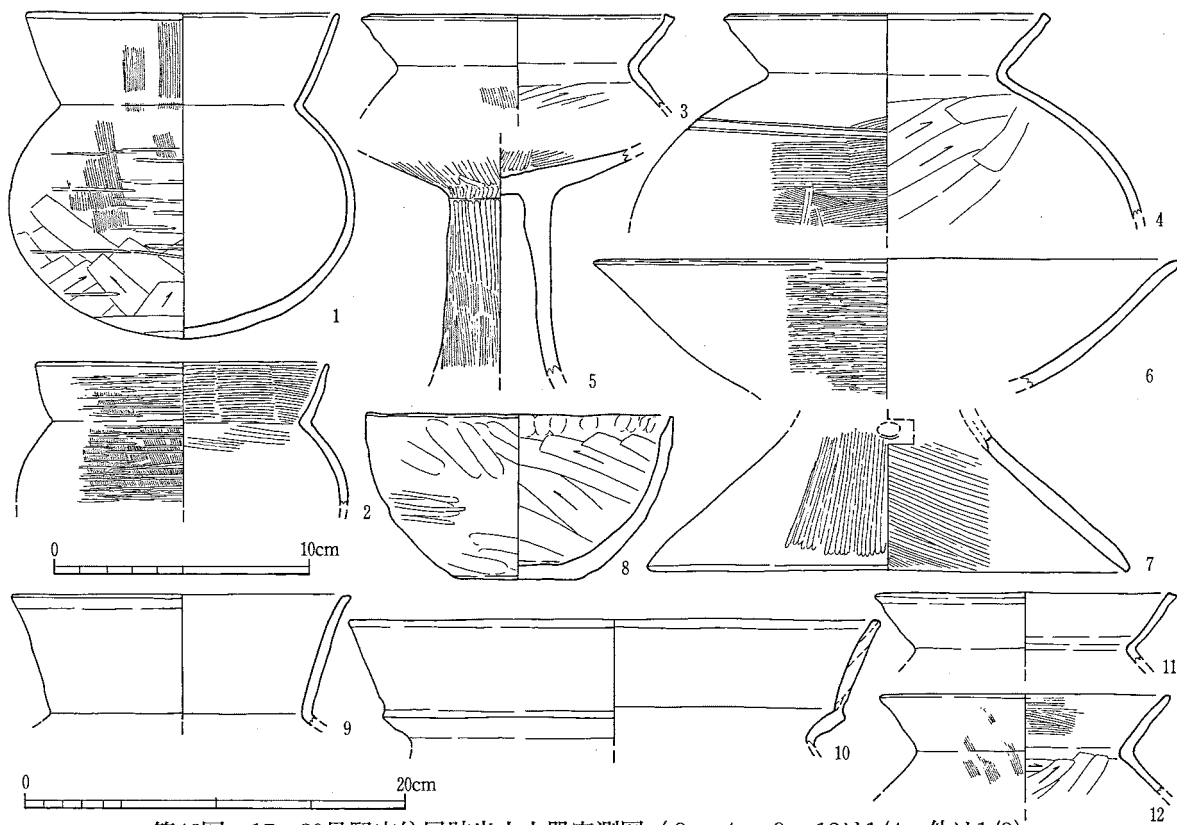
出土土器 (第46図) 1～8が本住居跡に伴うもので、他は上層から出土し20号住居跡と本住居跡のいずれに伴うか不明のものである。

1・2は小形丸底壺である。1は外面の胴部から口縁部にかけてタテハケ、底部はヘラケズリの後にまばらに横ミガキを施している。内面は摩滅が顕著である。淡黄白色を呈す。2外面はハケメの後、横ミガキを施し、口縁部内面はヨコハケである。白橙色を呈す。

3・4は甕である。いずれも直線的に外傾する口縁部をなしている。3は口縁端部を内にわずかに拡張させ、4は肩部に2条の沈線を巡らしている。3は黄褐色、4は白黄褐色を呈す。



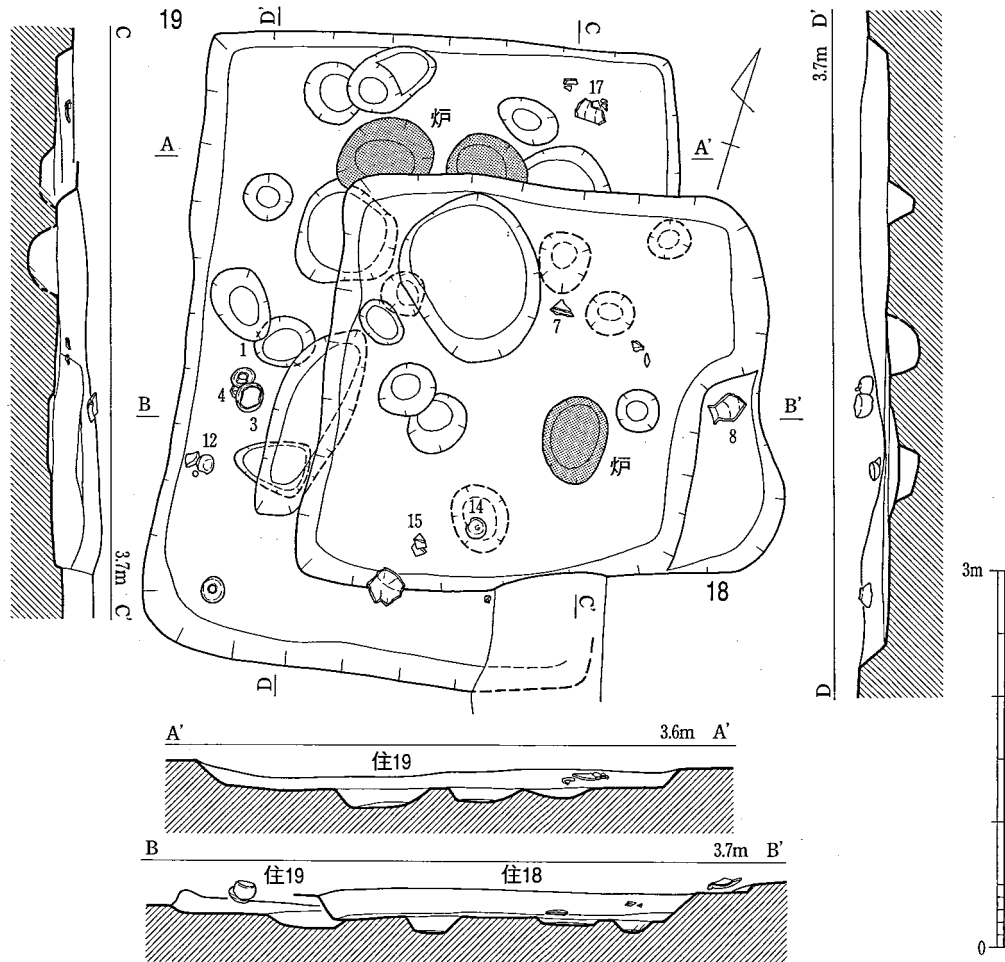
第45図 17・20号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第46図 17・20号竪穴住居跡出土土器実測図 (3・4・9~12は1/4、他は1/3)

5は在地系高杯脚部片で、外面と杯見込みはミガキを施している。6は高杯口縁部で外面には横ミガキを施し、内面は摩滅している。7は脚裾部片で外面縦ミガキ、内面斜めハケメで仕上げる。1ヶ所にやや乾燥が進んだ段階で外から穿ったと思われる穿孔が残る。5は灰黄褐色を呈し、6・7は橙褐色を呈す。

8は平底で直口の鉢である。外面はナデ、内面はケズリで仕上げる。外面の一部に横ミガキを施



第47図 18・19号竪穴住居跡実測図 (1/60)

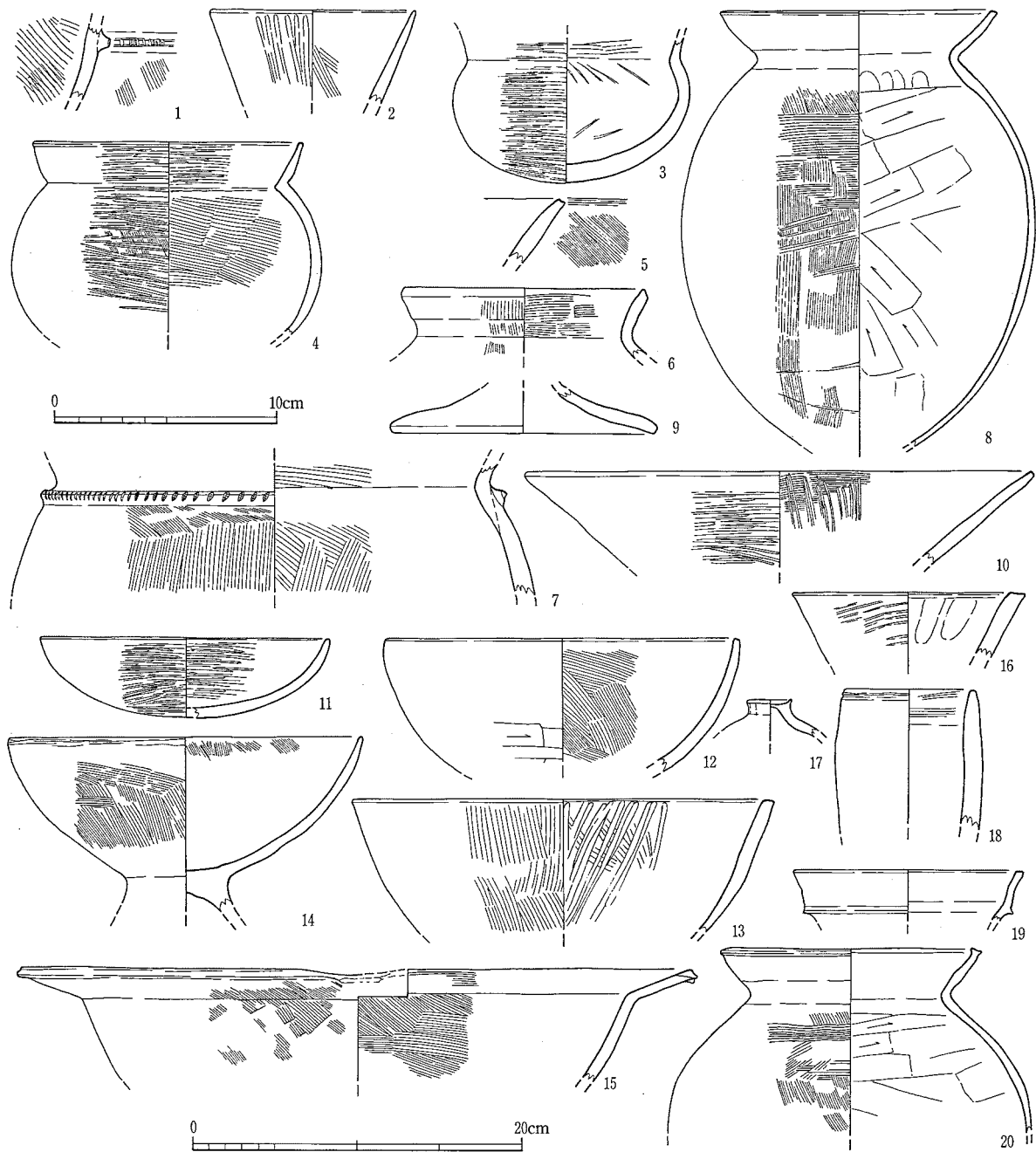
すが、全体的に手捏ね的な作りの粗製品である。

9は畿内系の直口壺で、10は山陰系二重口縁壺口縁部。いずれも黄白色。11は黄褐色を呈する布留系甕。12は灰黄褐色を呈し、口縁部の横ナデが顕著でない甕口縁部。口縁外面に煤。(重藤)

18号竪穴住居跡 (図版18、第47図)

17号竪穴住居跡の南西に位置し、19号竪穴住居跡を切ると考え発掘した。1辺3m余りの比較的小形正方形の住居跡で、南西寄りにある暗褐色細砂を埋土とする浅い凹みが炉と考えている。南西部隅にテラスが有り、ベット状遺構を付設した可能性も考えられる。ただ、この段は19号竪穴住居跡の西壁延長線とも一致するので平面形に問題が残る。釘(第238図36)が出土したが混入か。

出土土器 (第48図) 1は恐らく在地系二重口縁壺の胴部で、断面台形の突帯を貼付する。突帯頂部には密な刻み目を施している。2は中形壺口縁部で、外面には粗い縦ミガキを施す。3・4は小形丸底壺である。3は外面の口縁部まで横ミガキ、内面には微かにミガキを施す。胴部内面は工具のあたりと思われる線条がみえる。4は外面~口縁内面を横ミガキし、胴部内面は斜め方向のハケメを施す。5は壺の口縁部として図示したが、あるいは鉢か。口縁端部は凹み、頸部に向かって厚みを増すのが特徴的である。3は赤褐色、1は黄橙色、他は橙褐色を呈す。

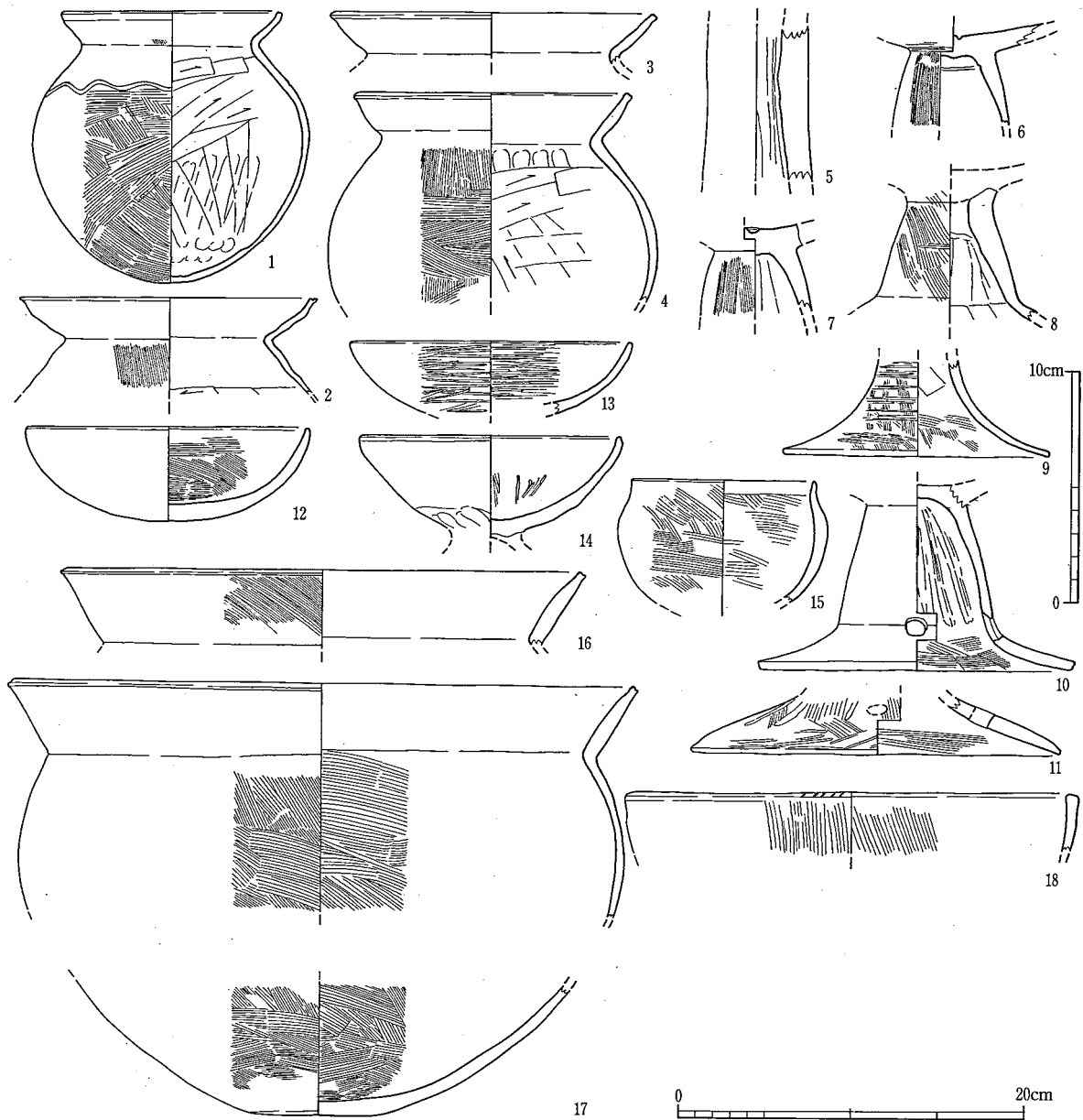


第48図 18号竪穴住居跡出土土器実測図（5～8・15・19・20は1/4、他は1/3）

6は中形の在地系甕口縁部で、丸みを帯びて外反し、端部は面をなす。7は頸部に突帯をもつ在
地系のやや大形の甕である。突帯は断面三角形で、頂部にハケメ工具による刻み目を施している。
8は布留系甕で、口縁端部は水平に近い面をなす。頸部内面にはヘラケズリに先行するナデ上げの
痕跡が残る。7は明褐色を呈し、6・8は白黄褐色～灰黄褐色である。

9は高杯脚裾、10は高杯口縁部でいずれも橙褐色を呈す。9にはミガキは見えず、10の内面はハ
ケメの後縦ミガキを施す。

11～13は直口鉢である。12は外面下半ヘラケズリ、内面ハケメを施し、ミガキは観察できない。
13は外面タテハケ、内面はハケメの後、太いミガキを施す。14は脚付直口鉢で内面はナデ、外面ハ



第49図 19号竪穴住居跡出土土器実測図（5～15は1/3、他は1/4）

ケメ仕上げで、ミガキは見えない。15は外反口縁の鉢で内外ともハケメで仕上げる。口縁部は片口をなすものと思われる。11・12は橙褐色、13・14は白黄褐色、15は褐色を呈す。

16は支脚で、丁寧な横ナデの存在から口縁部と考えた。外面にタタキ痕が残り、橙褐色である。

17は小形の蓋形の器形をなす手捏ね土器である。暗赤褐色を呈する。18は蛸壺で橙褐色。

19・20は18・19号住居跡上層から出土したもので、19は二重口縁壺、19は布留系甕である。19は口縁部を内に拡張し、肩部に櫛描波状文を施す。いずれも灰黄褐色～白黄褐色。（重藤）

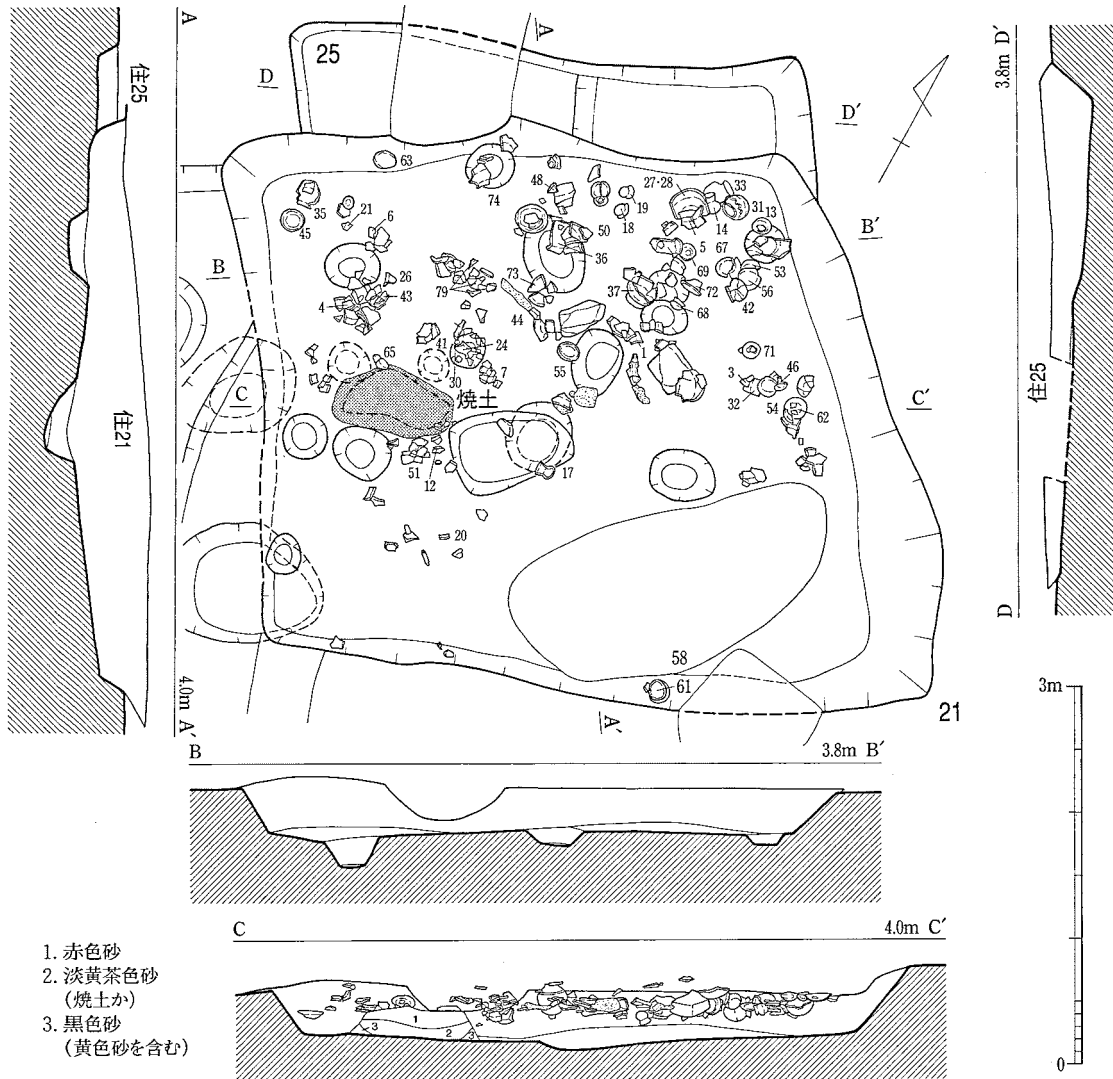
19号竪穴住居跡（図版18、第47図）

18号竪穴住居跡に切られると考えた竪穴住居跡である。南西部に近世溝があり、隅を検出していないが、南壁は近世溝をこえて西には延びないことを確認している。したがって、全体としては南

北に長い長方形を呈するが、南壁より北壁がやや長い歪な平面形が考えられる。炉は北壁から1 m 弱離れた場所に2基検出されている。これらの2基の炉跡は作り替えによるものとして解釈できるものかもしれない。ただ南北壁の長さの違いを考慮するならば複数の住居の切合いがあった可能性も考えておく必要があるだろう。そのため遺物の一括性には問題があるが、東壁沿いから出土した1・3・4・12の共伴はほぼ間違い無かろう。他に石錘（第243図19）も出土。

出土土器（第49図） 1～4は甕である。1は口縁端部を強く内湾させ、肩部に1条沈線の波状文を施す。内面底部近くにはヘラケズリに先行するナデ上げが見える。2は口縁端部の中央が凹んだ水平面をなす点と、頸部内面にヘラケズリに先行する強い横ナデを施す点が特徴的である。4は口縁端部が外傾する面をなしている。いずれも灰黄褐色～白黄褐色を呈する。

5～10は高杯脚部片である。5は柱状の脚部で在地系のものか。6・7は外面摩滅気味であるが、タテハケを施し、杯内底中央に小さなくぼみがある。8は上端が接合部から剥離したもので、その形態から粘土を充填して杯部と接合したと思われる。外面はハケメの後、横ミガキし、内面はヘラケズリである。9は裾部の屈曲がはっきりせず、外面にはまばらに横ミガキを施す。10は脚柱一



第50図 21・25号竪穴住居跡実測図 (1/60)

脚裾の屈曲部の2ヶ所に乾燥が進んだ段階で外側から穿孔している。脚部内面は工具による縦方向の線条が残る。外面はナデで仕上げる。11は乾燥前に脚裾に穿孔し、外面は粗いハケメの後ミガキを施している。これらの高杯片は10が灰黄褐色を呈する以外は、橙褐色である。

12・13は直口鉢で、12は外面ナデ、内面斜めハケメで仕上げ、13は内外に横ミガキする精製品である。14は脚付鉢で底部近くに粗いナデ、内面に縦ミガキを施す。15はやや深い器形に内傾する口縁の鉢で、内外にハケメを施す。17は大形で深い胴部に外傾する口縁の付く鉢で、口縁端部は面をなしわずかに凹んでいる。16も同様の器形と考えられる。18は大形の直立する口縁の鉢で、口縁端をやや肥厚させ上面に刻み目を施す。12は黄橙色、13・15・16は橙褐色を呈し、14・17は灰黄褐色を呈する。18は外面淡橙褐色、内面灰黄褐色を呈す。(重藤)

20号竪穴住居跡 (第45図)

16号竪穴住居跡の西に隣接し、南を17号竪穴住居跡に切られると考えたものである。北に校舎基礎があり、その北側では近世遺構もあったために検出していない。そのため、住居跡とする確証は不足している。出土遺物も少なく、確実にこの遺構のものとして図示できるものはない。(重藤)

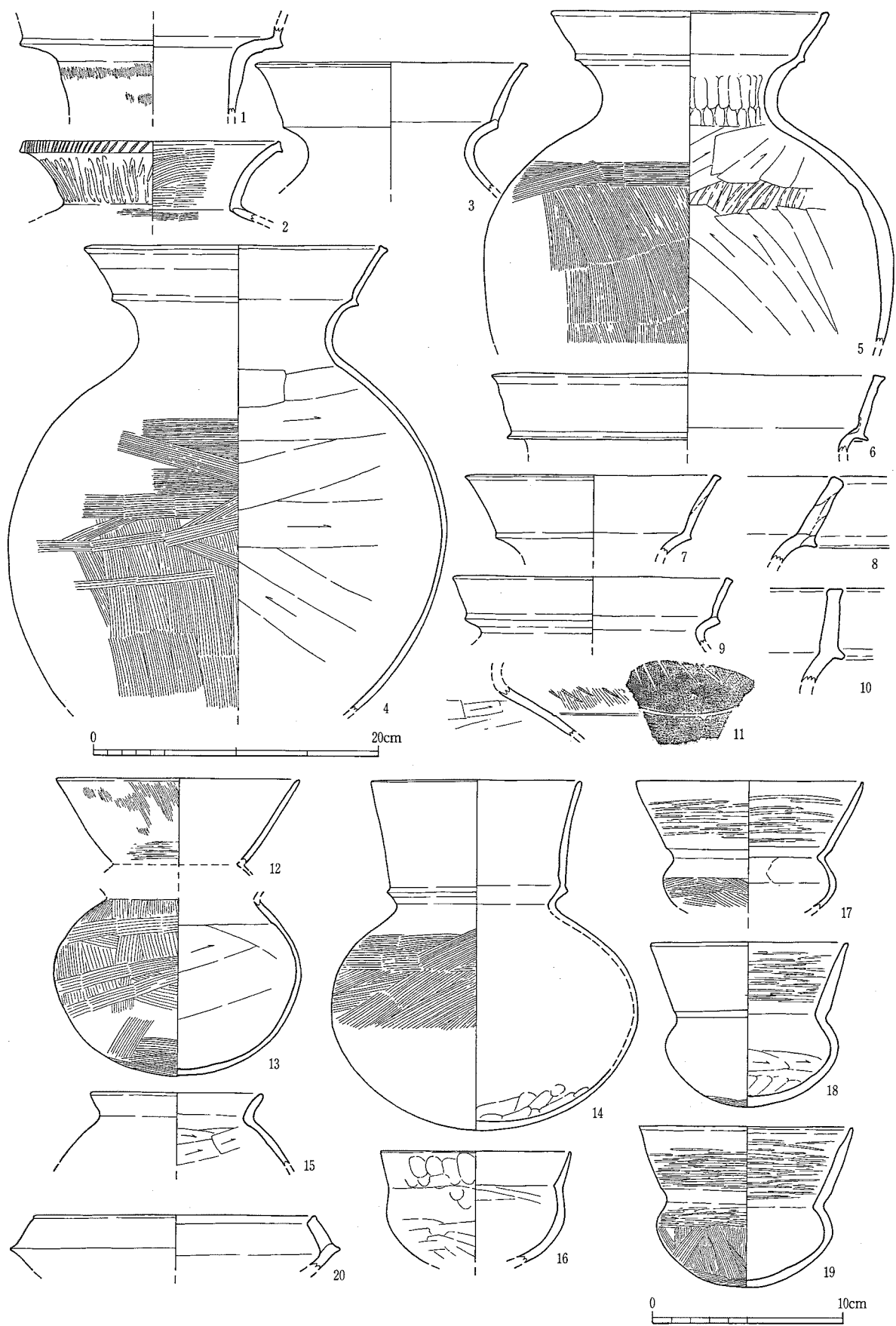
21号竪穴住居跡 (図版18・19、第50図)

1区中央付近で検出された竪穴住居跡である。検出段階から極めて多量の土器片が見られていたが、出土量も極めて多い。南北4.4m、東西4.9mを測る。中央よりやや西側に不整形円形に焼土が固まる箇所があり、他のカマドとは形状が異なり、かつ構築位置も異なっている。今回調査地点から東に位置する西新町遺跡第5次調査SC02住居跡検出のカマド状施設と類似し、似た構造物と考えられるが、こちらは壁面に沿って構築されたものではなく、同一の機能を有する構造物とは言い切れない。

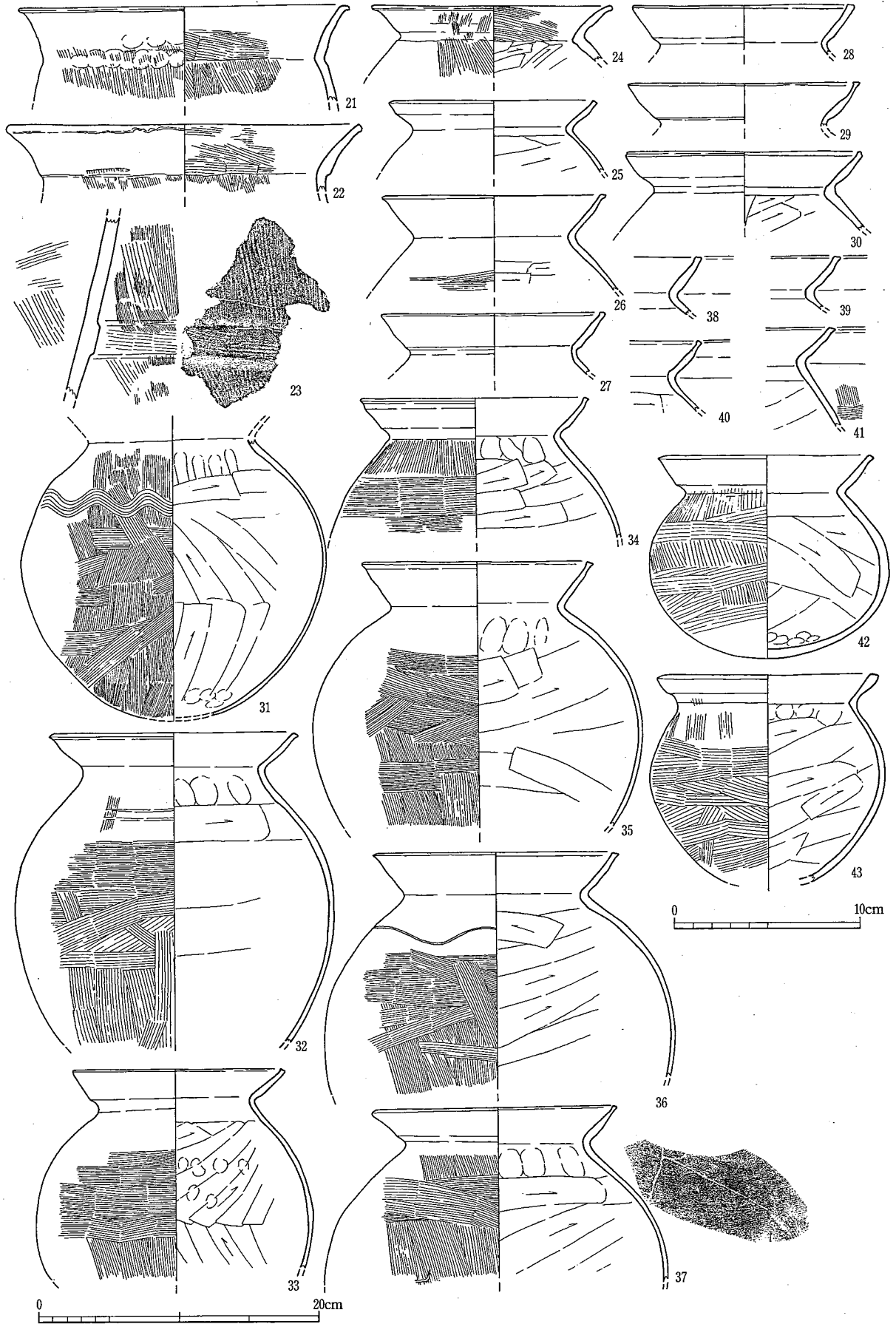
遺物は甕を中心として多量に出土しており、半島系の陶質土器や軟質で平底の両耳付直口短頸壺など特殊な土器も出土している。他の住居に比べて規模も大きく一般の住居とはやや性格を異にするのではないだろうか。土器の他に石錘(第243図17)、台石等の石器(第246図15~18)も出土している。

出土土器 (第51~54図) 1・3~11は二重口縁壺である。1は内外とも明赤褐色を呈す。2は壺で内外面とも赤褐色。外反する口縁で口唇部に工具での刻目を付す。

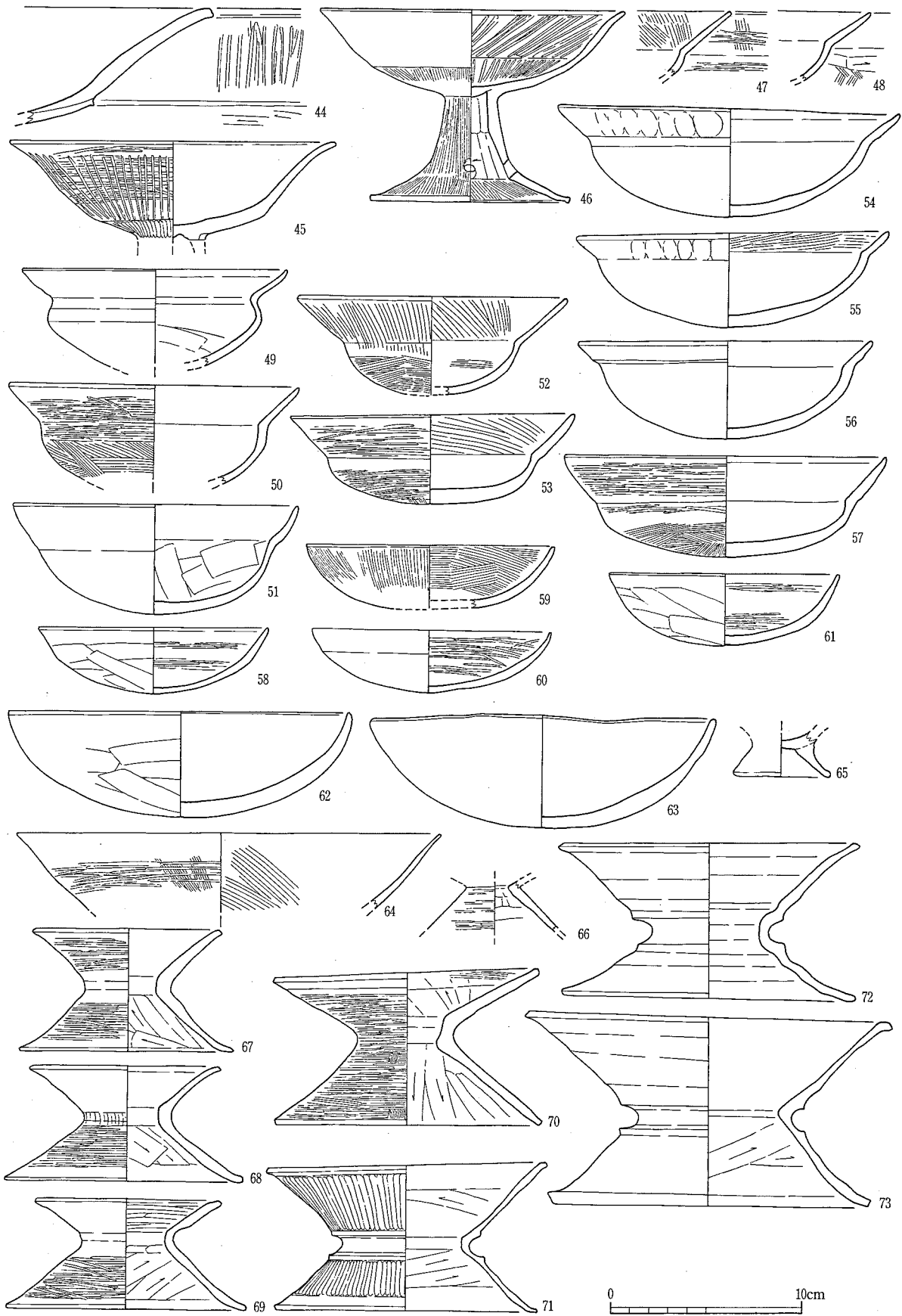
3~11は山陰系二重口縁壺。3は内外面とも灰白色。4は外面乳白色~黒色、内面灰黄褐色~黒色。5は外面黄褐色~淡黄白色、内面淡黄褐色。6は内外面とも茶褐色。7は外面暗赤褐色、内面淡赤褐色。8は内外面とも明褐色。9は内外面とも淡黄褐色。10は内外面とも淡黄褐色。11は二重口縁壺?か。内外面とも黄白色を呈し、頸部に列点文を施す。12~15は壺。12は内外面とも暗赤褐色。13は外面黄白色、内面黒灰色を呈す。14は直口壺。外面乳白色~黄褐色、内面淡赤褐色でやや偏球形の体部にやや外反気味に直立する口縁を有する。15は短頸壺で内外面とも灰褐色を呈する。短くやや外反気味の頸部をもつ。16~19は小型丸底壺。16は外面灰茶褐色、内面茶褐色、17は外面淡灰黄色、内面灰白色。18は内外面とも乳白色。19は外面乳白色、黒班、内面淡黄白色、黒班。口縁外面は頸部~肩部ミガキ、胴部ハケメ、内面ミガキの精製品。20は複合口縁壺の口縁片で内外面とも淡黄褐色。袋状の口縁を持つ。混入品と思われる。



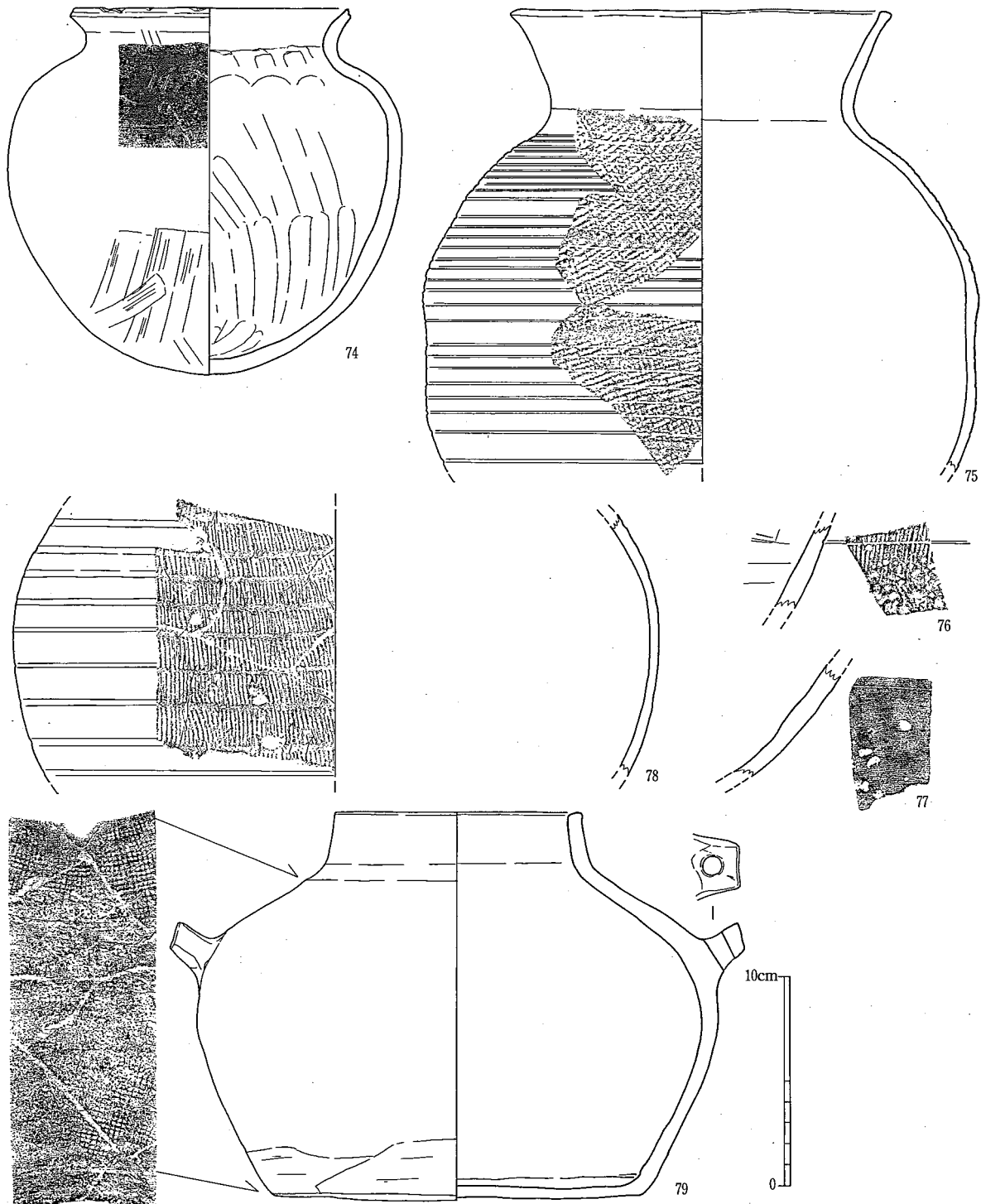
第51図 21号竖穴住居跡出土土器実測図(1) (12~19は1/3、他は1/4)



第52図 21号竖穴住居跡出土土器実測図(2) (42・43は1/3、他は1/4)



第53图 21号竖穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/3)



第54図 21号竪穴住居跡出土土器実測図(4) (1/3)

21~23はいずれも在地系の甕。21は内外面とも茶褐色を呈し、ゆるやかに外反しながら直立する。22は内外面とも明褐色。強く外反し、頸部に明瞭な段を有する。22は内外面とも暗黄茶褐色。

24~43はいずれも甕である。24は内外面とも黄褐色。口縁は外反し、端部も外を向く。25は内外面とも乳白色、26は内外面とも黄褐色~灰褐色、27は内外面とも黄褐色、28は内外面とも淡黄褐色、29は外面茶褐色~黒色、内面乳白色、30は内外面とも明赤褐色、31は外面黄白色~黄褐色、煤、内面乳白色、底部に棒状圧痕が残る。胴部やや上方に波状文を付す32は外面暗茶褐色~黒色、内面乳

白色～黄褐色、33は外面黄白色、内面淡黄褐色、35は外面黄褐色～黒色（煤）、内面淡茶褐色、36は外面乳白色～淡黄灰色、内面淡赤褐色、肩部に1条の波状文。37は外面乳白色～黒灰色、内面黄褐色、肩部に逆V字状の沈線文、38は内外面とも乳白色、39は外面乳白色～灰白色、内面黄褐色～暗茶褐色、40は内外面とも明赤褐色、41は内外面とも乳白色、42は頸部は強いナデでゆるやかな段を有する。43は口縁部はやや肥厚する。

44～46は高杯である。44は内外面とも黄褐色、45は外面黄白色、内面淡赤褐色、46は内外面とも淡黄白色～淡黄褐色を呈する。

47～57は有段口縁鉢。47は内外面とも黄褐色、48は内外面とも乳白色、49は内外面とも黄橙色、50は外面黄橙色、内面乳白色、51は外面乳白色、内面茶褐色～黒色、52は外面黒色、黒斑、内面黒色～明赤褐色、54は外面淡黄白色～黒色、内面乳白色～黒色、55は外面淡黄白色～黒色、内面乳白色、56は外面淡黄白色、内面乳白色、57は内外面とも乳白色～黒灰色、58は内外面とも黄橙色、59は内外面とも明赤褐色、61は内外面とも黄橙色、62は外面黄白色、黒斑、内面乳白色、黒斑、63は外面淡黄色、黒斑、内面淡黄色～明赤褐色、64は内外面とも明赤褐色を呈する。65は低脚鉢の脚部であろうか。

66～70は小型器台である。66は内外面とも赤褐色、67は内外面とも乳白色、68は外面淡黄白色～明赤褐色、内面黄白色、69は外面黒灰色、乳白色、内面黒灰色、70は内外面とも明赤褐色。

71～73は鼓形器台である。71は外面黒灰色、乳白色、内面乳白色。外面は全面にわたり縦方向のミガキ、内面は横方向のケズリ。72は内外面とも黒灰色～淡黄白色、73は外面黒灰色、赤色顔料、内面黄白色を呈する。

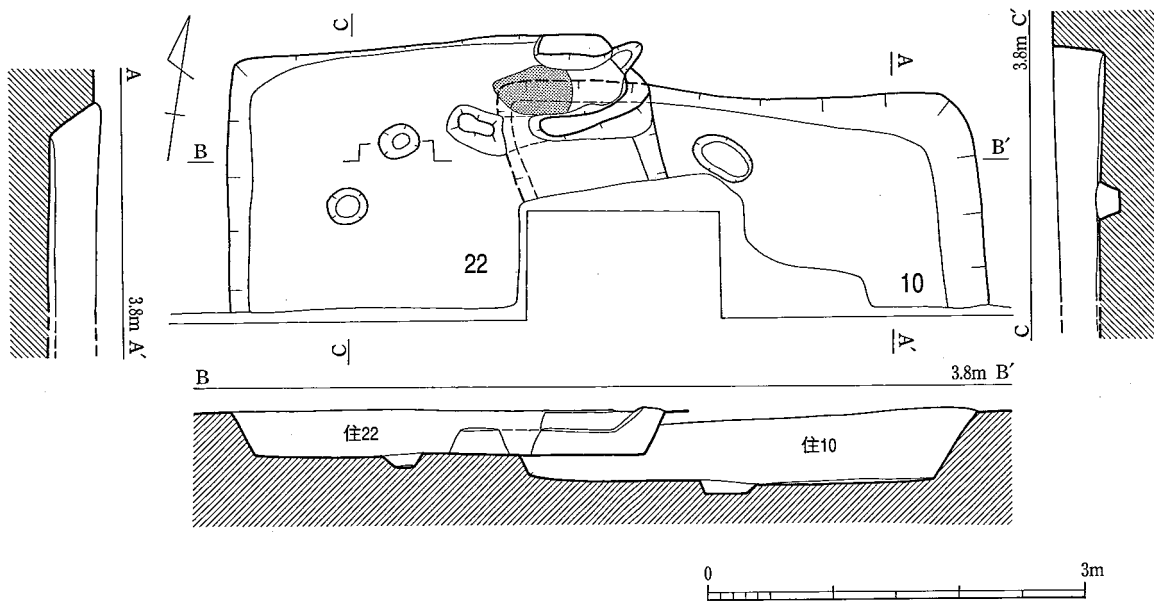
74は半島系陶質土器壺である。内外面とも灰白色を呈し、全面ナデケシ、内面はユビナデの痕跡が残る。肩部にヘラ記号状の沈線を施す。75は半島系の壺で内外面とも灰褐色を呈する。口縁は緩やかに外反し、口唇部は稜をなしている。外面は格子目タタキ後沈線を巡らす。内面ヨコナデで仕上げる。76は半島系の甕。内外面とも黄褐色～赤褐色を呈し、縦方向の平行タタキ後沈線を施すものである。77は半島系甕。内外面とも灰褐色～黒灰色を呈する。78は半島系土器胴部片である。内外面とも外面黒灰色、内面灰黄色を呈する。79は半島系の両耳付直口壺。外面明赤褐色～乳白色、黒斑、内面灰褐色を呈するもの。外面は格子目タタキで仕上げる。焼成はやや軟質で外面は摩耗する。底部平底。（森井）

22号竪穴住居跡（図版19、第55図）

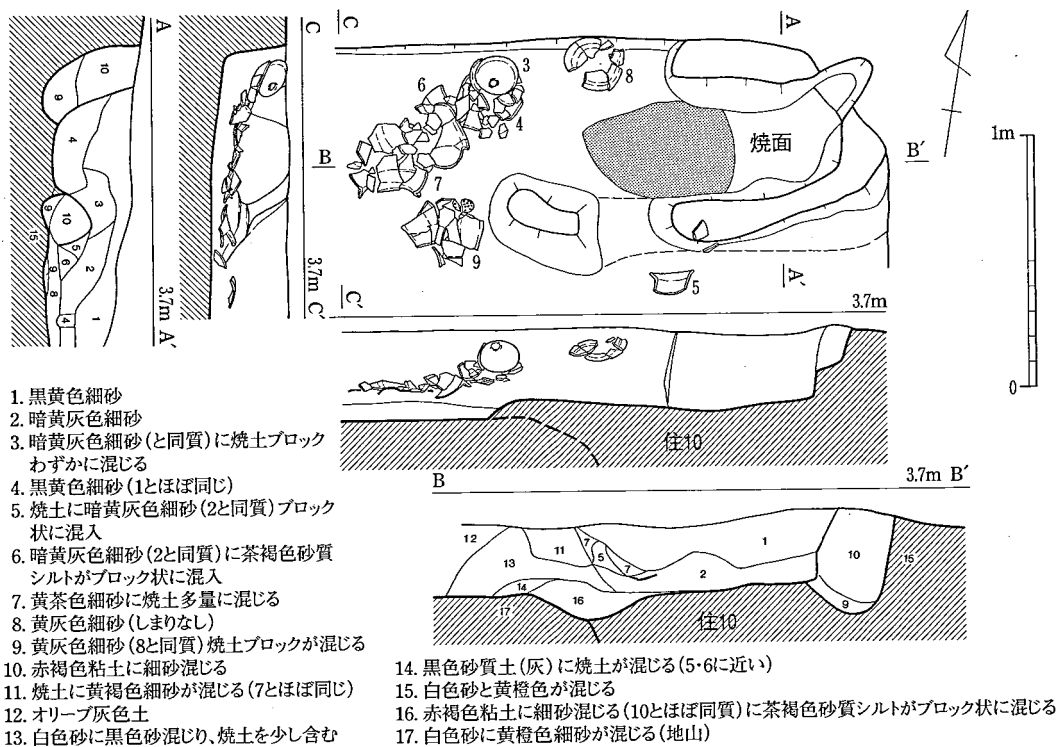
1区講堂跡地区のほぼ南中央で検出した。1区で初めて隅カマドが検出された住居である。南側半分に関しては講堂基礎等で攪乱され検出できなかった。東西3.5mを測り、小型の住居であるが、南北方向に長い長方形住居の可能性もある。完形の半島系甕が押しつぶされた状態で出土し、カマドと甕（第57図9）がセットで出土したことが特筆される。ただしこの甕とセットとなる甕（第57図4～7）は土師器である。

カマド（第56図、図版19） カマドは7号竪穴住居同様に3区で検出されたカマドよりも袖部が堅く焼けている。煙道は短くやや住居外に突出する。

出土土器（第57図） 1は壺肩部片。内外面とも暗灰色を呈す。2段の列点文と直下に波状文を施す。2は二重口縁壺。外面淡黄褐色、内面灰褐色を呈す。3は壺胴部。頸部を欠損するものの胴部



第55図 10・22号竪穴住居跡実測図 (1/60)



1. 黒黄色細砂
2. 暗黄灰色細砂
3. 暗黄灰色細砂(と同質)に焼土ブロックわずかに混じる
4. 黒黄色細砂(1とほぼ同じ)
5. 焼土に暗黄灰色細砂(2と同質)ブロック状に混入
6. 暗黄灰色細砂(2と同質)に茶褐色砂質シルトがブロック状に混入
7. 黄茶色細砂に焼土多量に混じる
8. 黄灰色細砂(しまりなし)
9. 黄灰色細砂(8と同質)焼土ブロックが混じる
10. 赤褐色粘土に細砂混じる
11. 焼土に黄褐色細砂が混じる(7とほぼ同じ)
12. オリーブ灰色土
13. 白色砂に黒色砂混じり、焼土を少し含む
14. 黒色砂質土(灰)に焼土が混じる(5・6に近い)
15. 白色砂と黄橙色が混じる
16. 赤褐色粘土に細砂混じる(10とほぼ同質)に茶褐色砂質シルトがブロック状に混じる
17. 白色砂に黄橙色細砂が混じる(地山)

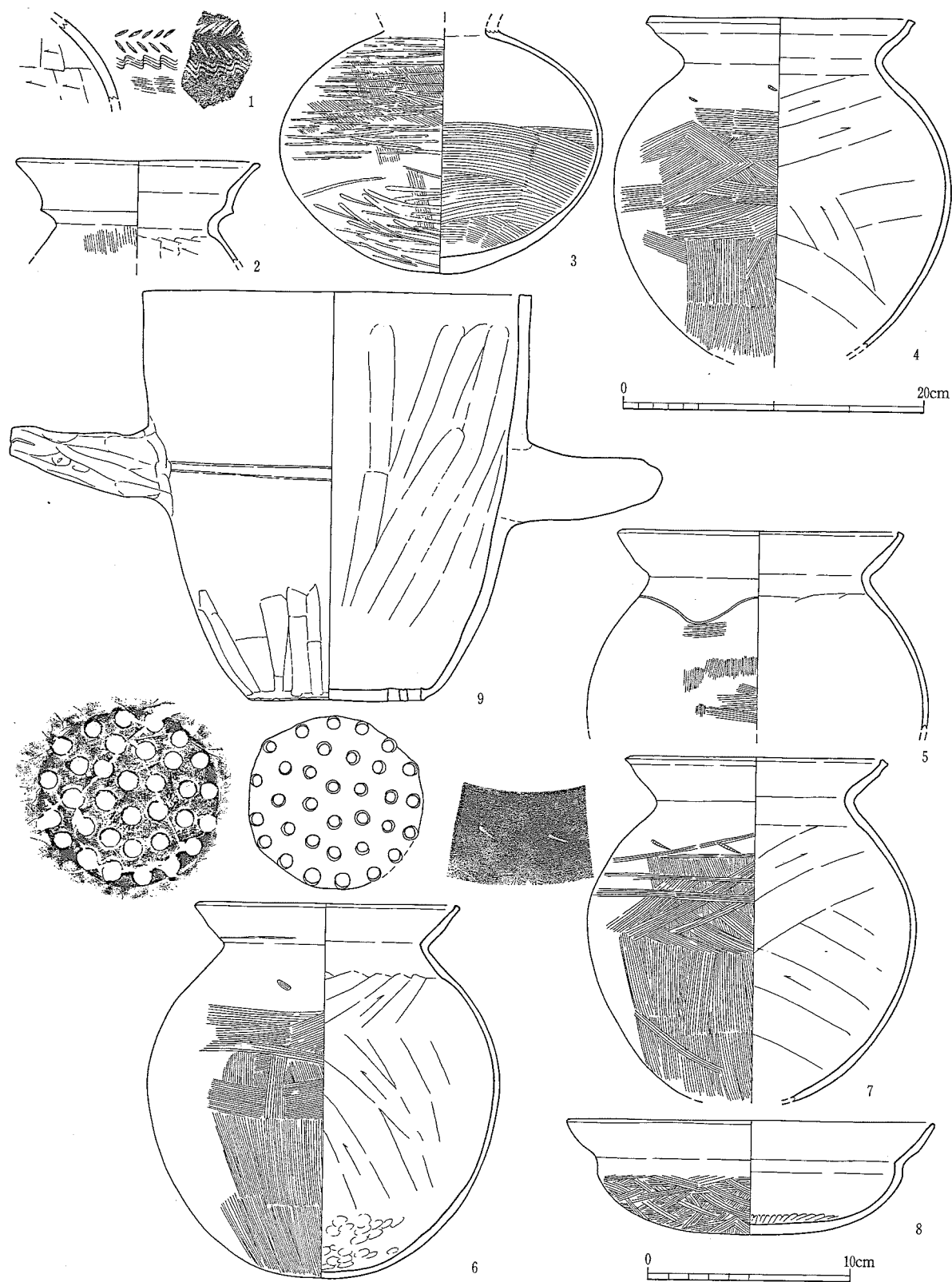
第56図 22号竪穴住居跡カマド実測図 (1/60)

は完存する。内外面とも乳白色、外面に黒班を有す。

4～7は甕である。4は外面黄白色、煤を有し、内面乳白色を呈す。5は外面灰白色、黒班、内面淡黄白色、6は外面淡赤褐色～黄褐色、内面淡黄白色、7は外面乳白色、内面黒灰色を呈す。肩部に列点文を施す。

8は鉢で内外面とも乳白色を呈す。

9は半島系の甌である。内外面とも黄褐色を呈し、焼成良好で硬質。底部はケズリ後ナデ、体部の中央、把手位置に2条の沈線が巡り、内面はナデアゲ。底部は径5mm程度の小孔を珠文状に配す



第57図 22号竖穴住居跡出土土器実測図 (2・3・8・9は1/3、他は1/4)

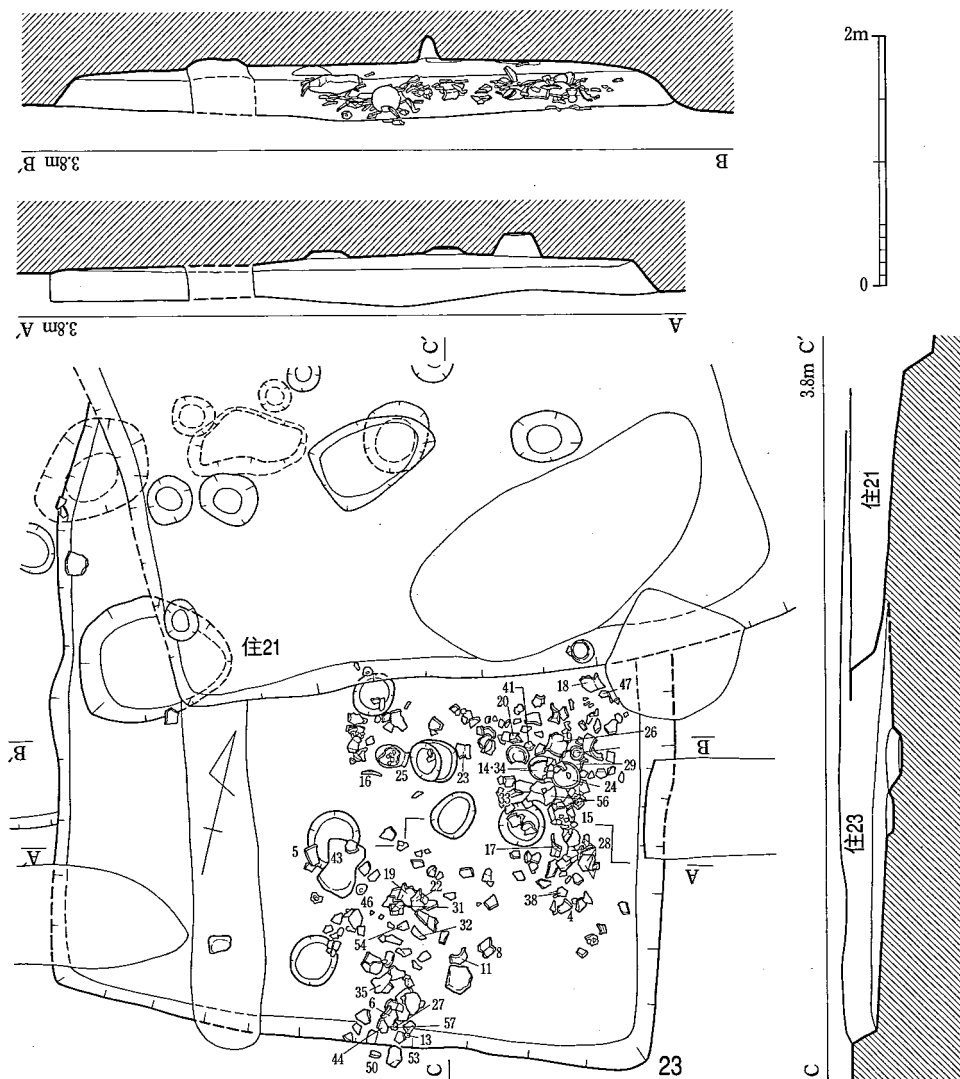
るいわゆる多孔透かしタイプである。韓国全羅南道大谷里遺跡出土品〔崔夢龍・崔鐘澤編1997、p. 112など〕など全羅道地域出土品と形態が類似しており、土師器とは焼成、胎土が異なることから搬入品としてほぼ間違いない。(森井)

23号竪穴住居跡 (図版18・19、第58図)

21号住居南にあり、北半を21号住居に切られている。南北推定5.2m、東西4.8mを測る。床面付近では数基のピットを検出しているが住居に伴う柱穴は明確ではない。21号住居同様大量の土器が出土している。土器の他に台石 (第247図19) が出土。

出土土器 (第59~61図) 1~7は壺である。1は壺で内外面とも淡黄白色~乳白色を呈す。肩部に突帯を付す。2は内外面とも明褐色を呈し、肩部に突帯を付し、刻目を施す。3は内外面とも褐色、突帯に刻目を施す。4は内外面とも淡茶褐色を呈す。5は二重口縁壺で内外面とも黄褐色を呈し、器壁が厚く口縁部やや外反するも口唇部はほぼ水平をなす。頸部から口縁への屈曲部は突出し明確な段をなす。器形は大形の鉢になる可能性もある。6は二重口縁壺で外面黄褐色、内面乳白色を呈す。7は壺で外面灰褐色、内面淡黄褐色。8は小型丸底壺。外面暗茶褐色、内面赤褐色。外面底部ケズリで全面ミガキ。内面もミガキ。胎土精緻な精製品。9も小型丸底壺で外面明赤褐色、内面明赤褐色~黒色を呈す。

10~23は甕である。10は外面乳白色、内面黄橙色。11は外面黄褐色~淡黄白色、内面灰黄白色、



第58図 23号竪穴住居跡実測図 (1/60)

12は内外面とも灰白色、煤、13は外面明赤褐色～乳白色、内面乳白色、14は外面灰黄色、内面黄白色～茶褐色、15は内外面とも明赤褐色で肩部に波状文を施す。16は黄白色～乳白色、17は外面乳白色、黒班、内面乳白色、18は内外面とも乳白色、19は外面明茶褐色、内面乳白色～茶褐色、20は外面暗灰色～黄褐色、内面黒色～黄褐色。肩部に1条の波状文を施す。21は内外面とも淡黄褐色。肩部に2条の波状文を施す。22は内外面とも黄白色、23は内外面とも淡茶褐色を呈す。

24～38は甕である。24は外面黄褐色～橙褐色、内面暗褐色、25は外面乳白色～黄褐色、内面黄褐色、26は外面灰黄色、内面灰白色、27は外面茶褐色、内面黄褐色、28は内外面ともに明赤褐色、29は外面黄橙色、内面乳白色、30は内外面ともに淡茶褐色、31は外面乳白色、黒班、内面淡黄白色、32は外面淡黄褐色、内面茶褐色、33は外面灰白色～黄褐色、内面暗黄褐色、34は内外面ともに淡黄褐色、35は外面黄褐色～黒灰色、内面黄白色、36は内外面ともに乳白色。在地系か？。37は内外面ともに黄褐色、38は外面乳白色、内面黄白色を呈する。

39・40は高杯。39は内外面とも明赤褐色を呈す。外面ハケメ後ミガキ、内面縦方向ミガキの暗文残る。40は内外面とも赤褐色を呈す。

41はてづくねの椀。内外面とも暗灰褐色～茶褐色。

42～47は脚付鉢である。42は内外面とも赤褐色を呈し、精製品の脚付鉢である。43は内外面とも赤褐色を呈し、精製品の脚付鉢。43と同一個体であろうか。44は内外面とも橙色、45は内外面とも灰白色、46は内外面とも黄褐色、47は内外面とも乳白色を呈す。

48は小型器台である。内外面とも橙色を呈す。

49は鼓形器台で、内外面とも橙褐色を呈し、外面に波状の暗文、内面横方向のミガキ。

50は半島系土器片で内外面とも灰褐色を呈す。タテ方向の平行タタキ後沈線を巡らす。51も半島系土器片で内外面とも灰褐色を呈す。タテ方向の平行タタキ、底部は縄蓆文タタキが残り、調整後沈線を巡らす。52は半島系土器と思われる。内外面とも黒灰色を呈し、外面ナデケシで瓦質焼成。近世瓦に似た焼成だが器形から古墳時代遺物と判断。

53～57は甗である。53は内外面とも淡黄褐色、54は外面黄褐色、内面淡橙褐色、55は内外面とも淡黄褐で円孔1カ所、56は内外面とも灰黄褐色～橙褐色を呈し、円孔1カ所。57は内外面とも橙褐色を呈し、底部やや尖り他に比べ胴部が間延びした器形である。(森井)

24号竪穴住居跡 (図版18・19、第36図)

21・23号竪穴住居跡にほとんど切られ残りは良くない。南北長4.4mを測る。床面中央付近で炉跡と考えられる径0.4mの円形ピットを検出した。

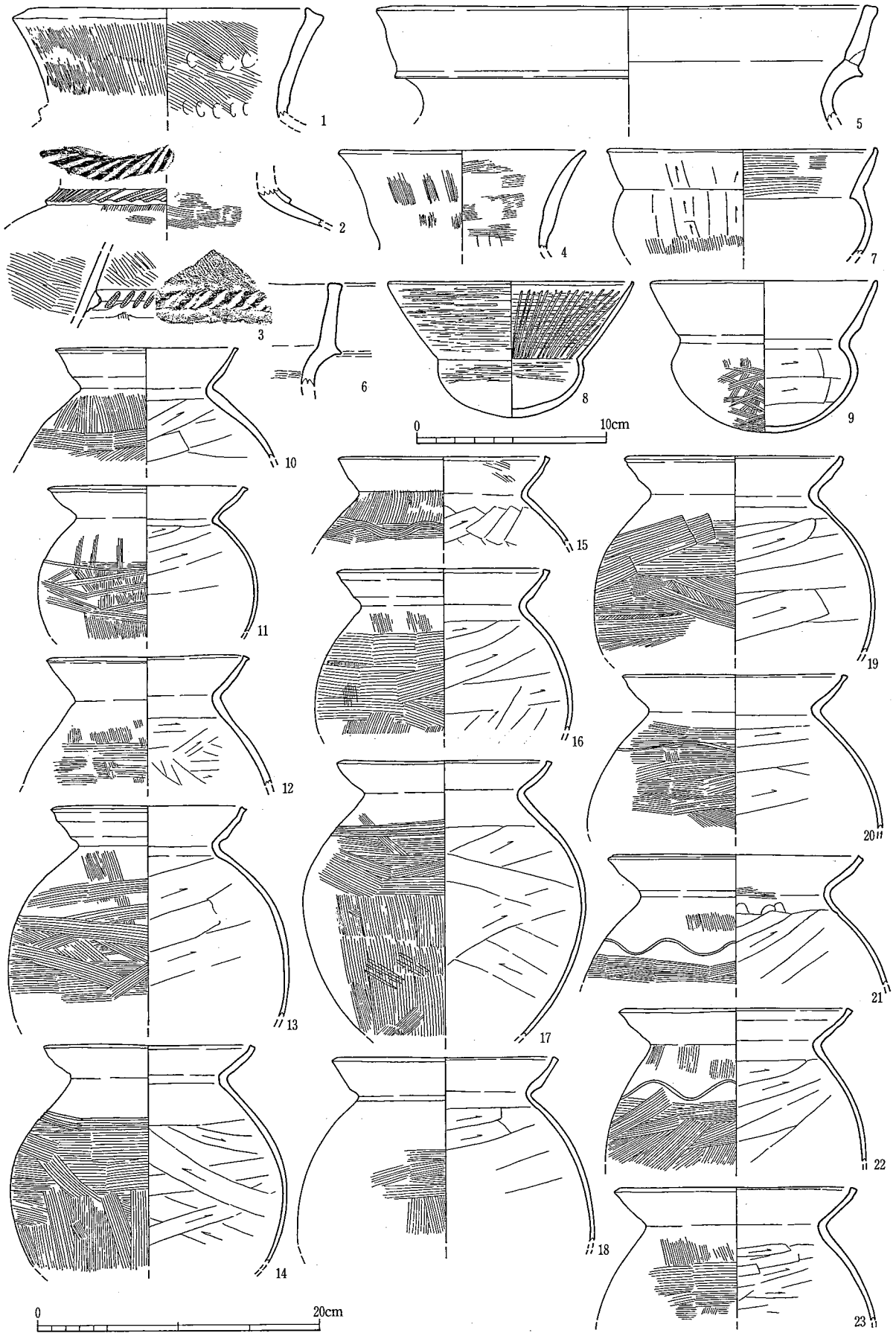
出土土器 (第62図1～8) 1は二重口縁壺で外面淡灰褐色、内面淡茶褐色。

2～4は甕である。2は外面乳白色、内面淡黄白色。肩部に列点文を施す。3は外面淡茶褐色、内面乳白色、肩部に1条の波状文を施す。4は内外面とも灰黄褐色を呈する。

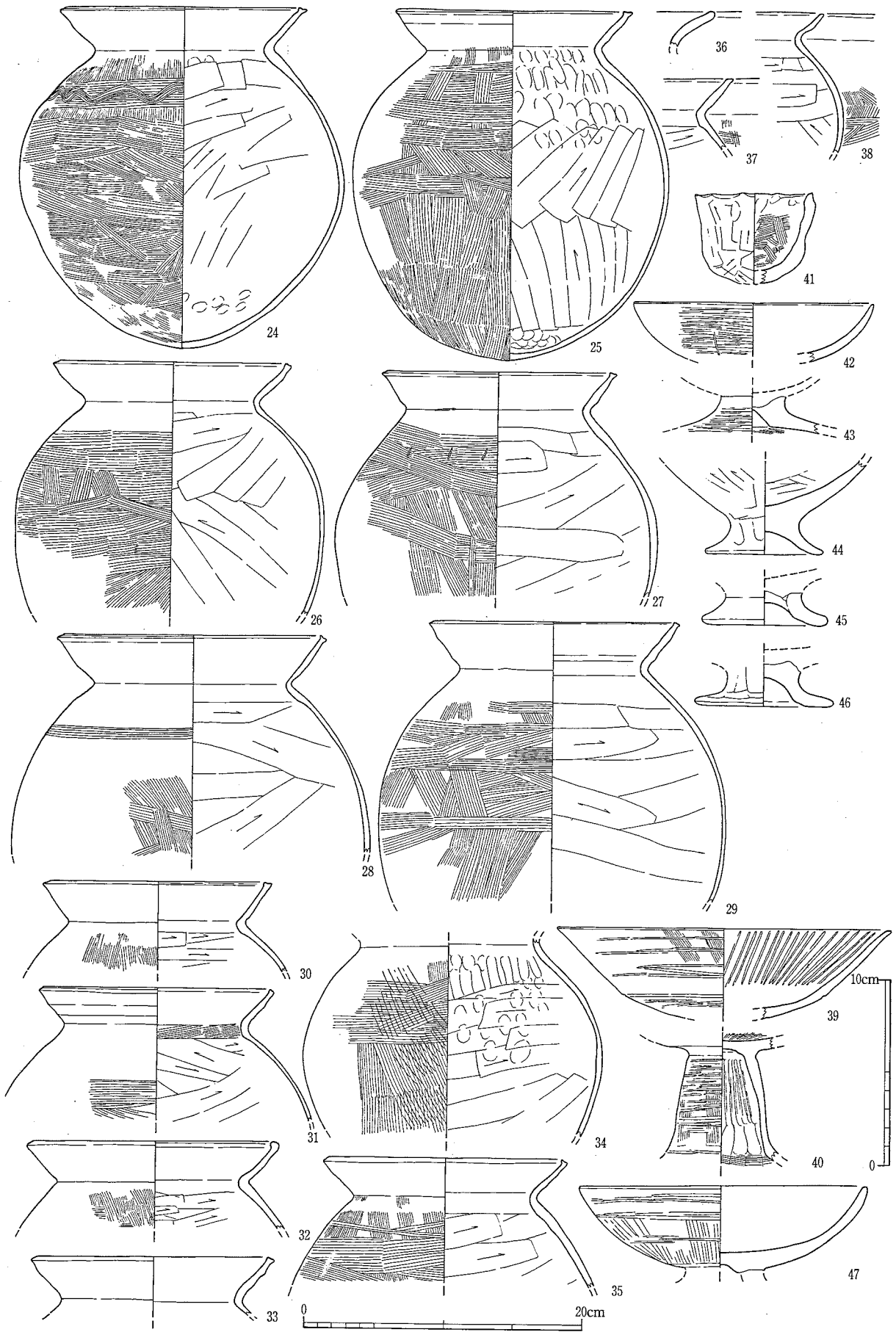
5は鉢で外面黄褐色、内面明赤褐色を呈する。

6・7は手づくねの椀である。6は内外面とも黄褐色を呈し、外面はてづくねだが内面は細かいハケメ。7は外面灰黄色、内面明褐色～灰黄色を呈す。

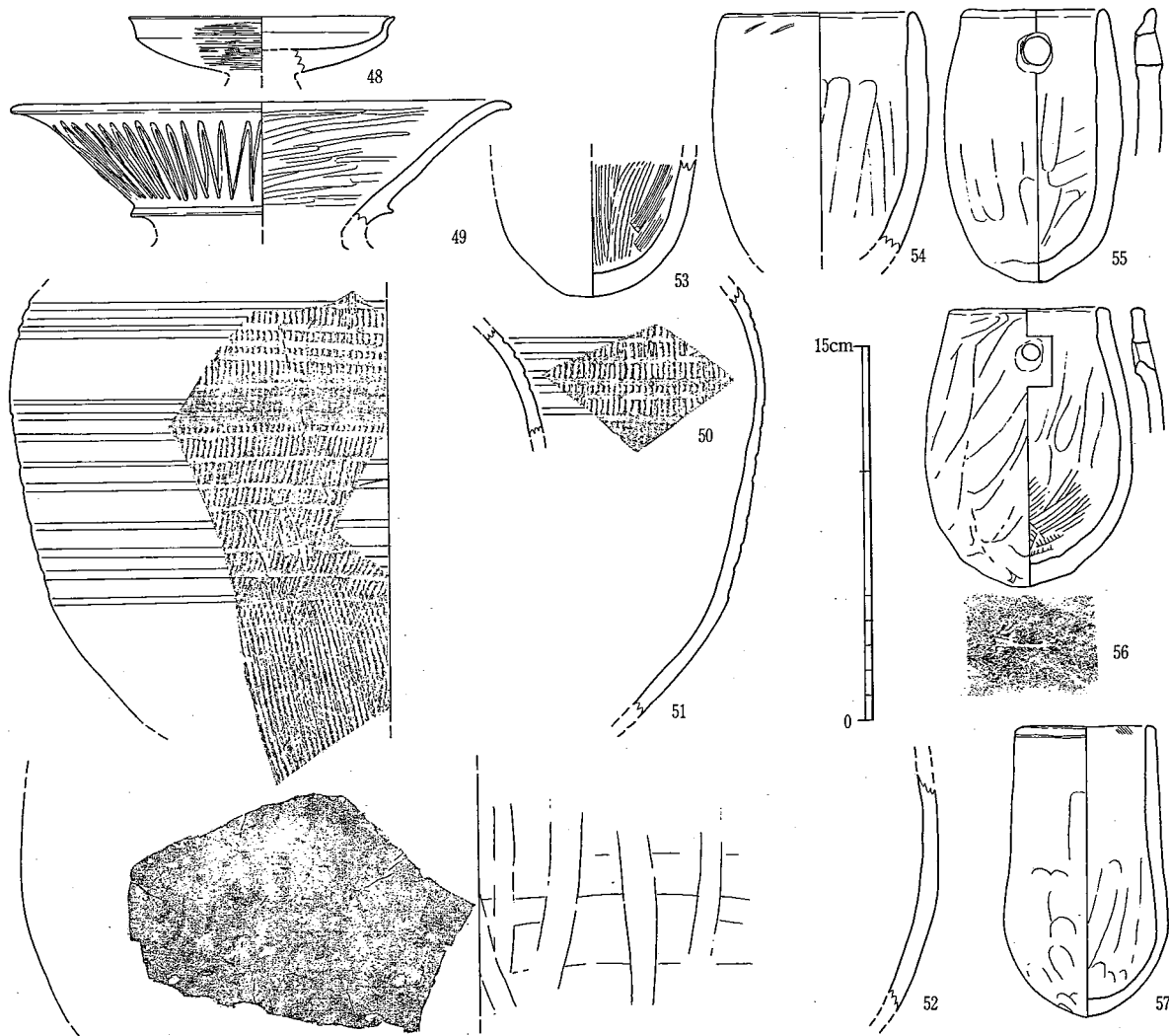
8は土製支脚。内外面ともに明赤褐色を呈す。(森井)



第59図 23号竖穴住居跡出土土器実測図(1) (7~9は1/3、他は1/4)



第60図 23号竖穴住居跡出土土器実測図 (2) (39~47は1/3、他は1/4)



第61図 23号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/3)

25号竪穴住居跡 (図版20、第50図)

1区ほぼ中央部で検出した。21号住居にほとんど重複しており、また高校建物基礎跡による溝で攪乱を受け、プランはほとんど解らない。東西4.1mを測る。床面西半が東より高く段をなすがベット状遺構かは断定できない。

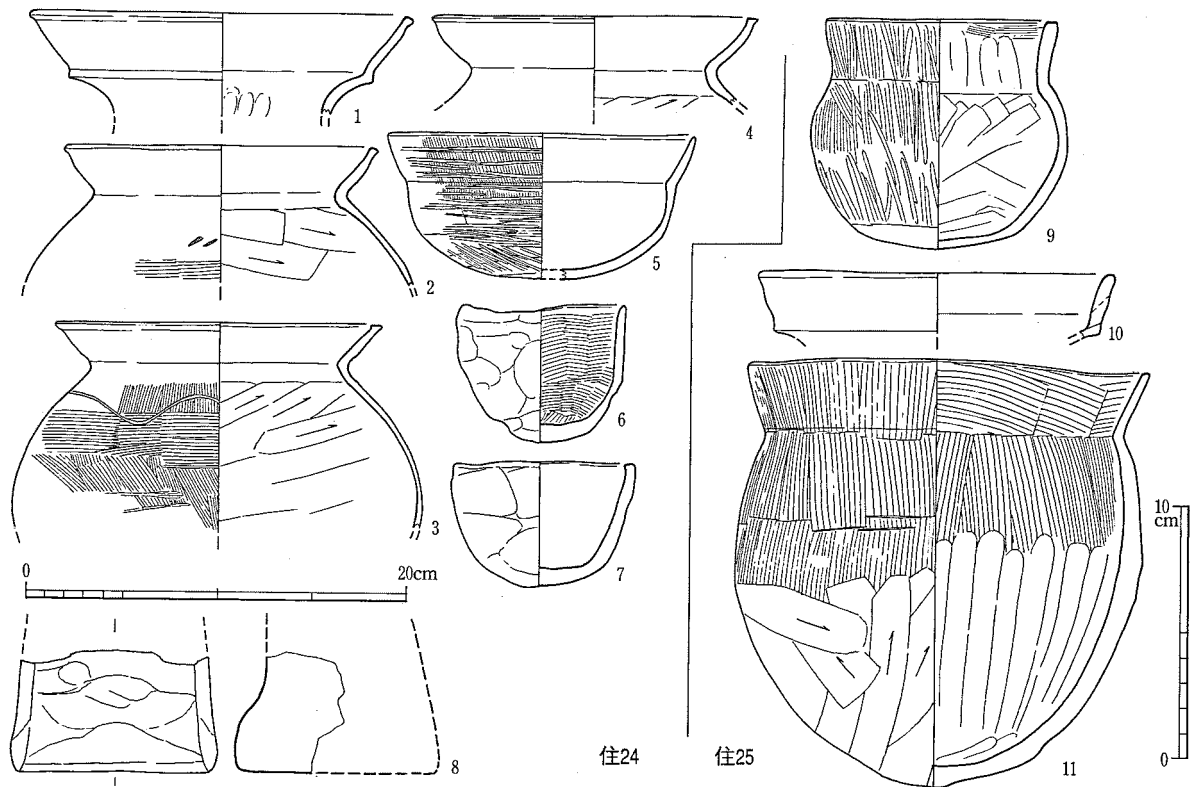
出土土器 (第62図9~11) 9は直口壺。内外面ともに明赤褐色を呈し、器壁やや厚い。やや外反するものの直立する口縁で端部はほぼ水平をなす。外面ミガキ。

10は二重口縁壺の口縁片。内外面とも淡茶褐色を呈する。

11は短頸壺であり、内外面とも赤褐色を呈し、短くゆるやかに外反する頸部に球形の胴部をもつ。外面のハケメは粗く、工具の静止痕が顕著に残る。(森井)

26号竪穴住居跡 (図版20、第63図)

26号竪穴住居跡は1東拡張区北にあり、30号竪穴住居跡南に位置する。27・28号住居跡を切ると考えて発掘した。1東拡張区はあらかじめ基礎を抜いてしまったため、壁が高さ5cmほどしか残っておらず、切合関係には余り自信がない。覆土は黄灰色細砂で、2区の校舍基礎構築時の攪乱によ



第62図 24・25号竪穴住居跡出土土器実測図（1～4は1/4、他は1/3）

り東壁がないが、南北2.3m、東西3.5m以上の長方形住居になる。床面にはピットを確認したが、炉跡はない。住居中央付近で土器が集中する。土器の他に砥石（第247図20・21）が出土。26～28号竪穴住居跡上層から、器種不明の鉄器が3点出土した（第238図42・57・59）。

出土土器（第64図） 1は山陰系の二重口縁壺である。口縁端部は丸くおさめており、肩に粗い横ハケを施す。内外面に煤が付着する。2は畿内系の中型精製直口壺である。外面は横ミガキ、内面は縦ハケのち横ナデを行う。3・4は小型丸底壺である。3は口縁端部は欠失するが、内湾する口縁部をもつ。外面はハケのちナデ、内面には工具痕が残る。4はやや内湾する口縁部で、外面は縦ハケのちミガキを施す。5は小型の山陰系二重口縁壺である。やや内傾する口縁部で、端部は丸くおさめる。外面は粗い横ハケ、内面は頸部近くまでヘラケズリを行う。外面には二次加熱痕、煤が付着する。2は橙褐色、4は灰黄褐色、他黄褐色を呈する。

6は在地系の甕である。内面は頸部近くまでケズリを施す。7は布留式の甕である。茶褐色～褐色を呈する。8は外湾する口縁部で、端部を外につまみ出す。S字状口縁甕か。6・8は灰黄褐色を呈する。

9～11は高杯である。9は精製の脚部で、ある程度乾燥が進んだ後に外から2ヶ所穿孔を施す。底部に黒斑がある。10・11は在地系の高杯である。11の外面は縦ミガキを施す。脚部内面はケズリを行い、焼成前外から4ヶ所穿孔を施す。9は橙褐色、10・11は灰黄褐色を呈す。

12・13は浅い鉢である。内外面に粗いミガキを施す。いずれも黄茶褐色を呈す。

14は畿内系小型精製器台である。外面は縦ハケのち粗いミガキを施す。ある程度乾燥が進んだ後に外から2ヶ所穿孔を施す。淡橙褐色を呈す。

15～18は山陰系甕型土器である。15～17は同一個体か。15はゆるく外反させる口縁部をもつ。口

径45cmを測る。外面は縦ハケ、内面はヘラケズリを行うが、口縁端部近くの内外面は横ナデで調整する。口縁部には黒斑あり。16は環状の把手で、天地、上下ともに不明。外面はハケを施す。17は底部から4cm上に突帯を巡らす。外面に黒斑がある。18は口縁部で、端部は面取りする。16は淡黄褐色、15・17・18は灰黄褐色を呈す。

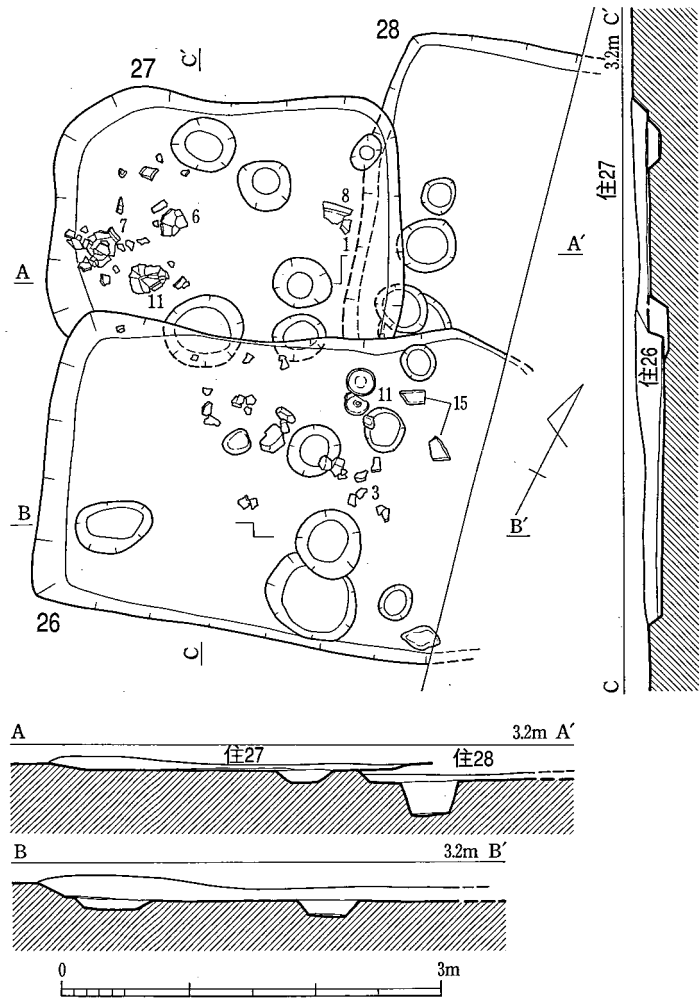
19・20は蛸壺で、19は焼成前に外から1ヶ所穿孔を施す。19は淡黄褐色、20は橙褐色。(大庭)

27号竪穴住居跡 (図版21、第63図)

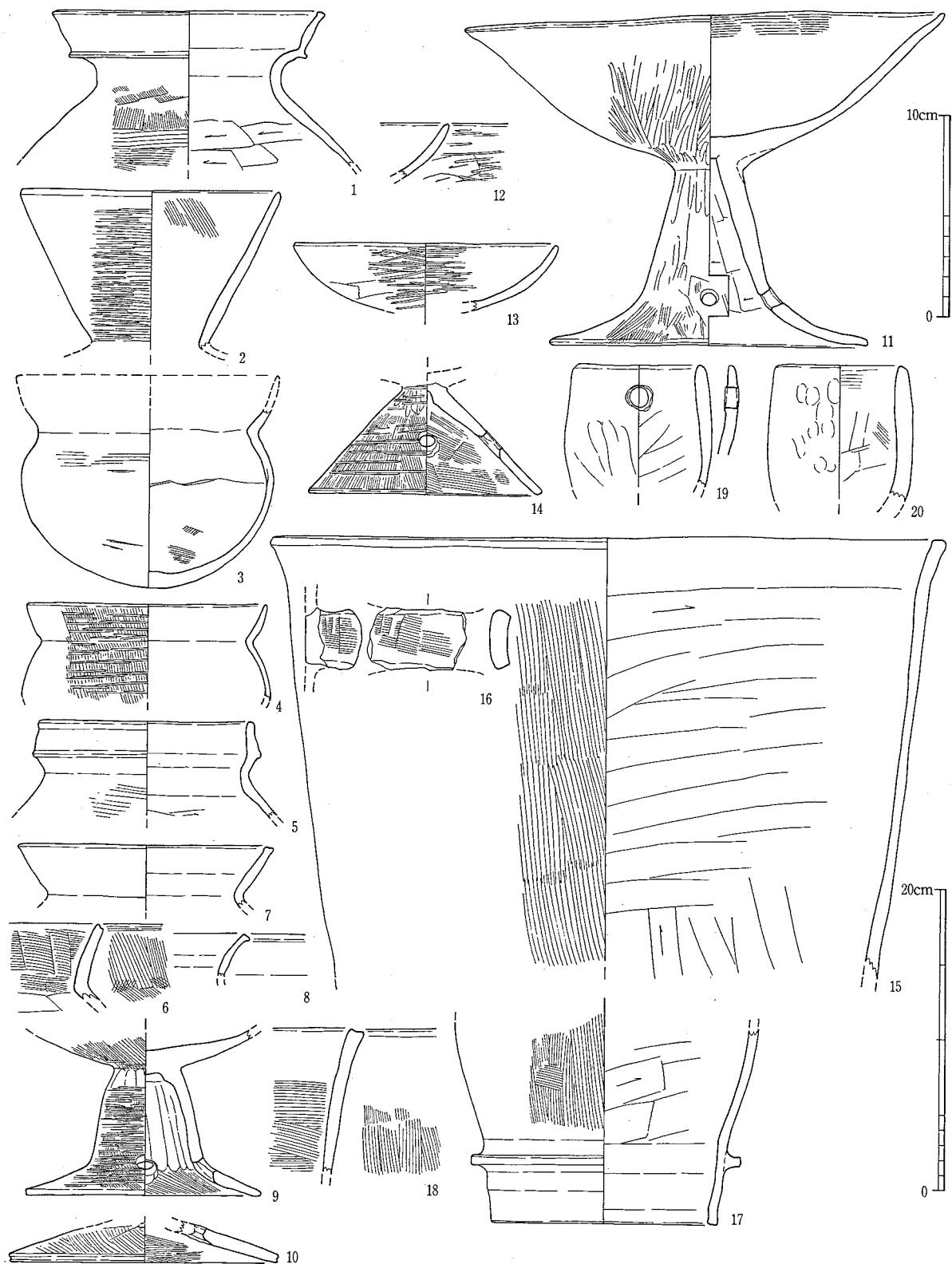
27号竪穴住居跡は1東拡張区にあり、26号竪穴住居跡北に位置する。26号竪穴住居跡に切られるが、28号竪穴住居跡を切ると考えて発掘した。攪乱により、壁が高さ5cmほどしか残っていないため、切合関係は自信がない。覆土は暗黄灰色細砂で、東西2.8mの小型の方形住居か。床面にはピットを確認したが、炉跡はない。住居西壁付近に土器が集中する。

出土土器 (第65図 1~16) 1・2は複合口縁壺である。1は強く屈曲する口縁を持つ。口縁端部は上方につまみ上げる。外面はハケのち横ナデ、内面はハケのち横ナデを施す。2は内傾する口縁で、内外とも縦ハケのち粗いヘラミガキを施している。3は平底をなす底部片である。外面は下から上へヘラケズリを施す。内面は工具によるナデで調整する。4は直口壺かと考えられる。外面は粗い縦ハケで調整し、肩に竹管文を巡らす。内面はハケで調整する。5~8は山陰系二重口縁壺である。5は小型の壺で、短く直立する口縁部を持つ。6・7の外面は縦ハケのち横ハケを施す。6は口縁部がゆるく外傾する。外面に煤が付着する。7の内面は頸部近くまでヘラケズリを施す。外面には黒斑あり。8は口径44.2cmの大型壺で、口縁端部は面取りする。頸部外面にはハケ工具による斜めの文様を施文した後、2条の凹線を施す。内面は頸部までヘラケズリを行い、上位には細かいヘラミガキを施す。外面には煤が付着する。1・2は茶褐色、4は橙色、3・5~8は灰黄褐色を呈する。

9・10は口縁部が水平近く傾き、内面は頸部近くまでヘラケズリを施す。9は外面に煤が付着している。10は小型の甕で、口縁端部はナデによる面取りを行う。外面にはハケが残る。11は庄内系

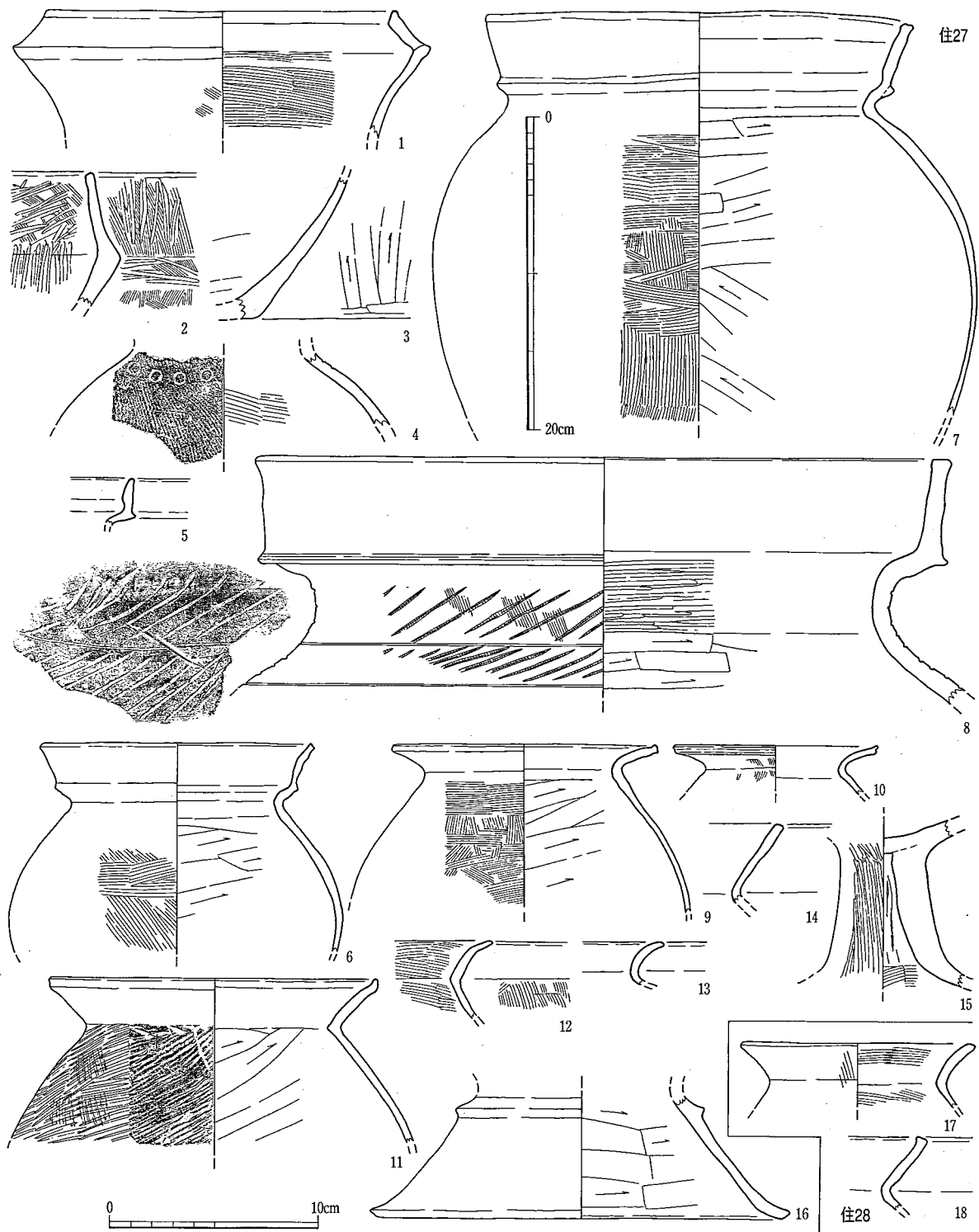


第63図 26~28号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第64図 26号竪穴住居跡出土土器実測図 (1・6~8・15~18は1/4、他は1/3)

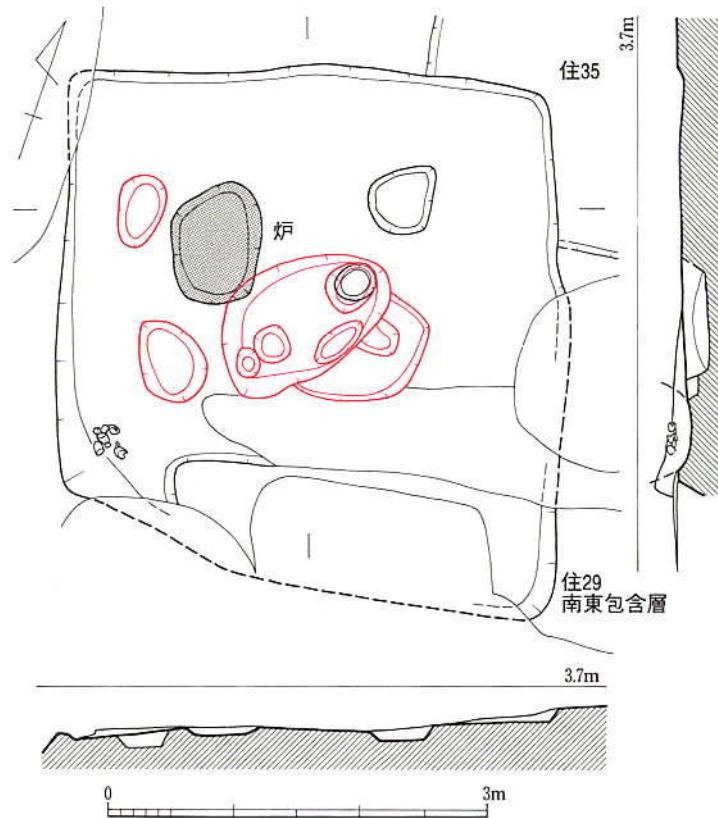
の甕で、口縁端部を上方につまみあげる。外面には細かい右上がりのタタキ、内面は頸部までヘラケズリを行う。外面には煤が付着する。12は口縁部上位が屈曲する甕である。内面にはハケが残る。13は口縁部が強く外湾する小型の甕である。14は布留系の甕口縁である。直線的に外傾する口縁部をもつ。いずれも灰黄褐色~黄褐色を呈す。



第65図 27・28号竪穴住居跡出土土器実測図 (11・15・16は1/3、他は1/4)

15は在地系の高杯脚部である。外面は細い縦ミガキ、内面は工具による絞り痕が残る。杯部内面は暗文風の縦ミガキを施す。灰黄褐色を呈す。

16は山陰系鼓型器台の底部である。低い貼り付け突帯を持つ。外面は横ナデ、内面はヘラケズリを施している。黄褐色を呈す (大庭)



第66図 29号竪穴住居跡実測図 (1/60)

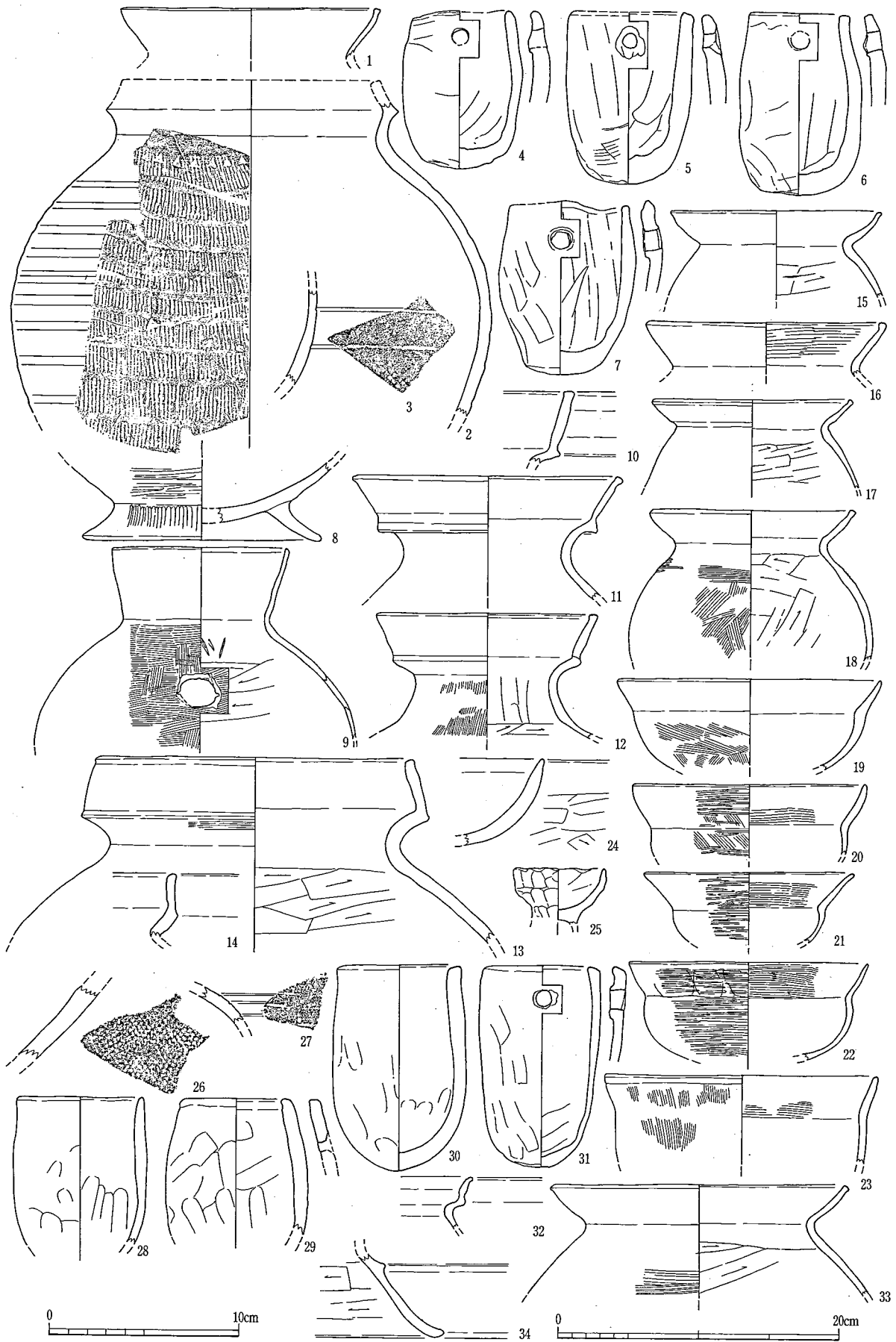
28号竪穴住居跡 (第63図)

28号竪穴住居跡は1東拡張区にあり、26号竪穴住居跡の北に位置する。26・28号竪穴住居跡に切られると考えて発掘したものである。ただ、本住居跡は攪乱が激しく、壁が5cmほどしか残っていないため、切合関係には余り自信がない。校舎基礎による攪乱のため東壁はなく、北・西壁も下端しか確認できなかった。覆土は黄灰色細砂で、南北2.4m以上、東西1.4m以上で平面プランは不明。住居跡東側の校舎の基礎近くで赤褐色の焼土を確認した。調査できなかったが、カマドを設置していた可能性がある。

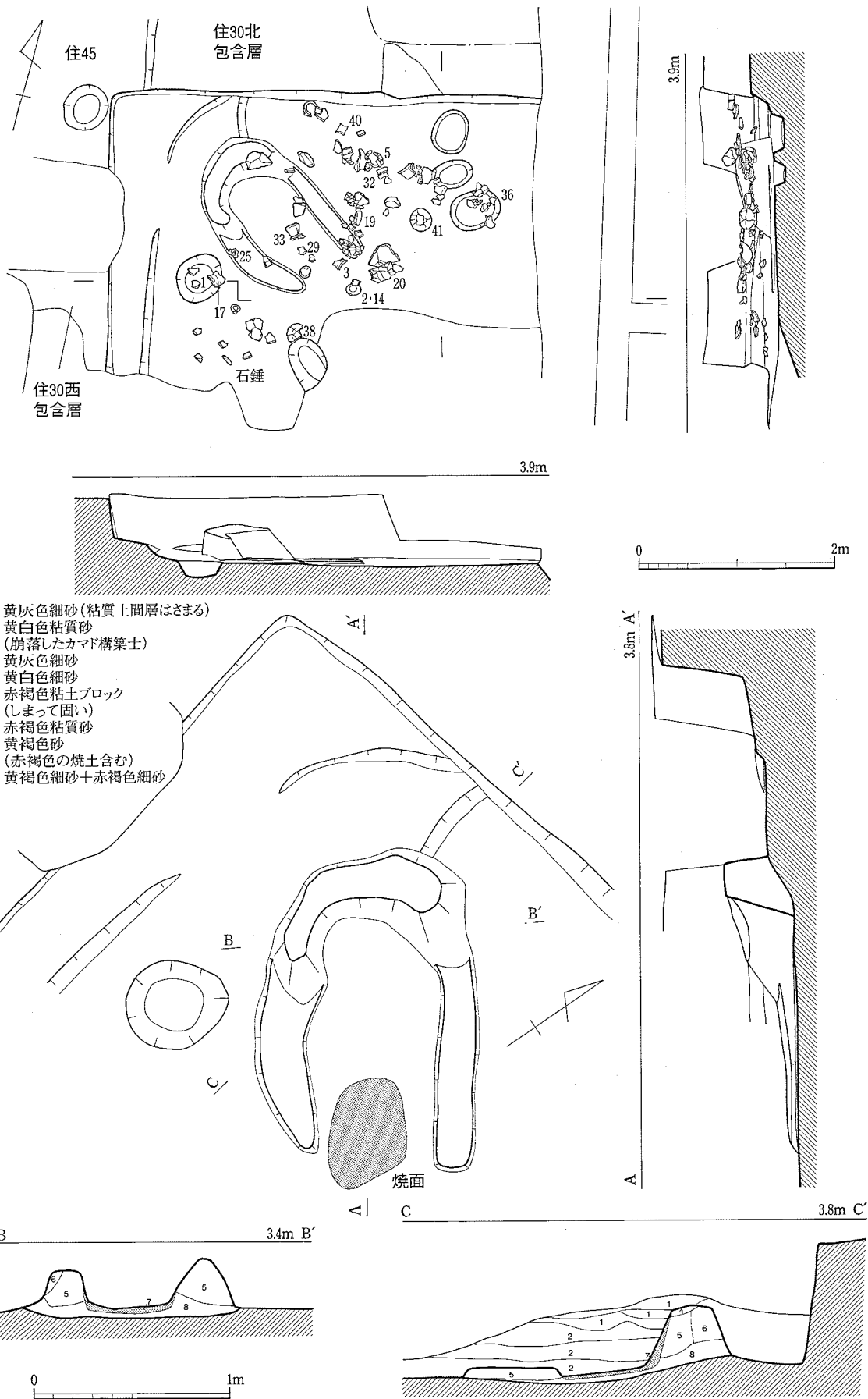
出土土器 (第65図17・18) 2点しか図示できなかった。17は在地系の小型の甕である。口縁端部は丸くおさめる。器壁が厚い。内面頸部近くもハケで調整する。18は布留系の甕である。内面には黒斑がある。17は淡橙褐色、18は黄茶褐色を呈す。(大庭)

29号竪穴住居跡 (図版21、第66図)

1北拡張区にあり、1号竪穴住居跡の北に位置する。南は大きく攪乱を受けて詳細が不明であるが、やや西壁より東壁の長くなる歪な長方形に近い平面形を呈し、南側に高さ6cm程の不自然な段を形成している。この段の内側が本来の南壁となる可能性が高い。そうすると東西約4m、南北約3m程の長方形竪穴住居となる。炉は西壁よりに位置する長軸1.0m、短軸0.8m程の凹みが考えられ、内部には熱変したと思われる暗茶褐色細砂が堆積していた。住居跡の南西隅からは蛸壺が5点まとまって出土した。また砥石も出土 (第247図22)。なお、29～31号住居跡付近の遺構面より鉄器刀子 (第237図23)、石錘 (第243図20)、砥石等の石器 (第247図23～25) が出土している。



第67図 29号竖穴住居跡出土土器実測図 (2~8・19~31・33は1/3、他は1/4)



第68図 30号竖穴住居跡実測図 (1/60・1/30)

出土土器（第67図） 1～7が29号住居跡出土で、8～31は29～31号住居跡上面、32～34は29号住居跡東南の包含層から出土した。

1は内湾のやや強い甕口縁部で、端部が直に近づき、上端が水平面をなす。

2は半島系土器で、接合しない3片を図上で復元した。また、破片は29号住居跡と41号土坑から出土したものである。口縁部はほとんど残っていないが、やや内傾する二重口縁を呈すると思われる。球胴を呈し、平行タタキの後、太い凹線を巡らしている。肩部には頂部が鋭角的な三角文を押捺して巡らしている。胎土は精良で焼成は堅緻であり、赤褐色を呈する。このような肩部三角文の例としては福岡市博多遺跡群第17次調査出土遺物があり、韓国内では忠清道～全羅道にかけての地域に分布の中心をおくようである。またこのような二重口縁をなす土器の分布もほぼ一致する。

3も半島系土器壺胴部片である。格子目タタキの後、沈線を施すが、上部は摩滅が激しいためにタタキが見えない。

4～7は蛸壺で住居跡の南西隅からの一括品である。

8は脚付中形壺の脚・底部片で、脚外面は縦ミガキ、胴外面は横ミガキを施す。9は直口壺で、口縁端部はわずかに丸く内に肥厚し、ややナデ肩を呈す。肩部に径5cm程の焼成後穿孔が有り、頸部内面には小動物の爪跡のような線条が見える。10～14は山陰系の二重口縁壺で、11は上下に幅広く拡張した1次口縁の形態が推測され特徴的である。13は口縁が内傾する。8は淡褐色を呈し、他は灰黄褐色、淡黄褐色を呈す。

15～18は甕でいずれも灰黄褐色。15は胴部外面を丁寧なナデで仕上げ、16は口縁内面ハケ、17は摩滅のため胴外面の調整は不明である。18は肩部に5条前後の櫛描直線文を巡らしている。

19～23は口縁部の外反する鉢である。20～22は橙褐色で外面にミガキを施す精製品で、19・23はミガキを施さず、前者は灰黄褐色、後者は淡褐色を呈す。24は直口の鉢で外面下半はヘラケズリ、他はナデで仕上げる。25は指押さえの顕著な小形土器で鉢を模した手捏ね土器か。

26・27は半島系土器である。26は外面に格子タタキを施すもので、壺底部近くか。甘い焼成で瓦質に近く、灰～黄灰色を呈す。27は横方向の沈線が微かに見える胴部破片で、タタキは不明。焼成は瓦質に近く、灰色を呈す。

28～31は蛸壺で、28、30は破片のため紐孔が確認されない。

32～34は29号住居跡東南の包含層から出土した。32は短い二重口縁をなすもので、小形の壺と思われる。33は肩部に3条以上を単位とする櫛描文を施すもので、布留系甕である。34は山陰系鼓形器台で外面横ナデ、内面ケズリを施すことから裾部と思われる。いずれも黄褐色～灰黄褐色を呈している。（重藤）

30号竪穴住居跡（図版22、第68図）

1北拡張区にあり、26～28号竪穴住居跡の北側に位置する。ほぼ東西を向く方形住居跡と考えて発掘したが、東、南を大きく攪乱されており、平面プラン自体はやや不安である。北東隅近くに対角線方向を向くカマドがあるが、北壁、西壁からかなり離れている。西壁から0.3m程、離れて西壁にほぼ平行する段があり、これが本来の住居壁であった可能性が高いと思われる。また、北壁より0.5m程離れたところに土器5・32・36・40・41が並んだかのような状態で出土している。あるいはこれが本来の住居北壁を示すものかも知れない。これら土器の共伴はほぼ確実であり、本住居

の時期を示す遺物と考えられる。このほか南側の床面近くから石錘（第243図21）、覆土より砥石等の石器（第247図26～28）が出土している。

カマド 上述のように住居の北西隅近く、北壁、西壁からやや離れたところで検出した。住居跡の平面形自体が問題があるうえに、カマドの前面の袖をかなり掘り下げた段階でその存在に気が付いたためカマドの形態にはかなり不安を残す。袖は赤褐色粘土を中心に構築したものと想定して発掘し、現状では奥壁側では30cm程、先端部では3cm程の高さで残存する。奥壁から1.1m離れた場所を中心に直径0.5m程の範囲で床面が黄褐色に熱変し、これを焼面と考えた。焼面付近での袖間隔は0.55m程を測る。袖間には黄白色の粘質砂が堆積し、カマドの外側にもこれが広がっており、発掘時にはこれを崩落したカマド上部の構築土と考えて除去した。しかし、黄白色粘質砂にはいくらか締まった部分もあり、黄白色粘質砂が本来のカマド壁体であった可能性も十分に考えられる。いずれにしてもカマドであることは確実であるが、形態には多くの問題があると言わざるを得ない。

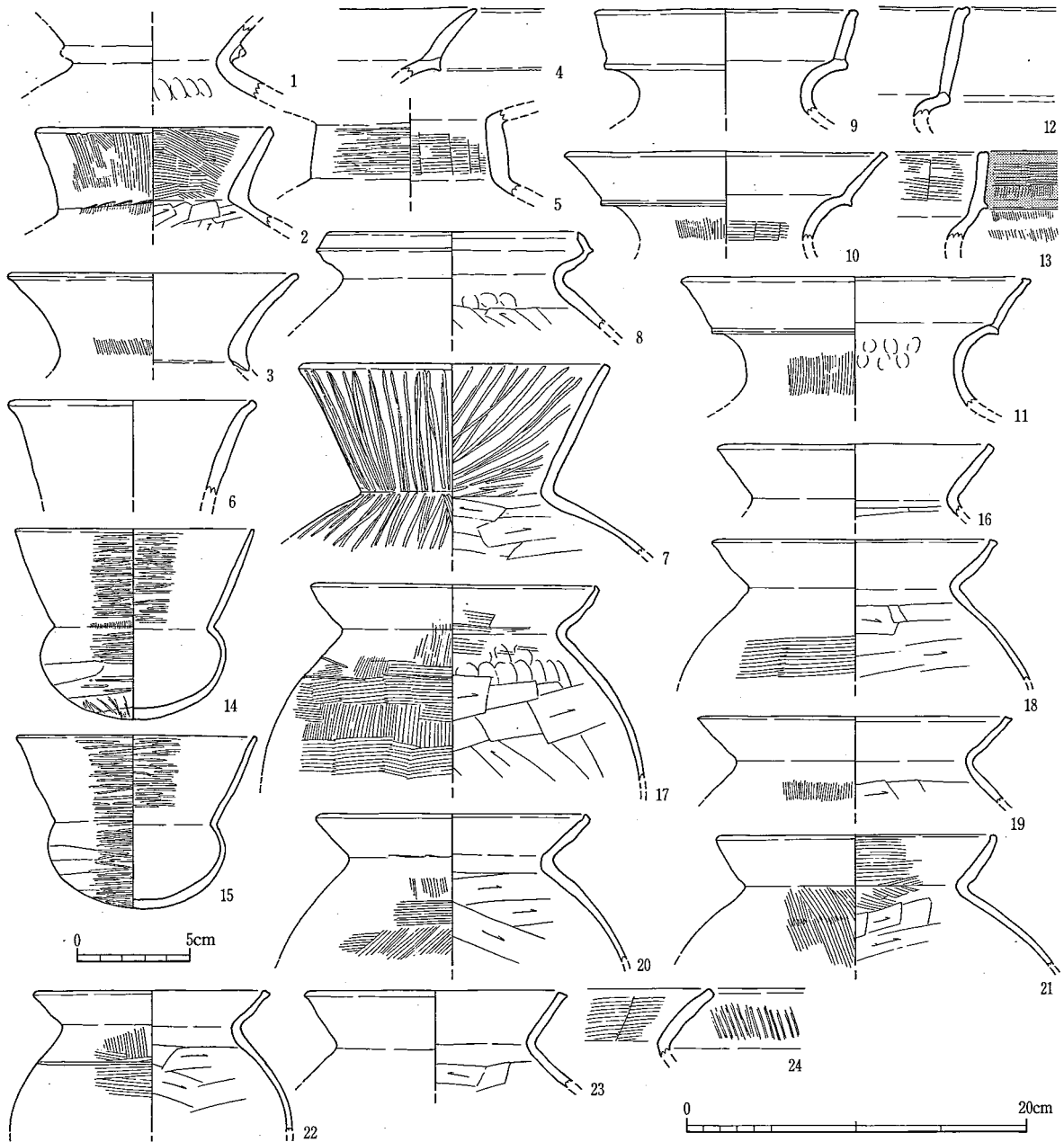
出土土器（第69～71図） 1～51が本住居跡出土品で、残りは30号住居跡周辺包含層から出土したものである。

1は大きく外傾する口縁部をなす壺頸部片。頸部には頂部を欠失した突帯を貼付する。2は在地系と思われる壺口縁部で内面に斜めハケ、外面に縦ハケを施す。3は直口壺口縁部であるが、外反が強いので畿内系とは異なる。外面にはスリップ状に橙色土をかける。4は畿内系二重口縁壺口縁部で、5はその頸部か。4は内外とも橙色のスリップを施し、5は内面に横ハケをし、口縁部にはやはり橙色スリップを施す。6は布留系の直口壺。外面と胴部内面に丁寧な暗文風の縦ミガキ、斜めミガキを施した7は畿内系直口の壺の形態をなすが、暗文は在地系のものか。8は瀬戸内系の二重口縁壺か。口縁部は短く内傾し、胴部は縦方向のヘラケズリを施す。9～13は山陰系の二重口縁壺で、13の口縁部外面には赤色顔料を塗布している。14・15は口縁の長く伸びる小形丸底壺で、いずれも外面の口縁部～胴部上半はハケメ、底部はヘラケズリし、外面から口縁部内面にかけてミガキを施している。9は黄褐色、12は暗黄褐色、14・15は橙褐色を呈し、他は淡黄褐色、白黄褐色を呈する。

16～23は布留系甕。口縁端部は外傾する面をなすものが多いが、21は口縁端部が丸みを帯びる。22は肩部に1条の沈線を巡らし、17は断続的に沈線を施している。18は外面全体に煤が付着している。24は在地系甕口縁で口縁部内面に横ハケ、外面に粗い縦ハケを施す。16は黄褐色、19は明黄褐色、24は暗黄褐色、他は灰黄褐色、淡黄褐色。

25～27は高杯脚部である。25は脚柱部が短く裾が強く外折する形態で、裾部に乾燥が進まない段階で穿孔を施している。26は脚部破片で脚柱部から裾部へ緩やかに移行する。外面は縦ハケ仕上げのまま、脚柱部内面はヘラケズリである。27は脚柱部下方にある程度、乾燥が進んだ段階で外から穿孔している。外面は縦ハケ後横ミガキし、内面は縦ハケが見える。25は淡黄褐色を呈し、他は橙褐色。

28は器形が深く、短くわずかに外傾する口縁部が付く鉢で、胴部外面は板ナデを施す。29・30は小形丸底壺に類似した器形の外反口縁鉢で、いずれも底部近くをケズリで仕上げている。30は摩滅のため調整不明であるが、29は内面ハケ後ナデ、口縁部外面ハケ後横ミガキである。31は小形の二重口縁鉢で外面横ミガキし、内面は摩滅している。32～37は深めの山陰系二重口縁鉢である。32はやや小振りであるが外面の胴下半は斜めハケメ、内面は横ミガキした精製品。33～37は大形品である。33

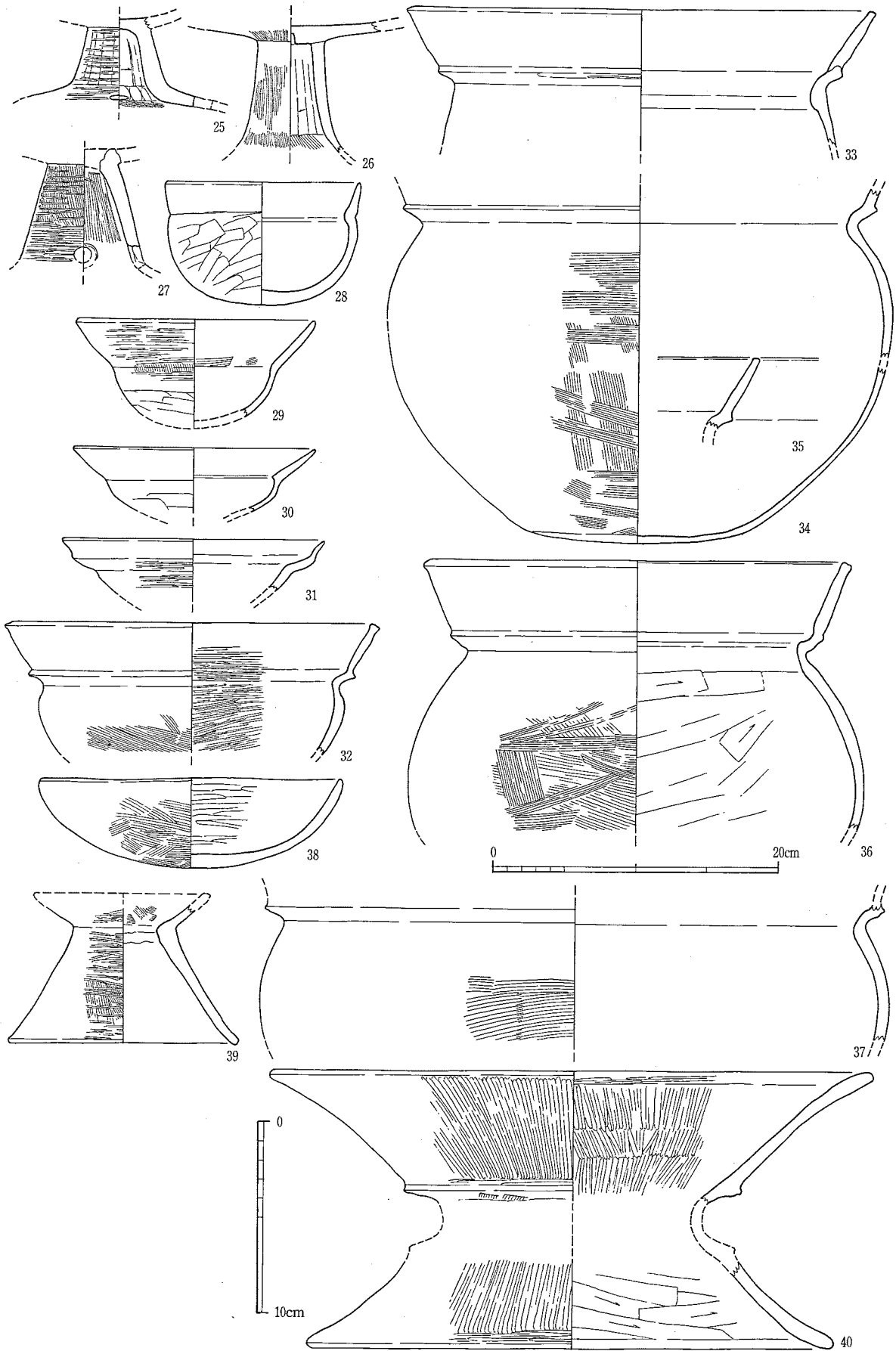


第69図 30号竪穴住居跡出土土器実測図(1) (14・15は1/3、他は1/4)

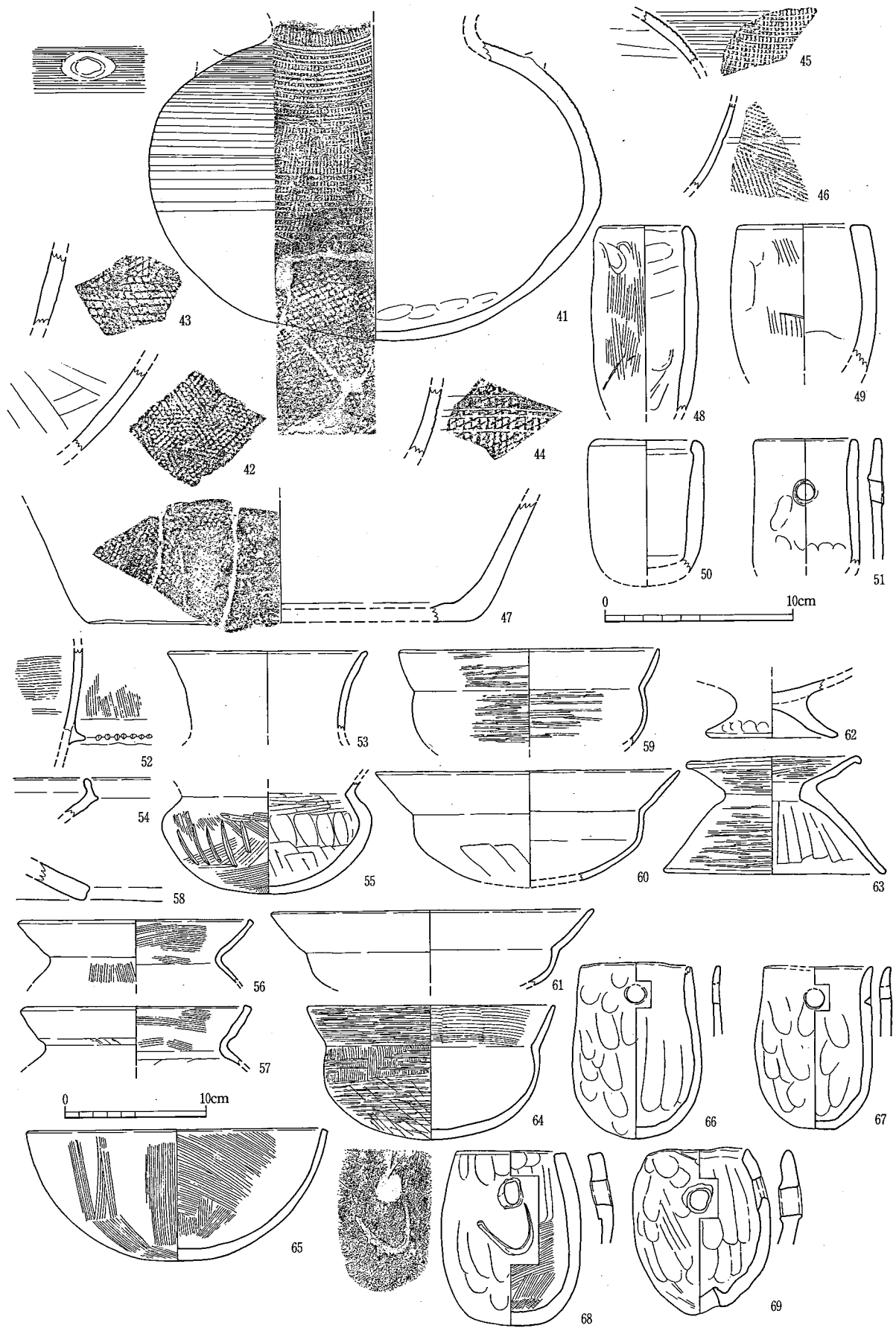
は擬口縁の外面に沈線、凹みが一部残り、34は径の大きい平底を呈す。34・37の内面は摩滅し、33・36はヘラケズリする。38は丸底で外面斜めハケ、内面太い横ミガキを施す。これらの鉢は28・30～32は橙褐色～淡橙色、他は淡黄褐色、灰黄褐色、白黄褐色を呈す。

39は小形精製の器台である。脚裾が比較的長く、通常の精製器台とやや器形が異なる。外面は縦ハケの後横ミガキし、内面は受部が斜めハケ、他はナデである。40は大形の山陰系鼓形器台で外面～口縁部内面を縦ミガキ、口縁部と突帯付近を一部横ミガキし、裾部内面はヘラケズリのままである。上部は46号住居跡、下部は30号住居跡より出土し接合しないが、同一個体と考えて間違いはない。いずれも橙褐色～黄橙色。

41～47は半島系土器である。41は胴部がほぼ完存する。胴部上半部を平行タタキの後、水平方向



第70図 30号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (32~37は1/4、他は1/3)



第71図 30号竪穴住居跡出土土器実測図(3) (52・53・56・57は1/4、他は1/3)

の沈線を密に巡らし、下部は格子タタキ。内面はナデであるが、底部に微かな凹凸がある。肩部に2ヶ所耳の剥離した痕跡が有り、その周囲は丁寧なナデによりタタキ、沈線が消えている。42は格子タタキを施すもので、接合しないが41と同一個体の底部近く破片だろう。いずれも胎土に長石、石英粒をかなり多く含み、焼成はいわゆる瓦質に近く灰色を呈す。43・44は斜格子タタキを施し、44はその後、水平方向の沈線を巡らした胴部片。軟質焼成に近く淡黄褐色～淡赤褐色を呈す。45は壺肩部破片で平行タタキの後水平方向の沈線を密に巡らす。胎土は精良で陶質焼成に近く灰黄色。46は縄蓆文タタキ後やや太い凹線を巡らした胴部片。焼成は堅緻で陶質に近く、赤茶褐色を呈する。47は径の大きい平底からやや斜めに胴部へと立ち上がる破片である。胴部外面は格子タタキを施す。焼成は瓦質に近く、淡灰褐色を呈す。

48～51は蛸壺で、橙褐色の49以外は淡黄褐色を呈す。

52～63は30号住居跡北包含層から出土した。52は在地系の二重口縁壺胴下部の突帯付近の破片である。53は畿内系直口壺かと考えられる。54は瀬戸内系の二重口縁壺口縁部。55は外面と胴内面上部に一部ミガキを施すが、基本的には外面ハケメ、内面ナデ上げ後ヘラケズリで仕上げた粗製の小形丸底壺である。胴部外面には5条の縦方向線刻を施している。56・57は布留系の甕口縁部で、いずれも内面に横ハケを残している。58はかなり厚いが、高杯裾になると思われる。59・60は外反口縁の鉢で、59は外面縦ハケ後横ミガキ、口縁部内面は横ナデ、胴部内面は横ミガキを施している。60は薄い作りであるが、外底部ヘラケズリ、他はナデで仕上げ、ミガキを施さない。61は摩滅のため調整不明。62は脚付鉢脚部である。63は小形精製の器台であるが、口縁端は下方にわずかに垂れ、裾部は内湾するやや特異な器形である。外面から受部内面にかけて横ミガキし、裾内面はヘラ状工具による縦方向のナデを施す。59が灰色、61・63は橙褐色を呈し、他は淡黄褐色～灰黄褐色を呈している。

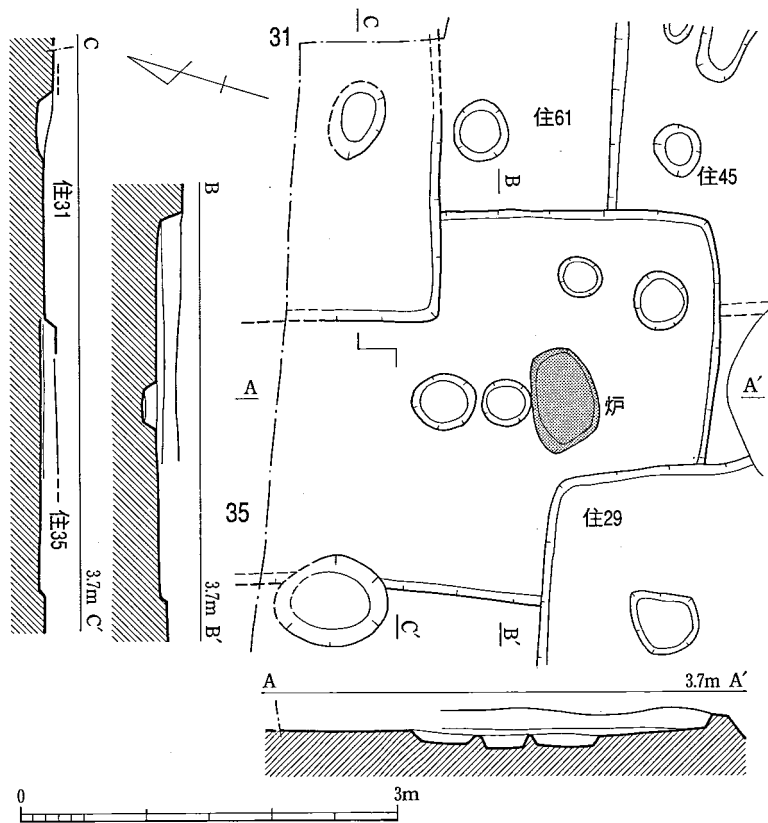
64～69は30号住居跡西包含層から出土したものである。64は外反口縁の精製鉢で、外面は胴上部タテハケ、下部ヘラケズリの後、横ミガキを施す。内面は口縁部が横ハケ、胴部がナデで仕上げる。65は単口縁の鉢で内外をハケメで仕上げる。66～69は蛸壺であり、67は口縁下に紐孔とは別に貫通しない穿孔が有り、69は底部に水抜孔が見られる。64は赤褐色を呈し、他は白黄褐色～黄褐色である。(重藤)

31号竪穴住居跡 (図版22、第72図)

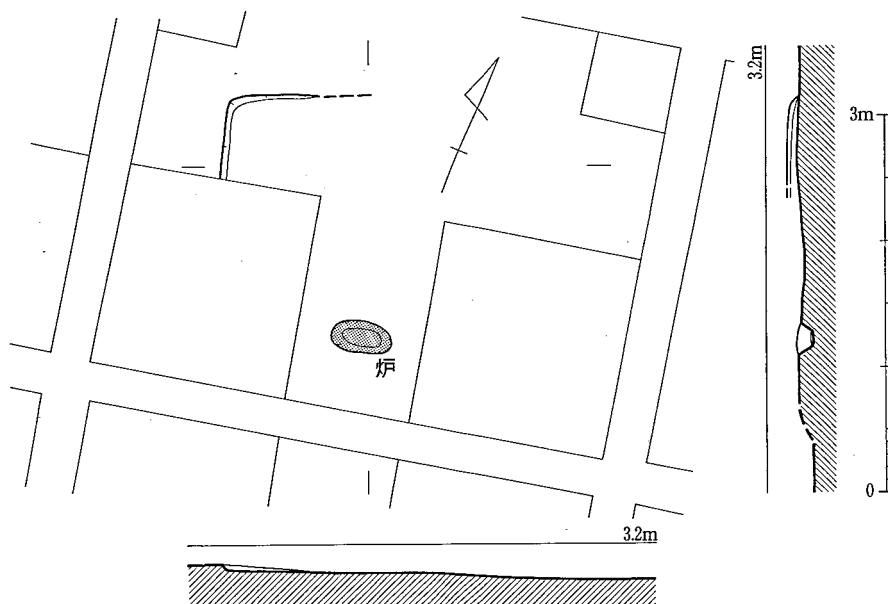
1北拡張区に位置する。29号竪穴住居跡の北東で検出され、35号竪穴住居跡を切ると考えたものである。ほとんどが調査区外にある。したがって、南西部隅を検出したにとどまり、竪穴住居跡となるかどうかさえも不安である。そのため出土遺物は少なく、この住居跡に伴うものとして図示できる土器はなかった。(重藤)

32号竪穴住居跡 (図版23、第73図)

大きな基礎によりほとんど攪乱を被っていた2北区で検出した唯一の竪穴住居跡である。南に大きな基礎が有り、その構築のために基礎周辺も掘削されている。そのため検出できたのは西北隅付近の壁と炉跡のみである。壁の残存高も5cmに満たない。出土遺物は図示できるものがないが、蛸壺片、精製の小形丸底壺片などがある。(重藤)



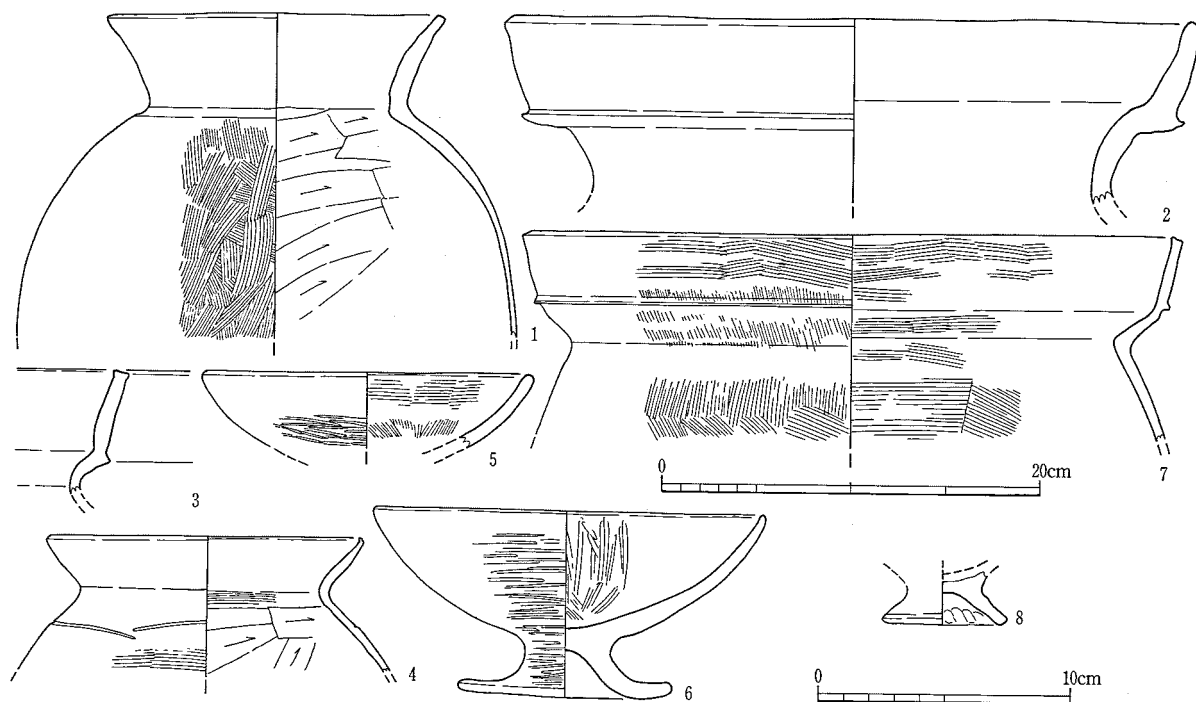
第72図 31・35号竖穴住居跡実測図 (1/60)



第73図 32号竖穴住居跡実測図 (1/60)

35号竖穴住居跡 (図版23、第72図)

29・31号竖穴住居跡に切られ、45・61号竖穴住居跡を切ると考えて発掘したが、切合関係はやや不安である。南北に長い長方形を呈すると考えられ、北壁は調査区外にあり検出していない。中央



第74図 35号竪穴住居跡出土土器実測図（5・6・8は1/3、他は1/4）

やや南壁よりに長軸0.8m、短軸0.5mの楕円形を呈する炉跡がある。暗灰色細砂を埋土とする。土器以外に覆土より不明鉄器（第238図43）が出土した。

出土土器（第74図） 1は直口壺で外面は縦～斜めハケで、内面は頸部近くまでヘラケズリを施す。2・3は山陰系二重口縁壺の口縁部で、2は大形品になる。

4は布留系の甕である。口縁端部をわずかに上方につまみ出し、肩部に1条の沈線を巡らす。

5は鉢口縁部で内面横ハケ後、斜めハケを施し、外面は横ミガキする。6は脚付鉢で外面横ミガキ、鉢部内面縦ミガキを施す。脚は内面はナデである。7は口径35cmに達する大形の二重口縁で、恐らく深めの器形に平底の鉢となるであろう。内外面ともハケメで仕上げている。

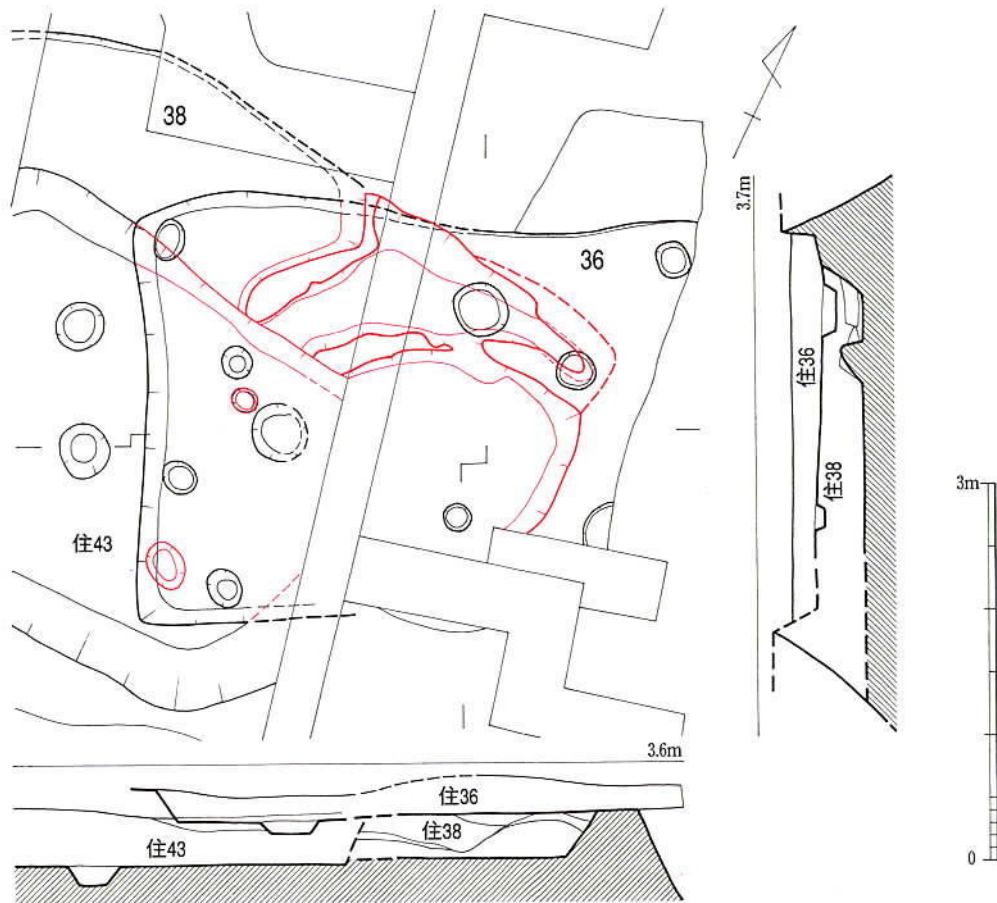
8は内面指頭圧痕が残る脚部片で、砂粒を多く含んだ胎土で二次加熱も顕著であることから製塩土器の脚部か。

5は淡橙褐色、6は黄橙色、8は暗褐色を呈し、他は白黄褐色～明黄褐色である。（重藤）

36号竪穴住居跡（図版23、第75図）

36号竪穴住居跡は調査区北東隅、2中区に位置する。38・43号竪穴住居跡を切ると考えて発掘した。東壁・南壁のほとんどは校舎基礎構築時の攪乱により残っていない。覆土は暗黄灰色細砂で、東西4.4m以上、南北3.5mの長方形住居である。床面にはピットを確認したが、炉跡はない。住居跡北東隅で土器が集中して出土した。なお36・38・43号竪穴住居跡の上層は調査時は住居跡として発掘したが、検討の結果、住居跡として扱わず、36・38・43号竪穴住居跡上層とした。この上層から鉄器片が出土した（第238図47）。

出土土器（第76・77図1～46） 1は畿内系の直口壺である。43号住居跡の破片と接合した。外面には頸部から肩にかけて縦ミガキを施す。2～5は山陰系二重口縁壺である。3～5は内面は頸部



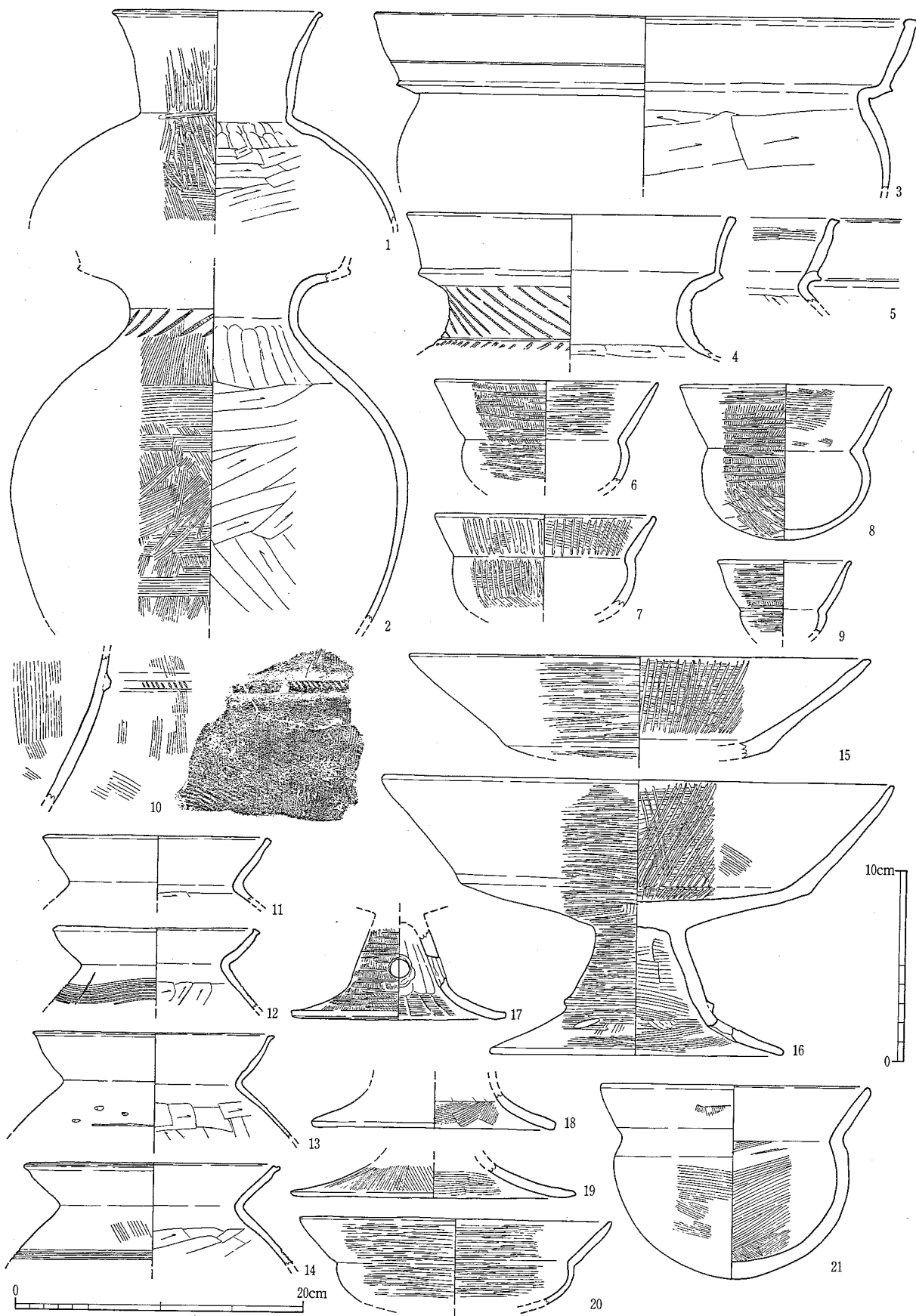
第75図 36・38号竪穴住居跡実測図 (1/60)

近くまでケズリを施す。2は頸部にハケ工具で斜めの刻み目を巡らす。43号住居跡の破片と接合した。3は口径38.0cmの大型品で、平底の鉢の可能性もある。口縁部内外面に煤が付着する。4は頸部から肩にかけてハケ工具で綾杉文のち1条の凹線を巡らす。5は口縁端部を外につまみ出す。6～9は畿内系小型丸底壺である。7は外面、口縁内面に縦ミガキを施す。9は口縁端部をわずかに外につまみ出す小型品である。1・2は黄茶褐色、3～5は白黄褐色、6・8は橙褐色、7・9は白黄褐色～黄褐色を呈す。

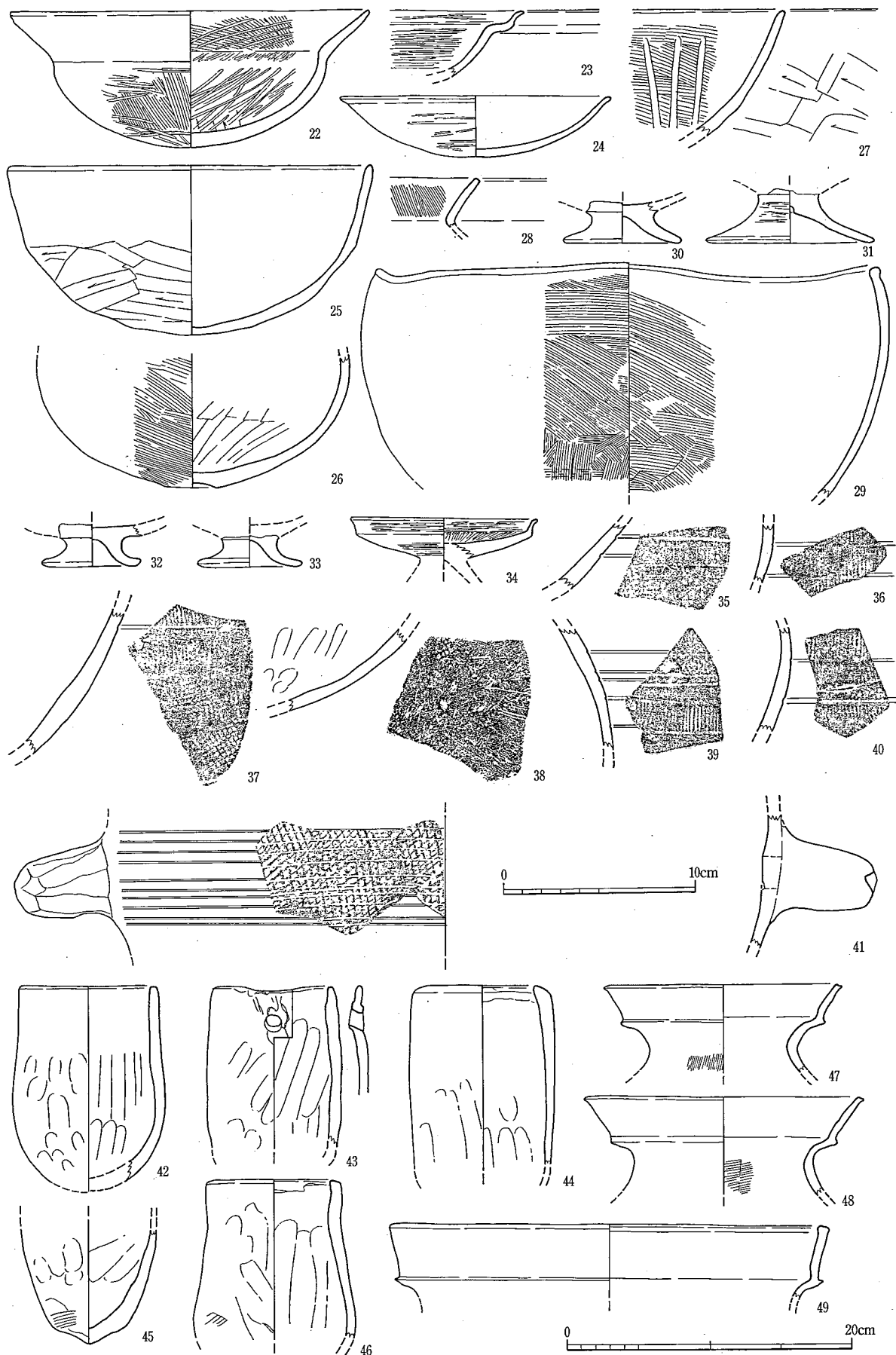
10は在地系の甕胴部片である。ヘラ工具による浅い刻目を施す突帯をもつ。11～14は布留系の甕である。11は内面頸部までヘラケズリを施す。12は内湾する口縁をもち、肩に櫛描文を施す。13は肩に棒状工具による刺突と凹線を巡らす。14は肩に櫛描文を施す。いずれも白黄褐色を呈す。

15～17は高杯である。15の内面は横ミガキのち暗文風の縦ミガキを施す。16は完形の高杯である。外面は横ミガキ、杯部内面は斜格子状のミガキを施す。脚柱部と脚裾の境には突帯を巡らす。脚柱部内面はハケで調整し、半乾燥段階で外から3ヶ所穿孔を施す。17は半乾燥段階で外から2ヶ所穿孔を施す。18・19は脚付鉢の可能性もある。15～17・19は橙褐色、18は白黄褐色を呈す。

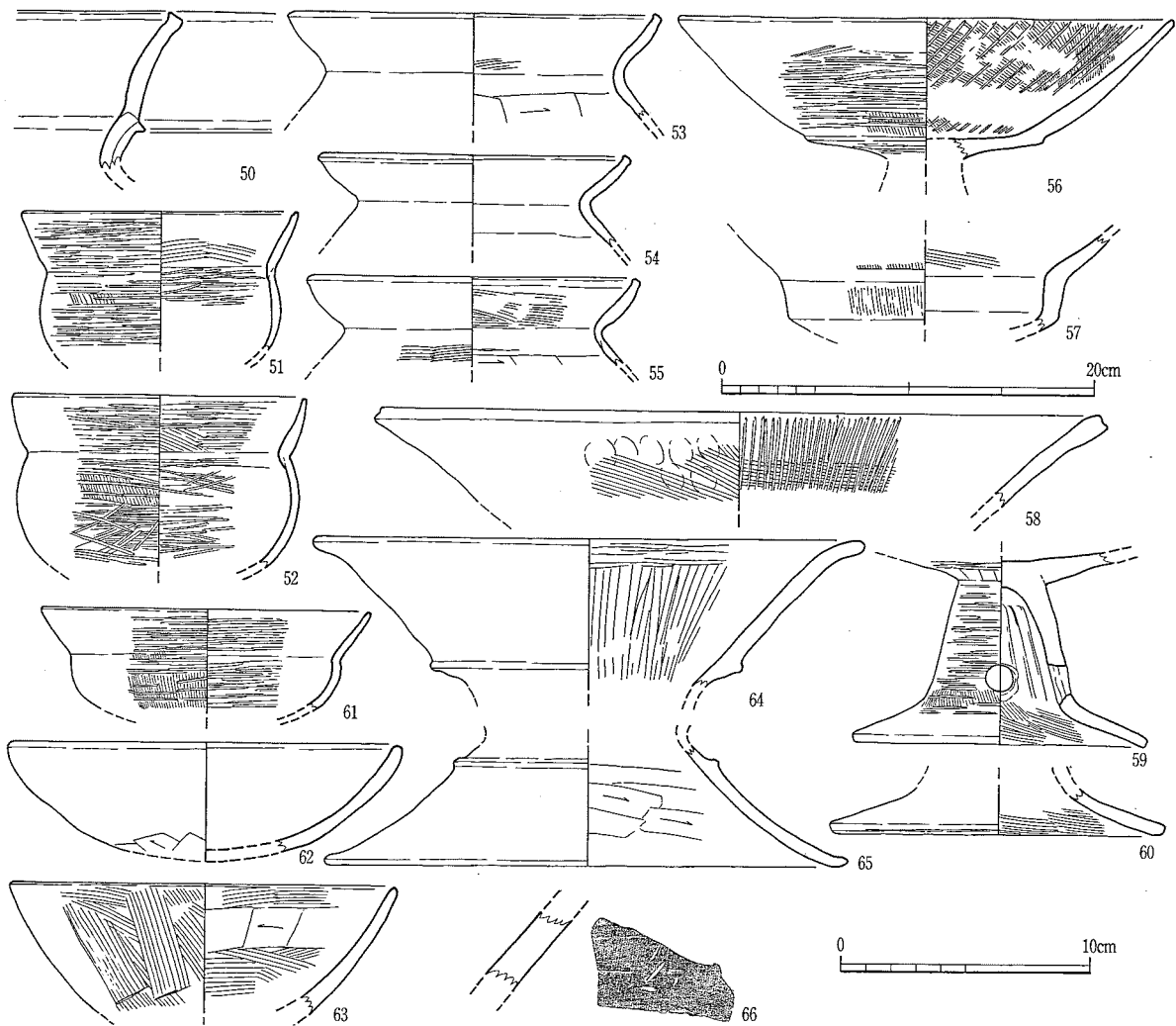
20～22は口縁部が外傾する鉢である。20は精製品で、内外面は細かい横ミガキを施している。21は器壁が厚い鉢で、底部には黒斑が残る。内外面に粗いミガキを施す。23は有段の精製鉢である。口縁端部を外反させる。外面はミガキを施すか。24は口縁端部をわずかに外反させる浅い鉢である。外面はミガキを施すか。25は粗製の深鉢で、外面にはケズリが残る。26はレンズ状の底部で、壺の



第76図 36号竪穴住居跡出土土器実測図(1) (1~5・10~14は1/4、他は1/3)



第77図 36号(2)、36・38・43号竪穴住居跡上層出土土器実測図(29・47~49は1/4、他は1/3)



第78図 36・38・43号竪穴住居跡上層出土土器実測図 (50・53～55は1/4、他は1/3)

可能性がある。内面は工具によるナデで調整する。27の外面はケズリ、内面は暗文風の太い縦ミガキを施す。28は小型甕の可能性もある。29は口径35.1cmの大型の鉢で、口縁端部を丸くおさめる。43号住居跡の破片と接合した。内外面はハケで調整を行う。30～33は山陰系脚付鉢の脚部である。31は脚内面に軸受痕がある。外面にミガキを施し、橙色を呈するため、小型精製器種の脚部の可能性もある。20・23・28は橙褐色、21・22・24～26・30・32は白黄褐色～黄褐色、27は暗褐色、33は灰黄褐色を呈す。

34は畿内系小型精製器台である。口縁部をゆるく外反させ、内面は暗文風の縦ミガキのち口縁部のみ横ミガキを施す。淡橙色を呈す。

35～41は半島系土器である。35～40は焼成は瓦質に近い。35・37は胴部下位片で、上位に平行タタキのち凹線、下位に格子タタキを施す。36・39・40は胴部片で、平行タタキのち凹線を巡らす。38の外面はタタキのちナデ消しか。内面は縦ナデを施す。41は軟質の大型鉢の胴部片である。外面は太い格子タタキのち凹線を巡らし、把手がつく。把手端部には乾燥時に把手を支えるためと思われる棒状工具の圧痕が残る。41は黄褐色、他は灰褐色を呈す。

42～46は蛸壺である。43は焼成前に外から穿孔を施す。45は底部近くにタタキが残る。42・43・

46は橙褐色、44は淡黄褐色、45は暗褐色を呈す。

36・38・43号竪穴住居跡上層出土土器（第77・78図47～66） 47～50は山陰系二重口縁壺である。48は頸部内面に横ハケが残る。50は大型鉢の口縁の可能性ある。口縁端部は面取りする。51・52は畿内系の精製小型丸底壺である。いずれも内外面に細かい横ミガキを施す。52はやや内湾する口縁をもつ。48は灰褐色、50は黄褐色、51・52は橙褐色、他は白黄褐色を呈す。

53～55は布留系の甕である。55は口縁部の器壁が厚く、内面に横ハケが残る。いずれも白黄褐色。

56～60は高杯である。56は杯部下部に段をつくる。外面は横ミガキ、内面はハケのち暗文風の縦ミガキを施す。外面には黒斑あり。57は杯部上段が屈曲する。磨滅するが、ミガキを施すか。58は高杯か。口縁端部を面取りする。小片のため、径に自信なし。内面は暗文風の縦ミガキを施す。59は半乾燥段階で外から2ヶ所穿孔を施す。56・59は黄褐色、他は橙褐色を呈す。

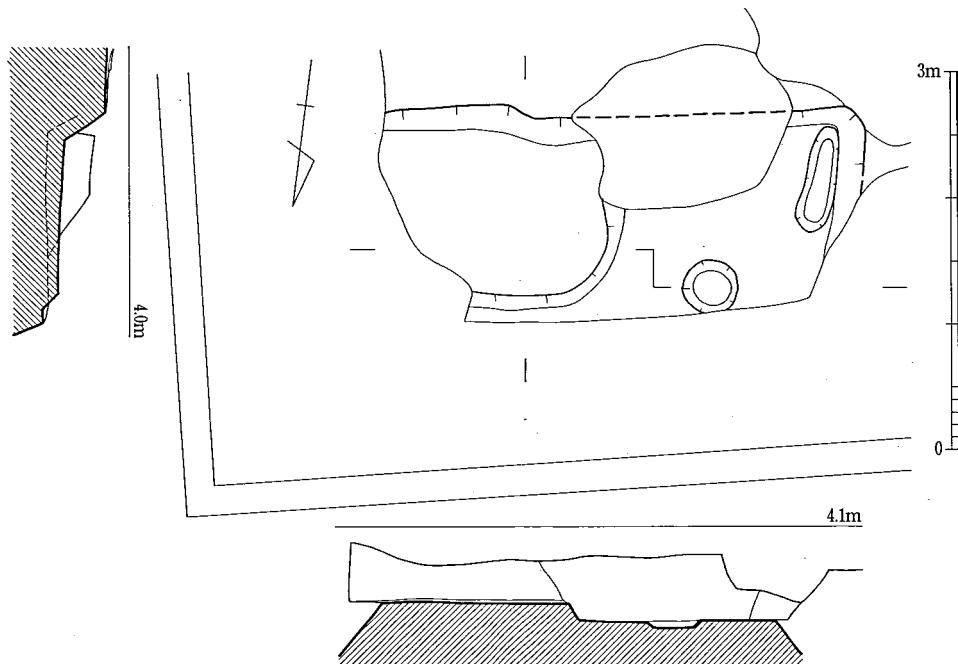
61は口縁部が外傾する精製の鉢である。内外面横ミガキを施す。62・63は粗製の鉢である。63は内面口縁の下にはハケのちケズリを施す。61は橙褐色、他は淡黄褐色を呈す。

64・65は山陰系鼓型器台である。別個体である。64の内面は縦ミガキのち口縁端部のみ横ミガキを施す。65の内面はヘラケズリで調整する。いずれも白黄褐色を呈す。

66は半島系土器である。胴部片で、器壁が厚い。内外面はナデで調整する。暗灰色。（大庭）

37号竪穴住居跡（図版24、第79図）

2南区東北隅で検出したもので、北東に校舎基礎構築時の大きな溝状攪乱が有り、南西隅から南壁にかけての部分しか残存しない。東部に高さ10cm程の段が有り、あるいはベット状遺構か。他住居跡との切合いはなく遺物の一括性は高いと思われる。埋土は褐灰色細砂を主体とし、下部に斑状に灰白色細砂が混じっていた。



第79図 37号竪穴住居跡実測図（1/60）

出土土器（第80・81図1～27） 8・9はベット状遺構構築土内から出土し、18・20・21・23～25は37号住居跡南の包含層出土で直接、住居に伴うものではない。他はいずれも覆土の下層より出土した。

1・2は畿内系の直口壺でいずれも口縁端部が凹んでいる。3は山陰系の二重口縁壺。肩部に3条1単位の櫛描波状文を施すが、本遺跡出土のこの種の器形にはあまり見られない装飾である。1・2は淡黄褐色、3は橙褐色。

4～11は畿内系の甕である。6は口縁部が厚く横ナデもさほど丁寧でない。9は肩部に6条1単位の櫛描直線文を巡らす、それを切って斜めハケメが施される。10は小形甕で口縁をわずかに内に屈曲させる。外面は粗い平行タタキの後、縦～斜めハケメを施す。内面は口縁部～胴上半までハケメである。外面の胴下部には煤が付着する。11は肩部に沈線文を巡らし、口縁外面に煤が付着する。10は暗黄褐色、他は白黄褐色～淡黄褐色を呈す。

12は高杯口縁部か。杯部内面は横ハケの後ナデを施し、外面は摩滅が顕著である。13は高杯杯底部から脚柱部にかけての破片で、裾部に乾燥前に4方向の穿孔を施す。外面は横ミガキ、内面は脚柱部をヘラケズリし、裾部に横ハケを施す。14は高杯脚部で外面～脚裾にハケメを施し、脚柱部内面はヘラケズリ。脚柱は全周し、裾部は1/2残存するが穿孔はない。13は淡橙褐色、12・14は白黄褐色を呈す。

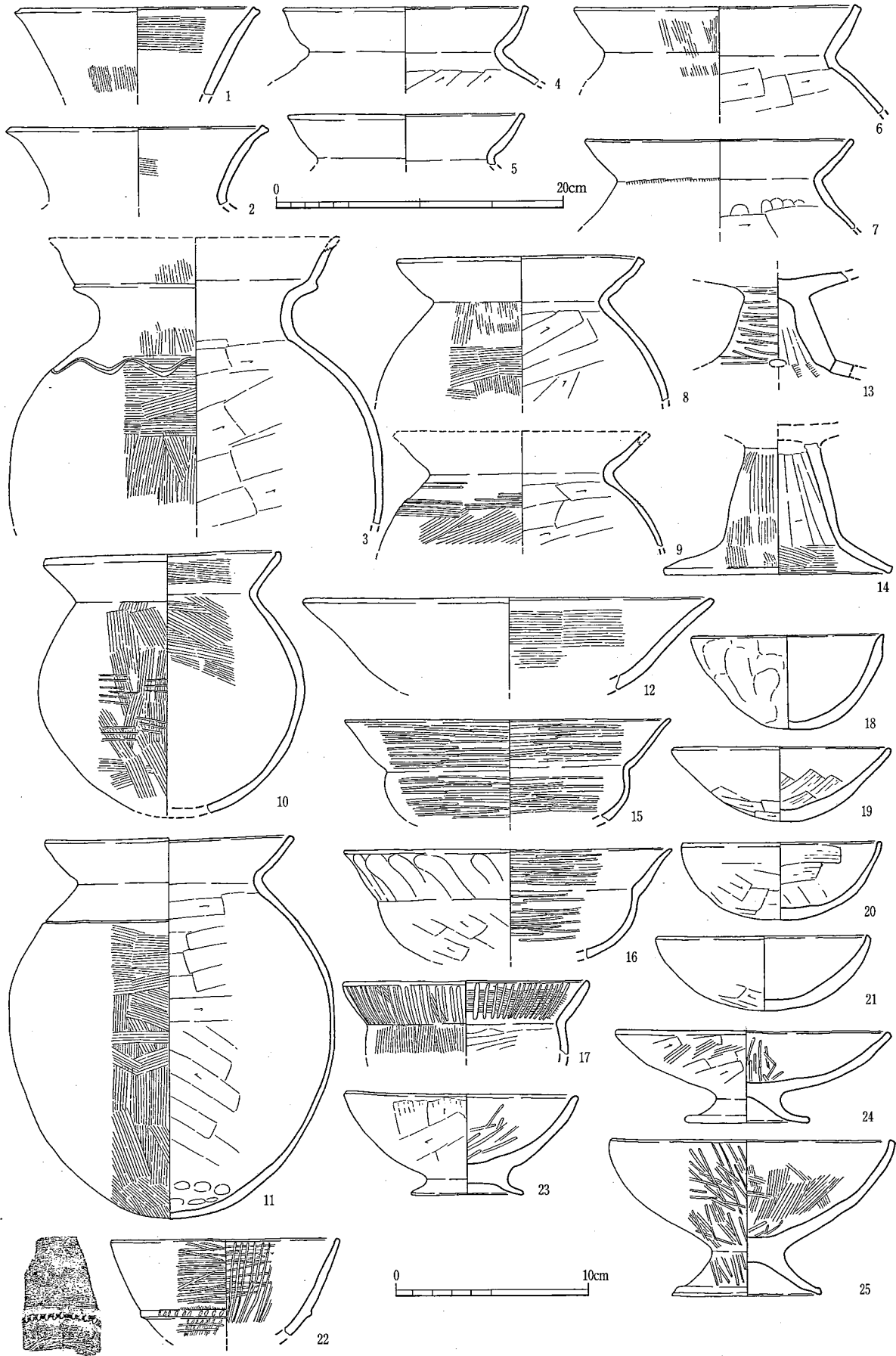
15～17は口縁の外反する鉢である。15は精製品で内外ともミガキを施す。16の外面はかなり摩滅するが口縁外面をナデ上げ、胴下半をヘラケズリすることが確認できる。内面は口縁部ナデ上げの後、胴部から口縁にかけて横ミガキする。17はハケメ後、口縁部内外に間隔の空いた縦ミガキを施す。胴部内面は横方向のケズリである。18～21は直口の鉢である。18は外面に粗いナデを施し、他は外底部をヘラケズリする。内面は19・20に板状工具によるナデが見え、他はナデで仕上げる。22は脚付きの精製鉢と考えられる。下部に三角突帯を貼付け、頂部に刻み目を施す。外面は横ミガキ、内面は横ミガキの後、暗文風の縦ミガキ。23～25は低脚の鉢で、23は外面板状工具によるナデ、内面ミガキを施す。24は外面ハケメ後に粗い板ナデを施し、内面をミガキで仕上げる。25は外面と内面底部近くにミガキを施すが、杯部内面はかなり縦ハケを残す。これら鉢は15・16・22が橙褐色、23～25は黄橙褐色、21は白橙色、他は灰黄褐色～白黄褐色を呈す。

26は精製の小形器台で脚部0・4時の方向に穿孔が残り、3孔と考えられる。穿孔は少し乾燥が進んだ段階で外側から行われ、内側が剥離する。外面は摩滅が著しいが杯部、脚部に横ミガキが観察される。ただ杯底部から脚にかけて縦方向稜が残り、口縁部付近は横ナデの凹凸が顕著であるので、ミガキを施すとしても本来より部分的なものにとどまったと推測される。橙褐色。

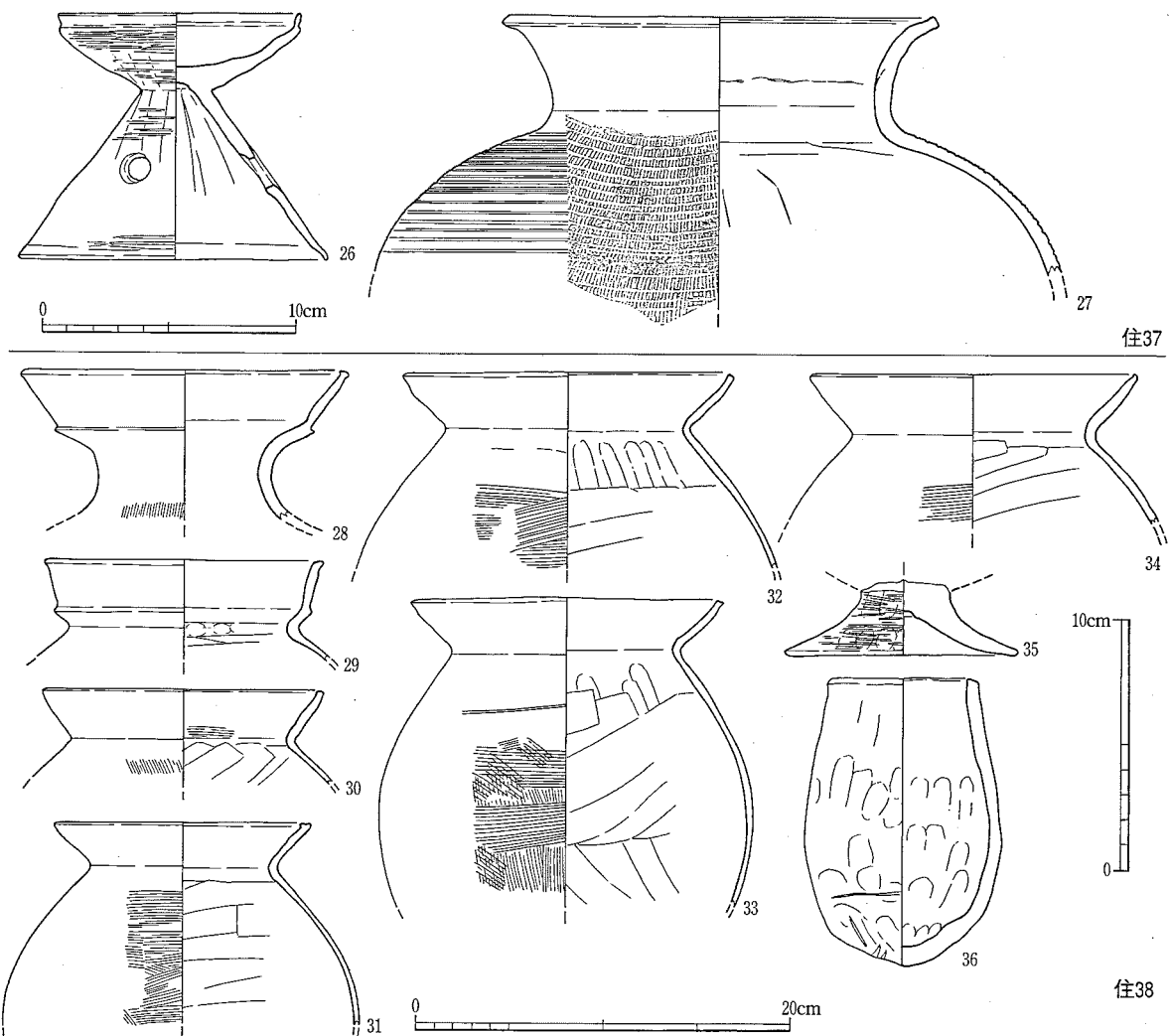
27は陶質に焼成された壺の肩部から口縁にかけての破片。口縁部は丸く外反し、端部近くでは上面がやや凹む。外面は密な平行タタキ後、横方向に沈線を巡らしている。胴部内面は上部に一部ヘラケズリと板状工具の静止痕が残るが、全体として丁寧なナデで仕上げる。焼成は堅緻で灰色を呈している。（重藤）

38号竪穴住居跡（図版24、第75図）

38号竪穴住居跡は2中区に位置しており、43号竪穴住居跡北にある。36・43号竪穴住居跡に切られると考えて発掘した。校舎基礎の攪乱によって、北壁と東壁の一部しか残ってない。43号竪穴住



第80図 37号竖穴住居跡出土土器実測図 (1~9・11は1/4、他は1/3)

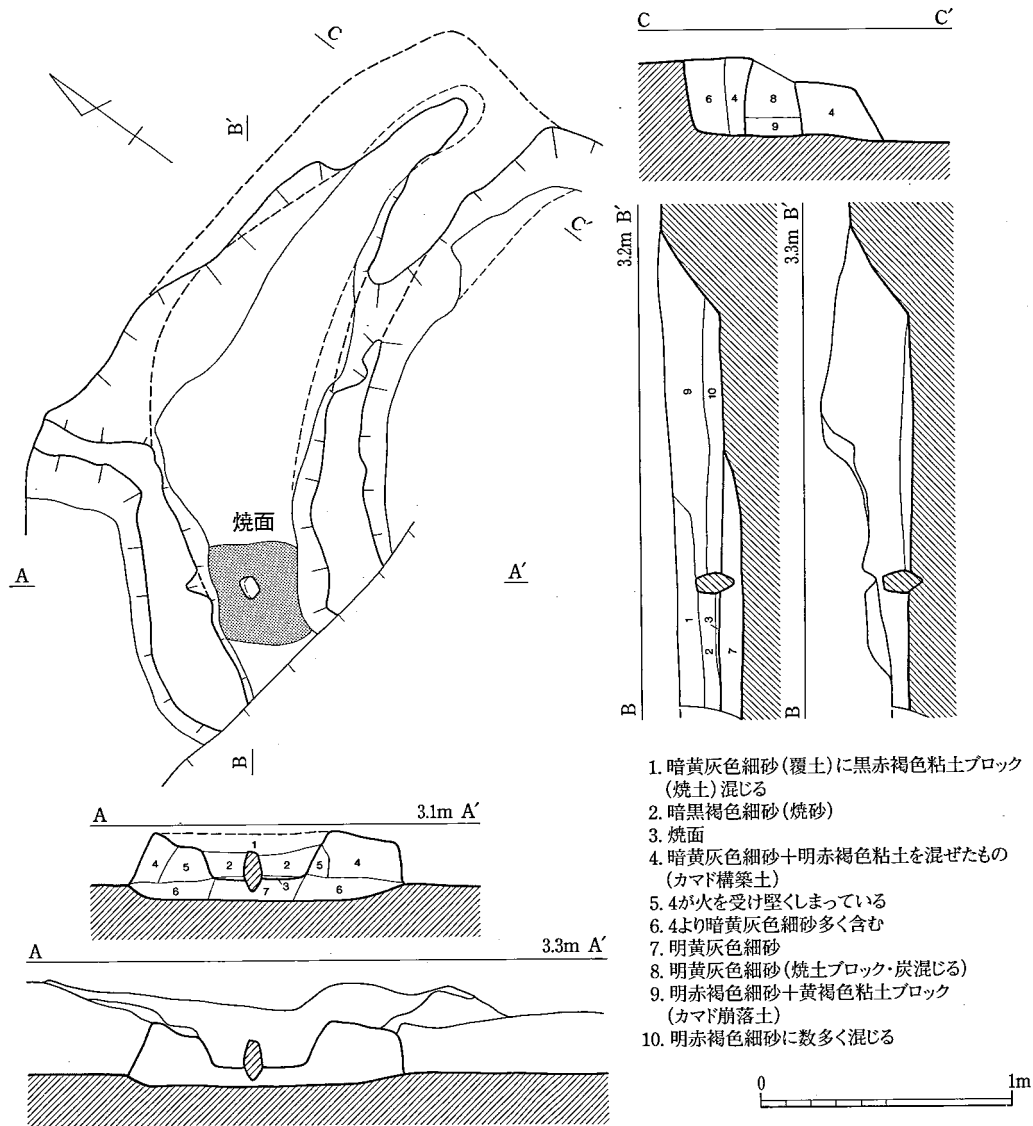


第81図 37・38号竪穴住居跡出土土器実測図 (28~34は1/4、他は1/3)

居跡北の壁は本住居跡の壁である可能性が高い。覆土は黄灰色細砂、東西5.2m以上で、平面プランは不明。ピットは確認できなかった。本住居北東隅には、煙道が北壁に沿ってのびるL字状のカマドを確認した。

カマド (第82図) 本住居跡北東隅に位置する。当初別々のカマドとして調査したため、掘りすぎの部分がある。平面プランは52号竪穴住居跡カマドと同じ形態で、煙道部が住居北壁に沿って非常に長くのびるゆるやかなL字状を呈す。両袖先端部は43号住居跡に切られるが、焚口は幅33cmを測り、カマド全長は東西約3.0m、煙道の最も残りのよい箇所、高さ約30cm残存する。支脚は石製で、その上から土器が出土した (第81図31・36)。支脚前後は非常に良く焼けており、硬化している。焚口は住居床面を掘りくぼめて構築しており、粘土と砂を混ぜたもので住居床面と同じレベルに構築している。焚口の両袖部分の残りは悪いが、攪乱によるものではなく、カマド廃棄時に壊されてしまった可能性が高い。袖は砂と粘土を混ぜたもので構築しており、その他の住居跡のカマドに比べ粘土の割合が高い。また煙道部の住居内側部分は粘土で袖を構築しているが、壁側は壁に粘土を貼り付けた状態である。煙出は住居外まで延びない。

出土土器 (第81図28~36) 28・29は山陰系二重口縁壺である。29は内面の頸部近くまでヘラケズ



第82図 38号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

りを施す。外面には煤が付着する。28は白黄褐色、29は灰黄色を呈す。

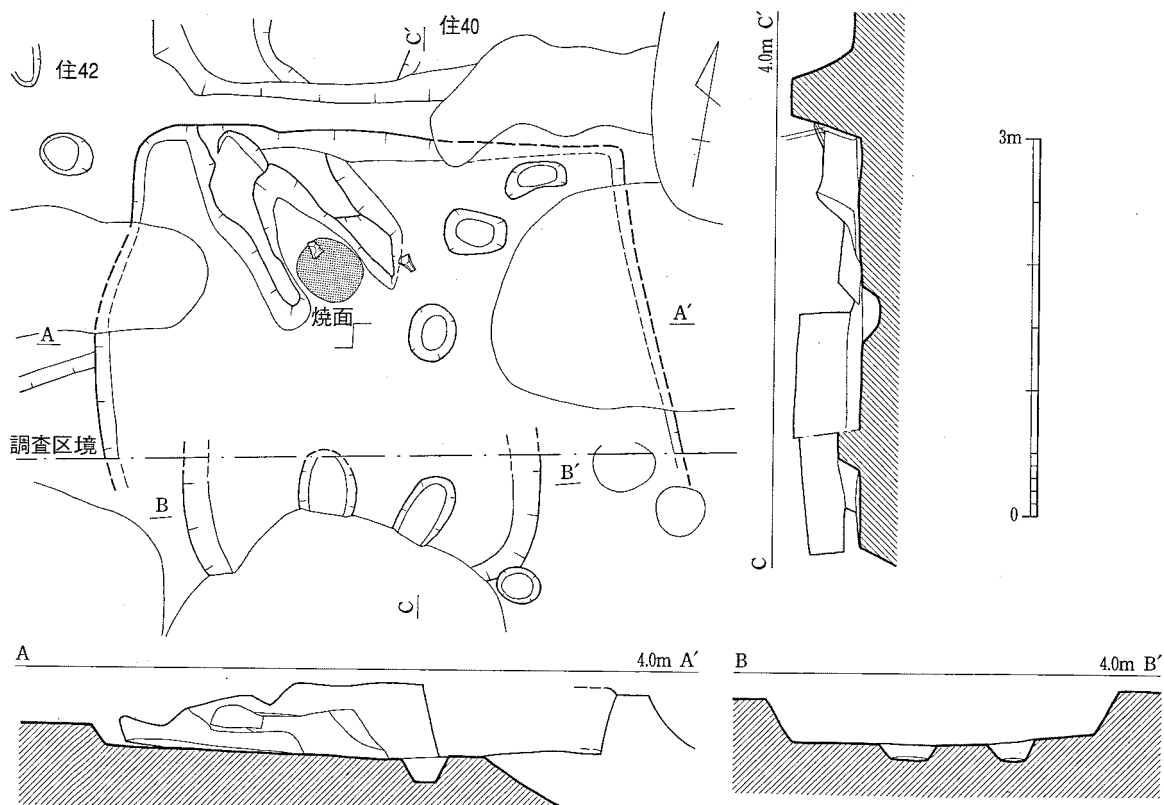
30~34は布留系の甕である。30・31・34は内面頸部近くまでヘラケズリを施す。31~34は肩に縦ハケのち横ハケを施す。32・33は内面のケズリ上端の位置が下がる。32は外面に煤が付着する。33は長胴の甕で、肩に凹線を巡らす。外面にタタキが残る。胴部は二次加熱で赤変し、煤が付着する。34は口縁部の器壁が厚い。33は灰黄色、他は黄褐色を呈す。

35は山陰系脚付鉢の脚部である。外面は横ミガキを施し、炭化物が付着する。橙褐色を呈す。

36はカマド周辺出土の蛸壺である。黄褐色を呈す。(大庭)

39号竪穴住居跡 (図版25、第83図)

2南区から3北1区にわたる竪穴住居跡で、42号竪穴住居跡を切り、40号竪穴住居跡に隣接すると考えて発掘した。カマドの位置関係から見ると42号住居跡との切合関係は確実と思われるが、北東隅近くに2基の大きな攪乱があり、なおかつ2つの調査区に及ぶために正確に平面プランを把握



第83図 39号竖穴住居跡実測図 (1/60)

できたとは言えない。実際、南と北で住居の輪郭線が食い違い、深さも一致していない。南と北の2棟の竖穴住居の切合いがあったか、あるいは南側の輪郭が正しく東西壁がもう少し内側にあり、南北に長い小形長方形を呈していた可能性がある。このような理由で出土遺物の一括性には問題がある。なお住居跡南部の床面から蛇紋岩製の勾玉3点(第239図6~8)、覆土から石錘(第244図40)が出土している。灰褐色細砂を埋土とし、北東部には暗褐色細砂も堆積していた。

カマド(第84図、図版39) 上述したような理由で住居平面形に問題があるが、ここでは発掘時の認識のままに説明を行うことにしたい。カマドは住居北西隅よりやや東の壁面から対角線方向に伸びている。北壁と接する部分では厚い壁体となっている。カマドの奥壁から0.5mの位置に角礫を用いた支脚がある。支脚の高さからすると住居全体の床面は本来は5cm程高かったと考えるべきであろう。支脚の全面は0.5m余りの範囲で床面が褐色に熟変していた。カマド壁体は明褐色~黄褐色の粘質砂を主体に構築している。12層はカマドの構築土ではなく攪乱を被り削られた層と考えて掘り下げたが、煙道の埋土を示すものかも知れない。

出土土器(第85図) 1・11・13がカマド内より出土、7・14が住居跡南部覆土中から出土。

1は山陰系二重口縁壺口縁部で暗灰褐色を呈す。2~5は小形丸底壺である。2の外表面はタテハケの後、横ミガキを施す。3は口縁中間が厚く、頸部にかけて丸く凹む形態が特徴的。3内面に工具痕が残るが、2・3とも内面をナデで仕上げる。4外表面は胴下半ヘラケズリ、それ以外を縦ハケで調整した後、横ミガキで仕上げる。内面は口縁部に横ハケ、胴上部に強い横ナデが残る。胴下部は横ハケをナデ消した後、ミガキを施す。5はやや大振りな器形で外表面に暗文風の縦ミガキを施す。口縁内面は横ハケ、胴部内面はヘラケズリである。2~4は精良な胎土を用いた精製品で橙褐色を

呈す。これに対して5は作りにやや粗さがうかがえ、淡黄褐色を呈す。

6～9は甕である。6は口縁部の横ナデが発達せず、頸部内面に横ハケが残る。内面にコゲ、外面に煤が厚く付着する。7・8は布留系甕で、8の肩部には1条の波状沈線文を巡らしている。9は小形の甕で器形が厚い。胴部外面は上部縦ハケ、中央部横～斜めハケ、底部縦ハケの順でハケメを施し、肩部には櫛描平行線文を施文する。胴部は完存するが黒斑はない。6が暗黄褐色、7が暗褐灰色、8・9が淡黄褐色を呈する。

10は高杯脚部で外面はハケメ、横ナデで仕上げる。黄橙色を呈する。

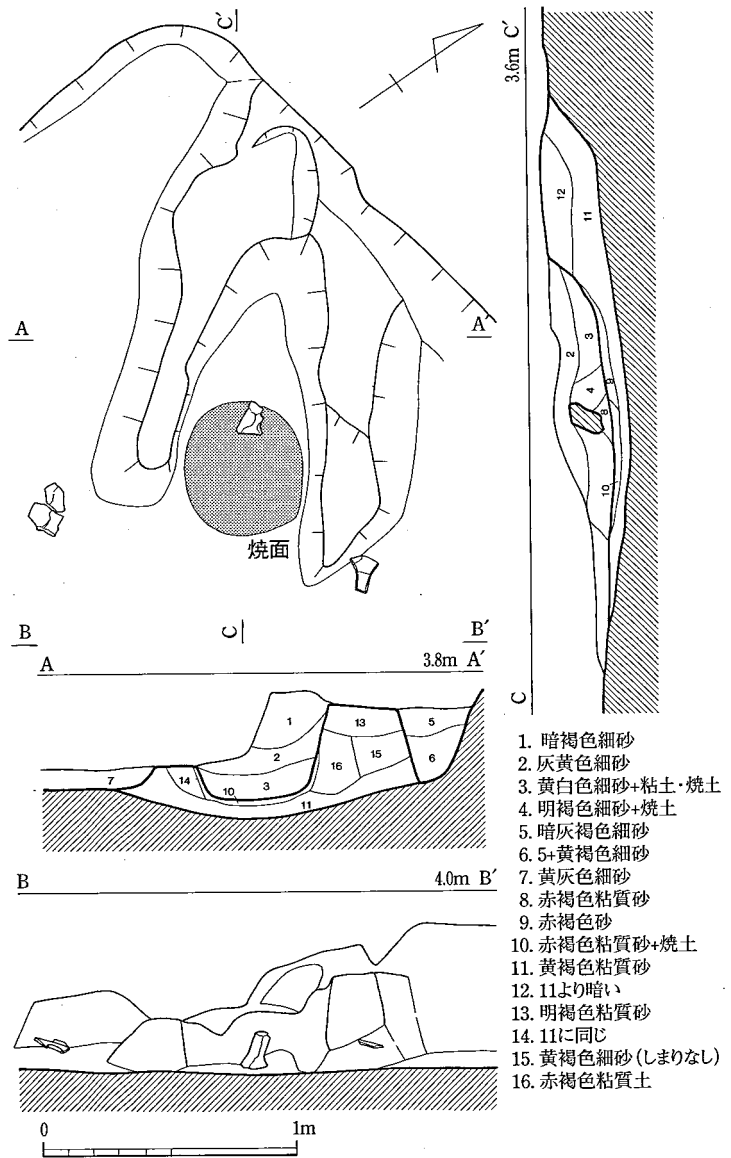
11は外面ミガキで仕上げた精製の鉢で、内面は摩滅する。12も内外をミガキで仕上げるが、内面上部に工具のあたりらしき線条、外面に粘土の接合痕かと思われる皺が残る。13は深い器形をなし、外面ヘラケズリ、内面板状工具によるナデで仕上げた粗製品。14は脚付鉢で、外面は摩滅しているが内面は丁寧な横ミガキを施す。胎土も精選された精製品。11・12・14は橙褐色を呈し、13は暗褐色を呈している。

15は陶質焼成の口縁部片で端部は下にやや拡張する。胎土は精良、焼成は堅緻で灰褐色を呈したものである。(重藤)

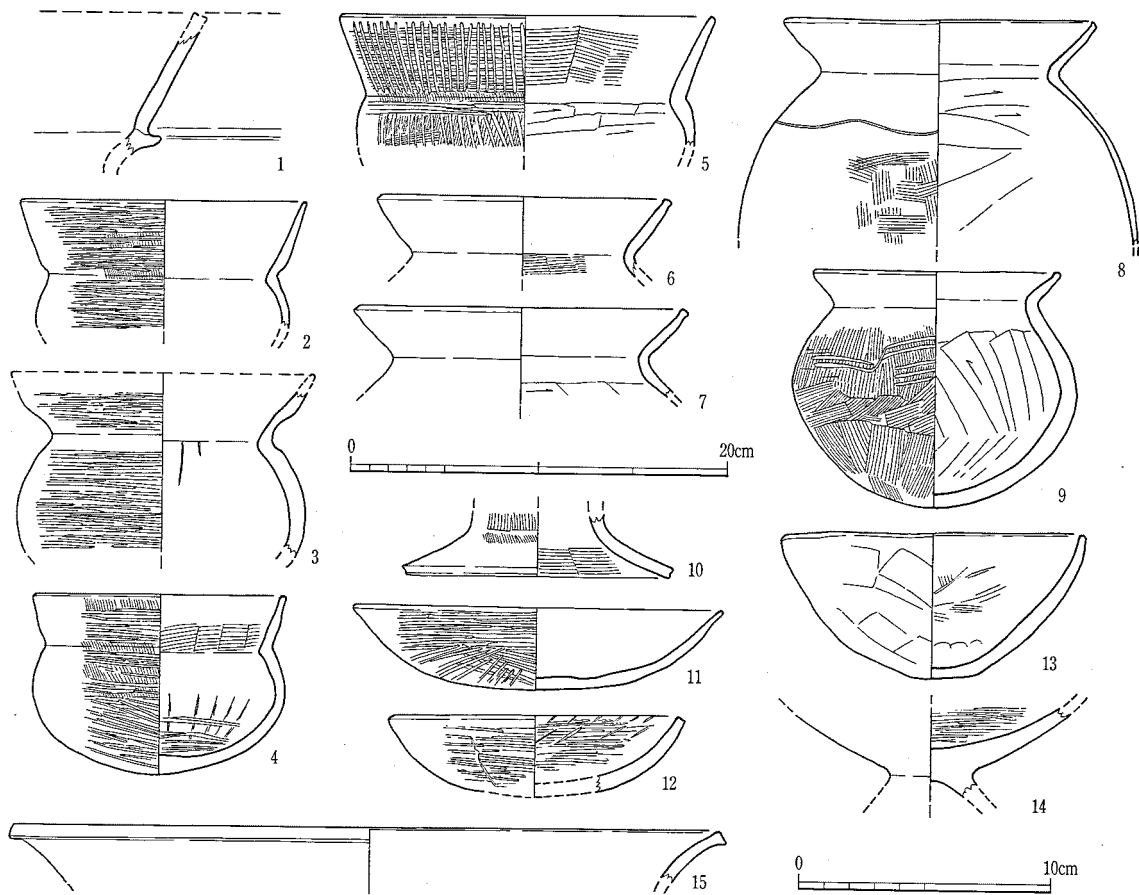
40号 竪穴住居跡 (図版25、第86図)

39号 竪穴住居跡の北側に位置する大形の竪穴住居跡である。北壁は校舍基礎周囲の掘削により失われて検出できなかった。南東壁にあたる部分にも大きな近世攪乱があり、39号住居跡と切合わないと考えて発掘を行ったが確信は持てない。南北壁は北東部のカマド、南西部の焼土集中部分を取り込んだ範囲を考えたに過ぎない面がある。一方、東壁、西壁は比較的、明瞭に検出することができた。このような問題はあるが、1辺6mに達する本遺跡の中でも比較的大形の住居跡となっている。覆土は上層が明褐色細砂、下層北部は暗褐色細砂、南部は灰褐色～褐色細砂であった。土器以外に浮子(第244図43)、砥石等の石器(第248図29～31)が出土している。

焼土集中部分(第87図) 住居跡の南西にまとまって住居跡埋土とは全く異なる熱を受けたような



第84図 39号 竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

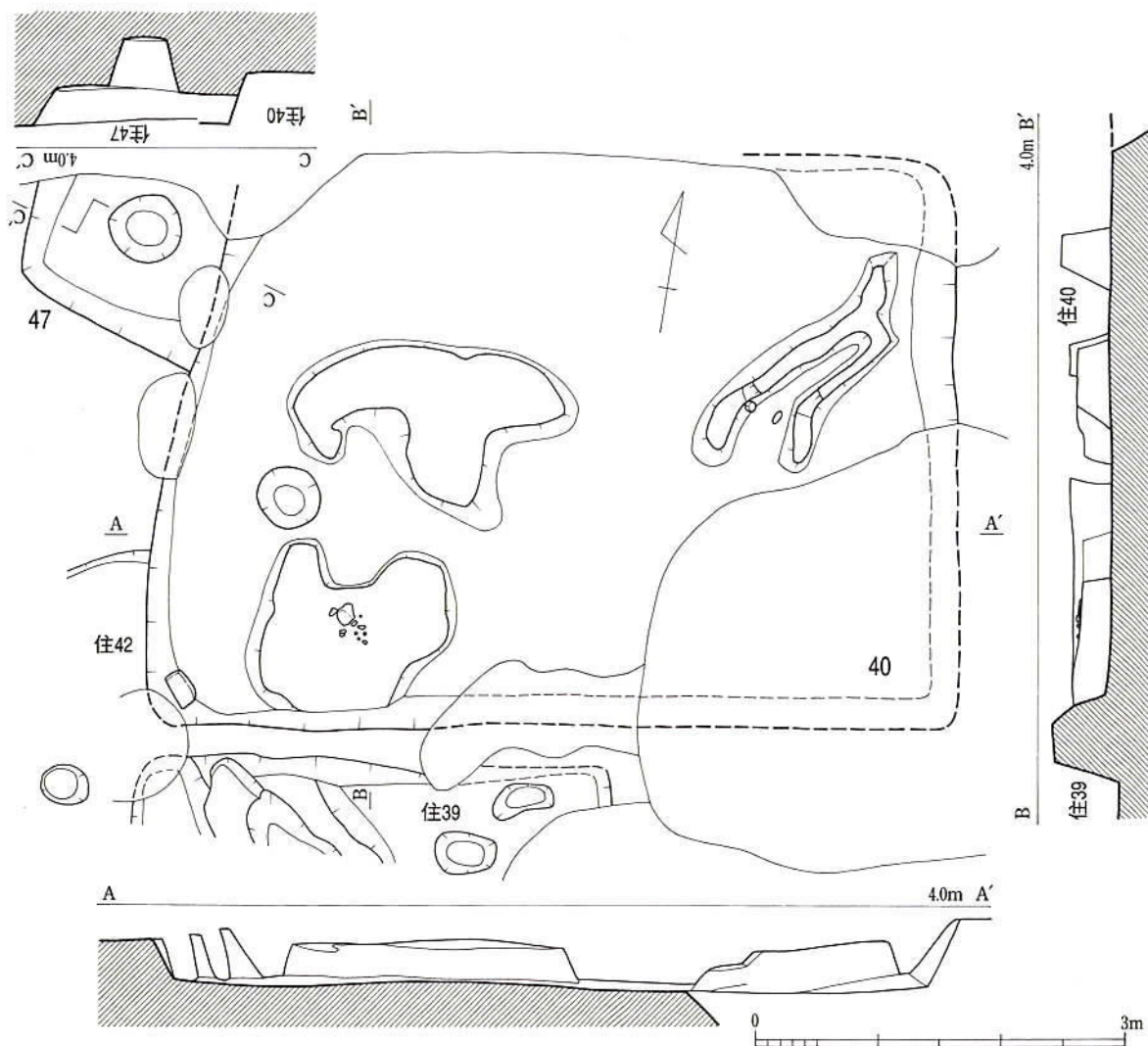


第85図 39号竪穴住居跡出土土器実測図（1・6～8は1/4、他は1/3）

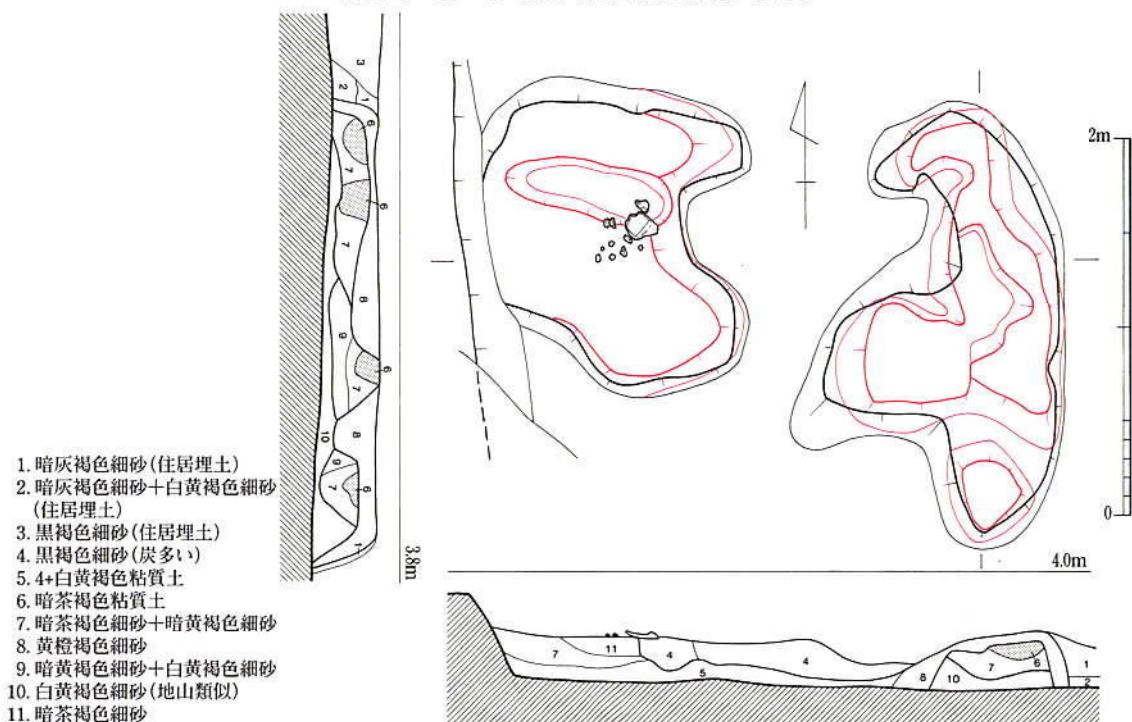
暗茶褐色細砂、暗茶褐色粘質土が分布していた。その中には堅く焼けた炉壁のような土も有り、その部分に暗茶褐色細砂、暗茶褐色粘質土により構築された構造物が残存しているのではないかと考えて発掘を行った。

これらの土を残して発掘したところ、結果的には南北に向かい合う太いU字形のような平面形態で暗茶褐色細砂と暗黄褐色細砂が検出され、その上面に所々、暗茶褐色粘質土がのっている状況が確認された。しかしながら、堅く焼けた土塊が炉壁であるか、どのような形態の構造物で何を目的としたものかは全く手掛かりがつかめなかった。一方では埋土中に焼土、暗茶褐色細砂を投棄したという考え方も完全には否定できない。ただ、断面図に見るように意図的に暗茶褐色細砂、暗茶褐色粘質土を積んだかのような部分があることは確かであり、この住居の大形の平面形も考慮するならばここに何らかの構造物があった蓋然性は高いものと考えている。

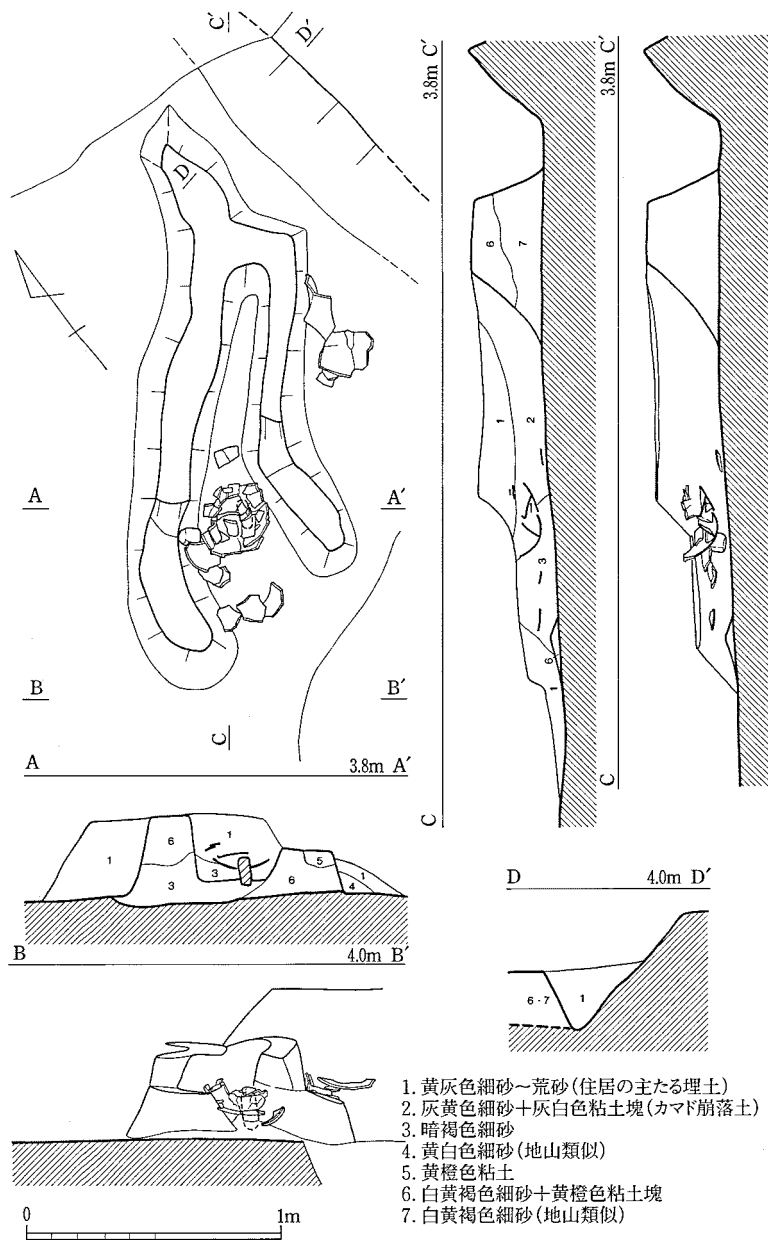
カマド（第88図） 想定される住居の北西隅からわずかに離れて設置され、対角線方向に主軸をもち、支脚付近で南に屈曲する形態のカマドが考えられる。カマド壁体は白黄褐色細砂に黄橙色粘土塊を混ぜた土を用いており、住居跡埋土とは明瞭に区別できるものであった。カマド奥壁から1.0mの所の床面に河原石を立てた支脚を検出し、その上からつぶれたような状態で大形の土師器甕（第89図23）が出土した。この甕は恐らくカマドにかけられていたものであろう。また支脚の左側袖に接して、別の河原石が樹立していたが、これは支脚の補強のためのものと考えられる。支脚部分での袖の間隔は0.4mを測り、古墳時代後期に一般的なカマドと大差ないが、支脚からカマド奥壁までの左右の壁体間は上面で幅0.2mとかなり狭くなっている。支脚の位置がかなり住居の中央



第86图 40·47号竖穴住居跡実測図 (1/60)



第87图 40号竖穴住居跡焼土集中部分実測図 (1/40)



第88図 40号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

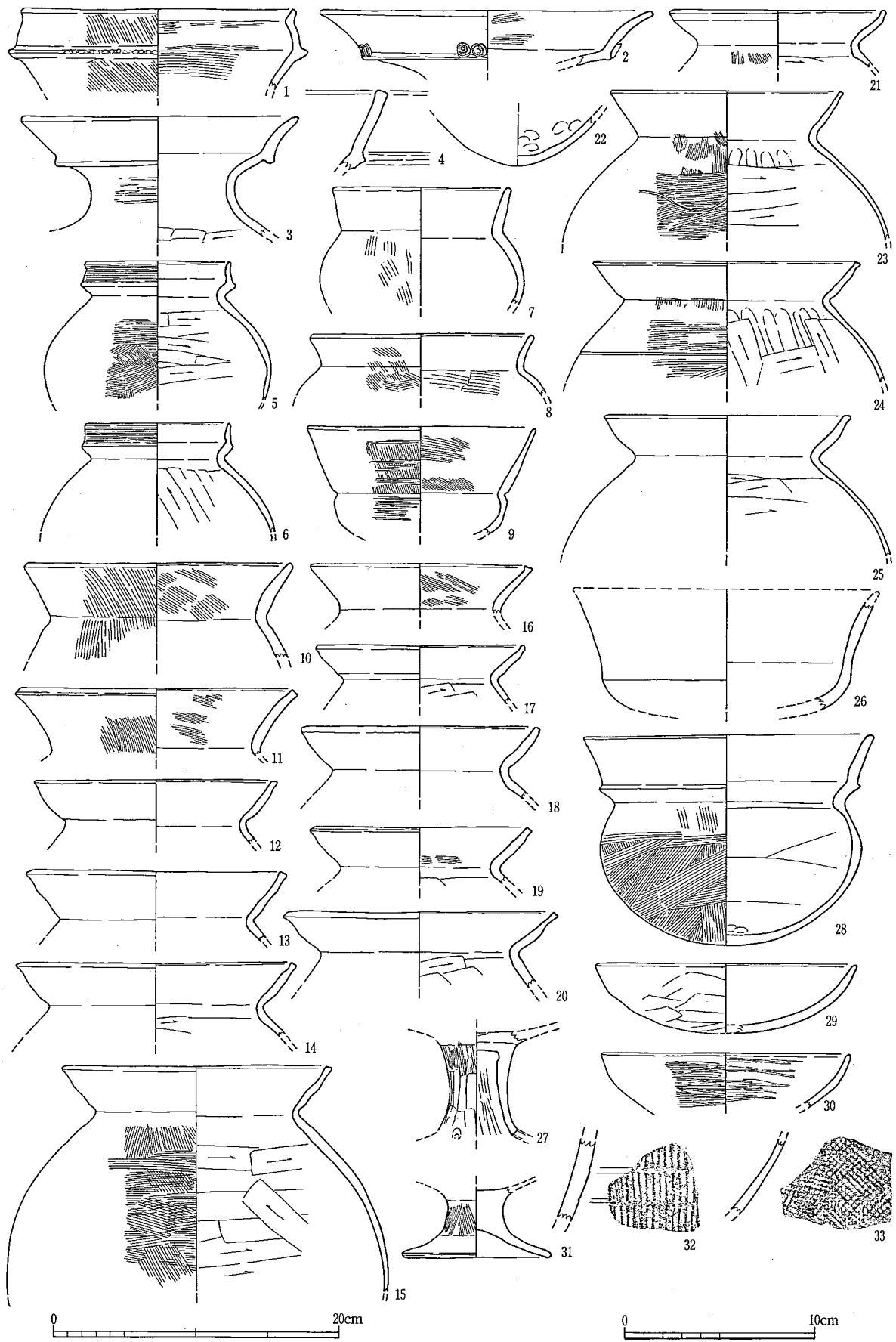
口縁端部は強く外反する。2は畿内系二重口縁壺で、屈曲部に2個1単位の円形浮文を貼付ける。円形浮文は0・3時方向に残り、4ヶ所にあったと考えられる。浮文上面は竹管を押付けた後回転させており、当該期の施文方法としては特異。3・4は山陰系二重口縁壺で、3は頸部外面に粗いミガキを施す。5・6は短い二重口縁をなし口縁外面の強いナデによる線条が明瞭な吉備系二重口縁壺。7は小形丸底壺で、胴部外面は縦ハケ、他はナデで仕上げる。8は短い口縁に張りの強い胴部をなすと思われる壺口縁片。9は外面縦ハケ後横ミガキし、内面にはミガキが観察されない。5は暗褐色、6が暗灰褐色、7～9が黄橙色で他は白黄褐色～灰黄褐色。

10・11は在地系、12～25は布留系の甕である。10・11は口縁部内面と外面にハケメが残り、11は口縁端部が角張る。布留系甕は全体的に口縁端部が外傾する面をなすが、15・17・21・23・25は端部がやや丸い。15は肩部に4条からなる櫛描平行線文、23は1条の波状沈線文、24は1条の沈線文

近くに位置していることと考え合わせると、支脚から奥壁までは煙道として機能していたと言えるだろう。すなわち暖房効果をもたせるために煙道を竪穴内に取り込む構造のカマドと言え、朝鮮半島南部で近年増加している原三国時代～三国時代の竪穴住居の造付けカマドと構造的に共通している。現状ではカマド奥壁壁体が住居東壁と離れているが、煙道がここに続いており、その細かな平面形の検出に失敗した可能性も否定できない。ただ、奥壁の縦断面を観察した結果では燃烧部から続く煙道は確認できていない。カマド袖の右脇からも甕(第89図15)が出土しており、本住居跡、カマドに確実に伴うものと考えて間違いないだろう。

出土土器(第89図) 上述したように15・23がカマド内、右脇から出土した。5・22・29・31が焼土集中部分近辺からの出土である。

1は在地系二重口縁壺口縁部で、屈強部外面に刻み目を施し、



第89図 40号竖穴住居跡出土土器実測図 (1~6・10~25は1/4、他は1/3)

を巡らす。23・24には内面頸部直下にヘラケズリ前のナデ上げが明瞭に見える。24は焼成が悪く、内外とも黒変部分が多い。10・11・15が暗黄褐色、17が暗褐色、他が灰黄褐色～淡黄褐色を呈す。

26は丸みを帯びた杯部に、直に近い角度で立ち上がる杯部片で吉備系高杯か。内外とも横ナデで仕上げ、灰黄褐色を呈す。27は高杯脚部片で、乾燥前に3ヶ所穿孔を施している。脚柱部外面はヘラ状工具で粗いミガキを施し、内面はヘラナデ。黄橙色を呈する。

28は山陰系二重口縁の鉢である。外面は斜めハケ、内面はヘラケズリを施す。胎土は精良では白黄褐色を呈す。29は外面ヘラケズリ、内面ナデで仕上げた直口鉢で淡黄褐色を呈す。30は内外をミガキで仕上げた鉢で、砂粒を含まない精良な胎土を用い、橙褐色を呈す精製品である。31は脚付鉢の脚部と思われる。脚部外面は縦ハケ、内面は工具によるナデで、灰黄褐色。

32・33は半島系の土器である。32は太い平行タタキの後凹線を巡らした胴部片。黄褐色を呈し、焼成はやや硬質である。33は格子目タタキの胴部片で、焼成は堅緻で陶質に近く灰褐色。(重藤)

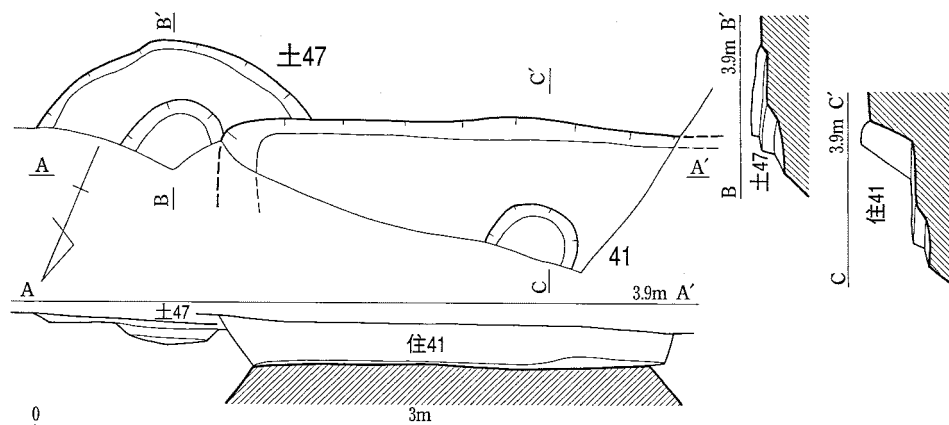
41号竪穴住居跡 (図版26、第90図)

2南区の北西隅、26～27号竪穴住居跡の東南に位置している。北側、西側に校舎基礎の大きな攪乱があり、南壁～東南隅にかけての一部を検出したにとどまる。古墳時代と考えられる47号土坑を切っている。埋土は褐灰色細砂であった。土器の他に砥石(第248図32)が出土。

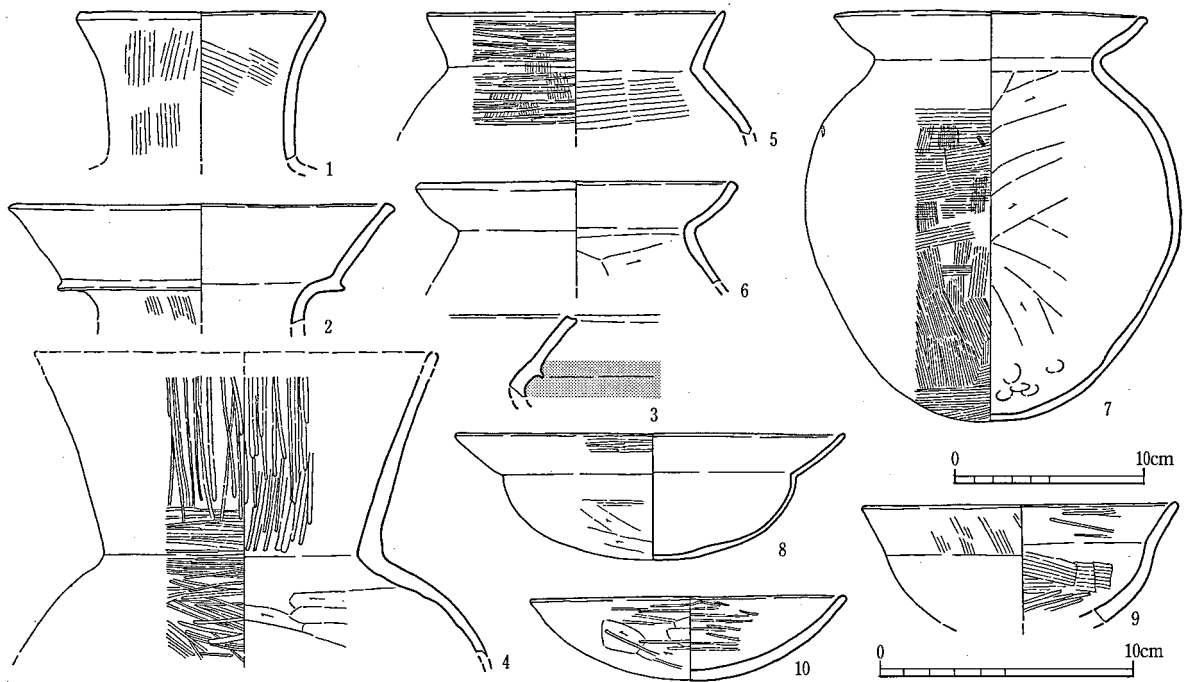
出土土器(第91図) 1は頸部から直立するやや特異な器形をなすが直口壺口縁か。内外に粗いハケメを施している。2・3は山陰系二重口縁壺である。3は口縁端部が段をなし、外面の擬口縁部から下に赤色顔料を塗布している。内面は化粧土を施す。4は中形の直口壺である。口縁部内外を縦ミガキし、頸部から胴部にかけて横ミガキを施す。5は短頸の壺で外面を縦ハケ後、横ミガキで仕上げた精製品。胴部内面は横ハケの後ナデている。1・2・5が橙褐色、3が明褐色、4が黄橙色を呈する。

6・7は布留系の甕である。7は肩部に横ハケの後刺突文を巡らし、復元すると6ヶ所になると思われる。内面底部近くにはヘラケズリ前の指頭圧痕が残る。6は黄褐色、7は橙褐色を呈する。

8・9は口縁部が外反する鉢。器壁の薄い8はかなり摩滅しているが、外底部はヘラケズリし、その後外面全体、口縁部内面に横ミガキ。9外面の胴部はナデ、口縁部は縦ハケで仕上げる。内面は胴部に横ハケを施した後、疎らに横ミガキ。10は直口の鉢で外面下半はヘラケズリし、その後内



第90図 41号竪穴住居跡・47号土坑実測図 (1/60)



第91図 41号竪穴住居跡出土土器実測図（4・8～10は1/3、他は1/4）

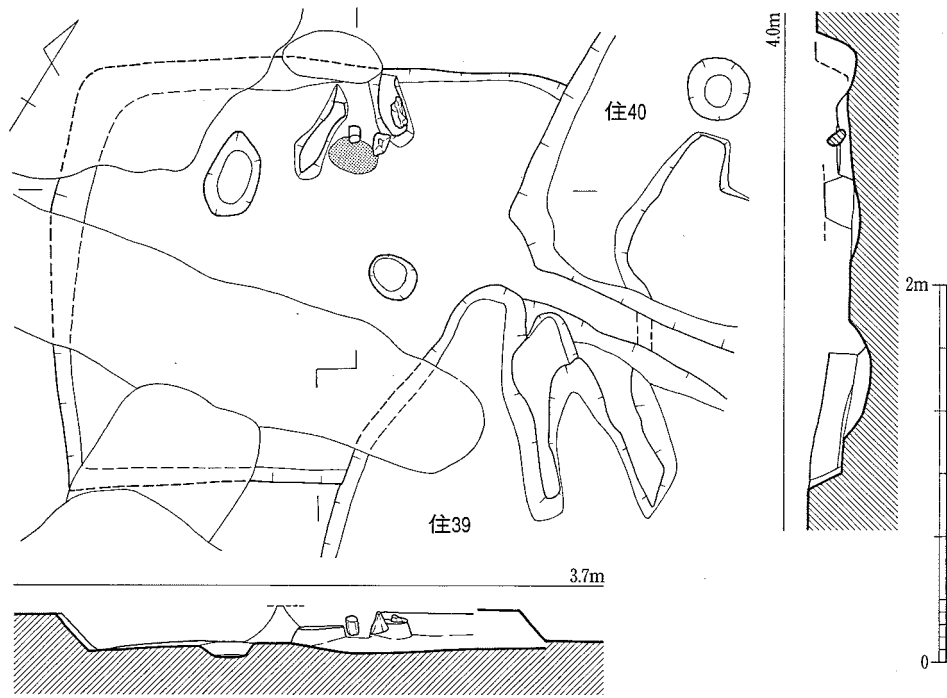
外をミガキで仕上げる。8・9は黄褐色～灰黄褐色、10は橙褐色。（重藤）

42号竪穴住居跡（図版26、第92図）

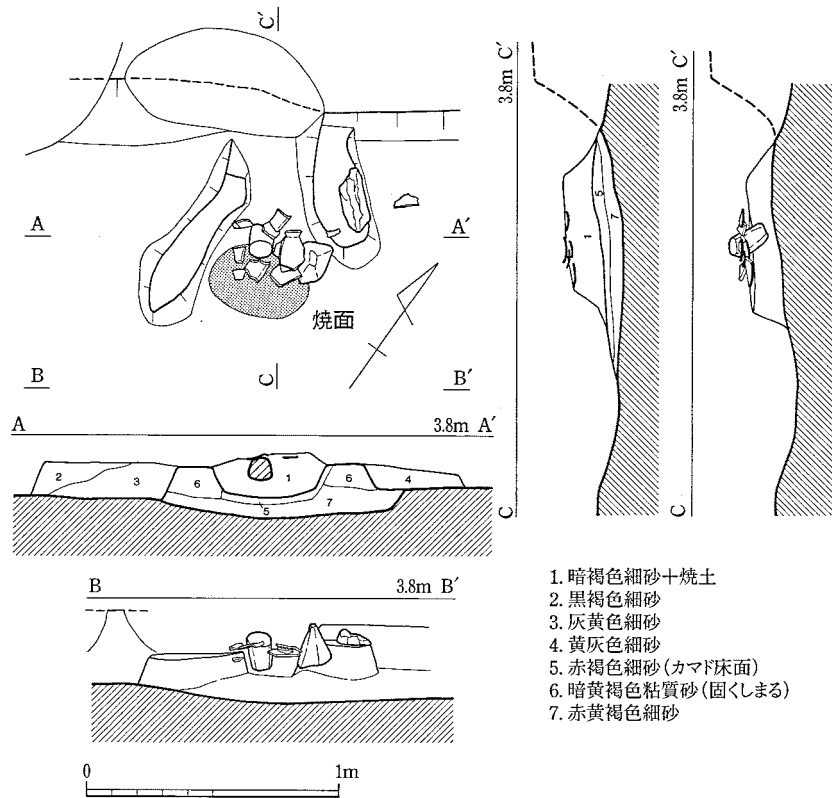
2南区にあり、39・40号竪穴住居跡の西に位置している。住居跡の東部は39・40号住居跡に切られており、西部には近世の攪乱があるために、北壁の一部と西壁の一部を検出したに過ぎない。北壁に接して主軸を南北にとるカマドを設置している。39・40号住居跡の間に東壁復元線を示しているが、これもカマドを中心に西壁を折り返したに過ぎない。このような理由により平面プランには不安が伴うが、北壁ラインと39・40号住居跡との切合いは確実と考えている。覆土は上層が明褐色細砂、下層が暗灰褐色細砂。土器の他に不明鉄器（第238図58）も出土。

カマド（第93図） 北壁の中央にあり、主軸は東壁にほぼ平行すると考えられるカマドである。北壁と接する部分がちょうど近世のピットにより攪乱を受けている。そのため煙道の状況は不明である。北壁から40cmの所に、河原石が立った状態で検出された。床面から少し浮いているが、これが支脚となり、床面を少し掘りすぎていると考えるべきであろう。本来の床面は土層図第5層の上面であつたと思われる。この支脚前面は長軸0.35m、短軸0.25mの範囲で熱変しており、燃烧部と考えられる。袖は堅く締まった暗黄褐色粘質砂を用いて作っており、左袖で北壁からの長さ0.8m弱である。燃烧部の位置からすると右袖はもう少し前面に伸びていたと考えられ、残存する袖の前面にある石を取り込む可能性が高い。右袖上面には長さ20cmをこえる石も検出されているので、袖の補強として石を用いていたと推測される。袖から燃烧部の下層にかけて赤黄褐色細砂があり、カマド構築前の整地に伴うものと考えられる。復元できないため図示していないが支脚の上面より甕胴部片が出土しており、カマドに本来かけていたものであろう。

出土土器（第94図） 1は淡黄褐色を呈し口縁外面にハケメを残すもので、中形の壺か。口縁端は欠失するが、内面剥離痕よりかなり厚くなると推測され特徴的。2は口縁部の長い小形丸底壺で、

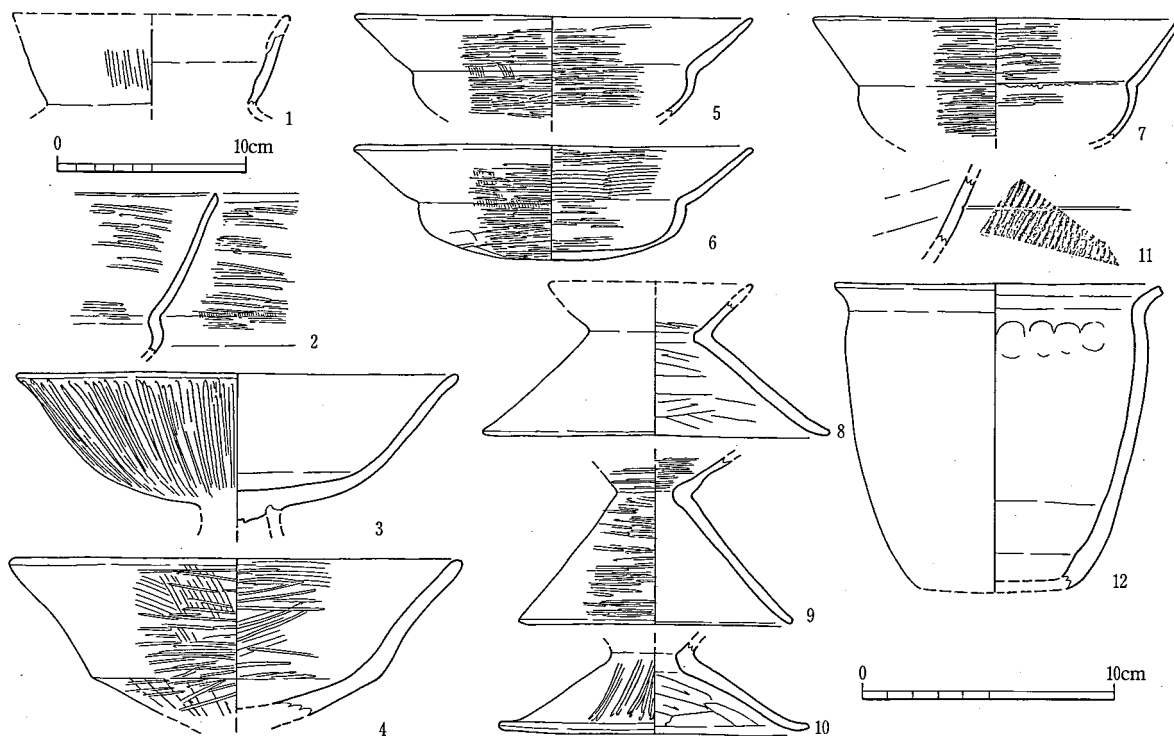


第92図 42号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第93図 42号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

黄橙色。内外を横ミガキで仕上げるが、胴下部にミガキ前のヘラケズリが見える。なお2はカマド周辺からの出土である。



第94図 42号竪穴住居跡出土土器実測図（1は1/4、他は1/3）

3・4は高杯杯部。3は屈曲部の稜が明確でなく、杯部との接合部に粘土を充填する。充填した粘土の下方には軸受け痕が残る。このような特徴から山陰系と考えられ、灰黄褐色を呈す。4は茶褐色を呈し、屈曲部の稜が明瞭である。屈曲部より上は斜めハケ、下はヘラケズリした後、ミガキを施す。内面はハケメの後ミガキ。

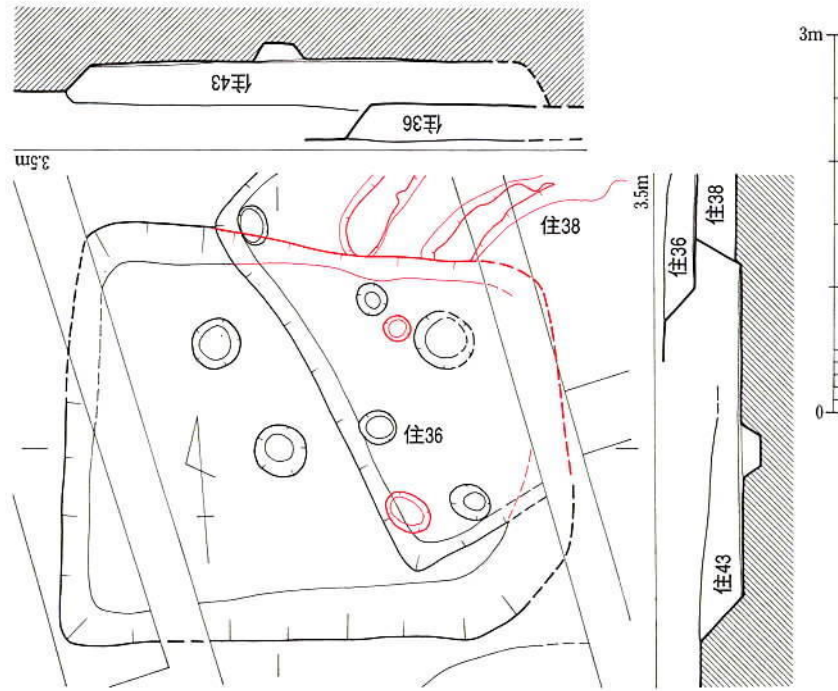
5～7は口縁部が外反し、内外をミガキで仕上げ精製鉢。5・6は外面頸部付近に縦ハケが見え、6は口縁部内面にも横ハケが残る。7は頸部に粘土の垂れた痕跡がそのまま残っている。5・6は黄橙色、7は橙褐色を呈す。

8～10は受部底が無い小形器台。外面は8が横ナデ、9が横ミガキ、10が粗な縦ミガキを施す。裾部内面は9がナデ、8・10がケズリである。9は黄橙色を呈し砂粒も含まない精製品であるが、8・10は砂粒をかなり含んだ胎土で灰黄褐色を呈しており、粗製化の進行がうかがえる。

11・12は半島系土器である。11は暗灰色を呈し、陶質に近い焼成の壺胴部片。外面は縄蓆文タタキの後、沈線を巡らせる。12は赤褐色を呈し、軟質の小形深鉢。口縁端が凹み、内面に強いナデによる稜、面ができるのが特徴的。胴部外面はかなり摩滅し、内面は上部に指頭圧痕、下部に強い横ナデの痕跡が看取できる。底部は欠失するが、平底になると思われる。底部近くが若干、二次加熱を受ける。（重藤）

43号竪穴住居跡（図版26、第95図）

43号住居跡は2中区にあり、50号竪穴住居跡東に位置する。36号竪穴住居跡に切られるが、38号竪穴住居跡を切ると考えて発掘した。覆土は暗黄灰色細砂で、東壁・西壁の一部は校舎基礎による攪乱を受けるが東西4.0m程度、南北3.2m、深さ36cmの方形住居である。住居内からは多くの土器が出土した。本住居跡は検出面などを含めると石錘6点（第242・243図10・15・25・27・28・29）、

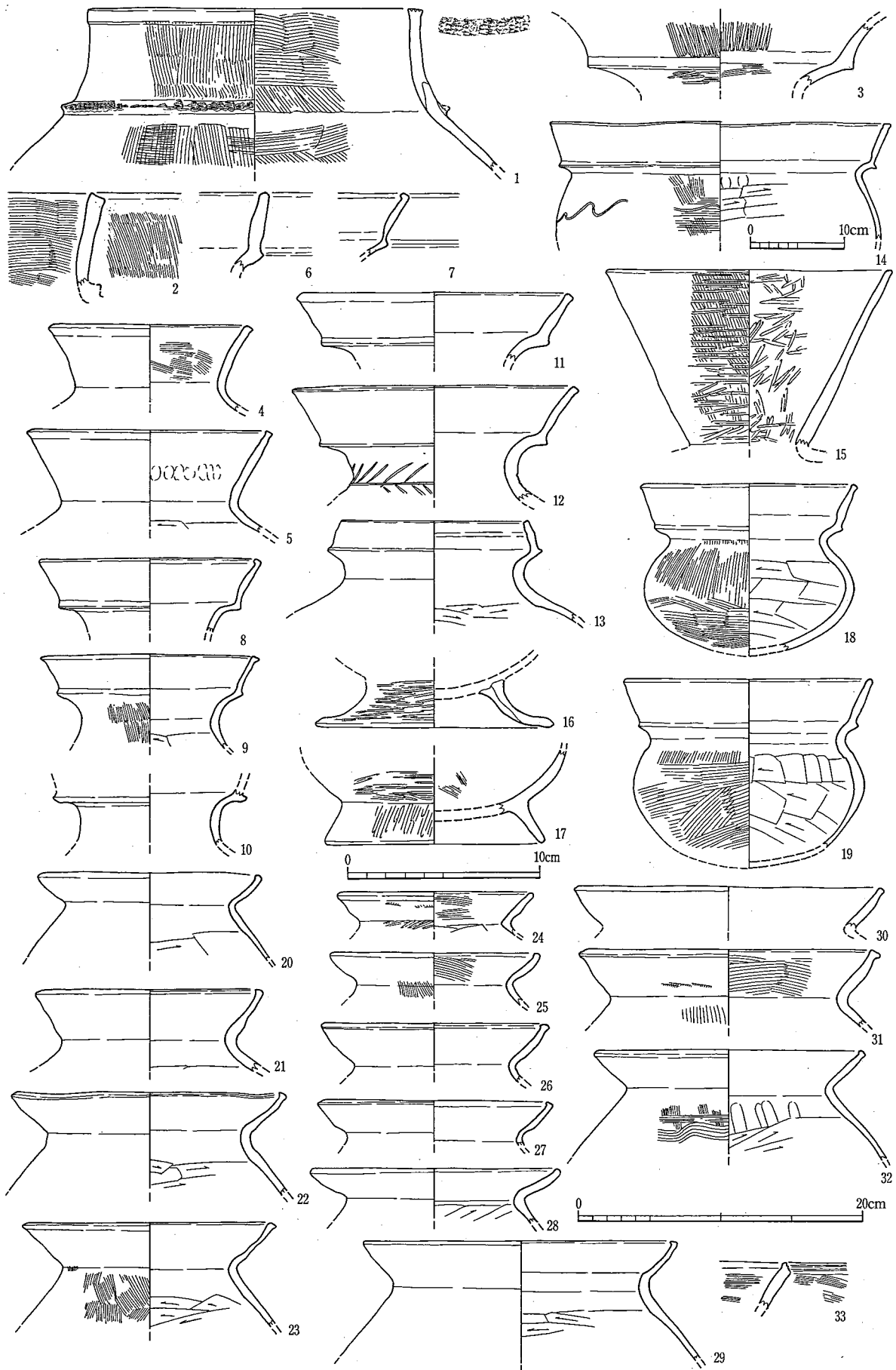


第95図 43号竪穴住居跡実測図 (1/60)

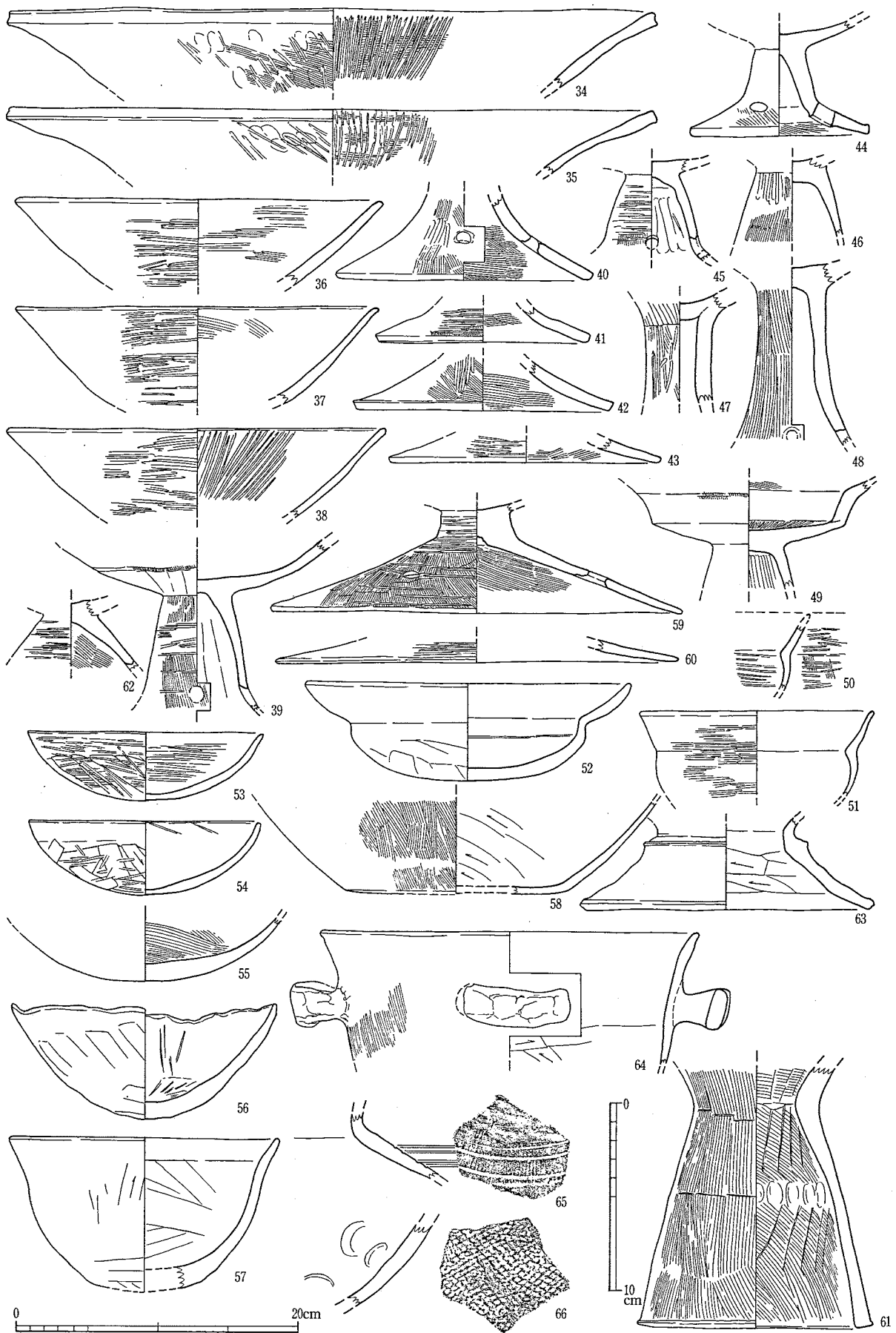
蛸壺16点という多量の漁労具が出土した。床面にはピットを確認したが、炉跡はない。覆土上層から器種不明の鉄器が出土した（第238図49）。

出土土器（第96～98図） 1・2は在地系の直口壺の口縁片である。1は口縁端部の外側に粘土を貼り付ける。端部上面はハケ工具による刻目を、頸部と肩部の境にはタタキ状工具による刻目突帯を巡らす。2は口縁端部を面取りする。3は畿内系二重口縁壺で、口縁部は外湾する。内外面とも縦ミガキを施す。4・5は畿内系直口壺である。6～14は山陰系二重口縁壺である。6は口縁端部を丸くおさめる。7・8は口縁端部を上方につまみ上げる。7は器壁が薄く、外面には煤が付着する。9は内面頸部までヘラケズリを施す。12は頸部にヘラ工具による綾杉文を巡らす。外面は煤が付着する。13は口縁部が短く、内傾する。14は口径36.4cmの大型品。肩に1条の波状文を施す。頸部近くまでヘラケズリを施す。15は畿内系中型精製直口壺である。外面は縦ハケのち横ミガキ、内面は短いミガキを施す。16・17は畿内系の精製脚付丸底壺の脚部である。16はゆるやかに外湾する脚部で、外面は細かいミガキを施す。17は脚が直線的に開き、縦ミガキを施す。18・19は山陰系小型丸底壺である。いずれも胴部の外面はハケ、内面はヘラケズリを施す。2・3は橙褐色、4・6・8・12～14は黄灰色、15は黄茶褐色、16は明褐色、他は黄褐色を呈す。

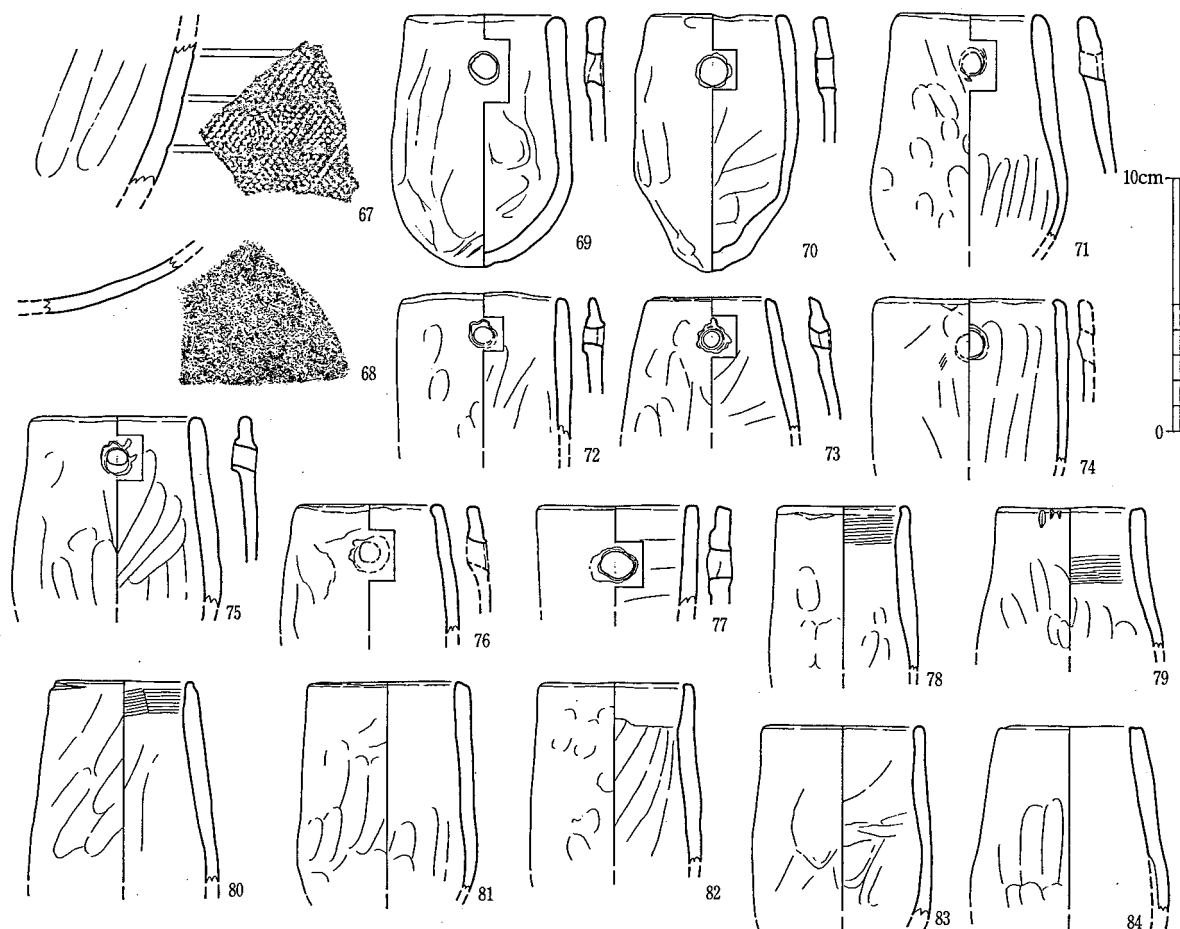
20～32は布留系の甕である。20・22は外面に煤が付着する。21はやや長い口縁部をもち、頸部付近の器壁が厚い。23は口縁部の器壁が薄く、口縁端部を外につまみ出す。24・25は小型の甕で、口縁端部を丸くおさめる。24の内面は頸部までヘラケズリを施す。25は内湾する口縁部をもつ。27は頸部の器壁が薄い。28は口縁端部を丸くおさめ、内面は頸部までケズリを行う。29は大型の甕で、口縁部の器壁のみ薄い。口縁内外面に黒斑あり。31は口縁端部を外につまみ出し、口縁部内面はハケが残る。32は肩に4条の波状文を施す。33は在地系の壺の可能性があり、口縁端部を面取りする。20・23・25・27・28・30・31は灰黄色、他は黄褐色を呈す。



第96図 43号竖穴住居跡出土土器実測図(1) (14は1/6、15~19は1/3、他は1/4)



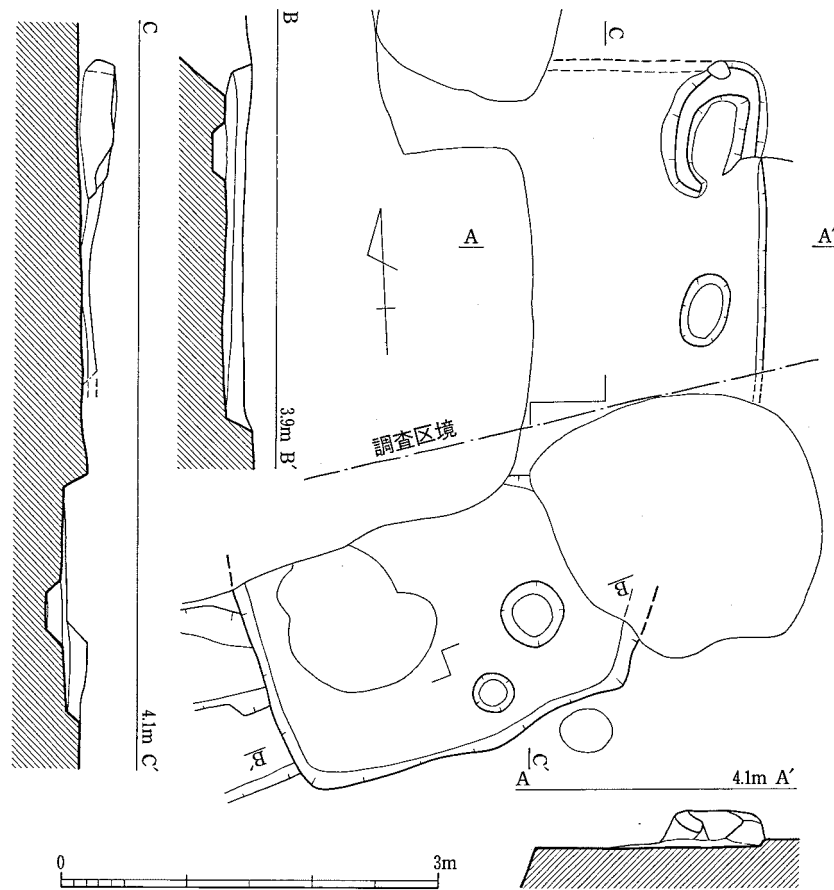
第97図 43号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (57・58・61・64は1/4、他は1/3)



第98図 43号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/3)

34～49は高杯である。34・35は同一個体の可能性がある。いずれも口縁部は面取りする。外面は粗いミガキ、内面は暗文風の縦ミガキを施す。36は器壁が厚く、内外面は横ミガキを施す。38は内面に暗文風の縦ミガキを施す。39は半乾燥段階で外から2ヶ所穿孔を施す。40は内外面ともハケで調整し、半乾燥段階で外から2ヶ所穿孔を施す。41は外面は横ミガキ、内面は横ハケで調整する。42の外面はハケのち縦ミガキを施す。44は小型の高杯で、外面はハケのちナデか。半乾燥段階で外から3ヶ所穿孔を施す。脚裾には黒斑あり。45は半乾燥段階で外から2ヶ所穿孔を施す。46は脚柱部上位の外面に縦ミガキを施す。内外面とも化粧土を施す。47・48は在地系の脚部である。47の外面は縦ハケのち粗い縦ミガキを施す。48は外から2ヶ所穿孔を施す。49は杯部上部が屈曲する高杯である。杯部内面下部には縦ミガキ、脚部内面は工具によるしぼり痕が残る。34・35・38・40・41・43・46・47は橙褐色、36・48は灰黄褐色、37・39・41・45・49は黄褐色、42は黄橙褐色、44は灰褐色を呈す。

50・51は口縁部が外傾する精製鉢である。52は口縁部が内湾し、器壁が厚く、特徴的な形態を呈す。53・54は浅い鉢である。53は内外面に細かい横ミガキを施す。54はケズリのち粗いミガキ、内面には工具痕が残る。55は鉢の底部か。外面には黒斑あり。56・57は粗製の鉢である。56は内外面とも工具によるナデを施す。57は口縁部がゆるく外反する。外面はケズリのちナデ、内面は工具によるナデ調整を行う。58は山陰系大型二重口縁鉢の底部である。59・60は畿内系脚付鉢である。外



第99図 44号竪穴住居跡実測図 (1/60)

面は粗い横ミガキを施す。59は半乾燥段階で外から3ヶ所穿孔を施す。50・51・53・57・59・60は橙褐色、52は白黄褐色、54・55・58は灰黄褐色、56は茶褐色を呈する。

61は粗製の器台である。内外面はハケ調整を行い、底部端部はハケ工具で調整する。外面は二次加熱で赤変する。62は畿内系小型精製器台の脚部である。63は山陰系鼓型器台の底部である。

64は山陰系甑形土器である。口縁はゆるく外反する。環状把手が2ヶ所つく。外面は縦ハケ、内面はヘラケズリを行うが、口縁部付近の内外面は横ナデを施す。61・62は橙褐色、63・64は灰黄色を呈する。

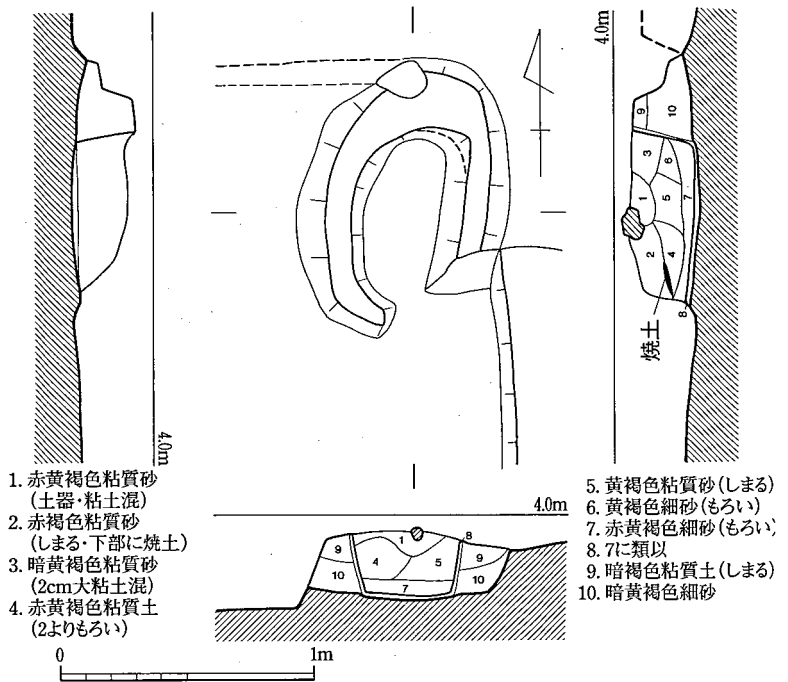
65～68は半島系土器である。66は軟質であり、他は焼成は瓦質に近い。65は肩部片で、平行タタキのち凹線が巡る。66は底部に近い部位の破片である。外面は格子目タタキで、内面の調整には無文の当て具を使用したものか。67は胴部片で、格子タタキのち太い凹線を巡らす。内面は縦ナデを行う。68は器壁が薄く、内外面をナデ調整する。66は黄褐色で、他は灰黄色を呈する。

69～84は蛸壺である。有孔のものは、焼成前に外から1ヶ所穿孔する。78～80の内面口縁近くをヨコハケするもの以外はナデのみで調整する。70・71は灰黄褐色、77・79・83は淡黄褐色、82・84は暗褐色、他は橙褐色を呈する。(大庭)

44号竪穴住居跡 (図版27、第99図)

2南区と3北1区にわたっている竪穴住居跡である。2つの調査区の境界が住居跡中央に位置し

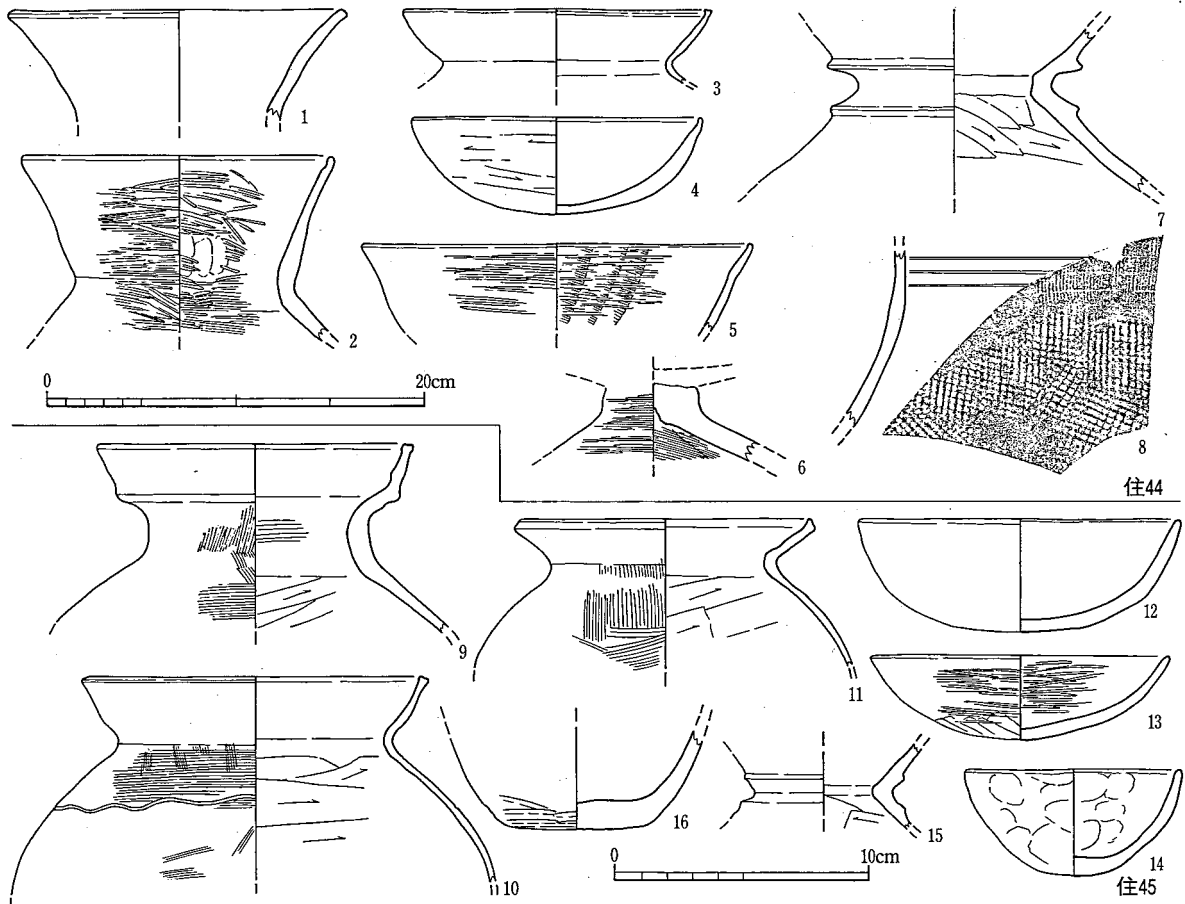
ており、その南北で住居跡壁のラインが一致していない。また床面高さも南側が10cm程、低くなっている。本来は2棟の竪穴住居跡が切合う可能性があろう。住居跡東南、北西隅に大きな攪乱が有り、検出した部分の壁のラインも余り自信はない。東北隅にカマドが設置されている。カマド(第100図) カマド部分もかなり攪乱を受けており、周辺の住居跡の残存状況も良くなかったので、形態は問題が多い。住居跡の隅部に東壁に平行して南を向く馬蹄形の暗褐色粘質土、黄褐色細砂で作られたカマド壁体を検出したにとどまる。支脚、焼面は検出しておらず、カマ



1. 赤黄褐色粘質砂(土器・粘土混)
2. 赤褐色粘質砂(しまる・下部に焼土)
3. 暗黄褐色粘質砂(2cm大粘土混)
4. 赤黄褐色粘質土(2よりもろい)

5. 黄褐色粘質砂(しまる)
6. 黄褐色細砂(もろい)
7. 赤黄褐色細砂(もろい)
8. 7に類似
9. 暗褐色粘質土(しまる)
10. 暗黄褐色細砂

第100図 44号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)



第101図 44・45号竪穴住居跡出土土器実測図(1・2・9~11は1/4、他は1/3)

ドの構造も不詳である。カマド内には焼土を含んだ砂質土が堆積していた。

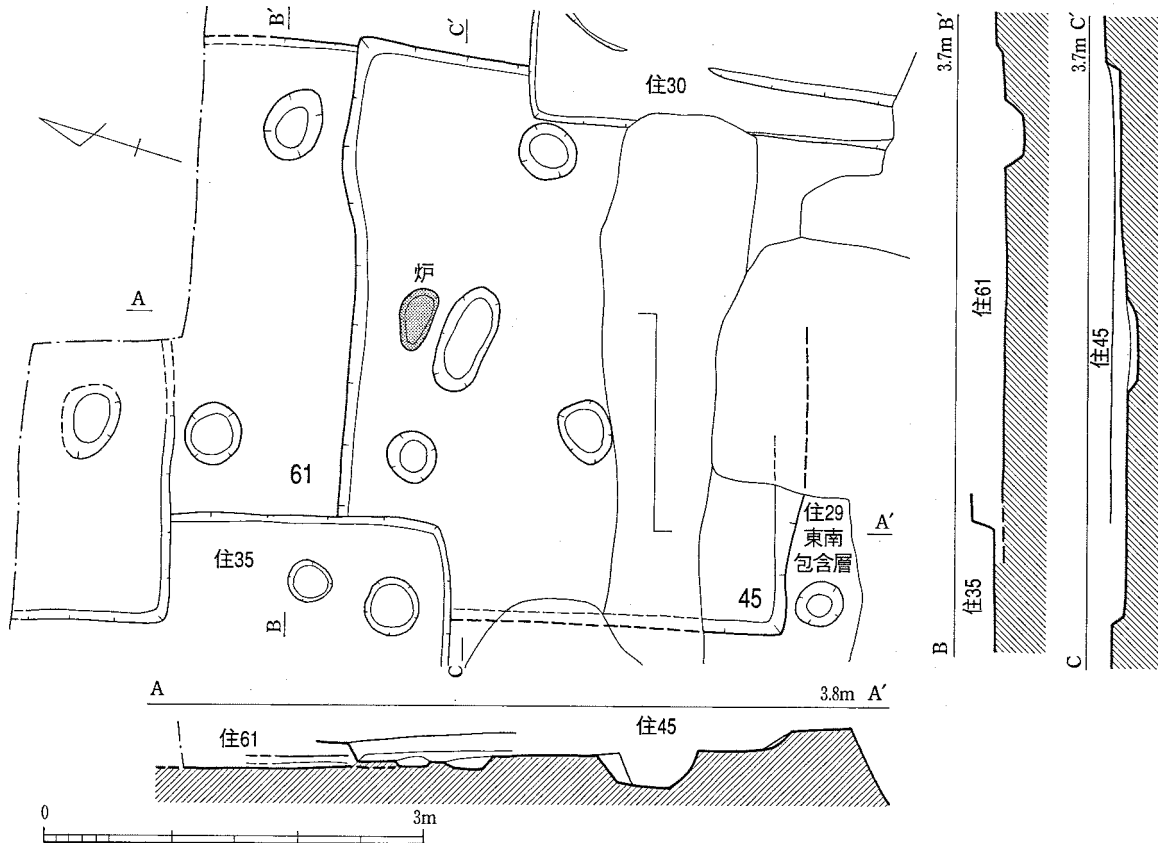
出土土器（第101図1～8） いずれも住居跡南部からの出土である。1は灰黄褐色の布留系直口壺か。2は中形直口壺であるが、頸部の縮まりの弱いやや特異な器形。内外を横ミガキし、口縁部内面にミガキ前の指頭圧痕が残る。黄褐色。3は布留系甕で口縁をわずかに内に肥厚させる。灰褐色を呈す。4は丸底で直口の鉢で、灰黄褐色を呈す。外面はケズリを施し、内面は工具によるナデの痕跡が一部残る。5は外面ミガキ、内面横ハケ後ミガキで、茶褐色を呈す精製品。6は脚付鉢脚部であろう。黄橙色を呈す精製品。7は山陰系鼓形器台で、裾部内面をヘラケズリする以外はナデで仕上げる。淡黄褐色を呈す。8は外面上位が平行タタキ後横沈線、下位が小さな格子タタキの半島系壺胴部片。灰褐色を呈し、比較的堅緻に焼き上がっている。（重藤）

45号竪穴住居跡（図版27、第102図）

1 北拡張区、30・35号竪穴住居跡に挟まれた部分に位置する。発掘時には30号、35号住居跡に切られ、61号竪穴住居跡を切ると考えた。しかしながら、他住居と切合っているために北側と南西隅を検出したにとどまり、平面プラン、切合いにはあまり自信がない。北壁近く中央部に炉跡を検出した。覆土は暗灰黄褐色細砂。

出土土器（第101図9～14） 9は山陰系の二重口縁壺、口縁端上方が水平に近い面をなし、擬口縁部外面稜は甘い。灰黄褐色を呈す。

10・11は布留系甕である。口縁端はいずれも外傾する面をなし、11は上方への拡張が顕著。10は



第102図 45・61号竪穴住居跡実測図 (1/60)

肩部に1条の波状沈線文を巡らしている。灰黄褐色～白黄褐色を呈す。

12～14は丸底直口の鉢である。12は内外ともナデで仕上げ、内面には工具によるナデ痕跡も残る。13は外面底部にヘラケズリした後、内外を横ミガキする。14は内外に指頭圧痕を顕著に残す粗製品。12は焼成悪く黒灰色、13は橙褐色、14は灰黄褐色。

15は小形山陰系鼓形器台。外面から受部内面をナデ、裾部内面はヘラケズリし、暗灰黄褐色。

16は平底片で半島系の小形深鉢になると思われる。内外をナデで仕上げるが、外面底部近くにタキらしき条痕が残る。焼成良好であるが外底面に一部黒斑があり、淡黄褐色を呈す。(重藤)

47号竪穴住居跡 (第86図)

40号竪穴住居跡の西側に位置している。40号住居跡に切られ北側に攪乱があるため、住居跡南西隅を検出したにとどまる。炉跡などを検出していないので、住居跡とする確証も不足している。

出土土器 (第104図1)

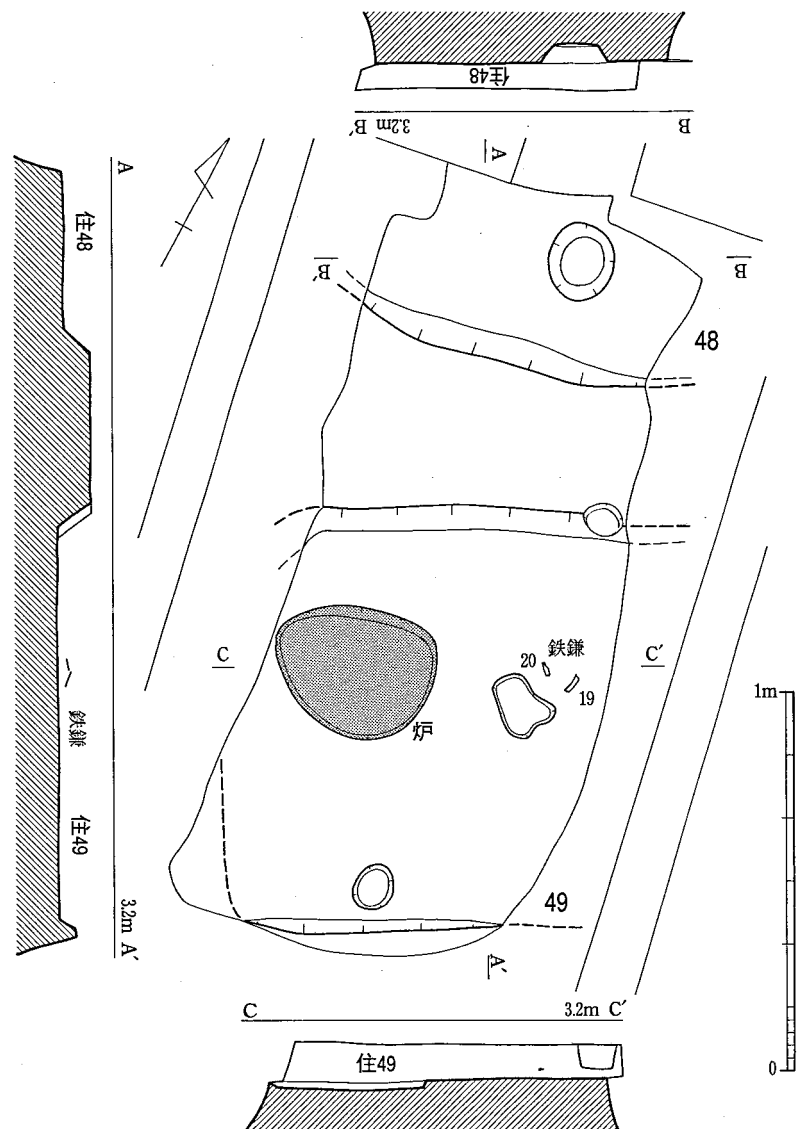
図示できるものはわずかに1点である。壺胴上半部片で、外面は斜めハケの後、頂部の角張る櫛描波状文を施している。内面は縦一斜めハケ後、頸部近くに横ハケを施す。畿内系二重口縁壺になるのではなかろうか。黄褐色を呈している。(重藤)

48号竪穴住居跡 (第103図)

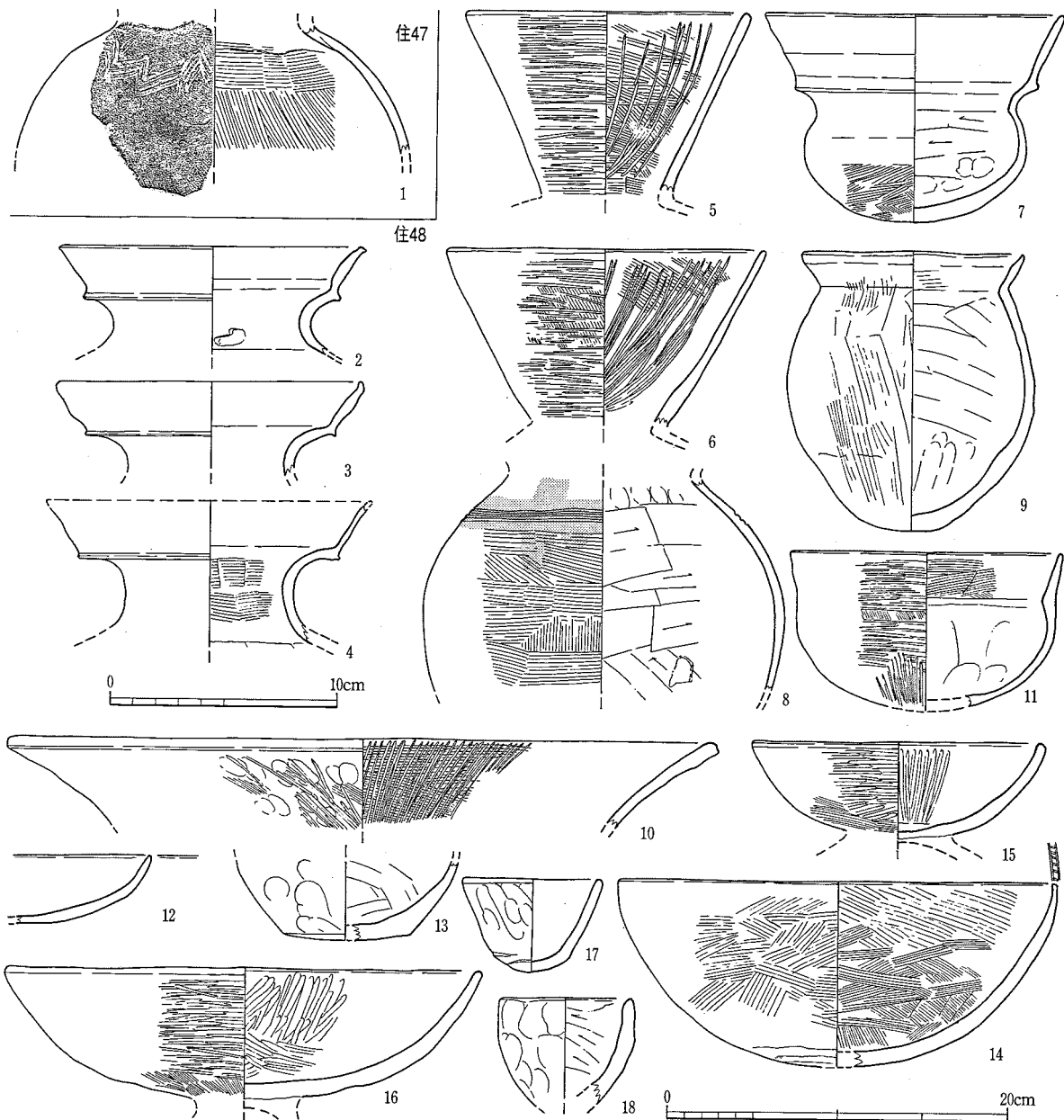
48号竪穴住居跡は2中区にあり、49号竪穴住居跡の北に位置する。校舎基礎構築時の攪乱のため、南壁の一部のみ検出したにとどまり、住居跡となるかどうか不安である。覆土は暗黄灰色細砂である。深さ20cmで平面プランは不明である。床面にはピットは確認したが、明確な炉跡はない。なお土器取り上げ時に49号竪穴住居跡出土土器と混ざってしまった。

出土土器 (第104図2～18)

2～4は山陰系二重口縁壺



第103図 48・49号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第104図 47・48号竪穴住居跡出土土器実測図（1～4・8・9・14は1/4、他は1/3）

である。2は頸部内面にヘラケズリの際のかきとった粘土が付着する。3は口縁端部を上方につまみ上げる。4は口縁部の器壁が薄い。5・6は畿内系精製直口壺である。外面は横ミガキ、内面は暗文風に縦ミガキを施す。7は山陰系小型丸底壺である。口縁部が長く、胴部はハケのち横ナデ、内面はケズリを施す。6は橙褐色、7は灰黄褐色、他は淡黄褐色～黄褐色を呈す。

8は布留系の甕胴部である。肩に3条の櫛描文を巡らし、その上に帯状に丹塗を行う。内面の胴部下位にはヘラケズリの際のかきとった粘土が付着する。9は粗製の小型甕である。外面は粗いヘラケズリ、内面は工具によるナデ調整を行う。8は淡黄褐色、9は灰黄色を呈する。

10は高杯か。口縁端部は面取りし、外面は粗い縦ミガキ、内面は暗文風の縦ミガキを施す。橙褐色を呈す。

11は口縁部がわずかに外傾する口縁部をもつ精製鉢である。口縁部内面は横ハケを施す。12は浅

い鉢である。13は鉢の底部と思われる。外面はナデ、内面は工具によるナデで調整する。14は大型の丸底鉢で、口縁端部に密な刻目を施す。内外面ともハケで調整する。15・16は山陰系の脚付鉢である。15の外面は横ミガキ、内面は暗文風の縦ミガキを行う。16は高杯の可能性もある。外面は横ミガキ、内面は太いミガキを施す。17・18は粗製の小型鉢である。11・14は橙褐色、他は灰黄褐色を呈している。(大庭)

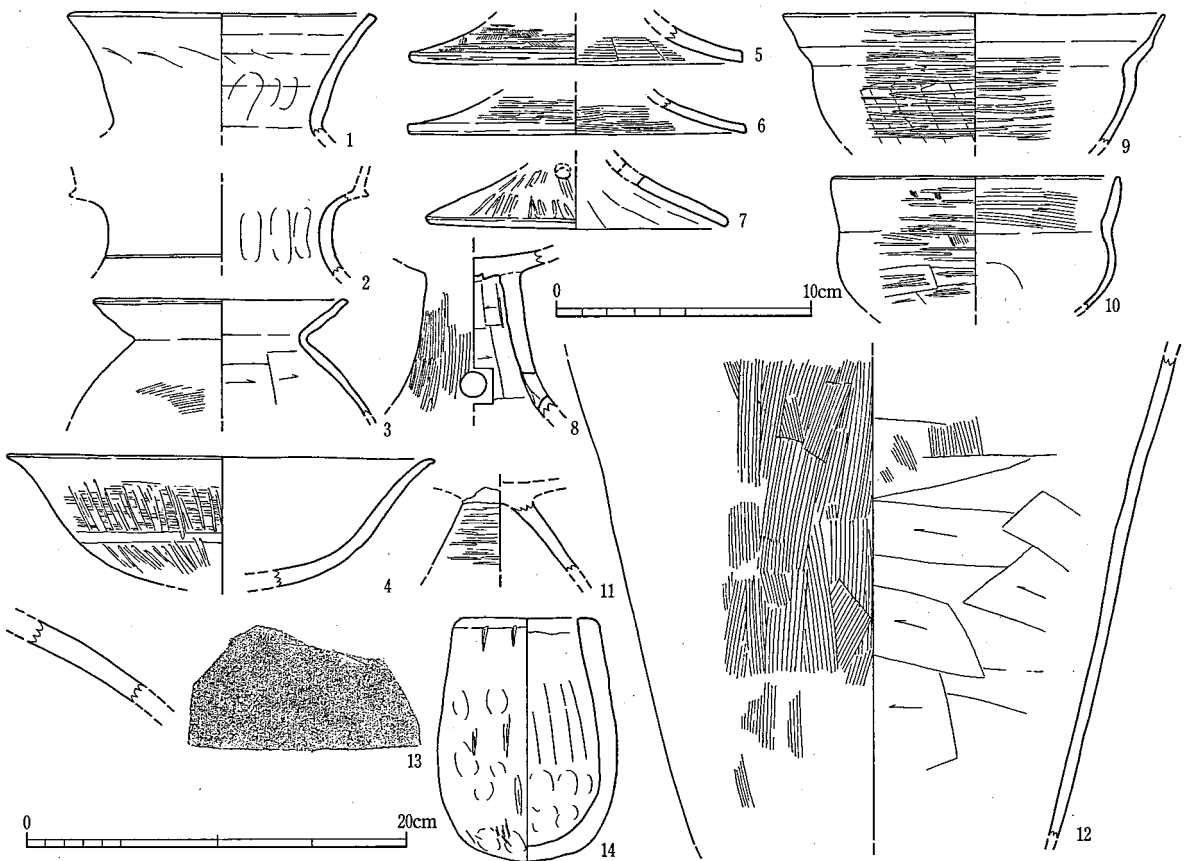
49号竪穴住居跡 (図版27、第103図)

49号竪穴住居跡は2中区にあり、48号竪穴住居跡の南に位置する。本住居跡は校舎基礎構築時による攪乱のため、北・南壁のみ残存する。住居西側は住居の隅に近いと考えられる。覆土は暗黄灰色細砂で、南北3.3m、東西2.7m以上、深さ30cmで平面プランは不明。住居中央のやや西側には長軸1.3cm、幅1.0cm、深さ7cmの楕円形を呈する炉跡がある。暗赤褐色細砂を埋土とする。炉跡上で土器が固まって出土した。本住居跡中央やや東側で鉄鎌が2点出土した (図版28、第237図19・20)。他に鉄鎌の基部が出土した (第237図11)。

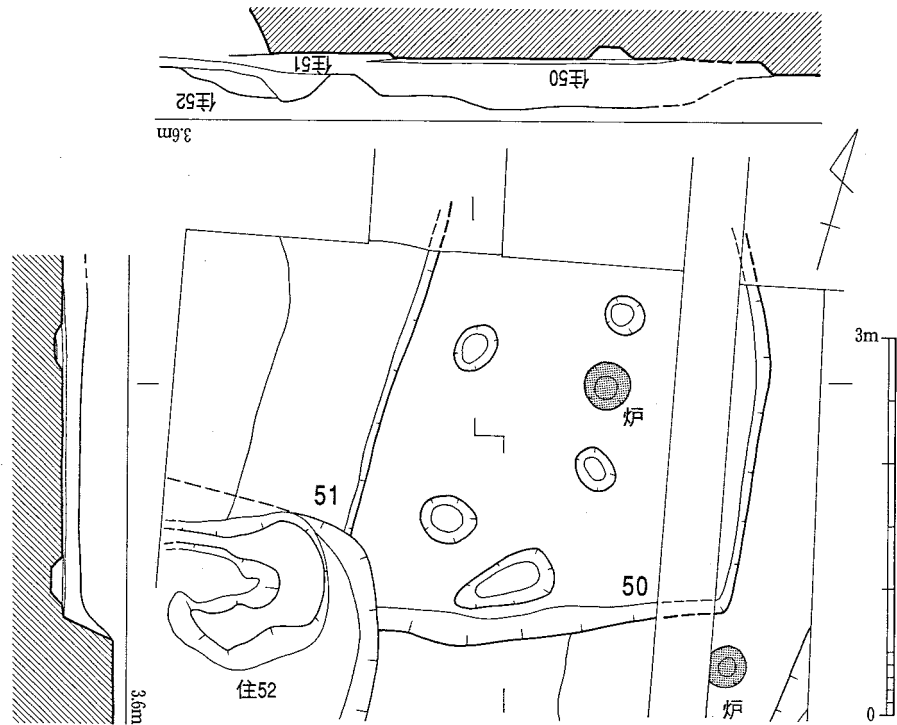
出土土器 (第105図) 1は畿内系直口壺である。内外面に工具痕が残る。2は山陰系の二重口縁壺である。肩との境には凹線が巡る。いずれも白黄褐色を呈す。

3は布留系の甕である。灰黄褐色を呈す。

4は口縁部を外反させ、杯部の下位にはかすかな段を作り出す。5・6は外面はヘラミガキ、内面は横ハケで調整する。7は外面は縦ミガキ、内面は工具によるナデで調整する。外から3ヶ所穿



第105図 49号竪穴住居跡出土土器実測図 (1~3・12は1/4、他は1/3)



第106図 50・51号竪穴住居跡実測図 (1/60)

孔を施す。8は在地系の高杯脚部で、焼成前に外から2ヶ所穿孔を施す。外面は縦ミガキを施す。4は淡黄褐色、5～7は橙褐色、8は灰黄褐色を呈す。

9・10は精製鉢である。9は口縁部中位からゆるやかに屈曲する。内外面は横ミガキを施す。10は内湾する口縁をもつ。外面は細かいミガキ、内面口縁部は横ハケで調整する。9は橙褐色、10は茶褐色を呈す。

11は畿内系小型精製器台の脚部である。淡橙褐色を呈す。

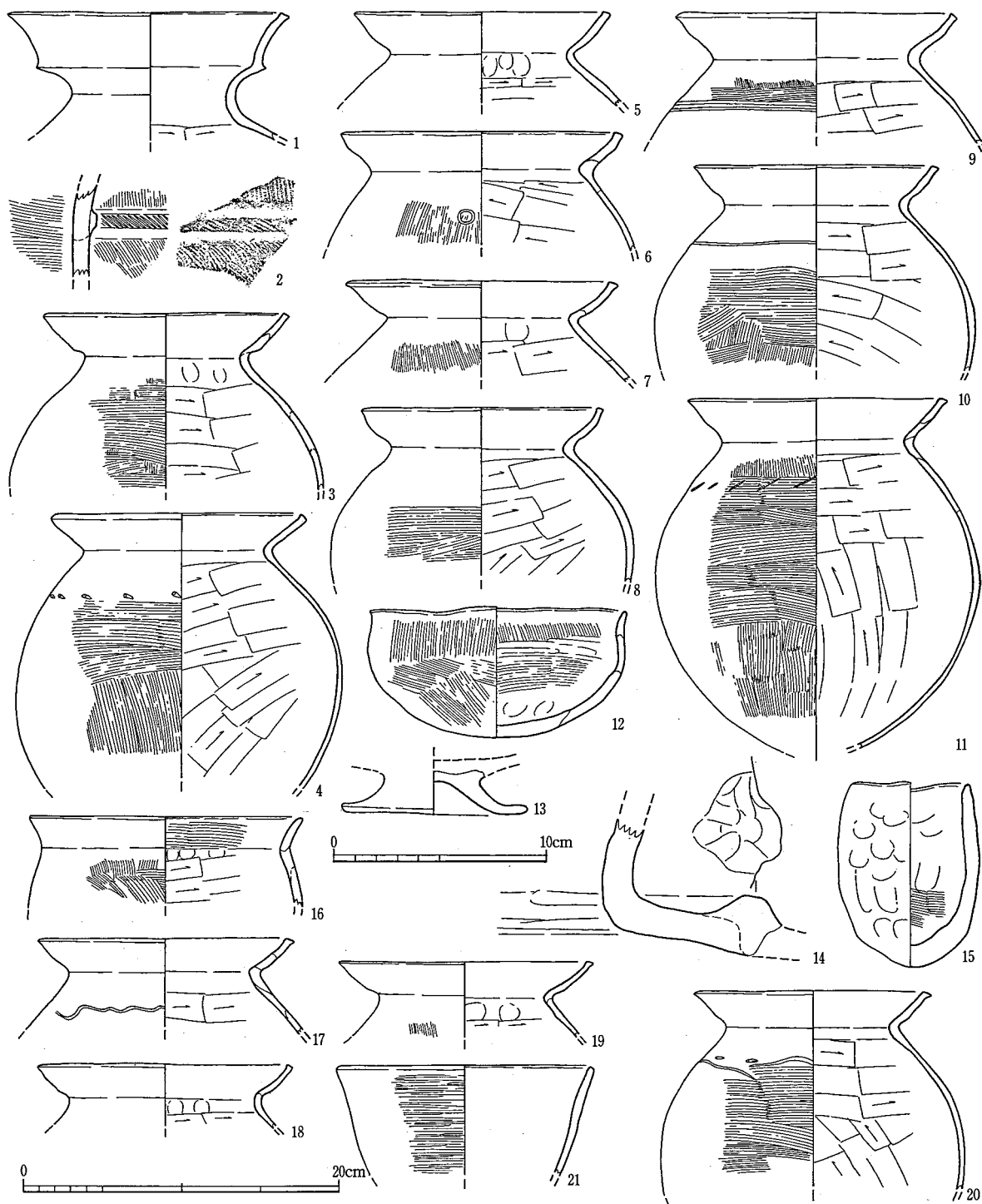
12は山陰系甑形土器の胴部である。外面は縦ハケ、内面下部はケズリであるが、上部はハケのちヨコナデを施す。灰黄褐色を呈す。

13は半島系土器である。陶質土器で、甕か壺の肩の破片である。内外面ともナデで調整する。外面には灰がかぶり、灰色を呈す。

14は蛸壺である。淡黄褐色を呈す。(大庭)

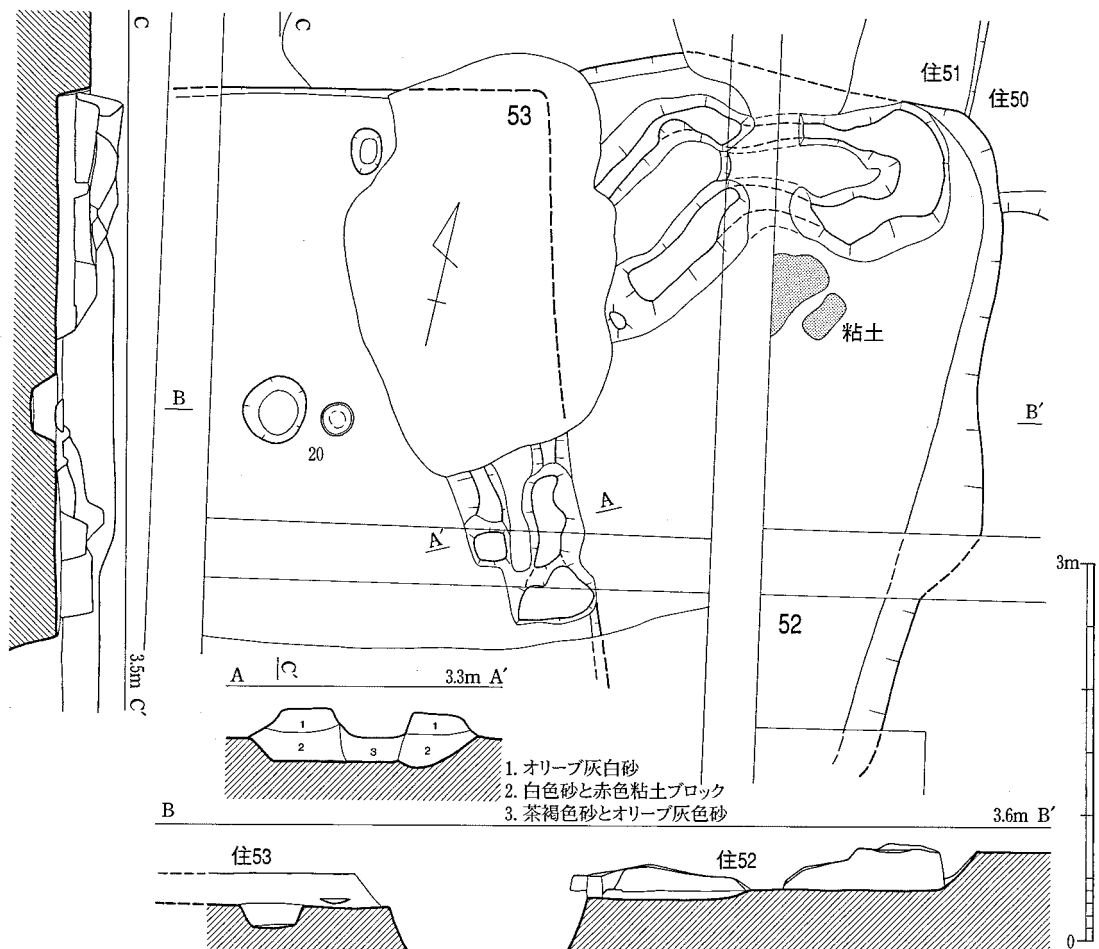
50号竪穴住居跡 (図版28、第106図)

50号竪穴住居跡は2中区にあり、52号竪穴住居跡北東に位置する。51・52号竪穴住居跡に切られると考えて発掘したが、51号竪穴住居跡との切合いの先後関係は自信がない。校舎基礎による攪乱のため、北壁は残っていない。覆土は明黄褐色細砂で、南北3.0m以上、東西3.1m以上、深さ39cmで平面プランは不明。住居中央やや東側に径38cm、深さ10cmの円形を呈する炉跡がある。明赤褐色細砂を埋土とする。住居中央から土器が固まって出土した。覆土中から石錘片が出土した(第243図30)。本住居跡の東南には径約30cm、深さ10cmの円形を呈する炉跡がある。明赤褐色細砂を埋土とする。レベルから上層の住居跡のものと考えられる。土器の他に50～52号住居跡付近の遺構面から叩き石(第249図35)が出土。



第107図 50号竪穴住居跡出土土器実測図 (12~16・21は1/3、他は1/4)

出土土器 (第107図1~15) 1は山陰系二重口縁壺である。口縁端部は面取りを行う。淡黄褐色を呈す。2は在地系の甕胴部片である。端部にハケを施す突帯をもつ。3~11は布留系の甕である。4・6・8・11は内面を頸部近くまでヘラケズリを施す。4・8・10・11は外面に煤が付着する。8・10・11は内面に炭化物が付着する。4は肩に棒状工具による列点文を巡らす。6は口縁部が短く、器壁が厚い。肩部に竹管文があるが、小片のため全周するかは不明。7は口縁端部を外につまみ出す。9は肩に櫛描文を巡らす。10は肩に1条の凹線を巡らす。11は肩にハケ工具による列点文



第108図 52・53号竪穴住居跡実測図 (1/60、A-A'断面は1/30)

を巡らす。いずれも淡黄褐色を呈す。

12は粗製の鉢である。口縁がゆるく外反する。内外面をハケで調整する。13は山陰系脚付鉢の脚部である。いずれも淡黄褐色を呈する。

14は半島系土器である。陶質土器の甕か壺の頸部で、肩にはこぶ状に隆起した把手を差し込んでいる。外面は灰が付着し、暗灰色を呈す。口縁側の割れ口は灰色に変色する。

15は蛸壺で、内面底部をハケで調整する。淡黄褐色を呈す。

50・51・52号竪穴住居跡検出面出土遺物 (第107図16~21) 16は在地系の小型の甕である。口縁部をゆるく外反させる。内面頸部までヘラケズリを施す。17~20は布留系の甕である。19・20は煤が付着する。17は肩に1条の波状文を施す。20は肩に太い波状文を巡らし、その直上に列点文を施す。いずれも淡黄褐色から黄褐色を呈す。21は精製の鉢である。口縁部をゆるく外反させ、外面は横ミガキを施す。橙褐色を呈す。(大庭)

51号竪穴住居跡 (第106図)

51号竪穴住居跡は、2中区にあり、52号竪穴住居跡の北に位置する。50号住居跡を切り、52号住居跡に切られると考えて発掘したが、本住居跡の壁は3cm程度しか残っておらず、50号竪穴住居跡との切合関係は自信がない。覆土は明黄褐色細砂で、校舎の基礎のため東壁のみ残る。深さ3cmで

平面プランは不明。床面にはピットも炉跡もない。

出土土器（第110図1～9） 1は畿内系直口壺である。内外面にハケが残る。2～4は山陰系の二重口縁壺である。3は口縁端部を丸くおさめ、頸部がしまらない。4は肩に2条の凹線を巡らすか。内面はヘラケズリが胴部中位までしか及んでない。1・2は白黄褐色、3・4は灰黄褐色を呈す。

5～7は布留系の甕である。5は小型甕で、外面は粗いハケを施す。外面の肩以下は煤が付着する。6・7は肩に櫛描文を施す。5は灰黄褐色、6・7は白黄褐色を呈す。

8は高杯の杯部である。外面は粗いミガキを施す。内面は磨滅のため不明。黄褐色を呈す。

9は山陰系甕形土器の口縁である。口縁端部は面取りする。外面は縦ハケ、内面はヘラケズリを、口縁近くは横ナデで調整する。灰黄褐色を呈す。（大庭）

52号竪穴住居跡（図版28・29、第108図）

52号竪穴住居跡は2中区にあり、53号竪穴住居跡の東に位置する。50・51号竪穴住居跡を切るが、53号竪穴住居跡に切られると考えて発掘した。校舎基礎構築時の攪乱により南・西壁は残っていない。覆土は暗黄褐色細砂で、南北5.2m以上、東西3.3m以上、深さ33cmで平面プランは不明だが、やや大型の住居跡か。本住居跡北東隅から煙道が北壁に沿ってのびるL字状のカマドを検出した。床面にピットは確認できなかった。カマド煙道の南からカマド補修用の可能性も考えられる粘土塊を確認した。

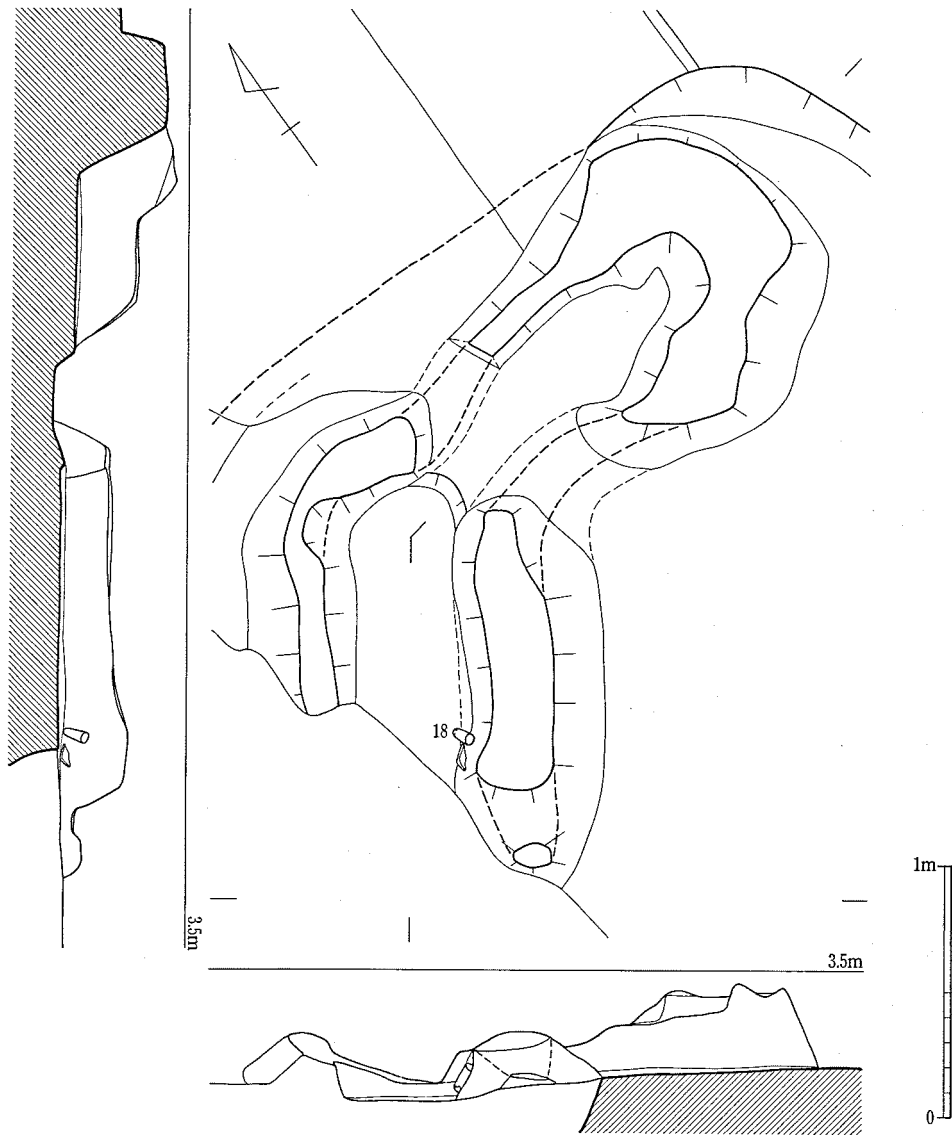
カマド（第109図） 住居北東隅から北壁に沿ってのびる煙道をもつ。調査当初、基礎を挟んだ状態であり、別々のカマドとして調査したため、掘りすぎの箇所がある。平面プランは38号住居跡カマドと同じ形態で、校舎基礎による攪乱のため、煙道中央の残りが悪い。両袖先端部は攪乱でやられている。支脚は残っていないが、非常に良く焼けた硬化面がある。焚口の両袖部分の残りは悪いが、攪乱によるものではなく、カマド廃棄時に壊されてしまった可能性がある。カマドの規模は焚口幅45cm、長さは東西2.8m、最も残りのよい部分で高さ25cmを測る。袖は砂と粘土を混ぜたもので構築しており、その他のカマドに比べ、粘土の割合が高い。焚口は住居床面を掘りくぼめて構築しており、粘土と砂を混ぜたもので住居床面とほぼ同じレベルに構築している。右袖からはタコ壺（第110図18）が出土した。煙出と東壁が離れている部分は、掘りすぎてしまった可能性が高い。住居内側の袖は粘土で構築しているが、壁側は壁に粘土を貼り付けている。煙出は住居外までのびない。11・12・16・18はカマド内出土。

出土土器（第110図10～18） 10は大型の山陰系二重口縁壺である。口縁端部を外につまみ出す。内面頸部近くまでヘラケズリを行う。黄褐色を呈す。

11は高杯の杯部である。外面はミガキ、内面はハケで調整する。12は脚柱部がやや短い高杯脚部である。半乾燥段階で外から2ヶ所穿孔を施す。13は在地系の脚部である。外面は縦ハケのち縦ミガキを施す。孔数は不明。いずれも淡橙色を呈す。

14は精製の鉢である。内湾する口縁部をもち、外面は横ミガキを施す。外面胴部中位には黒斑がある。15は小型の粗製鉢である。内面には工具跡が残る。16は畿内系脚付鉢の脚部である。外面はミガキ、内面はハケで調整する。焼成後外から2ヶ所穿孔を施す。14・16は橙褐色、15は黄褐色を呈す。

17は畿内系小型精製器台で、口縁部はゆるく外反させる。外面はミガキ、内面は磨滅のために不



第109図 52号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

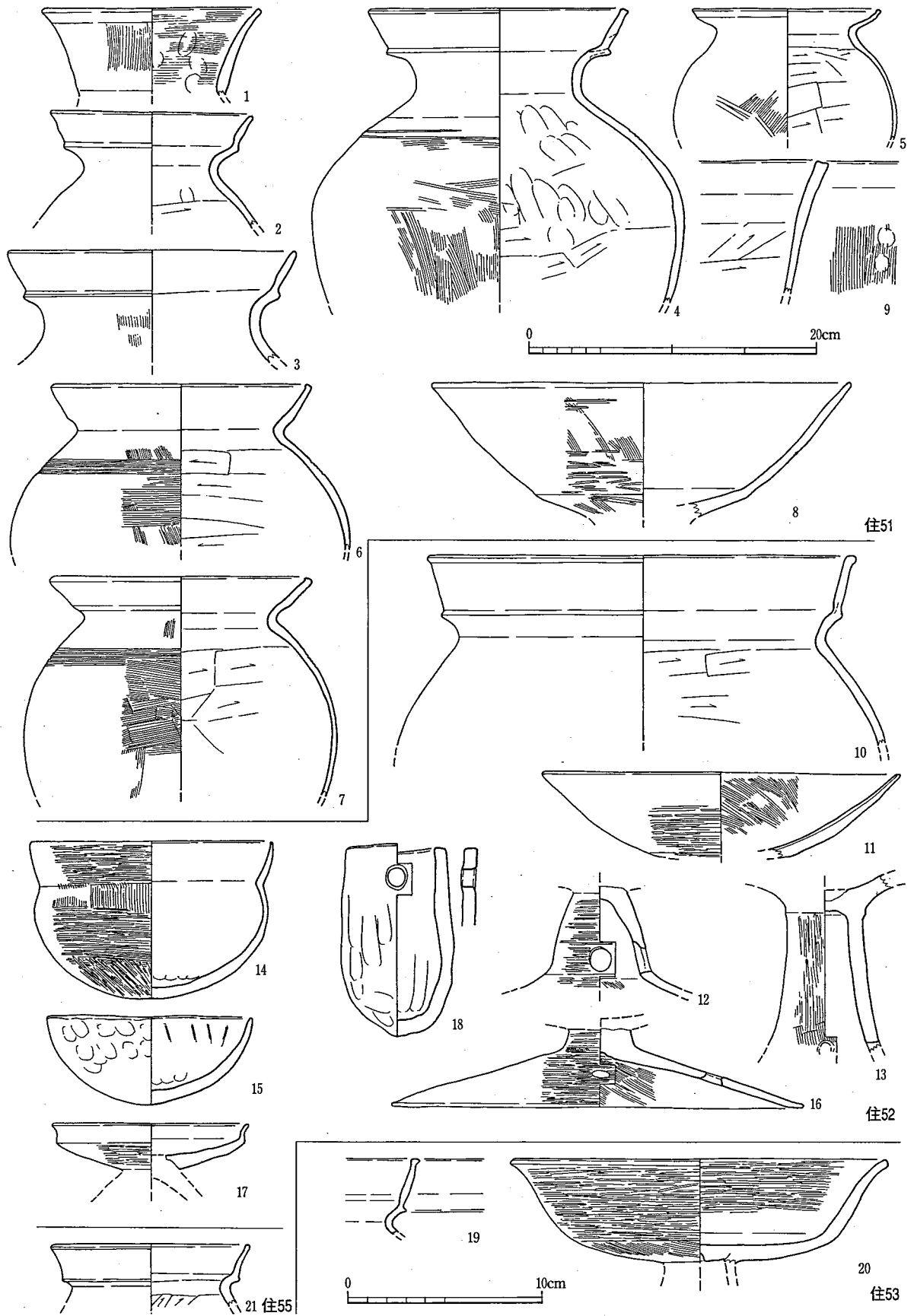
明。橙褐色を呈す。

18は蛸壺である。焼成前外から穿孔を施す。白黄褐色を呈す。(大庭)

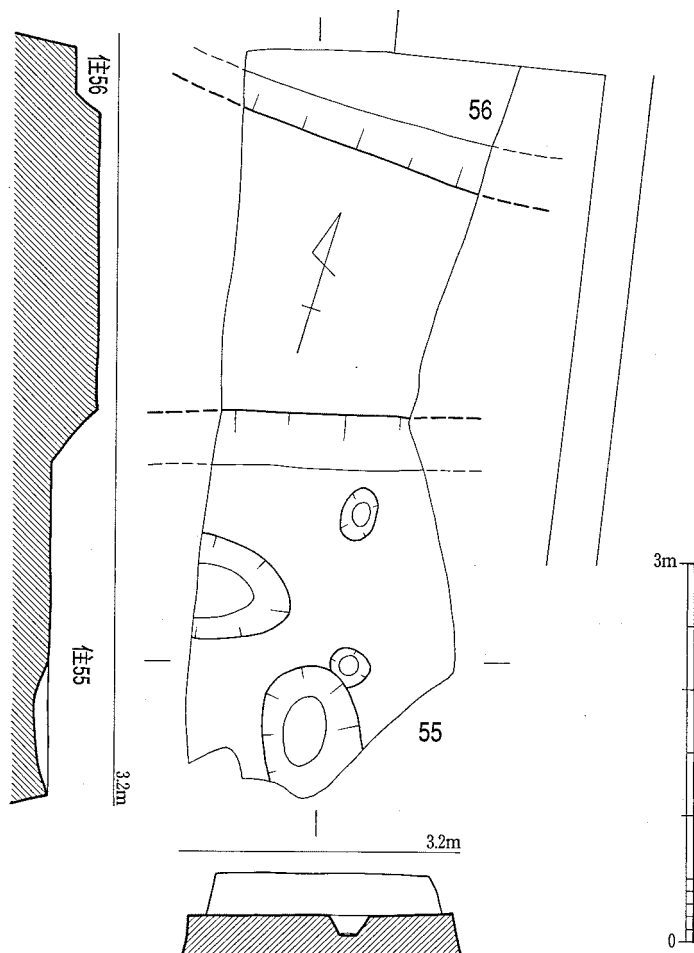
53号竪穴住居跡 (図版28・29、第108図)

53号竪穴住居跡は、調査区2中区にあり、52号住居跡の西に位置する。本住居跡は52号住居跡を切ると考えて発掘した。住居東側は大きく攪乱を受けており、校舎基礎構築時の攪乱もあるため、北・東壁の一部のみ残る。覆土は暗黄褐色細砂で、南北4.4m以上、東西3.0m以上、深さ15cmで平面プランは不明。住居東南隅には煙道が北にのびるカマドを検出した。住居中央から高杯(第110図20)が出土した。

カマド 住居東南隅から東壁沿いに北にのびる煙道をもつカマドで、焚口側は大きく攪乱を受けているため煙道の一部のみ残る。カマドが住居東側に付設される、珍しいタイプである。平面プランは38・52号竪穴住居跡と同じく、L字状になると考えられる。煙道の奥行90cmで、カマドは床面よ



第110図 51・52・53・55号竪穴住居跡出土土器実測図（8・11~18・20は1/3、他は1/4）



第111図 55・56号竪穴住居跡実測図 (1/60)

り1段深く掘り下げ、粘土と砂を混ぜたもので床面と同じレベルに構築する。煙出は住居外までのびない。

出土土器 (第110図19・20) 19は山陰系二重口縁壺である。口縁端部を外につまみ出す。灰黄褐色を呈す。

20は高杯杯部であるが、脚付鉢の可能性もある。口縁はゆるく外反させ、内外面はヘラミガキを施す。外面には黒斑がある。脚部との接合は柱状の脚部を杯部に貼り付ける。白黄褐色を呈す。(大庭)

55号竪穴住居跡 (図版29、第111図)

55号竪穴住居跡は2中区にあって、56号竪穴住居跡の南に位置する。校舎基礎構築時の攪乱のため、北壁の一部のみ残る。覆土は明黄灰色細砂で、南北3.1m以上、深さ34cmで平面プランは不明。床面にピットを確認したが、炉跡はない。図示できるのは土器1点と砥石 (第249図36) のみ。

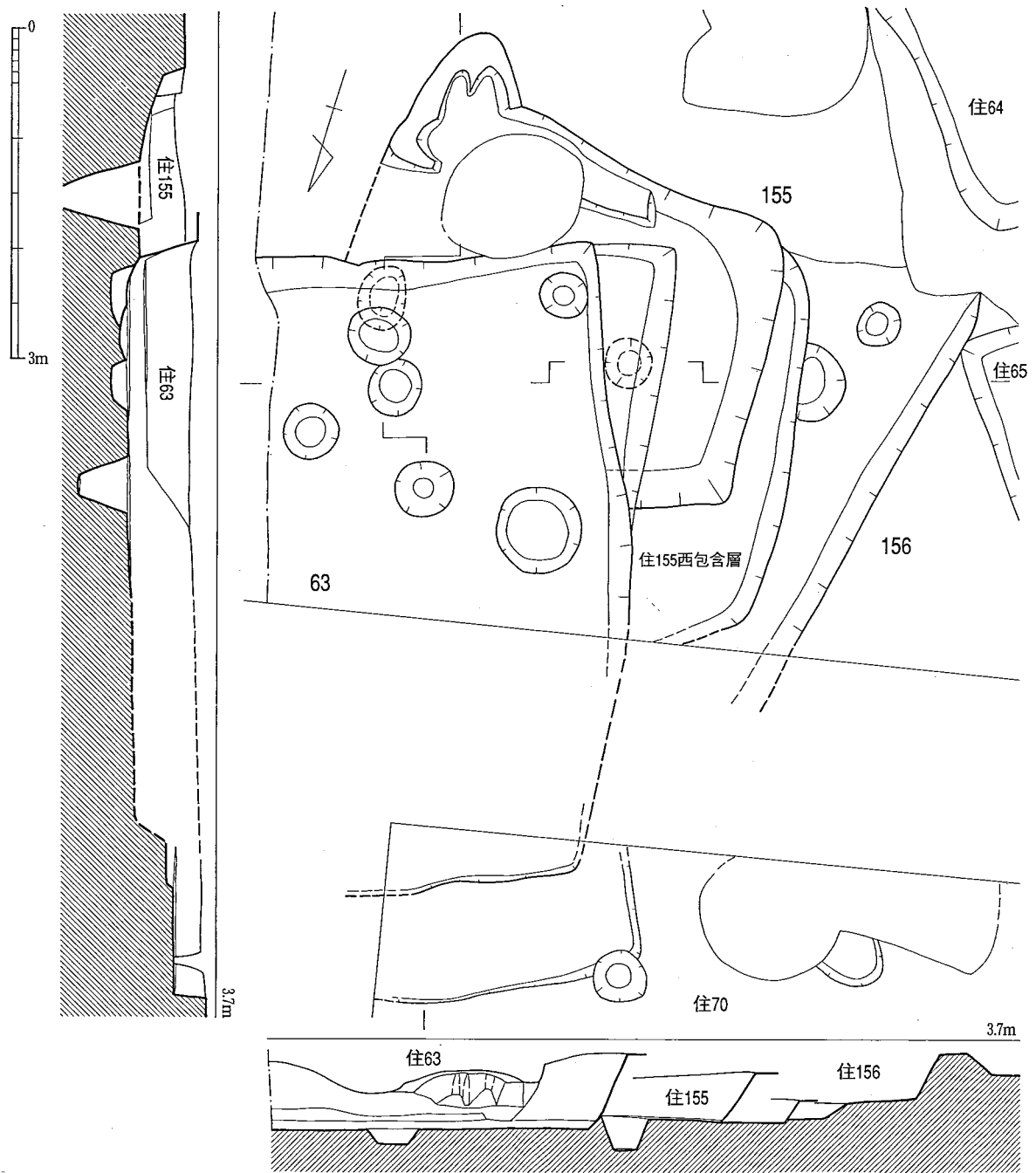
出土土器 (第110図21) 21は小型の山陰系二重口縁壺である。口縁端部を丸くおさめる。内面は頸部までヘラケズリを行う。黄褐色を呈す。(大庭)

56号竪穴住居跡 (図版29、第111図)

56号竪穴住居跡は2中区にあり、55号竪穴住居跡の北に位置する。校舎基礎構築時の攪乱のため、南壁の一部のみ検出したにとどまり、住居跡となるかどうか不安。そのため、出土遺物は少なく、この住居跡に伴うものとして図示できる土器はない。覆土は暗黄灰色細砂で、東西2.0m以上、深さ18cmで平面プランは不明である。床面にはピットを確認したが、炉跡はない。(大庭)

61号竪穴住居跡 (第102図)

1北拡張区の東寄りに位置している。35・31・45号竪穴住居跡に切られると考えた竪穴住居跡で、北は調査区外へと続いている。他の住居跡との切合いと調査区外に続くために検出したのは東壁の一部のみ。炉跡なども検出されず、住居跡とする確証が不足している。また、東壁が45号住居跡東壁延長線とほぼ一致するので、両者が一つの住居跡となる可能性もあるだろう。図示できる出土遺物はない。(重藤)



第112図 63・155・156号竪穴住居跡実測図 (1/60)

63号竪穴住居跡 (図版30、第112図)

63号竪穴住居跡は調査区南西隅、3南1区にあり、64号竪穴住居跡の北東に位置する。70・155・156号竪穴住居跡を切ると考えて発掘した。住居東側は調査区外である。校舎基礎を挟んで北側に本住居跡の北壁と考えられる壁を検出した。校舎基礎により、本住居跡の南側の床面レベルまで下げきれなかったため、北壁とするには不安がある。覆土は暗黄灰色細砂で、南北5.7m、東西3.3m以上、深さ67cmの大型の長方形住居か。床面にはピットを確認したが、炉跡はない。住居内から多量の土器と鉄鏃(第237図5)、台石(第249図37)が出土した。

出土土器 (第113~115図) 1・2は在地系の大型壺である。頸部と胴部との境に1条の突帯を巡

らす。内外面はハケで調整する。2は口縁端部をハケで調整する。3は在地系の大型壺頸部か。内外面はハケで調整する。外面には棒状工具による線刻を施す。4は畿内系の大型二重口縁壺である。外面はハケのちナデ、内面は頸部近くのみヘラケズリを施す。5～8は畿内系直口壺である。5・6は口縁端部を面取りする。6は肩に3条の波状文を施す。7は頸部外面上位に浅い凹線を巡らす。外面は縦ハケ、内面は暗文風の縦ミガキを施す。9～18は山陰系二重口縁壺である。9は口縁端部を外につまみ出す。器壁が薄く、内面には工具痕が残る。12は短い口縁部をもち、頸部内面はハケが残る。内面には粘土の付着物が点在する。13は口縁部がハの字状に開き、頸部は直立する。15～17は大型品である。15は大型の鉢の可能性ある。内面は頸部までヘラケズリを施す。16は口縁部外面に黒斑あり。17は頸部にヘラ工具で綾杉文を、口縁下には竹管文を巡らす。内面には煤がべっとり付着する。19は畿内系の中型精製直口壺である。外面は縦ハケのちミガキ、内面は暗文風の縦ミガキを施す。20は山陰系の中型丸底壺である。内面には工具痕が残る。21～25は畿内系の精製小型丸底壺である。21は内面横ハケのち縦ミガキを施す。23は口縁端部を少し外反させる。口縁部内面はハケで調整する。24は内外面粗いミガキを施す。2・6・9・10・14は黄茶褐色、11・15～18・20は灰黄色、19・21～25は橙褐色、他は淡黄褐色を呈す。

26～37は布留系の甕である。27・32・37は外面に煤が付着する。27・31・34・36・37は黒斑がある。26の外面は粗いハケを施す。28は口縁部内外面にハケが残る。31の内面はヘラケズリの際にかきとった粘土が付着する。32は内面に炭化物が付着する。33は肩に1条の波状文を施す。35は口縁端部を外方へつまみだす。26・29・32・34～37は灰黄色、31は黄茶褐色、33は黄橙色、他は淡黄褐色を呈す。

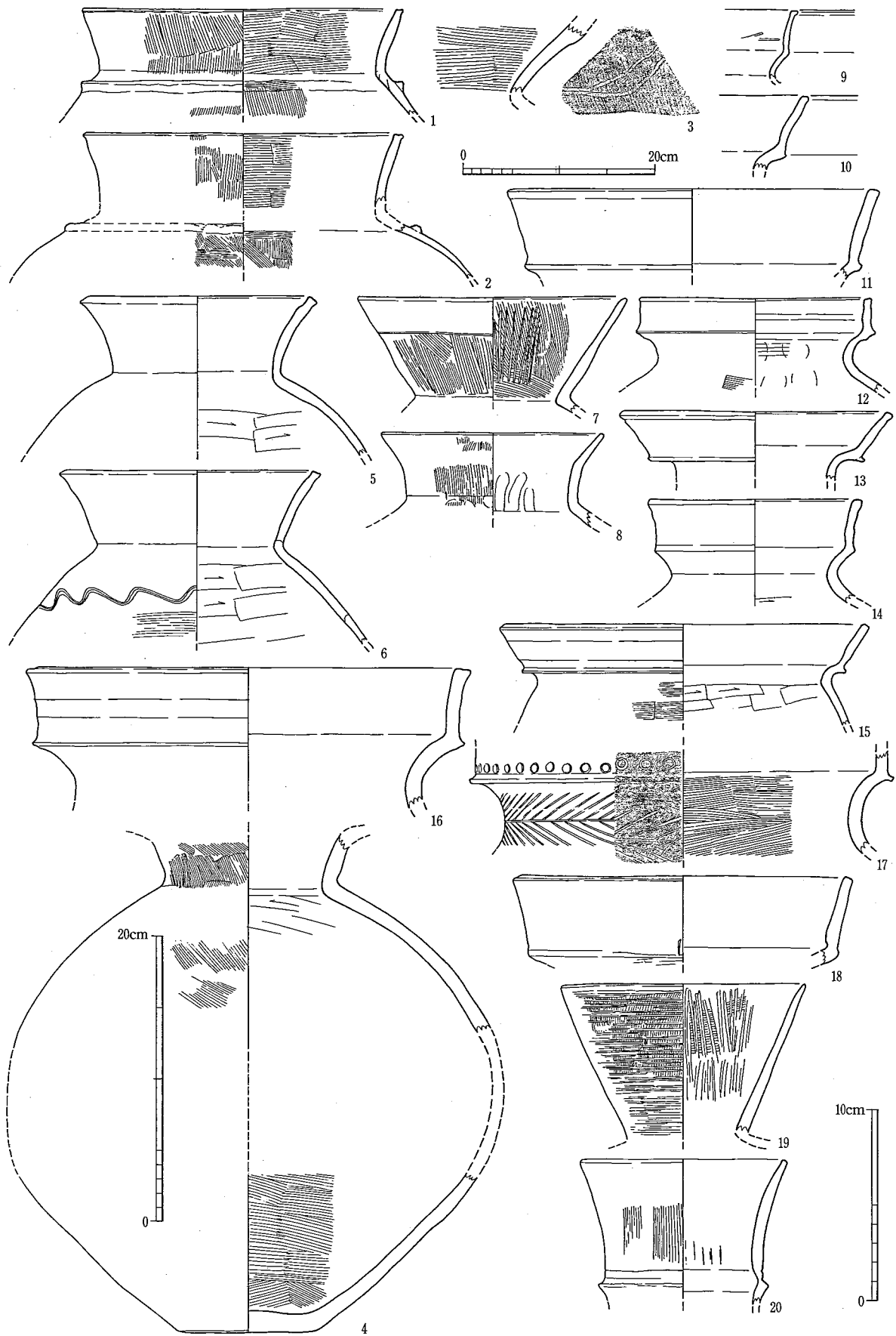
38～41は高杯である。38の外面は横ミガキ、内面は暗文風の縦ミガキを施す。39は杯部下部外面に沈線状の段を施す。外面はハケのちナデか。内面には波状文風のタテミガキを施す。40は内面下部に1条の凹線を巡らす。外面はハケのちナデか。内面はハケのち暗文風の縦ミガキを施す。41は脚部である。38は黄橙色、39は茶褐色、40は黄茶褐色、41は橙褐色を呈す。

42は小型の鉢である。口縁部がわずかに外傾する。内外面はミガキを施す。43～45は外傾する口縁部をもつ鉢である。43は口縁部の器壁が厚く、大きくハの字状に開く。内外面は粗いミガキを施す。45は内外面にミガキを施す。46は浅い鉢である。内外面にミガキを施す。47～49は山陰系脚付鉢の脚部である。43は灰黄褐色、44は茶褐色、46は黄橙色、他は黄褐色を呈す。

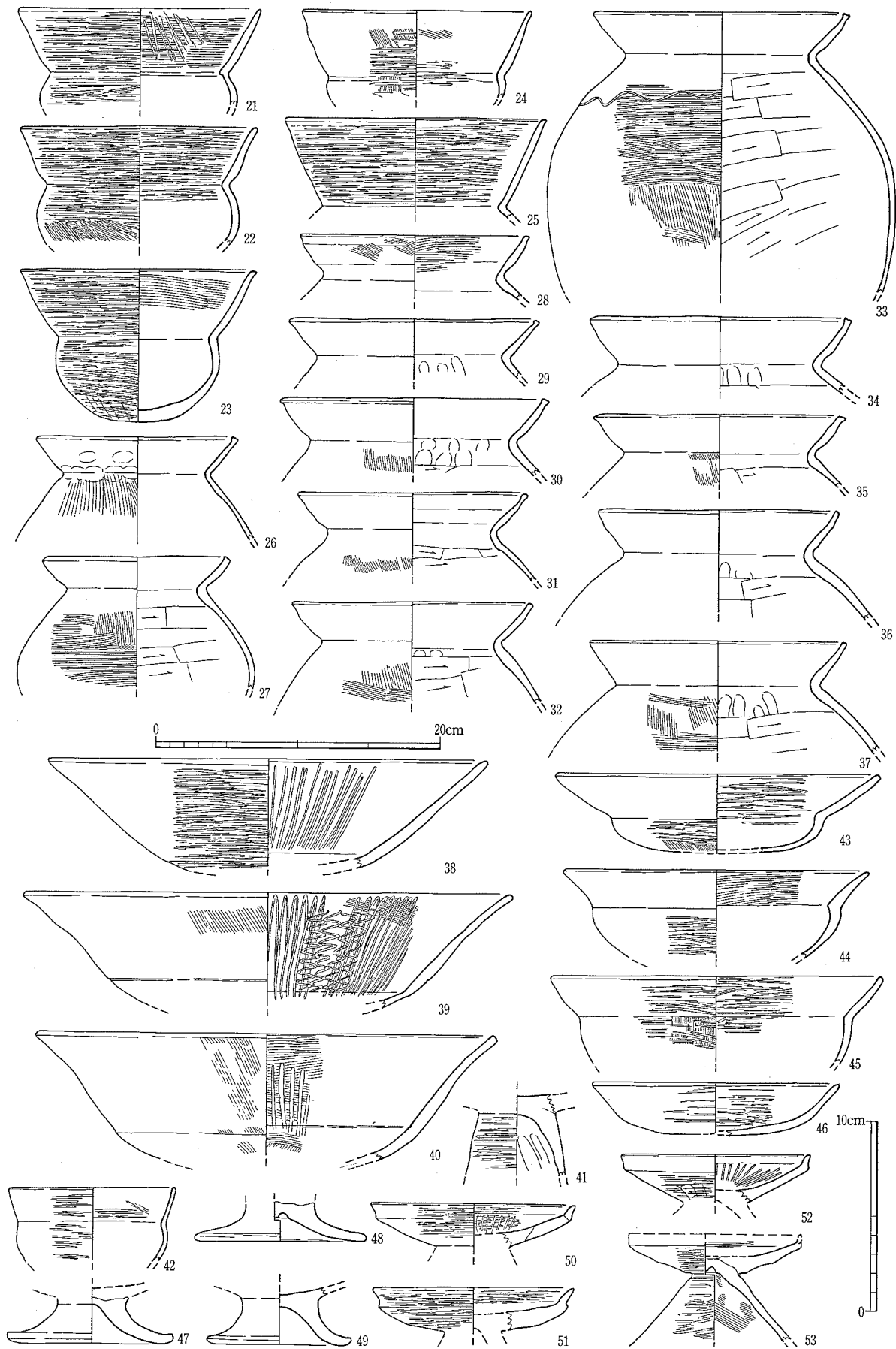
50～53は畿内系小型精製器台である。いずれも外面は横ミガキを施す。50・52は内面に暗文風の縦ミガキを施す。53は口縁部が直立する。53は内面にハケが残る。50・53は橙褐色、51は黄褐色、52は茶褐色を呈す。

54は山陰系鼓型器台の上位で、口縁内面はヘラミガキを施す。白黄茶褐色を呈す。

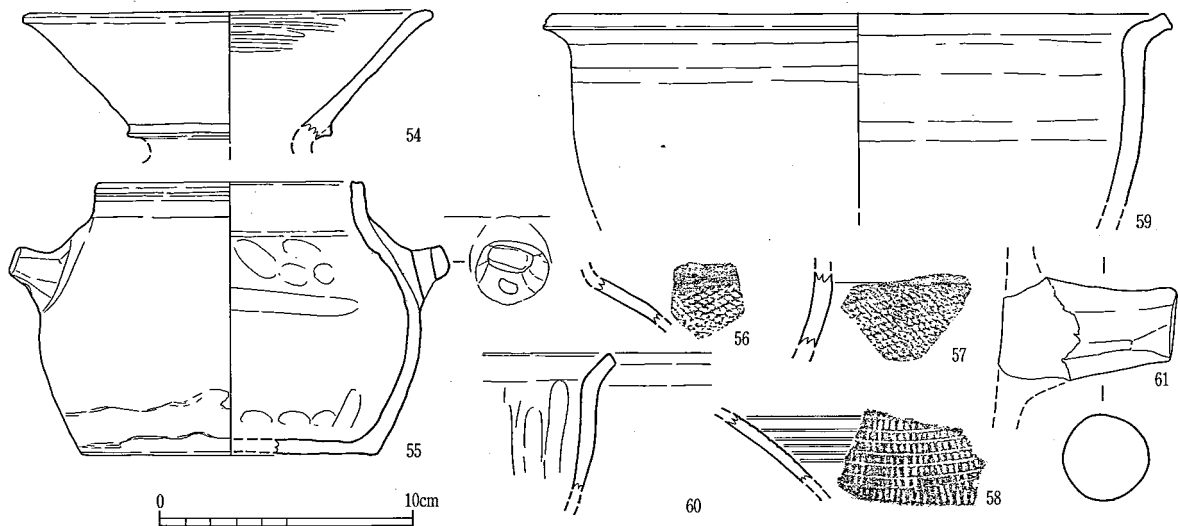
55～61は半島系土器である。55～57・60・61は軟質である。55は平底の短頸壺で、四角形の中央に棒状工具による穿孔をもつ耳が2ヶ所つく。内面には耳との円形の接合痕が確認でき、穿孔して、耳部をさしこんだものと考えられる。胎土は石英を多く含み、内外面は黒変する。内外面はナデ調整であるが、外面は底部近くにヘラケズリを行う。底部近くは接合痕がはっきりみえる。56は肩の破片であり、外面は格子タタキを施す。黄褐色を呈す。57は胴部片である。外面は格子タタキのち凹線を巡らす。橙褐色を呈す。58・59は瓦質に近い陶質土器である。58は肩の破片で、外面は平行タタキのち密に凹線を巡らす。灰黄色を呈す。59・60は短く外反する口縁をもつ鉢である。いずれ



第113図 63号竖穴住居跡出土土器実測図(1) (1・2・15・17は1/6、19・20は1/3、他は1/4)



第114図 63号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (21~25・38~53は1/3、他は1/4)



第115図 63号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/3)

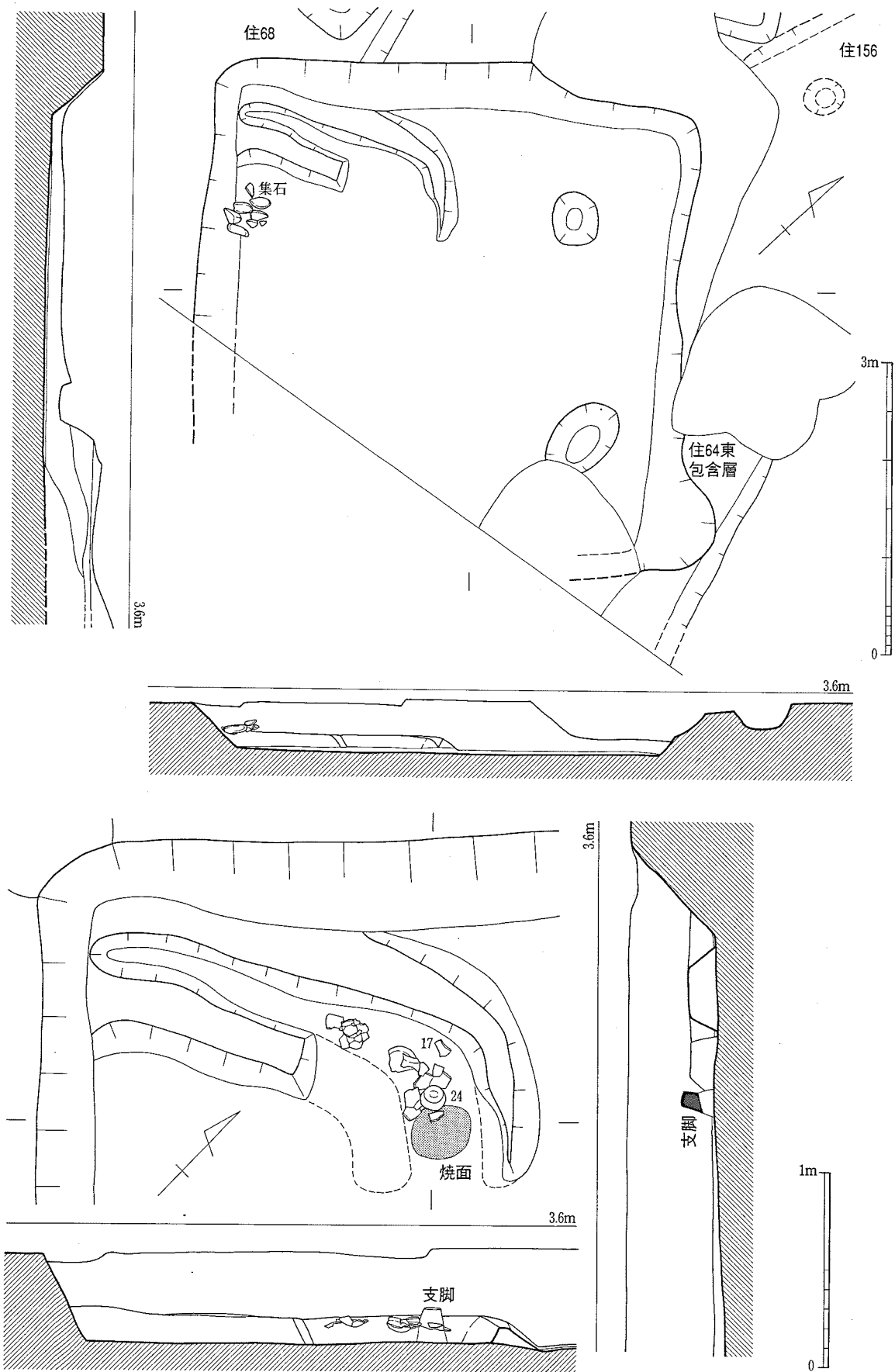
も片口鉢の可能性もある。口縁端部は面取りを行っている。三雲遺跡堺地区出土の把手付鉢と類似する形態となるか。60の内面は縦ナデで調整する。いずれも淡橙褐色を呈す。61は把手である。端部を面取りする。淡黄褐色を呈す。(大庭)

64号竪穴住居跡 (図版30、第116図)

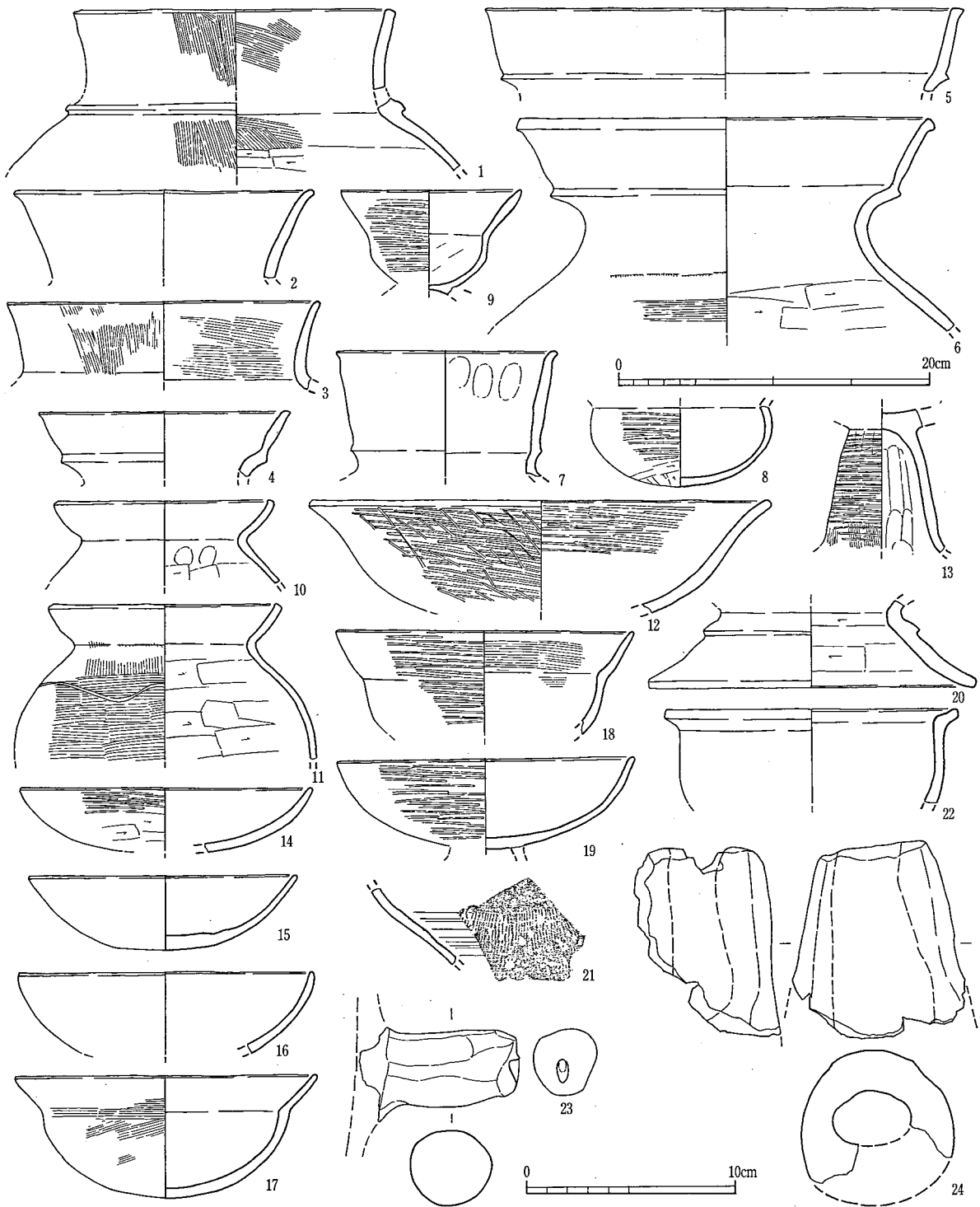
64号竪穴住居跡は3南1区にあり、63号竪穴住居跡の南西に位置する。68号竪穴住居跡を切ると考えて発掘した。本住居跡の南壁と西壁の一部は調査区外にある。覆土は暗黄灰色細砂で、南北5.0m以上、東西5.0m、深さ55cmの方形住居である。西壁中央よりやや北側に住居床面から10cm以上浮いた状態の集石遺構がある。本住居跡の北西隅から北壁に沿って煙道がのびるL字状のカマドを確認した。管玉1点(第239図3)、勾玉未製品4点(第239図10・17・27・28)、石錘片(第243図26)、軽石(第244図44)、叩石(第249図38)が出土した。

カマド 平面プランは煙道部が住居北壁に沿って北東隅に長くのびるゆるやかなL字状を呈する。袖が黄白色粘質砂で構築されており、カマド内埋土との区別が分からなかったため、カマド左袖部をとばしてしまい、右袖部も袖先端部は一部しか残っていない状態である。支脚は土製(第117図24)で、ふいご羽口を転用した可能性がある。支脚前面は非常に良く焼けており、推定で焚口幅75cm、長さ東西2.3mほどになる。支脚前後からカマド廃棄の祭祀の際に置かれたものと考えられる土器が多く出土した(6・8・14・17・24)。燃烧面は住居床面レベルから5cmほど高く、カマド前面には焼土が堆積していた。カマド内埋土は支脚付近は赤褐色の焼土を多く含むが、煙出に近づくとつれ焼土の割合は低くなり、炭ブロックの割合が増す。煙出は住居外までのびない。

出土土器 (第117図) 1は在地系の壺である。頸部と肩の境に突帯をめぐらす。内面はハケのちヘラケズリを施す。2・3は直口壺である。2は口縁端部を短く外反させる。3は内外面にハケが残る。4～6は山陰系二重口縁壺である。4は器壁が厚い。5は口縁端部を面取りを行う。6はカマド前面出土。口縁端部を短く外反させる。内面には炭化物が付着する。7は山陰系中型丸底壺である。口縁端部を短く外反させる。8・9は畿内系小型丸底壺である。9は脚付である。胴部内面には工具痕が残る。1は茶褐色、8は橙褐色、他は淡黄褐色を呈す。



第116图 64号竖穴住居迹实测图 (1/60、1/30)



第117図 64号竪穴住居跡出土土器実測図（7～9・12～23は1/3、他は1/4）

10・11は布留系の甕である。11は肩に全周しない太い凹線の波状文を巡らす。

12は口縁をゆるく外反させる高杯である。外面は細かい横ミガキのち粗い斜めのミガキを施す。13は高杯脚部である。12は黄褐色、13は橙褐色を呈す。

14～16は浅い鉢である。15は外面に煤が付着する。16は内外面ミガキを施すか。17は口縁部が外傾する鉢で、内外面に炭化物が付着する。18は精製の鉢である。19は山陰系脚付鉢である。14・19

は橙褐色、他は黄褐色を呈す。

20は山陰系鼓型器台の底部である。器壁が厚く、突帯がだれている。橙褐色を呈す。

21～23は半島系土器である。21・22は瓦質に近い。21は肩の破片で、平行タタキのち凹線を巡らす。灰褐色を呈す。22は短く外反する口縁をもつ軟質の小型鉢である。外面に薄く煤が付着する。灰黄褐色を呈す。23は軟質土器の把手で、端部には成形時の棒状工具による刺突がある。黄褐色を呈する。

24はカマドの支脚に使用されたものである。孔径は4.3～5.2cmを測る。胎土にはスサを含むため、ふいごの羽口の可能性がある。端部は二次加熱を受けており、赤変する。外面全面には炭が付着する。茶褐色を呈する。(大庭)

65号竪穴住居跡 (図版30、第118図)

65号竪穴住居跡は3中1区から南区にあり、64号竪穴住居跡の北に位置する。66・69・70・78・128・157号竪穴住居跡を切ると考えて発掘した。のちの検討の結果、本住居跡は128号竪穴住居跡に切られる可能性が高く、78号竪穴住居跡との先後関係は不明である。本住居跡を先に掘ってしまったため、128号竪穴住居跡出土土器が混ざってしまった。当住居跡中央には校舎の基礎が存在するが、基礎を挟んだ両側とも覆土・床面レベルが同じであったため、同一住居跡であると判断した。覆土は暗黄灰色細砂で、南北7.4m、東西3.7m、深さ55cmの大型の長方形住居である。基礎を挟んだ南側部分から土器が集中して出土した。この南側部分にも下層住居があると考えられるが、ほとんどが校舎基礎の下にあたるため調査できなかった。床面にはピットを確認したが、炉跡はない。第120図28・42は床付近出土である。第119・120図7・29・39はP1出土である。器種不明の鉄器片(第238図48)と鉄滓と考えられる塊(第238図64)、66・65号竪穴住居跡上層から用途不明石器(第249図39)が出土した。

出土土器 (第119～121図) 1・2は在地系の壺である。1は口縁部をゆるく外反させる。内外面はハケで調整するが、外面下部はハケのちヘラケズリを施す。2は口縁端部を面取りする。甕の口縁の可能性もある。3・4は畿内系直口壺である。3の頸部外面は横ハケが良く残る。5～8は山陰系二重口縁壺である。5は口縁端部を外につまみ出す。7・8は肩に縦ハケのあと横ハケを施す。7は胴部に黒斑がある。8は口径28cm、器高55cmの大型壺である。内面下部にはハケのちヘラケズリを行う。9は短頸壺である。口縁端部は丸くおさめる。外面はハケのちナデで調整する。10は畿内系中型精製直口壺である。外面は横ミガキ、内面は暗文風の縦ミガキを施す。11・12は畿内系精製小型丸底壺である。12は口縁端部を少し外反させる。13～15は山陰系小型丸底壺である。13・14は口縁部内外面にミガキを施す。1は淡橙褐色、2は灰黄色、7は黄茶褐色、9は黄橙色、10・12は赤褐色、他は黄褐色を呈す。

16は在地系の甕である。外面にはタタキが残り、内面は頸部までケズる。17～30は布留系の甕である。18・19・21・26・27は外面に煤が付着する。17は口径20.4cmの大型品である。21は口縁端部が直立する。22は肩の3条の櫛描波状文の上に、棒状工具による刺突文を巡らす。23～25は小型品である。25は器壁が厚く、頸部までヘラケズリを施す。26は肩に工具によるキズがある。30は肩に1条の凹線を巡らす。16・22・30は茶褐色、17・27は灰黄色、29は黄茶褐色、他は白黄褐色～黄褐色を呈す。



第118图 65・66号竖穴住居跡実测图 (1/60)

31・32は高杯の杯部である。31は外面はミガキ、内面は磨滅しているが、縦ミガキを施す。黄褐色を呈す。32はミガキのち内外面にスリップ状に化粧土をかける。橙褐色を呈す。

33～35は口縁が外傾する鉢である。33・35は精製品である。36・37は浅い鉢である。37は口縁はゆるく外反させ、内外面に細かいミガキを施す。38は小型の粗製鉢である。39は山陰系大型鉢である。口径29cm、器高25.6cmを測る。底部は平底に近い丸底を呈す。外面底部近くはケズリのちナデ調整を行う。40は畿内系脚付鉢の脚部である。41・42は山陰系の脚付鉢である。41の杯部内面は磨滅しているが暗文風の縦ミガキを行う。42は杯部内面にミガキを施したもののか。36・41・42は淡黄褐色、38は黒灰色、他は橙褐色を呈す。

43は畿内系小型精製器台である。半乾燥段階に外から1ヶ所穿孔を施す。外面はミガキを施す。44・45は山陰系鼓型器台である。外面は細かい横ミガキのち暗文風の縦ミガキを施す。44は内面はケズリ、口縁近くはヘラミガキを行う。45は口縁端部を面取りし、内面上位はヘラミガキ、下位はケズリを施す。44は赤褐色を呈す。45は黄茶褐色を呈す。

47～49は半島系土器で、軟質である。47は口縁端部が短く外反するワイングラス型の高杯である。外面は格子タタキで、内面はナデで調整し、脚柱部はヘラケズリを施す。胎土は石英粒を多く含む。全体に炭化物が付着する。赤褐色を呈す。48は把手である。黄褐色を呈す。49は甌の底部の破片である。棒状工具で焼成前に外から穿孔する。胎土は細粒を多く含む。黄茶褐色を呈す。

65・66号 竪穴住居跡上層出土土器 (第121図50～55) 50は畿内系直口壺である。白黄褐色を呈す。51は布留系の甕である。肩に横ハケを施す。灰黄褐色を呈す。52はやや内湾する口縁部をもち、外面は粗いハケで調整する小型の粗製鉢である。灰黄褐色を呈する。53は浅い鉢である。胎土に角閃石を多く含む。黄橙色を呈す。54は軟質の半島系土器である。壺か甕の肩の破片で、外面は格子タタキのち凹線を巡らす。黄褐色を呈す。55は製塩土器か。外面はタタキで調整し、二次加熱のため赤変する。赤褐色を呈す。(大庭)

66号 竪穴住居跡 (図版30、第118図)

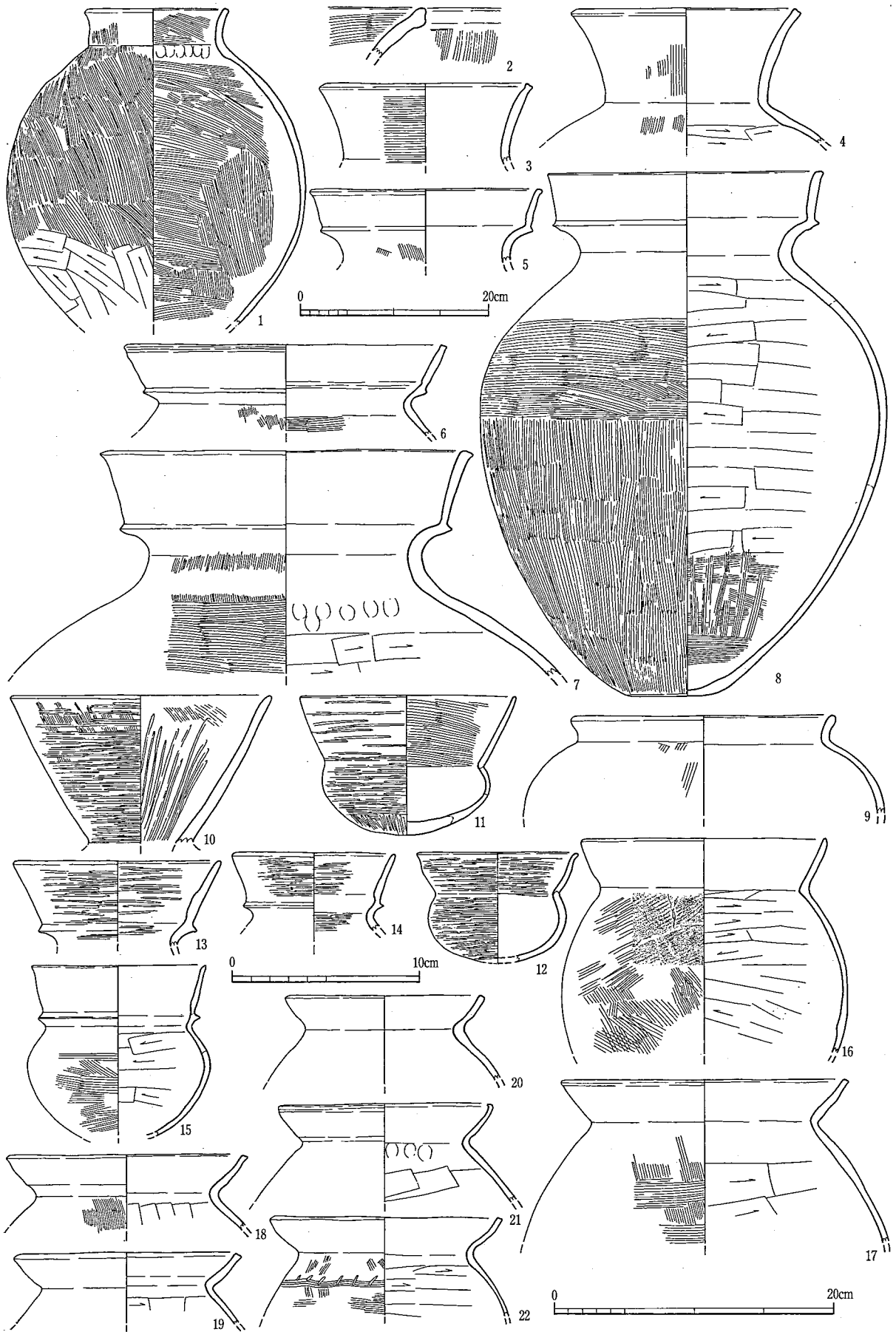
66号 竪穴住居跡は3南1区にあり、64号 竪穴住居跡の南に位置する。65・68号 竪穴住居跡に切られ、154号住居跡を切ると考えて発掘した。校舎の基礎や攪乱のため、南・東壁の一部のみ残る。覆土は明黄灰色細砂で、南北4.8m以上、東西5.1m以上、深さ16cmで平面プランは不明である。床面にはピットを確認したが、炉跡はない。

出土土器 (第123図1) 図示できた土器は1点である。1は山陰系の脚付鉢である。杯部外面下部は横ミガキのち縦ミガキ、内面は暗文風の縦ミガキを施す。淡黄褐色を施す。(大庭)

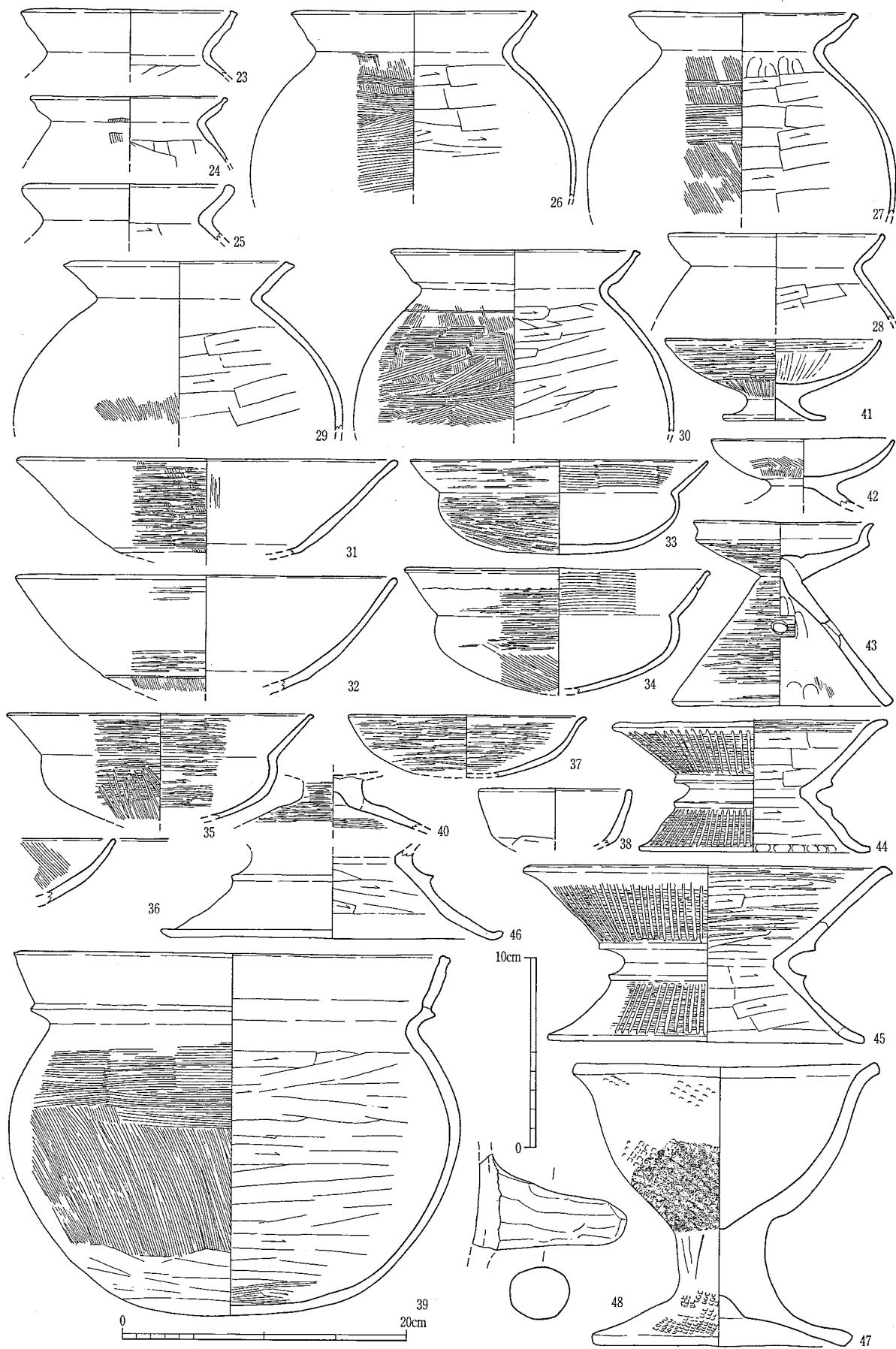
68号 竪穴住居跡 (図版31、第122図)

3南1区、3南2区に位置し、66・71・154号 竪穴住居跡を切ると考えて発掘を行った。66号住居跡との切合いは確実であるが、154号住居跡との間では切合いが心許ない。東西に長い長方形を呈し、西南隅近くに長軸0.9m、短軸0.75mの炉跡が検出された。覆土は暗褐色～黒褐色細砂である。土器以外の出土遺物に覆土下部より出土した石錘(第243図39)がある。

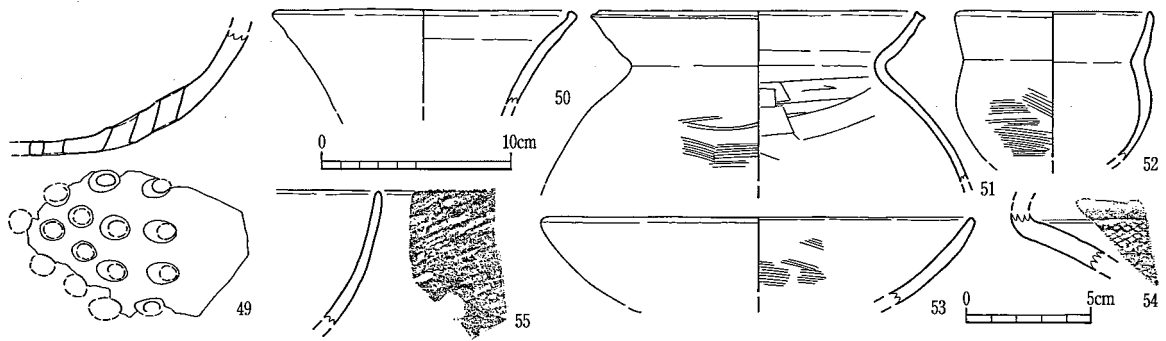
出土土器 (第123図2～22) 2は混入と思われる弥生時代後期後半の二重口縁壺である。内外ともナデで淡黄褐色を呈す。3・4は布留系直口壺。3はこの種の器形には珍しく、頸部に断面三角



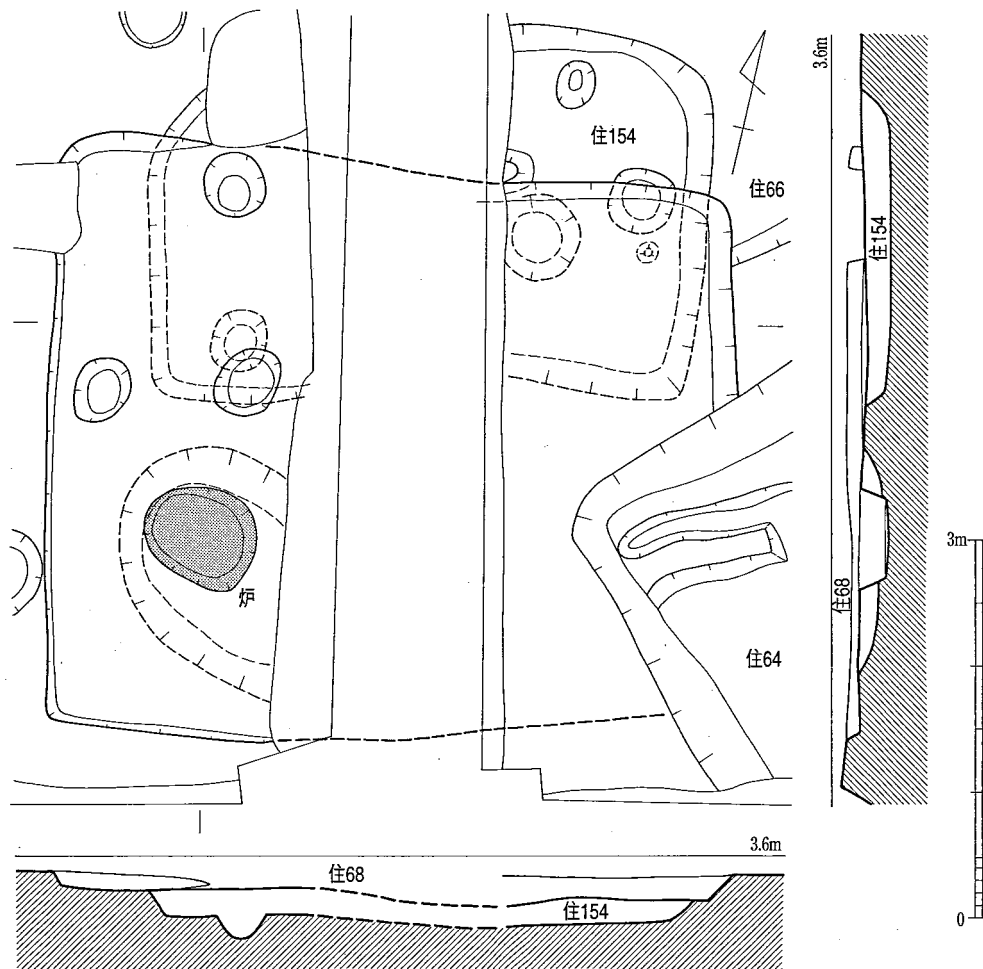
第119図 65号竪穴住居跡出土土器実測図(1) (1・6・8は1/6、10~15は1/3、他は1/4)



第120図 65号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (23~30・39は1/4、他は1/3)



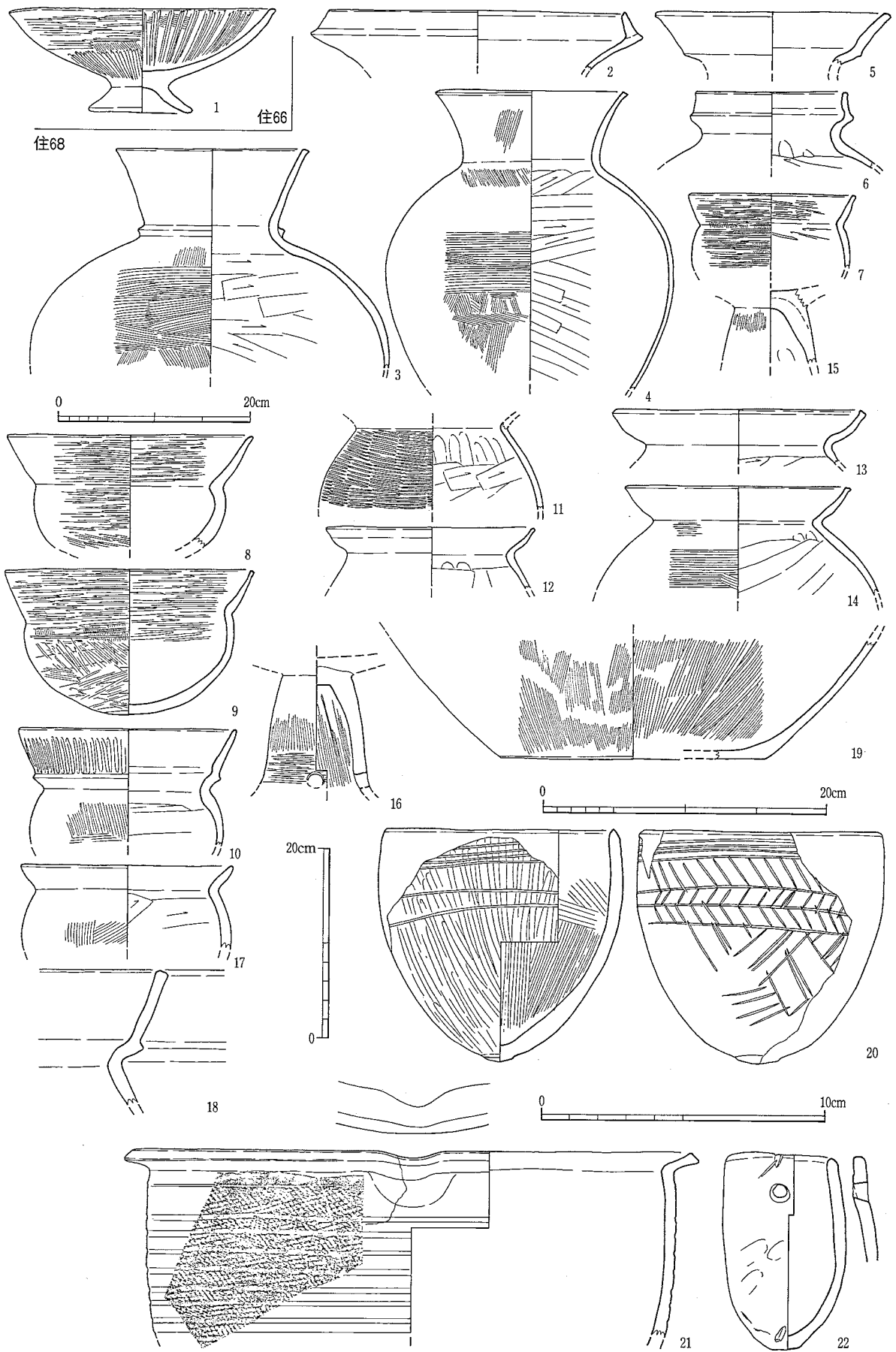
第121図 65号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (50・51は1/4、他は1/3)



第122図 68号竪穴住居跡実測図 (1/60)

形突帯を貼付し、4は肩部のハケメをナデ消している。3は淡褐色、4は白黄褐色。5は山陰系の二重口縁壺で、6は口縁が短く直立する二重口縁壺である。いずれも淡黄褐色を呈する。7～9は淡橙褐色～橙褐色の小形丸底壺である。いずれも摩滅により調整不明の部分以外は内外面を横ミガキし、7はミガキ前の縦ハケ、9はミガキ前の縦ハケと胴部下半のヘラケズリが観察される。10は淡黄褐色の二重口縁小形丸底壺である。外面は胴部が横・縦ハケ、口縁部が太い縦ミガキである。胴部内面はケズリ後ナデ。

11～14は甕である。11は外面を左上りの細かい平行タタキで仕上げ庄内系甕と言えるが、内面は



第123図 66・68号竪穴住居跡出土土器実測図
 (2~4は1/6、7~10・15・16・21・22は1/3、20は1/2、他は1/4)

ケズリが頸部まで及ばず、先行するナデ上げが見える。12~14は布留系甕で、12は口縁端部が丸く、他は外傾する面をなす。12が暗黄褐色~暗褐色を呈し、他は淡黄褐色~灰黄褐色。

15・16は高杯脚部。16は2ヶ所に穿孔が有り、外面は縦ハケ後、穿孔部近くを横ミガキ、内面は縦ハケである。15は外面ケズリ後縦ハケ、内面はナデ。いずれも橙褐色を呈する。

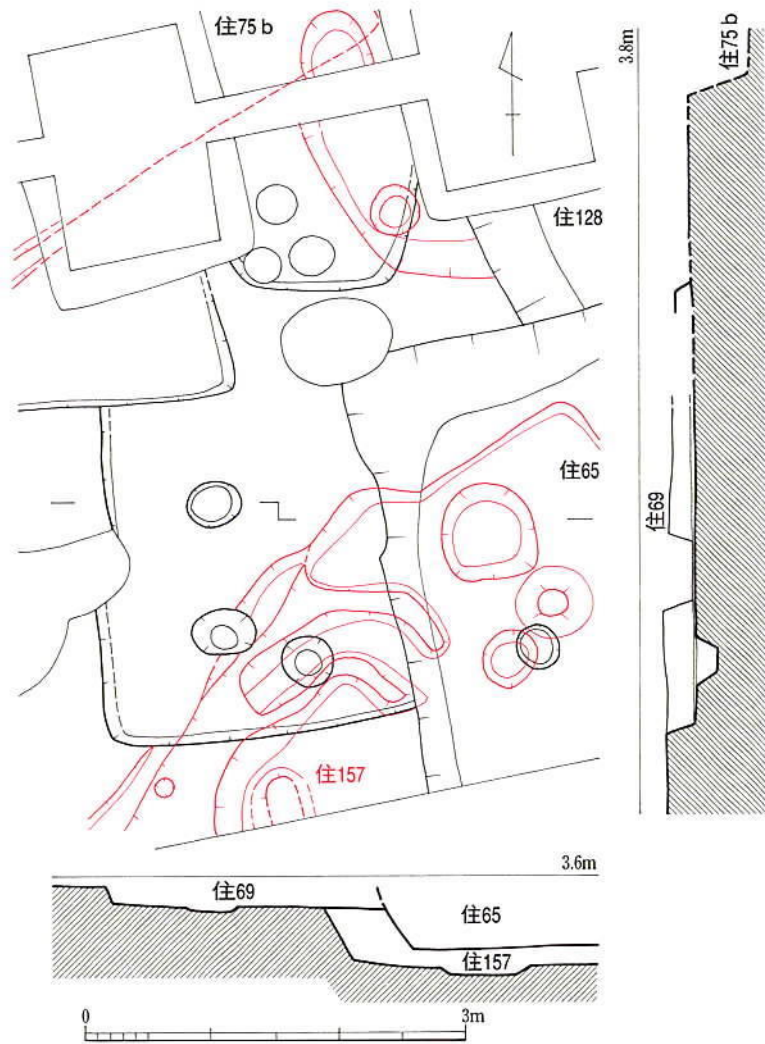
17は口縁の外反する鉢として分類したが、あるいは小形甕となるか。口縁端部が丸く、内面にヘラケズリを施す。18は大形の二重口縁破片であるが、19の平底片と同一個体をなし、大形鉢状となる可能性が高い。19は大きな平底を呈し、内外をハケメで仕上げる。これらの鉢は淡黄褐色~灰黄褐色を呈す。

20は深く直口で底部は小さく突出したレンズ状底をなす。外

面に線刻し、上部は口縁近くに密に4条の平行線、その下に間隔を置いて3条の平行線を施文した後、隙間を平行斜線で充填し有軸羽状文風の文様とする。下部は斜め平行線を施文する。かなり粗雑であるが、製作者は複合鋸歯文を意識して施文したと思われる。これらの文様は上半の水平線が1/2周の残存範囲全体に及んでいるものの、平行斜線、複合鋸歯文風文様は1/4以下の範囲にとどまっている。このような施文した小形深鉢は北九州市郷屋遺跡、福岡県三輪町犬竹遺跡、福岡県築城町十双遺跡、熊本県山鹿市方保田東原遺跡等に類例があるのみで、極めて出土例が少ない。これらの類例と比較すると、20は共伴土器の時期も新しく、そのためか文様の粗雑化、省略化が最も進んでいる。内面は縦ハケ、外面は太いミガキを施す。胎土に砂粒を少し含むものの、かなり丁寧な仕上げで、褐色を呈する。

21は半島系土器の鉢で、128号縦穴住居跡、3中1区・3北1区遺構面出土破片と接合したものである。外面は小さな斜格子文タタキの後、凹線を巡らしている。口縁はわずかに残存する部分から考えて片口をなすと思われる。軟質であるが焼成は良好で黄褐色。

22は蛸壺で淡黄褐色を呈す。(重藤)



第124図 69号縦穴住居跡実測図 (1/60)

69号竪穴住居跡 (図版31、第124図)

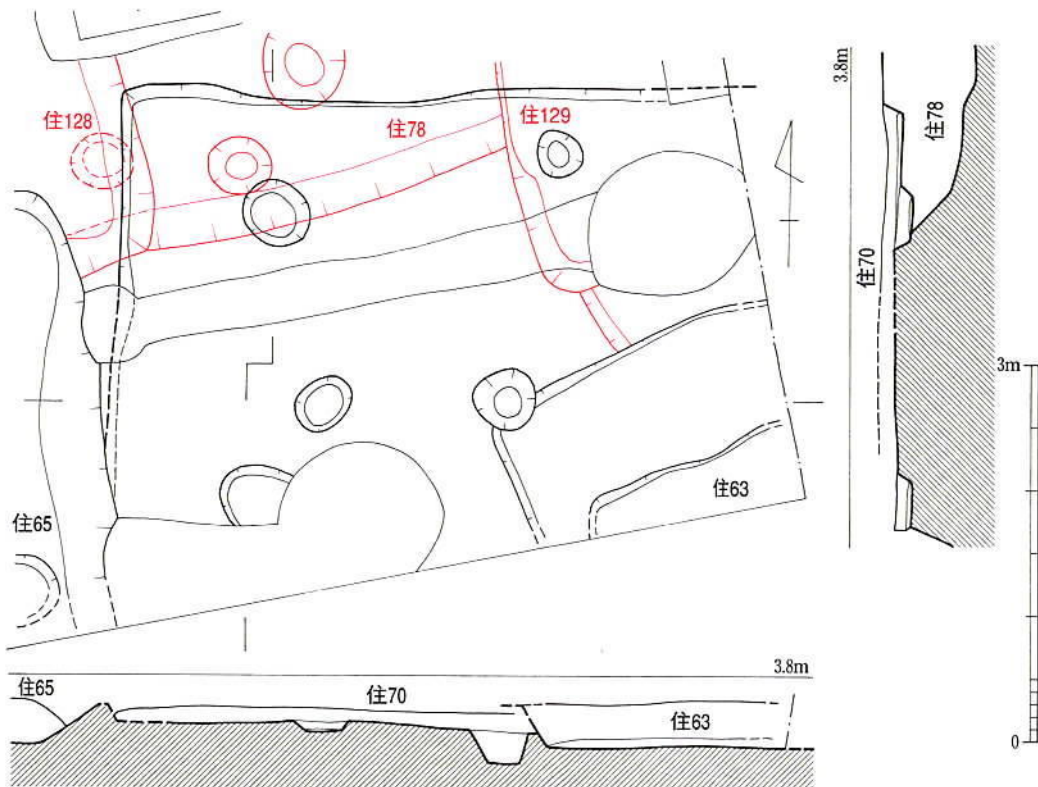
3中2区に位置し、西側を65・128号竪穴住居跡に切られる埋土が灰褐色細砂の住居跡と考えて発掘を行った。検出したのは西壁～南壁のみである。この付近は住居跡が多数切り合っており、遺構確認時にはほとんど地山が見えない状況であった。また本住居跡下層にはカマド付きの159号竪穴住居跡が位置しており、平面プランは発掘時点より不安を覚えていた。北側には75号竪穴住居跡、校舎基礎などがあり、北壁も検出していない。159号住居跡の平面形を誤って捉えた恐れも大きいと考えられる。出土遺物の一括性も疑問である。

出土土器 (第127図1～4) 1～3は布留系甕である。1・2は口縁部をわずかに上方につまみ出し、端部が外傾する面をなす。1の肩部には3条1単位とする櫛描波状文、3は7条1単位の櫛描直線文を巡らしている。2は頸部内面に胴部ヘラケズリに先行するナデ上げの痕跡が残っている。3は外面全体に煤がべっとりと付着している。1・3は淡黄褐色～灰黄褐色、2は褐白色を呈す。

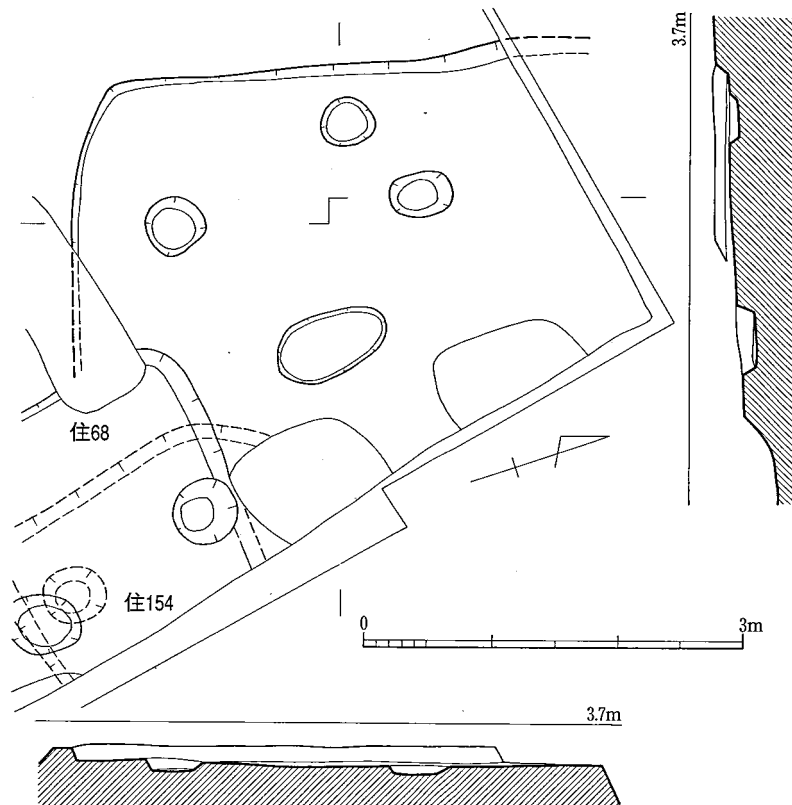
4は直口縁の鉢で丸底と思われる。口縁部はわずかに内面を肥厚させ、外面ナデ後粗い斜めミガキ、内面は粗い縦ミガキである。淡黄褐色を呈す。(重藤)

70号竪穴住居跡 (第125図)

3中2区東端に位置しており、南東を63号竪穴住居跡に切られると考えたものである。西にある65号竪穴住居跡との切合いは明確にすることができなかった。南部は校舎基礎があり、東部は調査区外へと伸びている。これらにより北壁と西壁を残すのみとなっている。北側下層には78・128・129号竪穴住居跡がある。しかしながら、周辺の住居跡と比べると床面はかなり高く、輪郭線もあ



第125図 70号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第126図 71号竪穴住居跡実測図 (1/60)

まり明確なものではなかった。炉跡も検出していないので、周辺住居跡の間の包含層的部分と理解すべきか。

出土土器 (第127図5～10) 5・6は山陰系二重口縁壺口縁である。5は口縁端を外方にわずかに拡張している。白黄褐色～淡黄褐色を呈す。

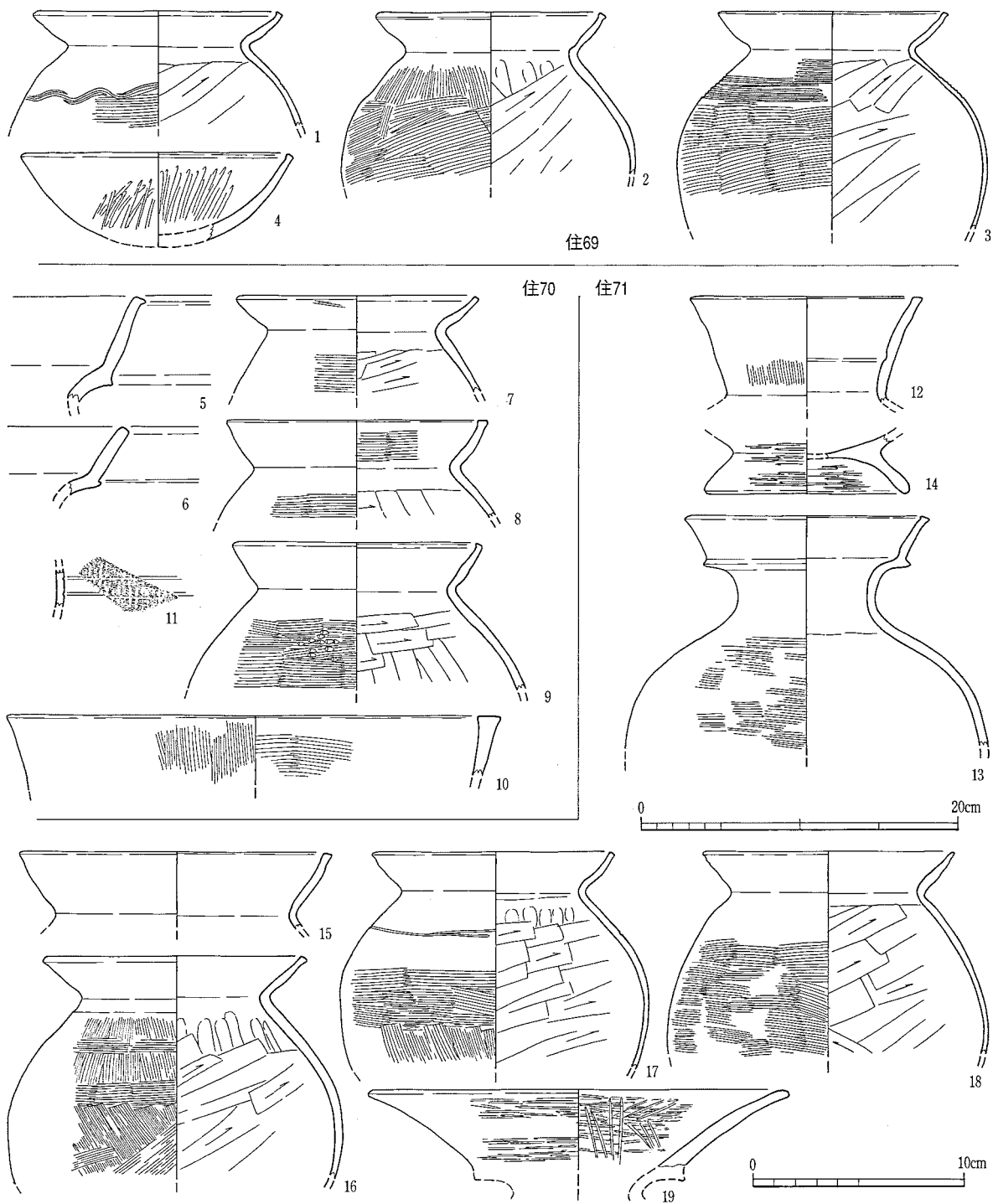
7～9は布留系の甕。7は淡黄褐色を呈し、口縁端部を丸くおさめている。8は淡橙褐色で口縁端部が水平な面をなし、口縁内面に横ハケが残る。9は口縁端部が外傾し、肩部に棒状工具の刺突を密に施した文様が見える。外面には煤が付着し、淡褐色を呈す。

10は直立し端部が面をなす口縁部片で、大形の鉢か。内外ハケメで仕上げ、淡黄褐色。(重藤)

71号竪穴住居跡 (図版31、第126図)

3南2区にあり、南を68号竪穴住居跡に切られると考えたものである。北側、東側には校舎基礎があり、住居跡はそれをこえて広がらない。そのため検出したのは西壁と南壁の一部である。下層には158号竪穴住居跡がある。ただ68・158号住居跡との切合いは十分に検討しないまま掘り下げてしまったので不安が残る。住居であることは確実と思われるが、炉跡も検出していない。土器以外に鉄器 (第237・238図32・50・60・61) がある。

出土土器 (第127図12～19) 12は直口壺で口縁部内面の凹みが特徴的。13は山陰系二重口縁壺で、内面ケズリ、外面ハケメはかなり摩滅している。14は脚付小形壺と思われる脚部片。外面～脚部内面に掛けて横ミガキ、胴部内面の調整は不明。内面全体が黒変する。12・13は白黄褐色～淡黄褐色を呈し、14は褐色。



第127図 69・70・71号竪穴住居跡出土土器実測図（4・11・14・19は1/3、他は1/4）

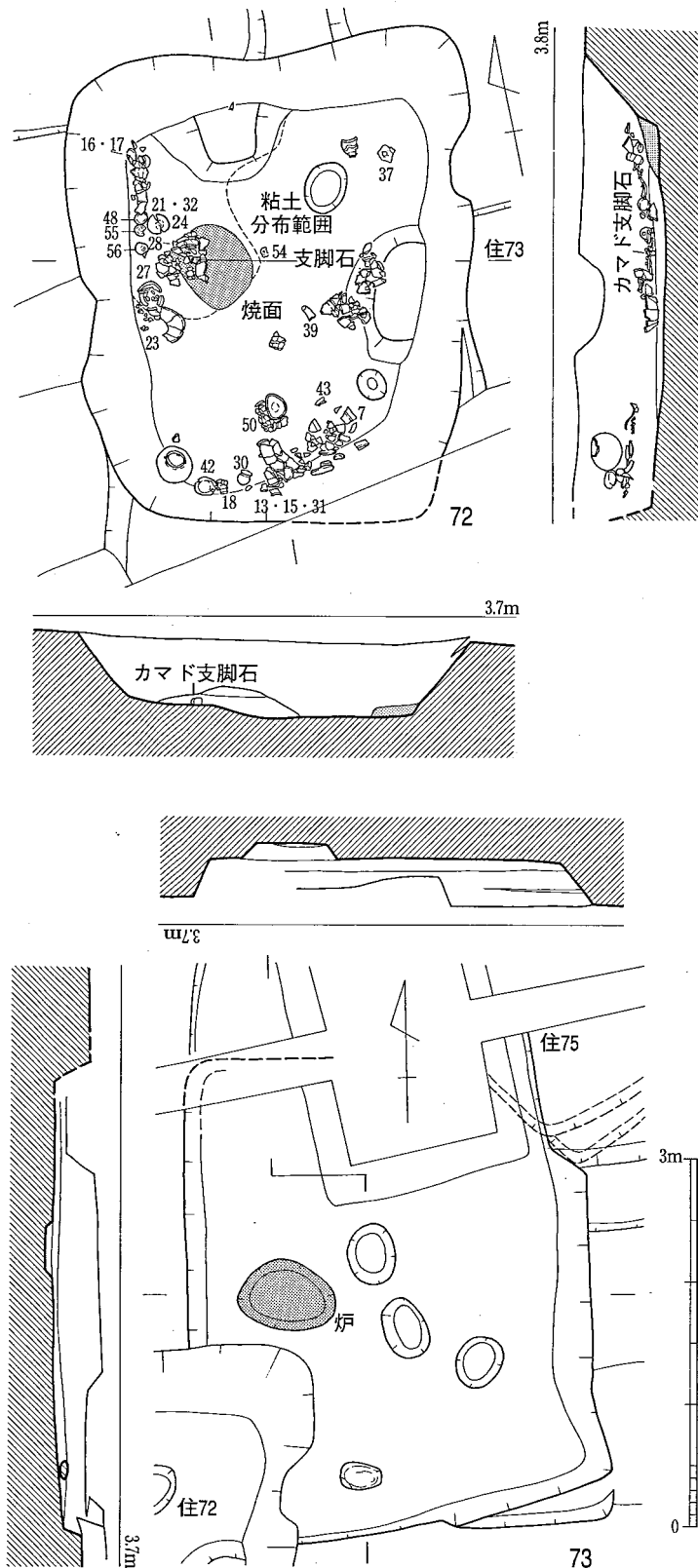
15～18は布留系甕である。15は口縁が内湾して、やや長くのびたもので、端部は水平に近い面をなす。16・17は口縁端部が外傾する面をなし、16の外面上部は煤が付着し、一部二次加熱も見られる。17の肩部には1条の沈線が巡っている。18は口縁端部を丸く仕上げ、口縁部を中心に外面に煤が付着している。いずれも灰黄褐色～淡黄褐色を呈する。

19は山陰系鼓形器台の口縁部で、72号竪穴住居跡覆土下部出土の破片と接合した。外面横ミガキ、内面縦ミガキで仕上げ、内外に化粧土を塗布したようである。破片下端は突帯部分の接合面より剥

離しており、接合面にはハケメ状の線刻が観察される。橙褐色を呈し、胎土は精良。(重藤)

72号竪穴住居跡 (図版32、第128図)

3中1区のほぼ中央に位置する竪穴住居跡である。上面南東隅が校舎基礎にかかるために検出できなかったが、それを除けば住居跡のほぼ全形を捉えることができた。西南隅に不自然な段が生じているが、これは発掘時には掘り間違いと考えたが、校舎基礎を挟んで南に位置する94号竪穴住居跡の一部の可能性もある。上面で測ると東西3.3m、南北3.8mの小形長方形を呈する。現状では深さ0.7mを測るが、カマドの状況からみて5cm程床面を下げすぎている。床面には北壁際西より、東壁際中央にそれぞれ高さ10cm程の灰黄色粘質土の段が検出された。前者は後述するようにカマドの一部と考えられるが、後者の用途は不明である。埋土は斑状に褐色細砂が混じる暗灰褐色細砂。図示したように西壁際床面近くと、南壁際覆土中部を中心に多量の土器が出土した。出土土器は一部に本来94号住居跡に属するものを含む恐れがあるが、出土状況を図示した土器の一括性は高いと思われる。土器以外に石錘(第243図23)、台石(第249図40)が出土している。



第128図 72・73号竪穴住居跡実測図 (1/60)

カマド 発掘を進めたところ上述のように住居跡北壁際西寄りに粘土の段が検出された。また床面では西壁際に焼け面が検出され炉跡と考えていた。しかしながら、焼け面上で出土した土器を取り上げると高さ10cm余りの河原石が立ったままの状態で見出され、この時点で初めてカマドの存在に気が付いた。そのためカマドの個別図は作製しておらず、詳しい構造も不明である。北壁西寄りの粘土の段をカマド壁体の一部と考えると、住居西北の壁沿いに煙道が伸びる平面L字形のカマドが推測される。すると、西壁際に沿って並んで出土した土器（16・17・21・23・24・27・32・48・55・56）は完形品も多く含まれるので、カマド廃棄時の祭祀行為に伴い意図的に配置された遺物の可能性が高く、極めて良好な一括遺物と言えるだろう。またカマドの廃棄時にかなりの部分の壁体が意図的に壊されたものと推測される。

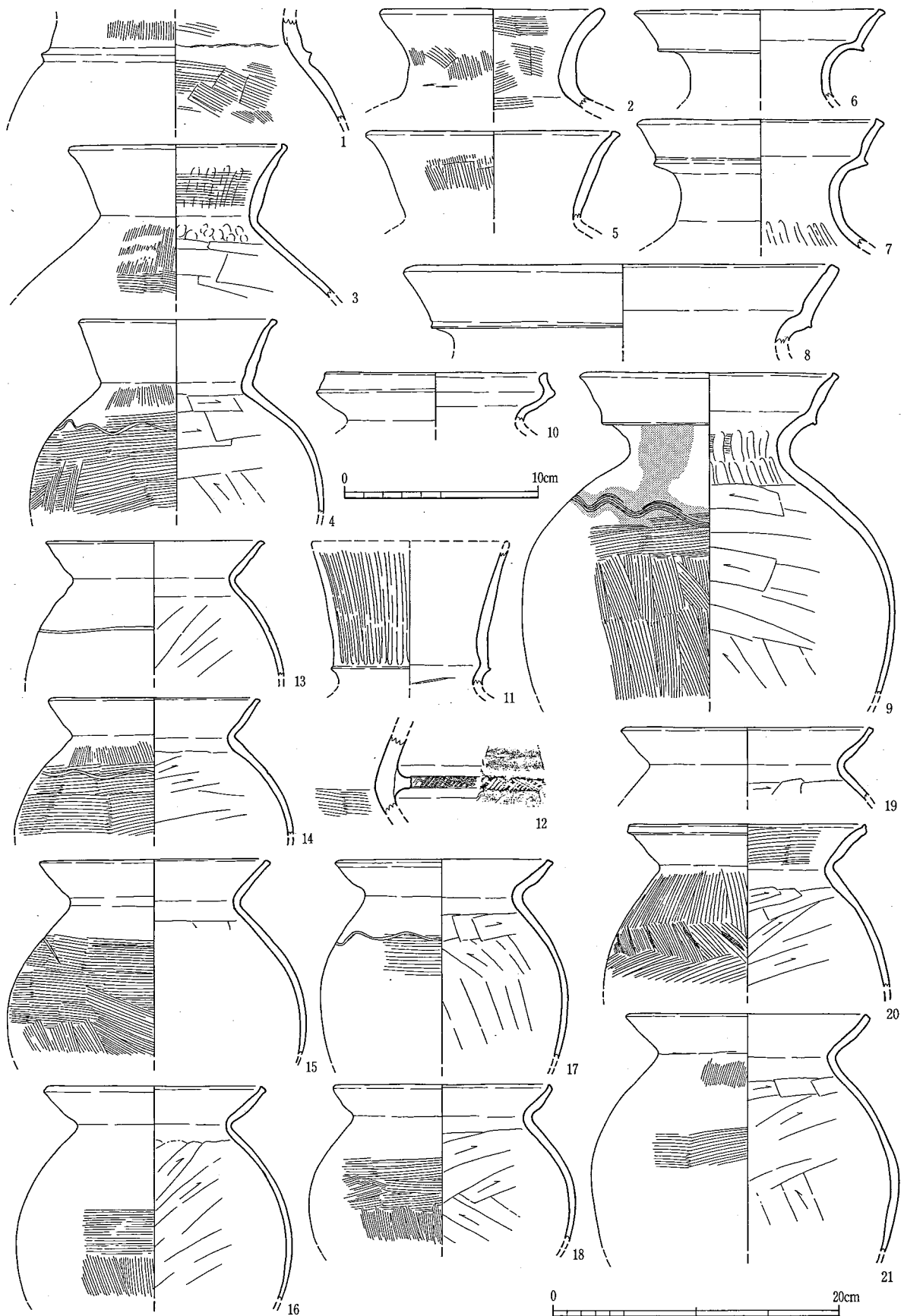
出土土器（第129～131図） 出土状況図に図示したもののほかに、1～5・9・19・25・26・33・36・40・44・47・49・51・52・53・61が覆土下部から出土し、38はカマド焼面上から出土した。

1は在地系の二重口縁壺頸部と考えられる。頸部に断面三角形の突帯を貼付している。2も在地系直口壺か。口縁の外反が強く、端部は丸くおさめており、内外をハケメで仕上げる。3～5は布留系直口壺である。3は口縁端部を内につまみ上げ、口縁部内面に横ハケ前のナデ上げが残る。4は口縁端部が丸く、肩部に1条の波状沈線文を施している。5は口縁端部が外傾する面をなし、外面に縦ハケが残る。6～9は山陰系二重口縁壺。7は口縁屈曲部外面が一部沈線状を呈し、内面のナデ上げ痕が顕著。8は大形品である。9は肩部に3条1単位の櫛描波状文を施し、それに重ねるように赤色顔料を塗布する。胴部外面にハケメ前の左上り平行タタキが見える。10は吉備系二重口縁壺と考えられ、口縁は短く内傾し、端部をやや外側に屈曲させる。11は二重口縁をなす山陰系中形直口壺で、口縁外面に疎らに太い縦ミガキを施す。これらの壺は2が橙褐色、5が灰褐色を呈す以外は白黄褐色～淡黄褐色を呈す。

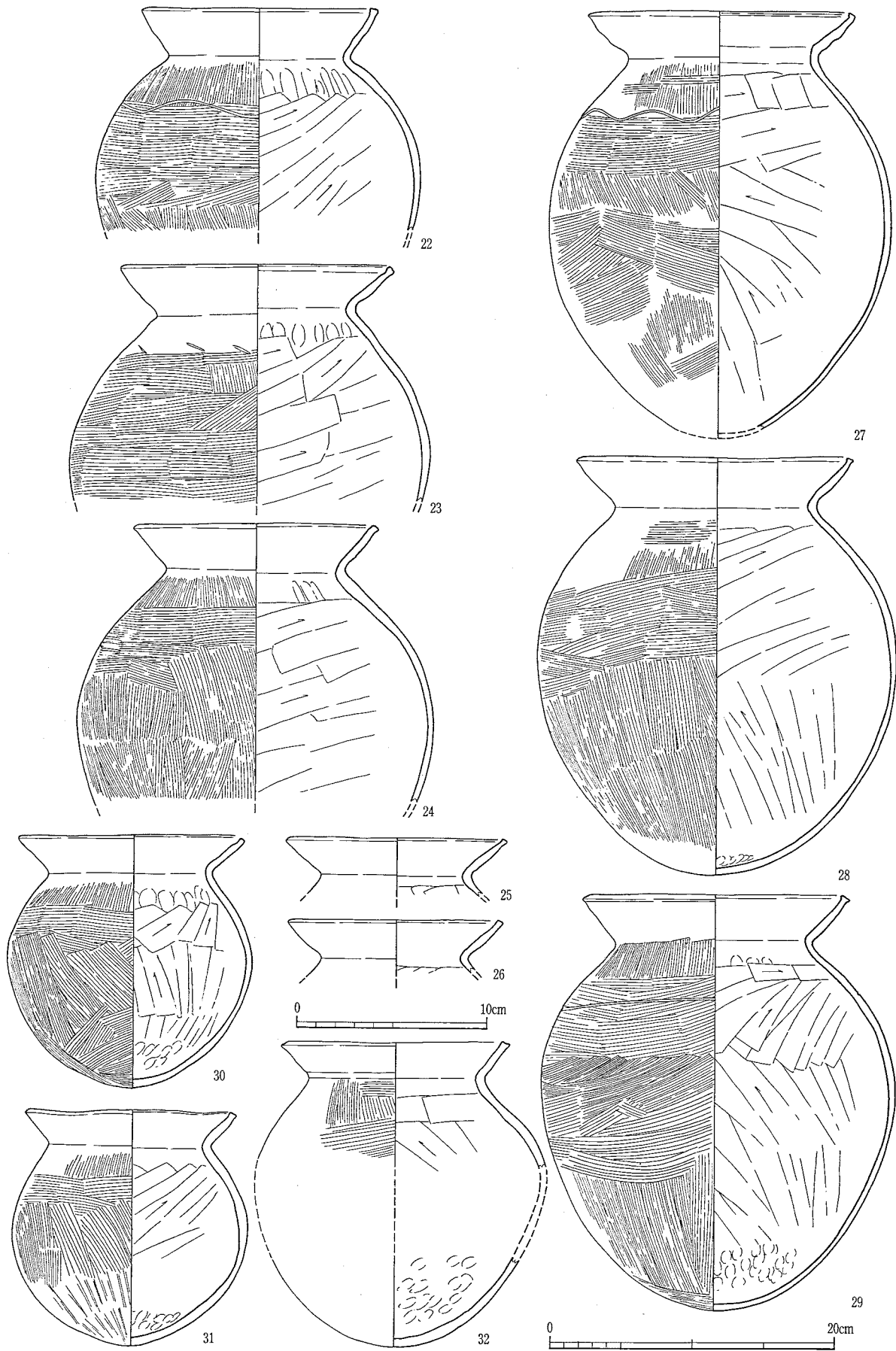
12は橙褐色を呈する在地系大形甕頸部。外面に高いコの字状突帯を貼付し、その頂部にハケメ工具による密な刻み目を施す。

13～32は布留系甕で、30～32は比較的、小形である。やや内湾気味で直線的に外傾する口縁部で、端部が外傾する面をなすものが主体であるが、13・14・25・26・30は端部丸み帯び、16・18・27は内上方につまみ上げ外傾する面をなす。また、22は内につまみ上げ水平面をつくり、29は上下につまみ出し拡張する。20はやや丸みを帯びて外反し、端部を上につまみ上げて直に近い面をなす。口縁内面に粗いハケメを残す点とあわせて、5様式系甕の影響を留めたものか。肩部施文は13・15が1条直線沈線文、17・22・27・29が1条波状沈線文、20がハケメ工具による間の開いた斜行刺突文、23が短い沈線による列点文。内面ヘラケズリは総じて頸部よりわずかに下までで、下部に左上りケズリを施した後、上半部を右上りケズリするものがほとんど。22～24・29・30は頸部下にヘラケズリに先行するナデ上げ痕をとどめ、30・32はヘラケズリが雑なためか底部近くの指頭圧痕を顕著に残す。14の外面は頸部近くの縦ハケ後、横ハケを施し、20は縦ハケの後斜めハケ。24・27～31は胴上半部の横ハケを切って、下半部の斜めハケ、縦ハケ。21はハケメをかなり丁寧にナデ消し。

13・14・16・30～32は外面全体に煤が付着する。17は口縁下に煤が付着し、波状沈線文より下位の二次加熱が顕著。27・30は胴中位の、28・31は胴下部1/3の二次加熱が観察できる。32は全体的に焼成が甘いような感があるが、これも二次加熱のためか。16・32は内面にコゲが付着する。これらの布留系甕は20が淡褐色、30が淡橙褐色を呈する以外は、淡黄褐色～白黄褐色～灰黄褐色。



第129図 72号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (10・11は1/3、他は1/4)



第130図 72号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (30~32は1/3、他は1/4)

33～39は高杯である。33～37は杯部片で、35以外は屈曲部が弱い稜をなす。外面調整は摩滅で観察できない34を除けばいずれも横ミガキで仕上げるが、35は口縁部付近が横ナデのままである。33・35・36はミガキに先行するハケメが一部に見える。内面は34がハケメ後暗文風の疎らな縦ミガキで、摩滅のためミガキの残らない36・37も同様と思われる。一方、33・35はナデで仕上げている。38・39は脚部で、39は破片のため孔は残らないが、38は完存するにもかかわらず穿孔がない。38は脚柱外面縦ハケ、脚裾内面横ハケ、脚柱内面が稜の立つナデで、二次加熱のためか器表の剥離、摩滅が著しい。39は外面横ミガキし、内面が脚裾付近ハケメ、脚柱部板状工具によるナデ。35が淡黄褐色を呈する以外は橙褐色～黄褐色。

40～42は口縁部が外反する鉢で、いずれも外面を横ミガキした精製品。40・41は胴部外面に縦ハケ、口縁部内面に横ハケが残る。42は口縁部内面まで横ミガキが及んでいるが、底部はヘラケズリ後不定方向のミガキで、口縁部内外の指頭圧痕が顕著である。43は頸部から口縁が外反し、端部が直立する面をなす。直径2cm余りの範囲で凹んだ底部をなし自立する。胴部外面は横～不定方向ミガキ、口縁部外面が横ミガキ後暗文風縦ミガキ、口縁部内面と胴部内面が斜めミガキである。いずれも橙褐色を呈す。

44～49は丸底で直口の鉢である。44・45は底部ヘラケズリ後内外をミガキで仕上げ、47も摩滅部分が多いが口縁内面にミガキを残す。46は外面下半不定方向ハケ、上半はナデ後横ミガキで、内面は縦ミガキである。48・49は器壁も厚くミガキを施さない粗製品。48は外面～口縁部内面ハケメ、内面下半ヘラケズリで仕上げる。49は内外に指頭圧痕を顕著に残し、ほとんど調整を施さない。44・45・47が橙褐色、46・48・49が淡黄褐色～灰黄褐色を呈す。

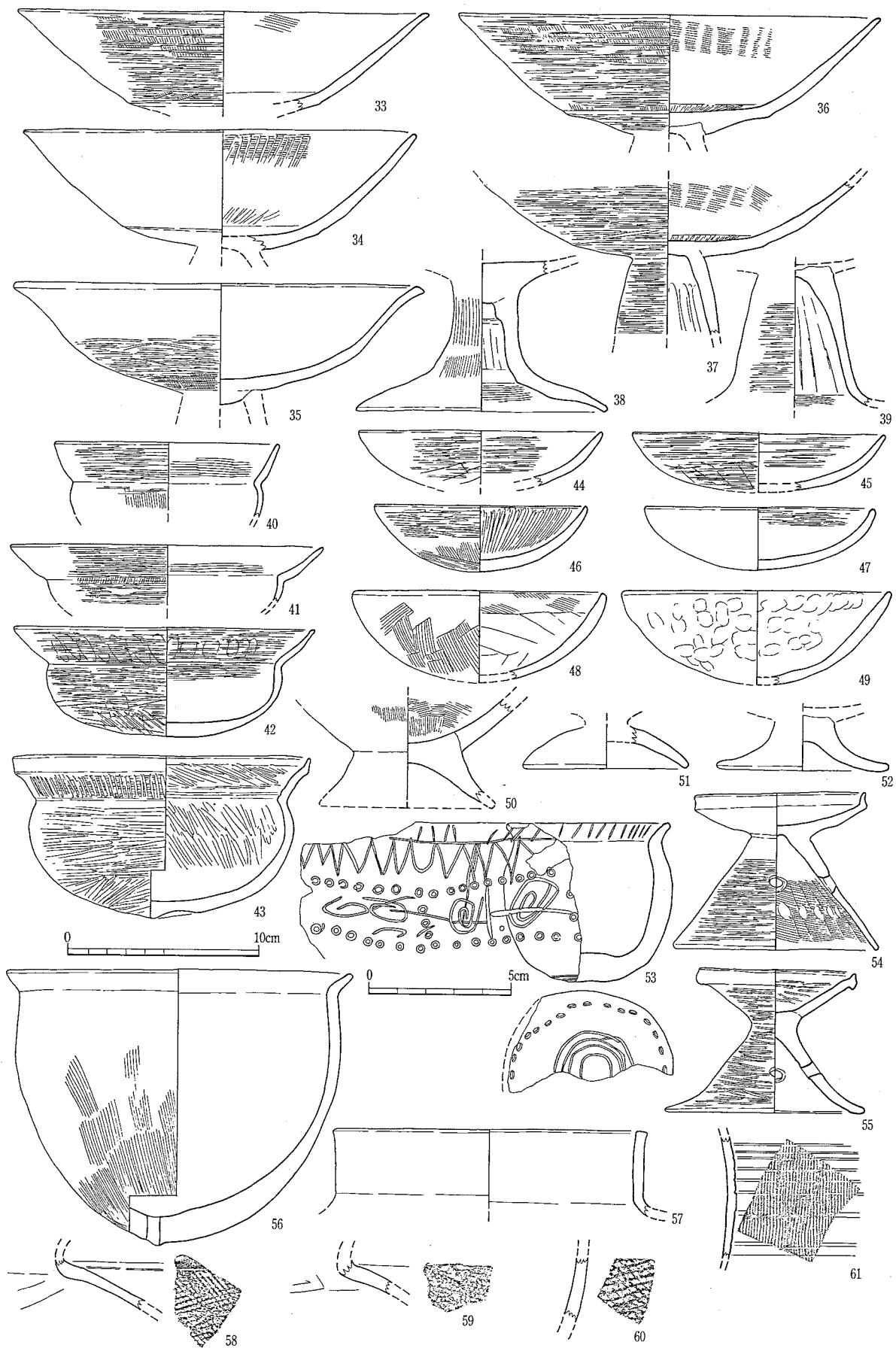
50～52は脚付鉢と考えられる脚部片。茶褐色を呈する50は脚が高く、鉢部内外にハケメを残し脚部はナデで仕上げ。51は内外とも横ナデで、強く内湾した形態が特徴的。淡黄白色。52は外面摩滅、内面ナデで橙褐色を呈する。

53は線刻による文様を施した鉢で他に例を知らない特殊品。1/2周残存する破片で、図示していない小片もある。外面は頸部に沈線、胴部中に「工」字形に竹管文をめぐらして文様帯を区画する。その後、口縁部近くは頸部沈線上に縦線、その下に鋸歯状の文様を巡らし、竹管文間は横方向の沈線と渦文で充填している。底部は4重の同心円文線刻を施している。口縁部内面には斜めの線刻が巡る。幾何学的文様とする意図はうかがえるものの文様帯の区画、文様とも歪んでおり、雑な印象をうける。内外ともナデで仕上げ、淡黄褐色を呈する。

54・55は小形器台である。54は受部口縁が直立し、スカート状に開いた脚部中間の3ヶ所に穿孔を施す。受部は内外摩滅し、脚部は外面横ミガキ、内面斜めハケで一部に指頭圧痕が巡る。橙褐色を呈す精製品。55は口縁部を上下に拡張し脚部が短く、54とは形態が異なる。受部、脚部の接合法、脚部中間にある4孔は軟らかい段階で穿孔しており、その方法にも違いがある。受部と脚部の回転軸も大きくずれた粗い作りで、外面～受部内面のミガキも雑である。淡黄白色を呈す。両者は近接した位置から出土しており共伴は確実であるので、このような差が何に起因するのか気にかかる。

56は鉢形の小型甌。口縁部は短く外反し、底部に内面から棒状工具で穿孔している。底部は極めて厚く、外面縦ハケ後ナデ、内面ナデで仕上げる。完形品であるが二次加熱、煤などはほとんど観察されない。橙褐色を呈する。

57～61は半島系土器である。57は直立する口縁部である。焼成は堅緻で陶質に近く、灰黄褐色を



第131図 72号竖穴住居跡出土土器実測図(3)(53は1/2、他は1/3)

呈す。58・59は格子タタキを施した頸部付近の胴部片。58は頸部に1条の沈線を巡らし、陶質に近い焼成で暗褐灰色を呈す。内面は煤の付着のためか黒変する。59は軟質に近いが堅緻に焼き上がり、橙黄褐色。60は斜格子タタキを施した胴部片である。淡橙褐色を呈すが、焼成は良好で堅緻。61は平行タタキの後沈線を巡らした胴部片である。やや甘く瓦質に近い状態に焼き上がっており、灰黄褐色を呈す。(重藤)

73号竪穴住居跡 (図版32、第128図)

南西隅を72号竪穴住居跡に切られている。北側には校舎基礎があり、当初、その北に住居が延びると考えて掘り下げたがすぐに地山が現れた。北壁はちょうど校舎基礎の下に位置するものと思われる。南壁が東西壁と直交せず歪になっているが、西壁中央近くに炉跡も位置することからほぼ妥当な平面形と考える。なお、北東隅は75号竪穴住居跡と重なるが、それとの切合いは十分に確認していない。住居覆土は黒褐色細砂。土器以外に刀子(第237図24)、砥石(第249図41)が出土。

出土土器(第133図1～3) 1は在地系大甕で頸部に断面三角形の刻み目突帯を貼付。外面にハケメ前のタタキが微かに見える。2は高杯脚部で、外面ハケ後ミガキ、内面ナデで仕上る。3は直口鉢でレンズ状底。ハケメ仕上げの外面下半以外はナデ。1・3は褐色、2は橙褐色。(重藤)

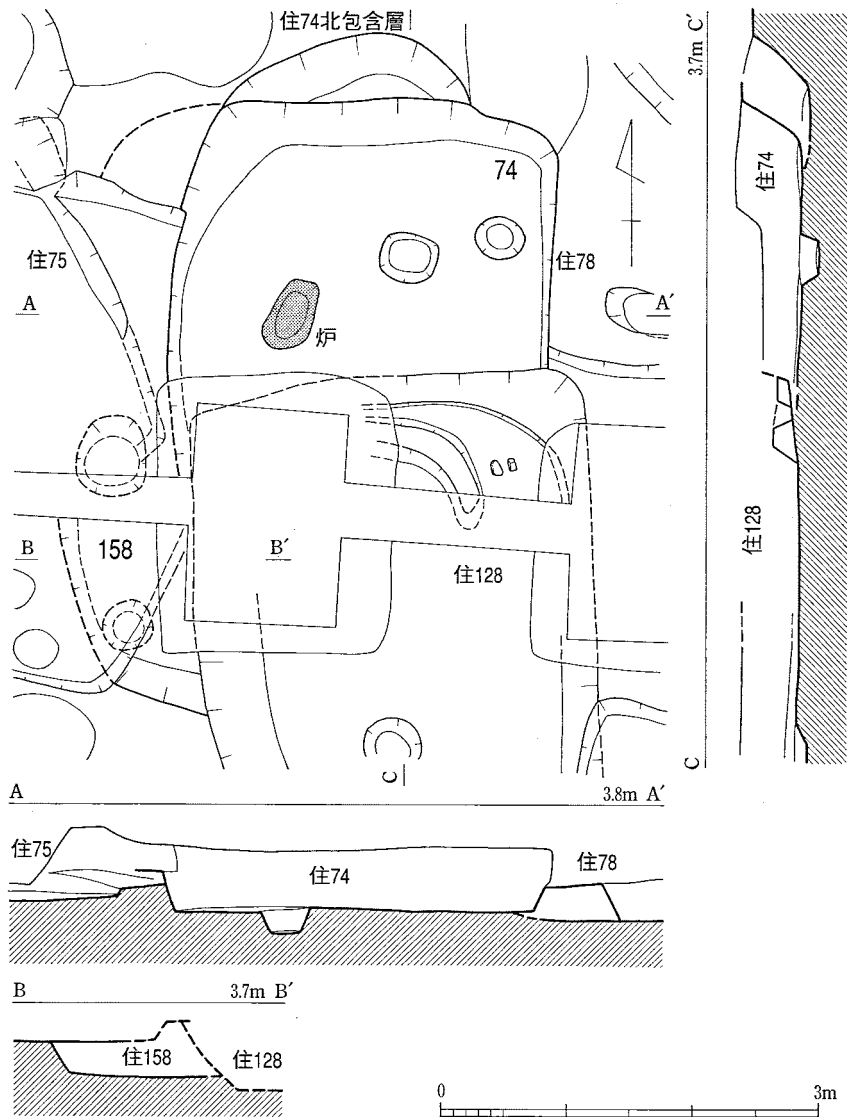
74号竪穴住居跡 (図版32、第132図)

3北1区の東南で検出したものである。128号竪穴住居跡に切られ、75・78号竪穴住居跡を切ると考えて発掘を行った。75b号竪穴住居跡、158号竪穴住居跡との切合いは十分に確認していない。南壁は128号竪穴住居跡と校舎基礎が位置しており不明で、北壁と東西壁北半を検出したにとどまる。西壁寄りの床面には炉跡が位置している。ただ、この付近は住居跡の切合いが激しく、非常に遺構検出に苦慮したので、住居跡平面形は自信がない。なおかつ発掘時の切合いでは78号住居跡(カマド)→74号竪穴住居跡(炉)→128号住居跡(カマド)となり、不自然である。本来は78号住居跡との切合いが逆転し、加えてカマド付きの75b号住居跡に先行していた可能性が高い。また住居北西隅が本来はさらに西にあり、西壁が158号住居跡壁につながる可能性(北西隅破線部)もあると思われる。なお北壁に接する半円形落込みを「74号住居跡北包含層」として遺物を取り上げたが、図示できるものはない。土器以外にも75号住居跡と本住居の上層から石錘(第242図4)、78号住居跡との上層から玉未製品(第239図9)が出土している。

出土土器(第133・134図4～47) 上述した遺構の性格上、土器の一括性は確実ではないが、4～30が本住居跡出土として取り上げたもの、31～47が本住居跡と隣接する75・76・78号住居跡の上層として取り上げたものである。

4は在地系の二重口縁壺。5は布留系直口壺である。肩部に竹管文を巡らし、肩部横ハケを縦ハケが切っている。6～9は山陰系二重口縁壺で、9外面には指頭圧痕が観察される。10は外反口縁で在地系壺か。内外に粗いハケメを残す。11は壺胴部片で畿内系精製中形壺になるものと思われる。外面は上部縦ハケ、下部ケズリの後横ミガキを施す。内面は横ハケ、頸部に指頭圧痕を残す。底部近く外面に2条の沈線がある。4～6は淡黄褐色、7～10は淡褐色、11は橙褐色を呈す。

12は二重口縁をなす大形甕で、1次口縁部より下の破片となっている。上端は接合面より剥離し、外面にハケメ工具を交叉させた刻み目を施す。橙褐色。

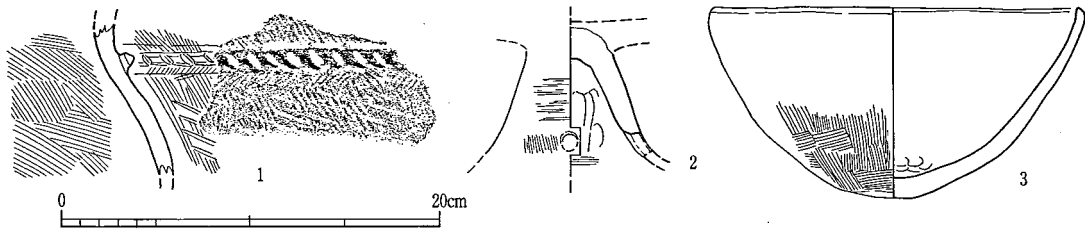


第132図 74・158号竪穴住居跡実測図 (1/60)

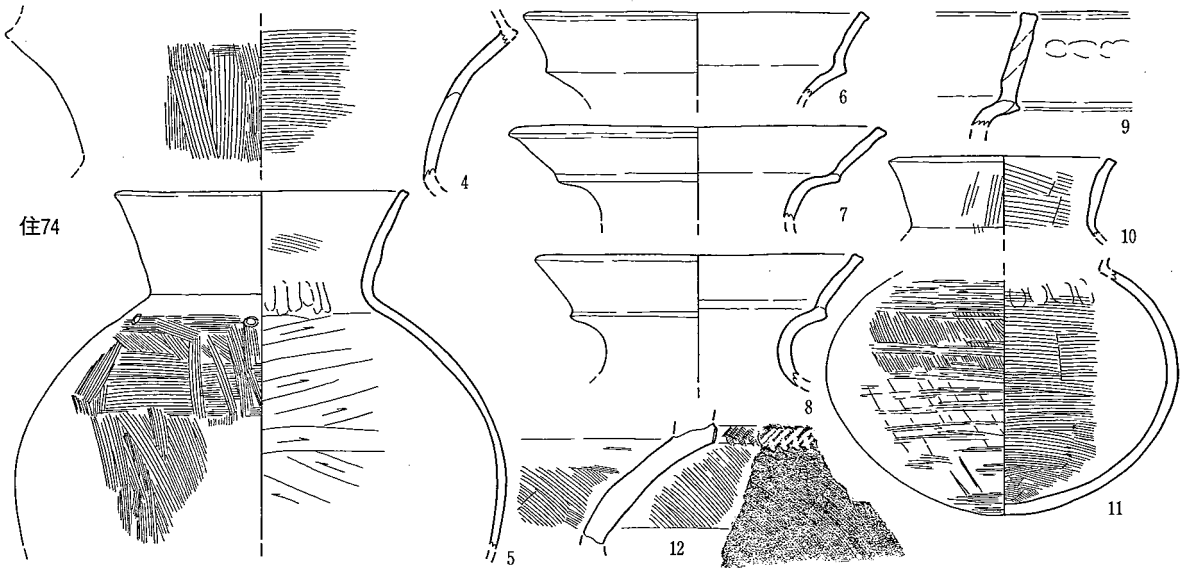
13~21は布留系甕である。口縁は総じて内湾気味に外傾し、端部が外傾する面をなす。13・16は口縁端を内につまみ出している。20は胴部中位のヘラケズリが雑で、先行する指頭圧痕が残っている。16・17・20は肩部横ハケが下位の縦ハケを切ると考えられる。肩部破片の18は横方向に文様風の短い沈線がある。22は口縁部が丸く外反した小形甕で端部も面をなさない。外面は縦ハケのみで仕上げ、器壁も厚い。14・15・18が淡褐色、他は淡黄褐色を呈す。

23は橙褐色の高杯脚~杯底部片。脚部は外面を縦ハケ後横ミガキし、屈曲部より上に2ヶ所穿孔している。脚柱部内面はナデである。杯部は外面に横ミガキを施し、内面は調整不明。

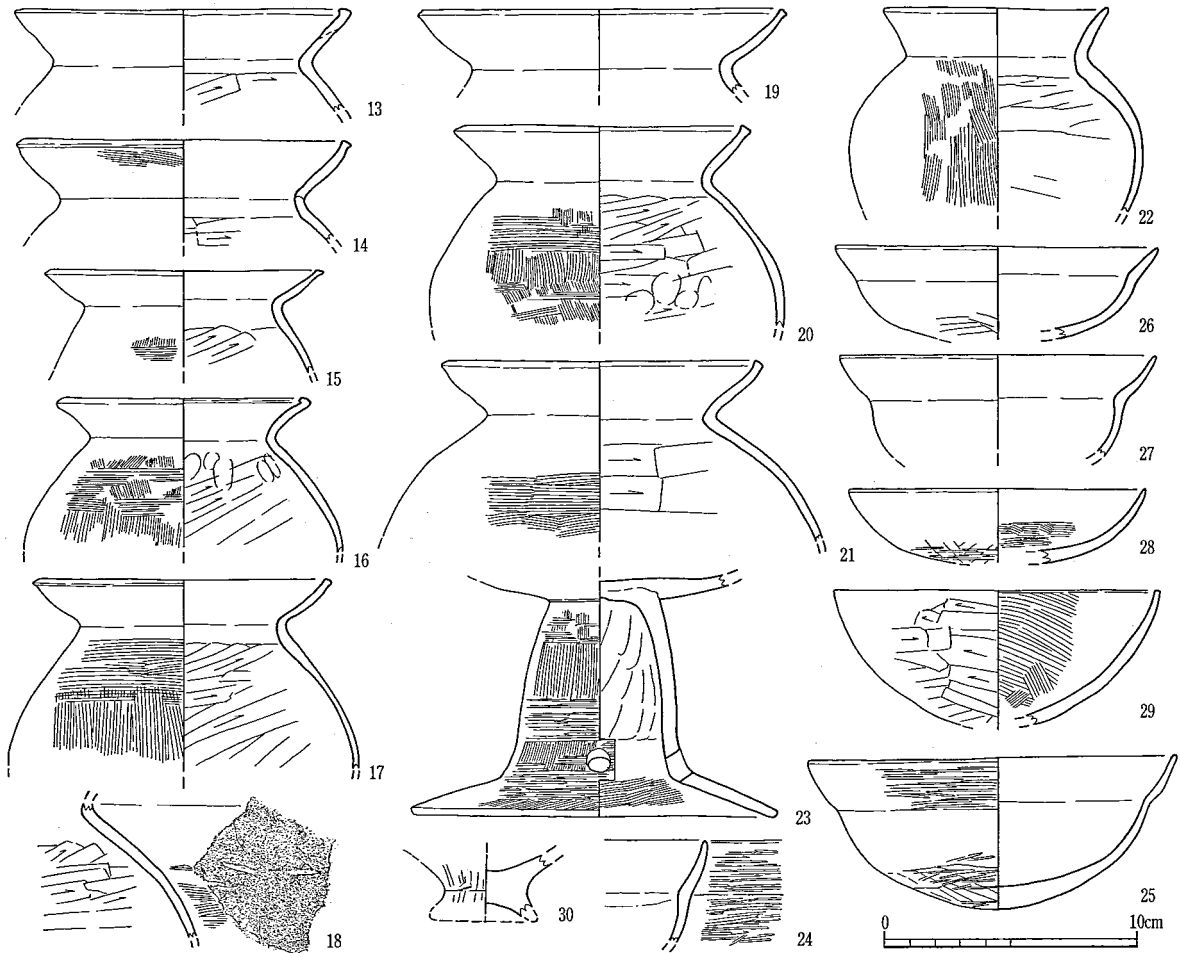
24~27は口縁外反の鉢。24・25は外面ミガキで、25底部近くにはミガキ前のケズリが見える。内面はいずれも摩滅するがナデか。26は摩滅気味であるが外底部ケズリ、他をナデで仕上げ、ミガキを施さないか。27は外面調整不明、内面ナデで仕上げる。24・25は橙褐色、26は淡褐色、27は淡黄褐色。28・29は直口鉢である。28は口縁部内外ナデ、外底部ケズリ後ミガキ、内底部ハケ後ミガキで仕上げる。28は淡褐色、29は暗橙色を呈する。30は脚付鉢か。外面は板状工具によるナデ、内面



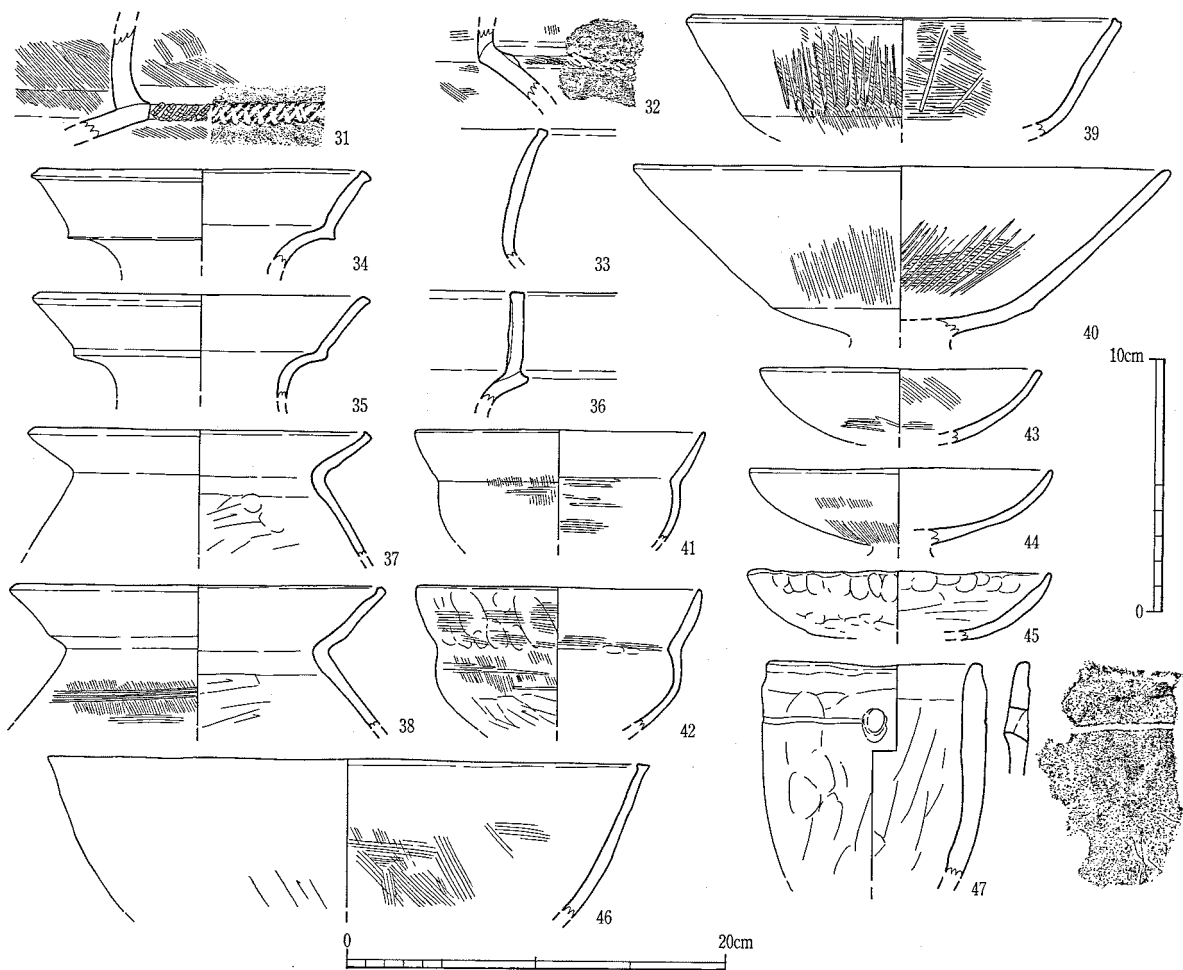
住73



住74



第133図 73・74 (1) 号竪穴住居跡出土土器実測図 (1・4~9・13~21は1/4、他は1/3)



第134図 74 (2) 号竪穴住居跡上層出土土器実測図 (31~38・46は1/4、他は1/3)

はナデで仕上げ、灰褐色。

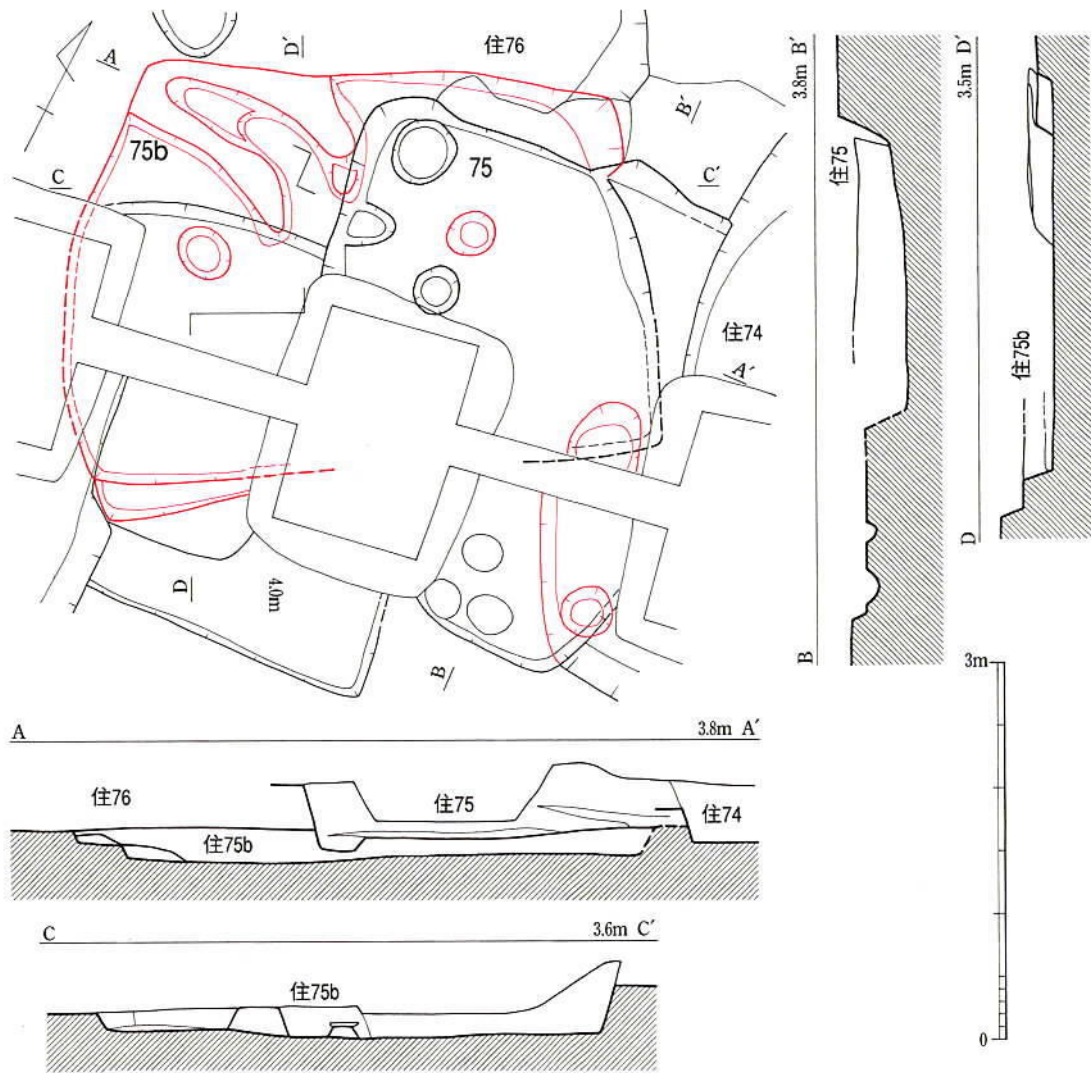
31以下は74号住居跡と周辺の住居跡の上層からの出土品。31は在地系二重口縁大壺で、突出部にハケメ原体による刻み目を施す。32も在地系壺肩部か。低い突帯を貼付し、頂部にハケメ原体状のもので刻み目を施す。33は布留系直口壺片、34~36は山陰系二重口縁壺片。31橙色、32黄褐色、33~35淡褐色、36灰白色を呈す。

37・38は布留系甕で、37灰白色、38淡黄褐色。

39・40はいずれも橙色を呈す高杯杯部片である。39は底部外面を縦ハケ後縦ミガキ、口縁外面を斜めハケ後振幅の大きい暗文風波状ミガキで仕上げ、内面もハケ後ミガキである。40は全体に摩滅気味であるが外面に縦ハケ、内面に横ハケ後ミガキが観察される。

41・42は外反口縁鉢でいずれも外面はハケ後横ミガキである。42はミガキ前の口縁部指頭圧痕、底部ヘラケズリも残る。内面は41ミガキ、42ハケ後ナデ。43~45は直口鉢で、43は内面斜めハケ、外面底部近くミガキ。44は外面ハケ後ナデ、内面横ハケであるがミガキを施した可能性がある。45は内外とも指頭圧痕を堅著に残す粗製品。46は大形で口縁が広い面をなす鉢で内面斜めハケ、外面ケズリ後ナデ。これらの鉢は41・42・44が黄褐色、43・45が褐色、46が橙褐色を呈す。

47は蛸壺で黄褐色を呈す。紐孔の高さに沈線を巡らすのが特徴的である。(重藤)



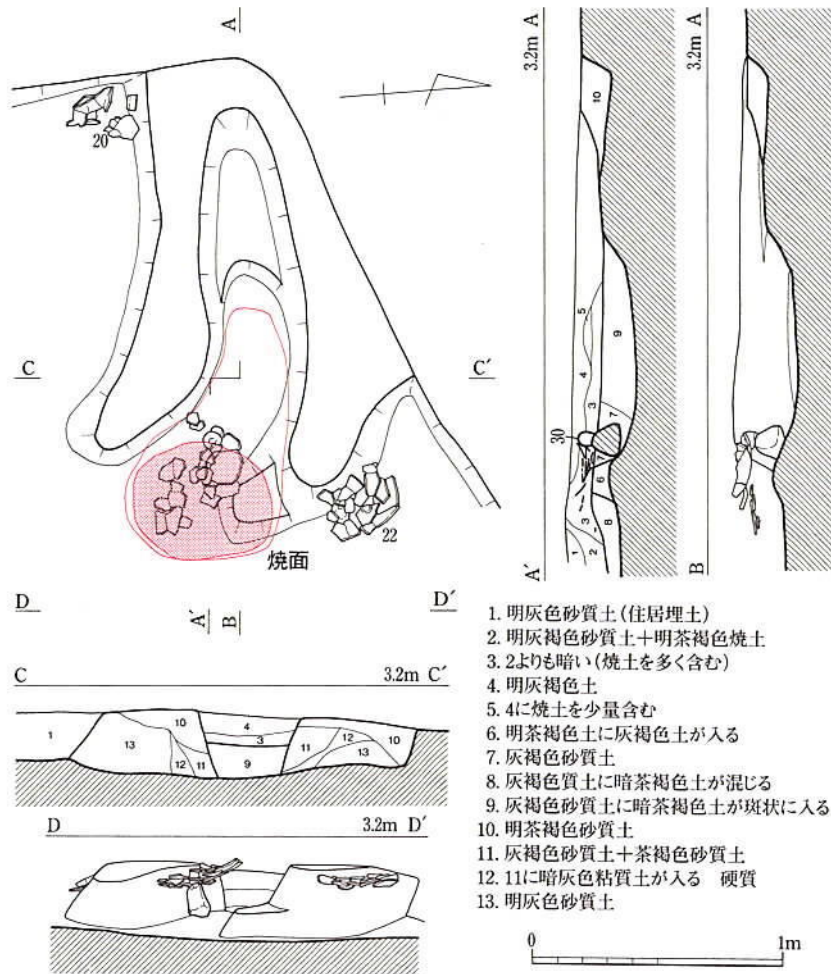
第135図 75・75b号竪穴住居跡実測図 (1/60)

75・75b号竪穴住居跡 (図版32・33、第135図)

75号竪穴住居跡は76号竪穴住居跡を切り、74号竪穴住居跡に切られる東西幅3mの灰褐色細砂分布範囲にその存在を考えた。また、遺構検出時には本住居跡が校舎基礎を越えて南に及ぶものとして、基礎南の土器包含層を取り込んで平面形を考えた。しかし、校舎基礎南では壁は検出されず、本住居跡と76号住居跡の下層で75b号竪穴住居跡が検出されたため、当初75号住居跡とした部分は75b号住居跡覆土の一部を誤って住居跡とした可能性が高いと考えるようになった。

75b号住居跡は北壁を76号住居跡下層で検出し、東壁は当初75号住居跡とした部分の東部にある段が相当する。南壁、西壁はほとんどが基礎の下であるが、西南隅を検出している。かなり歪んだ長方形になるが、東西4.5m、南北3.0mの規模が想定される。西北隅にカマドが設置されている。76号住居跡下層で検出しているが、76号住居跡より新しいと考えられる。また、壁が20cm程しか残らないために74号住居跡との切合いを確認していないが、上述のように74号住居跡より新しい可能性が高い。覆土は暗褐色細砂。

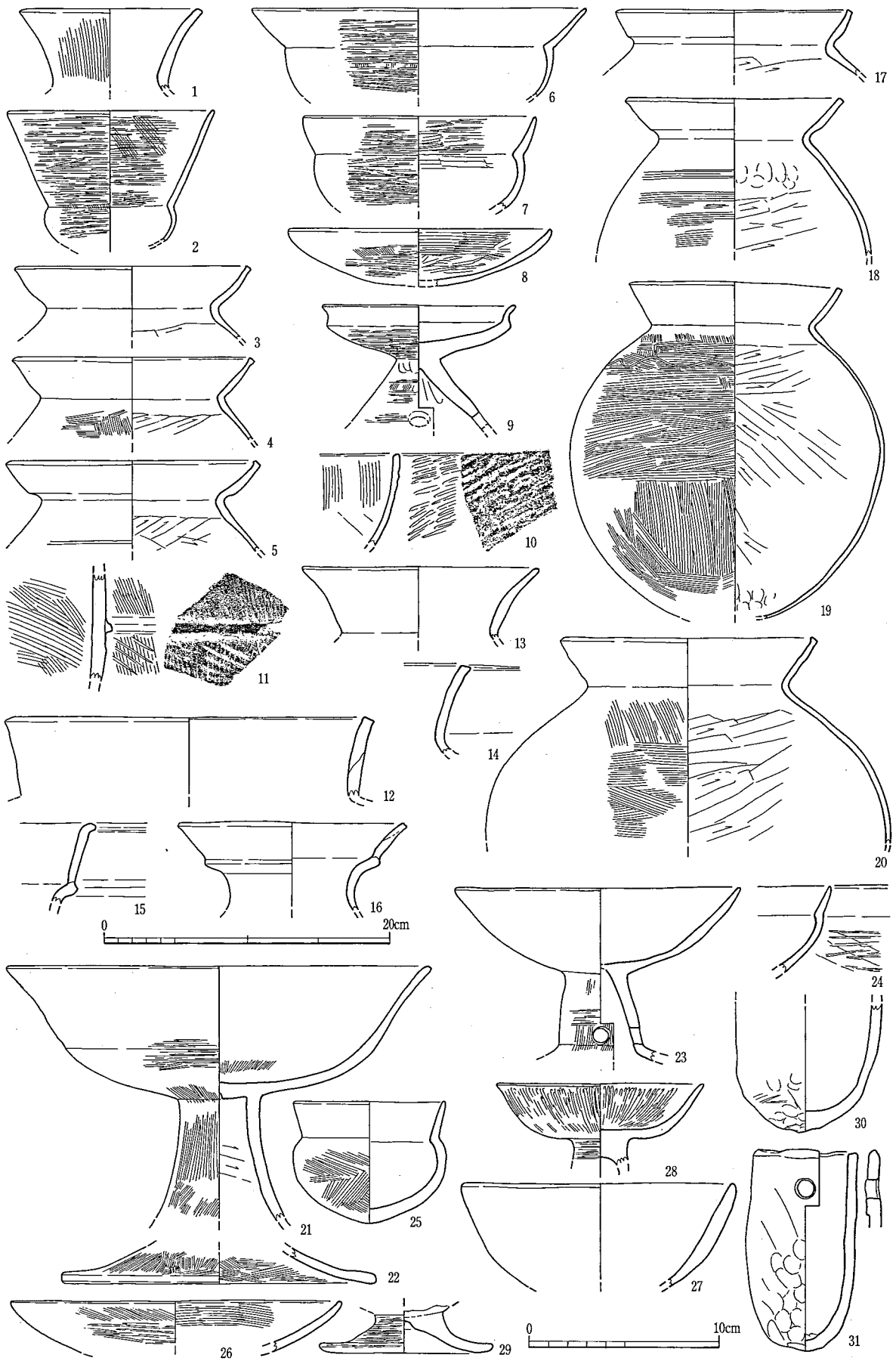
なお、土器以外の75号住居跡出土遺物として浮子 (第244図45)、75b住居跡出土遺物として玉未製品 (第239図16・26) がある。



第136図 75b号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

75b号竪穴住居跡カマド (図版33、第136図) カマド壁体は住居跡北壁に平行して隅から1.2m程伸びた所で東南に屈曲している。壁体の奥下面から1.2mの所に蛸壺を倒置した支脚 (30) が検出され、その周辺、蛸壺支脚と同一レベルから甕破片がまとまって出土したので床面と考えた。同じレベルでカマド右袖外から高杯片 (22) が、カマド左奥外から甕 (20) 出土している。ところが甕破片と蛸壺支脚を除去したところ石製支脚が検出された。石製支脚の下面に相当するレベルで、支脚の前面が直径50cmの範囲で円形に熱変しており燃烧部と考えられ (赤梨地)、石製支脚の奥側にまで焼土が広がっていた (赤鎖線内)。この熱変範囲は北側が壁体構築土の下に続くことが明らかであった。このような状況から、第1次床面では石製支脚を用い、それをかき上げて第2次床面を成形したときに支脚の高さを調節するために蛸壺を倒置して支脚としたと推測される。カマド壁体構築土は10層と11~13層に大きく分かれるが、10層を第2次床面成形時に壁体を積み直した土と考えれば納得がいく。したがって、上部から出土した20・22・30は第2次床面に伴う遺物となる。

出土土器 (第137図) 75号住居跡出土として取り上げたものが1~10で、他は75b号住居跡出土。上述した遺構の性格のため75号住居跡出土土器には隣接する住居跡に帰属するものの混入の恐れがある。ただ、その下層からの出土品 (6) は75b号住居跡に帰属する可能性が高い。一方、75b号住居跡出土土器は他住居跡と切合いがなく一括性の高い良好な資料と考えられる。



第137図 75・75b号竪穴住居跡出土土器実測図（3～5・11～20は1/4、他は1/3）

1は頸部が小さいが布留系の直口壺口縁部か。2は口縁の長く伸びる小形丸底壺で、内外をハケメ後ミガキで仕上げるが、胴部内面はナデ。1は淡褐色、2は茶褐色。

3～5は布留系甕である。5は強く内湾して端部を上方にわずかに拡張させた口縁部で、肩部に沈線が一部残る。3・4は淡褐～淡黄褐色、5は灰白色。

6・7は口縁外反の鉢でいずれも外面は横ミガキ仕上げ。6は外面にミガキ前縦ハケが残り、内面はナデ仕上げ。7は口縁内面ハケメ後ミガキ、胴部内面は板状工具によるナデ。いずれも褐色を呈す。8は直口縁鉢で外面斜めハケ後横ミガキ、内面上部横ハケ、下部ミガキ。淡黄褐色を呈す。

9は小形精製器台で75号住居跡と75b号カマド周辺の破片が接合。口縁部横ナデ、受部外底横ミガキ、脚部外面斜めハケ後ミガキ、受部内面は摩滅し、脚部内面ナデ仕上げ。粘土精良で淡黄褐色。

10は直口鉢状の器形をなすが、外面に粗いタタキを残す点が特異。二次加熱も若干受けているので製塩土器口縁部か。内面は下部ケズリ、上部縦ハケである。暗褐色を呈す。

11はカマド周辺出土の在地系壺胴部片で、低い突帯を貼付。外面は左上りタタキ後縦ハケ。12は在地系大形直口壺か。13・14は布留系直口壺口縁部で、13は端部が丸く、14は端部が面をなす。15・16は山陰系二重口縁壺片である。12が淡赤褐色、16が灰黄褐色で他は淡褐色を呈す。

17～20は布留系甕である。18は内面ケズリがさほど上まで及ばず、頸部付近にケズリ前指頭圧痕が残る。19は肩部に波状沈線文を巡らす。20は口縁端部をわずかに上に肥厚させている。17・18は淡黄褐色、19は淡褐色、20は黄灰褐色を呈す。

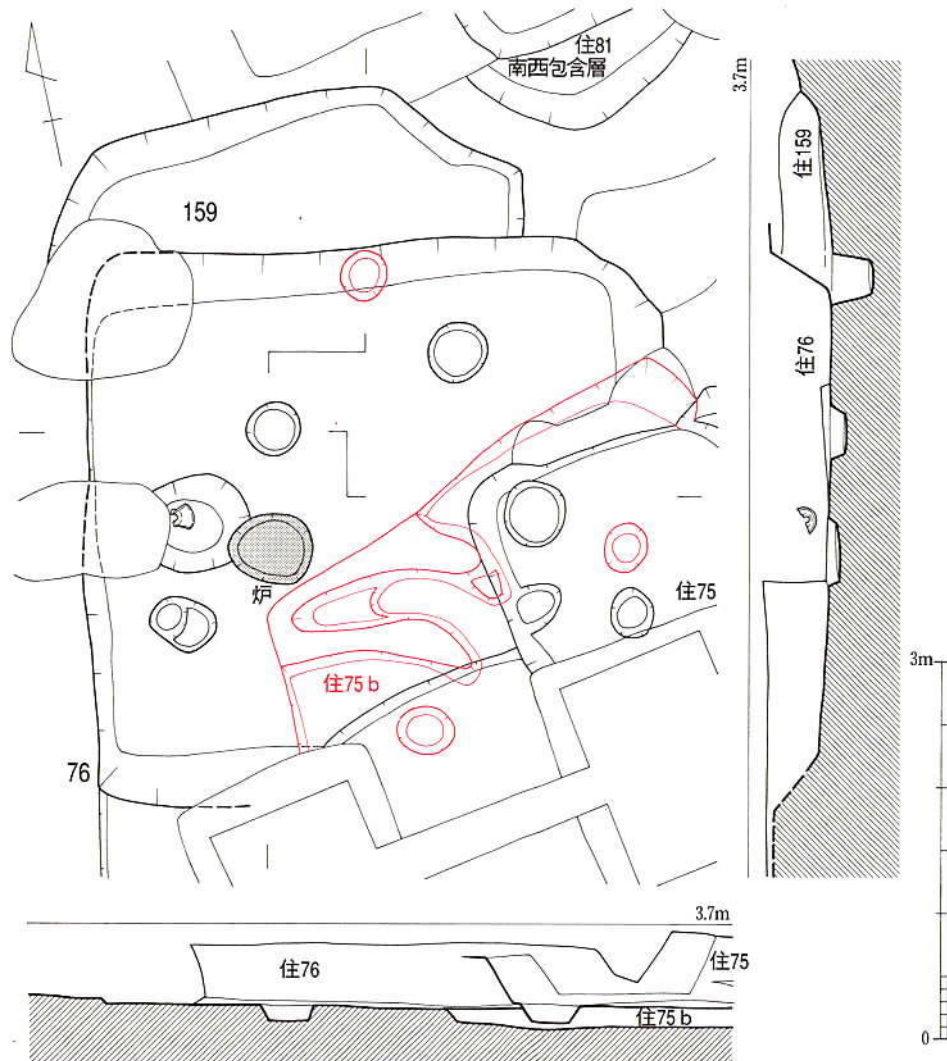
21～23は高杯である。21は杯部～脚柱部の破片で口縁内外横ナデ、外面屈曲部付近ミガキ、杯底～脚柱縦ハケで仕上げる。内面杯底は縦ハケ、脚柱はケズリである。杯外底部には軸受け痕がある。22はカマド周辺より出土し、21と同一個体の可能性が大。内外をハケメ仕上げ。23はやや小振りの高杯で杯部内面ナデ、外面は摩滅。脚部外面は縦ハケ後横ミガキ、内面はナデで仕上げ。脚柱下部に2ヶ所穿孔が見られる。いずれも淡褐色。

24・25は口縁部外反の鉢である。24は口縁部付近～胴部内面ナデ、胴外面はケズリ後ミガキで仕上げる。25は小形丸底壺との区別に悩む形態。ミガキを施さない粗製品である。26・27は直口鉢で、26は外面ハケメ後ミガキ、内面横ハケ。27は内外ともナデで器壁の厚い粗製品。28は脚付鉢鉢部で、鉢部内外を縦ミガキし、脚部外面横ミガキ。29は精製脚付鉢脚部片で外面横ミガキ、内面ナデ仕上げ。26は白黄褐色、28は淡橙色、29は橙褐色で、他は淡褐色。

30・31は蛸壺で、30はカマド支脚として使用する際に口縁部を打欠く。外底部には棒状工具による条痕が残る。いずれも淡褐色。(重藤)

76号竪穴住居跡 (図版33、第138図)

75b号竪穴住居跡に切られ、159号竪穴住居跡を切っている。西壁、北東隅は比較的明瞭に検出でき、西南隅は当初もう少し南を想定していたが、少し下げると明瞭に検出できた。一方、北壁は159号住居跡と重なるため不明瞭で、南壁は大半が75b号住居跡と重なり失われている。ほぼ南北を向いた1辺4.4m程の正方形の平面形を呈する住居跡であることは確かであるが、159号住居跡との切合いは不安である。また、当初75b号住居跡との切合いに気が付かなかったため、その遺物が混入する。土器の他に鉄器(第244図52)が出土。西壁よりの中央に炉跡がある。埋土は明褐灰色細砂である。



第138図 76・159号竪穴住居跡実測図 (1/60)

出土土器 (第139図) 1は畿内系二重口縁壺口頸部。外面は口縁がハケメ後ミガキ、頸部が縦ハケ後横ハケ、胴部が横ミガキ。内面は摩滅。口縁屈曲部外面はハケメ工具を押付け、段を明瞭にする。2・3は布留系直口壺。2は完形に復元され、肩部外面に5条1単位櫛描直線文を施す。器壁が厚く、胴下半に煤付着。4～7は山陰系二重口縁壺。8は在地系壺胴部片であるいは天地逆か。高いコの字状突帯を貼付し、突帯上にタタキを施す。1は化粧土淡橙褐色で生地は淡黄褐色。3は焼成悪く暗褐色～褐灰色、他は淡黄褐色。

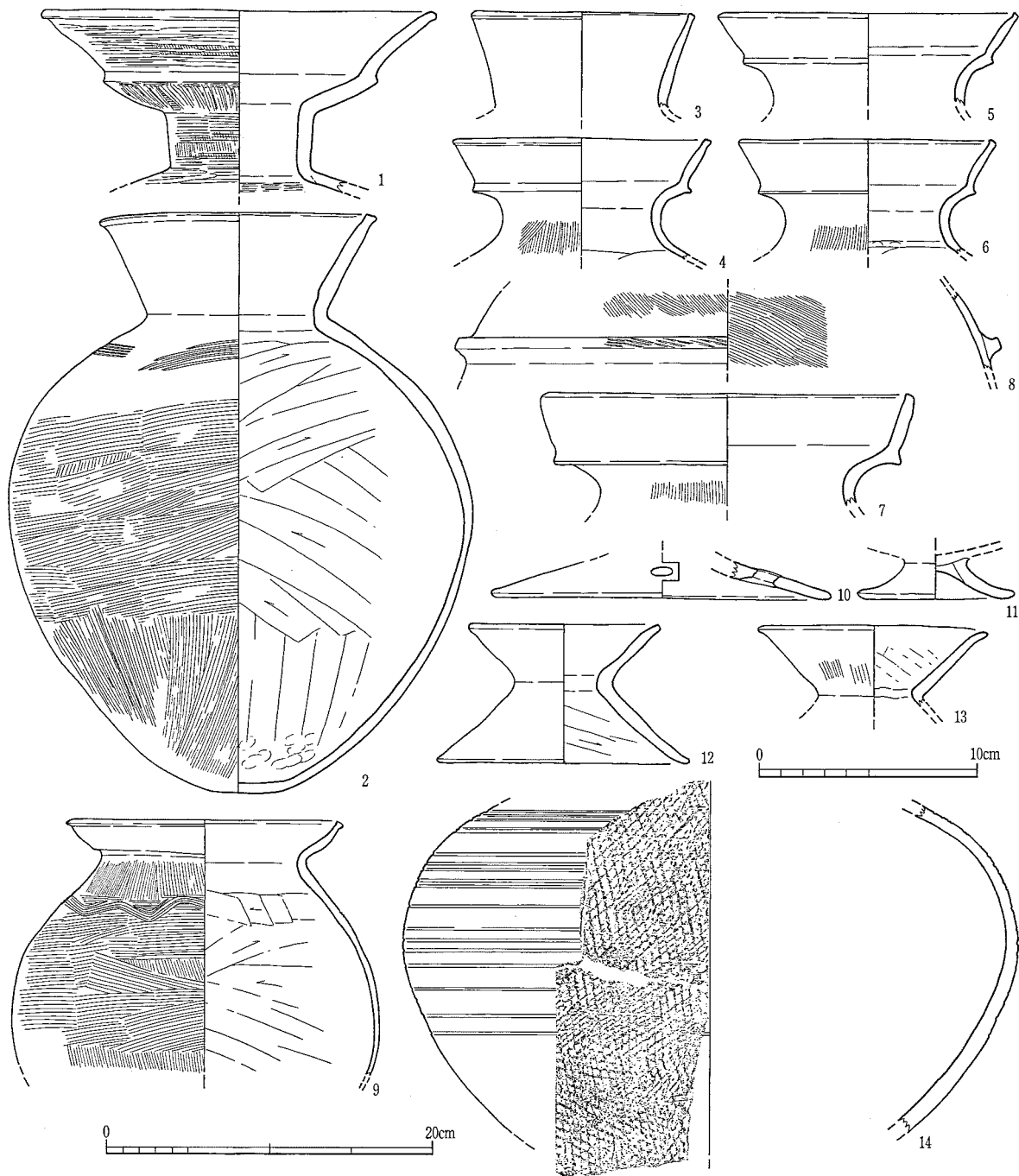
9は布留系甕で肩部に3条1単位の櫛描波状文を巡らす。口縁部は乾燥時の歪みのためか内湾が強く、端部を上下にわずかに拡張する。淡黄褐色。

10は高杯脚裾部で、乾燥が進行した段階に穿孔。内面横ハケ、外面縦ハケをナデ消し、黄橙色。

11は脚付鉢脚部で内外をナデ仕上げする。黄褐色～白褐色。

12・13は小形器台。12は脚内面にケズリを残し、摩滅する部分が多いが他はナデ仕上げ。13は外面縦ハケ後ナデ、内面ケズリ後ナデ仕上げ。いずれも粘土不良で焼成甘く淡黄褐色を呈す粗製品。

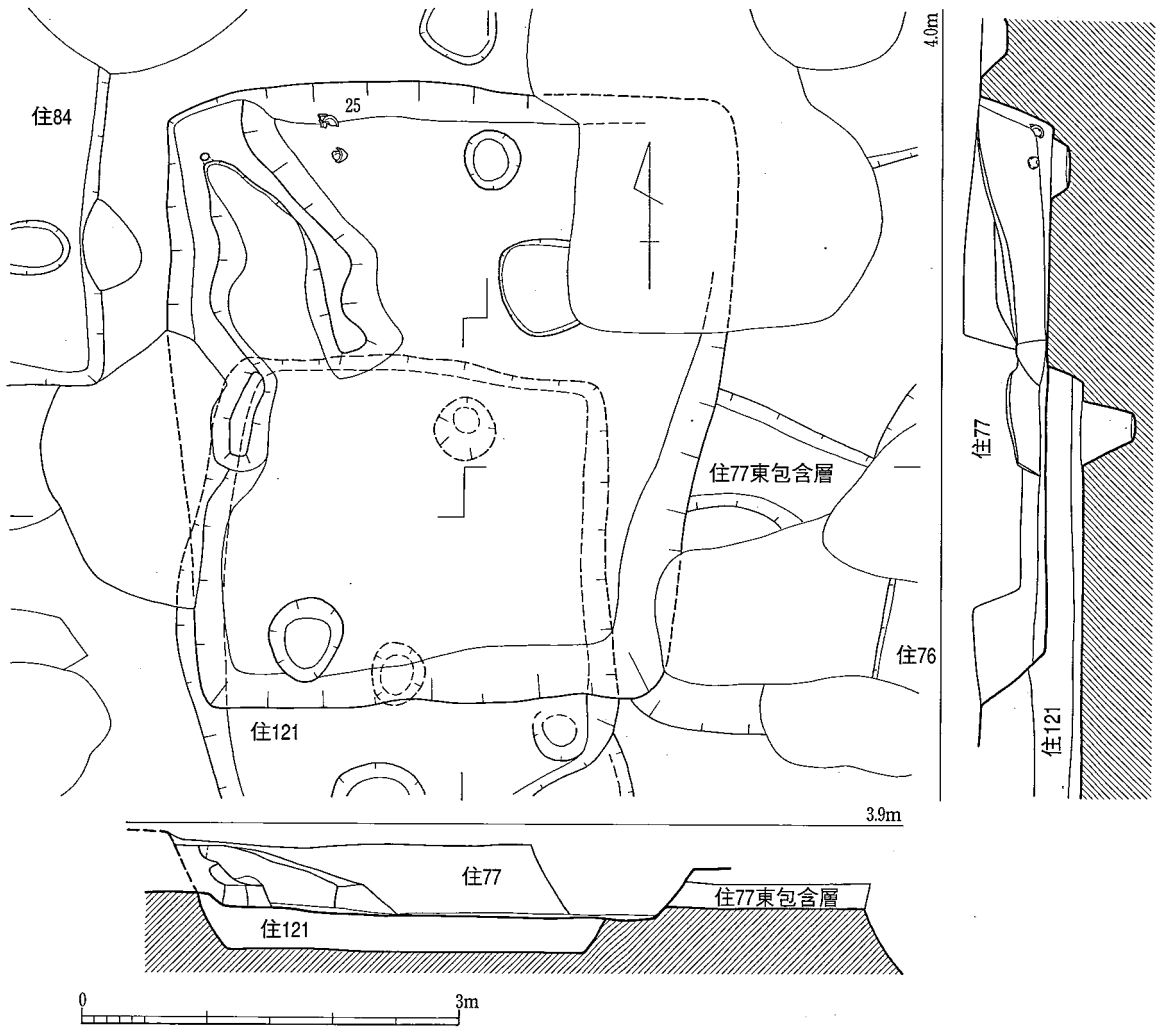
14は斜格子タタキの半島系土器で、75・78号住居跡、遺構面の破片と接合した。胴部外面は斜格子タタキの後、上～中部に沈線を巡らす。胎土、焼成は土師器に近い軟質で、黄褐色。(重藤)



第139図 76号竪穴住居跡出土土器実測図（1～9は1/4、他は1/3）

77号竪穴住居跡（図版34、第140図）

77号竪穴住居跡は3北1区中央やや東側に位置する。121号竪穴住居跡を切ると考えて発掘した。東・西・北壁の一部は攪乱によりやられている。覆土は暗黄灰色細砂で、南北4.9m、東西4.5m、深さ57cmの方形住居である。本住居跡北西隅から煙道が西壁に沿ってのびるカマドを検出した。東には77号住居跡東包含層がある。竪穴住居跡の可能性が高いが、住居の壁を確認できなかったため、包含層とした。攪乱によりほとんど残っていないが、カマドの可能性も考えられる暗赤褐色の焼土を確認した。不明鉄器が2点（第238図44・56）と凹石等の石器（第249図42～44）が出土した。

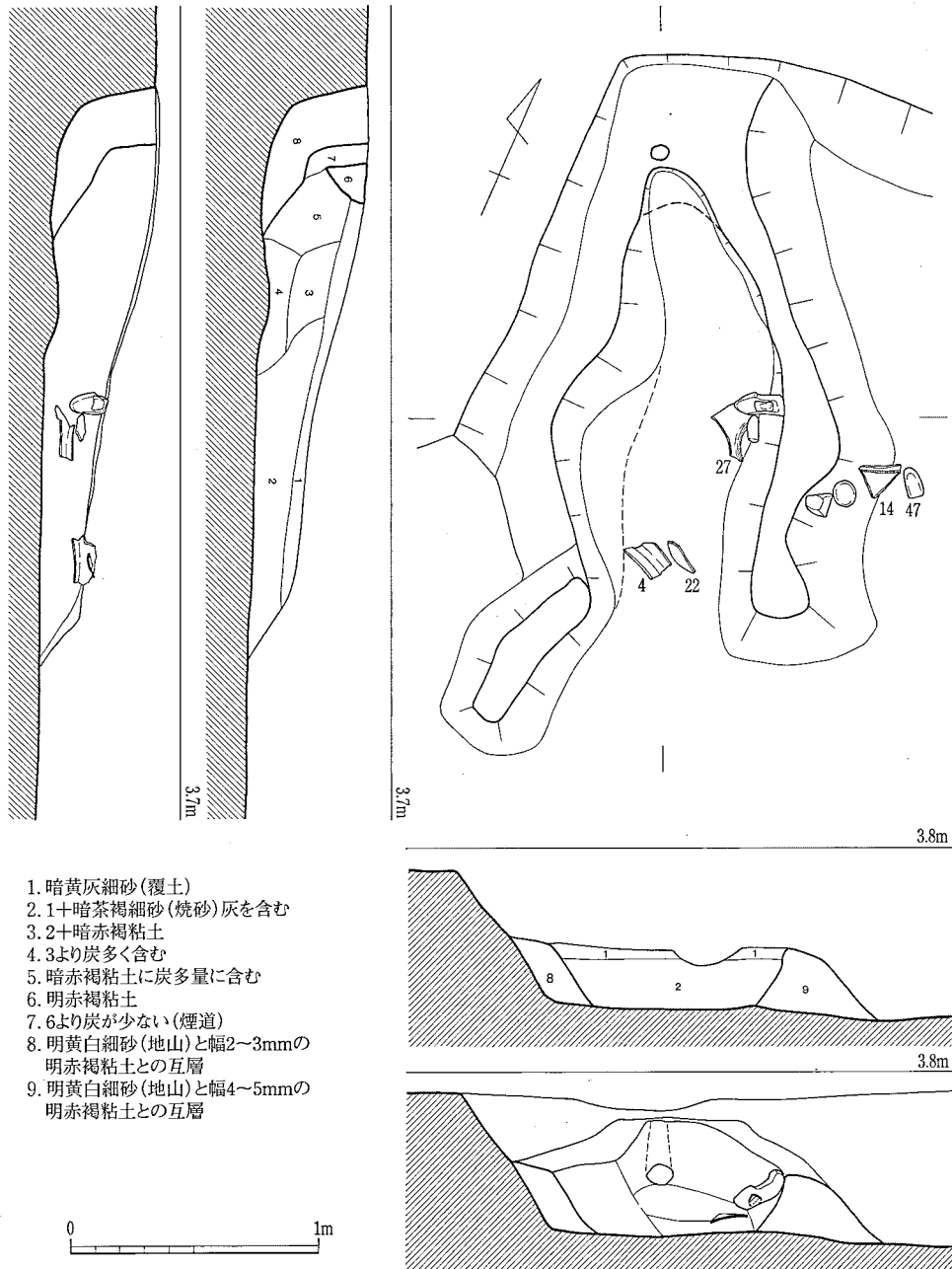


第140図 77号竪穴住居跡実測図 (1/60)

カマド (第141図) 煙道が住居北西隅から住居西壁に沿ってまっすぐのびるカマドである。カマド廃棄の際破壊されたためか、焚口は残っていない。カマドの長さは南北で約2.4m測る。袖は版築状に砂と粘土を交互に積んで構築しており、住居内側の方が、壁側よりも版築の際の粘土が厚い。煙口がカマド奥壁中央にあり、煙口から煙出が垂直に上がる形態である。煙出しは住居の外までのびない。カマド内から土器が少量出土した(4・8・22・27)。

出土土器 (第142・143図) 1は畿内系直口壺である。2～8は山陰系二重口縁壺である。4は口縁端部を外方につまみ出す。口縁下には竹管文を巡らす。5は口縁端部がやや外反する。8は口径30.0cmの大型品である。9・11・12は畿内系小型精製丸底壺である。いずれも内外面にミガキを施す。10は小型の壺である。器壁が薄く、内面頸部以下はヘラケズリを施す。13は小型の壺か甕。器壁が厚く、外面に煤が付着する。5は黄橙色、9・11・12は橙褐色、2・4・5・6・8・10は黄褐色、他は灰黄色を呈す。

14は在地系大型甕の頸部である。頸部と肩の境にヘラ工具で密に斜格子状に刻んだ突帯を貼り付ける。内外面はハケで調整する。15～27は布留系の甕である。15は胴部外面が熱を受け、赤変する。17・19は頸部までヘラケズリを施す。19・20・21・24・25は外面に煤が付着する。21は小型の甕で

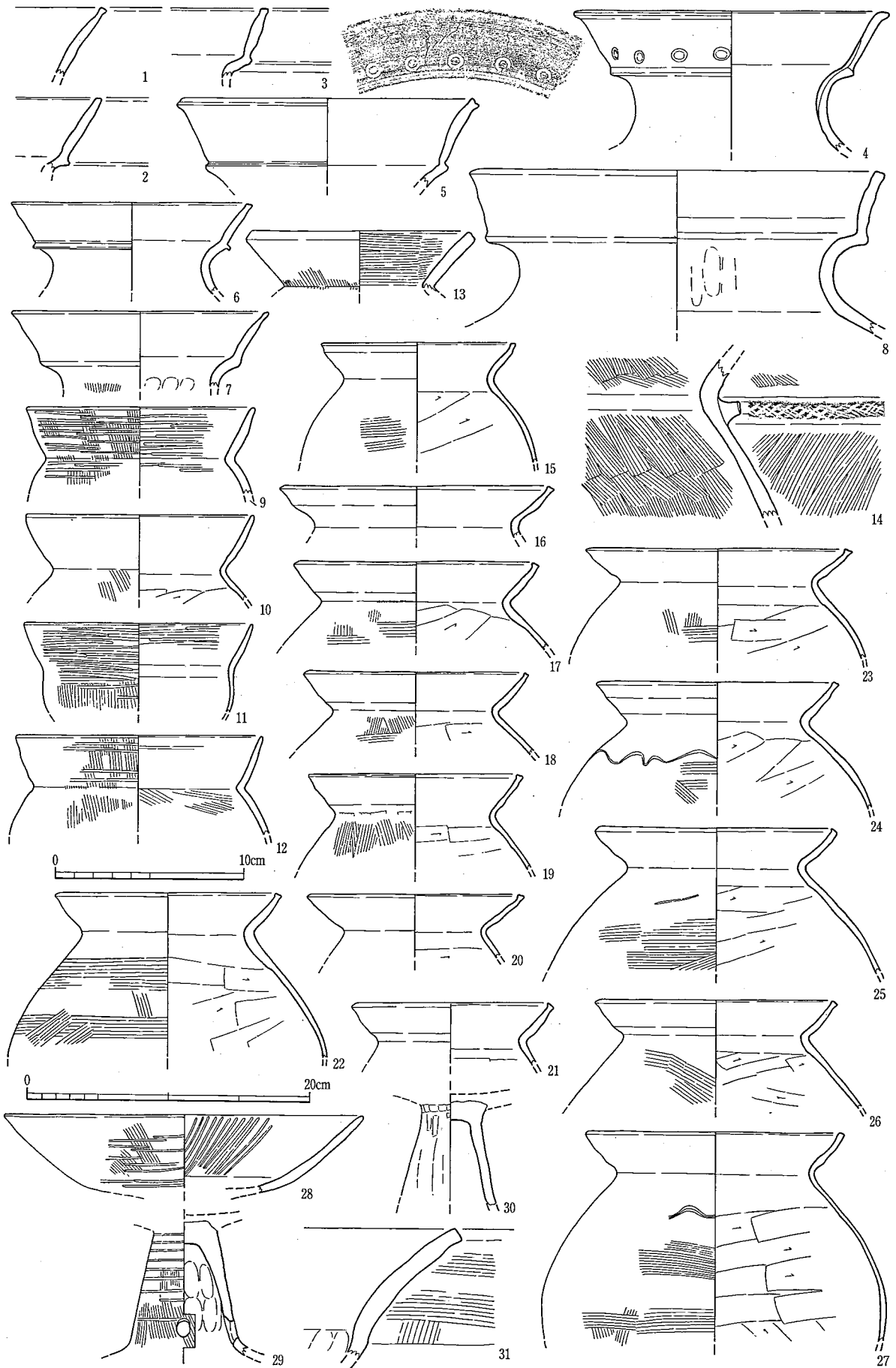


第141図 77号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

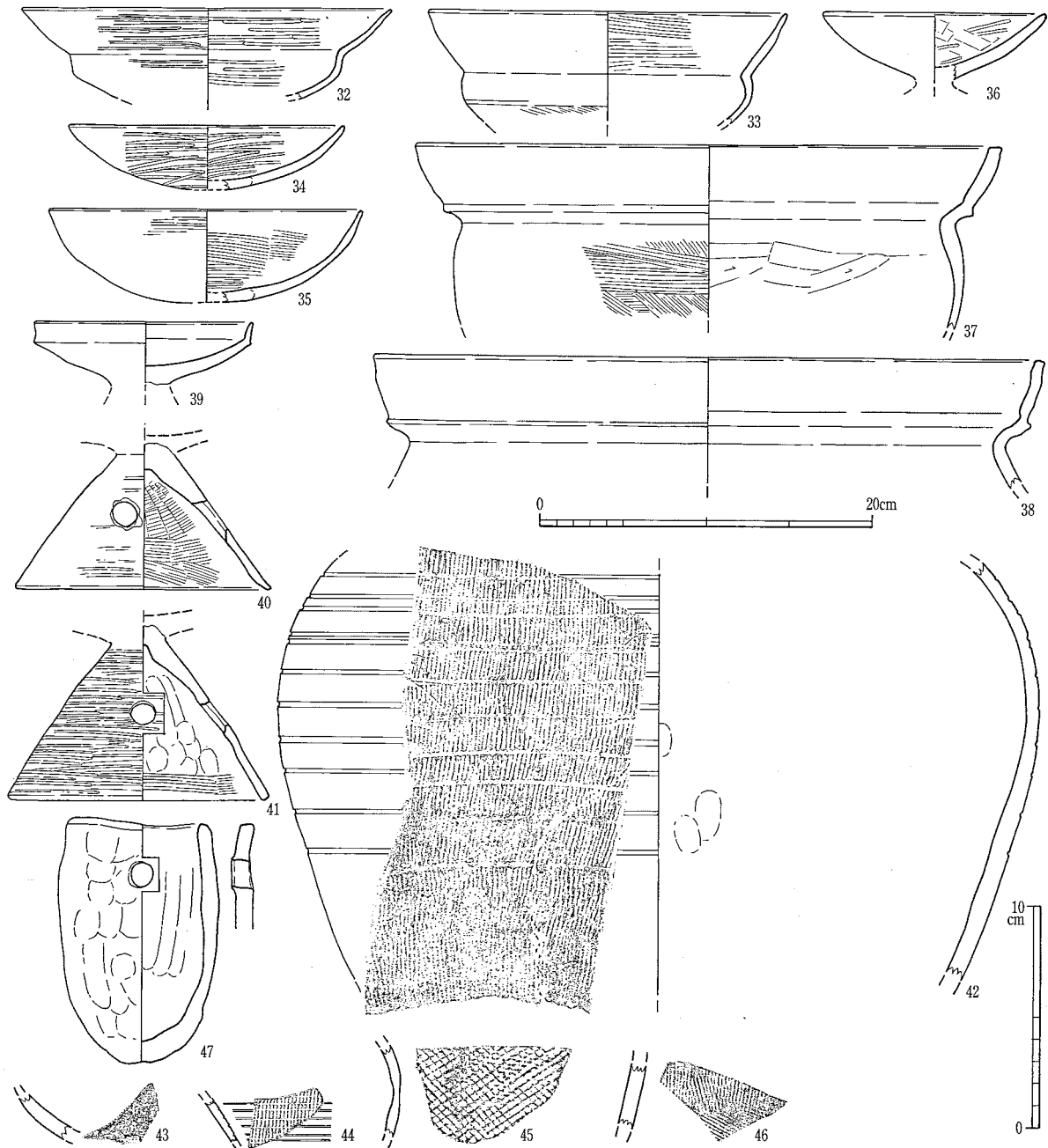
ある。22は肩に横ハケのち斜めのハケを施す。24は肩に1条の波状文を施す。27は肩に3条の波状文を施す。14・19は橙褐色、17・22・23・25~27は淡黄褐色~黄褐色、21は灰褐色、他は灰黄色を呈する。

28~31は高杯である。28は外面に粗い横ミガキ、内面に暗文状の縦ミガキを施す。29・30は脚部で、29は半乾燥段階で外から2ヶ所穿孔を施す。30は外面は縦ミガキで調整するか。半乾燥段階で外から穿孔を施す。孔数は不明。31は在地系高杯の口縁である。口縁端部は面取りする。外面は横ハケを施す。31は灰黄色、他は橙褐色を呈す。

32・33は外傾する口縁をもつ鉢である。32は器壁は薄く、内外面に細かいミガキを施す。33は内面のみミガキで調整するか。34は精製の浅い鉢で、内外面に細かいミガキを施す。35は外面はミガ



第142図 77号竪穴住居跡出土土器実測図(1) (9~13・28~31は1/3、他は1/4)



第143図 77号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (37・38は1/4、他は1/3)

キ、内面はハケで調整する。36は山陰系の小型脚付鉢である。外面は磨滅のため、調整不明。内面に工具痕が残る。37は口径35.0cmの山陰系の大型鉢である。38は口径40.0cmの大型鉢であるが、小片のため口径は自信がない。32・34・35・37は橙褐色、33は灰黄色、36は淡黄褐色、38は白黄茶色を呈す。

39～41は畿内系小型精製器台である。39の口縁部は直立する。内外面とも磨滅しているが、ミガキを施す。40・41は脚部である。40は半乾燥段階に外から3ヶ所穿孔を施す。41は外から2ヶ所穿孔を施す。

42～46は半島系土器で、焼成は瓦質に近い。42は壺の胴部か。外面は太い平行タタキのち凹線をめぐらす。内面には指頭圧痕が残る。43～46は甕か壺の破片である。43は内外面ともナデで調整す

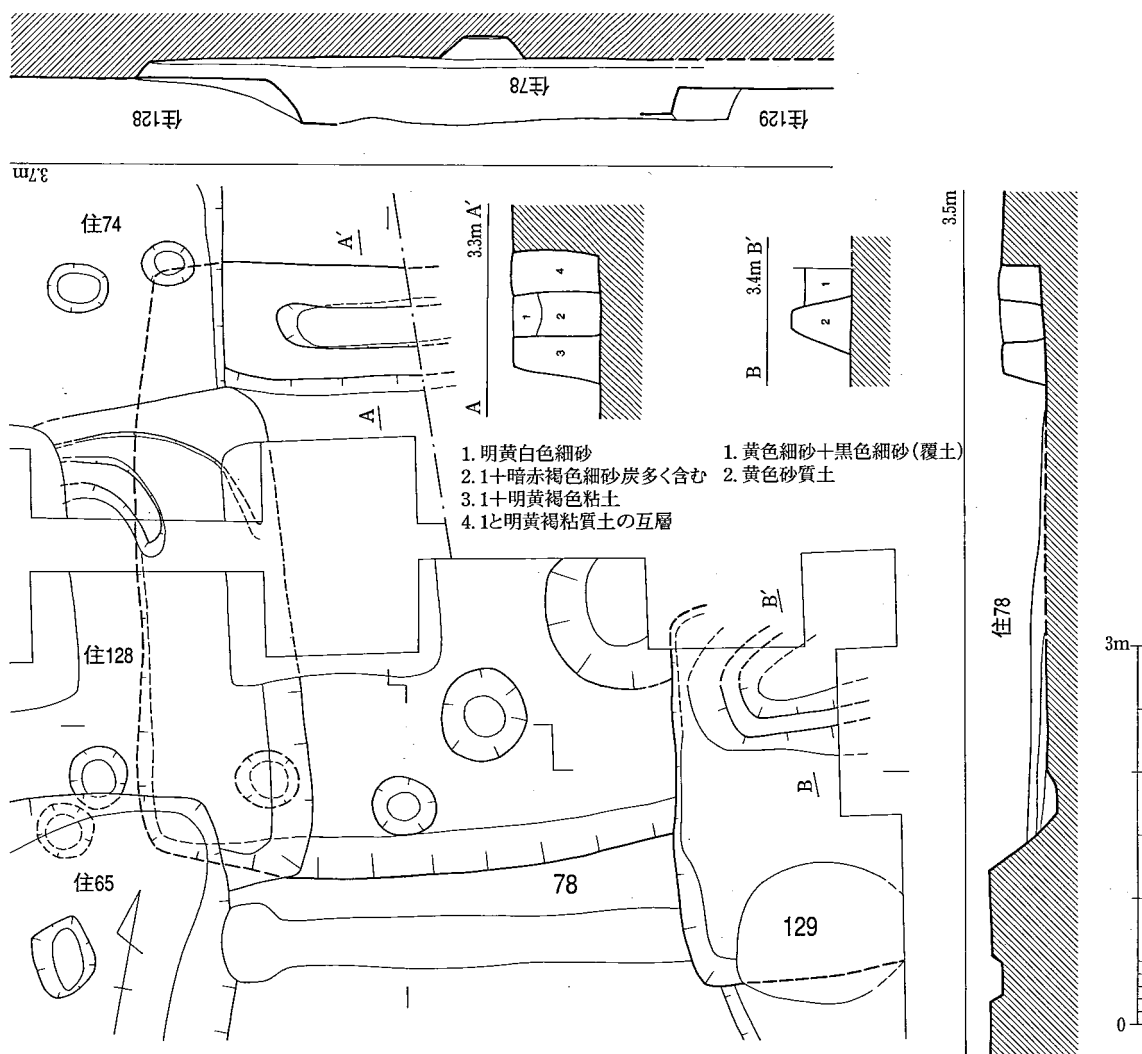
る。44は外面に平行タタキのち凹線を巡らす。45の外面は格子タタキで調整する。46の外面は細かい平行タタキで仕上げる。42・45は灰白色、他は灰黄褐色を呈す。

47は蛸壺である。焼成前に外から1ヶ所穿孔を施す。(大庭)

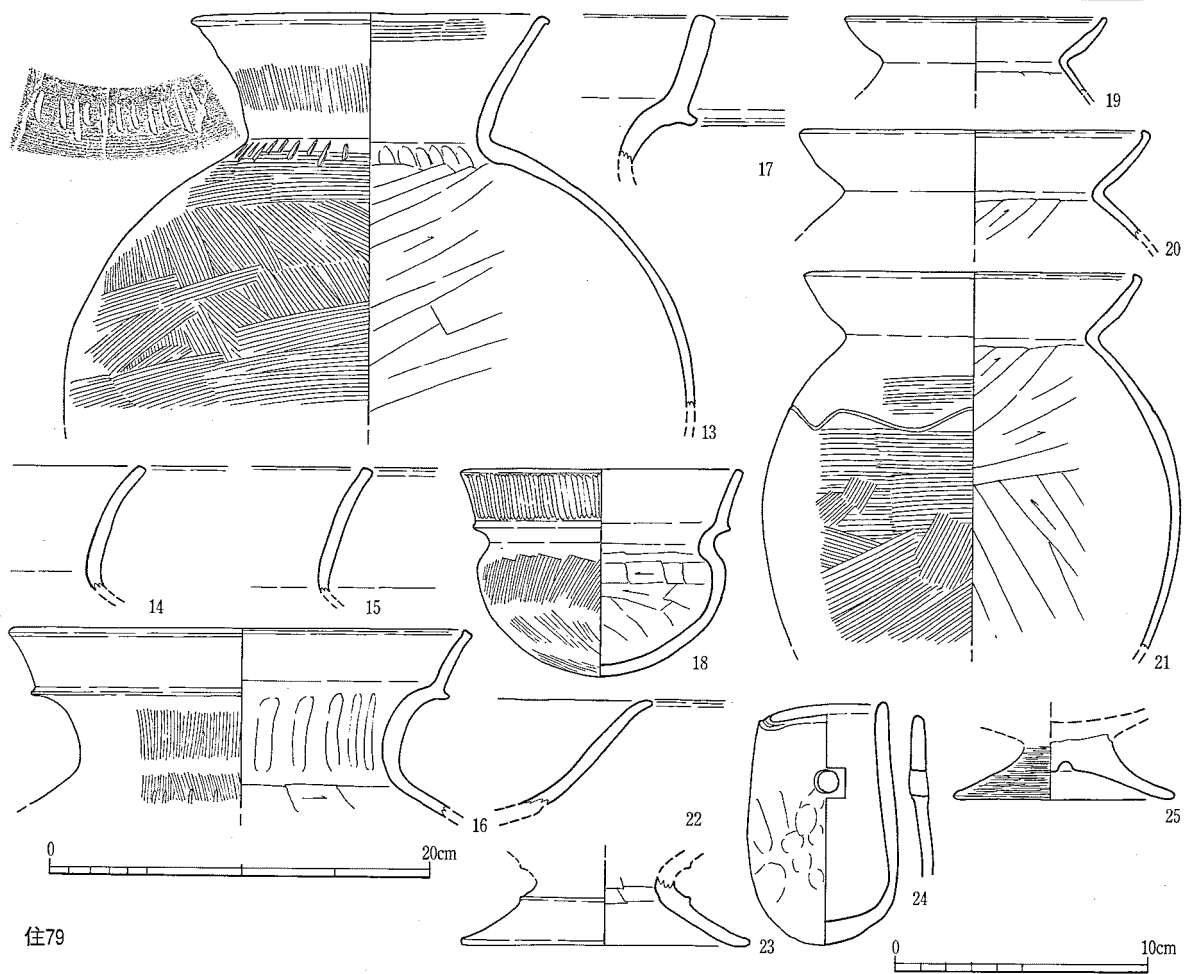
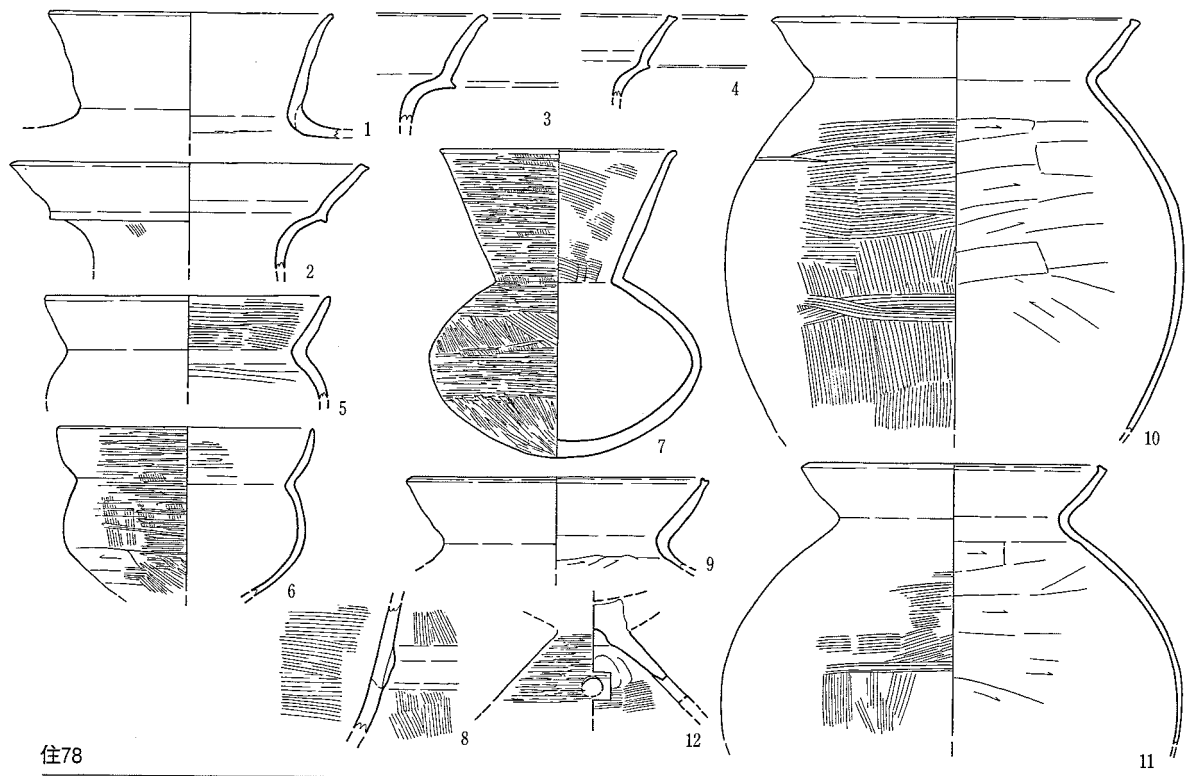
78号竪穴住居跡 (図版34、第144図)

3中1区から北1区にわたり、65号竪穴住居跡北東に位置する。65・70・74・128・129号竪穴住居跡に切られると考えて発掘したが、本住居付近は切合いがはげしいため、切合いには不安がある。校舎の基礎や調査区端にあたるため、本住居の西・南壁、北壁の一部しか検出できなかった。覆土は暗黄灰色細砂で、基礎を挟んだ北側の部分も覆土、床面の高さが一致することから同一住居であると判断した。本住居の規模は南北約5m、東西4.3m以上、深さ45cmを測る。本住居の北西隅で大部分が調査区外にあるカマドの煙道部のみ確認した。カマドはL字状のカマドであると推定されることから本住居は長方形住居と考えられる。覆土から石錘片が出土した(第243図31)。

カマド 上述のように住居北西隅に位置する。東側は調査区外のため煙道部しか調査できなかった。平面プランは煙道部が北壁にそってのび、焚口が南に直角におれるL字状のカマドになると考えら



第144図 78・129号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第145図 78・79号竪穴住居跡出土土器実測図（5～7・12・18・22～25は1/3、他は1/4）

れる。袖は住居内側部分は砂と粘土をまぜた粘質砂で構築し、壁側は砂と粘土で版築状に積んで構築している。煙出は74号竪穴住居跡に切られているが、住居の外までのびないと考えられる。

出土土器 (第145図1~12) 1は畿内系直口壺である。2~4は山陰系二重口縁壺である。2は口縁がハの字に開く。5・6は精製の小型丸底壺である。5は外面は磨滅のため調整不明。6は内湾する口縁をもち、内外面ミガキを施す。7は小型精製長頸壺である。外面は頸部から肩にかけて横ミガキ、胴部下半は縦ミガキのち横ミガキ、胴部中位はミガキを施さず、ハケが残る。1は灰黄褐色、2~4は淡黄褐色、5~7は橙褐色を呈す。

8は在地系甕の胴部片である。内外面はハケで調整し、低い突帯を貼りつける。9~11は布留系の甕である。10の肩は縦ハケのち横ハケを施し、1条の凹線が巡る。外面には煤が付着する。11は胴部中位の器壁が薄い。8は黄茶褐色、10は黄褐色、9・11は灰黄褐色を呈す。

12は畿内系小型精製器台の脚部である。半乾燥段階で外から2ヶ所穿孔を施す。赤褐色。(大庭)

79号竪穴住居跡 (図版35、第146図)

3北1区の中央やや北寄りに位置している。南壁、北半を大きく攪乱により失っており、東西壁の一部と西南隅を検出したにとどまる。また、西南隅の輪郭を間違えて、西壁とずれが生じている。南に隣接する80号竪穴住居跡と一部重なるが、両者の切合いは十分に確認していない。かなり削平を受けているためか炉跡も検出できなかった。なお西南隅の外にある落ち込み出土遺物を「79号住居跡南包含層」として取り上げた。

出土土器 (第145図13~25) 13~15は布留系直口壺。13は頸部外面の一部に縦方向線刻を施す点特徴的。16・17は山陰系二重口縁壺で、16は頸部内面にナデ上げ痕を良く留める。17は内面にコゲのような黒色付着物が見える。18は二重口縁小形丸底壺。口縁外面は太い縦ミガキ、胴外面は斜めハケ、胴内面はヘラケズリ。淡橙褐色の16以外は淡黄褐色。

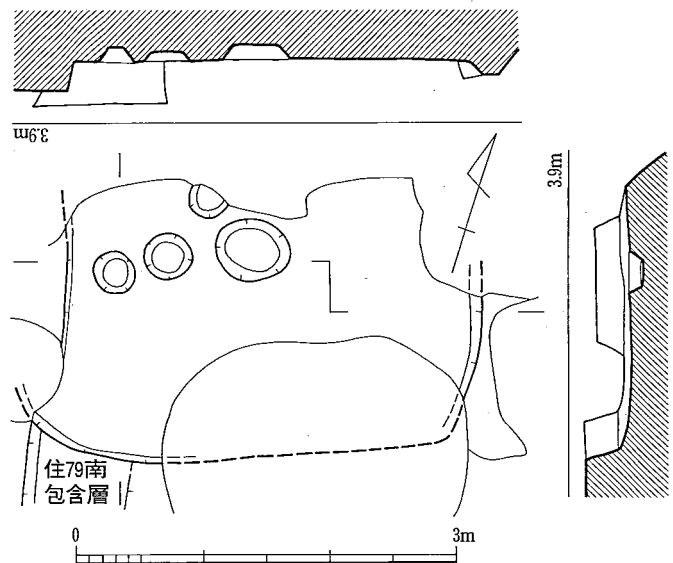
19~21は布留系甕。19は口縁端を丸くおさめる。20・21は口縁端を内につまみだし、径も等しいのであるいは同一個体か。21は肩部横ハケを切り下部斜めハケが施されるようで、肩部に1条の波状沈線文を巡らす。19・20は全面、21は肩より下に煤付着。19が淡褐色、他は淡黄褐色を呈す。

22は高杯口縁部か。内外とも磨滅。他の土器と異なり角閃石含み、淡褐灰色。

23は淡黄褐色を呈す小形山陰系鼓形器台片で、屈曲部内面はケズリ仕上げ。

24は蛸壺で淡黄褐色を呈す。

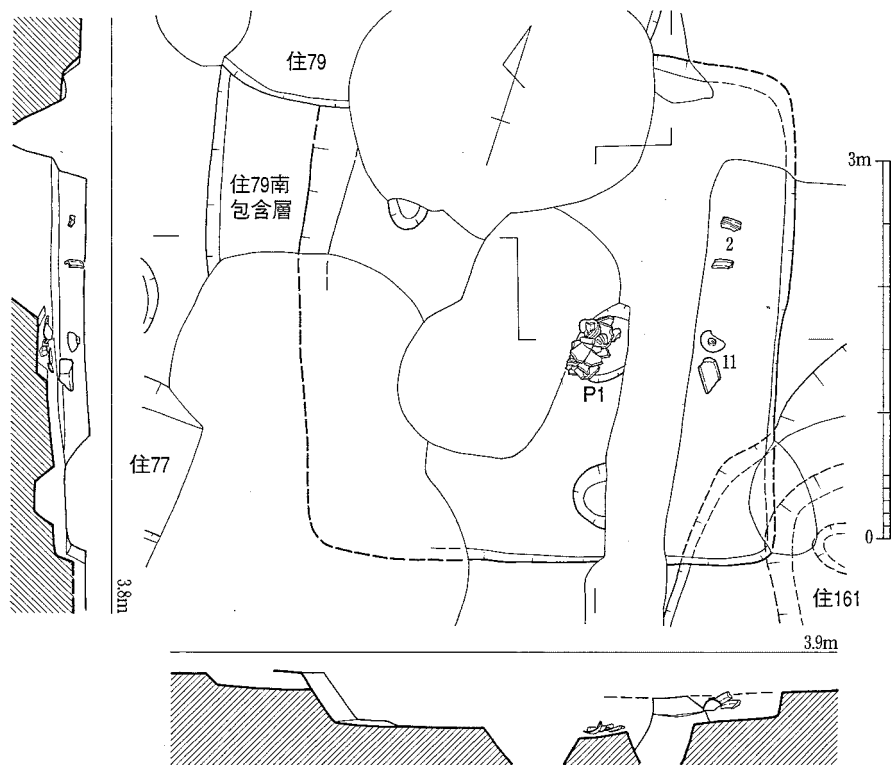
25は79号住居跡南包含層出土品。橙褐色の脚付鉢脚部片で外面は横ミガキで仕上げる。(重藤)



第146図 79号竪穴住居跡実測図 (1/60)

80号竪穴住居跡 (図版35、第147図)

3北1区の中央やや北寄り、79号竪穴



第147図 80号竪穴住居跡実測図 (1/60)

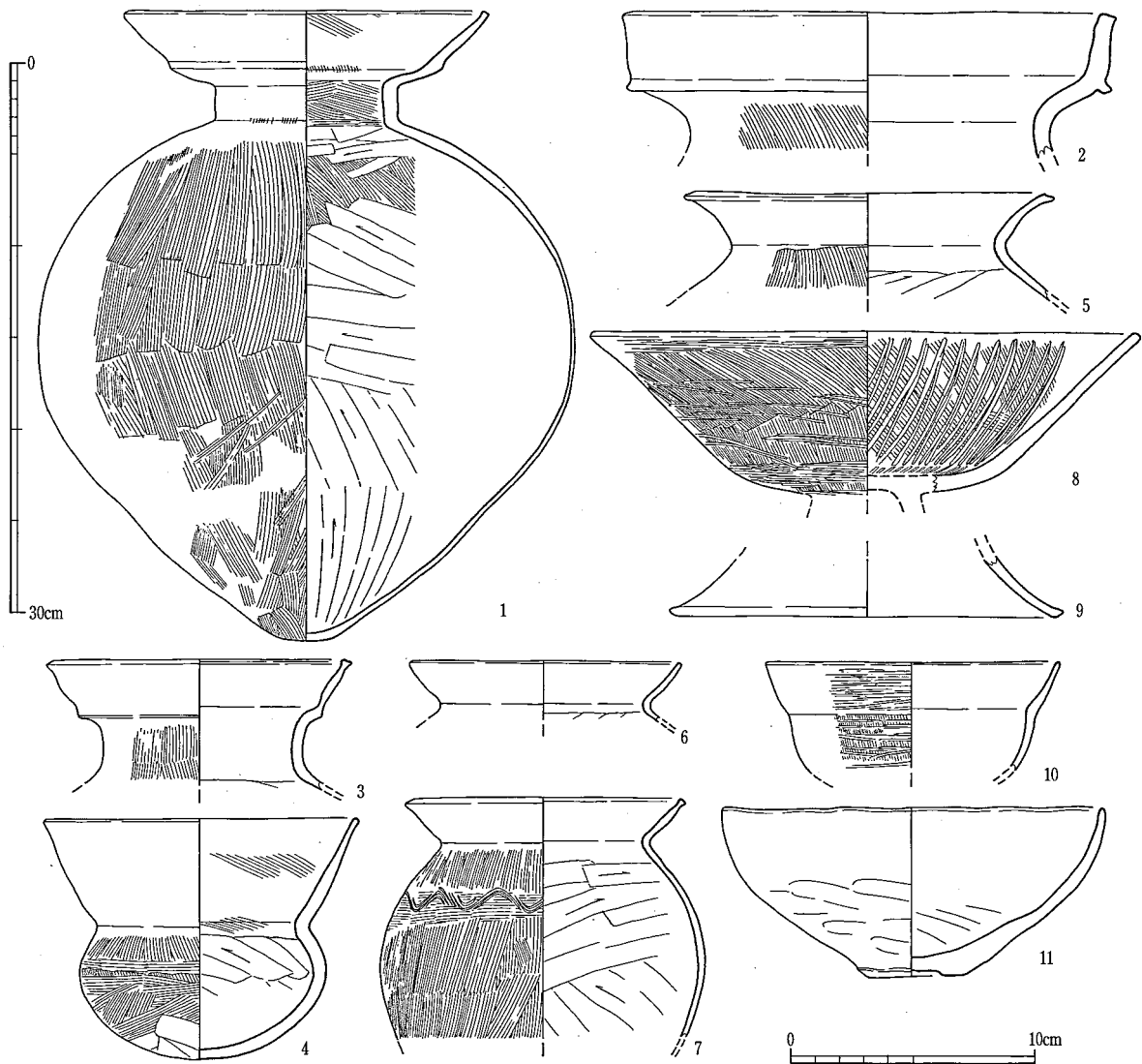
住居跡の南に隣接する。79号竪穴住居跡との切合いは不明である。全体的に攪乱を受け、西壁の一部、東壁～東南隅、北壁の一部を検出したにとどまり、平面形は不安である。炉跡も検出してない。ただ、中央のP1内(1・3・7・8)と東壁近くからまとまって出土した土器(2・11)の一括性は良好と思われる。暗褐灰色細砂を埋土とする

出土土器(第148図) 1はほぼ完形に復元された畿内系二重口縁壺である。口縁内外は横ナデで仕上げ、胴部外面は下から上に縦ハケを施す。内面は頸部が斜めハケ、胴部上位は斜めハケ後ケズリ。2・3は山陰系二重口縁壺で、2は屈曲部が少し垂下し、3は端部を内外にわずかにつまみ出す。4は覆土上層出土の小形丸底壺でミガキを施さない粗製品である。胴部外面は肩部縦ハケ、肩部横ハケ、下半縦～斜めハケの順のハケメの切合いが看取できる。胴内面はヘラケズリ。褐色の1以外は淡黄褐色を呈す。

5～7は甕である。5は丸く外反した口縁部で、端部は外側に少し拡張する特徴的な形態。6・7は布留系甕。6は端部が丸く、7は上に少しつまみ出す。7は肩部に5条1単位櫛描波状文を巡らし、肩部横ハケを切り胴下半縦ハケ。5内面は化粧土のためか橙褐色で、外面褐色。他は淡黄褐色を呈す。

8は高杯杯部片である。外面は斜めハケ後、疎らな横ミガキで仕上げる。内面の調整は斜めハケ後、暗文風の縦ミガキを施している。9は高杯脚裾片と思われる。内外ナデ仕上げである。いずれも褐色を呈す。

10は淡橙褐色の口縁外反鉢で、外面縦ハケ後横ミガキし、内面は摩滅する。11は直口鉢で底部は中央が凹んだ平底をなす。外面下半粗い指ナデ、内面下半板ナデである。作りは粗いが、口縁内面～外面に橙褐色化粧土を施す。生地は淡黄褐色。(重藤)

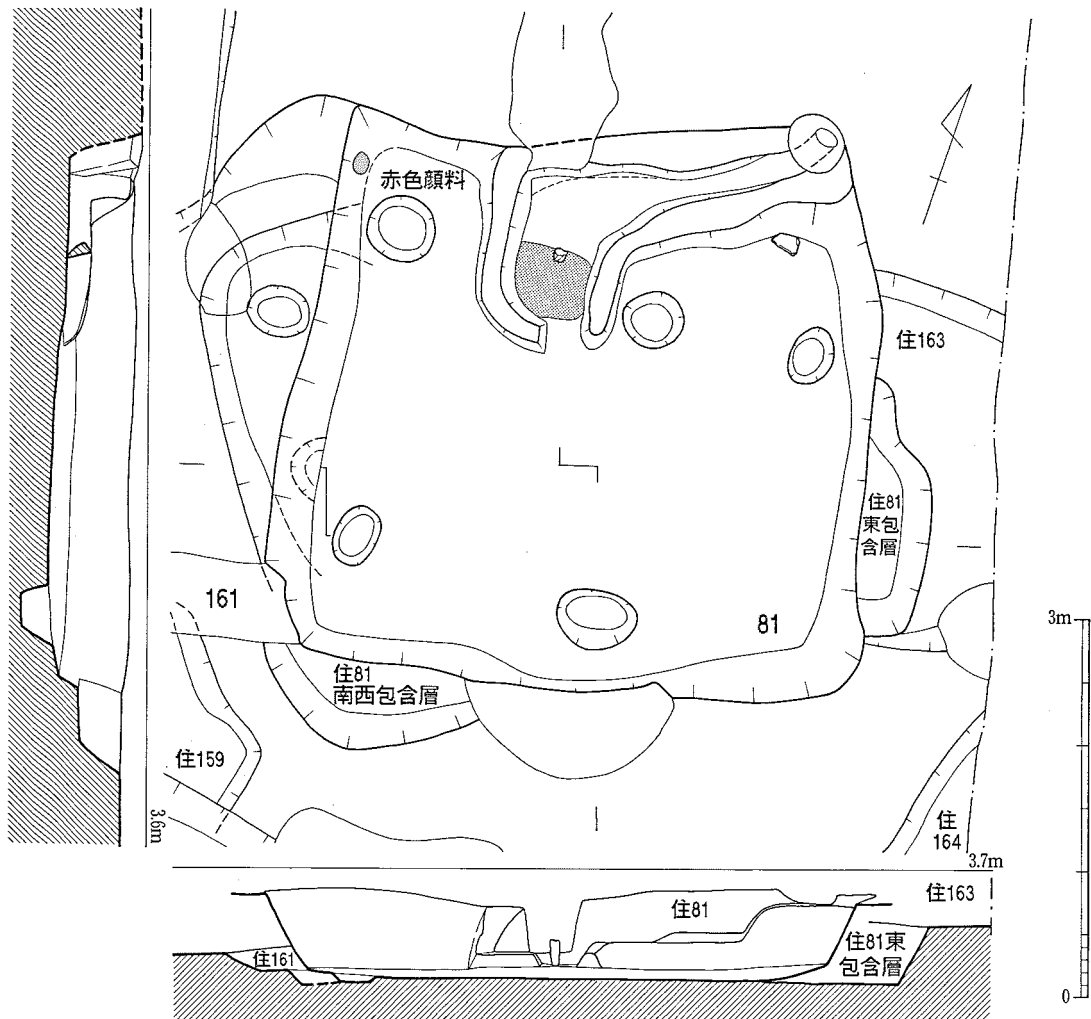


第148図 80号竪穴住居跡出土土器実測図（4・8～11は1/3、他は1/4）

81号竪穴住居跡（図版35・36、第149図）

3北1区東南隅にあり、74・75号竪穴住居跡北に位置する。161・163号住居跡を切り、南と東南には住居跡の可能性もある包含層が存在する。覆土は暗黄灰色細砂で、南北約4.5m、東西4.7m、深さ70cmの方形竪穴住居である。煙道が本住居跡北東隅から北壁中央までのび、焚口側に向かって南に直角におれるL字状のカマドを検出した。住居北西隅では赤色顔料がつまった小ピットを検出し、住居跡南には大きな粘土塊を確認した。住居内から多量の土器が出土し、覆土から砥石を転用した打欠石錘（第244図42）、砥石等の石器（第250図45～47）も出土した。なお、81号竪穴住居跡東包含層から鉄鏃の基部と考えられるもの2点（第237図12・13）、不明鉄器（第238図51）1点が出土している。

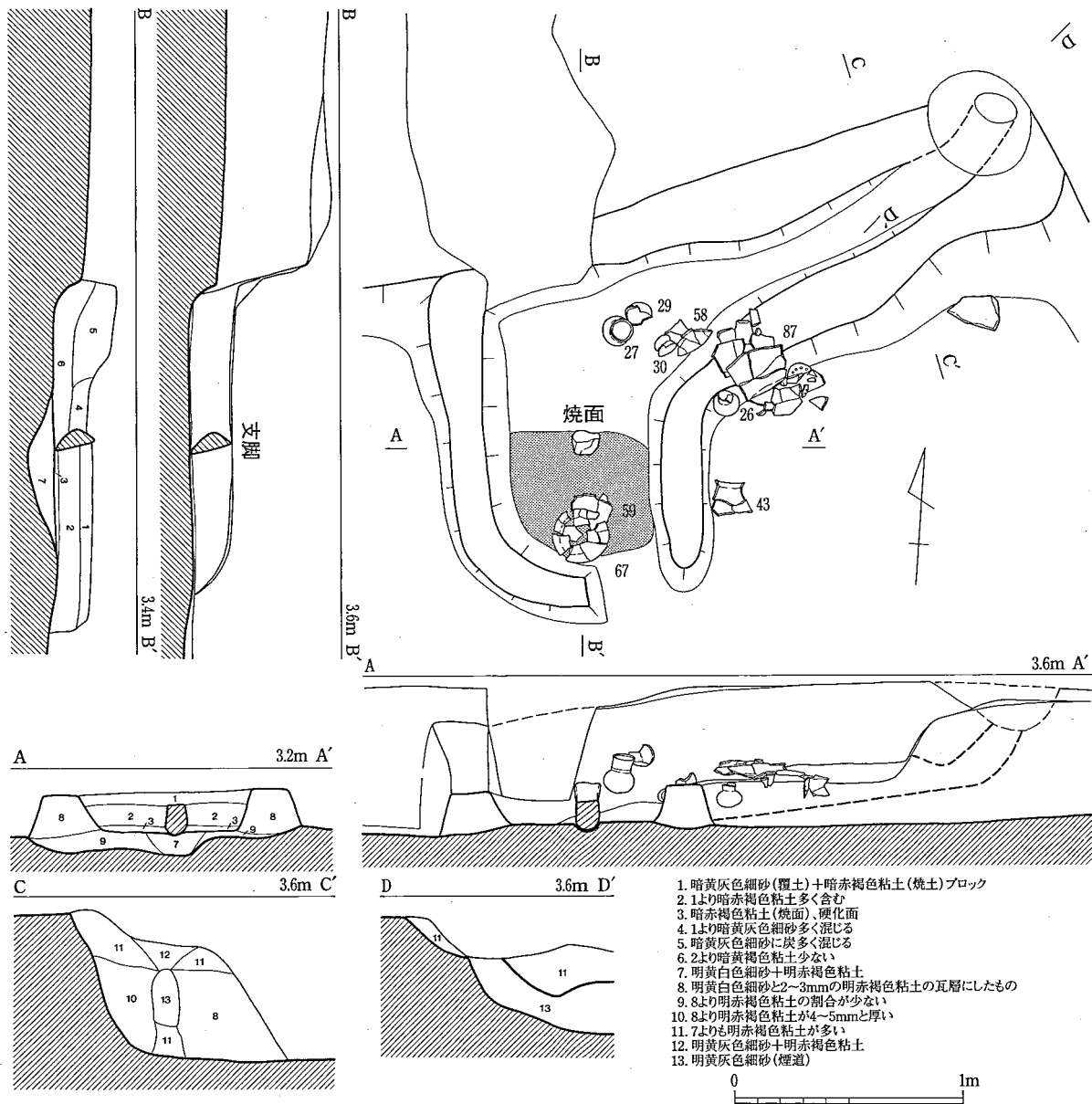
カマド（図版36、第150図） 上述したように、煙道部が北壁に沿ってのびるL字状のカマドである。煙道部北側、煙出は近世以降の攪乱を受けている。東西で長さ約3.0m、南北で約1.6mの規模を持つ、本遺跡で最も大きく、遺存状況の良好なカマドである。焚口側の両袖はカマド廃棄の際に壊されているため、高さ15cmほどしか残っていないが、煙道部の住居壁側は破壊をほとんど受けなか



第149図 81・161号竪穴住居跡実測図 (1/60)

ったため、最も残りのよい部分で床面から約60cmほど残る。カマド内埋土と袖構築土とが明瞭に区別できなかったため、左袖先端は燃焼部をかこむように弧を描くが、右袖のような直線的な形態であった可能性が高い。支脚は石製で、焚口幅は59cmを測る。カマド前面には焼土が堆積していた。支脚前後は非常に良く焼けており、硬化面を形成する。支脚前から祭祀に使用されたと考えられる土器が出土した (59・67)。袖は版築状に粘土と砂を交互に押し固めたもので構築している。焚口は住居床面を掘りくぼめ、袖と同じく版築状に粘土と砂を交互に押し固め、住居床面とほぼ同じレベルにしている。焚口と煙道部の境にはカマド廃棄の際の祭祀に使われたと考えられる土器 (26・27・29・30・58・64・78) が、右袖上では甑 (87) が置かれた状態で確認した。煙道部の袖は壁側を住居内側より厚い粘土を使用している。煙出は両袖をつくったのち、天井部を覆い被せる方法で、トンネル状に構築する。煙出は斜めに上がる形態で、77号竪穴住居跡の垂直に上がる形態とは異なる。煙出は住居外まで延びない。

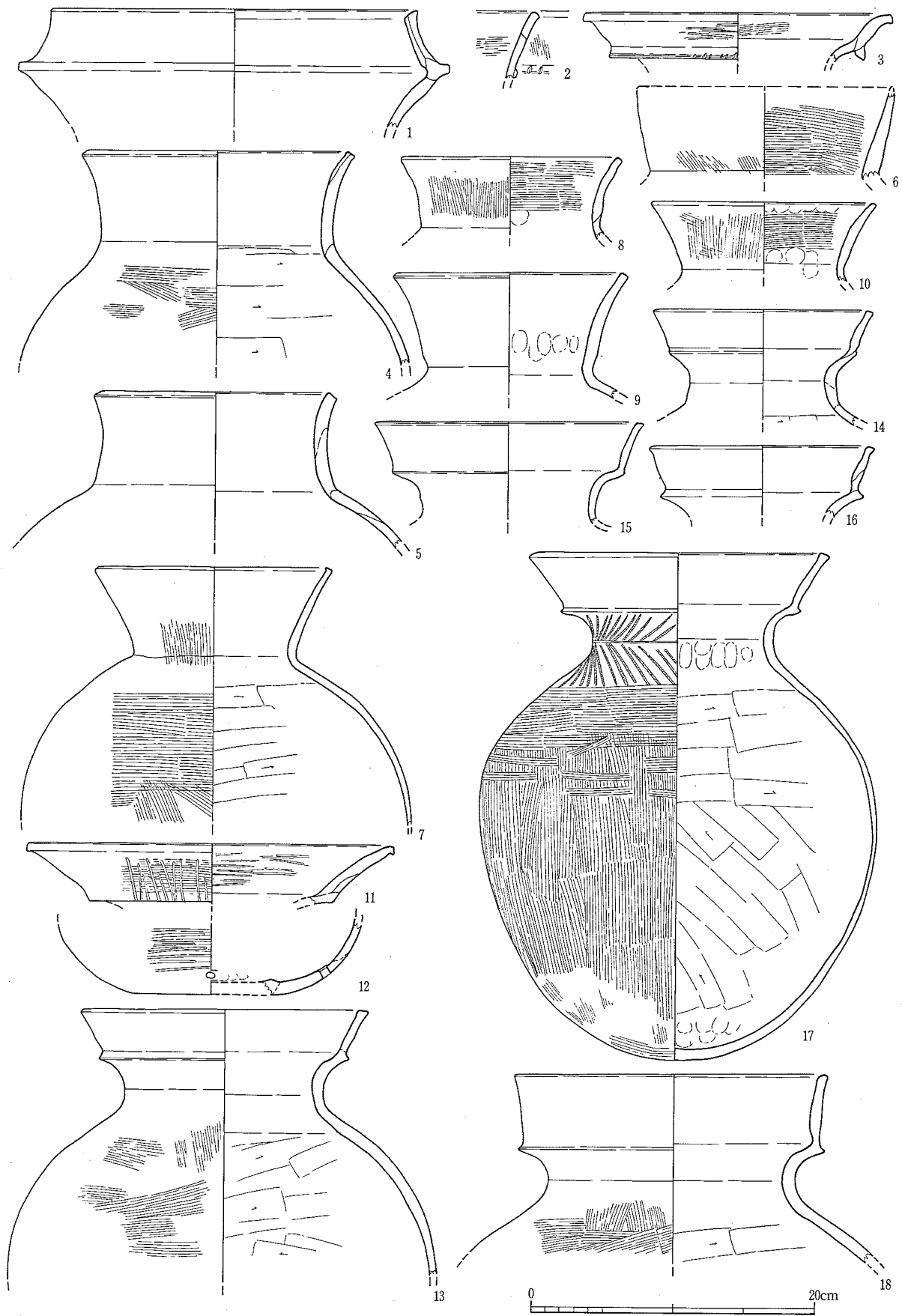
出土土器 (第151～155図) 1は在地系の複合口縁壺である。口縁端部は上につまみ上げ、屈曲部はナデで面取りする。2は短く外反する複合口縁壺の口縁部片か。刻目突帯を貼り付ける。3は口縁端部を短く外反させる。屈曲部には刻み目をもつ突帯を貼り付ける。外面はミガキを施すため、畿内系二重口縁壺の可能性はある。



第150図 81号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

4~9は畿内系直口壺である。4の口縁部はゆるやかに外反し、胴部はあまり張らない。内面は頸部までヘラケズリを行う。口縁部外面に黒斑がある。5の口縁端部は面取りする。6は直立する口縁部をもつ。7は外面に煤が付着する。8は内外面にハケが残る。外面に煤が付着する。10は内外面にハケが残る。11は畿内系二重口縁壺である。外面は横ハケのち縦ミガキ、内面は横ミガキを施す。12は畿内系二重口縁壺の底部か。外面はミガキ、内面はナデで調整する。底部には焼成前に外から穿孔を施す。

13~24は山陰系二重口縁壺である。16は口縁部に黒斑がある。17は完形品で、口径20.0cm、器高35.5cmを測る。頸部にはハケ工具による綾杉文を施す。肩は縦ハケのち横ハケ、底部は磨滅する。口縁端部には黒斑がある。18は直立する口縁部をもつ。内面は頸部との境までヘラケズリを施す。19は頸部にハケ工具で綾杉文を施し、2条の凹線を入れる。内面はヘラケズリが肩部まで下がる。



第151图 81号竖穴住居跡出土土器实测图 (1) (1/4)

21～23の内面は頸部上位までヘラケズリを行う。24は口縁部と頸部の境に鋭角状の突帯をもつ。25は瀬戸内系である。口縁部外面はハケ工具による凹線を施す。外面は縦ハケ、内面は頸部までヘラケズリを行う。

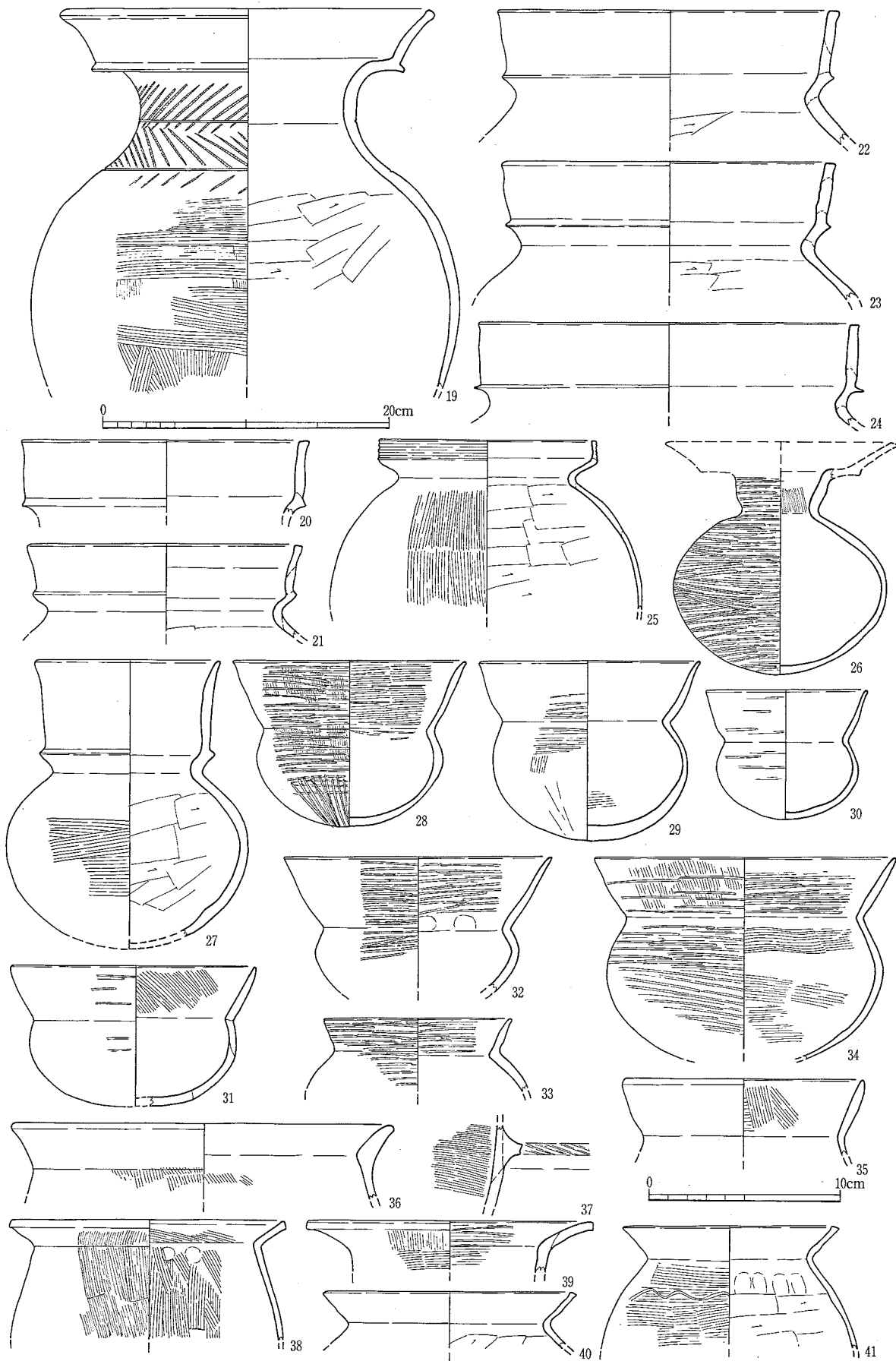
26は小型の畿内系二重口縁壺。口縁部は欠失する。外面は細かい横ミガキ、頸部内面は縦ハケが残る。27は山陰系の中型丸底壺。口縁端部はやや外反する。28～35は畿内系小型精製丸底壺である。28・29・32は口縁端部をやや外反させる。28の外面は横ミガキを行い、胴部下半はのち縦ミガキ。29はやや内湾する口縁をもつ。内外面はミガキを施すが、頸部以外はほとんど磨滅する。30の内外面はミガキを施すが、ほとんど磨滅する。31は器壁が厚めである。外面はミガキを施すが、ほとんど磨滅する。口縁部内面はナナメハケを行う。33は短く外傾する口縁部をもち、内外面細かい横ミガキ。34・35は肥厚する口縁をもつ。34は小型丸底壺では大型品で、外面横ミガキ、内面口縁部は横ミガキ、胴部はハケ。外面胴部下位には黒斑、内面頸部近くは炭化物が付着する。35の外面は調整不明。

上述した壺類は8・20・27は黄茶色、12・26・28～33・35は橙色、6・13は橙褐色、他は淡黄褐色～黄褐色を呈す。

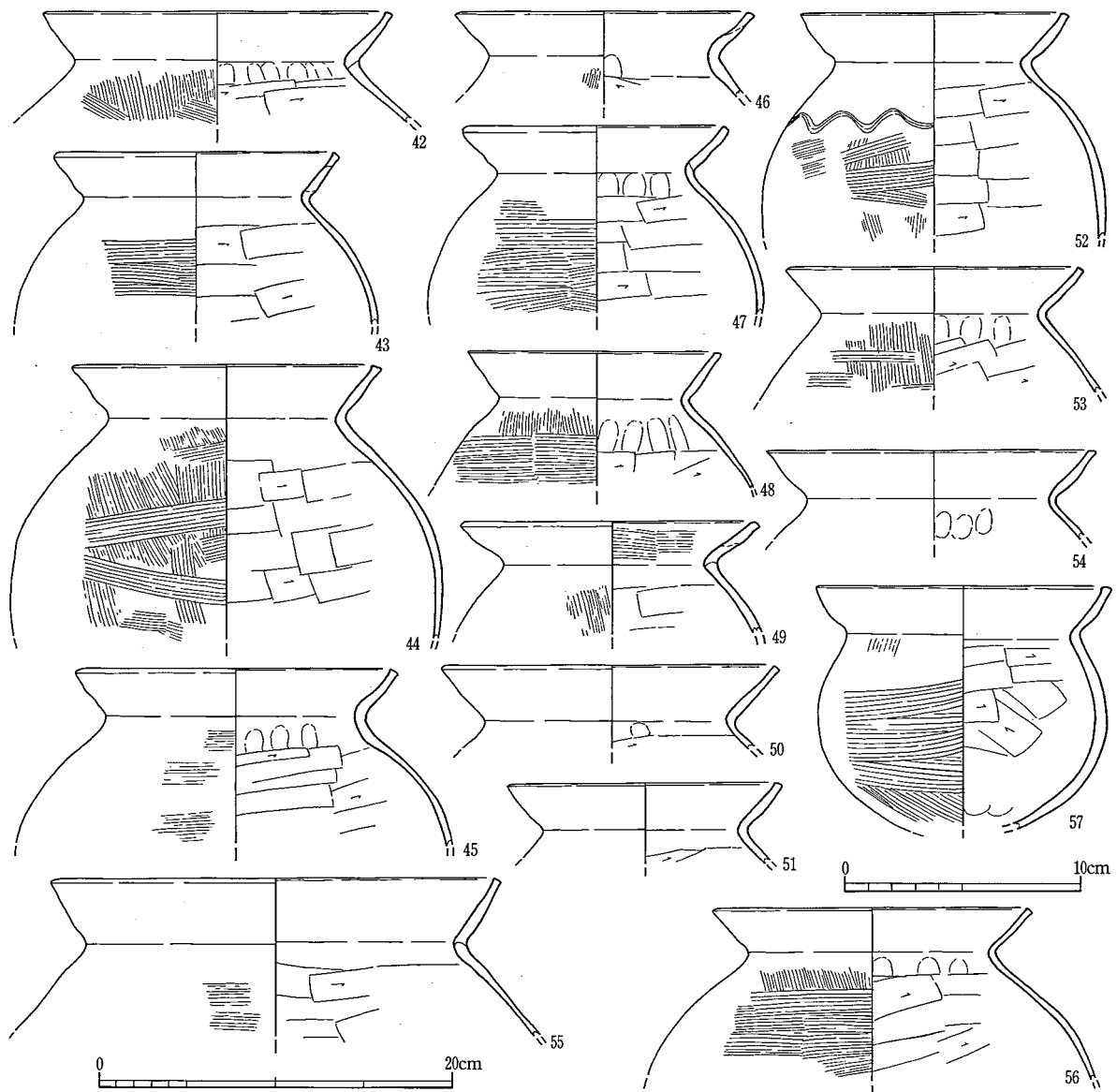
36は在地系の甕である。短く外反し、肥厚する口縁をもつ。内面には炭化物が付着する。37は在地系の甕胴部片である。ハケで端部を調整する突帯を貼り付ける。38は在地系の甕である。外傾する口縁をもち、内外面をハケで調整する。39は長めの口縁部がハの字状に開き、頸部が直立する。内面はミガキを施す。40～57は布留系の甕である。41は肩に1条の波状文を巡らす。胴部下半は二次加熱を受け、赤変する。頸部から肩にかけて煤が付着する。内面のヘラケズリはやや下がる。43は胴部中位に二次加熱を受けている。44は外面に黒斑あり。内面には糊圧痕がある。46は外面に煤が付着する。47は肩まで二次加熱。頸部には煤が付着する。48は口縁端部を面取りする。内面のヘラケズリが肩まで下がる。内外面に炭化物が付着する。49は口縁部内面にハケが残り、外面には煤が付着する。52は肩に3条の櫛描波状文を施す。外面には煤付着。53は肩に縦ハケのち粗い横ハケを施す。外面には煤が付着する。56の器壁は薄い。内面には炭化物が付着する。胴部中位には黒斑がある。57は小型の甕である。内湾する口縁をもち、内面は頸部近くまでヘラケズリを行う。36・37は橙褐色、38・40・41は灰黄色、53・56は黄茶色、55は黄橙色、他は黄褐色を呈す。

58～63は高杯である。58は杯部上半はナデ、下半～脚部にかけて横ミガキ、杯部内面には暗文風の縦ミガキを施す。焼成前に外から2ヶ所穿孔を脚柱部中位に行う。口縁外面には黒斑あり。59は杯部下位に段をつくり出す。外面はミガキ、内面はハケ調整を行う。61の外面は横ミガキ、内面は暗文風の縦ミガキを施す。62は脚部で、外面は横ミガキ、内面はヘラケズリによる絞りをを行う。半乾燥段階で外から2ヶ所穿孔を施す。63は在地系の脚裾である。外面は縦ミガキ、内面はヘラケズリを施す。63は黄茶色、他は橙褐色を呈す。

64～67は外傾する口縁をもつ鉢である。64・65は外面は横ミガキ、口縁部内面は横ハケを施す。66はほとんど磨滅しているが、口縁内面にわずかにハケが残る。67は磨滅で調整不明。68は口縁部が外反する有段の鉢である。69は浅い鉢で、内外面に細かいミガキを施す。70・71は粗製の小型鉢である。72～75は椀型の鉢である。72の内面は丁寧なナデ調整を施す。74は口縁端部を面取りする。76・77は山陰系の脚付鉢である。77は脚裾内面にミガキを施す。78は短くゆるやかに外反する口縁をもつ深鉢である。外面胴部にはミガキを施す。79は直立する口縁部をもつ深鉢である。口縁端部は面取りを行う。80は脚付鉢か。外面は横ミガキ、内面下部はヘラケズリを行う。81は鉢の底部か。



第152図 81号竖穴住居跡出土土器実測図(2) (26~35は1/3、他は1/4)

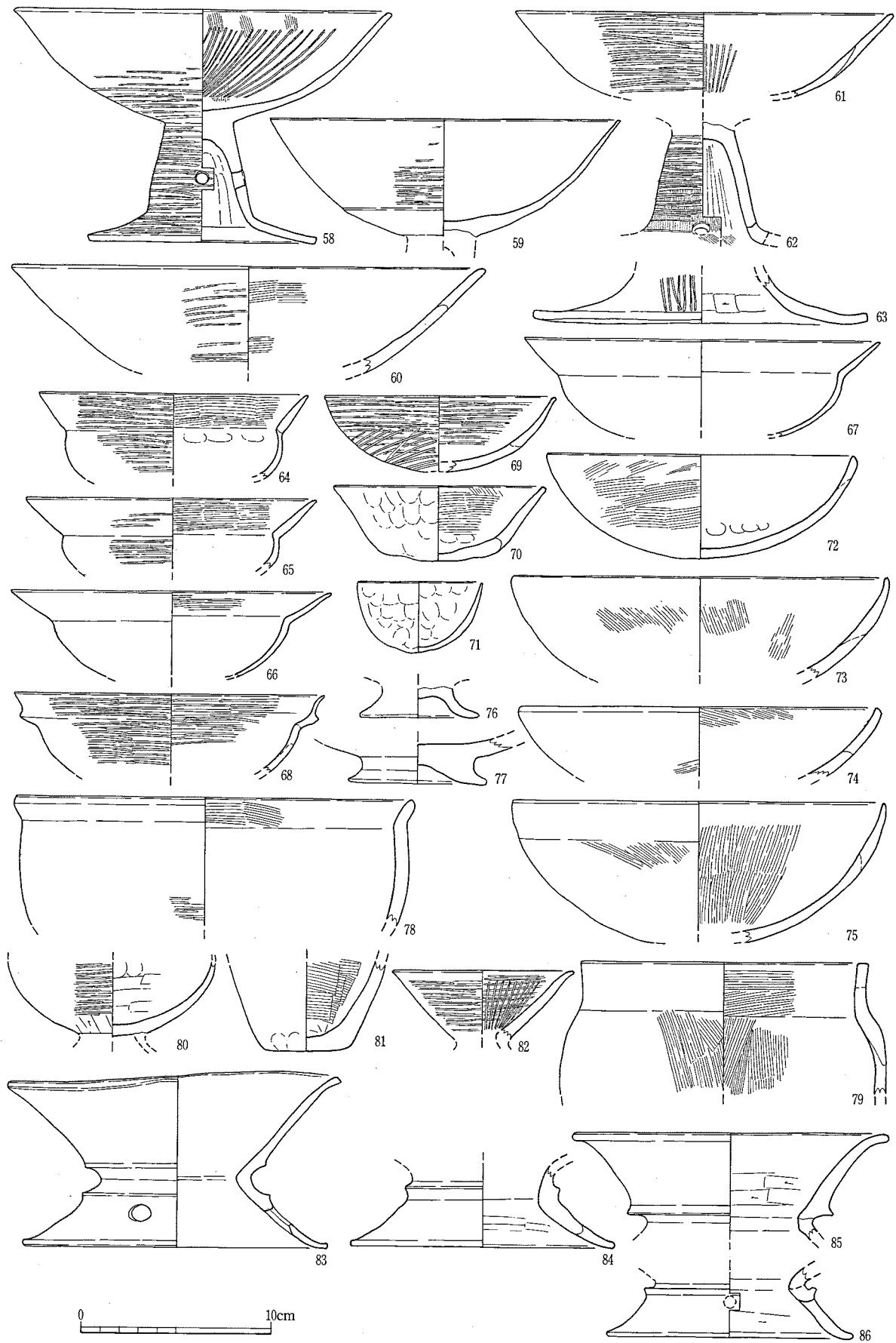


第153図 81号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (57は1/3、他は1/4)

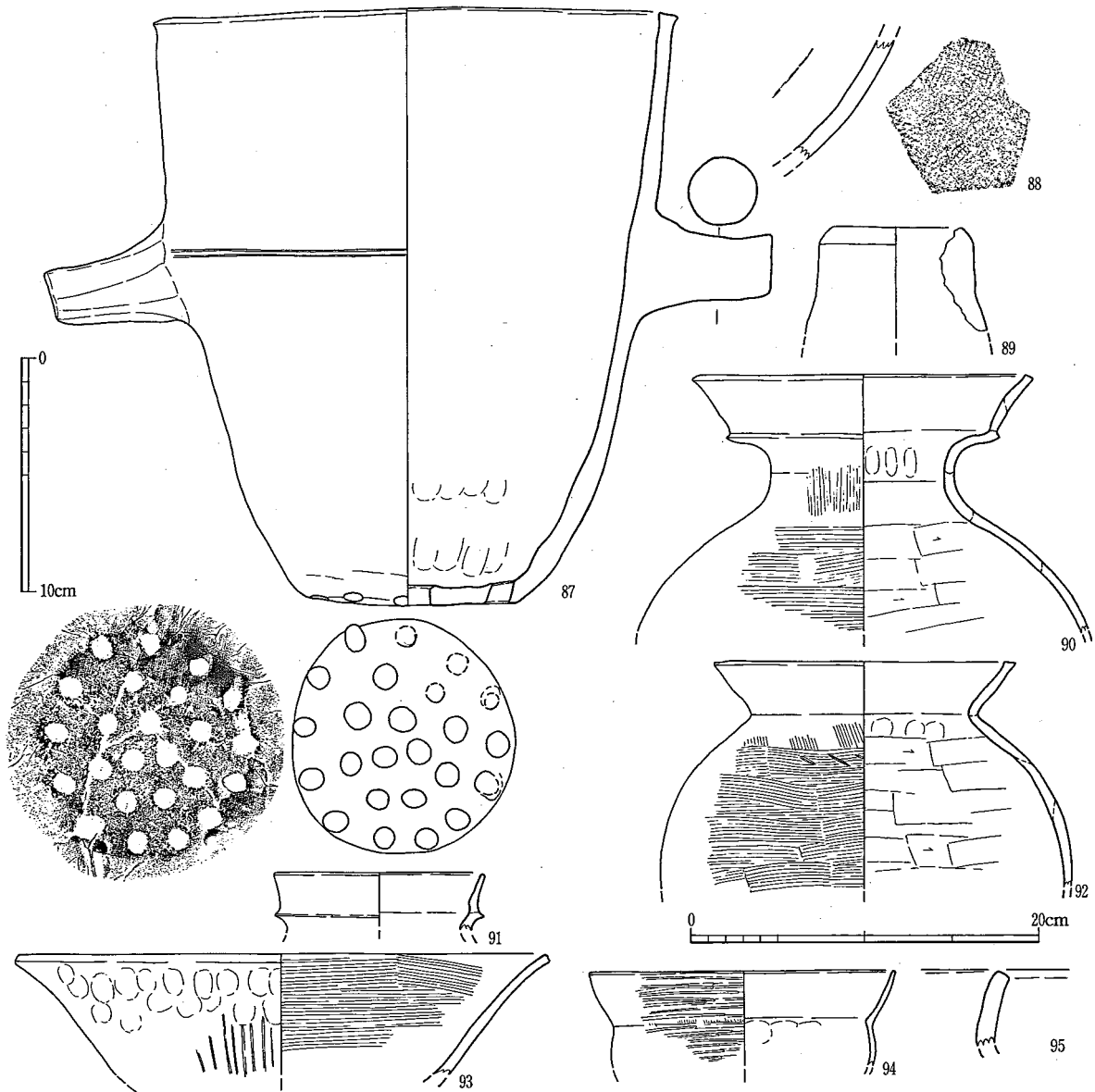
平底で、外面はナデ、内面はハケで調整する。64・66～69・77・80・81は橙褐色、79は灰黄褐色、他は黄褐色を呈す。

82は畿内系精製小型器台である。口縁端部は短く外反する。外面は横ミガキ、内面は暗文風の縦ミガキを施す。83～86は山陰系鼓型器台である。83は内外面横ナデで調整し、半乾燥段階で外から3ヶ所穿孔を施す。84は内面は一部ヘラナデを施す。85は口縁端部を強く外反させる。内面はケズるが、口縁近くはのち横ナデを施す。86は内面はケズリで調整する。穿孔が一部残るが、小片のため、孔数不明である。82は橙褐色、他は黄褐色を呈す。

87・88は半島系土器である。87は軟質の完形の甑である。口径20.6cm、器高25.6cmを測る。口縁端部はナデで面取りし、内外面は丁寧な横ナデを施す。胴部中位に浅い2条の凹線を巡らす。底部近くはヘラケズリのちナデで調整する。内外面底部は指頭圧痕が残る。孔数は24で、焼成前外から棒状工具で穿孔する。把手は胴部中位に2ヶ所つき、端部は面取りする。胎土は石英を多く含み、淡黄褐色を呈す。焼成は22号住居跡出土品より軟質で、むしろ土師器に近い。88は瓦質に近い陶質



第154图 81号竖穴住居跡出土土器实测图(4)(1/3)



第155図 81号竪穴住居跡出土土器実測図(5) (89~92は1/4、他は1/3)

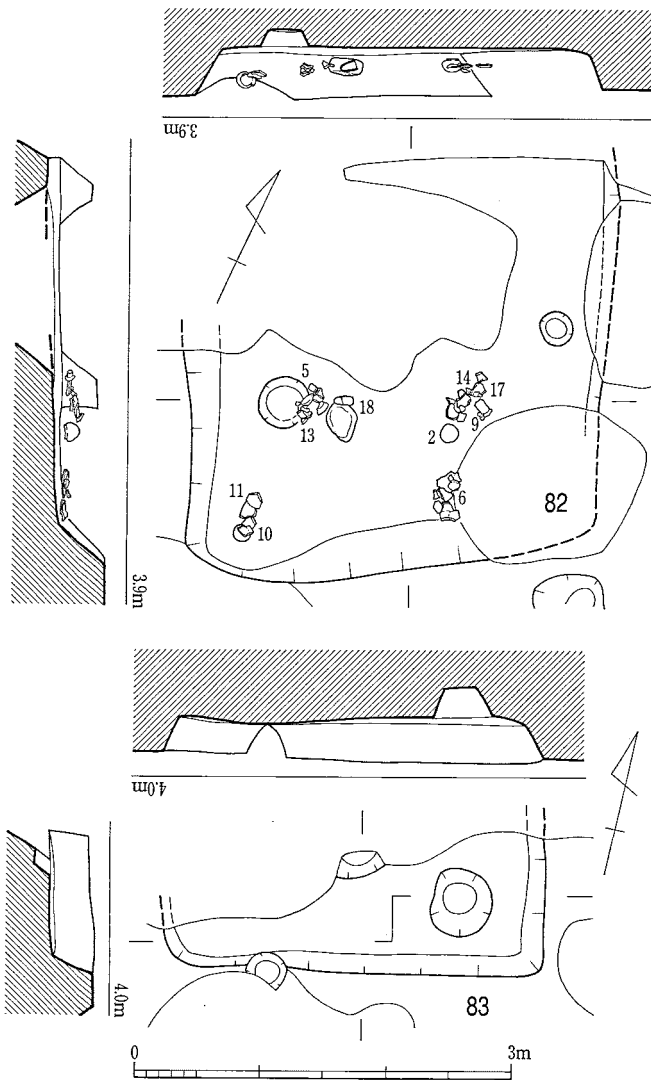
土器である。胴部下位の破片で、外面は格子タタキを施す。灰黄色を呈す。

89はふいごの羽口か。外面はナデ。胎土はスサを含む。内面は火を受け、赤変。赤褐色を呈す。

90~95は81号竪穴住居跡東包含層出土である。90・91は山陰系二重口縁壺である。黄褐色を呈す。91は小型壺である。92は布留式の甕である。口縁端部を面取りし、外面は縦ハケのち横ハケを施す。肩にはヘラ工具による刺突文を巡らす。胴部には煤が付着する。黄褐色を呈す。93は高杯で、外面は磨滅しているが、暗文風に縦ミガキを施すか。橙褐色を呈す。94はやや内湾する口縁をもつ鉢である。外面は細かい横ミガキを施す。橙褐色を呈す。95は半島系土器で壺口縁部である。口縁端部は面取りし、内外面は横ナデを施す。焼成は瓦質に近く、灰白色を呈す。(大庭)

82号竪穴住居跡 (図版36、第156図)

3北1区、81号竪穴住居跡の北に位置する。北側と東壁に沿って攪乱があるため北壁は検出でき



第156図 82・83号竪穴住居跡実測図 (1/60)

ず、東壁も一部を確認したにとどまる。西南隅の壁の遺存は良好である。炉跡は検出していない。床面近くから土器がまとまって出土しており、他住居跡との切合いも無いことから、良好な一括遺物と思われる。覆土は暗褐色細砂。

出土土器 (第157図) 1は布留系直口壺。肩部に波状沈線文を巡らしている。口縁内外にハケメを残し、頸部内面にヘラケズリ前ナデ上げ痕が残る。

2・3は畿内系中形直口壺胴部片。2は外面かなり摩滅するが横ミガキ、内面ナデ。頸部近くに接合痕が明瞭に残る。3は外面下半ヘラケズリ後横ミガキし、頸部内面にはナデ上げ痕が明瞭。4は小形丸底壺で外面は口縁ミガキ、胴部横ミガキ、内面は口縁横ナデ、胴部ヘラケズリ。1・4は淡黄褐色、2・3は淡橙褐色～淡黄褐色。

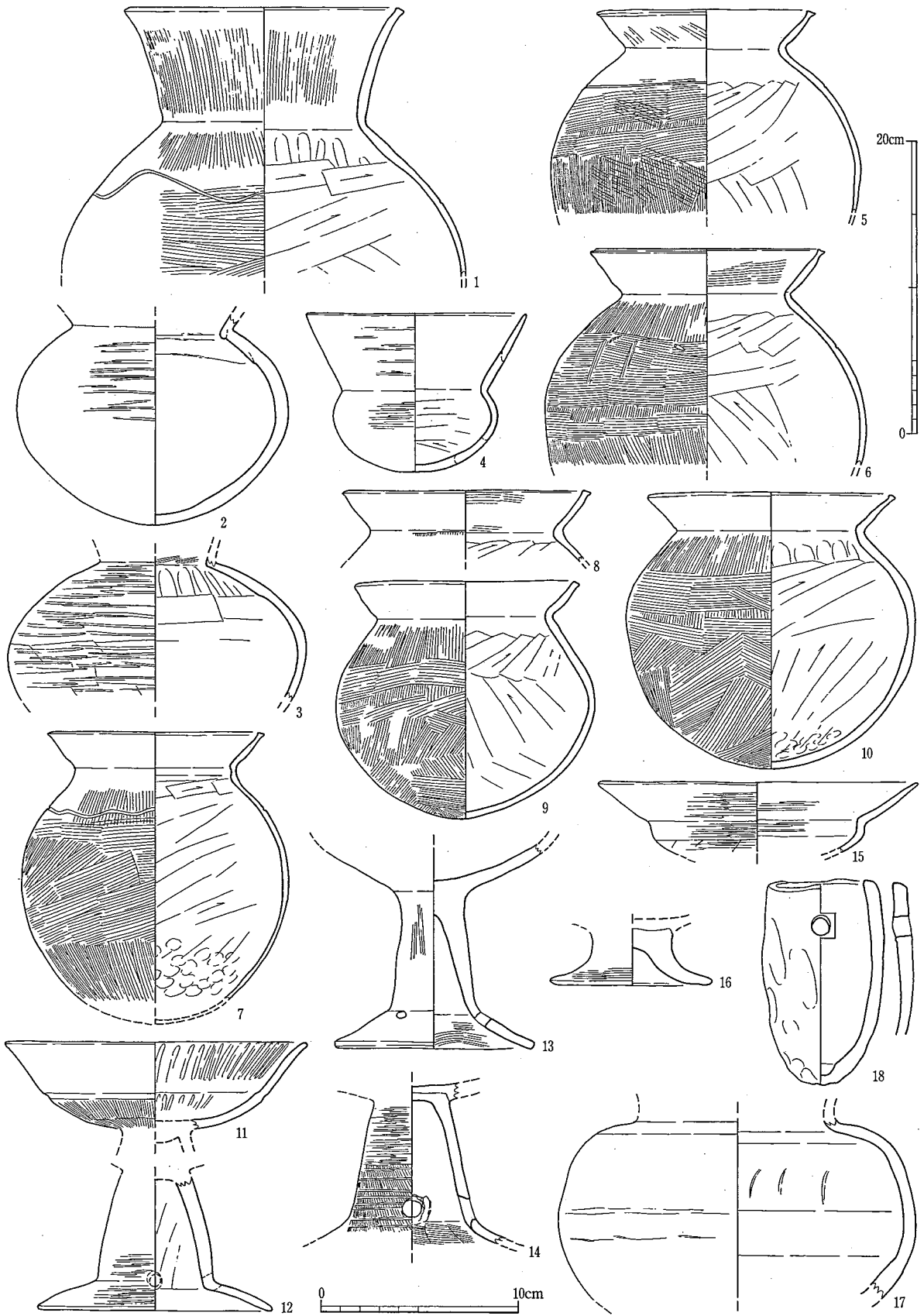
5～10は布留系甕で、9・10は小形に属する。総じて口縁部は直線的に外傾し、端部をわずかに外につまみ出すもの(5・6・8・9)、わずかに内につまみ上げるもの(7・10)に分かれる。5は胴部ハケメに先行する粗い左上りタタキが残り、口縁外面にもタタキらしき条痕が観察される。

6は肩部に0・3・6・9時方向に棒状工具による刺突文が施され、7は肩部に波状沈線文が巡る。7・10は下半の斜めハケが肩部の横ハケ後に施される。7は肩部波状文付近より下、9・10は頸部より下に煤が厚く付着する。9は胴中位の二次加熱が顕著。橙褐色の5以外は淡黄褐色。

11～14は高杯である。11は杯部片で外面は底部縦ハケ、口縁部ケズリ後横ナデか。内面縦ミガキ。12は脚部片で外面横ミガキ、脚柱部内面ケズリ後ナデか。内側に剥離痕を生じない1孔が残る。13は外面～杯部内面にかけて摩滅が顕著で、脚柱部外面に一部縦ハケが残る。脚柱部内面はナデ、脚裾部内面はハケメ。0・4・8時の3方向に軟らかい段階で穿孔している。14は外面縦ハケ後疎らな横ミガキ、内面脚柱部はナデ、脚裾部横ハケ。粘土の乾燥が進んだ段階で穿孔し、内側に剥離した孔が2ヶ所にある。黄褐色の14以外は橙褐色。

15は外反口縁鉢で外底部をヘラケズリ後、内外横ミガキ。16は脚付鉢脚部片である。脚裾外面には横ハケが残る。いずれも橙褐色を呈す。

17は径、傾きがやや不安なもの、無文で短い口縁の付いた丸底の半島系壺となるか。内外ともナデ仕上げであるが、胴部外面に接合痕と思われる水平方向の皺がめぐり、内面には無文当て具痕



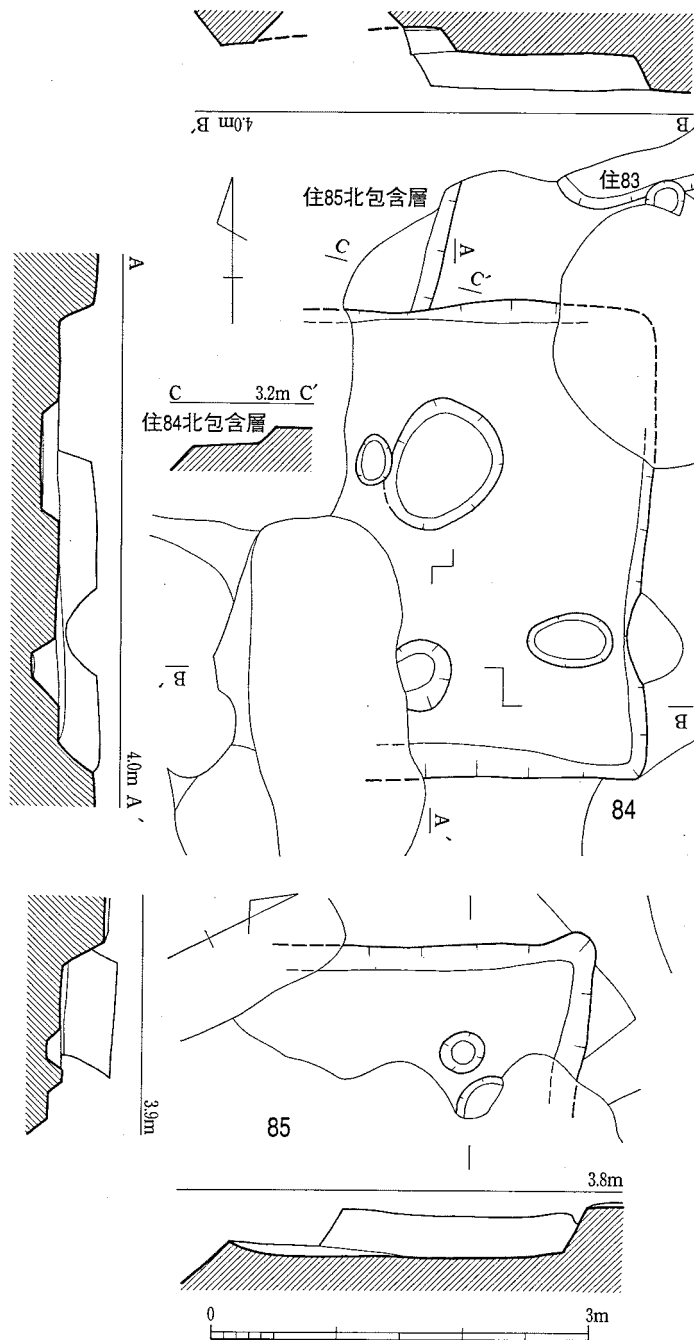
第157図 82号竖穴住居跡出土土器実測図 (1・5~8は1/4、他は1/3)

のような凹みが残る。肩部に灰をかぶり、焼成は陶質で暗灰色を呈す。

18は灰褐色を呈す蛸壺。(重藤)

83号竪穴住居跡 (図版37、第156図)

3北1区、77号竪穴住居跡の北で検出した。北側が攪乱により失われており、検出したのは南壁、南東・南西隅のみ。炉跡は検出してない。土器は少なく、図示できるものはなかったが砥石(第250図48)が出土。(重藤)



第158図 84・85号竪穴住居跡実測図 (1/60)

84号竪穴住居跡 (図版37、第158図)

3北1区中央やや西より、77号竪穴住居跡の西北に位置する。西側に大きな攪乱があり、住居跡西部は検出してない。また東北隅にあたる場所にも攪乱が位置している。そのため検出できた壁は北壁の一部と東南隅付近のみである。平面プランは比較的明瞭であった。床面は半分程度残るが、炉跡も検出してない。なお北に位置する包含層を「84号住居跡北包含層」として遺物を取り上げた。

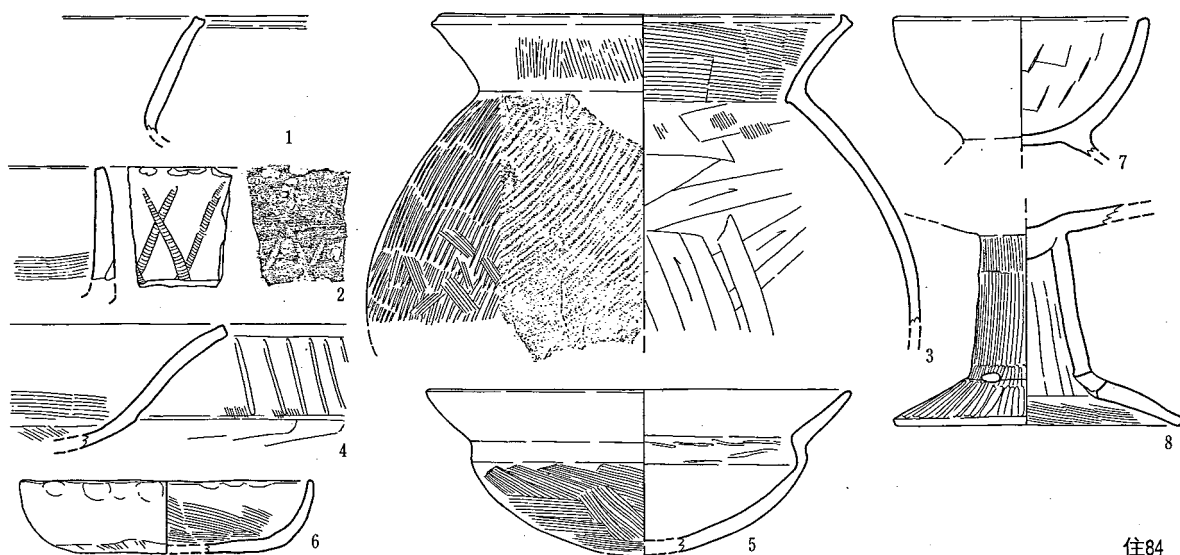
出土土器 (第159図1~8) 1は直口壺の口縁部。2は在地系と考えられる二重口縁壺口縁部で、外面にハケメ工具小口を押付けて施文する。1は淡褐色、2は橙褐色を呈す。

3は庄内系甕。外面右上りタタキ、口縁部内外ハケメ。内面ヘラケズリは頸部まで及ぶ。橙褐色。

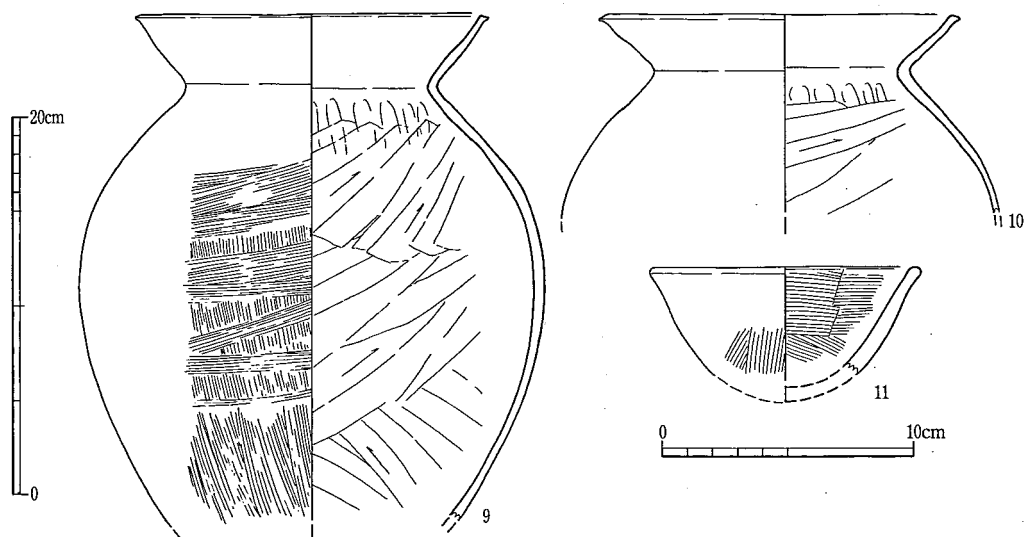
4は在地系高杯口縁部で内面ハケ後ナデ、外面ハケ後ナデで暗文風縦ミガキを施す。淡褐色。

5は外反口縁鉢で外底ハケメ以外はナデで仕上げ。6は平底直口鉢で口縁内外ナデ、外底板ナデ、内底ハケメ。

7は脚付鉢で外面ナデ、内面ハケ後ナデ。これらの鉢はいずれも淡橙褐色を呈す。



住84



住85

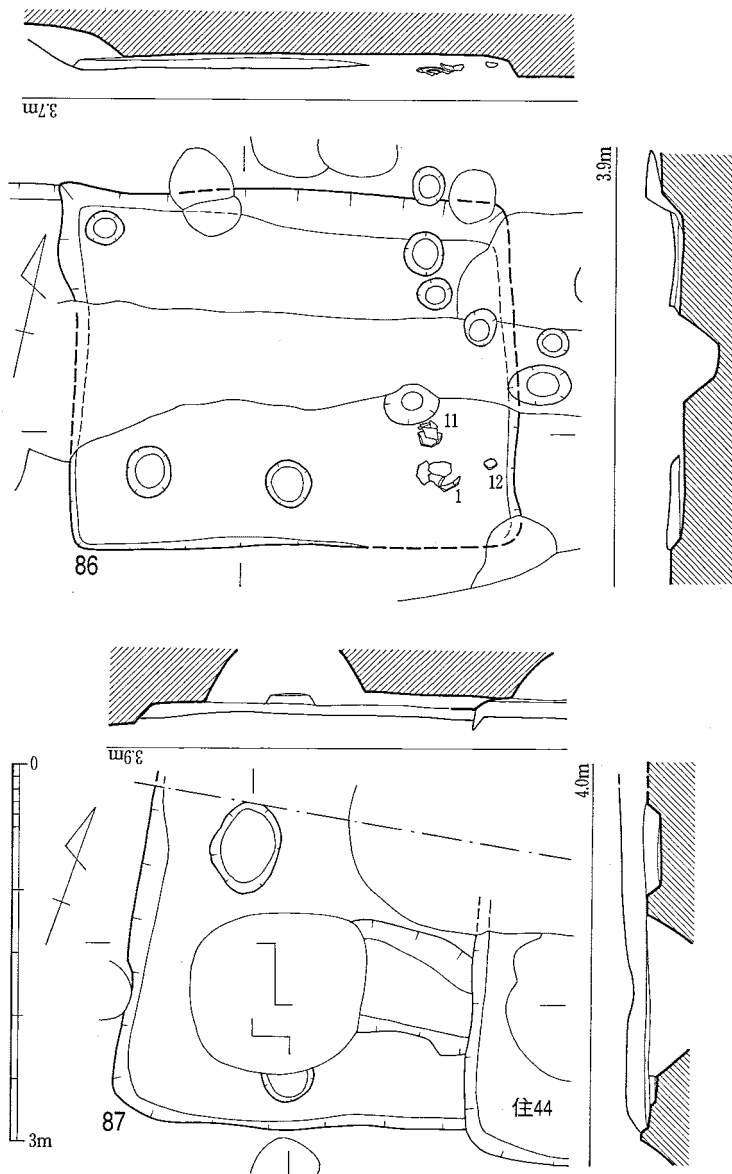
第159図 84・85号竪穴住居跡出土土器実測図（1・2・9・10は1/4、他は1/3）

8は84号住居跡北包含層出土高杯脚部。外面は脚柱縦ハケ、脚裾斜めハケ後縦ミガキ。内面は脚柱横ケズリ、脚裾斜めハケ。脚柱―脚裾の屈曲が明瞭で、そこに3ヶ所穿孔。内面の盛り上がりから、穿孔は粘土の軟らかいうち、恐らく外面ミガキ前、内面ハケメ後に行つたと考えられる。脚上端は杯底部粘土を充填している。淡橙褐色を呈す。（重藤）

85号竪穴住居跡（第158図）

3北1区西よりで検出し、83号竪穴住居跡の西に位置する。ほとんどが攪乱で失われており、検出したのは西北隅付近のみである。現状では東北―西南に振れた方向に主軸をおくが平面プランも心許ない。炉跡も検出されなかった。埋土は黄灰色細砂・粗砂。

出土土器（第159図9～11） 9・10は布留系甕。いずれも口縁が直線的に外傾し、端部を外につまみ出す。10は外面がかなり摩滅し、9・10とも内面ヘラケズリが十分でないため頸部下に先行のナデ上げが見える。11はやや深めの直口鉢で内外ともハケメで仕上げ。いずれも淡黄褐色。（重藤）

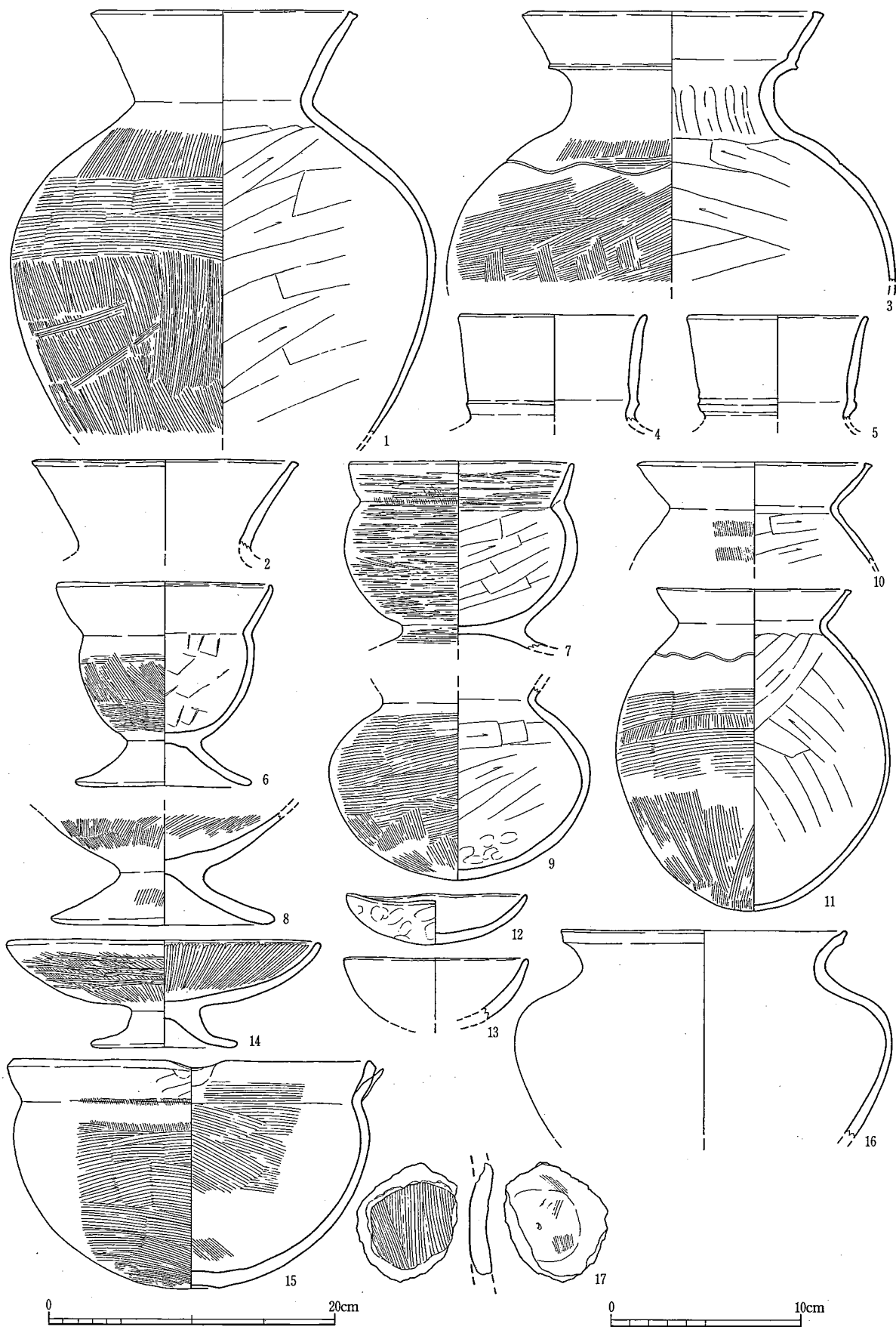


第160図 86・87号竪穴住居跡実測図 (1/60)

86号竪穴住居跡 (図版37、第160図)

3北1区北寄り、79号竪穴住居跡の北に位置する。中央に近世の溝が走り、北壁はその立ち上がりラインとほぼ一致する。現状では東西3.5m、南北2.9mの平面形を呈するが、攪乱などのために若干不安である。炉跡も検出していない。中央攪乱溝より南からまとまって土師器が出土した。住居平面形には不安があるが、他住居跡とも切合わないの出土土器の一括性は高いと思われる。埋土は明褐灰色細砂。

出土土器 (第161図) 1・2は布留系直口壺。いずれも口縁部は直線的に外傾し、端部をわずかに外側につまみ出す。1は肩部横ハケ後胴下部縦斜めハケか。3は山陰系二重口縁壺で、屈曲部外面が突出して、端部はわずかに内に拡張する。肩部に波状沈線文を巡らしている。頸部内面にはナデ上げ痕が顕著。4・5は山陰系中形壺で外面稜は甘い二重口縁をなす。6・7は脚付壺で8も同様の器形か。6は胴部外面ハケ、胴部内面工具によるナデ、口縁部と脚部は横ナデ仕上げ。口縁



第161図 86号竖穴住居跡出土土器実測図（1～3・10・11・15は1/4、他は1/3）

端部の内への肥厚は甕の属性を転用したものか。7は外面～口縁部内面をミガキ仕上げ、胴部内面はケズリ。脚部内面はハケメ後ナデである。8は胴部内外、脚部中位外面にハケメが見える。脚端周辺はナデ仕上げ。9は中形壺胴部である。外面ハケメ仕上げでミガキは見えない。これらの壺は白褐色の4・5、橙褐色の7以外は淡黄褐色を呈す。

10・11は布留系甕である。いずれも口縁は直線的に外傾し、10は端部が外傾する面をなし、11は水平面をなす。11は肩部に波状沈線文を巡らし、外面全体に煤、内底部にコゲが付着する。いずれも淡黄褐色を基調とするが、10は橙褐色の化粧土を施したような部分がある。

12・13は直口小形鉢でいずれもナデ仕上げ。14は山陰系低脚鉢で鉢部外面斜めハケ後横ミガキ、内面縦ミガキ。脚部内外は横ナデ仕上げ。15は外反口縁で深めの胴部をなす鉢。底部は自立する平底で、片口をなす。いずれも淡黄褐色を呈す。

16は陶質に焼成された半島系土器の壺で、やや離れたところに位置する93号住居跡出土の破片と接合した。口縁は丸く外反し、端部が直立する面をなす。内外ともナデで仕上げる。外面には自然釉が付着し、焼成は堅緻で灰白褐色～灰褐色を呈す。

17は円形の土器片である。周囲は接合面より剥離したような状況で、中央が凹んだ形態も特徴的であるが、どのような器種のどこにあたるか考えつかない。淡黄褐色。(重藤)

87号竪穴住居跡 (図版38、第160図)

3北1区北端にあり、東を44号竪穴住居跡に切られる。北側は2南区まで及ぶと考えられるが、2南区では大きな攪乱があるために検出していない。そのため西壁南部と南壁西部を検出したにとどまる。44号住居跡との切合いも不安が残る。床面で攪乱と44号住居跡に端を壊された長楕円形と思われる落込みを検出した。炉跡などは残っていない。埋土は明灰褐色細砂。

出土土器 (第163図1～7) 1は布留系直口壺片、2は山陰系二重口縁壺片である。3は山陰系中形壺で、口縁外面縦ミガキ、胴部外面肩部横ハケ後斜めハケ。屈曲部の稜は明瞭である。4は布留系甕。5は小形の鉢。これらの土器は2が褐色、5が橙褐色を呈し、他は淡黄褐色。

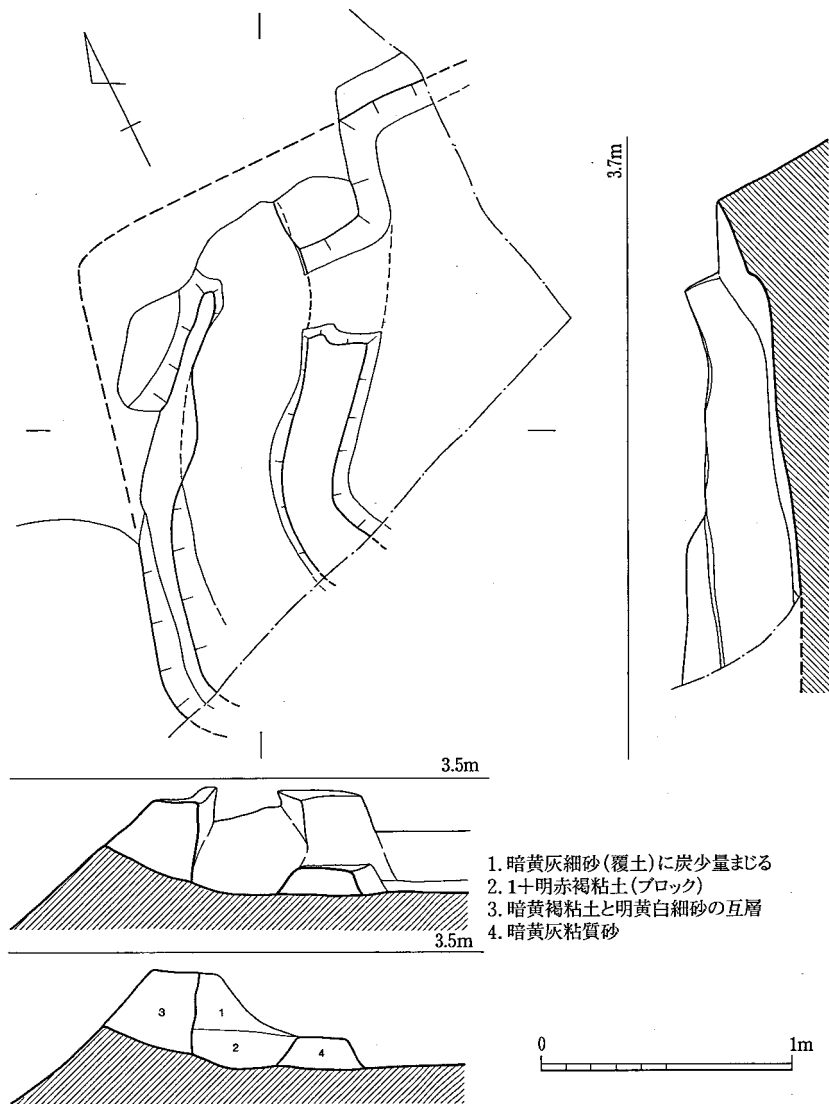
6・7は半島系土器。6は口縁部で端部が面をなす。甘く瓦質に近い焼成で、淡灰褐色を呈す。7は上部細かい平行タタキ後沈線、下部格子タタキの壺胴下半破片。焼成は比較的堅緻で灰褐色を呈す。43号住居跡61の土器に焼成、色調が類似している。(重藤)

88号竪穴住居跡 (図版38、第162図)

3区東端、コの字型に突出した調査区に単独で存在する。ほとんどが調査区外で、住居北西隅を検出したにとどまる。住居は深さ44cmを測る。住居跡北西隅から西壁沿いにのびるカマドの煙道を検出した。

カマド 上述のように住居北西隅に位置する。南側は調査区外のため煙道部しか調査できなかった。平面プランは煙道部が西壁にそってのび、焚口が東に直角におれるL字状のカマドになると考えられる。袖は住居内側部分は砂と粘土をまぜた粘質砂で構築し、住居壁側は版築状に砂と粘土交互に積んだもので構築している。煙出は攪乱で壊されているため、住居の外までのびるか不明。第163図9・13はカマド内出土の土器である。

出土土器 (第163図8～14) 8・9は山陰系二重口縁壺である。8はやや外傾する口縁部をもつ。



第162図 88号竪穴住居跡実測図 (1/30)

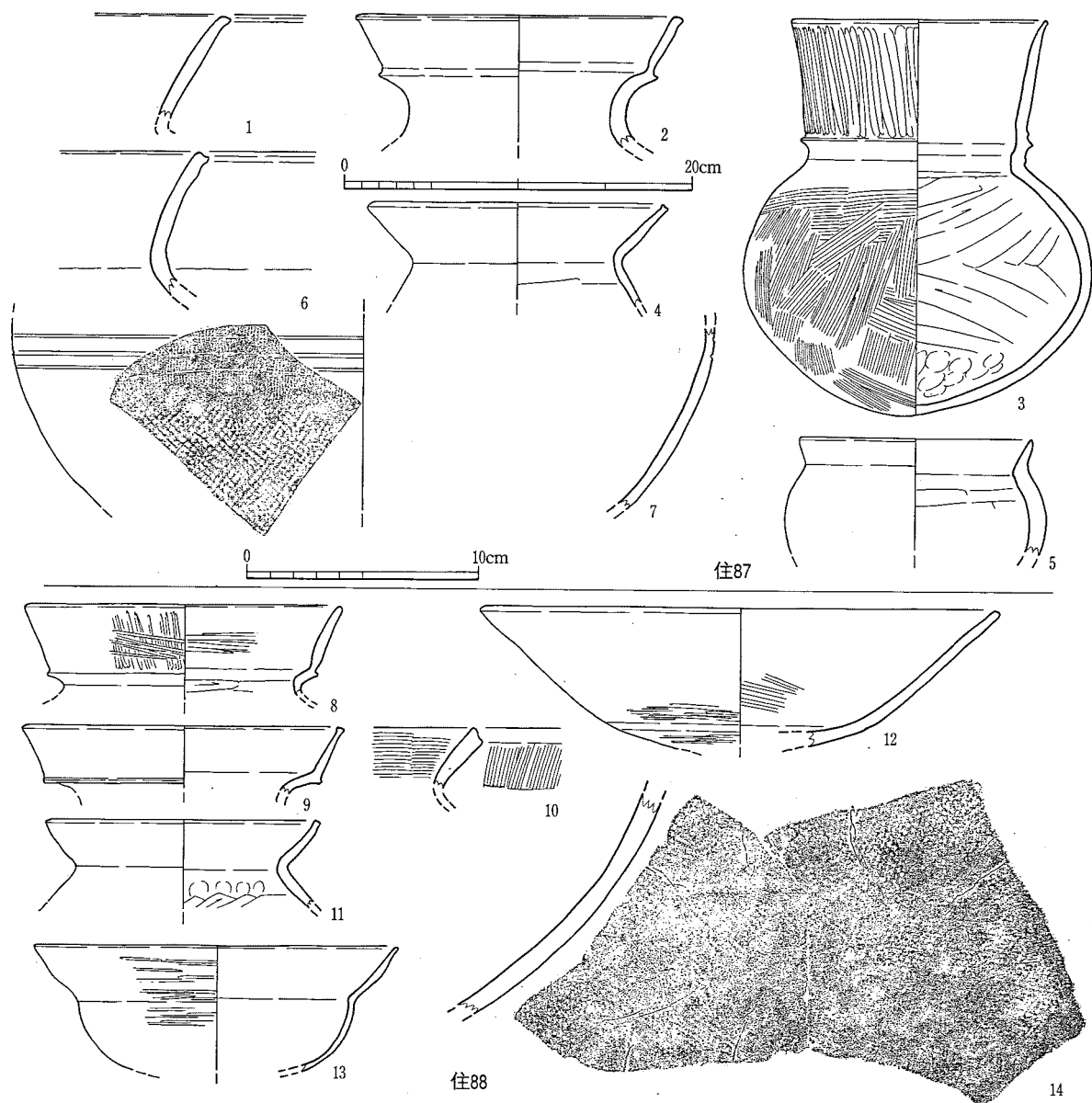
外面は縦ミガキのち横ミガキ、内面は横ミガキを施し、内面頸部までヘラケズリを行う。いずれも淡黄褐色を呈す。

10は在地系の甕か。口縁端部は面取りを行い、内外面はハケで調整する。11は布留系の甕である。外面には煤が付着する。いずれも淡黄褐色を呈す。

12は高杯の杯部である。外面は横ミガキ、内面はハケのちミガキを施すか。内外面にはスリップ状に化粧土をかける。橙褐色を呈す。

13はやや内湾する口縁をもつ鉢である。器壁は薄く、外面は横ミガキ、内面は磨滅のため調整不明。内外面にはスリップ状に化粧土をかける。橙褐色を呈す。

14は半島系土器である。胴部下位の破片で、外面は格子タタキ、内面は横ナデを施す。胎土は細砂を多く含み、焼きは軟質である。外面には黒斑あり。淡黄褐色を呈す。(大庭)

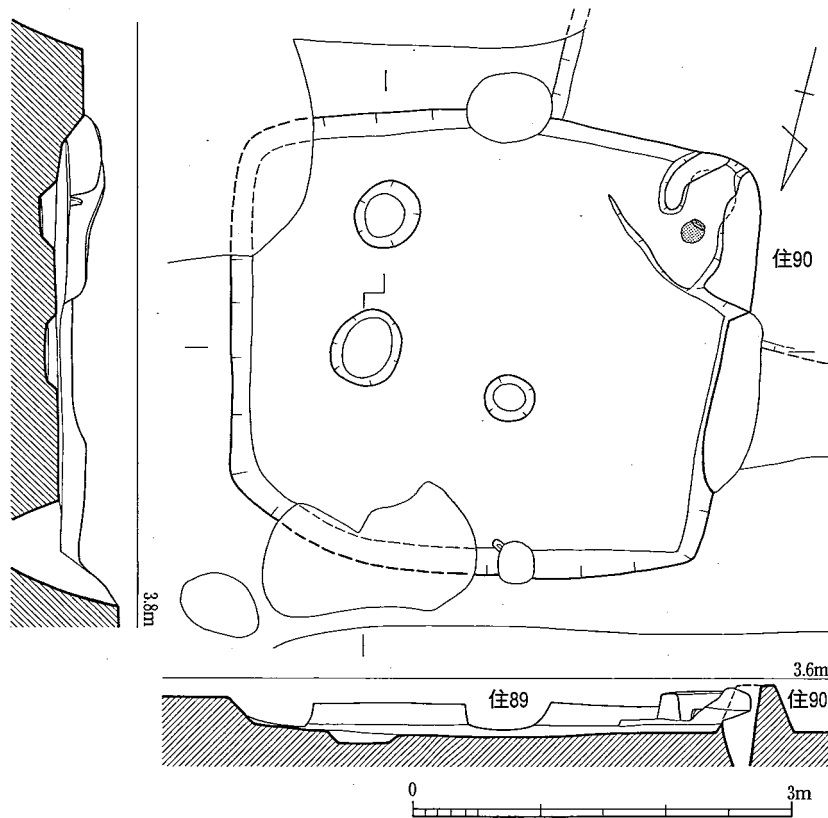


第163図 87・88号竪穴住居跡出土土器実測図（1・2・4・9～11は1/4、他は1/3）

89号竪穴住居跡（図版38・39、第164図）

3北1区北西隅、131号竪穴住居跡北側に位置し、90号竪穴住居跡を切る。本住居跡の東南隅、北壁の一部が大きく攪乱を受けている。埋土は暗黄灰色細砂で、南北約3.7m、東西約4.1m、深さ約30cmの方形住居である。本住居南西隅にカマドを検出した。覆土から多くの土器、鉄鏃1点（第237図6）、刀子2点（第237図26・29）、凹石（第244図49）が出土した。また本住居跡と90号住居跡の上層からも台石（第244図50）が出土した。

カマド（第165図） 住居南西隅に位置する。袖は西壁に沿って短くのびるタイプで、22号竪穴住居跡のカマドの形態と類似する。支脚は石製で、前面は火を受けており、硬化面を形成する。焚口幅は38cm、奥行68cm、袖の高さは最も残りのよい部分で22cmを測る。カマド床面は住居床面より5cm高い。前面には焼土が堆積する。袖は粘土のみで構築し、天井部の一部が残る。焚口は住居床面を掘りくぼめ、版築状に粘土と砂を交互に押し固め、住居床面とほぼ同じレベルにする。右袖はカ

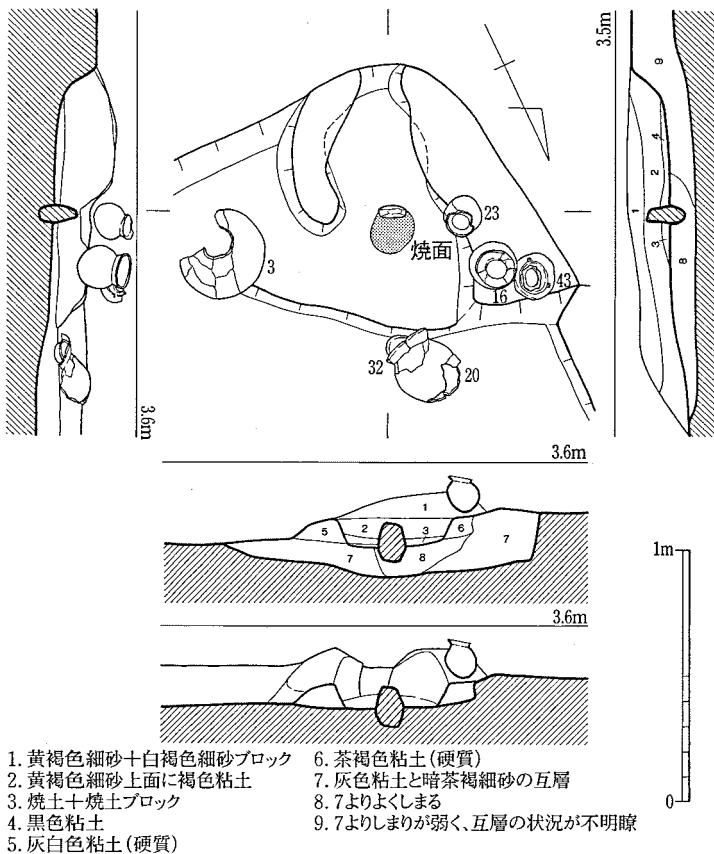


第164図 89号竪穴住居跡実測図 (1/60)

マド廃棄の際に壊され、その上には土器 (16・23・43) が置かれている。カマド前面から土器が出土した (3・20・32)。煙出は住居の外にのびている。

出土土器 (第166~168図) 1は在地系の壺か。やや外傾する口縁部で、肩は張らず、寸胴になるか。外面は縦ハケ、口縁部内面は横ハケを施す。内外面とも粘土継ぎ目痕が明瞭に残る。2・3は畿内系直口壺。2の口縁端部は面取りする。3は尖底で、口縁端部が欠失する。胴部外面は縦ハケのちナナメハケ、内面胴部は縦ハケ、口縁部外面は縦ハケのち横ナデ、内面は横ハケ。器壁は厚い。4~10は山陰系二重口縁壺である。4はハの字状に開く口縁。5は直立する口縁部に、端部を少し外反させる。口縁部外面は凹凸が顕著である。7は口縁部をやや内傾させる小型の壺である。口縁端部を外反させる。9は内傾する口縁部をもつ、珍しい形態の壺。口縁部と頸部の境に受け口状の突帯を巡らす。肩にはハケ工具による綾杉文を施し、のち2条の凹線を入れる。内面は頸部までヘラケズリ。10は口縁端部を外につまみ出す。外面には横ハケのちナナメの粗いハケ。内面は頸部までヘラケズリ。11~14は畿内系小型精製丸底壺。11の外面下部はケズリのち横ミガキ、内面は口縁部のみ横ミガキ。12の外面は横ミガキ、内面は口縁部のみ横ミガキを施す。13は短く外傾する口縁部をもち、内外面に粗いミガキを施す。外面下部は煤が付着する。14の外面下部はケズリのちミガキ、内面は口縁部のみ横ハケを施す。1は灰黄褐色、3・8・11~14は橙褐色、他は黄褐色。

15~21は布留系の甕である。15は小型の甕である。16は口縁端部を外につまみ出す。肩に1条の凹線を施す。胴部中位は二次加熱が顕著に見られ、肩には煤が付着する。17は口縁部外面にハケ工具痕がある。肩に黒斑あり。18~20は内面頸部近くまでヘラケズリを行う。18は肩に6条の凹線文



第165図 89号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

を施す。19は短く外反する口縁で、端部を面取りする。胴中位以下は縦ハケのち横ハケを行う。20は長胴の甕である。肩に1条の凹線を施す。胴部に黒斑あり。21は胴部外面に工具痕が確認できる。内面は橙褐色を呈し、スリップ状に化粧土をかけたものか。口縁部から胴部上位には黒斑がある。22は在地系の小型甕である。弱く外傾する口縁部で、内面は頸部近くまでヘラケズリを行う。23・24は布留系の小型甕である。23はやや厚い口縁部をもつ。胴部には二次加熱痕と煤が付着する。24は肩に1条の波状文を施す。胴部に黒斑がある。25は畿内5様式系の甕である。外傾する長めの口縁部で、尖底である。外面は粗いハケで調整し、内面は頸部近くまでヘラケズリを行う。17・22・25は淡橙褐色、24は褐白色、

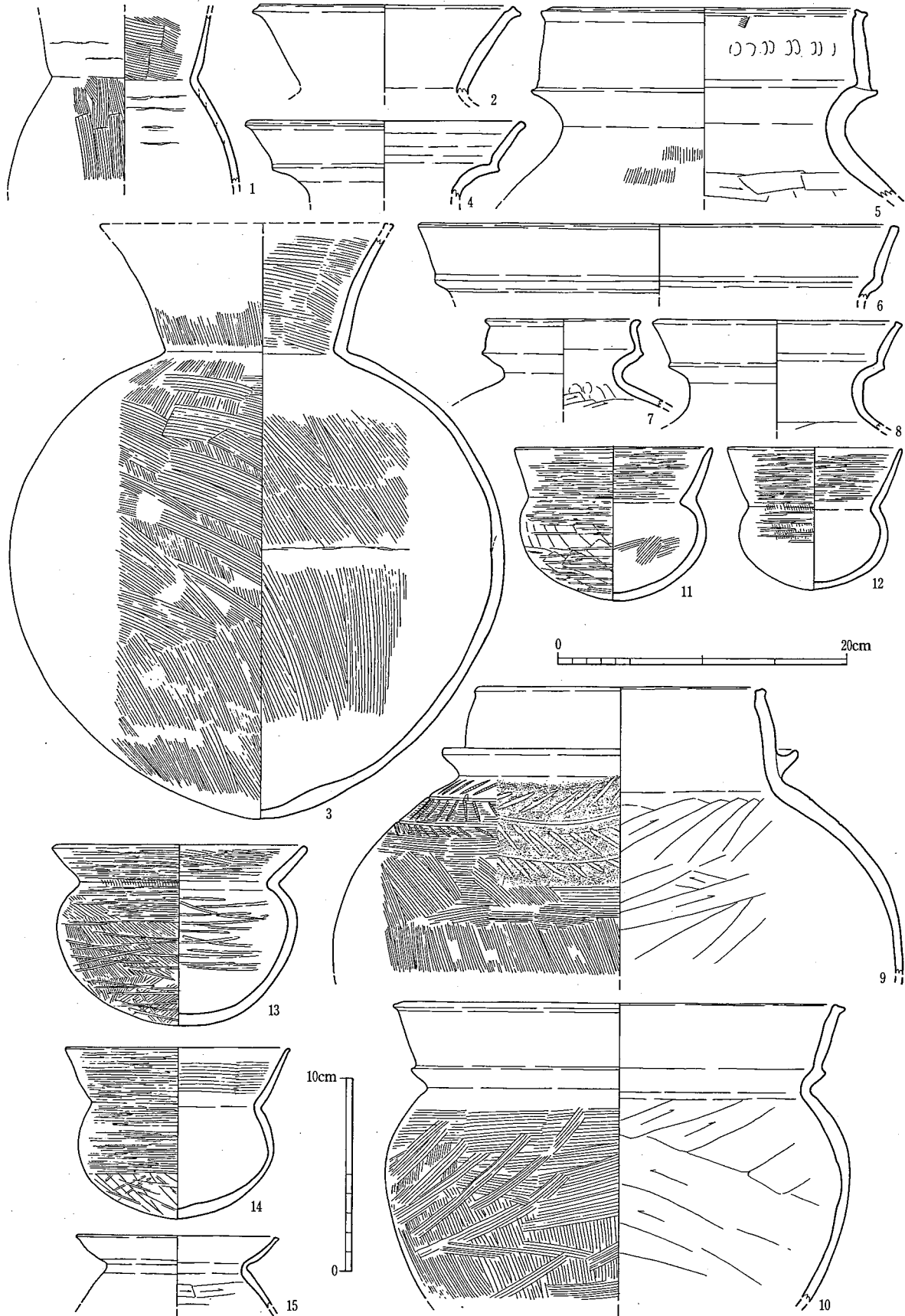
他は淡黄褐色を呈す。

26は杯部下部に段をつくりだす精製の高杯である。外面は横ミガキ、杯部内面は暗文風の縦ミガキを施す。脚部に半乾燥段階で外から2ヶ所穿孔を施す。27は高杯脚部で半乾燥段階に外から2ヶ所穿孔を施す。焼成はやや甘い。26は橙褐色、27は茶褐色を呈す。

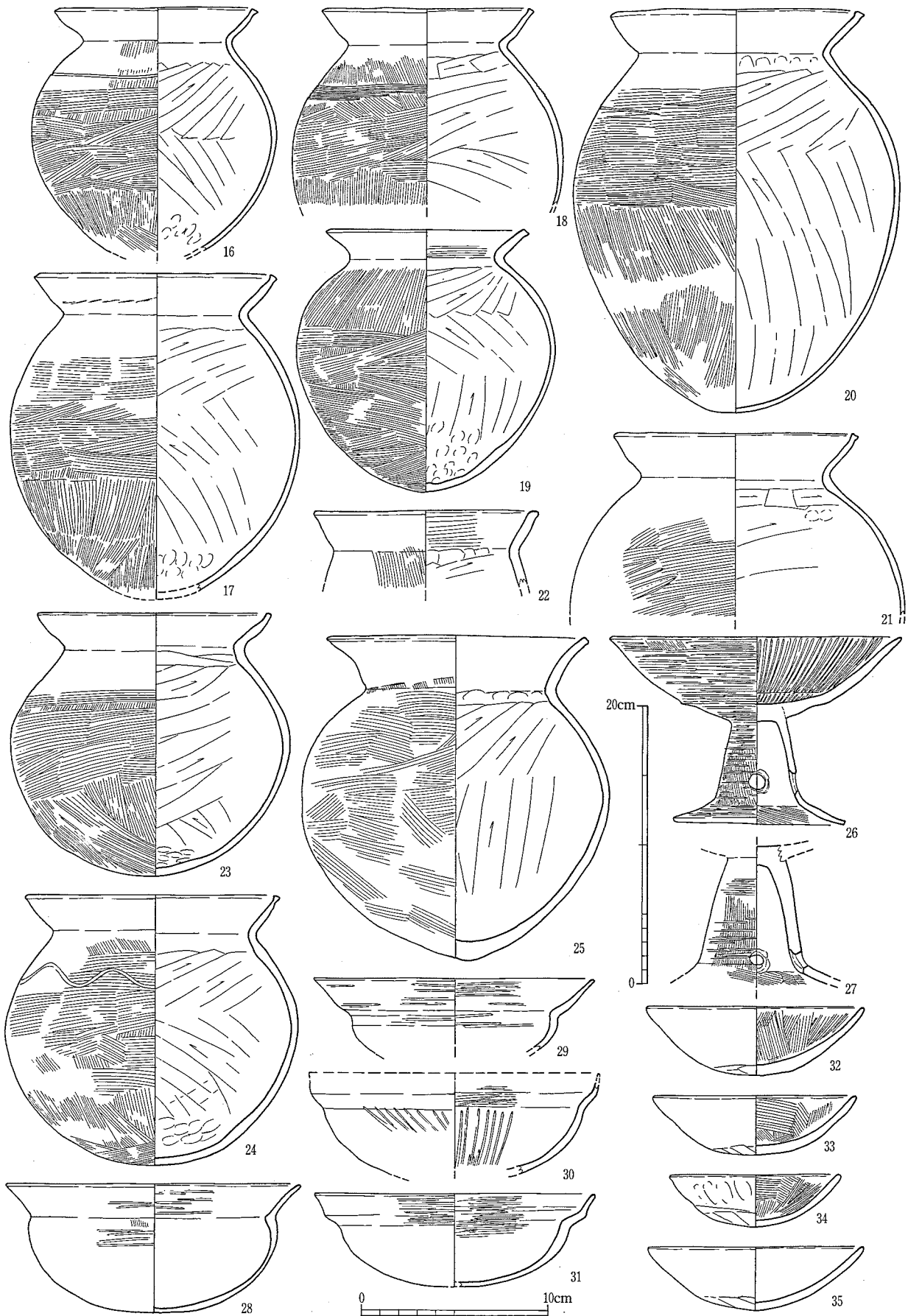
28・29は外傾する口縁部をもつ鉢である。28の外面は横ミガキ、内面口縁部のみ横ミガキを施す。また、外頸部下にミガキに先行するタテハケ残る。29は内外面ミガキを施す。30・31は有段の鉢である。30は直立する口縁部をもち、胴部内外面は縦ミガキ、口縁部内面は横ミガキを施す。31の内外面は横ミガキを施す。32～36は浅い鉢である。32～35は外面底部はケズリを行い、内面はハケで調整する。34は二次加熱が見られる。36は外面は粗いミガキを行う。37は粗製の深鉢である。外面は粗いハケとナデで調整し、内面は縦のヘラケズリを行う。胎土は粗い。38～40は山陰系脚付鉢である。39は杯部内外面に縦ミガキを施し、脚部内面はハケ調整を行う。脚部内外に煤が付着する。40は外面に横ミガキを施す。28・29・31・36・40は橙褐色、30・39は灰黄色、33は暗褐色、35は褐白色、他は淡黄褐色を呈す。

41は畿内系小型精製器台である。口縁端部は短く外反させる。外面は横ミガキ、内面は暗文風の縦ミガキを施す。42・43は山陰系鼓型器台である。42の外面は暗文風の太い縦ミガキ、内面は太い横ミガキを施す。43の外面は横ナデ、内面上位は横ミガキ、下位はケズリを施す。焼成前に外から3ヶ所穿孔を施す。43は淡黄褐色、41・42は橙褐色を呈す。

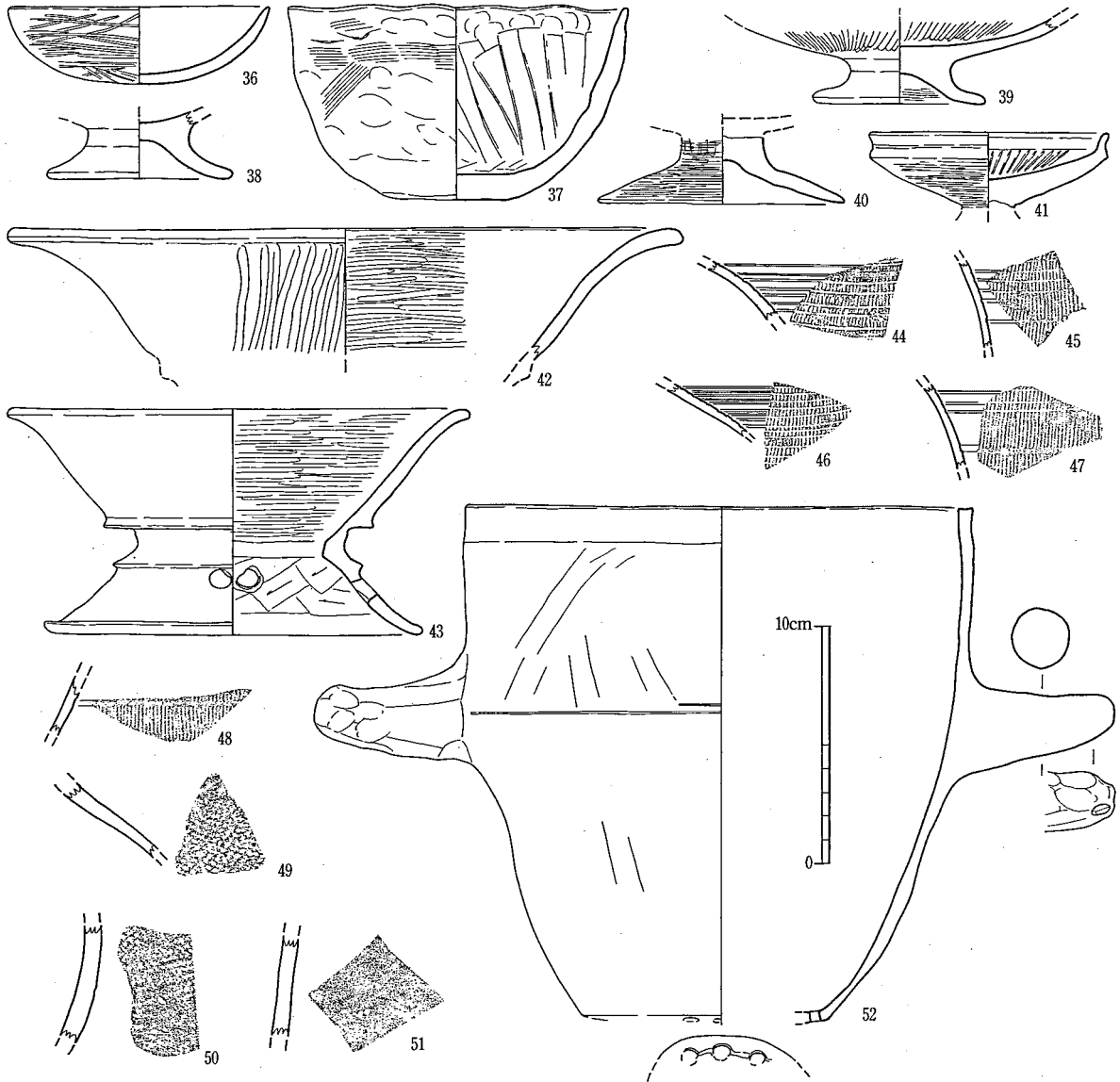
44～52は半島系土器である。44～48は外面は平行タタキのち凹線、内面は横ナデを施す。49・50



第166図 89号竖穴住居跡出土土器実測図 (1) (11~14は1/3、他は1/4)



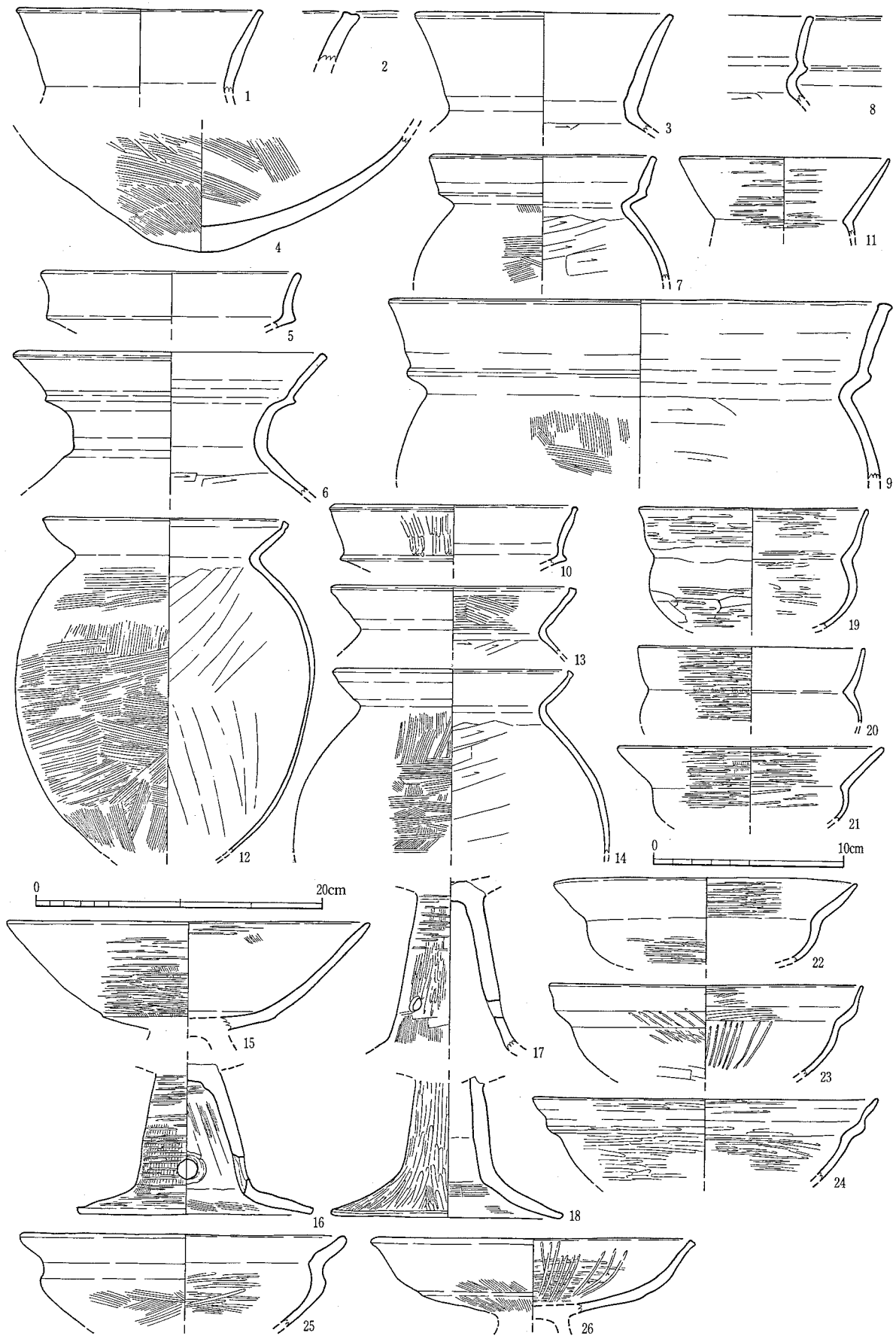
第167図 89号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (16~21は1/4、他は1/3)



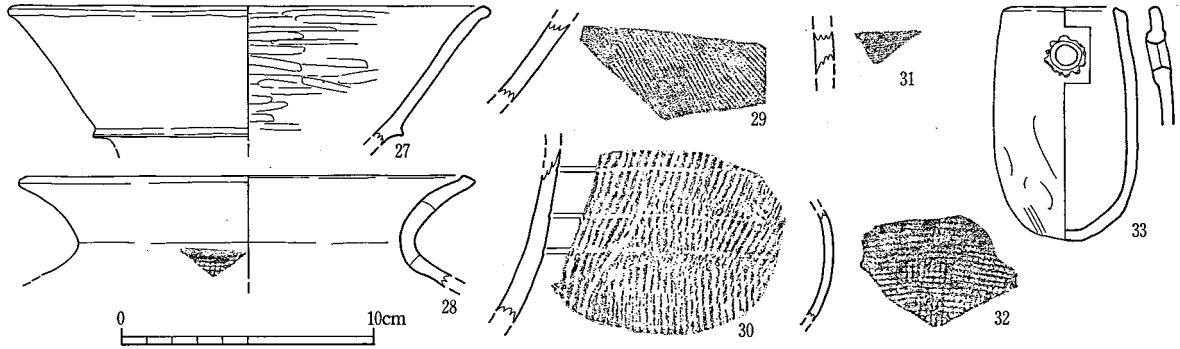
第168図 89号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/3)

は軟質土器で、他は陶質土器に含まれるが、45～47・51の焼成は瓦質に近い。44・46は肩の破片で、密な凹線を施す。45・47は胴部片である。45は密な凹線を施す。48は胴部下位の破片である。49は肩の破片で、外面は上位は横ナデ、下位は格子タタキ、内面はケズリを施す。50は天地上下ともに自信がない。下部は格子タタキのちナデを施す。51は内外面ナデ調整を施す。44・48・51は灰褐色、45～47は灰黄褐色、49・50は淡黄褐色を呈す。52は軟質の甌である。底部はほとんど欠失する。口径20.9cm、器高21.6cmを測る。口縁端部はナデで面取りし、胴部外面はケズリのちナデで調整し、内面は縦ナデを施す。胴部中位に一部2条となる浅い凹線を巡らす。底部は孔が3ヶ所しか残っていない。焼成前に外から棒状工具で穿孔する。把手は胴部中位に2ヶ所つき、把手端部には成形の際の棒状工具による刺突が残る。胎土は精良で、薄茶色を呈す。形態、色調、焼成は22号住居跡出土品とほぼ同一である。

89・90号竪穴住居跡上層土器 (第169・170図) 1～3は、畿内系直口壺である。2は二重口縁壺の可能性もある。3は口縁部内外面に煤が付着する。4は在地系の大型甕の底部である。尖底で、



第169図 89・90号竪穴住居跡上層出土土器実測図(1) (8・10・11・15~26は1/3、他は1/4)



第170図 89・90号竪穴住居跡上層出土土器実測図 (2) (1/3)

外面はハケのち粗いミガキを施す。5～10は山陰系二重口縁壺である。5はゆるやかに外反する口縁部で、内外面に煤が付着する。6は口縁部がハの字状に開く。7～9は内面頸部近くまでヘラケズリを行う。8は外面に煤が付着する。9は大型の平底鉢の可能性ある。外面は赤褐色を呈し、スリップ状に化粧土をかけたものか。10は外面に太い縦ミガキを施す。外面に煤が付着する。11は畿内系の小型精製丸底壺である。長い口縁部をもち、磨滅するが、内外面にミガキを施す。外面に煤が付着する。3・5・9・11は橙褐色、3は灰橙褐色、4は暗褐色、他は白黄褐色～黄褐色を呈す。

12～14は布留系の甕である。いずれも口縁端部を上方につまみ上げ、内面頸部近くまでヘラケズリを施す。12は長胴の甕で、器壁は薄い。外面は胴部下部まで横ハケを施す。口縁部に黒斑あり。13の外面は煤が付着する。13は灰黄色、他は淡黄褐色を呈す。

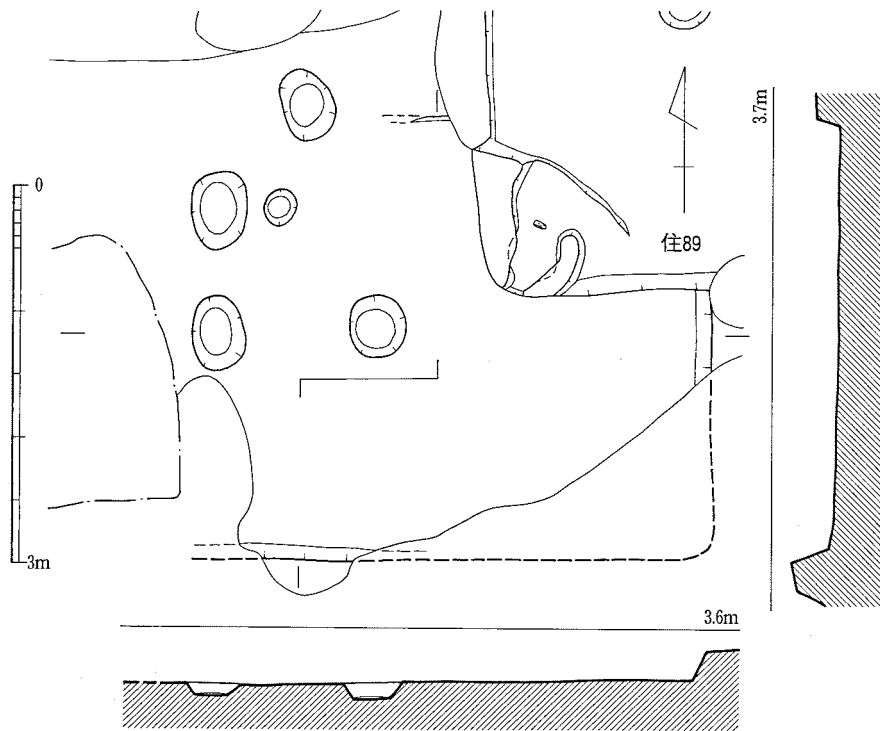
15～18は高杯である。15は杯部下位に段をつくり出し、磨滅するが、内外面にミガキを施す。16の内面はハケ工具でナデ上げる。半乾燥段階に外から2ヶ所穿孔を施す。杯部との接合面には、刻み目を施し、接合しやすくする。17は脚柱部外面に縦ミガキを施す。焼成前に外から3ヶ所穿孔を施す。18は在地系の高杯である。外面は縦ミガキ、内面はハケのちナデを行う。15は黄橙色、18は白黄褐色、他は橙褐色を呈す。

19～22は口縁部が外傾する鉢である。19は内外面にミガキを施す。20は内湾する口縁部をもつ。23・24は有段の鉢である。23はやや外傾する口縁をもち、外面はナナメミガキ、底部近くは横ケズリを施す。内面は暗文風の縦ミガキ、口縁部は横ハケを施す。24は口縁端部を外反させ、内外面は横ミガキを施す。25は口縁が短く外反する口縁部をもつ鉢である。口縁端部を丸くおさめ、器壁が厚い。内面はミガキを施す。26は山陰系の脚付鉢である。杯部下部に凹線状に段を作りだす。内面は横ミガキのち暗文風の縦ミガキを施す。21・26は白黄褐色、24は茶褐色、他は橙褐色を呈する。

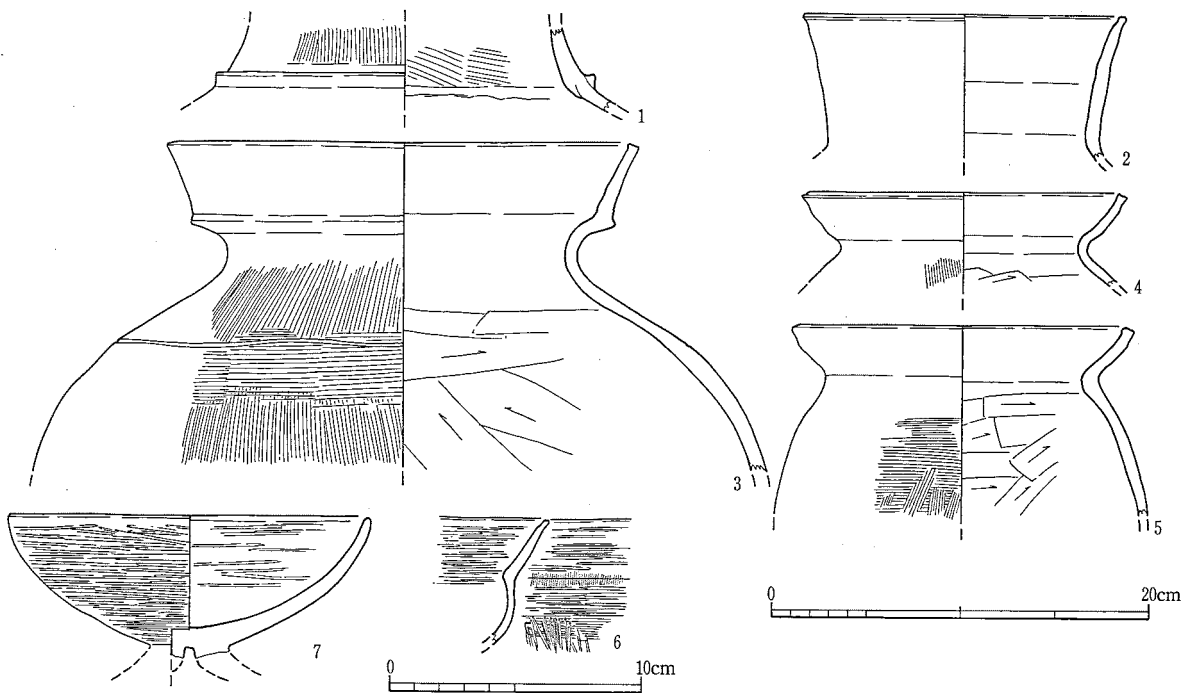
27は山陰系鼓型器台で、内面は太い横ミガキを施す。淡橙色を呈す。

28～32は半島系土器である。30は軟質であり、他は瓦質に近い焼きである。28は甕口縁部で、肩外面には格子タタキを施す。29は胴部片で外面は平行タタキで調整する。30は胴部片である。外面は縄蓆文タタキのち間隔が広い凹線を巡らす。31は天地に自信なし。内外面ナデ調整を行う。32は胴部片である。外面は格子タタキで調整する。28・31は灰白色、29は灰黄褐色、30は黄褐色、32は灰褐色を呈す。

33は蛸壺である。焼成前に外から穿孔を施す。淡灰褐色を呈す。(大庭)



第171図 90号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第172図 90号竪穴住居跡出土土器実測図 (6・7は1/3、他は1/4)

90号竪穴住居跡 (図版39、第171図)

89号竪穴住居跡の西南で検出した。89号住居跡に北東部を切られ、南部は攪乱により大きく失われている。北西部も削平を受けており、壁を検出していない。壁を検出できたのは東壁・北壁・南壁のそれぞれ一部のみである。そのため平面形には不安が大きい。当初、89号住居跡との切合いが

不明で、どちらに帰属するか不明の遺物を「89・90号住居跡上層」出土として取り上げたが、大半は89号住居跡に伴うものである。確実に本住居跡に伴うと考えられる土器は少ない。埋土は灰褐色細砂が主体。

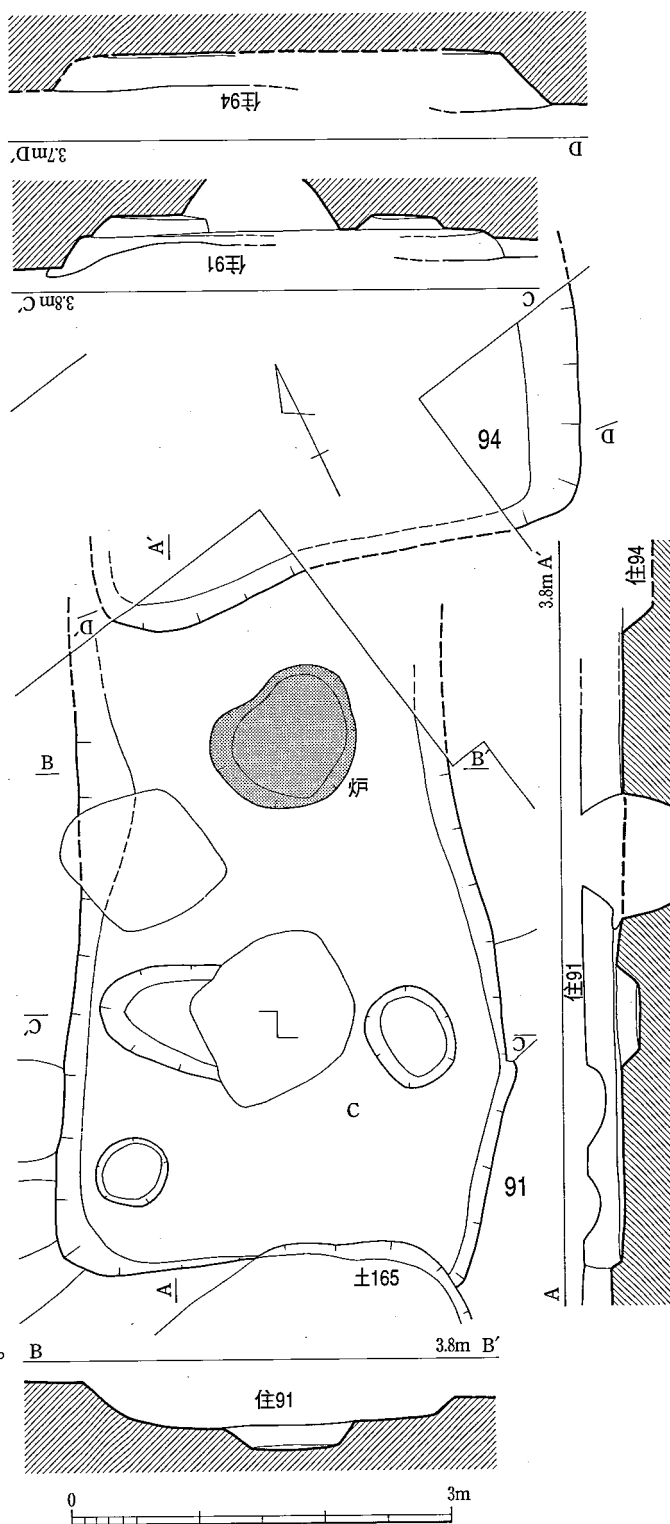
出土土器 (第172図) 1は在地系壺頸部片で断面三角形突帯を巡らす。2は布留系直口壺口縁片、3は山陰系二重口縁壺である。3は肩部に1条の直線沈線文を巡らし、上下の縦ハケを切って肩部に横ハケが施される。4・5は布留系甕で、5は口縁の内湾が強い。6は外反口縁鉢である。外面は底部近く不定方向ミガキ、口縁部内外横ミガキで仕上げる。頸部にはミガキに先行する縦ハケが残る。7は脚付鉢である。内外をミガキで仕上げ、底部に軸受け痕がある。1黄白色、2黄橙色、3褐色、4灰黄褐色、5～7橙褐色を呈す。(重藤)

91号竪穴住居跡 (図版39、第173図)

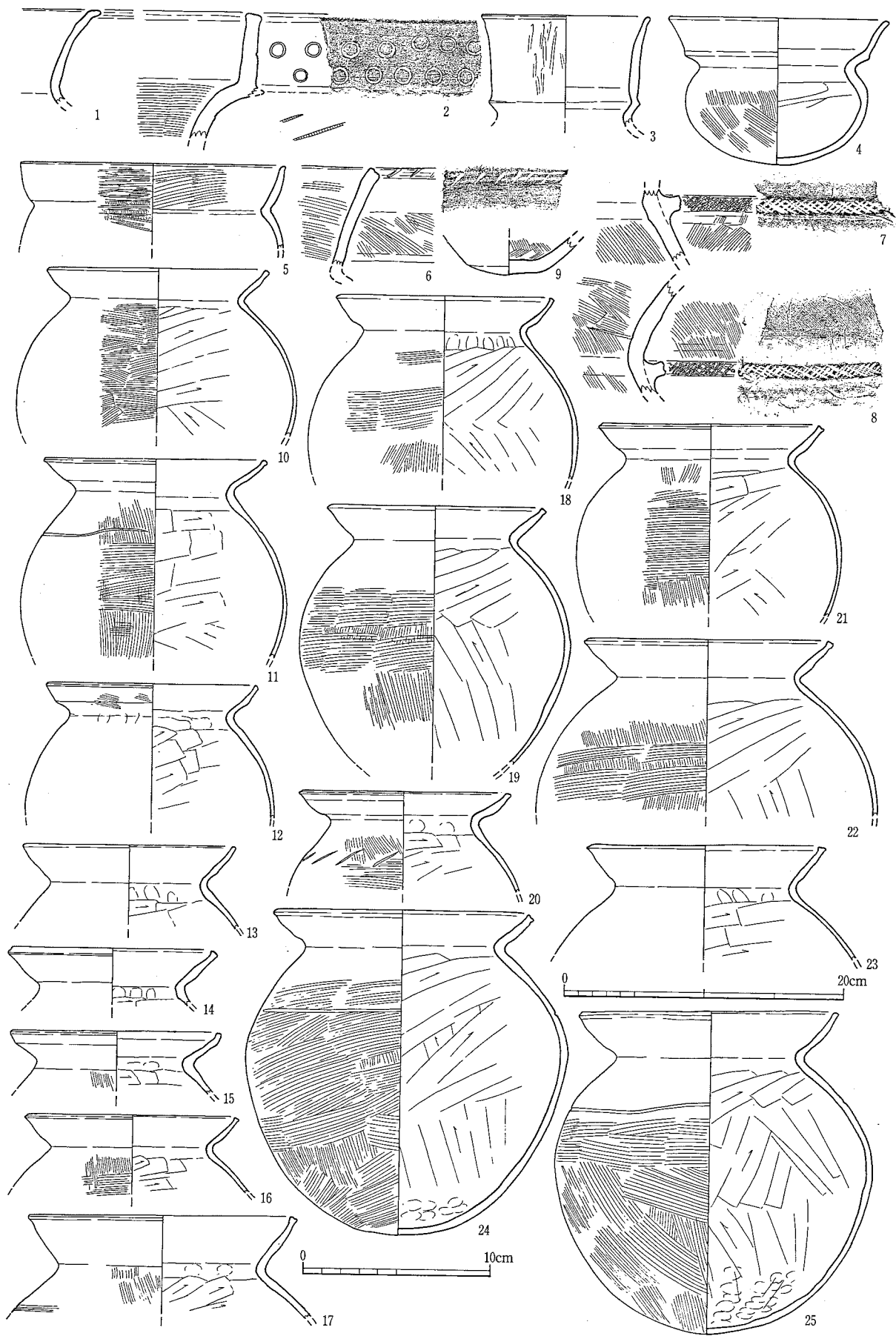
3南3区の北東寄りで見出したものである。北東部を94号住居跡に切られ、南東部を165号土坑に壊されているため南壁・東壁の平面形がいびつとなっているが、南北に長い長方形を呈している。南北は5.0mを越え、東西3.0m前後である。南壁から4.2mを測る地点の床面に直径1.0mを越える大形の炉跡がある。遺構検出当初は94号住居跡との切合いに気づかず、両者を一連のものとして掘り下げてしまったが、出土遺物帰属関係の大きな混乱には至らなかった。したがって一

括性は比較的良好と思われる。土器の他に砥石(第250図51)も出土。覆土は黄褐色細砂が斑状に混じった褐灰色細砂で、炉跡埋土は褐色細砂であった。

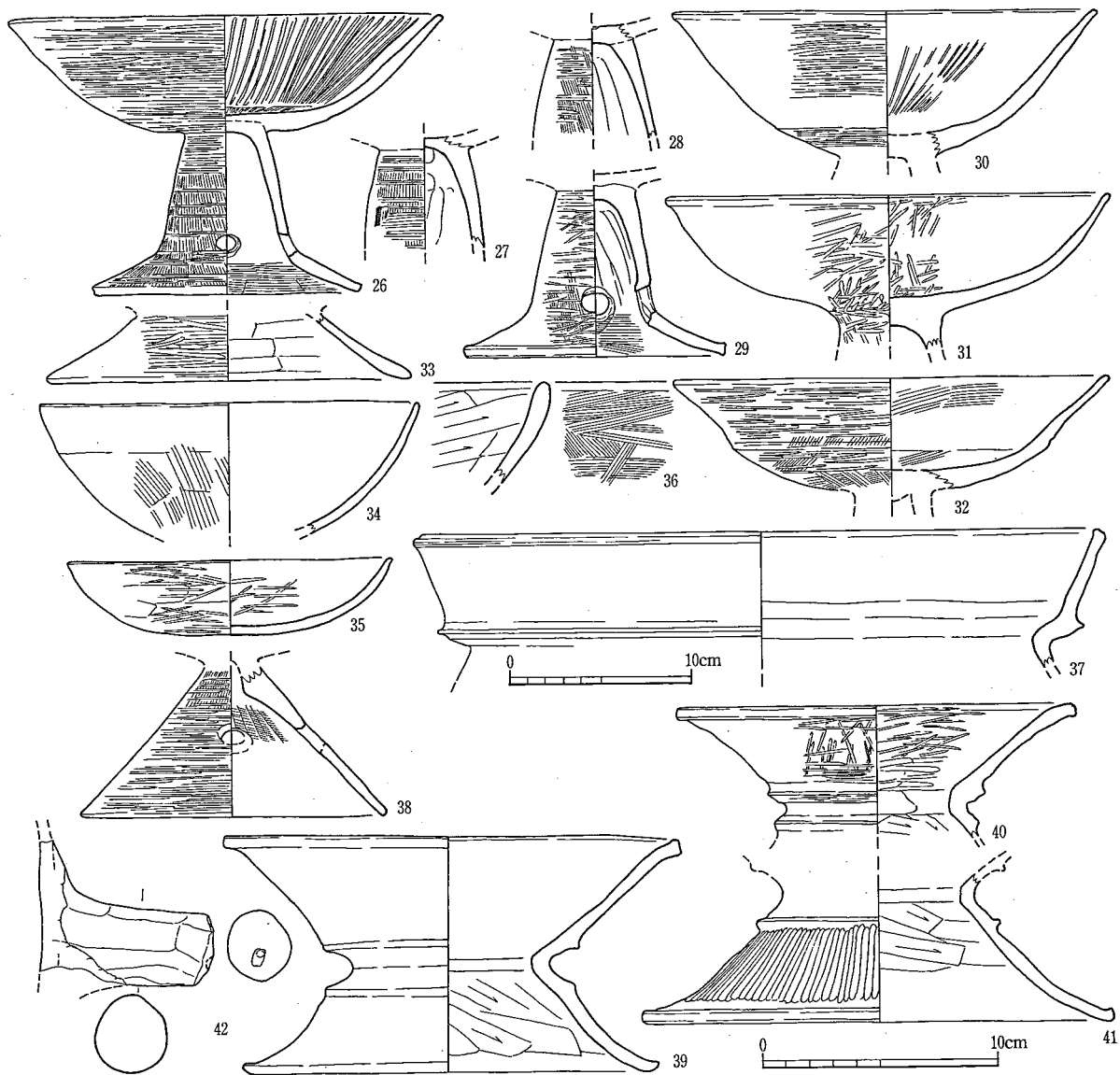
出土土器 (第174・175図) 1は直口壺口縁片で端部が外に拡張。2は大形の山陰系二重口縁壺口縁部。口縁外面に竹管文、頸部外面にハケメ小口による刻み目を施す。内面煤付着。3は山陰系中



第173図 91・94号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第174図 91号竪穴住居跡出土土器実測図(1) (3~5・24・25は1/3、他は1/4)

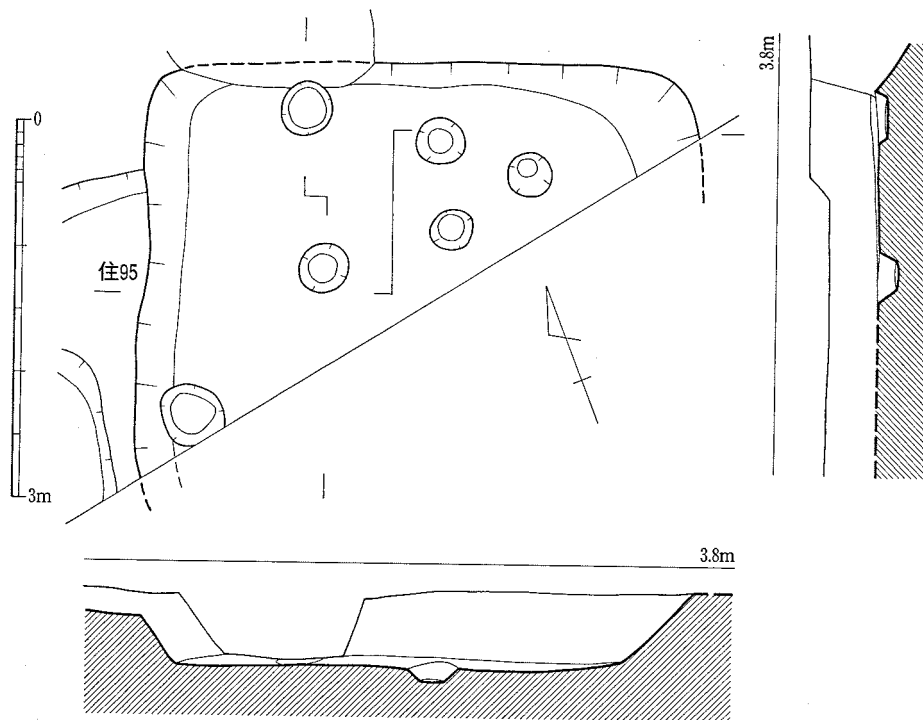


第175図 91号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (37は1/4、他は1/3)

形壺。二重口縁で口縁外面に縦ミガキ。4は二重口縁小形丸底壺で、胴部外面ハケ、口縁内外横ナデ、胴内面ケズリ後ナデ。5は鉢としても良いが小形丸底壺としてここに示した。頸部にしまりがなく、口径も大きい。外面は縦ハケ後横ミガキ、内面は口縁部横ハケ、胴部ナデ。黄橙色の5以外は淡黄褐色～灰黄褐色。

6は在地系大甕口縁部。口縁端部に線刻の刻み目。7・8は在地系大甕頸部片であるいは同一個体か。いずれも頸部に高い断面コの字形突帯を巡らし、頂部にはハケメ工具を交叉させた刻み目。9はレンズ状底を呈する甕底部で外面はナデ仕上げ。6・9は灰黄褐色、7・8は橙褐色。

10～25は布留系甕で、24・25は小形品。口縁部は直線的に外傾するものが多いが、内湾の強いもの(12・15・18・20)もある。15は横ナデが強く特徴的な口縁形態。口縁端部は外傾する面をなすものが主体であるが、12・13・15は丸くおさめている。20は外に、14・23は上方につまみ出す。肩部には11・24・25に直線沈線文、20は斜行刺突文が巡り、17は櫛描直線文が一部残存している。24は胴下部で縦ハケ後斜めハケの切合いが確認される。16・18・19・22は外面全体に、15は口縁外面



第176図 92号竪穴住居跡実測図 (1/60)

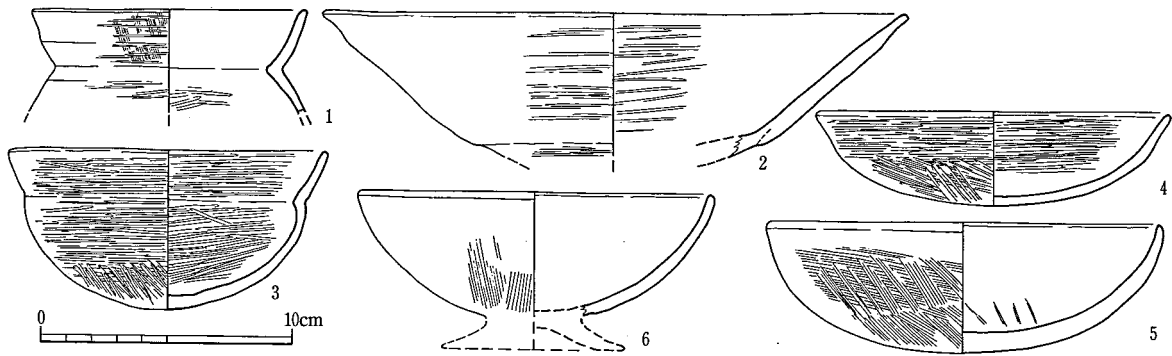
に煤が付着する。24は胴下半に煤付着と二次加熱が顕著であり、25も二次加熱のためか胴部が一部赤変。11は黄橙色、13・17は暗黄褐色を呈するほかは灰黄褐色～淡黄褐色。

26～33は高杯である。26は図上で完形に復元できた。外面は脚に縦ハケ後、全体を横ミガキ。杯部内面は暗文風縦ミガキ、脚柱内面ナデ、脚裾内面横ハケ。脚柱部に2ヶ所、少し乾燥が進んだ段階で外から穿孔している。27～29は脚部破片で調整は26と共通。29は2ヶ所に乾燥が進んだ段階で穿孔。30の杯部は摩滅が著しいが、調整は26とほぼ同様か。杯部片31は杯屈曲部稜が曖昧で、内外面を不定方向ミガキ。杯部片32は底径が大きいため26、30とは形態的に異なる。外面調整は26と同様であるが、内面は摩滅のためハケメしか観察できない。33はスカート状に開いた脚裾片で、あるいは山陰系鼓形器台裾部か。外面横ミガキ、内面ヘラケズリである。29・31は灰黄褐色、33・32は淡黄褐色、他は橙褐色。

34～36は直口鉢である。34は外面ハケ、内面板状工具によるナデで仕上げる。35は外面ヘラケズリ後内外を横ミガキ仕上げ。36は外面ハケメ、内面ケズリ。37は山陰系二重口縁大形鉢の口縁部か。橙褐色の35以外は灰黄褐色～白黄褐色。

38は小形精製器台の脚部である。外面縦ハケ後ミガキ、内面上部横ハケ、下部ナデ。乾燥が進んだ段階で外側から2ヶ所に穿孔する。39～41は山陰系鼓形器台。39はかなり摩滅するが脚裾内面ヘラケズリ以外はナデ仕上げか。40は上部片でくびれ部より下は内面ヘラケズリ、上は内外とも不定方向ミガキ。脚裾片41は内面ケズリ後横ナデ、外面太い丁寧な縦ミガキ仕上げ。いずれも白黄褐色～淡黄褐色。

42は半島系土器把手片である。ナデで仕上げ、小口部下方に乾燥時の変形を防ぐためにあてたとと思われる棒端部の圧痕が見られる。砂粒を胎土に多く含む。焼成は土師器に近く軟質で、黄褐色を呈す。(重藤)



第177図 92号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

92号竪穴住居跡 (図版40、第176図)

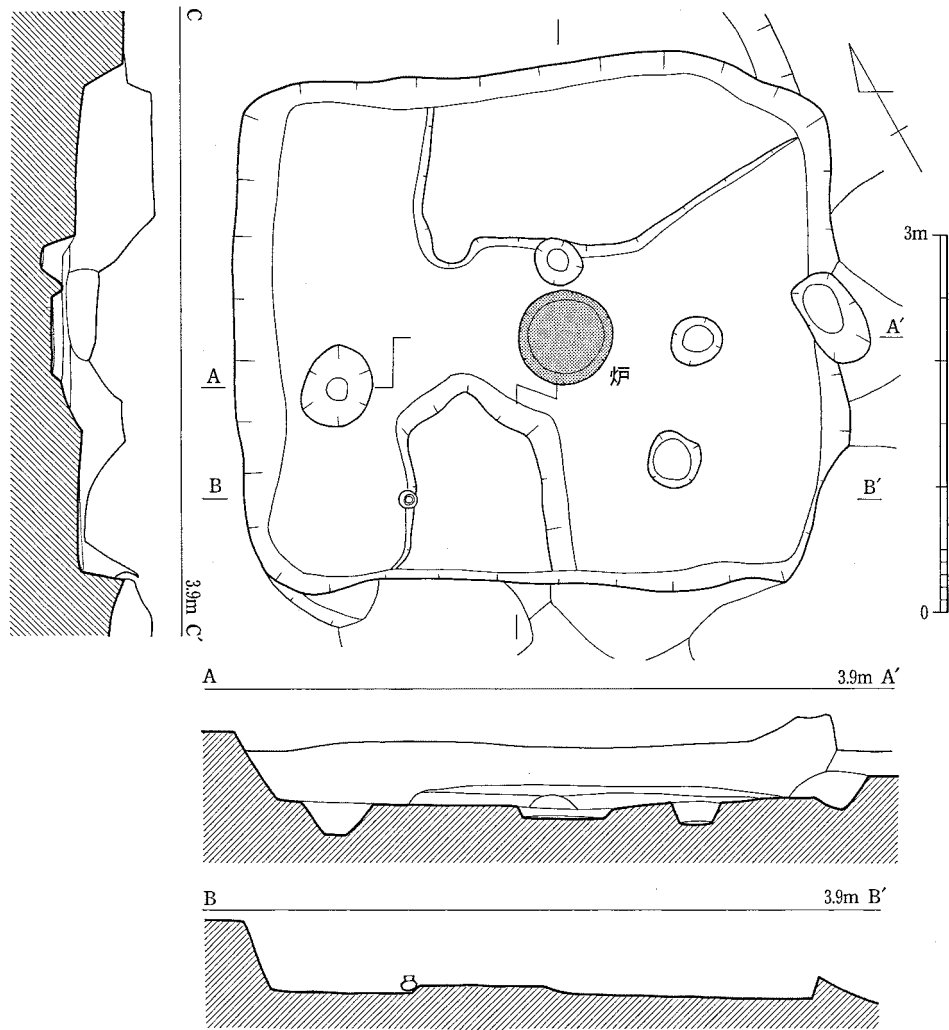
3南3区東南、91号竪穴住居跡の東南で検出した。本住居跡の東南半分は校舎基礎にかかり確認できなかったが、北壁全体と東壁の一部を検出している。北壁は北西-東南方向で長さ4.4mを測る。上層出土土器は本住居跡に伴うか不安であるが、それを除けば他遺構との切合いもなく出土遺物の一括性は高いと思われる。明褐色細砂を埋土とする。土器の他に覆土上層より刀子(第237図25)が出土。

出土土器 (第177図) 1は小形丸底壺で、摩滅が進むが内外横ミガキ。口縁部外面はミガキ前縦ハケも確認される。2は高杯杯部片で、摩滅顕著であるが内外ミガキ仕上げか。3は外反口縁鉢、4は直口鉢でいずれもミガキ仕上げの精製品。ともに底部は倒置して不定方向のミガキを施す。直口鉢5はミガキのない粗製品で器壁も厚い。内面はナデに先行するハケメ工具あたりが残る。6は脚付鉢と思われる。外面は脚周辺横ナデ、他は縦ハケ後ナデ。内面は摩滅するがミガキの可能性が高い。1は黄茶褐色、2は黄橙色、3・4は橙褐色、5・6は灰黄褐色。(重藤)

93号竪穴住居跡 (図版40、第178図)

3南3区の西より、92号竪穴住居跡の北側に位置する。東壁~南壁にかけて攪乱により壁が壊されているが、他住居との切合いもなく全体を検出できた。西北-南東を主軸とする竪穴住居跡で4.8×4.1mの長方形を呈する。床面には中央に径0.7m円形の炉跡があり、中軸線上に2ヶ所主柱穴を検出した。今回の調査で明確な主柱穴を検出できたのは本住居跡のみである。掘方は直径0.4m、0.6mの円形で深さ20~30cm。柱穴底部は地山砂が暗褐色に変色していた。また、南壁沿い西寄りと北壁沿い東寄り2/3にそれぞれ高さ10cm余りの地山削り出しの高まりがある。南壁沿いのものは短い、北壁沿いのものはベット状遺構と考えてよいだろう。南壁沿いの段に接して土器38が出土した。住居跡覆土は上層暗褐灰色細砂、中層灰褐色細砂、下層黒褐色細砂。上層を中心に多量の土器が出土したが、他住居跡との切合いはなく一括性は高いと思われる。土器の以外の遺物も豊富で鉄器(第237・238図1・7・17・18・37~41)、水晶玉(第240図39)、石錘(第242図6)、叩石等の石器(第250図52・53)が出土した。

出土土器 (第179~183図) 1・2は在地系直口壺。1は口縁が大きく外反し、レンズ状底。胴部外面下半は他より粗いハケメ。2は口縁が短く直立する。内面は底部近くハケメ、胴上部ハケメ・指頭圧痕が中部のヘラケズリを切る。3~9は突帯を貼付した在地系壺破片。3・4は頸部付

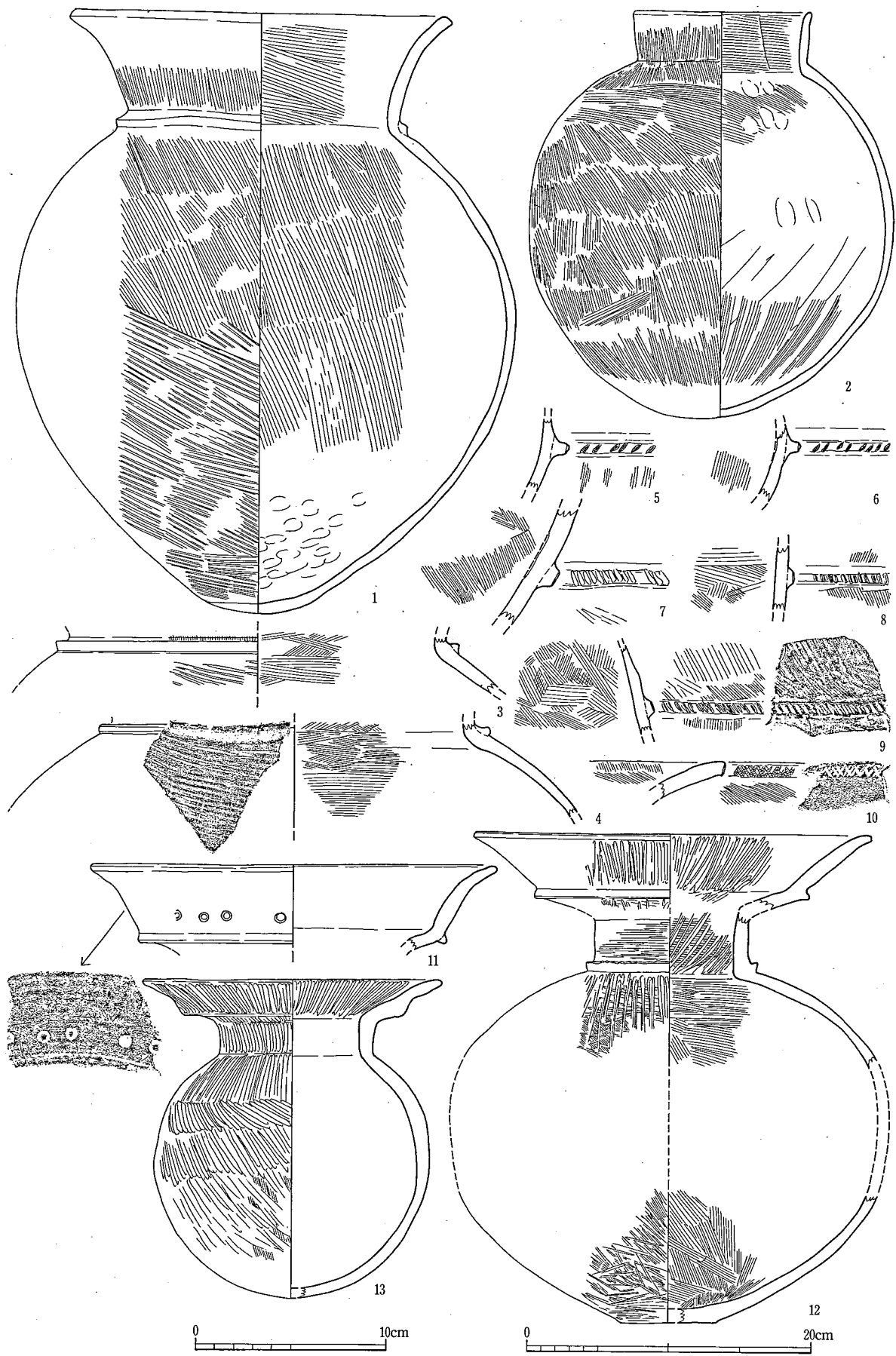


第178図 93号竪穴住居跡実測図 (1/60)

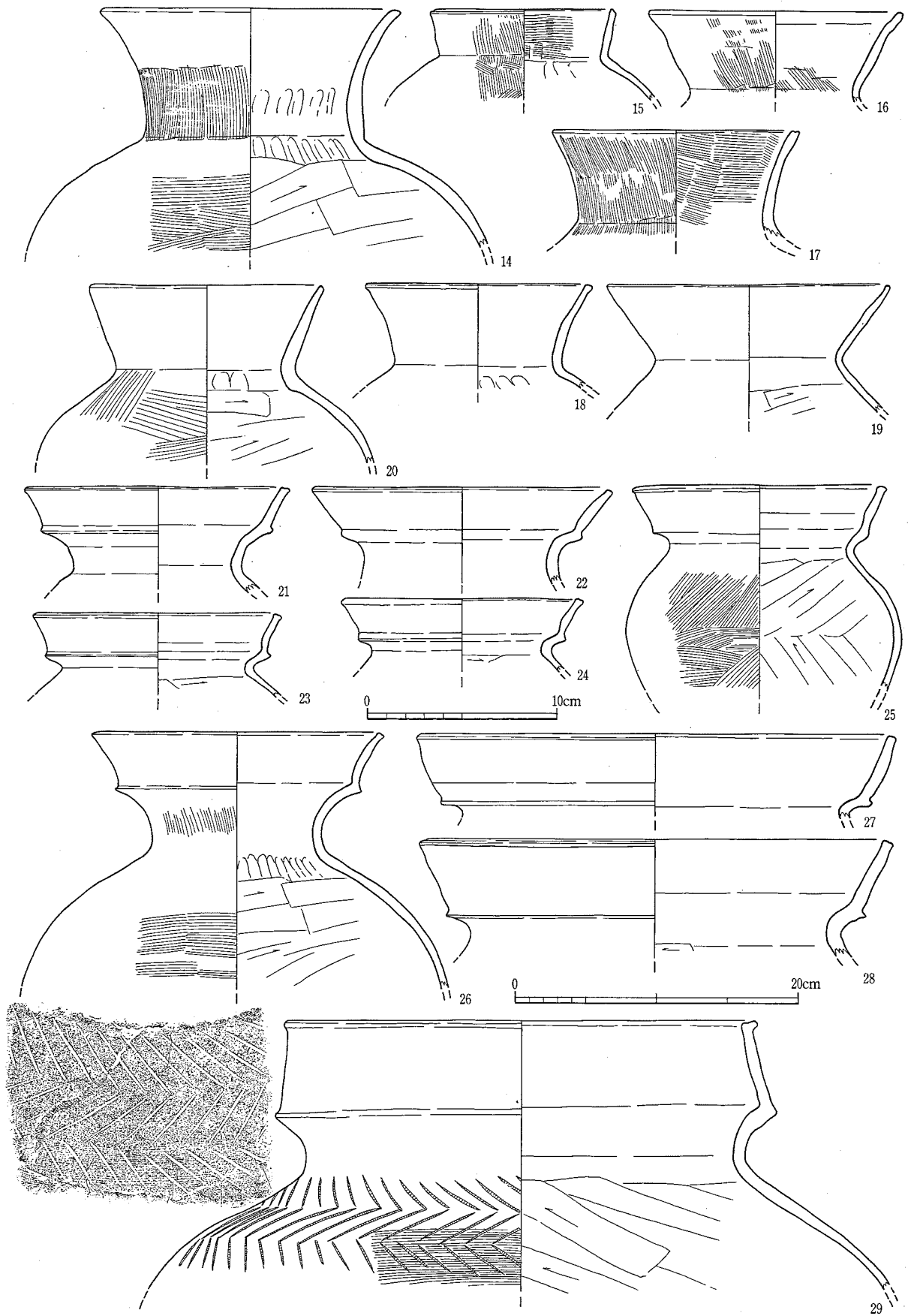
近破片で、いずれも三角突帯を施し外面左上りタタキ。5～9は胴中間の突帯部分。いずれも刻み目を施すが5・6はハケメ工具による。内外ハケメ仕上げが多いが、6外面、5内面はナデ。10は在地系壺口縁部か。端部にはハケメ工具を交叉させた刻み目。4黄橙色、7橙褐色、10茶褐色以外は白黄褐色～淡黄褐色。

11～13は畿内系二重口縁壺。11口縁片は外面に竹管刺突文を巡らし、内外横ナデ仕上げ。12は口縁部、頸部、底部の3片に分かれて接合せず、図上で復元した精製品。口縁外面ハケメ後暗文風縦ミガキ、内面ミガキ。外面は頸部横ミガキ、胴上部ハケ後横ミガキ、胴下部不定方向ミガキで仕上げ、底部は板ナデ後一部ミガキ。内面は頸部横ハケ後暗文風縦ミガキ、胴部ハケメ。頂部が刻み目風に波打つ三角突帯を頸部に巡らしている。胴部内面灰黒色で口縁部から外面は橙褐色。13は外面～口縁部内面が縦ミガキ、胴部内面はナデ仕上げ。黄褐色の半精製品。

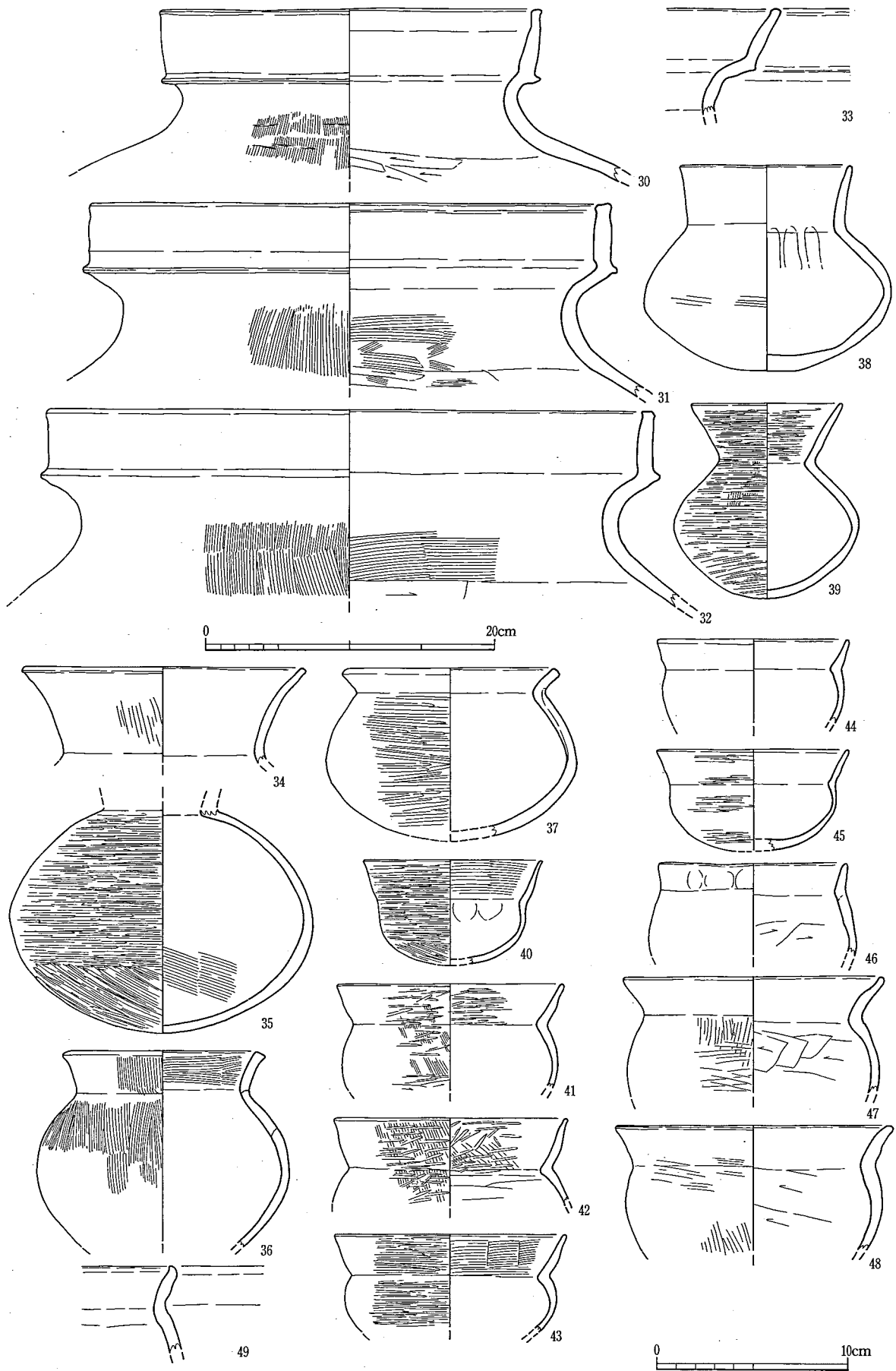
14～20は布留系直口壺。口縁端部は丸くおさめたものが多いが、14は外に拡張し面をなし、17は角張った端部上面を凹ませる。15は口縁部が短く外傾することから在地系の壺の可能性も考えられる。15・17は口縁部外面縦ハケ、内面横ハケ、14・16外面は縦ハケ仕上げ。14は内面頸部付近にナデ上げの痕跡残る。暗黄褐色の16以外は淡黄褐色。



第179図 93号竪穴住居跡出土土器実測図(1) (13は1/3、他は1/4)



第180図 93号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (20・24・25は1/3、他は1/4)



第181図 93号竖穴住居跡出土土器実測図 (3) (30~32は1/4、他は1/4)

21～33は山陰系二重口縁壺。25は小振りで、27～32は大形品。23・24は頸部が短く甕に近い形状となるか。25は口縁端部を丸く肥厚させ、胴部外面は上部斜めハケ後下部横斜めハケ。26は口縁部内面にナデ上げ痕。29は口縁部が内傾し、端部を外に拡張させる。肩部には3段のハケメ工具による刺突文。30～32は口縁が直立。30は口縁端部を外につまみ出し、31・32は口縁端部が水平面をなして頸部内面横ハケ。橙褐色30、黄橙色31以外は白黄褐色～淡黄褐色。31口縁内面に煤状黒色物付着している。

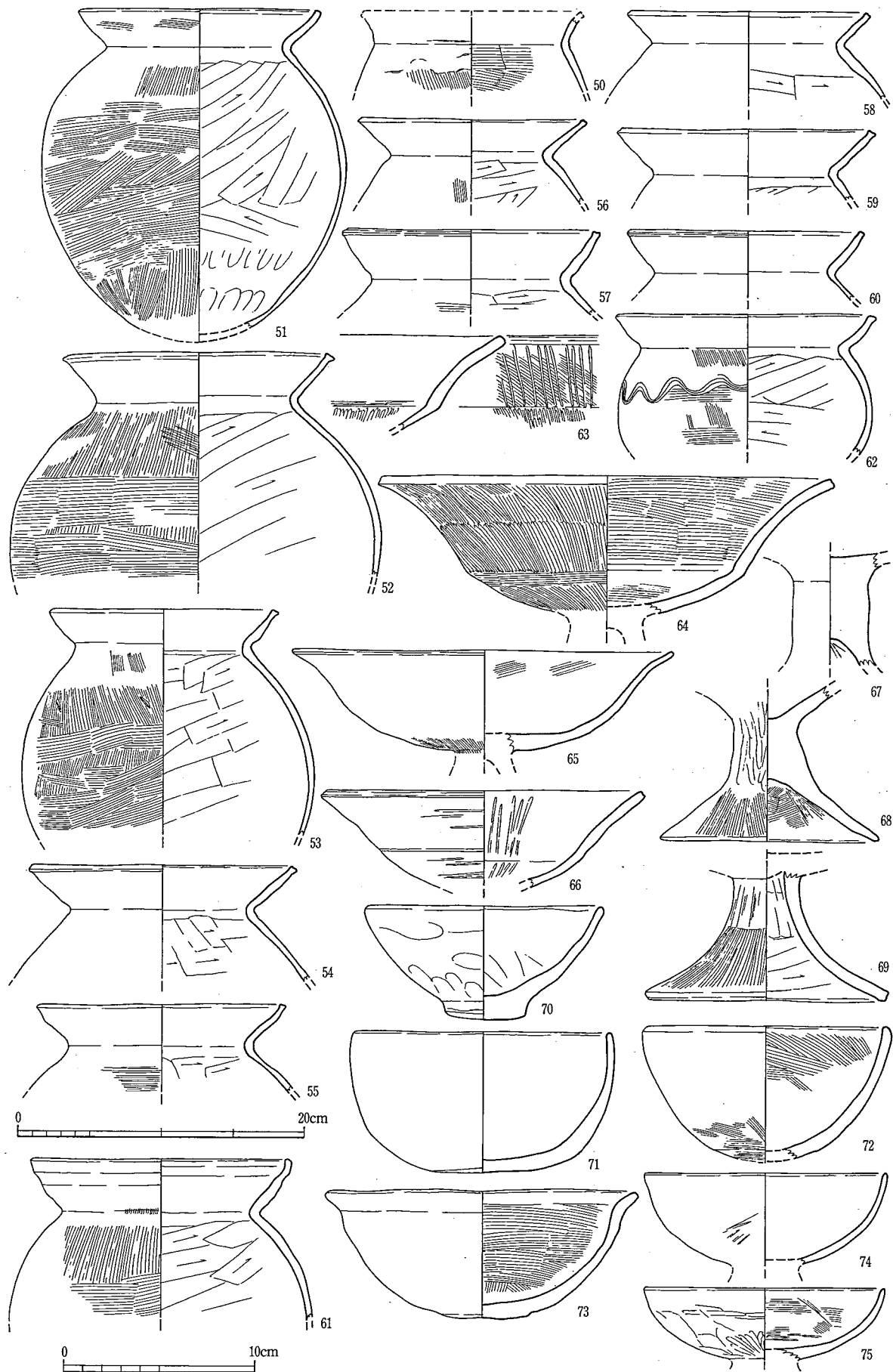
34～49は小形の壺類。34は口縁部が長く外反し、内面ナデ、外面縦ハケ。35は口縁失うが小形畿内系二重口縁壺胴部か。外面は縦ハケ後、胴上半横ミガキ、底部不定方向ミガキ。内面は完形で観察難しいが底部近くハケ。36・37は口縁が短いもの。36は胴上半～口縁内面ハケメ、他はナデ。37は胴部外面横ミガキ、他はナデ。38・39は頸部がしまり、口縁の長く伸びる小形丸底壺。38は内外ともナデで仕上げるが、胴部外面横ハケ、内面ナデ上げ痕が一部残る。39は外面～口縁内面にかけて横ミガキ。40～45は38・39に比べ頸部にしまり無く、口縁部も短い小形丸底壺。40・43は外面底部不定方向ミガキ、口縁～胴部横ミガキ、口縁内面横ハケ、胴部内面ナデ。41・42は外面縦ハケ後横ミガキ、内面ハケ後横ミガキで仕上げる。42の胴内面は板状工具ナデか。44は内外ともナデ仕上げ。45は外面横ミガキ、内面ナデ。46～49は粗製で鉢・小形甕と区別の難しい形態。いずれも胴部内面ヘラケズリで、47・48は胴部外面ハケ。35は化粧土施し橙褐色、39・41橙褐色、40褐色、42黄褐色、他は黄褐色～灰黄褐色。

50は在地系の甕か。胴部外面はハケ後ナデ、胴部内面は横ハケ。51～62は布留系甕で61・62は小形。55・60・62は口縁が若干内湾するが、他は直線的に外傾する。62は横ナデが強く、口縁部の屈曲が特徴的。口縁端部は外傾する面をなすものが多く、52は端部を内外、53は外、57は内にわずかにつまみ出す。60・61は端部丸く、62は水平に近い面をなす。53は肩部11ヶ所にハケメ工具刺突文、62は3条1単位の櫛描波状文を巡らす。51～53・61は縦ハケ後横斜めハケで、51は上から下への横斜めハケの切合いと考えられる。52肩部には縦ハケ前の左上りの粗いタタキが残る。また51内面底部近くにはケズリが及ばず指頭圧痕が残る。51は外面全体、52は胴部全体、55は口縁部下面に煤が付着。淡黄橙色の56、橙褐色の59以外は白黄褐色～淡黄褐色を呈す。

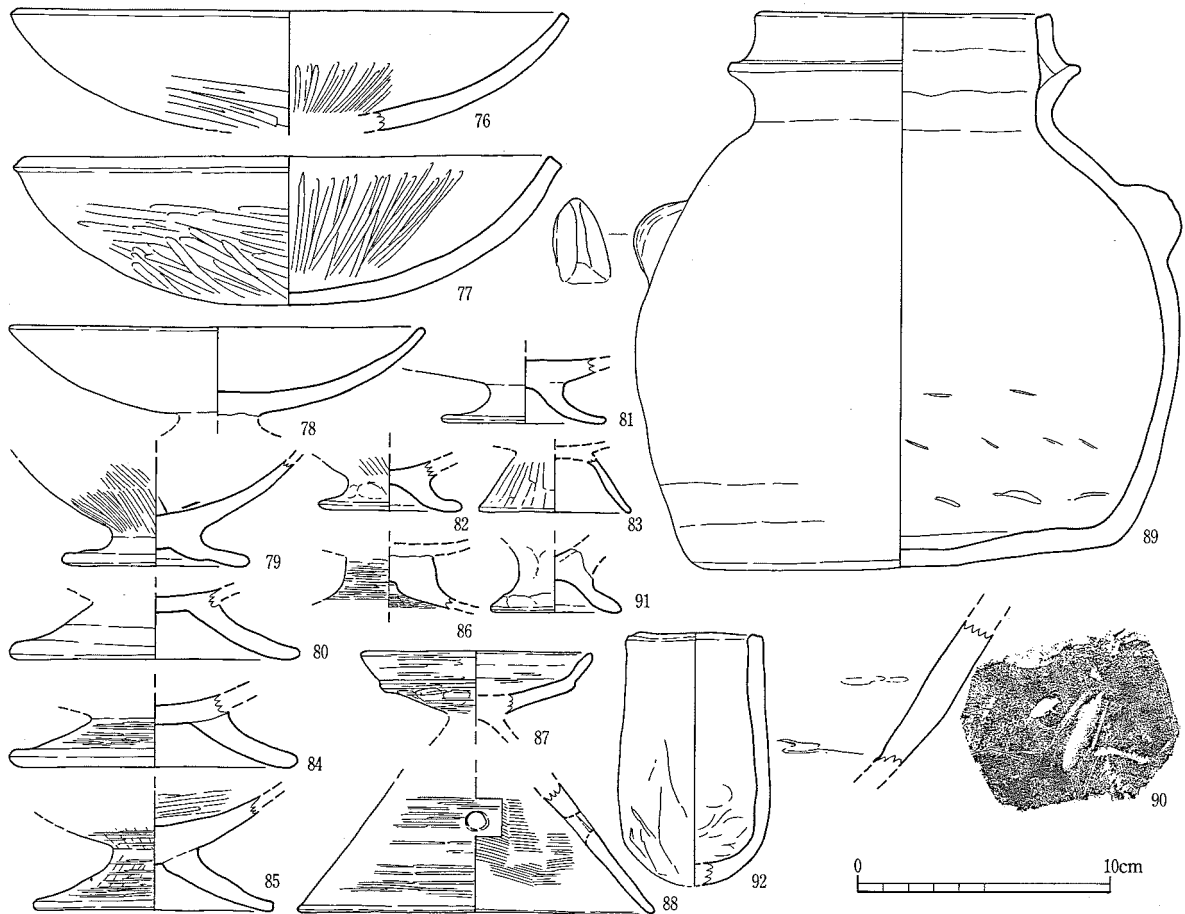
63～66は高杯杯部、67～69は高杯脚部。63は在地系高杯。屈曲部が明瞭で端部が面をなす64は縦ミガキの口縁下部外面以外はハケメ仕上げ。屈曲部が不明瞭で端部の丸い65は口縁内面、杯底部外面ハケメ以外はナデ。66は外面横ミガキ、内面縦ミガキ。端部面をなす。67はナデ仕上げの脚柱部。68は脚柱外面の太い縦ミガキ、脚端横ナデ、杯内面ナデ以外はハケメ。69は外面上部板ナデ、下部縦ハケ、内面上部ナデ、下部ケズリ。上端破面の状況から杯底部粘土を充填したと考えられる。63は茶褐色、64は内外化粧土により淡橙色、66黄橙色、68橙褐色、他は淡黄褐色。

70～73・76・77は鉢で、73のみ口縁部が外反する。70・71・73は外面ナデで仕上げ、72もハケメをナデ消している。内面は70ケズリ、71ナデ、72ハケ後ナデ、73横ハケ。70・73はともに平底で、調整が粗雑。71は外底部ケズリ。口径の大きい76・77はともに内面縦ミガキで、76は外底部ヘラケズリ、77は太いミガキ風の工具によるナデ。褐白色71、黄橙色72以外は淡黄褐色。

74・75・78は脚付鉢鉢部で、79～86はその脚部片。74は内外ナデで外面に工具痕残る。75は外面と内底部は太いミガキ、内面上部ハケメ。78は外面ナデ、内面摩滅。脚部片は脚ナデ仕上げのものが多いが、84・85は外面ミガキ、83は板状工具によるナデ。86は精製品で外面横ミガキ、内面ハケ。



第182図 93号竖穴住居跡出土土器実測図(4) (50~60は1/4、他は1/3)



第183図 93号竪穴住居跡出土土器実測図 (5) (1/3)

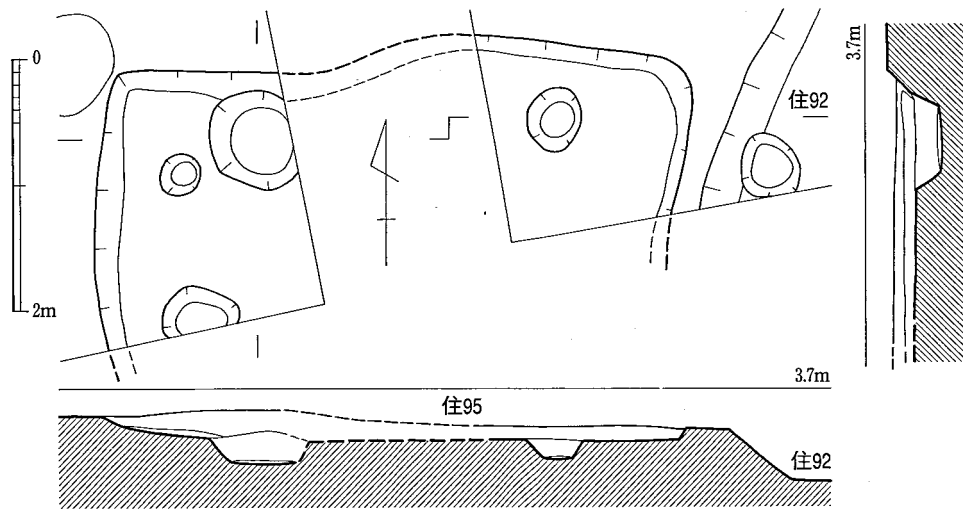
鉢部外面は79・81・82縦ハケ。85は鉢部外面ヘラナデ後ミガキ、内面ミガキ。75・85橙褐色、84橙黄色、80褐色、他は白黄褐色～淡黄褐色。

87・88は小形精製の器台。受部片87は全体をミガキで仕上げ、底部に先行するヘラケズリ残る。黄橙色。88は外面ミガキ、内面ハケメで、少し乾燥した後穿孔。白黄褐色。

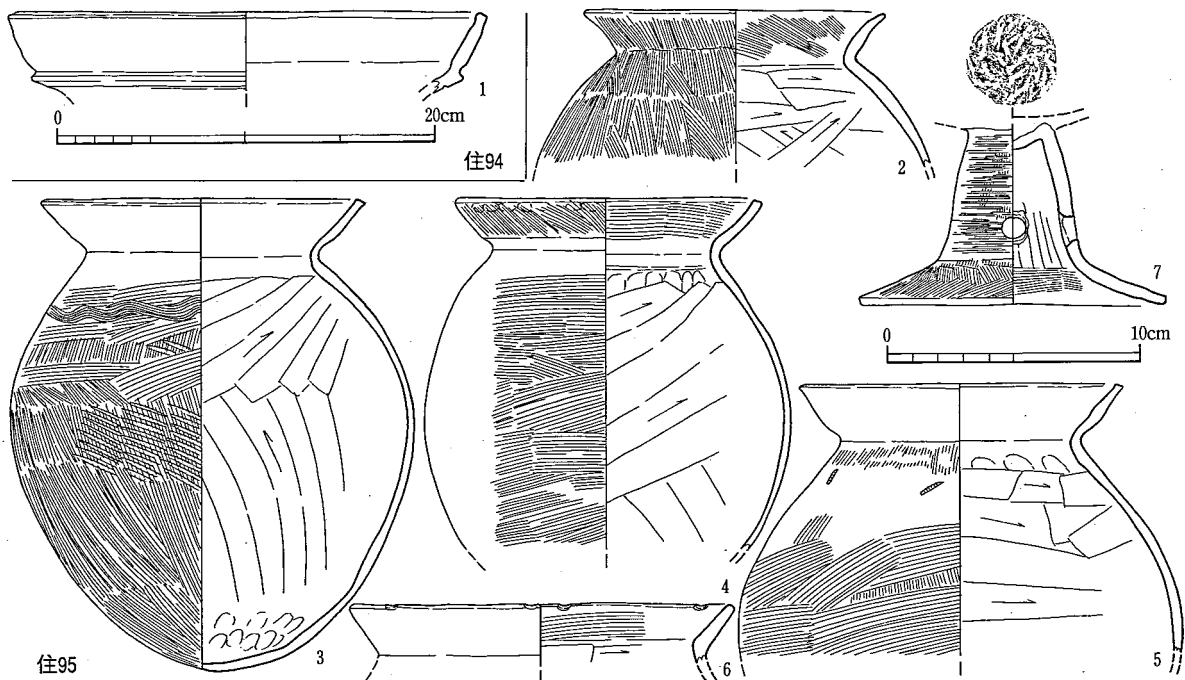
89は半島系二重口縁平底壺。肩部に無穿孔の縦長耳を2ヶ所に貼付している。口縁は外反する擬口縁部上面に内傾する口縁を作った後、内側に粘土を押付け凹みを埋めている。外面摩滅、口縁部横ナデ、胴部内面は横斜めナデ。胴下部内面に爪先を押し付けたような皺が3段見えるが、接合痕か。底部外面はほぼ無調整に近い。胎土に石英を多量に含む。焼成は甘く土師器に近い焼きであるが、内外器表は炭素を吸着させたかのように黒変し、いわゆる「黒色磨研土器」に類似している。生地は黄褐色、黒変した器表面は黒灰色を呈す。このような器形は平行する時期の韓国全羅道で見られ、日本での出土例は他に知らない。90は半島系の壺胴部片か。内外ともナデ仕上げ。焼成は良いが軟らかく、器表に炭素を吸着させたような感じで中近世瓦器に近い焼成。器表は灰黒色、生地は淡黄灰色を呈す。(重藤)

94号竪穴住居跡 (第173図)

91号竪穴住居跡の北側を切る竪穴住居跡である。先述したように91号住居跡を少し掘り下げた段階でその存在に気が付いたものである。大半が基礎下に位置しており、南西隅付近、南東隅付近を



第184図 95号竪穴住居跡実測図 (1/60)



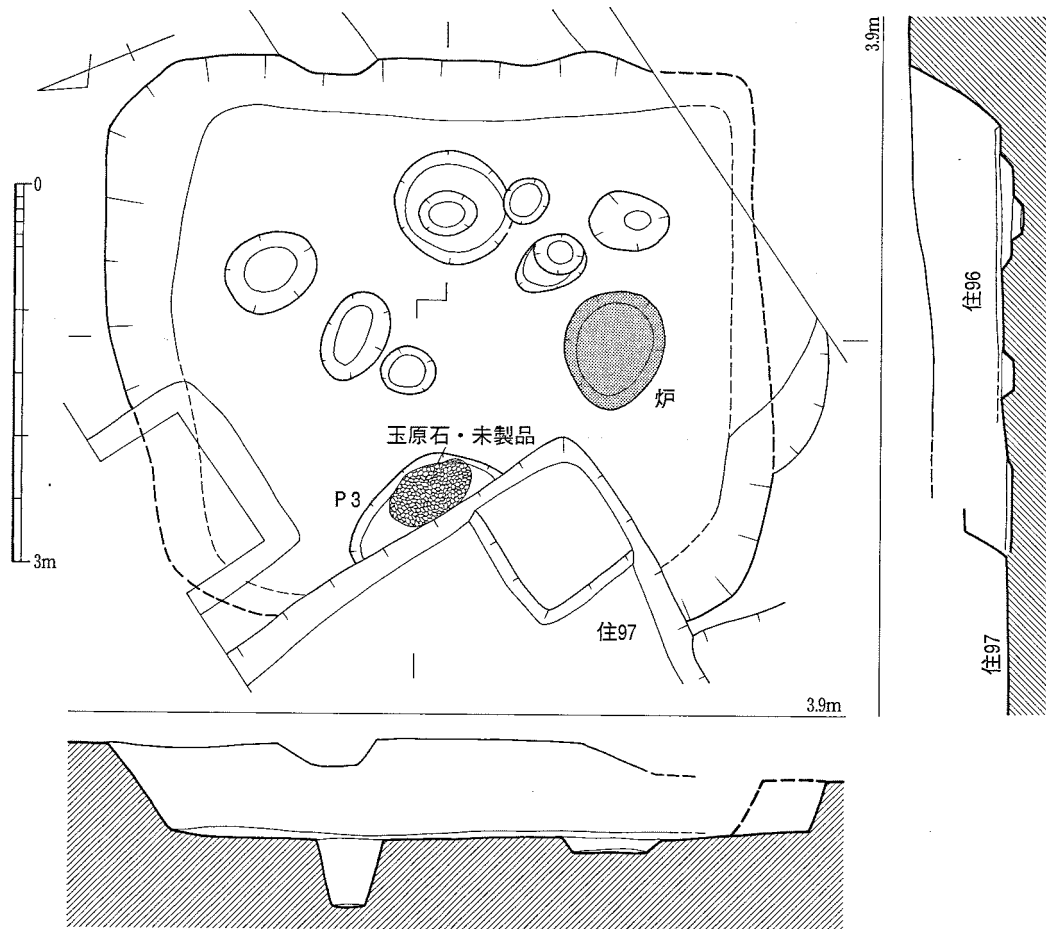
第185図 94・95号竪穴住居跡出土土器実測図 (7は1/3、他は1/4)

検出したにとどまる。西壁は72号竪穴住居跡南西外の落込み西壁につながる可能性がある。覆土より鉄鍬 (第237図14) が出土。

出土土器 (第185図1) 出土土器は少なく、図示できたのは1の山陰系二重口縁壺片のみ。屈曲部の稜は比較的明瞭である。白黄褐色を呈する。(重藤)

95号竪穴住居跡 (第184図)

3南3・4区にあり、92号竪穴住居跡の東に隣接する。南側の大半が校舎基礎下にあり、検出できたのは北壁と東壁、西壁の一部である。炉跡は検出されなかった。他遺構との切合いも無いので出土遺物の一括性は良好と思われる。床面より10cm程浮いて3点の甕 (3～5) が出土した。また



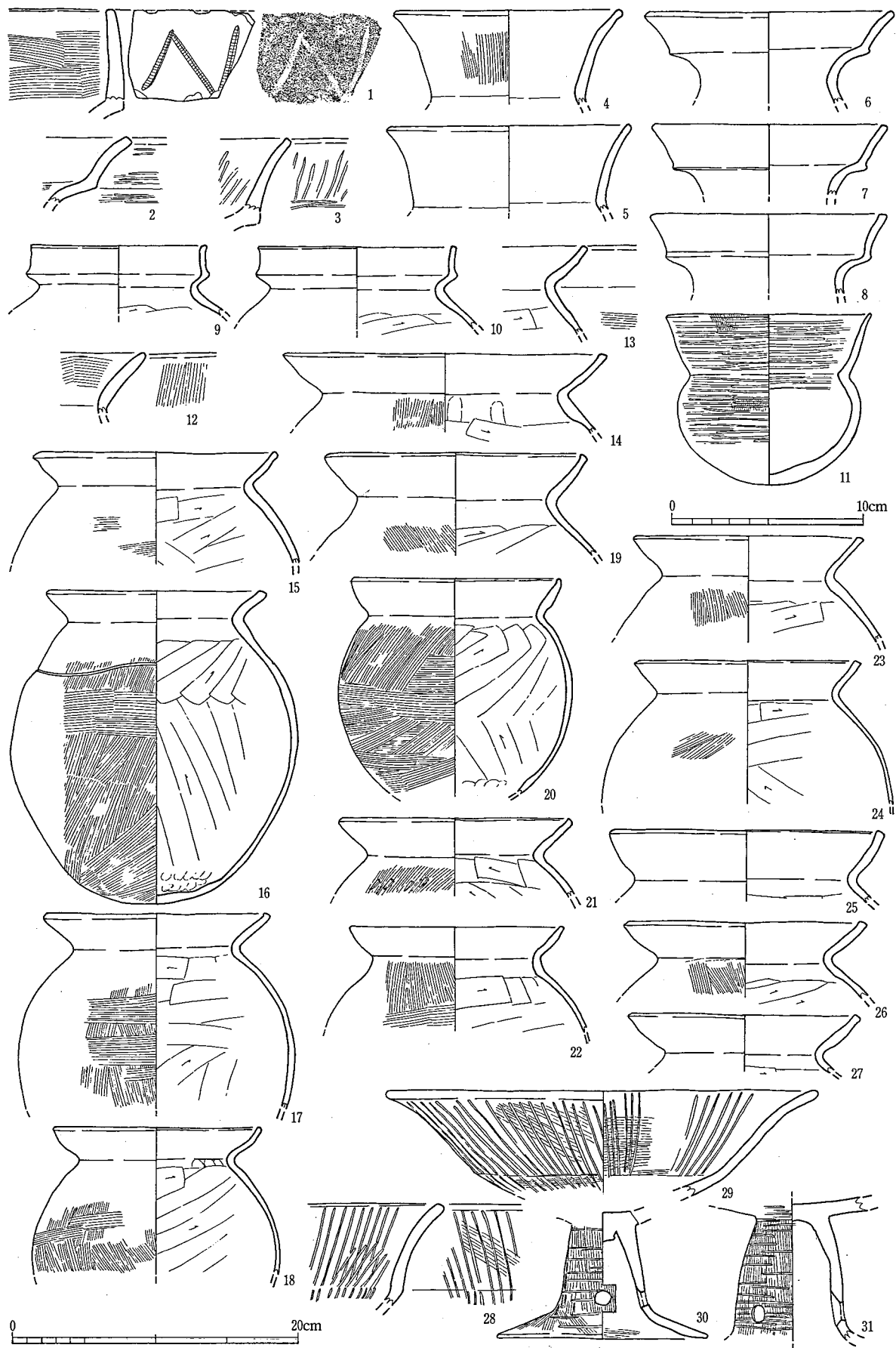
第186図 96号竪穴住居跡実測図 (1/60)

石錘（第243図36）も出土している。埋土は斑状に褐色細砂が混じる明灰褐色細砂。

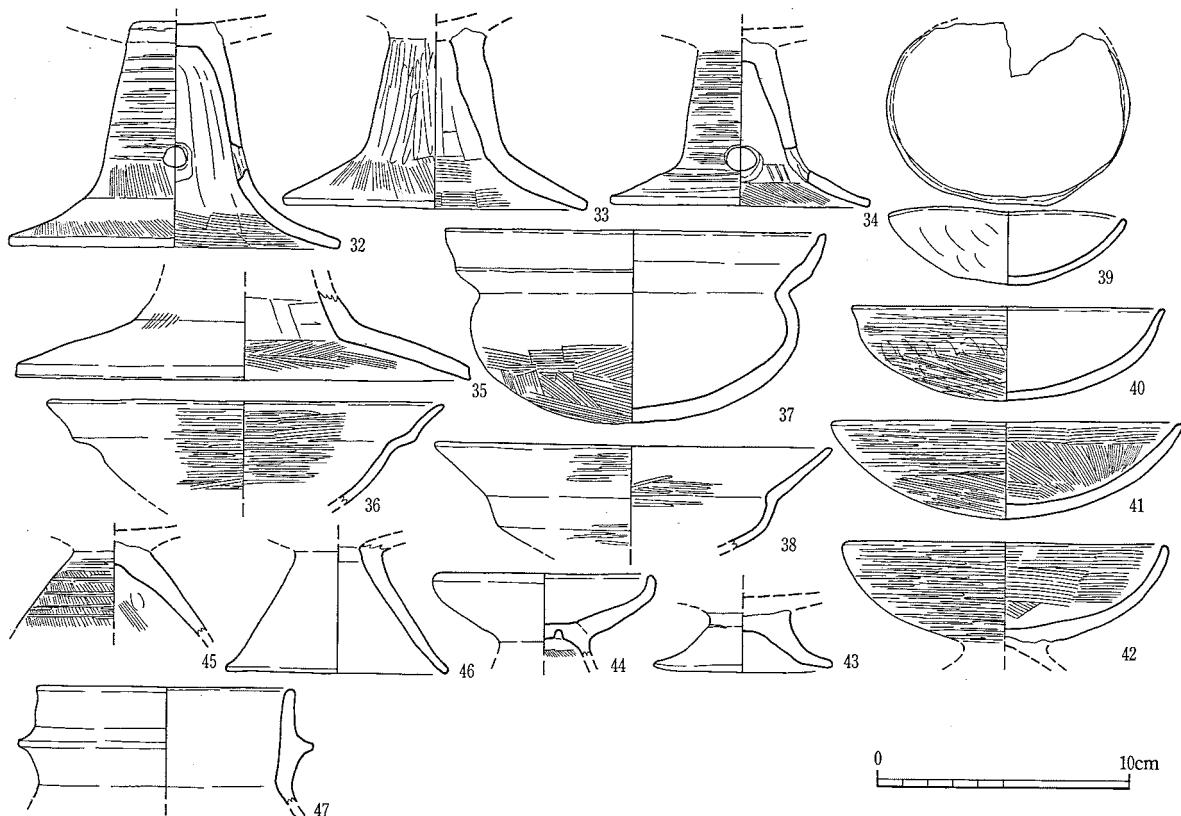
出土土器（第185図2～6） 2は5様式系甕か。外面縦ハケ、口縁部内面斜めハケ。内面ヘラケズリは頸部まで及ぶ。3～5は布留系甕。口縁部はわずかに内湾気味で外傾する。端部は5が水平に近い面をなす。3外面は縦ハケ部にのみ先行の太い左上り斜めタタキ見えるので、タタキ→縦ハケ→横斜めハケの順か。肩部には横ハケを切って5条からなる櫛描波状文。4は口縁部内外ハケメ仕上げで端部外面に指頭圧痕残る点が特徴的。5は肩部0・2・4・6時の方向にハケメ工具刺突文。6は在地系甕か。胴部内面はケズリで口縁端部数ヶ所に内外からと外からの凹みをつける。3・4・6は外面に煤が付着し、4は二次加熱も顕著。7は高杯脚部片。脚柱外面は縦ハケ後横ミガキ、裾内外はハケメ、脚柱内面は絞り痕をナデ消すか。脚柱部の2ヶ所に半乾燥段階で外から内へ穿孔。脚柱上部は杯との接合面から剥離し、そこに接合補強の線刻が見える。2・7は橙褐色、6は黄橙色、3～5は淡黄褐色。（重藤）

96号竪穴住居跡（図版40・41、第186図）

3中1区の西よりに位置しており、97号竪穴住居跡に切られている。西北隅、南東隅は校舍基礎下にあたり、西壁の大部分が97号住居跡により失われる。また南壁は掘り間違いにより膨らみが生じている。破線で示したのは基礎下断面に見える壁の立ち上がりからの南壁復元線。このような間



第187図 96号竪穴住居跡出土土器実測図(1) (11・28~31は1/3、他は1/4)



第188図 96号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3)

題があるが5.2×4.5mの長方形を呈す竪穴住居と復元できる。床面南壁寄りに炉跡があり、97号住居跡に切られる西壁中央沿いピット (P3) には凝灰質泥岩の玉未製品と原石 (第239・240図) がまとまって出土。また、床面近くで五銖銭 (第236図2) が出土したことが特筆される。なお発掘当初は97号住居跡との切合いが不明であったため、上層出土の土器は一部に本来97号住居跡に伴うものが混入した恐れがある。覆土は暗茶灰色細砂。

出土土器 (第187・188図) 1・2・4～6・11・14・18～20・24・26・29・30・34～39・44・46・47は上層からの出土である。

1は在地系大形二重口縁壺の口縁部か。外面にハケメ工具小口刺突による鋸歯文。2・3は畿内系二重口縁壺口縁部か。いずれも摩滅気味であるが2は内外横ミガキ、3は内外縦ミガキ。4・5は布留系直口壺、6～10は山陰系二重口縁壺で、ハケメ後ナデの4外面以外は横ナデ仕上げ。9・10は頸部短く甕に近い形態。11は小形丸底壺で外面ハケメ後横ミガキ、口縁内面ミガキ、胴部内面ナデ。暗黄褐色2、化粧土のため橙褐色を呈す3・11、暗褐色8以外は白黄褐色～淡黄褐色。

12は在地系甕か。外面化粧土のためか橙褐色。13～27は布留系甕。口縁部はわずかに内湾気味ながら直線的に外傾するものが主体。18は内湾がやや強い。端部は外傾面のもの (13・19・21・24～27)、水平面に近いもの (14・16・23)、丸いもの (15・17・18・20・22) に分かれる。20は端部を丸く内面に肥厚させている。19は上に、24は外にわずかに端部をつまみ出す。16は肩部に直線沈線文が巡り、その付近が全体にわたって凹む。口縁は器壁が厚く、短い点、横ナデが頸部下まで及ぶ点も特徴的。20の外面ハケメは肩部縦ハケ、胴中部横ハケ、底部斜めハケの順か。21は肩部に棒状工具小口刺突列点文めぐり。23が淡黄橙色を呈する以外は白黄褐色～淡黄褐色。

28～35は高杯。28は在地系高杯口縁部で外面ハケメ後内外暗文風縦ミガキ。29は内外横斜めハケメ後暗文風縦ミガキ。30～35は脚部片。33は外面脚裾縦ハケ、脚柱部縦ミガキ。35は外面摩滅。他は外面縦ハケ後横ミガキ。脚裾内面はいずれも横斜めハケ。脚柱部内面はケズリの33・35以外はナデ、ナデ上げで仕上げる。33は穿孔が無いが、31は3ヶ所、30・32・34は2ヶ所、半乾燥時に外面から穿孔している。32・33・35が淡黄褐色を呈し、他は淡橙色～黄橙色。

36・37は二重口縁の鉢。36が内外ミガキ仕上げであるのに対して、37は口縁内外横ナデ、外底部不定方向ハケ、胴部内面摩滅。36は褐色、37は淡褐色。38は外反口縁の鉢で内外横ミガキ。橙褐色。39～41は直口縁鉢。39は内外ナデ仕上げの粗製品で楕円形に近い上面観。淡黄褐色。40・41は口縁外面横ミガキ、底部外面不定方向ミガキの精製品。いずれも淡橙褐色。42～44は脚付鉢。42は外面横ミガキ、内面横ハケ。44は異形の鉢部で外面摩滅、内面ナデ。鉢外底部に軸痕状のくぼみがある。42橙褐色。43白褐色、44淡黄褐色。

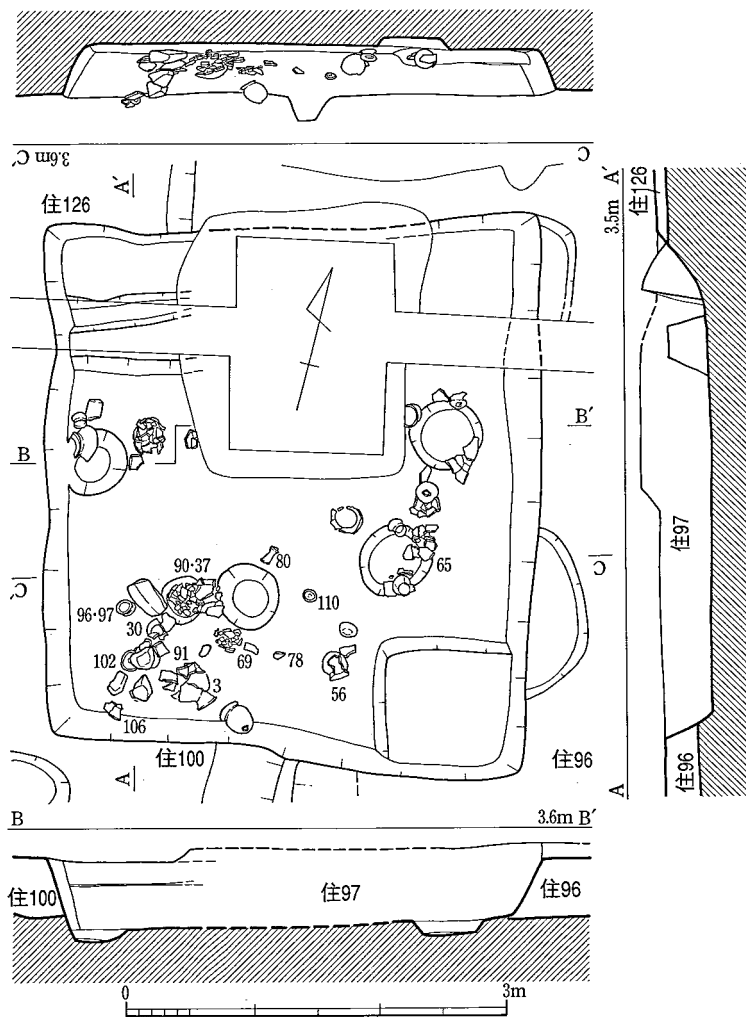
45は小形精製器台。外面ハケ後ミガキ、内面ハケ後ナデ。黄褐色。46も特異な形態ではあるが小形器台か。内外摩滅し、淡黄褐色呈す。

47は半島系土器二重口縁壺。

口縁部は直立し、口縁部中間が鏝状に突出する。この突出部は93号住居跡89とは異なり、突帯状に粘土を貼付した可能性が大きい。胎土は石英多く含み、焼成は良いが軟質であり、褐色を呈す。(重藤)

97号竪穴住居跡 (図版41、第189図)

3中1区西よりに位置し、96・100号住居跡を切る。北寄りに東西に伸びる校舎基礎があり、北壁の一部が確認できていないが、住居跡のほぼ全形が判明し、主軸をほぼ南北に置き、南北4.3m、東西3.9mの長方形住居跡となる。北西隅に北壁に平行して伸びるカマド煙道部分を確認している。また、南東隅で1辺1m程の地山を削り出した方形の高まりを検出した。住居跡の床面からやや浮いて極めて多量の土器が出土した。発掘当初



第189図 97号竪穴住居跡実測図 (1/60)

は96・100号住居跡との切合いがわからず30cm程下げた段階で平面プランが明らかになったために一部、これらの住居跡出土のものが混じる恐れもある。ただ出土状況を図示したものは確実に本住居跡に伴うものと考えられる。土器の他に鉄器（第237図8）、玉未製品（第239図13）、石錘（第243図37）、土錘（第244図52）、台石等の石器（第250図54～56）が出土している。付近の遺構面より管玉（第239図2）、本住居跡と100号住居跡の上層より砥石（第251図57）も出土。覆土は暗褐色細砂が主体で、床面近くでは黄灰色細砂。

カマド 住居跡の北西隅で煙道のみを確認した。煙道は北壁に沿って伸びるが、北東隅には現れていない。恐らく北壁中央にある基礎下で屈曲し、燃烧部もこの基礎下に収まるものと考えられる。煙道は褐色粘土混じりの灰白色粘質砂で構築している。

出土土器（第190～196図） 6・13・16・23・25・42・47・51・77・92・105・109は覆土上層から出土し隣接する住居跡のものが混入する恐れがある。一方、覆土下部から出土した11・14・33・35・37・41・44・45・65・83・101は出土状況を図示したものと同様に本住居跡に伴うと考えて大過ない。61はカマド煙道内から出土し、本住居に確実に伴う遺物。120～134は本住居跡と100号住居跡の上面から出土し、どちらに帰属するか区別できなくなったもの。

1は在地系二重口縁壺。口縁屈曲部外面は密に刻み目を施す。褐色を呈す。

2～6は布留系直口壺である。口縁端部の丸い3を除くと端部は外傾する面をなす。ほぼ完形に復元される3は左右対称の均整とれた器形をなす優品である。口縁内面横ハケ、頸部内面ヘラケズリ前ナデ上げ、底部指頭圧痕残す。5は外面肩部に粗い左上りタタキ見え、頸部内面右上りケズリと胴下部左上りケズリが重ならず肩部内面に指頭圧痕残す。2 橙褐色、3・5 淡黄褐色、4・6 黄橙色。

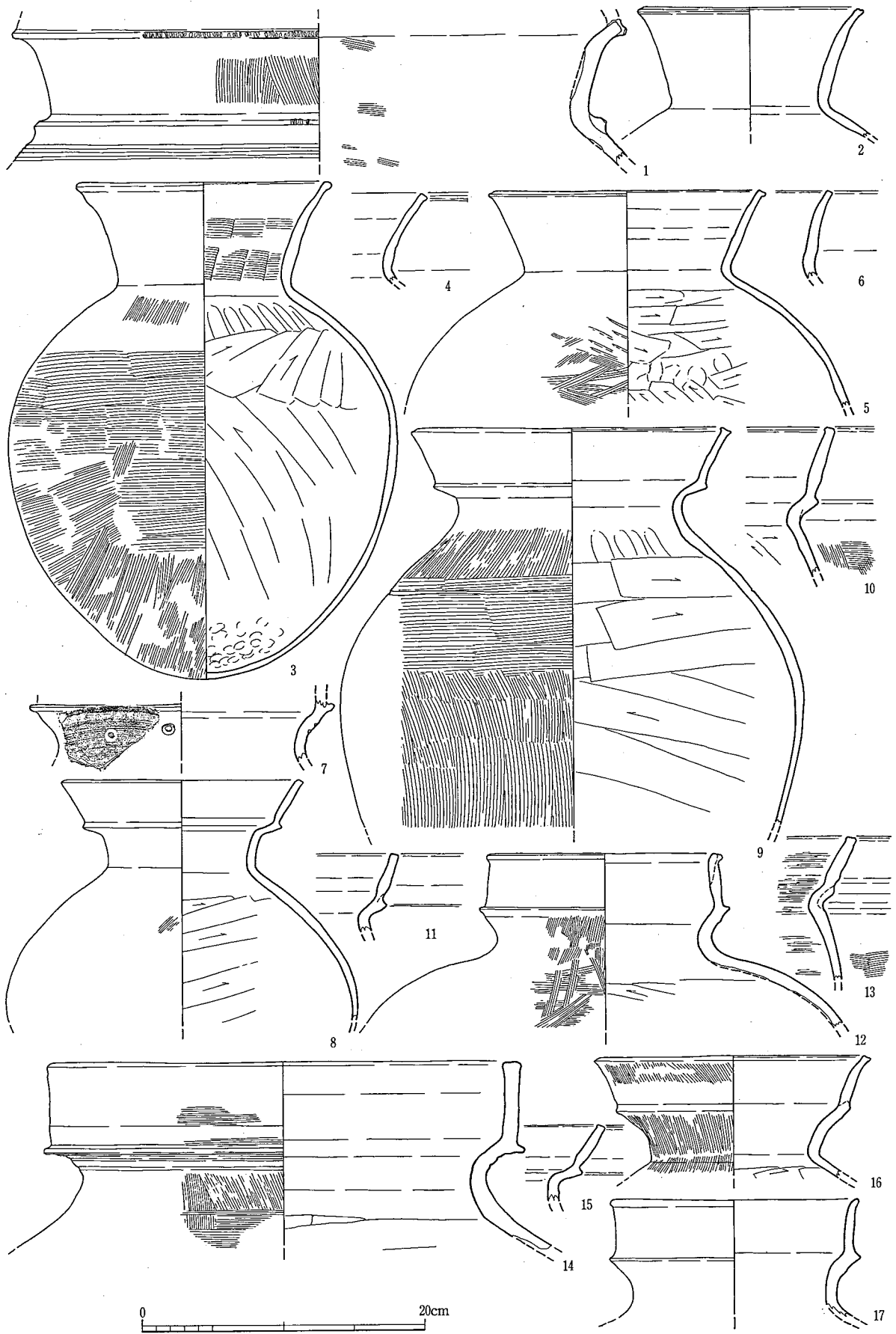
7～17は山陰系二重口縁壺。12・14・17は口縁部直立、他は外傾。10・13は頸部くびれ弱く、13は内面ミガキも見えるので鉢かも知れない。7は頸部外面に竹管刺突文、9は肩部外面直線沈線文。口縁部～頸部は内外ナデ仕上げがほとんどであるが、16は口縁部～頸部外面、12・14は頸部外面にハケメ。7 橙褐色、8・16 褐色、10・14・15 黄橙色、13 黄褐色、他は灰黄褐色～淡黄褐色。

18は畿内系中形直口壺。外面は肩部斜めハケ後口縁～胴中部横ミガキ、底部ヘラケズリ後不定方向ミガキ。口縁部内面は斜めハケ及び指頭圧痕後暗文風縦ミガキで、胴部内面は完形のためほとんど観察できない。淡黄褐色～淡橙褐色。19は山陰系二重口縁中形壺で口縁下部屈曲が明瞭。口縁内外横ナデであるが内下部に絞り痕状皺が残る。胴部内面はケズリか。淡黄褐色。

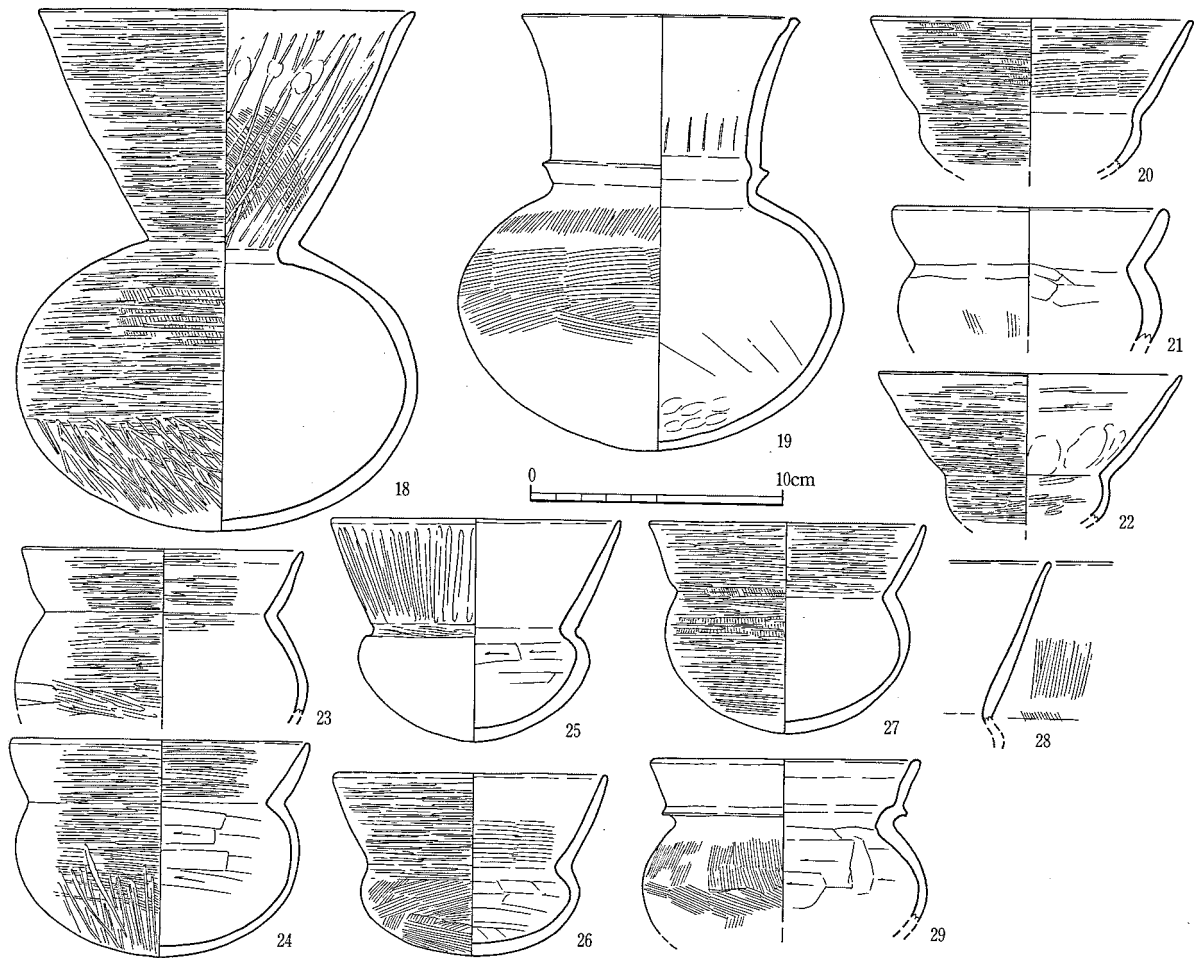
20～28は小形丸底壺、29は二重口縁小形丸底壺。外面は20・22・23・24・27が口縁～胴中部横ミガキで、20・27は横ミガキ前縦ハケ、23・24は横ミガキ切る底部不定方向ミガキが見える。21はハケ後ナデ仕上げ、25は口縁部縦ミガキ、胴部摩滅、26は口縁部横ミガキ、胴部ハケメ、28は縦ハケ後ナデ、29は胴部ハケ。口縁内面は23・24・27横ミガキ、20は下部横ハケ後上部横ミガキ、26横ハケ後ナデ、21・28・29横ナデ、22・25摩滅。胴部内面は21・24～26ケズリ、22ミガキ、20・23・27ナデ。20・22・27 橙褐色、28 褐色、21・23・29 黄橙色、他は淡黄褐色。

30～32は在地系大甕片。30・31は頸部に刻み目突帯。32は口縁端部下面に刻み目。いずれも内外ハケメ仕上げで、30 黄褐色、31・32 橙褐色。33は在地系小形甕で黄褐色。

34～72は布留系甕で、65～72は比較的小形。口縁はわずかに内湾気味ながら直線的に外傾するものが多い。36・39・41・44～46・59・69などは比較的、内湾の度合いが強い。口縁端は斜め上方に



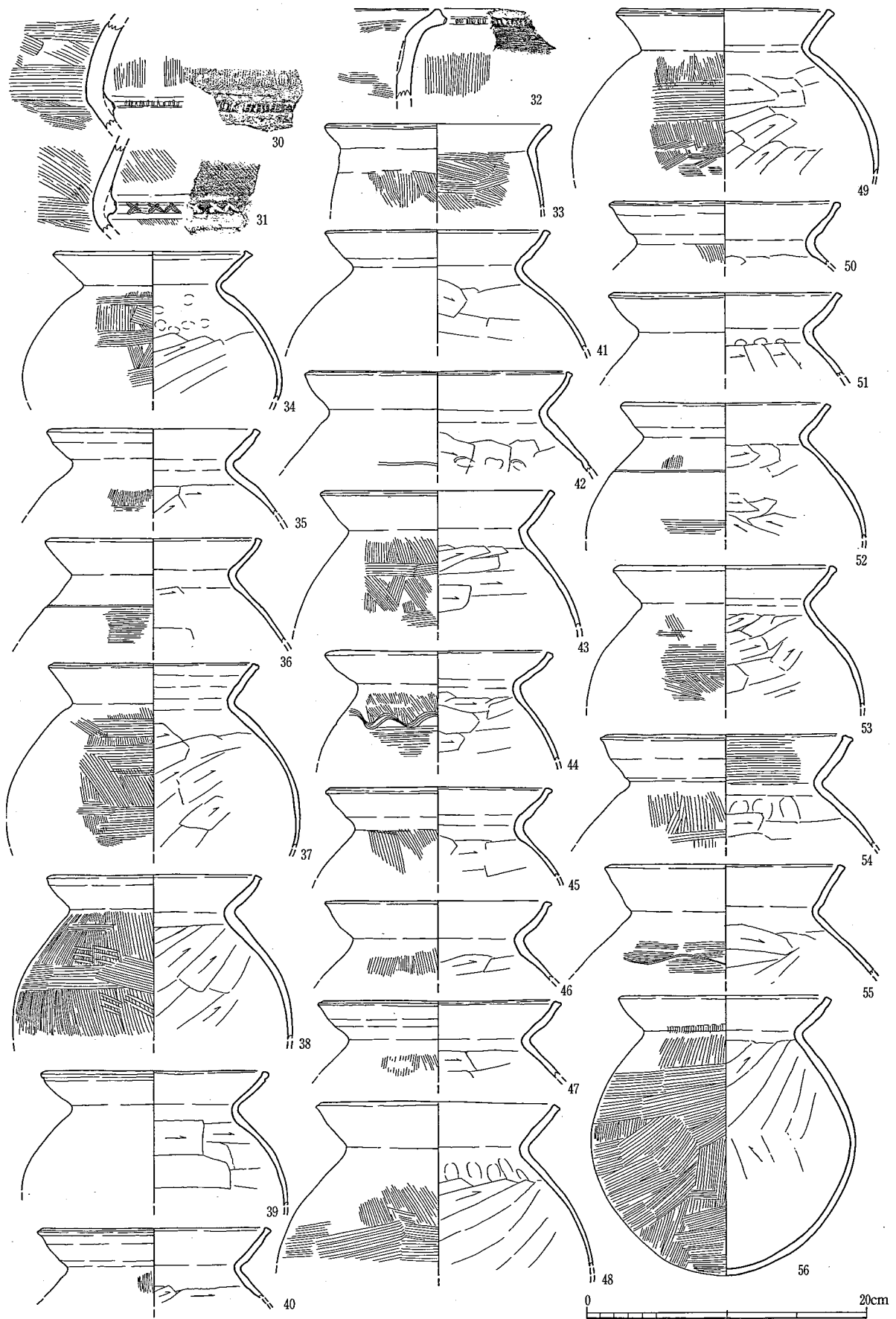
第190图 97号竖穴住居跡出土土器実測图 (1) (1/4)



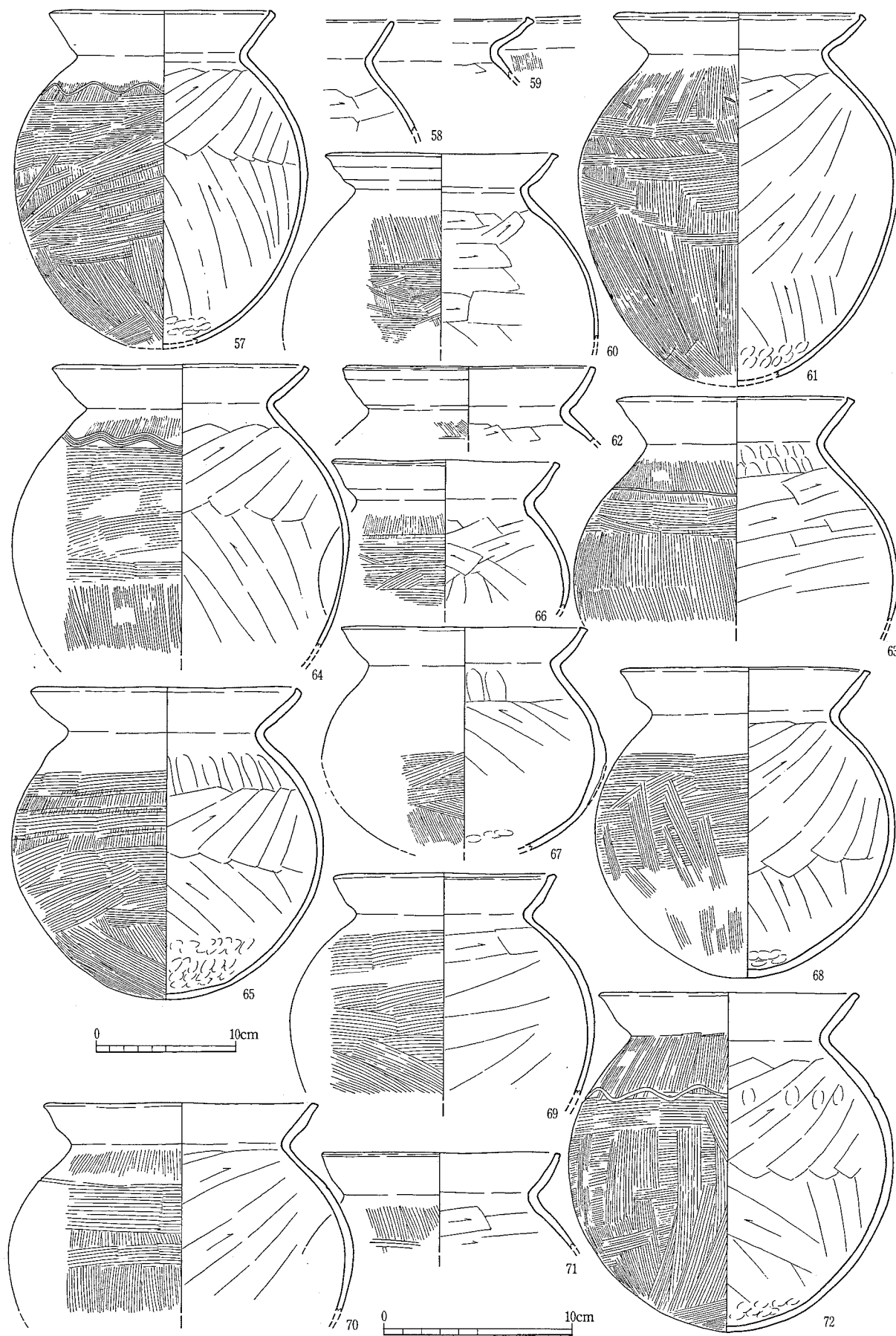
第191図 97号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (1/3)

つまみ出すもの(34・40・42・53・57・59・61)、外にわずかにつまみ出すものが目立つ(40・45・46・51・54・60・64など)。39・58・66・71は丸く仕上げている。69は口縁端内面を肥厚させ、本遺跡出土甕には珍しい形態。肩部施文は36・42・63直線沈線文、55・57・70・72沈線波状文、71櫛描直線文、44・64は4条櫛描波状文、61ハケメ工具列点文。42は1条の沈線波状文か。38は縦ハケ部に粗いタタキ見え、タタキ、縦ハケ、肩部横ハケの順か。42は胴部内面ケズリが十分でなく指頭圧痕残る。55は内面に縦方向ひび割れを補修したと思われる粘土附着。56は胴下部ハケメが上部を切る。57も肩部横ハケ後胴中部斜めハケか。一方、61・65は肩部横ハケと胴中部斜めハケが肩部と底部の縦ハケより新しい。65内面にはヘラケズリ前指ナデ痕明瞭。63・68・72は胴中部縦ハケが肩部横ハケを切るようにも見える。39・44・55は外面全体、40・52・60は胴部外面、36は口縁外面、65・72は胴下部に煤附着。53・65・67は胴中部以下の二次加熱顕著。35・41・43・44・66橙褐色、36・37・42・46・52~54・62・71黄橙色、他は白黄褐色~淡黄褐色。

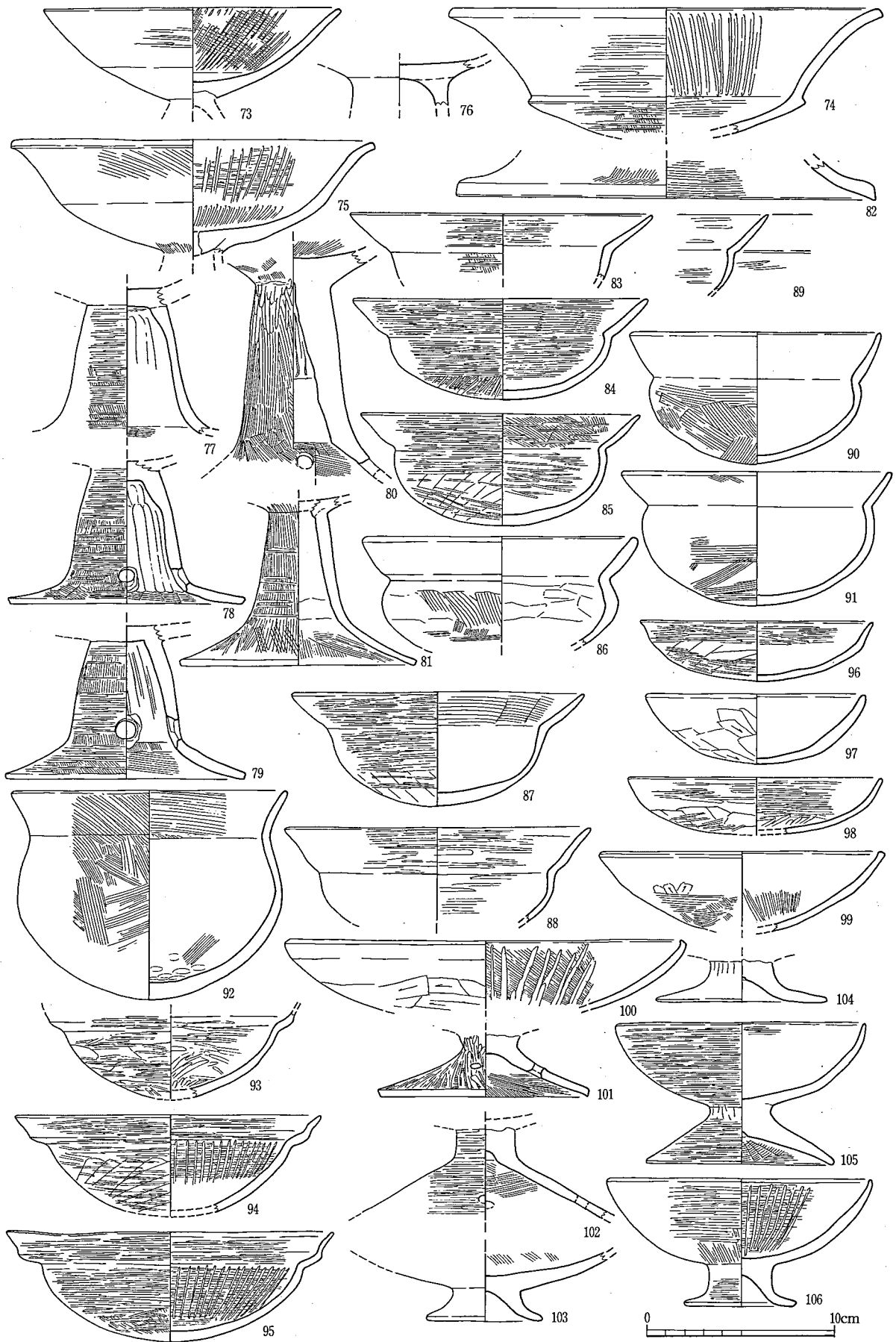
73~82は高杯片。杯部片73~75の外面は73・74が横ミガキ、75がかなり摩滅し一部斜めハケ。口縁部内面はいずれも暗文風に縦ミガキし、73は縦ミガキ前斜めハケ、75は縦ミガキ前横ミガキ残る。74は屈曲部の段が明瞭。76は脚部と杯部の接合部付近破片で、摩滅進む。77~81は脚部破片。外面は縦ハケ後縦ミガキの80以外は縦ハケ後横ミガキ。いずれも脚裾部内面は横斜めハケ。脚柱部内面は78が板状工具ナデ条痕見え、80上部は絞り痕。他はナデ、ナデ上げ。78~80は半乾燥段階で外か



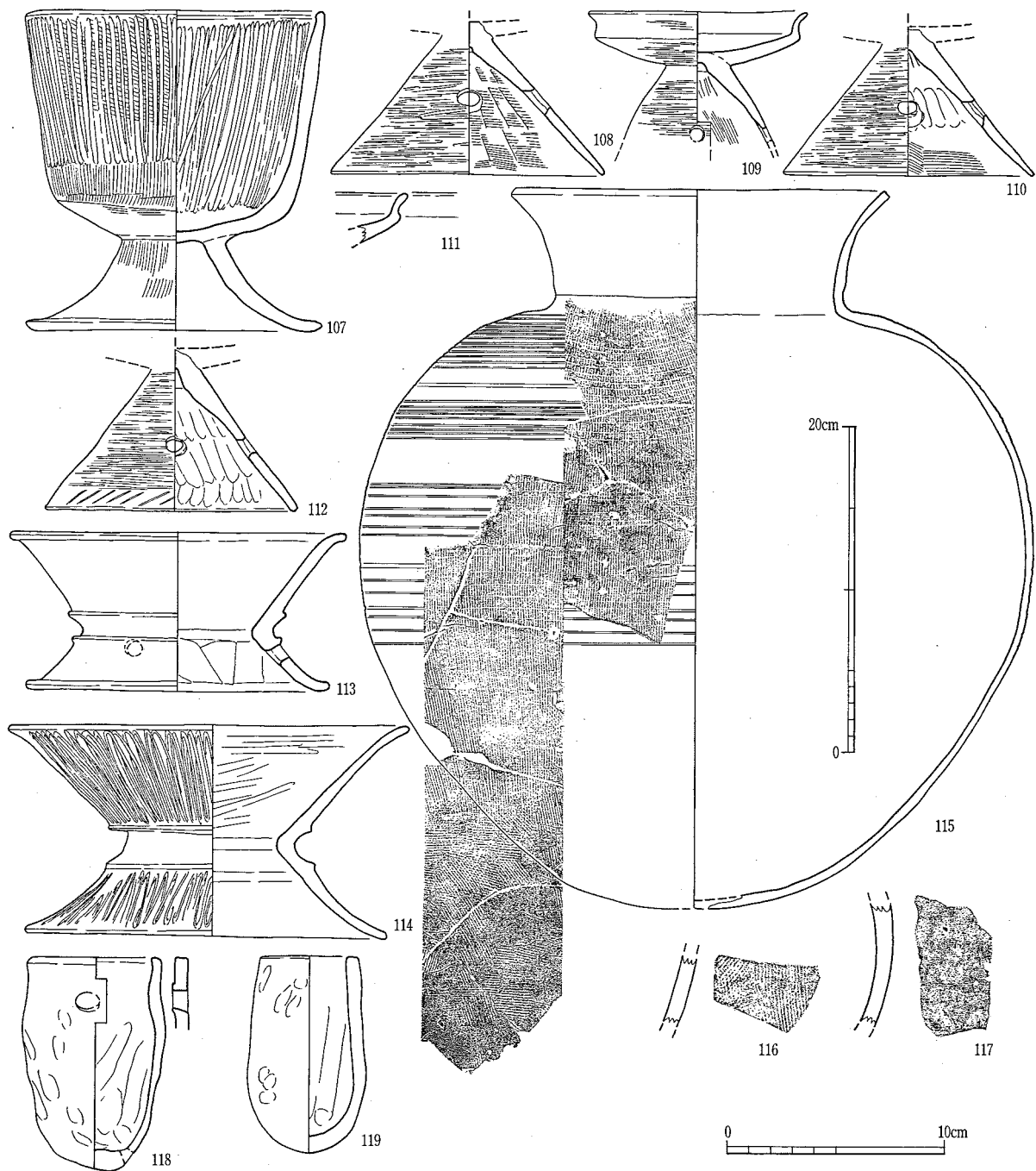
第192图 97号竖穴住居跡出土土器实测图 (3) (1/4)



第193図 97号竪穴住居跡出土土器実測図(4) (67~72は1/3、他は1/4)



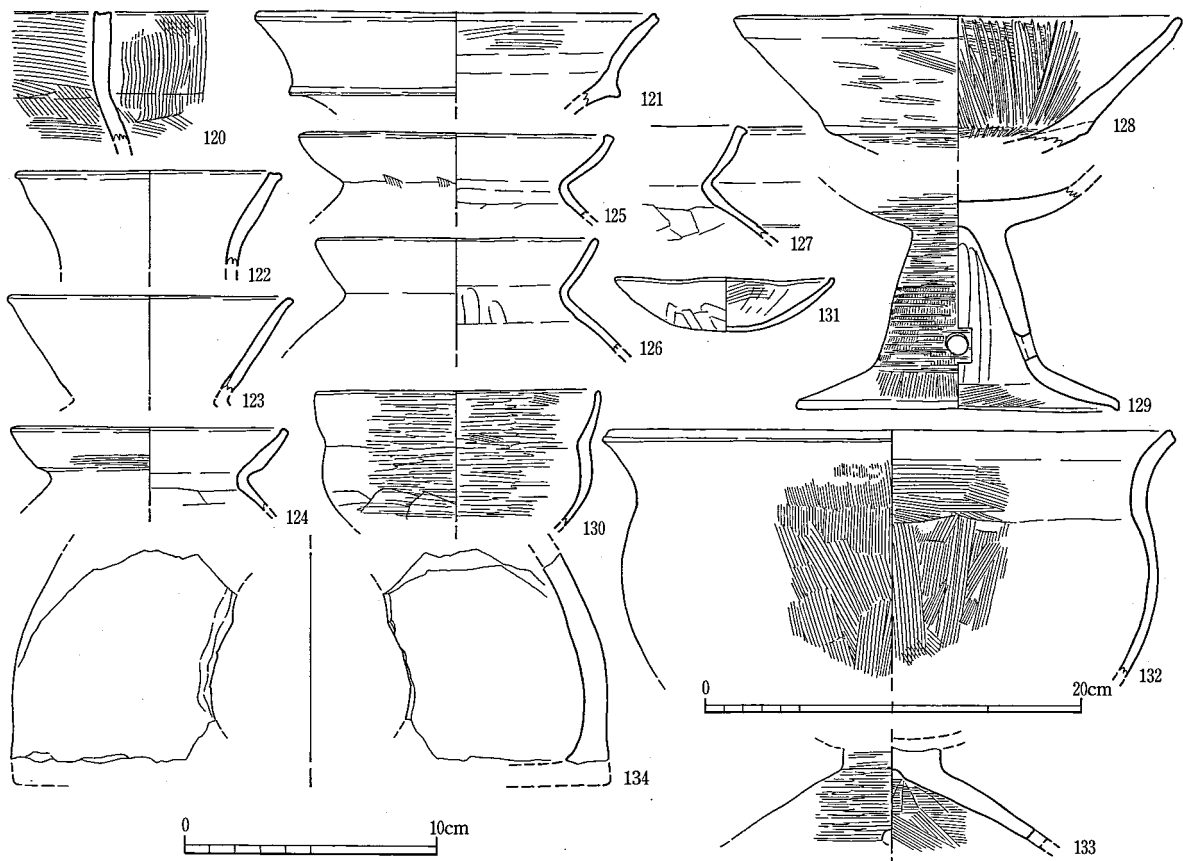
第194图 97号竖穴住居跡出土土器実測図(5)(1/3)



第195図 97号竪穴住居跡出土土器実測図(6)(115は1/4、他は1/3)

ら2ヶ所穿孔。82は径が大きい脚裾部片と考えられ、内外ハケメ。橙褐色の75・77・78以外は淡黄褐色。

83~92は外反口縁鉢。92は胴部が深く、小形甕と区別の難しい形態。外面調整は83~85が口縁~胴部横ミガキ、底部不定方向ミガキで、摩滅進む88・89も同様か。一方、86・90・91は口縁外面横ナデ、胴部外面ハケメ。92はハケメ。口縁内面は84・87・92が横ハケ、83・88・89横ミガキ、85斜めハケ後横ミガキ、86横ナデで、90・91は摩滅。胴部内面は83・92ナデ、84・85・88・89横ミガキ、86ケズリで、他は摩滅のため不明。86・87・90淡黄褐色、89黄橙色、他は橙褐色。85は底部を除く外面、92は胴上半部外面に煤付着。



第196図 97号竪穴住居跡出土土器実測図(7) (120~127・132は1/4、他は1/3)

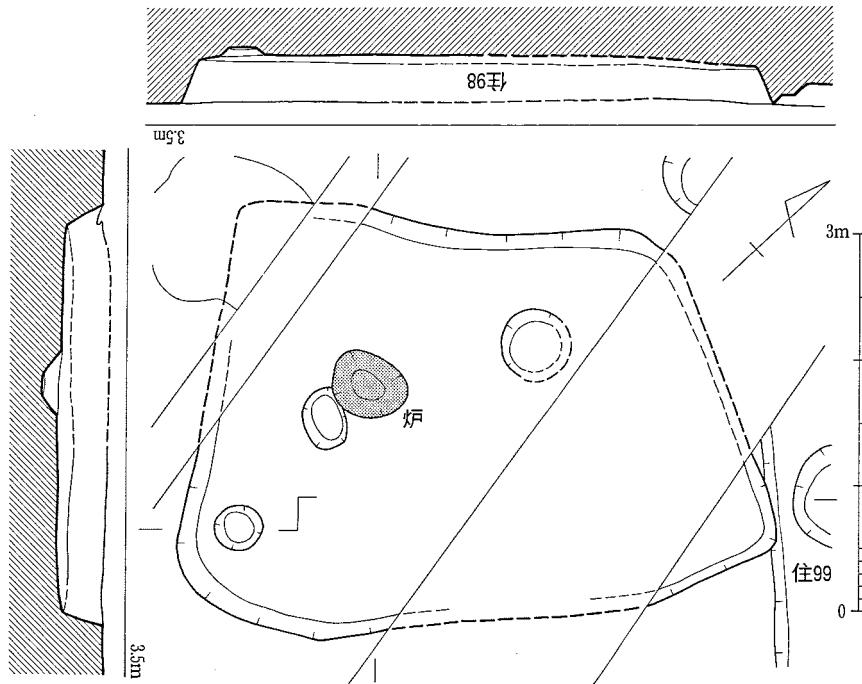
93~95は二重口縁鉢。外面はいずれも底部ヘラケズリ後ミガキで仕上げ、内面は93がミガキ、94・95が横ミガキ後縦暗文風縦ミガキを胴部に施す。93は黄褐色、他は橙褐色。95は口縁外面に煤附着。
96~100は直口縁鉢。96・98は外底ヘラケズリ後、内外ミガキ仕上げ。97は外底ヘラケズリ後内外ナデ仕上げ。99口縁部は横ナデ。100は外底ヘラケズリ、口縁部付近ナデ、内面斜めハケ後暗文風縦ミガキ。96・98橙褐色、100褐色、他は淡黄褐色。

101~106は脚付鉢とその破片。101は外面ハケ後縦ミガキで、3ヶ所に穿孔。102は外面ミガキ、内面ハケ仕上げで、1ヶ所に穿孔残る。103は外面~脚部内面にかけてナデで、鉢部内面はハケ後ミガキの可能性ある。104は内面頂部に軸受痕。105は外面横ミガキ仕上げで、脚外上部に板ナデ痕。鉢部内面は摩滅進むがミガキか。106は鉢部外面ハケ後ミガキ、内面横ミガキ後縦ミガキ。脚部内面はあるいはケズリか。101・105は橙褐色、他は淡黄褐色。

107は底部と口縁部を画する稜が明確な深い鉢部に大きく広がる脚の付いた特殊な形態。鉢部外面ハケ後縦ミガキ、内面縦ミガキ。脚部は外面縦ハケ後横ナデ。淡黄褐色を呈す。

108~112は橙褐色を呈する小形精製器台。外面はいずれも横ミガキ仕上げであるが、111は摩滅する。112は脚端に斜め方向の擦痕が残る。108・110・112は2ヶ所に半乾燥段階、外面ミガキ後に穿孔する。108も同様と思われる。脚部内面は108に横ハケ、109に縦ハケ残り、112はナデ。

113・114は山陰系鼓形器台。113は外面~口縁内面ナデ、裾部内面ケズリ。裾部には3ヶ所穿孔が見られる。114は屈曲部を除き外面ミガキ暗文。特に口縁部は振幅の大きな波状のミガキを2回重ねている。口縁内面は太いミガキ、裾部内面は横ナデ。いずれも白黄褐色~淡黄褐色。



第197図 98号竪穴住居跡実測図 (1/60)

115～117は半島系土器。115は口縁部～胴上部、胴下部の大きな2片を図上で復元した。復元はやや不安であるが、大形の壺となる。外面は底部が不定方向平行タタキ、胴中部～肩部は縦方向の細かな平行タタキを施す。胴部上半には沈線を巡らしており、肩部と最大径付近は凹線で画する。内面はナデであるが底部近くに微かな凹凸があり、あるいは無文当て具痕か。胎土は金雲母を少し含むが精良で、焼成はやや甘く瓦質に近い。暗灰色～淡黄灰色を呈す。116・117は胴部片である。外面平行タタキの116は瓦質に近い甘い焼成で、灰黄褐色～灰白色。117は外面無文で、胎土精良、焼成堅緻、黄褐色。

118・119は蛸壺で、いずれも黄褐色を呈す。

120～134は97号住居跡と100号住居跡の上層から出土したもの。

120は内外ハケメの在り系直口壺か。121は畿内系の二重口縁壺と考えられ、内面ハケメ後内外横ナデ。122・123は布留系直口壺片。124～127は布留系甕。128・129は高杯片。128は外面横ミガキ、内面横ハケ後縦ミガキ。129は外面縦ハケ後横ミガキで、杯部内面ミガキ、脚部内面ナデ、脚裾内面ハケ。2ヶ所に穿孔する。130は外反口縁鉢。内外横ミガキで、口縁部内面にはハケ、底部外面にヘラケズリ残る。131は直口鉢で外面ヘラケズリ、内面ハケ。132は大形で深い器形の鉢。口縁以外の内外をハケで仕上げるが、頸部内面はハケ前ケズリわずかに見える。133は脚付鉢脚部。外面ミガキで仕上げる。120・121・127～129橙褐色、126黄橙色、130褐色、他は淡黄褐色。

134は窓様の切込みを施した破片で、平底をなす底部近くに位置すると思われる。窓とすれば円形あるいは楕円形が想定される。切込み面には煤が付着するので変形した手焙形土器の上部破片となる可能性も否定できないが、99号竪穴住居跡22の土器と類似したものと考えておきたい。半島系の土器との関連も気になるが、淡黄褐色を呈し、色調、焼成、胎土は在地の土師器と類似する。内外ナデ。(重藤)

98号竪穴住居跡（図版41、第197図）

3南5区に位置する。南東隅が99号竪穴住居跡に接するが両者の切合いは十分に確認したものではない。北東部に校舎基礎が有り不明な部分が多く、西南隅も攪乱により失われている。現状では西壁より東壁が長くなった歪な方形を呈しているが、北東隅の掘り間違いによるものと思われる。床面中央部南寄りに茶褐色細砂を埋土とする炉跡を検出した。住居跡覆土は暗褐灰色細砂。土器の他に石錘（第242図2）と浮子（第244図46）が出土した。

出土土器（第198・199図） 1は在地系大形壺頸部片か。内面ヘラナデ、外面ハケメ。2は布留系直口壺で口縁内外ハケメ残る。3・4は山陰系二重口縁壺。5は畿内系二重口縁壺。1次口縁が下方に垂れるが、乾燥時に口縁部重量により歪んだか。外面横ミガキ、口縁部内面斜めハケ、頸部内面ナデ上げ。外面橙褐色化粧土施す。6は小形丸底壺で横ミガキ仕上げの精製品。白褐色4および5外面以外は淡黄褐色。

7は底部が器壁の薄いレンズ状底をなす在地系甕底部。外面はナデか。8～15は布留系甕で16はその底部片か。13～16は比較的小形のもの。口縁部は直線的に外反し、口縁端は外傾する面をなすものが多い。9・12・14は端部を上方につまみ上げ、11・13は丸くおさめる。8・10は肩部に5条1単位の櫛描直線文を施し、14は直線沈線文を巡らす。9は肩部の一部に化粧土が厚くかかり、ハケメを消したような効果をあげている。10は肩部の横ハケ後に胴下部斜めハケか。9・12・15・16は残存部分全体に煤付着し、12以外は二次加熱も顕著。17・18は小形甕で本遺跡では例の少ない器形。18は口縁が著しく歪む。いずれも胴部外面縦ハケ、内面ケズリ仕上げ。8～18は白黄褐色～淡黄褐色。

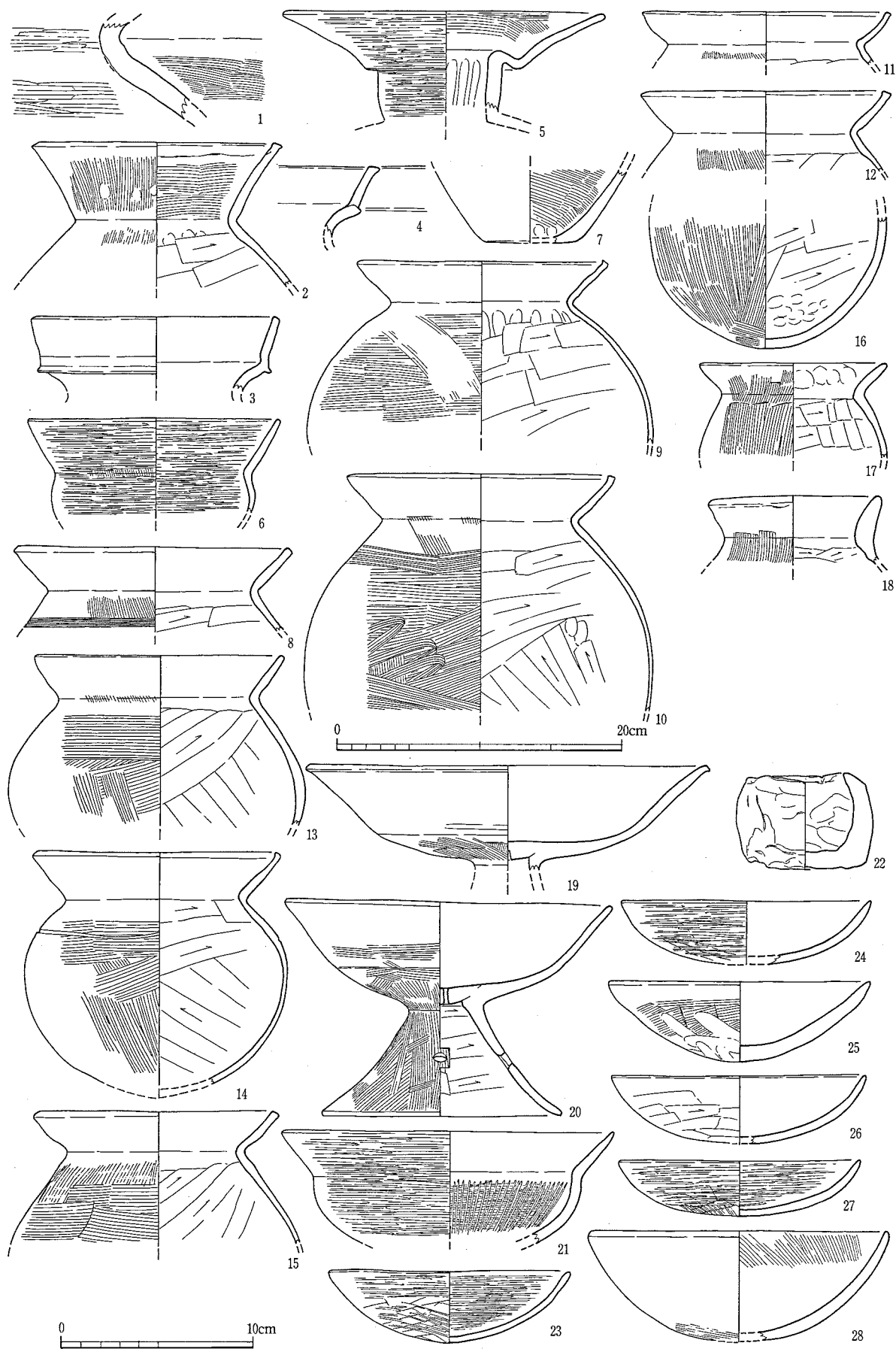
19・20は高杯。完形の20は杯屈曲部稜が甘く、脚がスカート状に広がる特異形。裾に乾燥が進んだ段階で2ヶ所穿孔する。杯部と脚部の接合に際し粘土を充填したと考えられ、その中心に軸受痕状の貫通する孔がある。杯部内面～口縁外面ナデ、杯部外面～裾外面ハケ、脚部内面ヘラケズリ。19は20同様に粘土充填し、杯底下面に軸受痕。杯底部外面はハケメ、他はナデ仕上げか。いずれも淡黄褐色。

21は外反口縁鉢である。外面横ミガキ、胴部内面横ミガキ後縦ミガキ暗文、口縁内面ナデか。22は手捏風で平底の鉢。非常にナデが粗く凹凸多い。23～28は単口縁の鉢。23・27は外底部ヘラケズリの後内外をミガキ仕上げ。24は外面調整23・27と同様であるが、内面はナデか。25は外面ハケ後指でナデ消し、内面はナデ。26は外底部ヘラケズリで他はナデ仕上げ。28は外底部と口縁内面にハケメ残るが他はナデ。22褐色、25・26・28淡黄褐色、他は橙褐色。

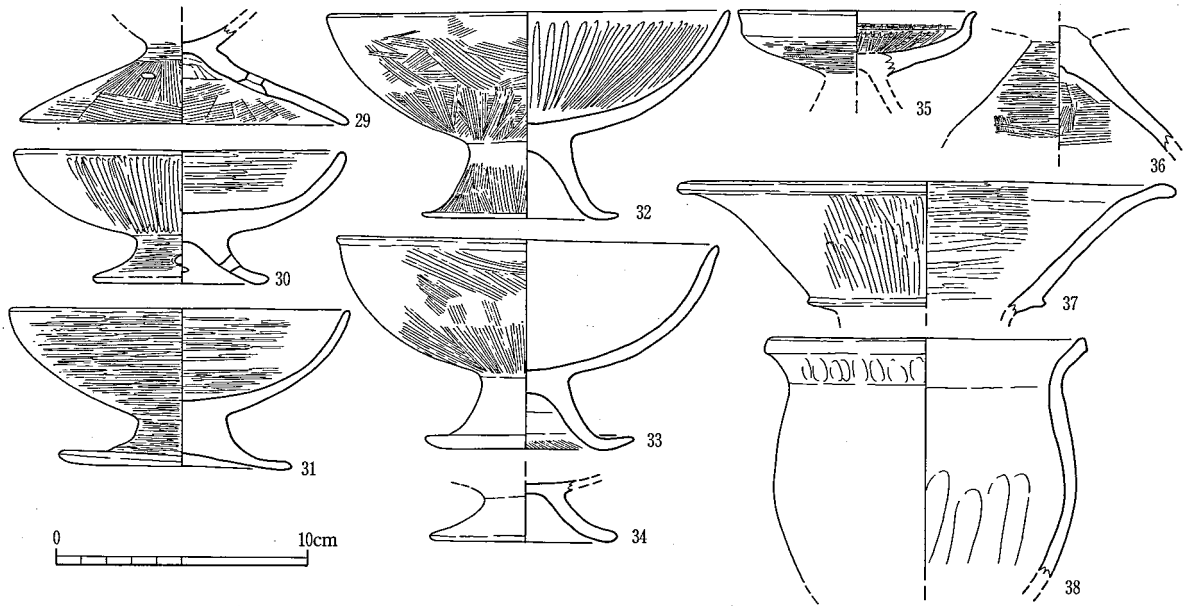
29～34は脚付鉢。29は脚裾が広がる精製品で、鉢部外面ミガキ、脚部外面ハケメ。3ヶ所に乾燥が進んだ段階、内面ハケ後に穿孔。30は鉢部外面縦ミガキ、脚部外面及び鉢部内面横ミガキ。脚の2ヶ所に乾燥の進んでない状態、恐らくミガキ前に穿孔。31は鉢部内外、脚部外面横ミガキ仕上げの精製品。32・33はともに脚が高い。鉢部外面はいずれもハケメ。32は鉢部内面縦ミガキ。33は鉢部内面ナデで、脚裾内面にハケ残る。34は内外とも横ナデ。30暗褐色、31橙褐色、他は淡黄褐色～白黄褐色。

35・36は小形精製器台。35は口縁横ナデで外底部ハケ後横ミガキ、内面横ミガキ後縦ミガキ。橙褐色。36は外面横ミガキ、内面横ハケ。白黄褐色。37は山陰系鼓形器台で内外面ミガキ。灰黄褐色。

38は半島系の小形鉢か。口縁部は外反し、端部が面をなす。口縁外面に指頭圧痕、内面下部にナ



第198図 98号竖穴住居跡出土土器実測図(1) (1~4・7~12は1/3、他は1/4)



第199図 98号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3)

デ上げ残るが他は摩滅。焼成甘く、暗褐色を呈す。二次加熱を受けるとともに、他の土師器に見られないほどのコゲが内面に付着している。(重藤)

99号竪穴住居跡 (図版42、第200図)

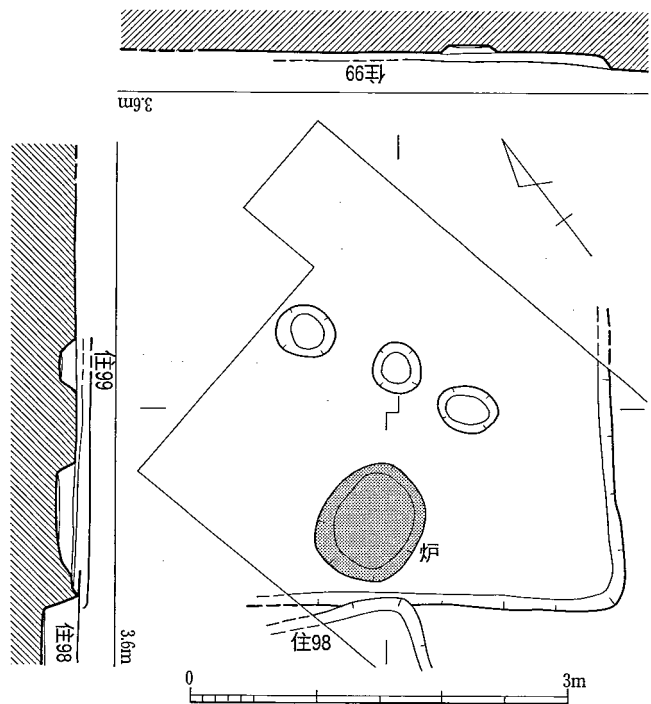
3南4区に位置する。北東-南西に主軸を置く方形住居と推定されるが、北・西・東の3方向に校舎基礎があり、東壁、南壁の一部を検出したにとどまる。南壁際中央に炉跡がある。床面より10cm程浮いて比較的、多量の土器が出土したが、一括性は良好と思われる。覆土は暗黄褐色細砂。

出土土器 (第201・202図) 1~3は山陰系二重口縁壺。4は在地系と思われる壺の胴下部破片で底部はレンズ状底をなす。内外のハケメは粗い。5もやや大きいレンズ状底をなし、恐らく山陰系壺胴下部破片か。4が一部淡橙褐色を呈すが、他は灰黄褐色~淡黄褐色。

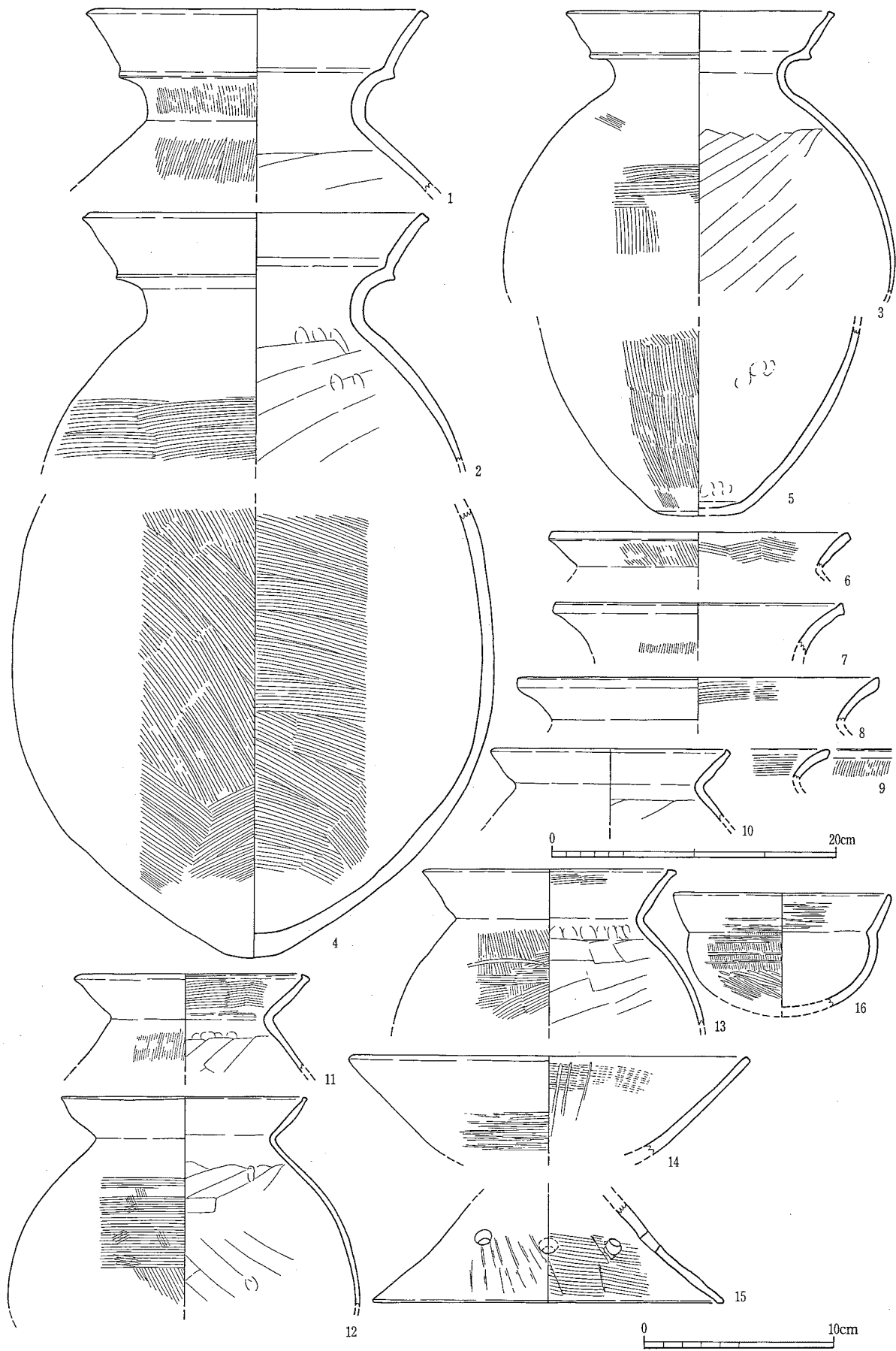
6~9は在地系甕口縁部。いずれも外反し端部が面をなす。内外にハケメを残すものが多い。7・9淡褐色、6・8淡黄褐色。

10~13は布留系甕。いずれも口縁は直線的に外傾し、11・13は端部を上にならびにつまみ出す。13の肩部には沈線文が一部見えるが途切れている。11が暗褐灰色を呈すが、他は白黄褐色~淡黄褐色。

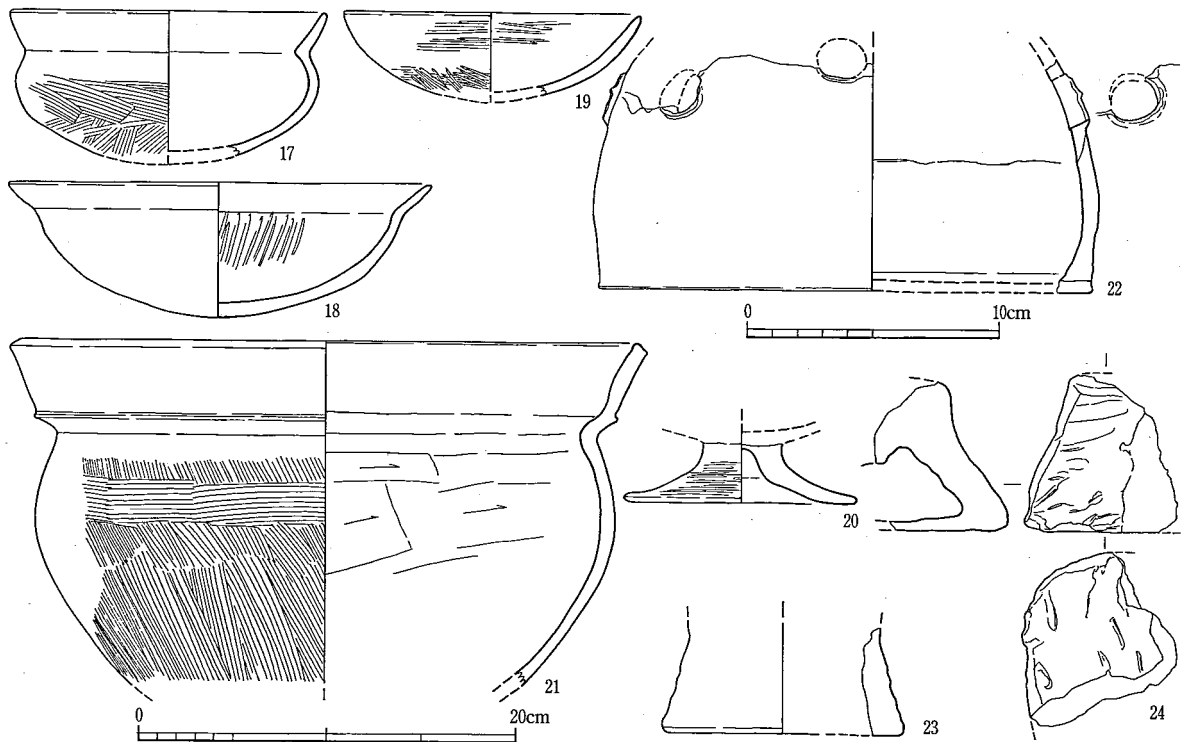
14は高杯杯部。摩滅が進むが、外面横ミガキ、内面ハケメ後縦ミガキ。橙褐色。15は高杯裾部か。



第200図 99号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第201図 99号竖穴住居跡出土土器実測図 (1) (14~16は1/3、他は1/4)



第202図 99号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (21・23・24は1/4、他は1/3)

スカート状に開き、0・3・5・8時方向に乾燥前穿孔残る。外面板ナデ、内面斜めハケ後ナデ。あるいは東海系高杯となるか。淡黄褐色。

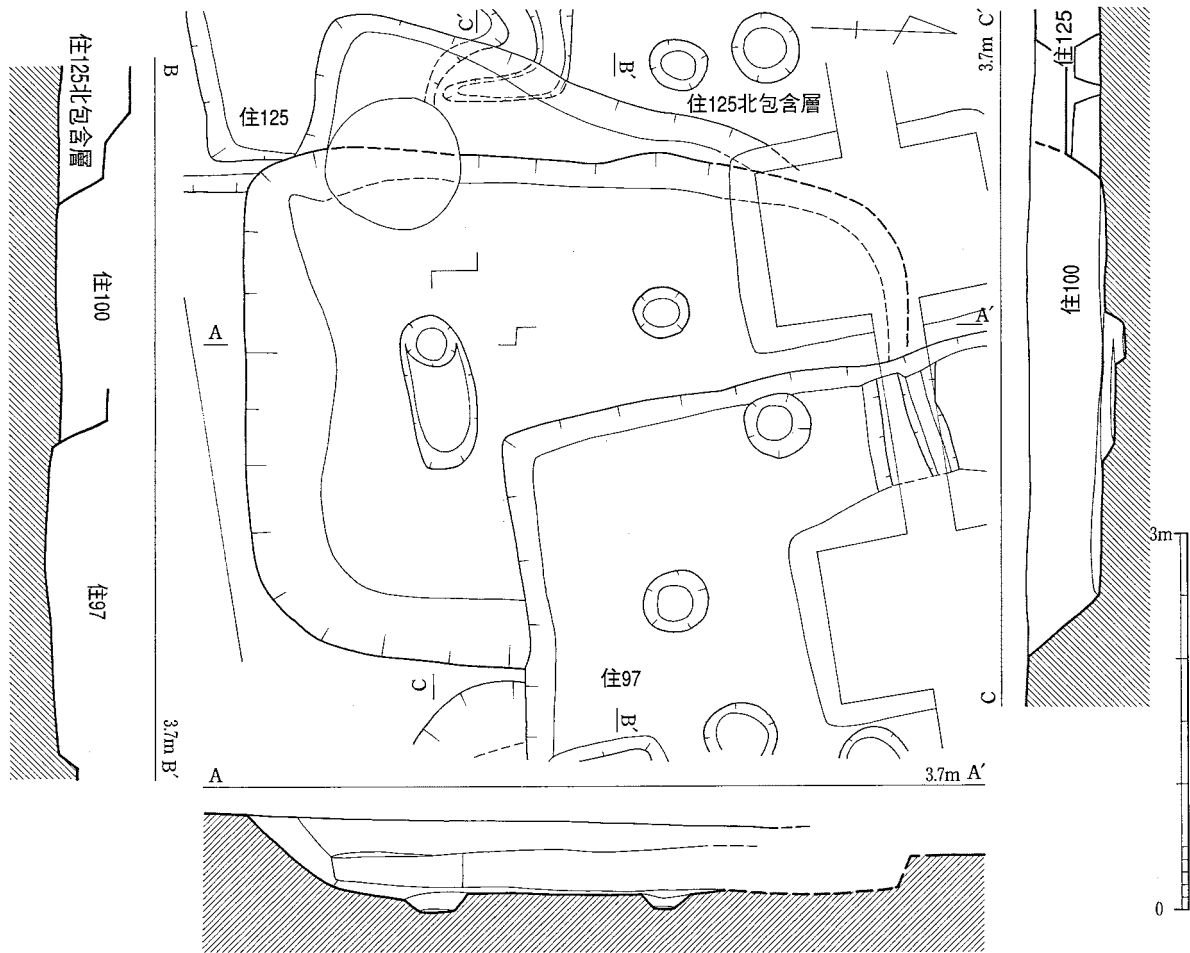
16~18は口縁部が外反する鉢。16は深い器形で、外面縦ハケ後、外面~口縁内面を横ミガキ。胴部内面はナデ。17は傾部がくびれる形態で、口縁内外ナデ、外底部ハケ、内面摩滅。18は外面摩滅、口縁内外ナデ、内面縦ミガキ。19は直口縁で、摩滅進むが内外横ミガキ。20は脚付鉢で外面ミガキ、内面ナデ。21は山陰系二重口縁大形鉢である。外面は肩部縦ハケ、肩部横ハケ、下部縦斜めハケの順。胴部内面はヘラケズリ。胴部外面には煤付着。16・19・20は橙褐色、他は淡黄褐色。

22は1/4周弱の破片で、大きな平底から丸みを持った胴部が立ち上がる。上方にやや斜め上を向いた直径3cm穿孔が2ヶ所にある。穿孔は内から外か。内外ナデ。淡黄褐色を呈し、外面に大きな黒斑があり、焼成、色調とも在地の土師器に類似するが、他に例をみない特異な器形。大きな平底をなすことを重視すれば、半島系土器の可能性もあるが、韓国にも類例を見いだせていない。

23は柱状支脚の端部破片。24は杓形支脚の爪先部破片で内部は中空。いずれも赤褐色。(重藤)

100号竪穴住居跡 (図版42、第203図)

3中1区西寄りに位置している。発掘時には125号竪穴住居跡を切り、97号竪穴住居跡に切られると考えた。ただ125号住居跡との切合いは自信がない。現状で南壁と西壁、東壁の一部を検出しており、東南隅、西南隅の位置はほぼ間違いない。北壁は97号住居跡に切られるとともに、校舎基礎があるため不明であるが、校舎基礎をこえて北には広がらないことを確認している。恐らく基礎付近に位置していたと思われる。したがって、ほぼ南北に主軸をおく長方形の竪穴住居に復元される。カマド、炉は検出していない。覆土は灰黄褐色細砂が主体で、下部に暗褐色細砂が堆積。土器



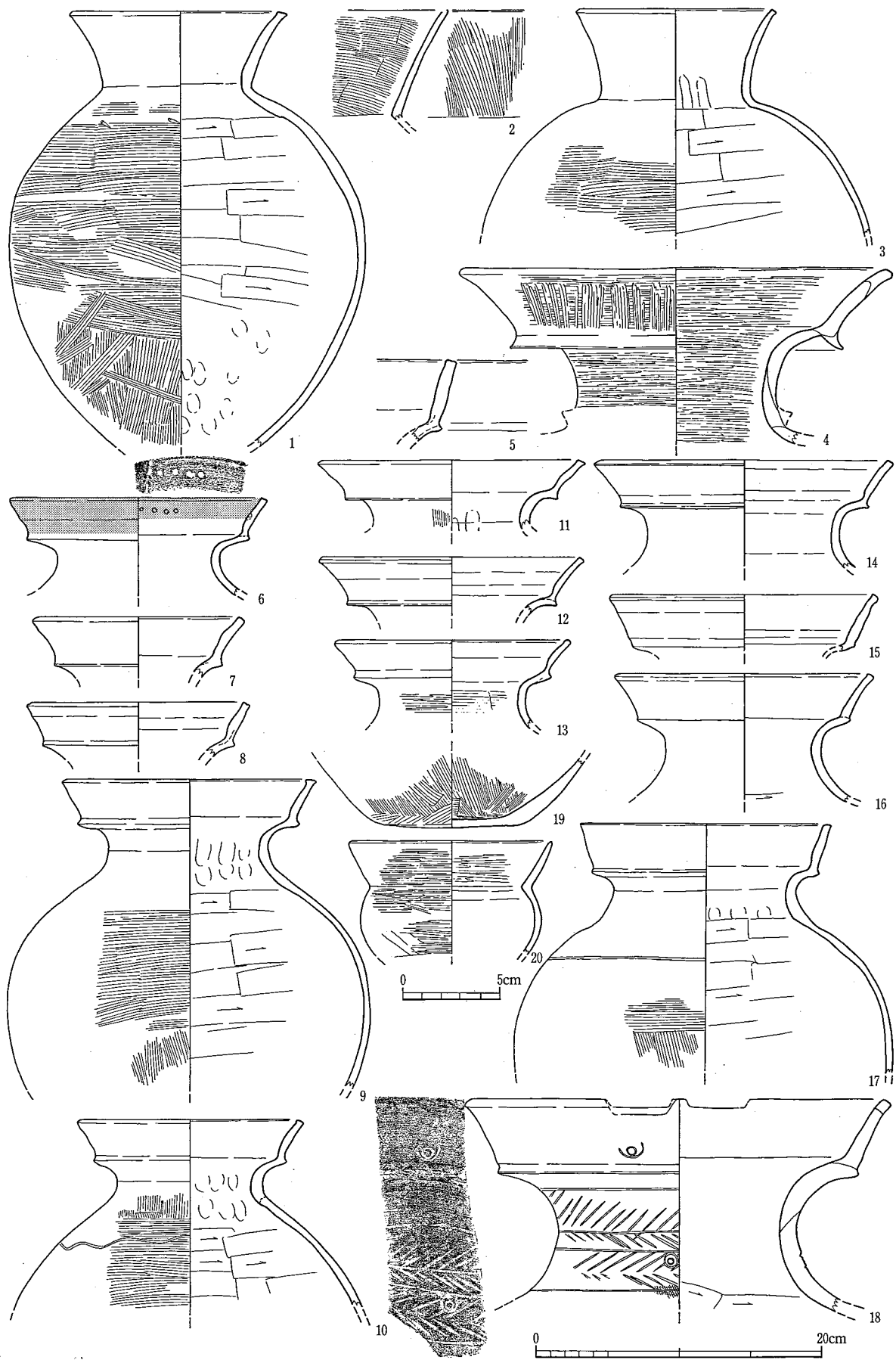
第203図 100号竪穴住居跡実測図 (1/60)

の他に刀子(第237図27)が出土。

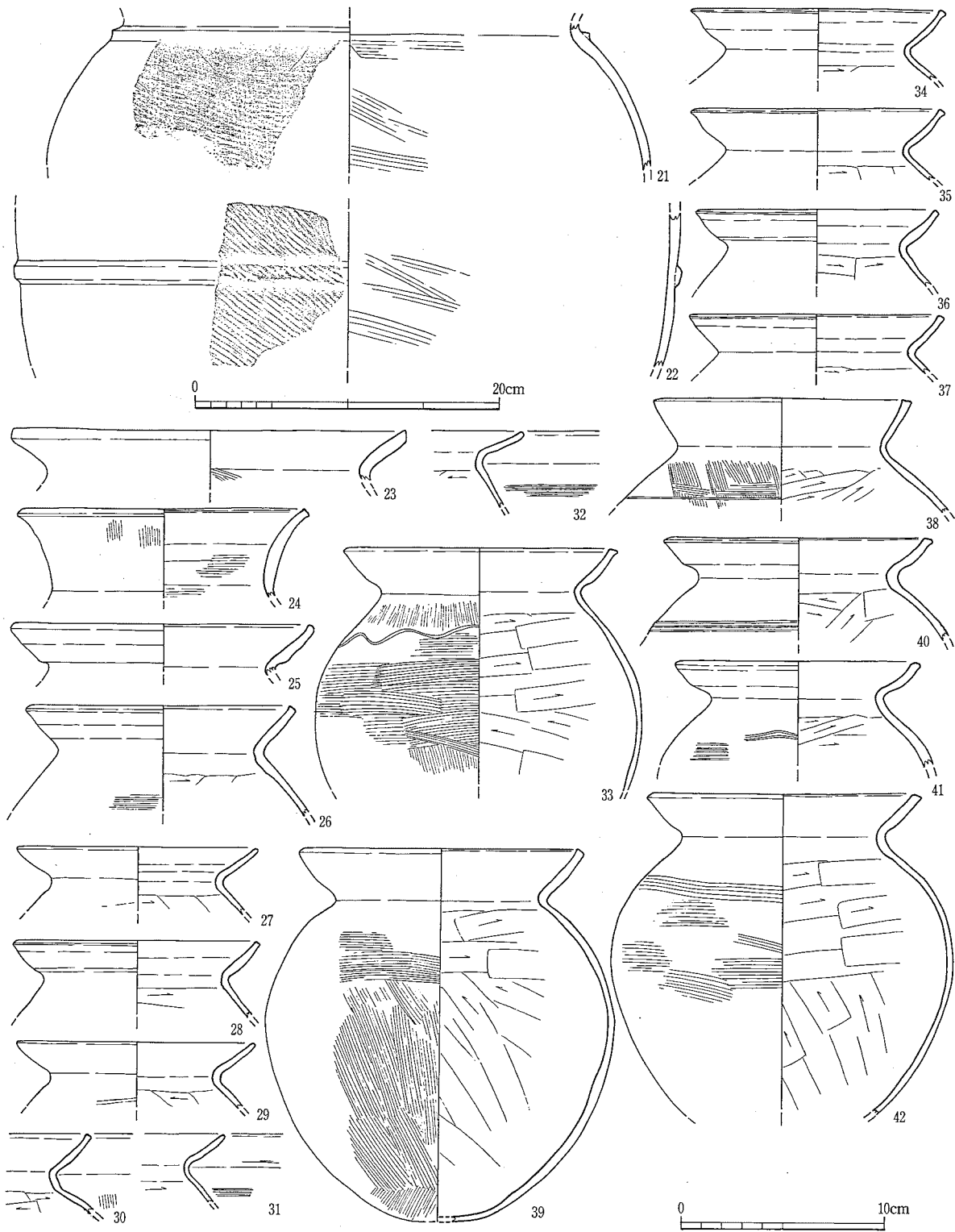
出土土器(第204~206図) 1~3・9・17・18・24・31・33・38・40・42・44・54は西壁床近くから一括して出土したものである。これらの出土位置は125号住居跡と切合う位置にあたり、いずれに伴うかは不安。それ以外にも隣接する97号住居跡に帰属するものを含む恐れがある。

1~3は直口壺。2は直線的に口縁が外傾し、内外ハケメ仕上げであることから、あるいは在地系か。1・3は白黄褐色~淡黄褐色、2は暗黄褐色。4は畿内系二重口縁壺口縁部。屈曲部を下方に垂下させ、肩部に突帯を貼付した痕跡がある。内外横ミガキし、口縁部外面はその後縦ミガキ。淡黄褐色。

5~18は山陰系二重口縁壺で、比較的大きな平底をなす19はその底部か。口縁はいずれも外傾し、屈曲部外面の稜は明瞭である。6は口縁部内面の一部に棒状工具による刺突を施し、口縁内外を赤彩する。10は肩部外面に波状沈線文、17は直線沈線文を巡らしている。18は口縁端部に幅4.5cm、深さ0.5cmの袢りを作り出した珍しい形態。口縁部内面に煤が付着する点も注目される。口縁部外面に半円形線刻と竹管文を組み合わせた文様、頸部外面に有軸羽状文を巡らした後、二重の竹管文を施文する。19は底部近くに右上りタタキ残る。黄橙褐色の12、暗黄褐色の19以外は白黄褐色~淡黄褐色。



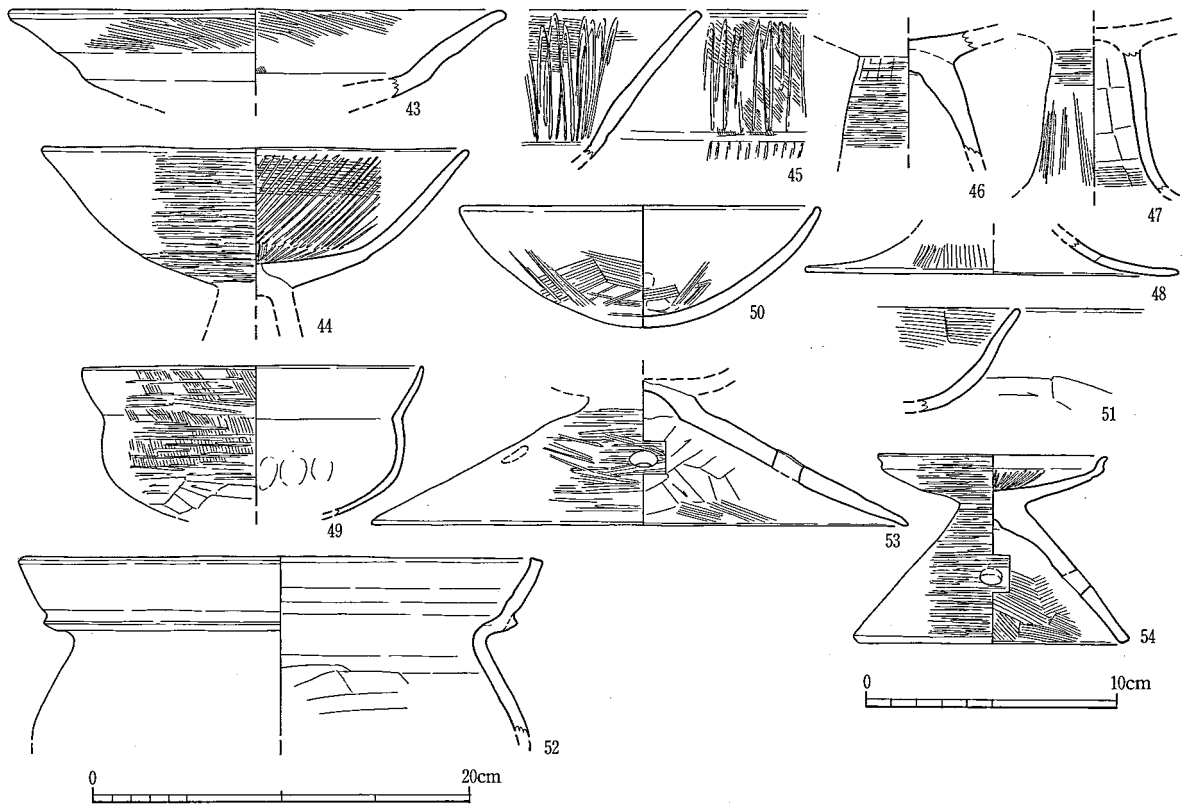
第204図 100号竪穴住居跡出土土器実測図 (1) (20は1/3、他は1/4)



第205図 100号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (39~42は1/3、他は1/4)

20は小形丸底壺で外面~口縁内面横ミガキ、胴部内面横ナデ。黄褐色を呈する。

21・22は在地系大甕で接合しないが同一個体か。胴部やや下部に低い台形突帯、頸部に三角突帯を貼付する。台形突帯上も含め外面を粗い左上り平行タタキで仕上げ、内面はハケメナデ消す。白黄褐色。23・24は口縁が外反し端部が面をなすので在地系甕か。24はやや口縁が長く、内面にハケ



第206図 100号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (52は1/4、他は1/3)

メ残す。23は暗黄褐色、24は灰黄褐色を呈す。

25～42は布留系甕で、39～42はやや小形。口縁部はわずかに内湾気味ながら直線的に外傾するものが多い。40・41は口縁部がやや強く内湾。口縁端部は外傾するものが多いが、丸く仕上げたもの(25・27・29・31・41)もある。31・32・40～42は肩部に櫛描直線文、33は波状沈線文、38は直線沈線文を巡らす。明黄褐色の41以外は白黄褐色～灰黄褐色～淡黄褐色。

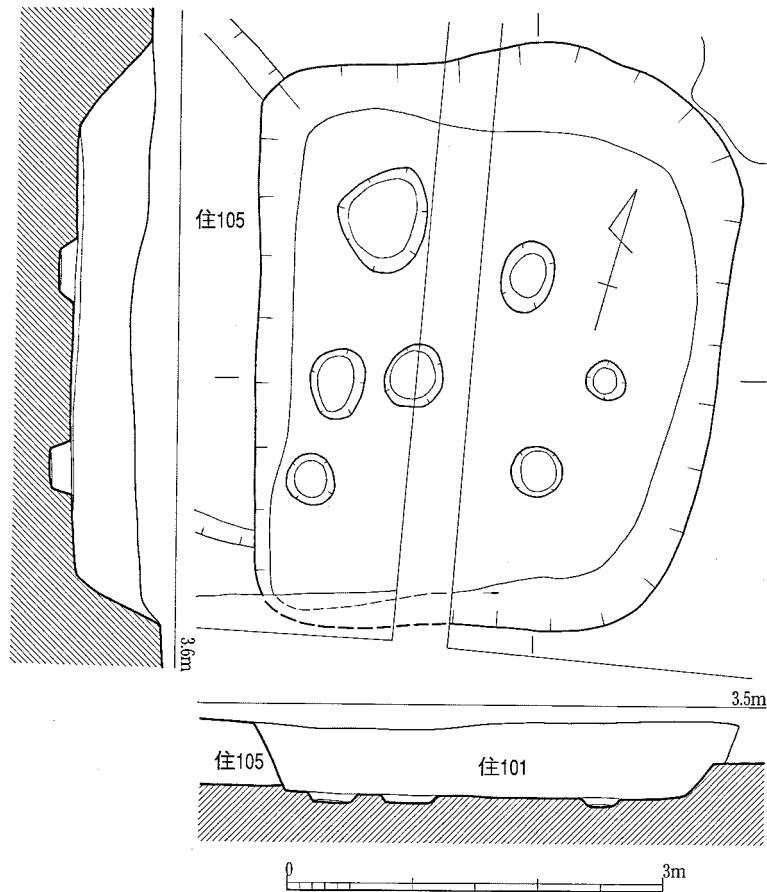
43～45は高杯杯部、46・47は高杯脚部、48は脚裾片か。43は口縁が短く、内外ハケメ、ナデ仕上げ。44は外面横ミガキ、内面横ハケ後斜め暗文風ミガキ。45は在地系高杯で内外ハケメ後暗文風ミガキ。46は外面ヘラナデ後横ミガキ、内面ナデ。47は外面縦ハケ後一部横ミガキし、内面は上部ケズリ、下部ハケメ。48は外面縦ミガキ、内面ナデ。45黄橙色、47淡黄褐色、他は赤褐色。

49は外反口縁鉢で外面は底部ケズリ、胴上部～口縁ハケメ後横ミガキ。内面はナデ仕上げで、底部付近に指頭圧痕。50・51は直口縁鉢。50の底部付近は内外ハケ、口縁部はナデ仕上げ。51は口縁内面ハケ以外はナデ。52は山陰系二重口縁鉢で胴部内面ヘラケズリ。53は精製脚付鉢で外面ミガキ、内面ケズリ及びハケ。0・2時方向に穿孔が残る。51褐色、53黄橙色、他は白黄褐色～淡黄褐色。

54は小形精製器台で脚部が内湾する点が特徴的。脚裾端は器壁が厚く、角張る。外面横ミガキ、受部内面縦ミガキ。橙褐色であるが外面黒変。(重藤)

101号竪穴住居跡 (図版42、第207図)

3南6・7区に位置し、105号竪穴住居跡を切る。南壁は一部、校舎基礎に隠れているが、南北に主軸をおき、南北4.5m、東西3.8mの長方形の住居となるであろう。床面を5cm程下げすぎたた



第207図 101号竪穴住居跡実測図 (1/60)

めか、炉跡は検出されなかった。覆土から多量の土器が出土したが、105号住居跡との切合いも間違いなく、一括性は良好。土器以外に浮子（第244図47）、砥石（第251図58～60）も出土している。覆土は斑状に黄褐色細砂を雜えた褐灰色細砂。

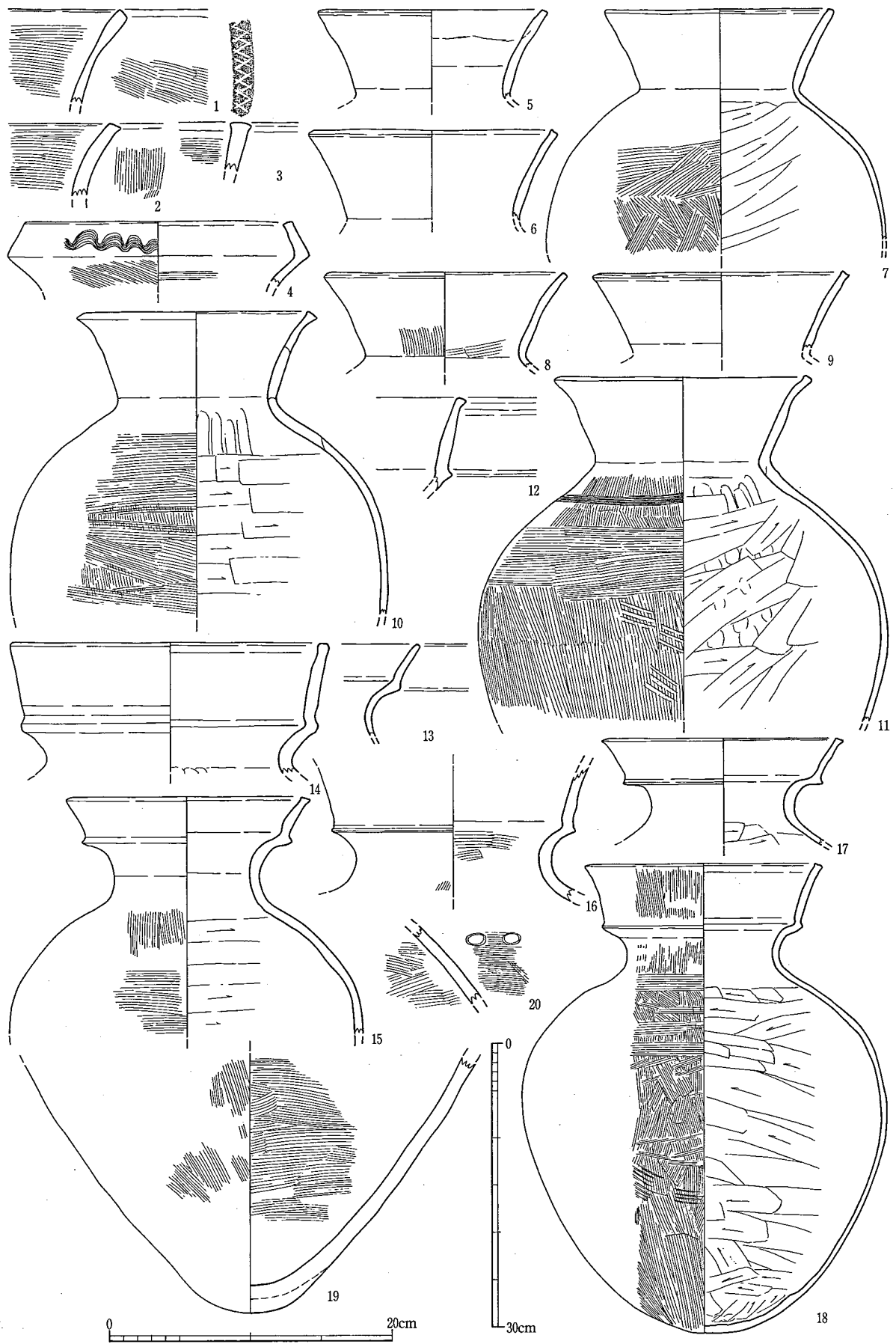
出土土器（第208～211図） 1～3は在地系直口壺。3は口縁上面に線刻による刻み目。外面横ナデで、他と比べ少し器壁が厚いので別の器種かも知れない。4は口縁外面に櫛描波状文を施文するので東九州系二重口縁壺となるか。2が暗褐色、他は淡黄褐色を呈する。

5～11は布留系直口壺。口縁部はわずかに外反気味ながら直線的に外傾するものが主体。6・9～11は口縁端部を斜め上方にわずかにつまみ出す。10は頸部内面にケズリ前ナデ上げ残る。11は肩部に5条1単位の櫛描直線文施す。外面は粗いタタキ、縦ハケ、肩部横ハケの順。内面はケズリが十分でなく、先行する指頭圧痕残す。いずれも白黄褐色～淡黄褐色。

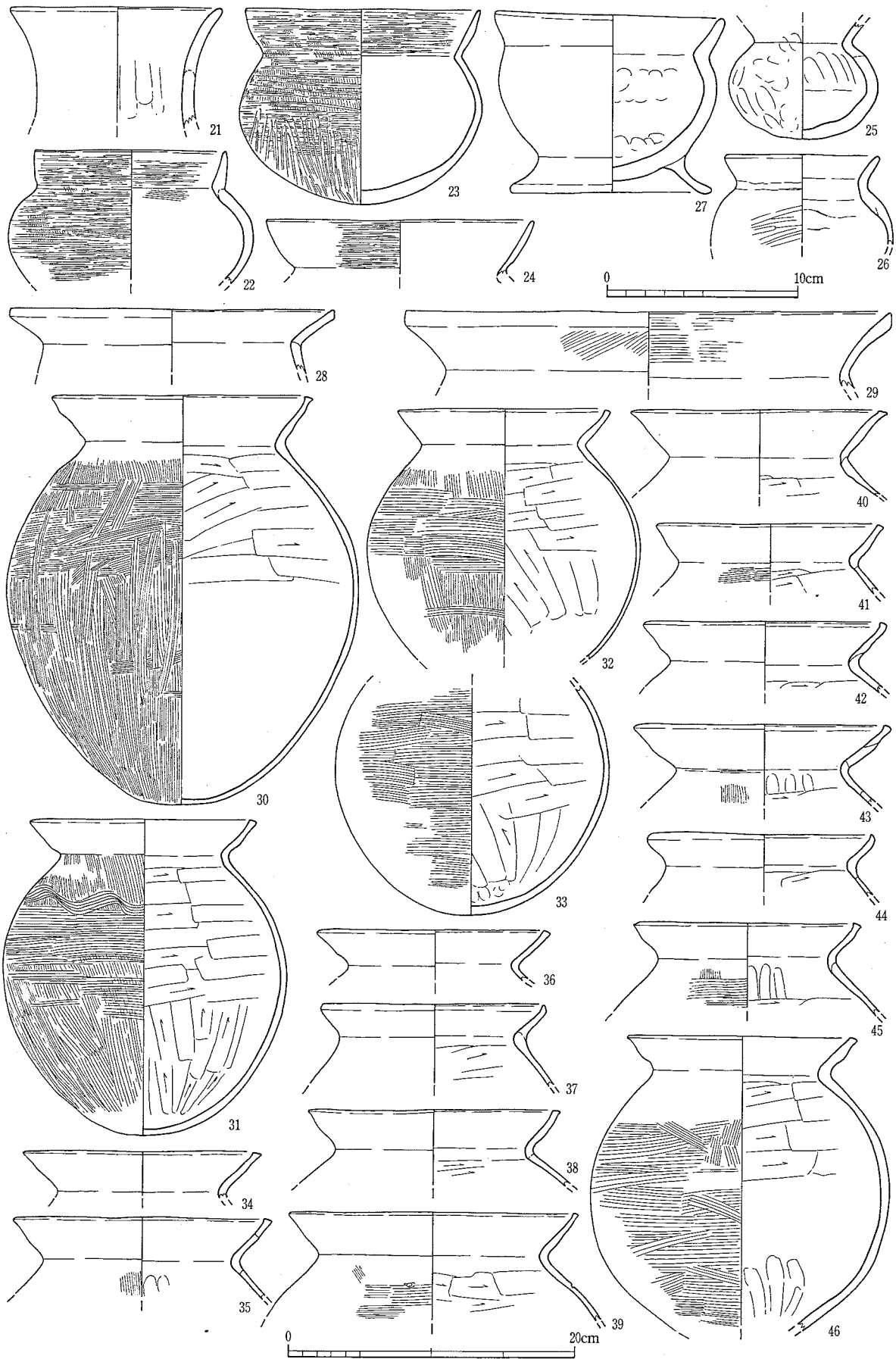
12～18は山陰系二重口縁壺である。口縁部が直立に近い14以外は、外傾する口縁をなす。18は器高49cmを測る大形品。胴外面下部一部タタキ。淡黄橙色の12以外は白黄褐色～淡黄褐色。

19は内外ハケメ仕上げの大形壺底部、20は竹管文を施した壺肩部。19黄褐色、20灰黄色。

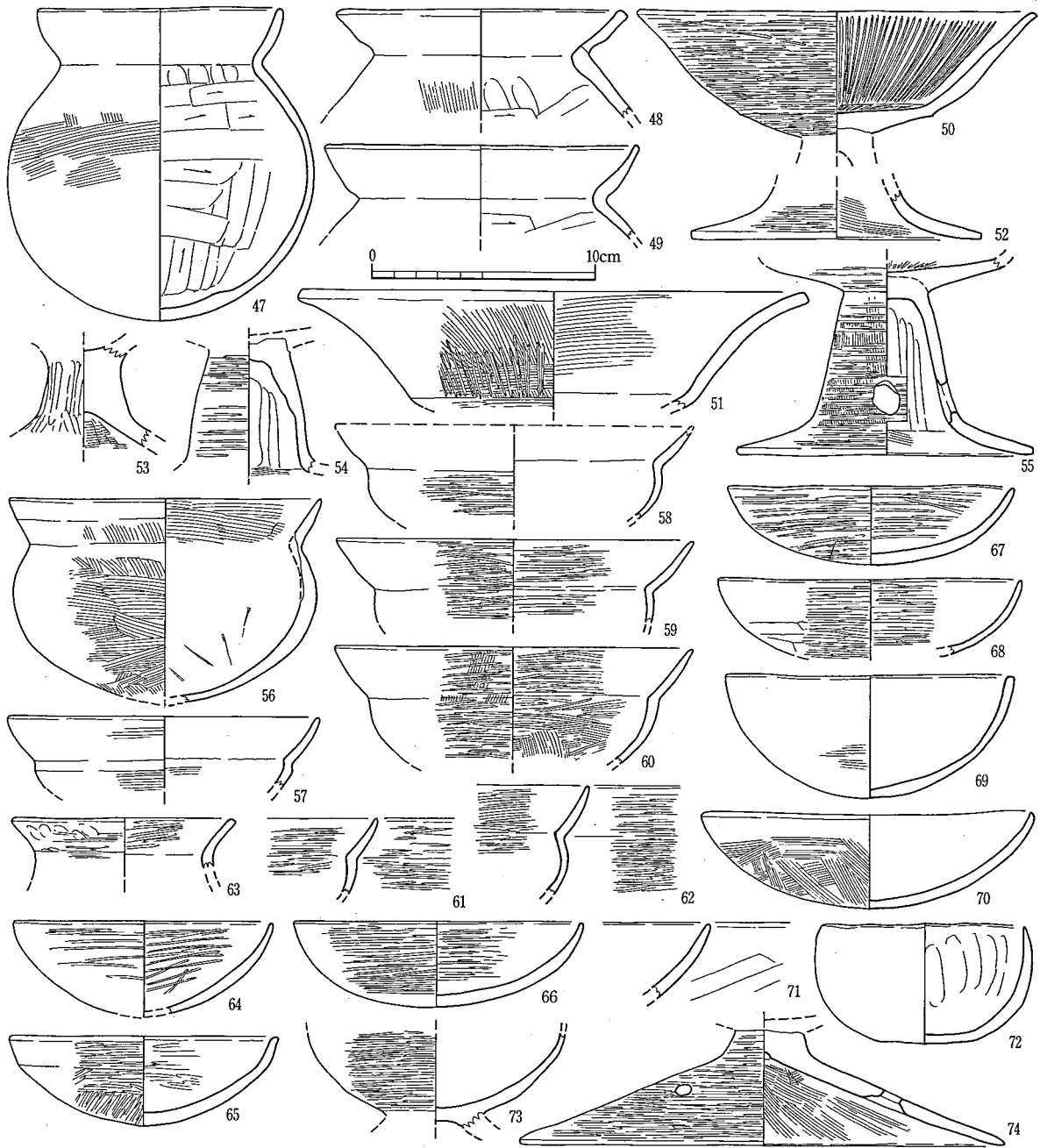
21は内外ナデの中形の直口壺口縁か。ただ端部付近で外反する点が特異。22～26は小形丸底壺。22・23は頸部が余り締まらず口縁の短いもの。いずれも外面縦ハケ後横ミガキで、23外底部はヘラケズリ後不定方向ミガキ。24も同様の器形で外横ミガキ、内ナデ。25・26は頸部のしまりが強い小形品。25は内外粗いナデ仕上げ。26は外面粗いミガキ、口縁～内面はナデ。27は在地系小形脚付壺。



第208図 101号竖穴住居跡出土土器実測図(1) (18は1/6、他は1/4)



第209図 101号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (21~27・46は1/3、他は1/4)

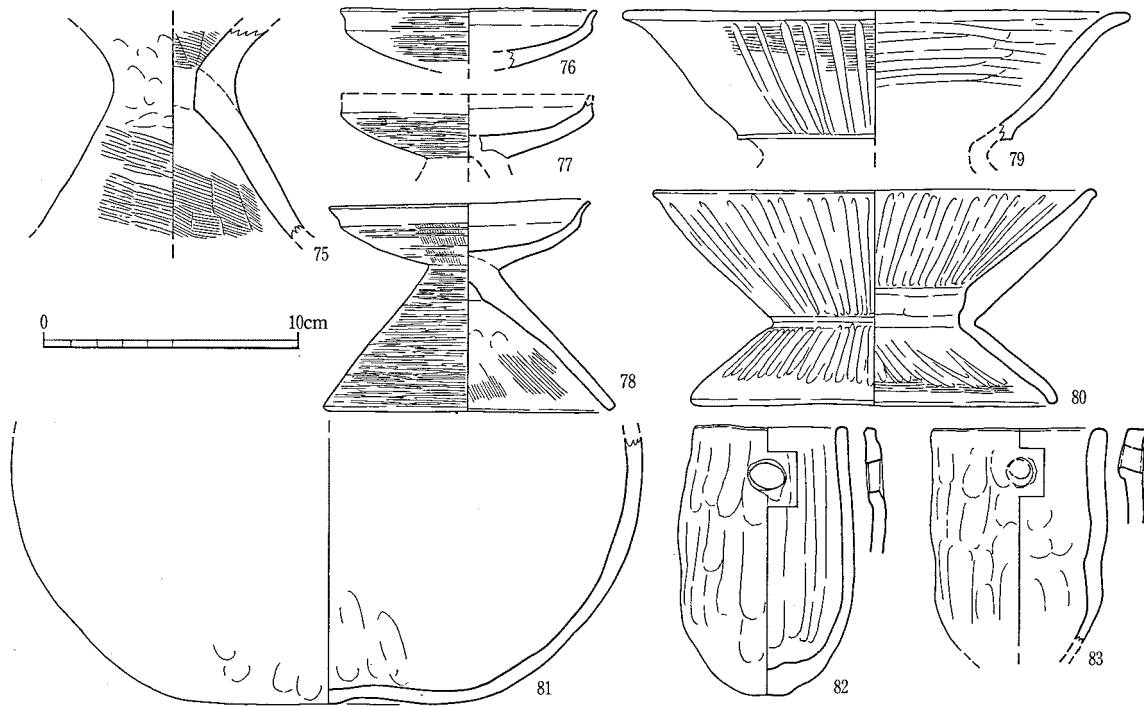


第210図 101号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/3)

外面はかなり摩滅するがミガキの可能性有り、内面はナデ。22・23橙褐色、24・26黄橙色。25・27淡黄褐色。

28・29は在地系甕で口縁端部は面をなす。28外面には煤が付着。28暗褐色、29淡黄褐色。

30～49は布留系甕で、46～49はその中でもやや小形に属する。口縁部はやや内湾気味ながら直線的に外傾するものが多い。端部は外傾する面をなすものも多く、30・32・35・42内面に、37・44は上方、38・40は外側にわずかにつまみ出す。47・49は丸く仕上げる。30は下半部縦ハケが肩部横ハケを切る。内下半はケズリが見えず、ナデ仕上げか。31は肩部に6条1単位の櫛描波状文を施している。32は肩部横ハケが上下の縦ハケを切る。39は肩部に粘土を削り取り凹ませたような点文が1ヶ所残存。33・34・36・37・41・43・47は外面全体、32・46は口縁部と胴下半、38・42・44・45は



第211図 101号竪穴住居跡出土土器実測図(4)(1/3)

口縁部外面に煤が付着。暗黄褐色の42・43以外は白黄褐色～淡黄褐色。

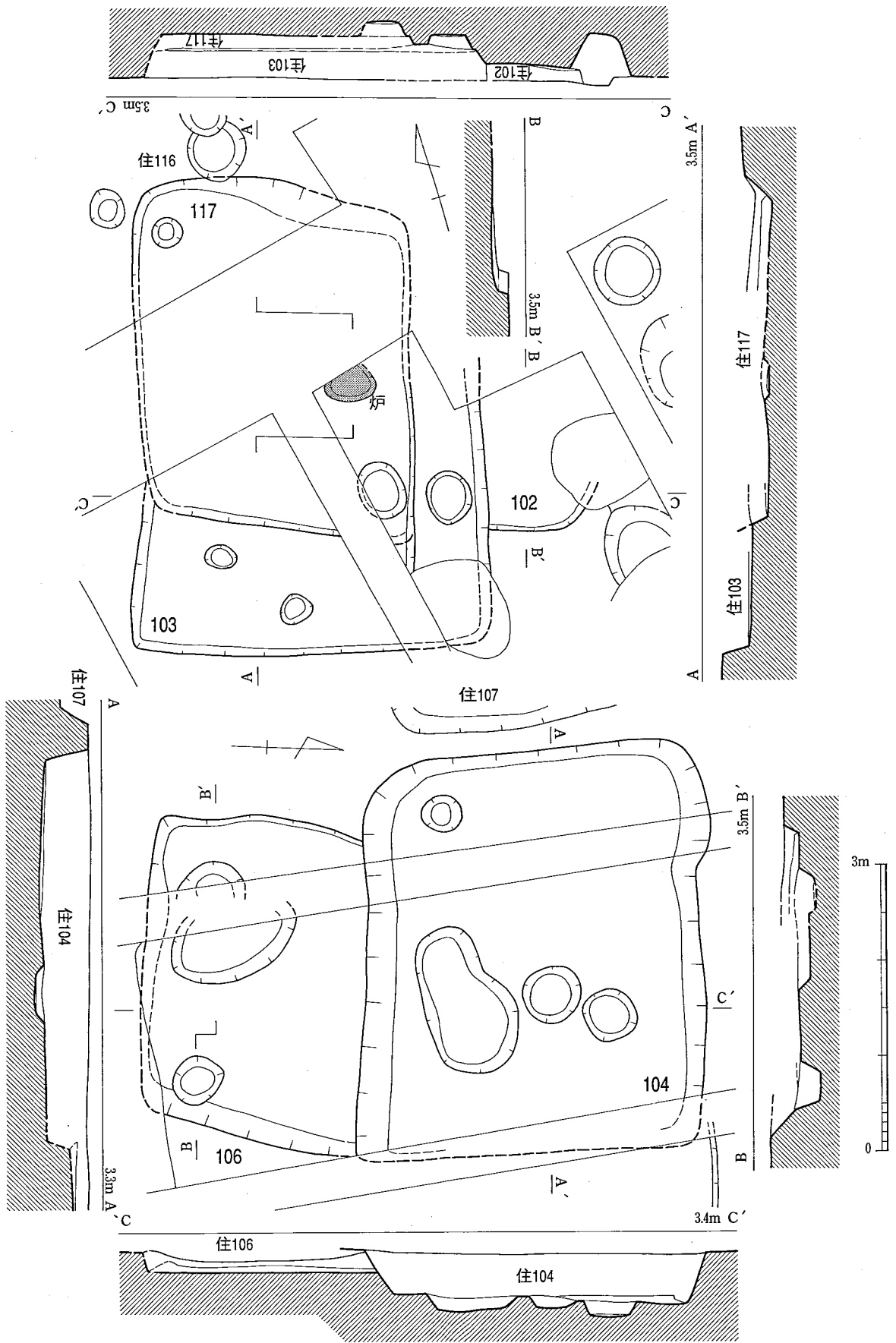
50・51は高杯杯部、52～55は高杯脚部。50は屈曲部明瞭で外面横ミガキ、内面暗文風縦ミガキ。51は外面ハケ後一部縦ミガキ、内面横ハケ。55は脚部完存し、外面縦ハケ後横ミガキ、内面脚裾横斜めハケ、脚柱ナデ。わずかに残る杯部は外ミガキ、内縦ハケ。脚柱部2ヶ所に半乾燥段階で穿孔。52・54も同様の調整。53は淡黄褐色の脚部中実で、外縦ミガキ、内斜めハケ。53以外は橙褐色。

56～63は外反口縁鉢。56は胴部が深い器形で、頸部内面は全体的剥離する。外面～口縁部内面ハケ、胴部内面ナデで一部工具痕。57は内外ハケ後横ナデ。59～62は外面～内頸部下まで横ミガキ。60は外面一部に横ミガキ前縦ハケ、内底部ハケ残る。摩滅進む58も同様か。63は小形で口縁部が外反する。外面ナデ後内外横ミガキ。56は黄橙褐色、60茶褐色、62黄橙色、他は橙褐色。

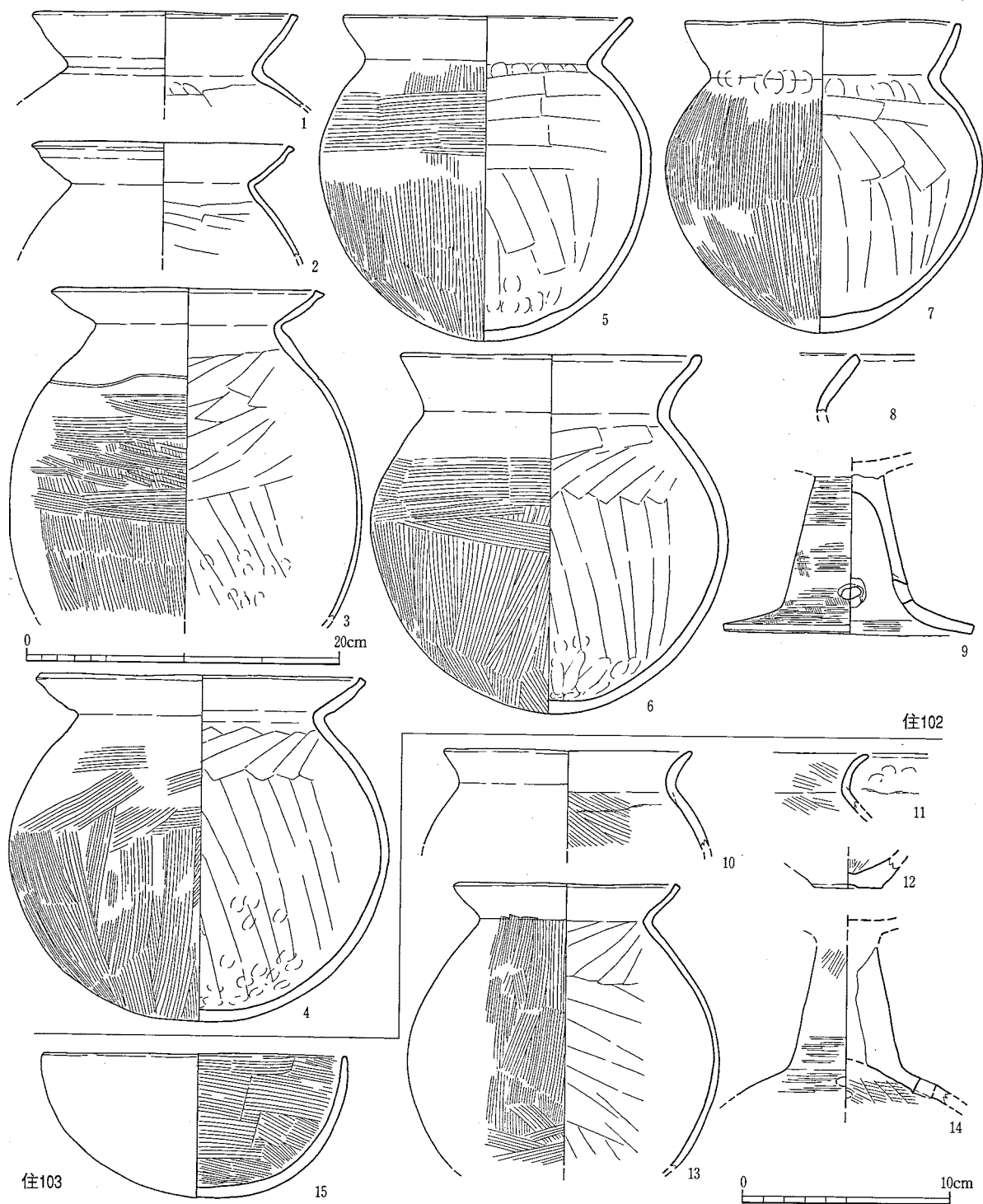
64～72は単口縁鉢。64～68は内外横ミガキ施した精製品。69・72は内外ナデで仕上げ、70は外面ハケ、口縁～内面ナデ、71は外面ケズリ、口縁～内面ナデ。66～68は橙褐色、72は褐色、他は淡黄褐色を呈する。

73・74は橙褐色の精製脚付鉢。73は外面横ミガキ、内面ナデ。74は3ヶ所に半乾燥段階で穿孔し、外面横ミガキ、内面ハケ。

75は在地系の粗製器台で外面下部タタキ、上部ナデ、内面はナデのくびれ部以外はハケ。淡黄褐色。76～78は小形精製器台。76は外面ミガキ、内面ナデ。77は外面ミガキ、内面摩滅。78は脚部1/2周残るも穿孔は見られない。受部は外面縦ハケ後横ミガキ、口縁～内面ナデ。脚部は外面横ミガキ、内面ハケメ所によりナデ。いずれも橙褐色。79は山陰系鼓形器台で外面横ハケ後太い暗文風ミガキ、内面太い横ミガキ。褐色。80は鼓形器台に似た形態であるが、くびれ部上下に突出のない特異なもの。裾部をわずかに内湾させるなど、むしろ布留系甕上部を切り取り倒置したような形態で、裾端部の微かな内湾もそれと合致している。だとすれば上部の厚い器壁は甕のヘラケズリ前の姿と



第212图 102~104·106·117号竖穴住居跡実测图 (1/60)



第213図 102・103号竪穴住居跡出土土器実測図（1～3・10～13は1/4、他は1/3）

もとれ興味深い。外面～口縁内面にかけて太い縦ミガキで、裾部はハケ後斜めミガキ。白黄褐色。
 81は陶質土器底部で内外ともナデ仕上げ。焼成は堅緻で灰褐色を呈する。
 82・83は蛸壺で、いずれも淡黄褐色。（重藤）

102号竪穴住居跡（図版43、第212図）

3南6区に位置し、103号竪穴住居跡に西部を切られる。東に攪乱と校舎基礎、北に校舎基礎が

あり、それぞれの校舎基礎を越えては広がらないようである。検出したのは南壁のみで平面プランは不安。床から20cm程浮いて土器がまとまって出土したが、これらの一括性は良好か。覆土は灰黄褐色細砂。

出土土器（第213図1～9） 1～7は布留系甕で、3～7は近接した位置で出土。口縁部は若干、内湾するものが多い。端部は2・3が外にわずかに拡張し、5～7は丸く仕上げる。3は肩部に1条の沈線を巡らしている。外面の縦ハケ部のみタタキ残ることから、タタキ、縦ハケ、横ハケの順。沈線付近が微かに凹む。5は胴中程より下の二次加熱顕著。7は肩部横ハケを省略したと考えられ、頸部外面に指頭圧痕残す。8は在地系甕口縁片。9は高杯脚部で脚柱部に2ヶ所穿孔がある。孔内側はさほど広がらないが、孔内周囲に円形のひび割れが巡り、器壁が今にも剥離しそう。外面縦ハケ後横ミガキ、脚柱内面ナデ、脚裾内面ハケ。いずれも灰黄褐色～淡黄褐色。（重藤）

103号竪穴住居跡（図版43、第212図）

3南6・7区に位置し、102号竪穴住居跡を切り、北西部を117号竪穴住居跡に切られる。北には校舎基礎が位置し、それを越えて3中区には広がらない。当初、117号住居跡との切合いに気づかずに掘り下げたために、出土遺物には本来117号住居跡に帰属していたはずのものを含んでいる。炉跡も検出されていない。埋土上層は黄褐色細砂、壁際～下層は暗褐色細砂。

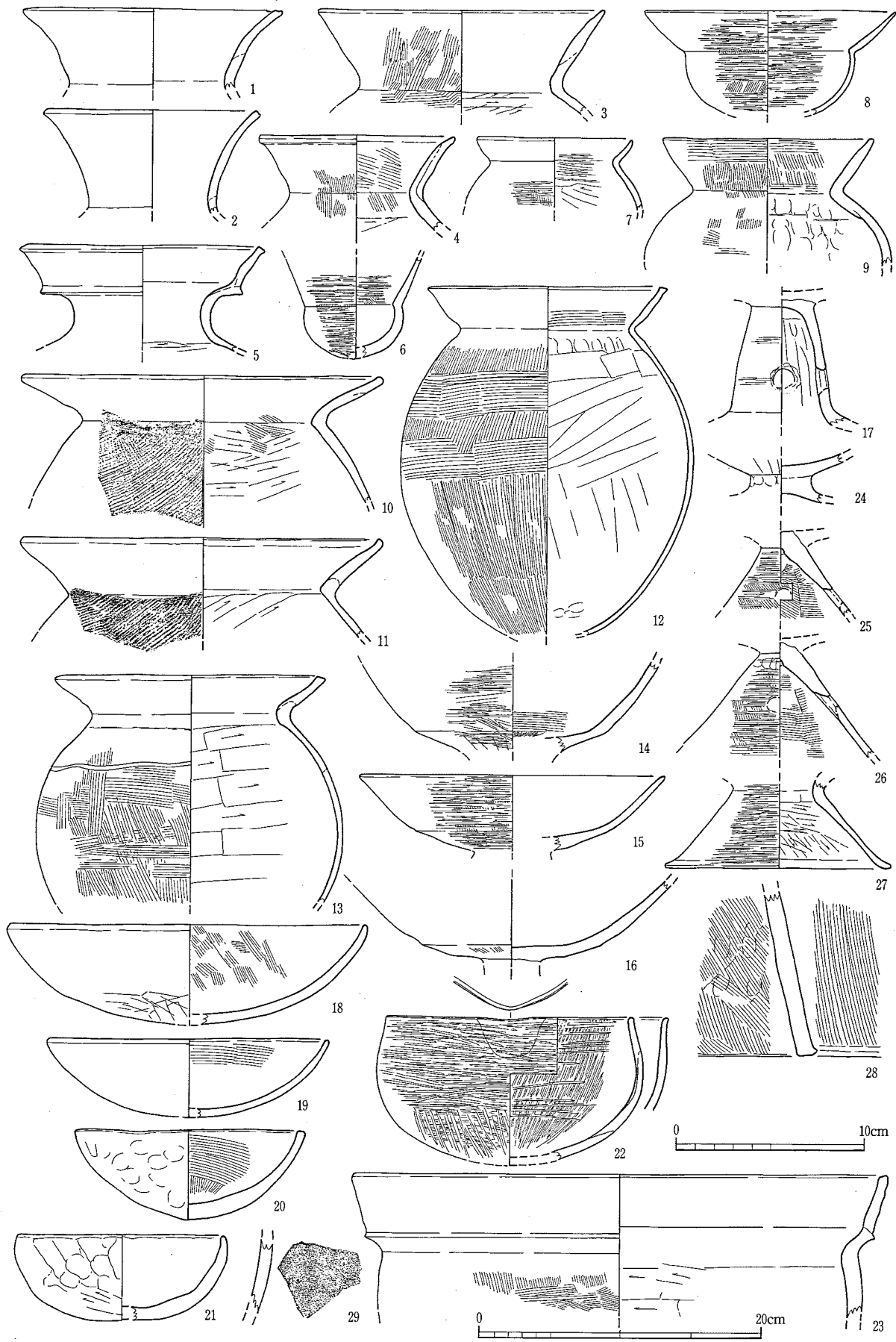
出土土器（第213図10～15） 10・11は口縁外反強く在地系甕か。10は外面～口縁内面ナデ、胴部内面斜めハケ。11は外面粗いナデ、内面斜めハケ。12は5様式系甕底部か。外底部中央が凹み、外面ナデ、内面ハケ。13は布留系甕。外面は縦ハケのみで仕上げ、内面ケズリは頸部まで及ぶ。14は中実と思われる高杯脚部。内面ハケメ、外面横ミガキで上部にハケメ残る。ハケメ後乾燥前に穿孔。15は鉢で外面無調整、内面は横ハケ。10暗褐色、12赤褐色、14淡橙白色、他は淡黄褐色。（重藤）

104号竪穴住居跡（図版43、第212図）

3南9・10区に位置し、106号竪穴住居跡を切る。当初、3南8区まで広がると考えて少し掘り下げた（北壁延長線上の段）が、すぐに地山が現れた。したがって、3南8区には及ばず、ちょうど基礎下に西壁が位置するものと推測される。すると東西にやや長い長方形の平面形となる。床面を少し掘り下げすぎたためか炉跡は検出していない。埋土上層暗褐灰色細砂、下層灰黄色細砂。出土遺物の一括性は高い。土器の他に叩石（第251図61）が出土。

出土土器（第214図） 1～4は直口壺。3は口縁部が直線的に外傾し、頸下までケズリ。4は頸部が強く締まり、口径もやや小さい。5は山陰系二重口縁壺。6～9は小形丸底壺。6は小さな胴部に長くのびる口縁が付くもので、外面～口縁内面にかけてミガキで、頸部内面斜めハケと底部ケズリが微かに残る。7は胴外面縦ハケ後胴～口縁内面横ミガキ。胴内面はケズリ。8は頸部に締まり無く鉢との区別が難しい。内外横ミガキ仕上げで、胴外面に縦ハケ少し残る。9は外面～口縁内面ハケメ、胴部内面指頭圧痕で仕上げた粗製品。3・9淡褐色、4・6～8橙褐色、他は淡黄褐色。

10・11は右上りタタキ施す庄内系甕。10は右上り前の左上りタタキ残る。口縁が長く伸び、横ナデも強いので在地的変容が進んだものか。褐色。11は口縁端部微かに上方につまみ出す。黄褐色。12・13はいずれも淡黄褐色を呈し、肩部に沈線巡らす布留系甕。12外面は縦ハケ後横ハケ、13外面は縦ハケ後横ハケであるが一部に横ハケを切って縦ハケが再度施される。



第214図 104号竖穴住居跡出土土器実測図 (1~4・12・23は1/3、他は1/4)

14～16は高杯杯部、17は高杯脚部。14は外面底部ケズリ後横ミガキ、内面摩滅進むが一部横ハケ。15は外面縦ハケ後横ミガキ、内面摩滅。16は内外摩滅。17は外面一部にミガキ残る。内面はナデ。半乾燥段階で2ヶ所に穿孔。14は暗赤褐色、他は橙褐色。

18～22は直口鉢である。18外面は底部ケズリ、口縁部ナデ、内面は斜めハケ後ナデ。19外面はナデ、内面はハケ後ナデ。20は外面ナデ、内面斜めハケ。21は外底部ケズリ、他はナデ。22は片口をなし、菱形に近い上面観か。外面は横ミガキ後底部不定方向ミガキ。内面は縦ミガキ後疎らに横ミガキ。23は山陰系二重口縁大形鉢で頸部くびれが弱い。胴部内面はケズリ。24は脚付鉢片で、鉢外底部～脚上部を板ナデ。他はナデ。これらの鉢は18・23褐色、22橙褐色、他は灰黄褐色～淡黄褐色。

25～27は橙褐色呈する小形精製器台。25・26は2ヶ所に半乾燥段階で穿孔し、外面斜めハケ後横ミガキ、内面ハケ。27は受部底の無いもので、外面ミガキ、内面ケズリ。28は褐色の在地系粗製器台で、端部の調整が粗いことから裾と考えた。

29は半島系土器胴部小片。内外ともナデ仕上げで、焼成は甘く瓦質。灰褐色。(重藤)

105号竪穴住居跡 (図版44、第215図)

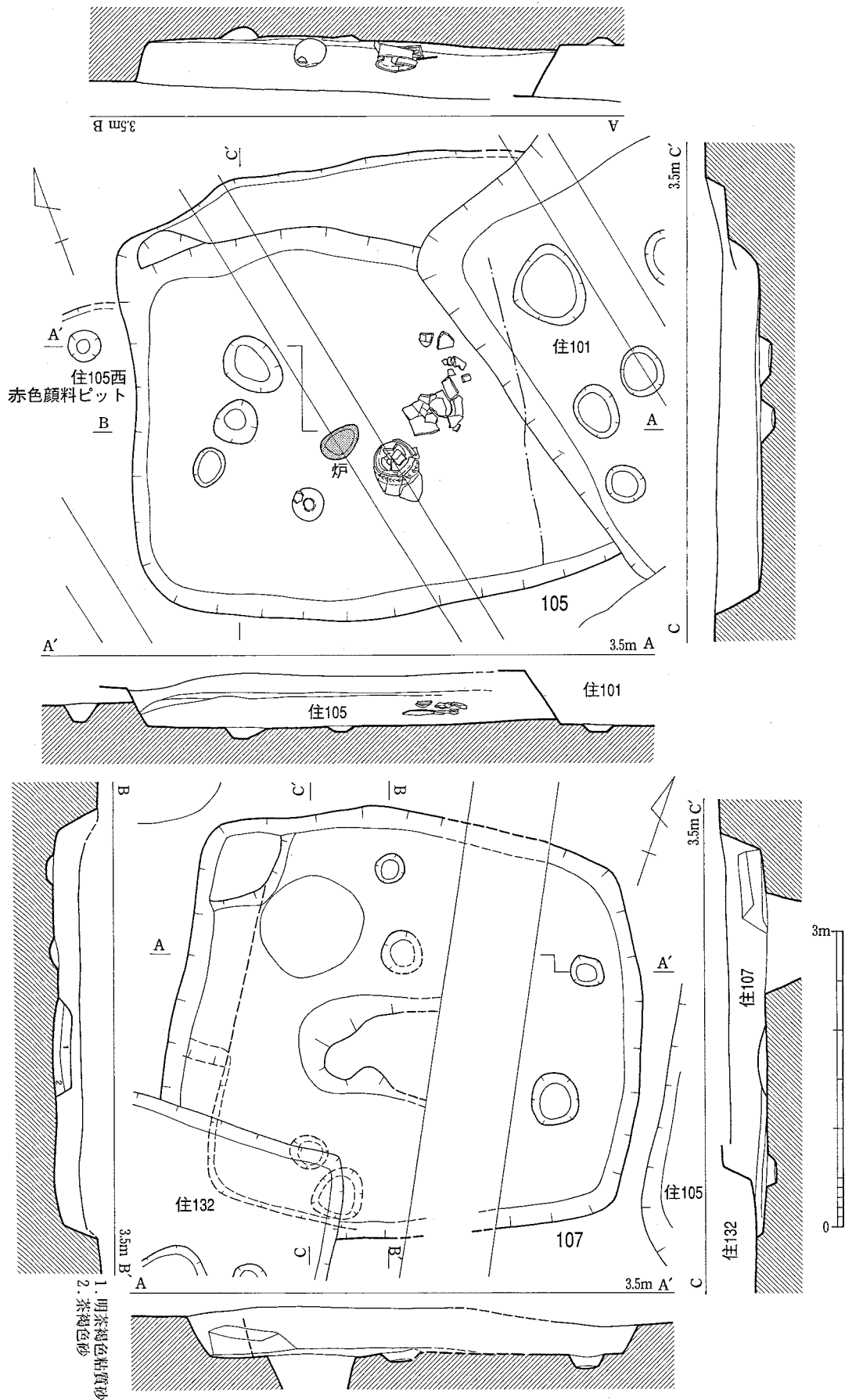
3南7・8区にあり、101号竪穴住居跡に東部を切られる。遺構検出段階では北側に広く住居跡範囲を考えていたが、少し下げると内側に明確な壁を検出できた。そのため北側に不自然な段ができてしまった。また東壁は検出できていないが、101号住居跡壁を除去するとその下に本住居跡の汚れた床面の境界(図一点鎖線)があらわれた。それにより住居が1辺4m内外の正方形に近い平面形で、炉跡が中央に位置することが判明した。特筆されるのは西壁から0.5m程の所に、赤色顔料を埋納したピットを検出したことである。意図的に納めたと考えられ、本住居跡からも赤色顔料が付着した特殊土器(14)が出土したことから、本住居あるいは近辺で赤色顔料を用いた何らかの作業を行っていた可能性が高い。床面より出土した大形壺(2・11)が本住居跡の時期を確実に示す遺物である。また、101号住居跡との切合いも問題ないことから出土土器の一括性は高いと思われる。土器の他に鉄器(第237・238図9・45)、滑石原石(第251図62)が出土。埋土上部は黄褐色細砂、下部は黒褐色細砂。

出土土器(第216～218図) 1は在地系大形壺口縁片。口縁上面は粘土貼付し肥厚させ、端面にまばらに大形ハケメ工具小口を押し当てて刻み目文とする。内外所々にハケメ残る。2は在地系壺か。口縁短く外反し、胴部は低く、大きな平底をなす。内外面ハケメ仕上げであるが、粗雑なため胴中部内外に水平方向、胴下部外面に縦方向の接合痕をかなり残す。特に胴中部外面は無調整と表現するのが適当なほどである。3は在地系の二重口縁壺で、本住居跡の他の土器と比べ古い。1は褐色、2は暗褐色、3淡黄褐色。

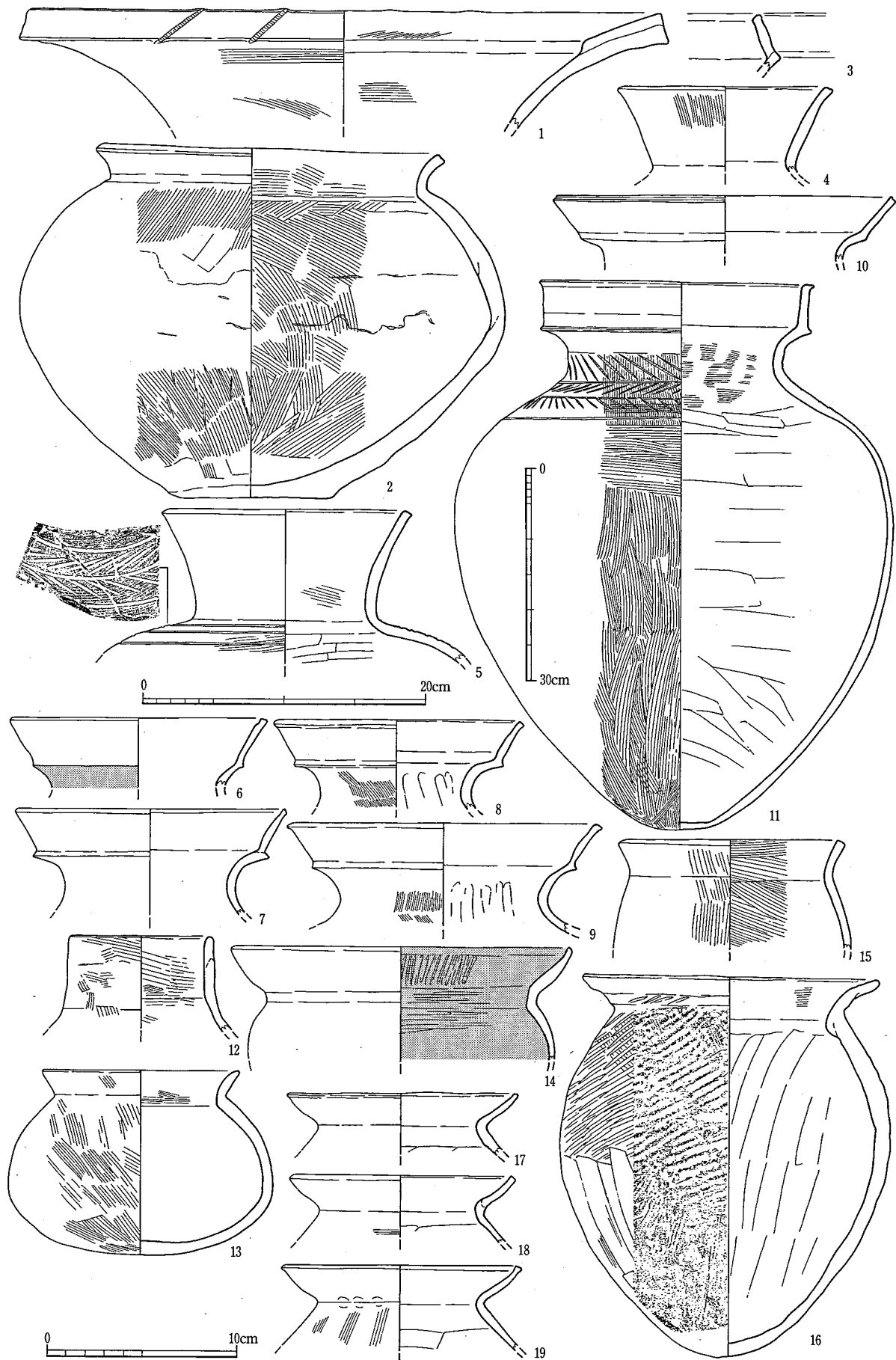
4・5は布留系直口壺。5は肩部にこの種の器形に見られない有軸羽状文施すが、山陰系壺文様の転用か。いずれも淡黄褐色で、5内面には煤が付着する。

6～11は山陰系二重口縁壺。特大形の11以外は口縁部が外傾する。6は頸部外面に赤彩している。11は高さ77.6cmを測る大形品である。口縁部は直立し、端部を外方に少しつまみ出す。頸部には綾杉文を巡らしている。10は褐色、他は白黄褐色～淡黄褐色を呈す。

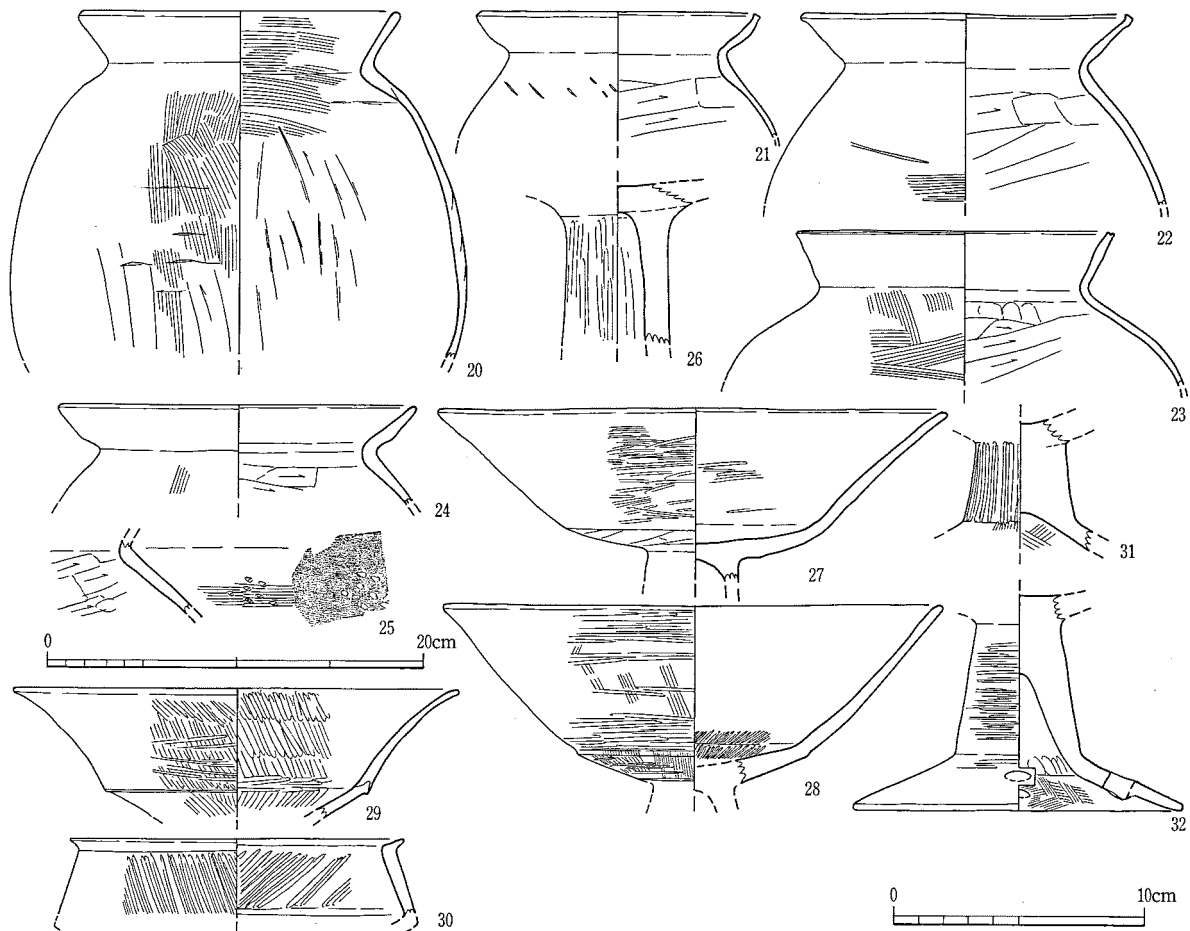
12～14は小形壺。12は口縁部が直立し、内外を粗いハケメで雑に仕上げた粗製品である。13は外面ハケ、内面ナデ仕上げである。14は内面に赤色顔料付着した特殊な壺である。口縁は強い横ナデ



第215図 105・107号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第216図 105号竪穴住居跡出土土器実測図(1) (13・14・16は1/3、11は1/8、他は1/4)



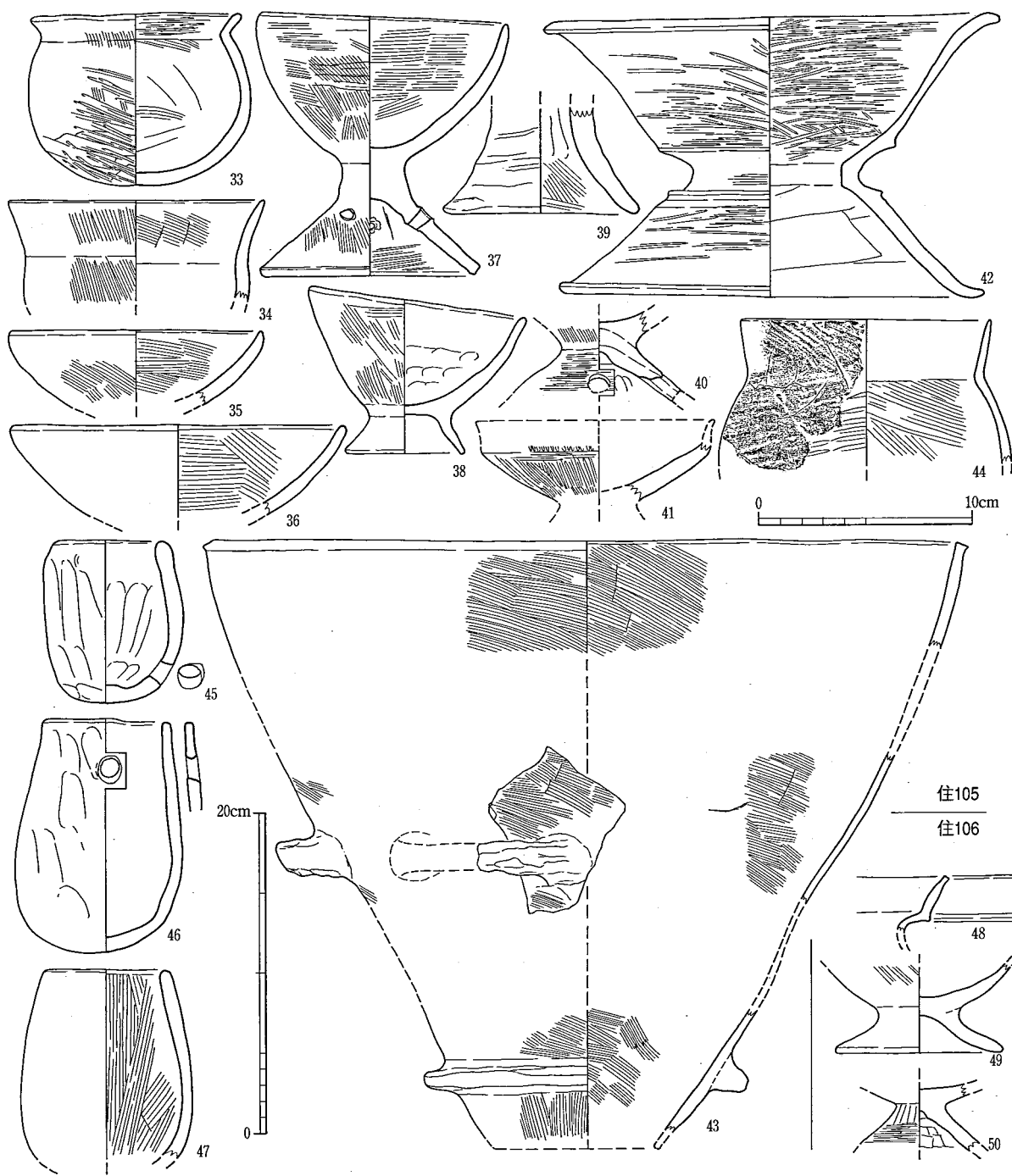
第217図 105号竪穴住居跡出土土器実測図(2) (20~25・29は1/4、他は1/3)

により内湾気味で、布留系甕に類似している。しかし、外面ナデ、口縁内面暗文風縦ミガキ、頸部内面横ミガキからなる調整は他の壺、甕に見られない。また法量も他の中、小形壺とは異なる。したがって赤色顔料加工あるいは保管用に特別に製作された可能性がある。12灰黄褐色、13暗褐色、14淡黄褐色。

15・16は淡黄褐色の在処系甕である。15は内外をハケメで仕上げている、端部が面をなしている。16は口縁強く外反し、尖り底気味である。胴部外面は上部が左上りタタキ後右上りタタキ仕上げで、タタキを切り下半に板状工具ナデを施す。口縁外面にも一部右上りタタキ残る。胴部内面はケズリで仕上げる。

17~25は白黄褐色~淡黄褐色の布留系甕。口縁部はやや内湾気味ながら直線的に外傾するものが主体。端部は17・20・24は丸く仕上げ、他は面をなす。19・22は微かに上方につまみ上げる。20は外面粗い縦ハケ、口縁~頸部内面横ハケで仕上げ、特異な調整。胴部内面調整もケズリ風板ナデ。21は肩部外面に線刻を等間隔に巡らせ文様としている。22は肩部に一部波状沈線文、25は棒小口刺突文で装飾している。

26は在処系高杯脚部で、外面ミガキ、内面ナデ。27~30は高杯杯部、31・32は高杯脚部。27は外底部へラケズリ仕上げで、口縁内外は横ミガキ。28は外面斜めハケ後横ミガキ、口縁内面ナデ、杯底部ミガキ。29は疎らに横ミガキ施すが、基本的には内外を縦ミガキで仕上げる。屈曲部の稜は明瞭。30は内傾し、端部を広く外に拡張させた特異な形態のもの。下端は接合面から剥離したと考え



第218図 105 (3) ・106号竪穴住居跡出土土器実測図 (39・43・48は1/4、他は1/3)

られ、内傾する高杯口縁部となるか。内外縦斜めミガキ。31・32は高杯脚部で、中実の31は外面縦ミガキ、杯内面ヘラミガキ、脚内面ハケメ。32は外面横ミガキ、脚裾内面ハケ、脚柱内面ナデ。乾燥前ハケメ後に脚裾2ヶ所に穿孔。29暗黄褐色、30・31橙褐色、他は淡黄褐色。

33・34は外反口縁鉢。33は深い胴部に短い口縁が付く。胴外面下部ケズリ、上部縦ハケ後ミガキし、口縁内面ミガキ、胴内面ケズリで仕上げる。口縁の長く伸びる34は外面～口縁内面ハケメ、胴部内面ナデである。35・36は単口縁の鉢で、35は内外ハケ、36は外面ナデ、内面横斜めハケ。37・38は脚付鉢である。37は脚が高く、4方向に乾燥前穿孔施す。脚部内面板状工具によるナデで仕上げる以外はハケメ。38は脚が低く、鉢部外面以外は粗いナデ仕上げ。淡橙褐色の34・35以外は灰黄

褐色～淡黄褐色。

39は在地系器台。ハケ仕上げの内裾以外は粗いナデ。赤褐色。40・41は橙褐色の小形精製器台。40は外面横ミガキ、内面ナデで、半乾燥時穿孔。41は外面縦ハケ後縦ミガキとわずかに横ミガキ。42は器高の大きい古式の山陰系鼓形器台。外面横ミガキ、口縁内面ケズリ後ミガキ、裾部内面ケズリ。灰黄褐色を呈する。

43は山陰系甑形土器である。現在、接合しない3片に分かれているが同一個体であることは間違いない。口径48cm、器高40cm近くの大形品か。胴中部に水平方向の橋状把手が付き、裾には高い突帯が巡る。内外をナデで仕上げしており、外面橙褐色、内面淡褐色を呈する。

44は膨らんだ胴部に直立する口縁の付いた土器。胴部外面粗いタタキ、胴部内面および口縁外面粗いハケで、口縁内面ヘラケズリ風擦過痕。褐色で外面はかなり二次加熱を受ける。北部九州ではこのような形態は知られていないが、調整、二次加熱から製塩土器の可能性を考えておきたい。

45～47は蛸壺。いずれも灰黄褐色～淡黄褐色を呈す。(重藤)

106号竪穴住居跡 (図版44、第212図)

3南9・10区南寄りに位置し、北側を104号竪穴住居跡に切られる。検出したのは東壁、西壁、南壁のそれぞれ一部である。東西3m弱と周辺の住居跡と比べ小形で、隣接する104号住居跡と比べると床面がかなり高いので、住居以外の遺構の恐れもある。炉跡も検出していない。埋土は灰黄褐色細砂であった。

出土土器 (第218図48～50) 48は山陰系二重口縁壺口縁片である。49は脚付鉢で、鉢部外面に斜めハケメが残っている。他はナデ仕上げである。50は精製脚付鉢片で、脚部外面縦方向ケズリ後横ミガキ、内面ケズリ。外面は化粧土を塗布しているため、橙褐色を呈している。48・49は淡黄褐色を呈している。(重藤)

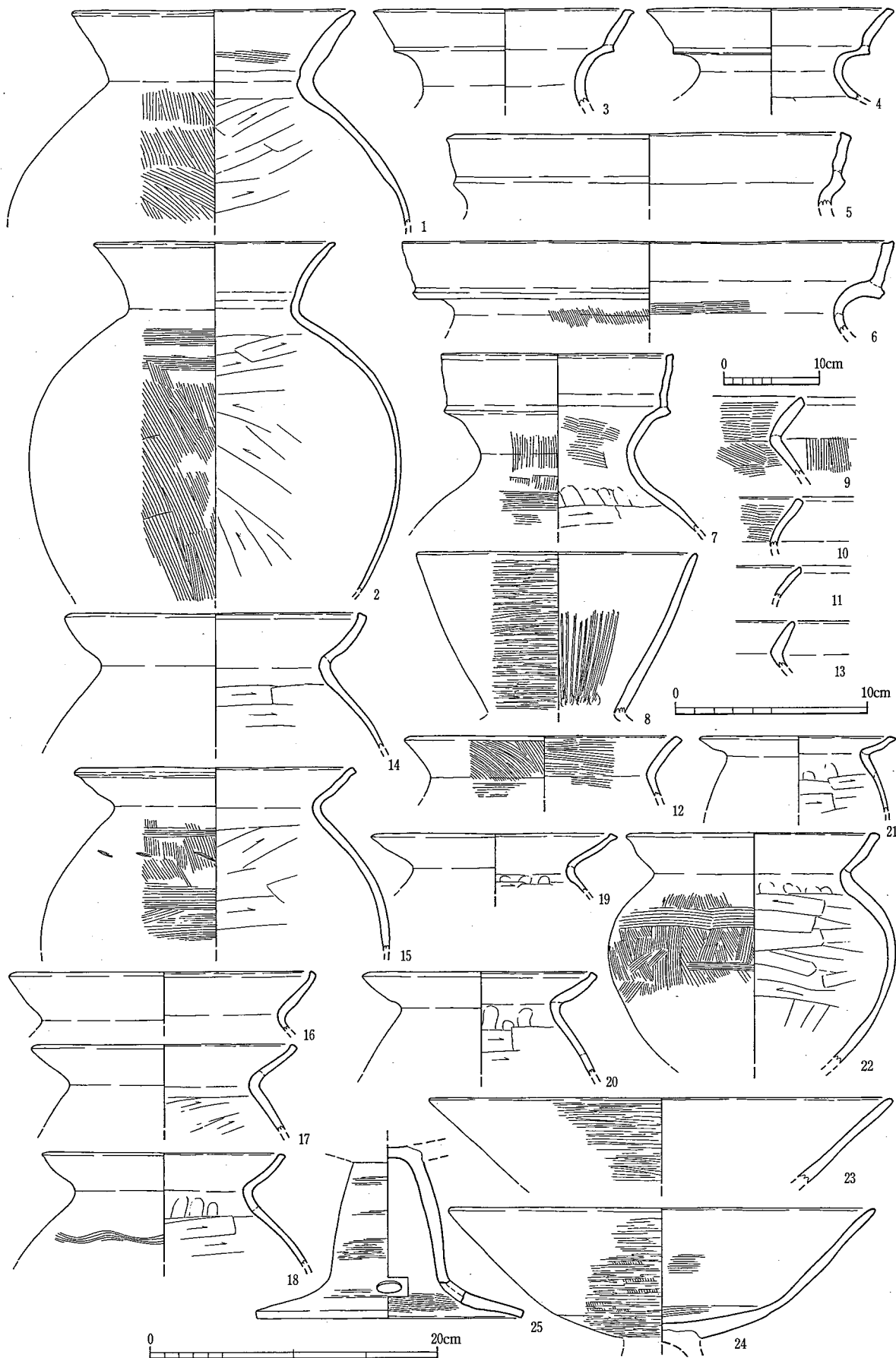
107号竪穴住居跡 (図版44、第215図)

3南10区と3西拡張区に位置しており、南西隅を132号竪穴住居跡に切られると考え、発掘した。掘り間違いにより東西に長い長方形のプランとなり、西北隅に不自然な方形の段ができてしまったが、132号住居跡東北隅壁を除去すると本住居跡の西南隅(図破線)を明確に検出できた。したがって、本住居跡は1辺4m前後の正方形の平面形となる。中央に焼けた明褐色粘質砂と茶褐色砂を積んだ高まりを検出したがその機能は明らかにできなかった。炉跡も検出していない。132号住居跡との切合いもほぼ間違いなく、出土土器の一括性は良好であろう。埋土は黄灰色～灰白褐色細砂。

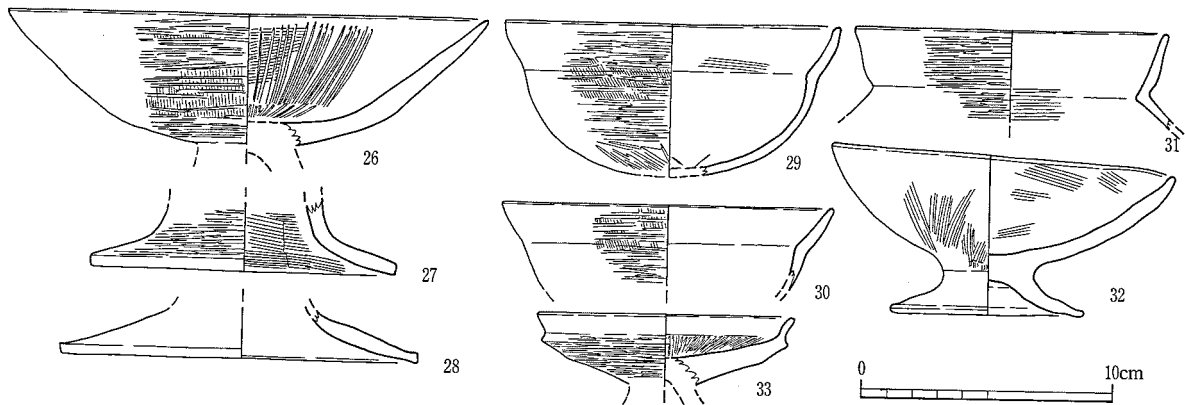
出土土器 (第219・220図) 1・2は布留系直口壺。2は口縁上端がやや広い水平面をなす点特徴的。1は焼成悪く暗褐色、2は灰黄褐色。3～7は山陰系二重口縁壺である。5はあるいは鉢となるか。6は大形品で擬口縁の突出が特徴的。7は口縁部が長く直立するが、径はやや不安。灰黄褐色～淡黄褐色を呈す。8は布留系精製中形壺。外面横ミガキ、内面縦ミガキ。橙褐色。

9～13は在地系甕口縁片か。いずれも口縁が外反し、端部が角張り面をなす。褐色の11以外は淡黄褐色～灰黄褐色。

14～22は布留系甕。いずれも口縁部が内湾気味で端部が外傾する面をなす。15は肩部に棒状工具を引いて凹ませたような列点文を巡らしている。18は肩部に5条の櫛描波状文施す。21は小片から



第219図 107号竪穴住居跡出土土器実測図(1) (6は1/6、8・13・23~25は1/3、他は1/4)



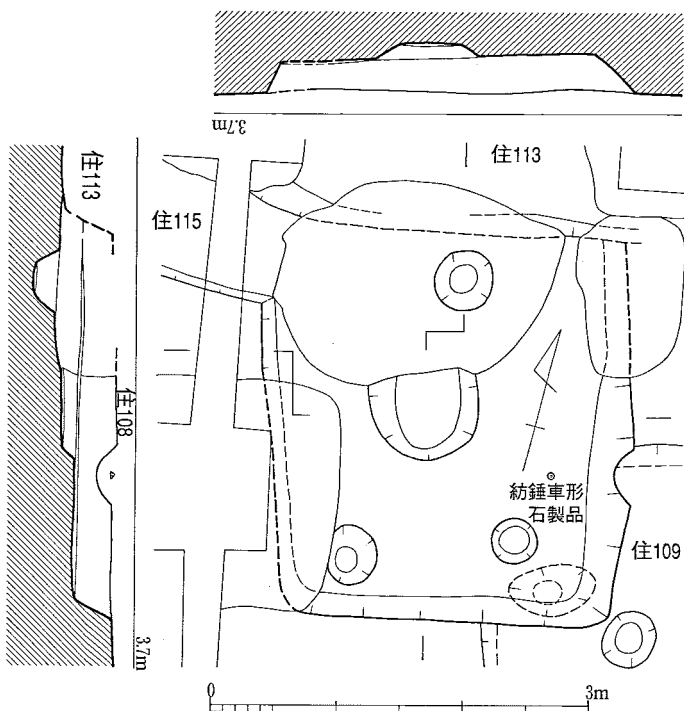
第220図 107号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3)

の復元で径、傾きは不安。22は内面にコゲ付着する。いずれも灰黄褐色～淡黄褐色を呈す。

23・24・26は高杯杯部片、25・27・28は高杯脚部片で、いずれも橙褐色。23は外面横ミガキ、内面ナデ。24は外面縦ハケ後横ミガキ、内面ハケ後ナデ。26は外面口縁部縦ハケ、杯底部ケズリ後横ミガキ、内面横ハケ後縦ミガキ。25は脚部片で半乾燥時に穿孔。外面横ミガキ、脚裾内面ハケ、脚柱内面ナデ。27も同様の仕上げ。28は摩滅進むが、脚裾外面にハケメ残る。

29～31は橙褐色で精製の外反口縁鉢。29・30は外面縦ハケ後ミガキ、内面ナデ仕上げで口縁に一部横ハケ残る。31は小形の壺とどちらに含むか難しいもの。外面ミガキで内面横ハケ後ナデ。32は脚付鉢で鉢部内外ハケメ、脚部内外横ナデ。灰黄褐色。

33は小形精製器台。口縁内外ナデ、外底部横ミガキ、内面縦ミガキ。(重藤)

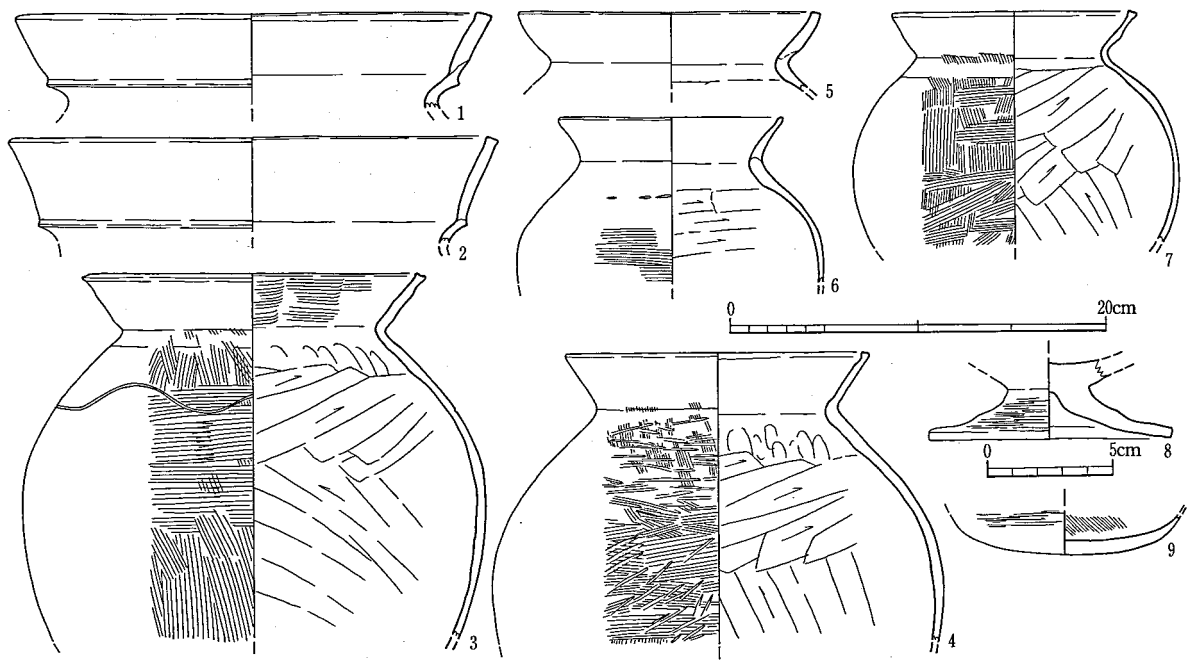


第221図 108号竪穴住居跡実測図 (1/60)

108号竪穴住居跡 (図版45、第221図)

3中3区北西隅に位置し、109号竪穴住居跡を切ると考えた。北側は113・115号竪穴住居跡に切られるとして発掘した。ただ113・115号住居跡と重なる部分には大きな攪乱があり、十分に切合いを確認できなかった。東壁南部～南壁と西壁の一部を検出したにとどまり、炉跡もない。出土遺物の一括性には不安があるが、覆土上面から碧玉製紡錘車形石製品(第239図1)が出土。埋土は暗灰褐色細砂。

出土土器 (第222図) 1・2は山陰系二重口縁壺。3～7は布留系甕。3は肩部に波状沈線文巡らす。外面ハケは肩部縦ハケ、肩部横ハケ、胴下部縦ハケの順。4は口縁部を少し内につまみ出す。外面ハケメ後ミガキの特異な



第222図 108号竪穴住居跡出土土器実測図（9は1/3、他は1/4）

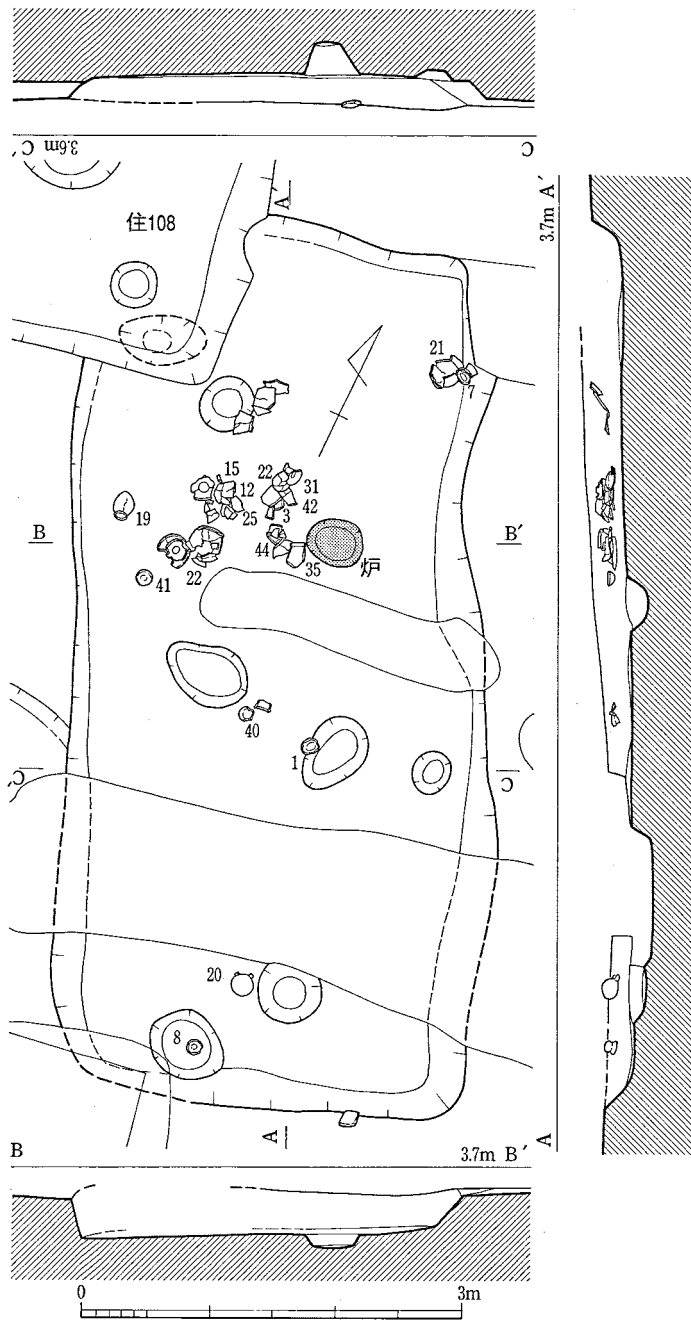
調整であるが、胴部内面ケズリの上下の切合いが明瞭に確認できる好資料。6は肩部に棒状工具による刺突文巡らす。7も口縁を少し内につまみ出し、外面は縦ハケ後横斜めハケ。8は脚付鉢脚部で外面横ミガキ、内面ナデ。9は壺かと思われる底部片。外面一部ミガキ、内面ハケメ。1褐色、7黄橙色、8橙褐色、他は灰黄褐色～淡黄褐色。（重藤）

109号竪穴住居跡（図版45、第223図）

3中3区西よりに位置し、108号竪穴住居跡に切られる。主軸を北西—南東におくかなり長い長方形の平面形を呈している。南部には攪乱が横断し、北壁も東に延びる攪乱ラインと重なるためにやや平面形に不安もあるが、91号竪穴住居跡のような長い長方形竪穴住居跡と考えておきたい。中央やや北寄りに炉跡がある。南部を横断する攪乱よりも北で出土した土器の一括性は間違いなからう。埋土上部暗褐灰色細砂、下部暗褐色細砂。土器の他に鉄器（第238図62）が出土。

出土土器（第224～226図） 1・2は在地系直口壺。1は口縁直立し、胴部内面はハケ後ケズリ。2は口縁部が外傾し、肩部に断面三角形突帯。3・4は布留系の直口壺。3は肩部縦ハケ、肩部横ハケ、胴下部縦ハケの順。4は外面煤付着。5は口縁部が短く直立した二重口縁壺で、肩部に棒状工具刺突の列点文。口縁外面に煤が付着。6は大形で頸部に締まりのない山陰系二重口縁壺。内外ハケメ仕上げで、肩部に意図的か不明であるが沈線巡らす。胴中部縦斜めハケが肩部横ハケ切る。7は山陰系二重口縁中形壺。8は小形丸底壺で、外底部ケズリ後外面～口縁内面横ミガキ。9～11は在地系壺突帯部破片。10はハケメ工具小口刺突による刻み目。2淡褐色、7淡黄橙色、8橙褐色、10赤褐色、他は淡黄褐色。

12は在地系甕。口縁は弱く外反し、端部が面をなす。内外ハケメ仕上げ。13～25は布留系甕。口縁はわずかに内湾気味ながら直線的に外傾するものが多い。端部は外傾するものが主体であるが、13は斜め上方に、18は外側につまみ出し、20・21は内外に拡張気味。18は肩部に棒状工具刺突によ



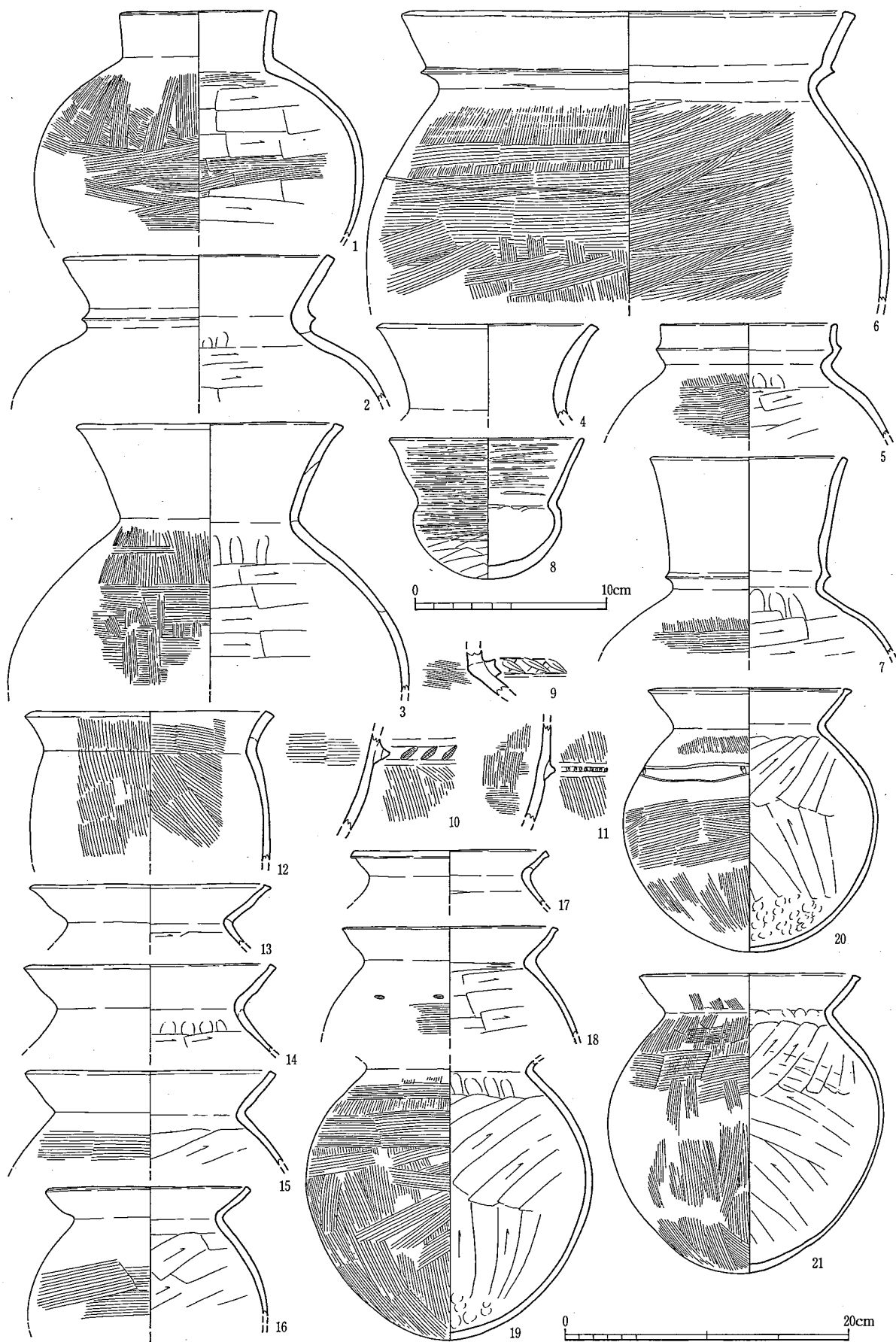
第223図 109号竪穴住居跡実測図 (1/60)

る列点文。20は肩部に直線沈線文を巡らした後、0・3・5・8・10時方向に棒状工具刺突による列点文。列点文下には工具のあたりのような細沈線が巡る。21は肩部に右上り平行タタキ残る。肩部縦ハケ、肩部横ハケ、胴下部縦ハケの順。22・24は肩部に4条櫛描直線文巡らす。23は肩部横ハケ後胴下部縦ハケ、25はその逆で胴下部縦ハケ後肩部横ハケ仕上げ。25は肩部に波状沈線文。13・17は外面全体、19は胴下部、23は胴中部に煤が付着する。21は口縁部～肩部と底部に煤が付着し、胴中部は煤付着少ないが二次加熱が顕著。これらの甕はいずれも灰黄褐色～淡黄褐色。

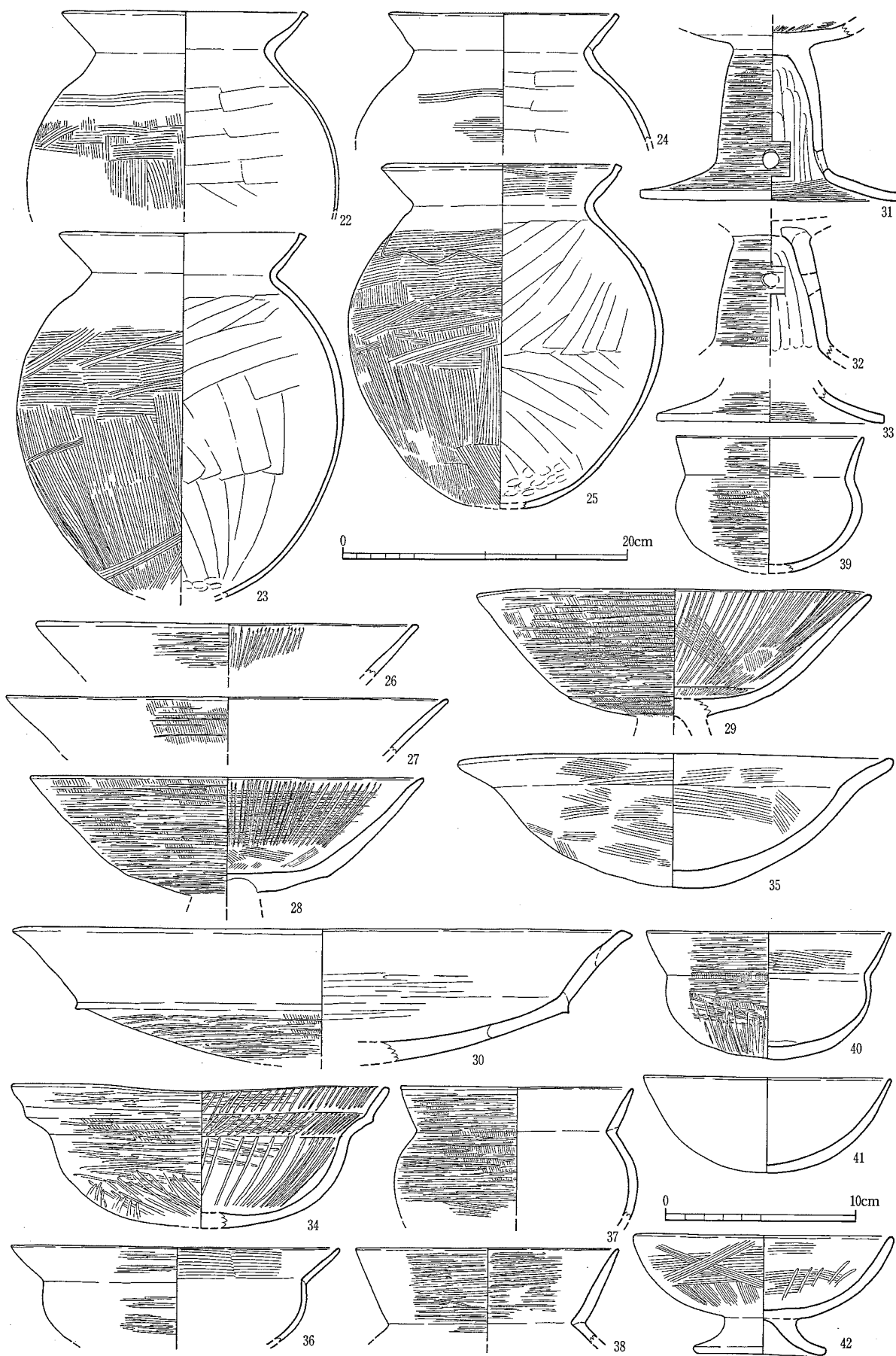
26～30は高杯杯部、31～33は高杯脚部。26～29は外面縦ハケ後横ミガキ。内面は26が縦ミガキ、28は下部ハケ、横ミガキ後縦ミガキ、29は斜めハケ後縦ミガキ。30は口径の大きい在地系高杯で少し時期が古いものか。摩滅進むが外面～口縁部内面は横ミガキ、内面屈曲部付近より下はヘラナデ。31～33は高杯脚部。31は半乾燥段階で穿孔している。外面は杯下部がヘラナデ、他は縦ハケ後横ミガキ、内面は脚柱部ナデ、脚裾横ハケ。32、33も同様の調整であるが、32は脚かなり上方に乾燥前穿孔。淡黄褐色30以外は橙褐色。

34は二重口縁の精製鉢。外面は縦ハケ、ケズリ後ミガキ、内面は横ミガキ後暗文風縦ミガキ。35～40は外反口縁鉢であるが、37～40は小形丸底壺との区別が難しい。36は外面横ミガキ、内面は口縁横ハケ、胴部ナデ。35は内外ハケメ仕上げの粗製品。37～40は外面縦ハケ後ミガキ。37内面はナデ、38内面は横ミガキ、39・40内面は口縁横ハケ、胴部ナデ。41は直口縁鉢で内外ナデで、外面下部にケズリ痕わずかに残る。42は脚付鉢で鉢内外ハケメで、内面には縦方向工具痕残る。脚部はナデ。淡褐色の35、淡黄褐色の41・42以外は橙褐色。34口縁外面に煤、40胴部外面一部に二次加熱が観察できる。

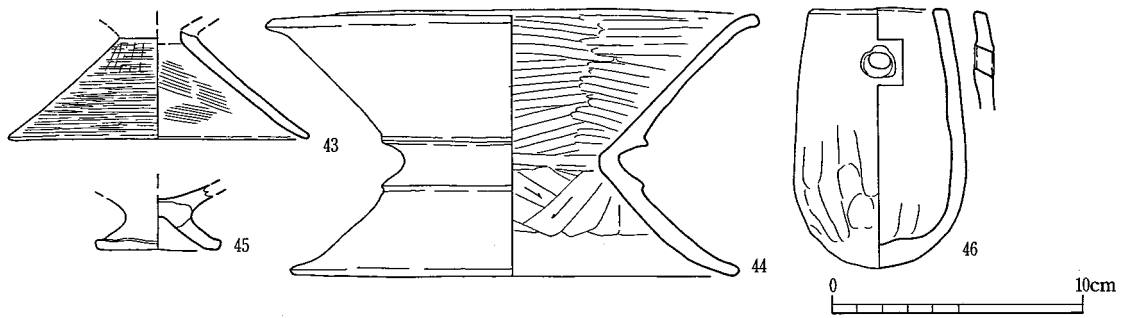
43は受け部底のない小形精製器台。外面上部ヘラナデ後横ミガキ、内面ハケで橙褐色。44は山陰



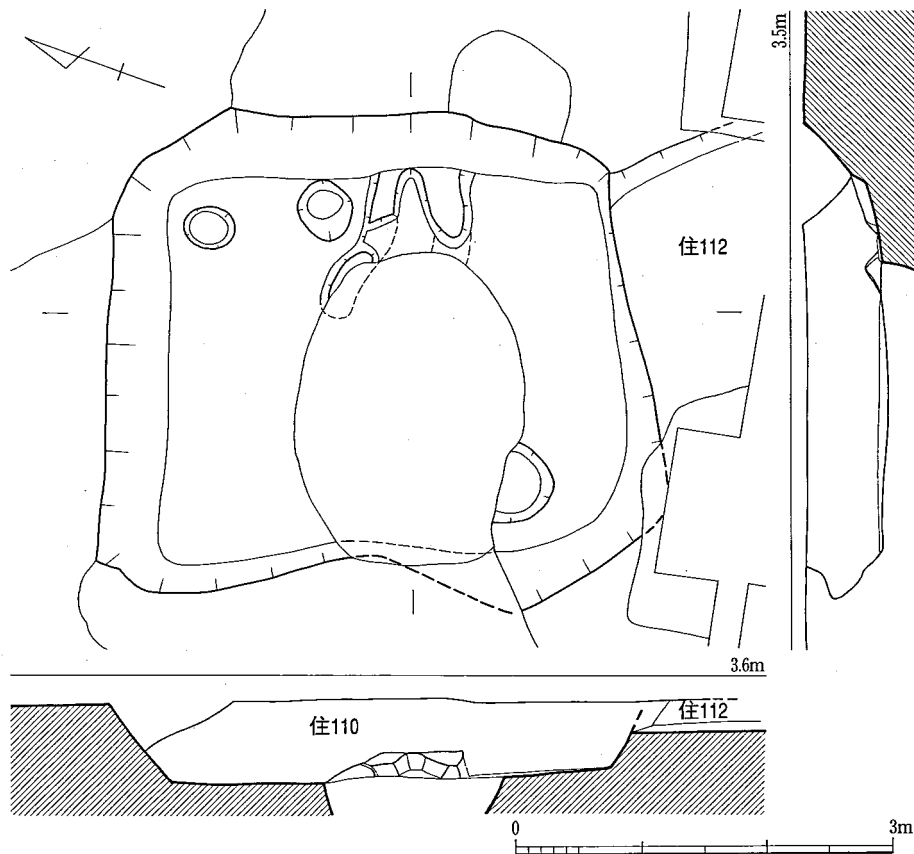
第224図 109号竪穴住居跡出土土器実測図(1) (7・8は1/3、他は1/4)



第225図 109号竖穴住居跡出土土器実測図 (2) (22~25は1/4、他は1/3)



第226図 109号竪穴住居跡出土土器実測図 (3) (1/3)



第227図 110号竪穴住居跡実測図 (1/60)

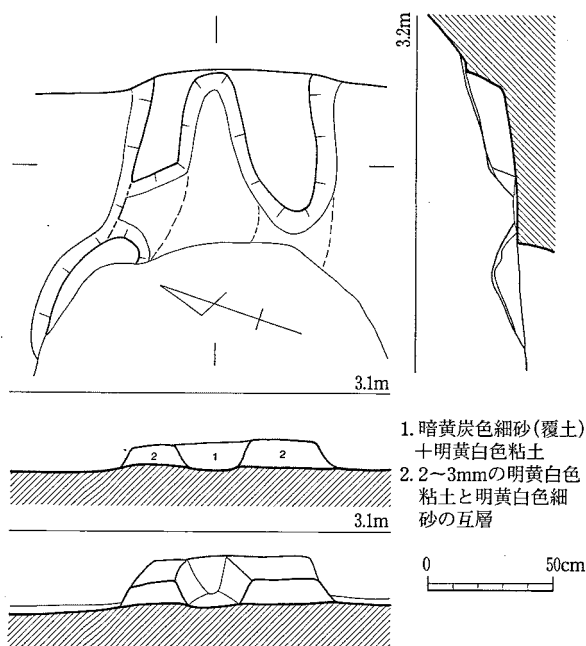
系鼓形器台で外面ナデ、口縁部内面太いミガキ、裾部内面ケズリ。淡黄褐色。

45は製塩土器脚部で赤褐色呈す。46は淡黄褐色の蛸壺。(重藤)

110号竪穴住居跡 (図版46、第227図)

3中3区中央、109号竪穴住居跡東側に位置し、112号竪穴住居跡を切る。住居中央は大きく攪乱を受けており、カマドの一部も壊されている。埋土は暗黄灰色細砂で、南北約3.8m、東西約4.2m、深さ64cmの方形住居跡である。本住居跡北壁中央でカマドを検出した。住居南西隅には粘土塊を確認した。

カマド (第228図) 住居跡中央北壁から南にのびる。焚口は攪乱で壊されているため、煙道部と



第228図 110号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

左袖の一部のみ残る。左袖の一部は調査時に、掘りすぎた箇所がある。カマドは煙出から焚口にむかってゆるやかに右にカーブする形態である。袖はカマド破棄の際に壊されており、高さ15cmほどしか残ってない。袖は版築状に粘土と砂と交互に積み重ねたもので構築する。煙出は住居の外までのびない。カマド内から土器は出土しなかった。

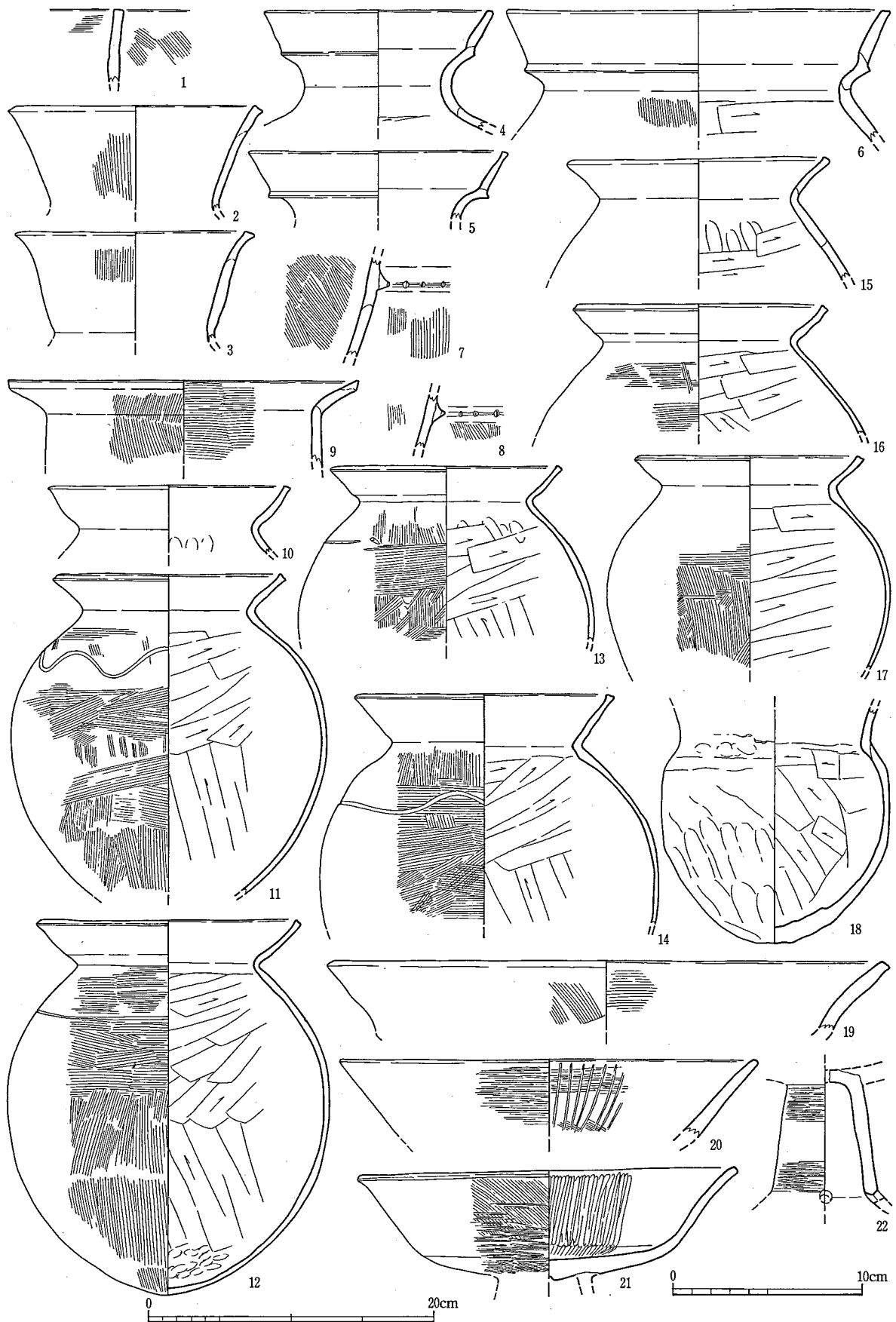
出土土器 (第229・230図) 1は在地系の壺口縁か。口縁端部は面取りする。内外面はハケのち横ナデで調整する。内面下部は剥離する。2・3は畿内系直口壺である。いずれも口縁端部は面取りする。外面は縦ハケのち横ナデを施す。4～6は山陰系二重口縁壺である。6は内面頸部までヘラケズリを行う。いずれも淡黄褐色を呈している。

7～9は在地系の甕である。いずれも内外面は縦ハケで調整する。7はヘラ工具による刻目突帯を貼り付ける。8は工具による刻目突帯を貼り付ける。9は強く外傾する口縁部をもち、頸部は直立する。口縁端部は面取りする。外面は縦ハケ、内面は横ハケを施す。外面には煤が付着する。

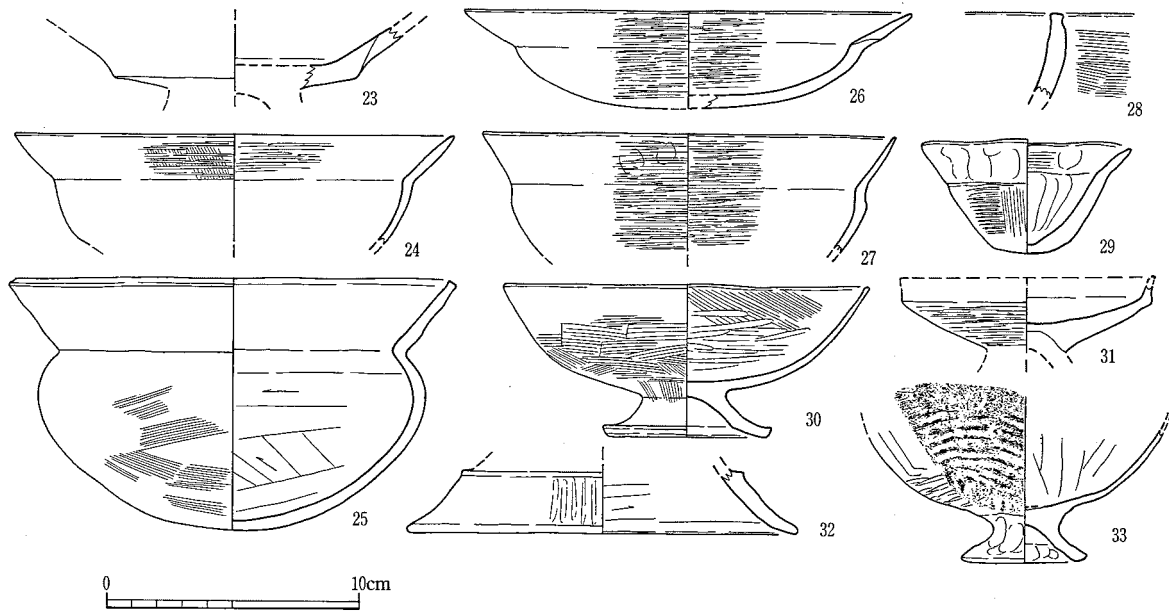
10～17は布留系の甕である。いずれも端部は面取りする。11～14・16・17は外面に煤が付着する。11は肩に1条の太い波状文を施す。12は肩に1条の凹線を巡らす。内面頸部近くまでヘラケズリを施す。胴部下部は二次加熱が顕著である。13は肩に全周はしない1条の凹線、棒状工具による刺突を施す。14は立ちぎみの口縁部で、肩に1条の太い波状文を施す。内面頸部近くまでヘラケズリを施す。15は内面のヘラケズリが下がりぎみである。16は内面頸部近くまでヘラケズリを施す。17の外面は横ハケのち縦ハケを施す。18は粗製の小型甕である。やや外傾する口縁をもち、器壁は厚い。外面は工具によるナデのち粗いナデ上げを行う。内面は頸部までヘラケズリを行い、頸部近くは反時計まわりに横方向のケズリを行う。7・8は橙褐色、9・10は淡黄褐色、11～13・16・18は灰黄褐色、14・15は黄茶褐色、17は暗褐色を呈す。

19～23は高杯である。19は在地系の高杯か。口縁端部は面取りする。内外面ともハケのち横ナデを行う。小片のため、口径自信なし。20は外面は横ミガキ、内面は横ハケのち暗文風の縦ミガキを施す。21はゆるやかに外反する口縁部をもつ。外面は粗い横ミガキ、内面は縦ミガキを施す。22は脚部である。内面上端に貫通する孔をもつ。半乾燥時に外から穿孔を施す。孔数は不明。23は杯部下部が屈曲する高杯か。器壁が厚い。19・23は黄褐色、20・22は橙褐色、21は淡黄橙色を呈す。

24～27は口縁が外傾する鉢である。25以外は精製品である。24・26・27は内外面ミガキを施す。25はやや粗製の深鉢である。口縁端部を面取りする。口縁外面は凹凸が顕著である。口縁部の形態と色調は甕に似る。28は外面口縁端部下にナデによる凹線がある。口縁端部は面取りし、外面は横ハケを施す。29は粗製の小型鉢である。口縁部は外傾し、胴部外面ははタタキのち縦ハケ、口縁部



第229図 110号竪穴住居跡出土土器実測図(1) (18~22は1/3、他は1/4)



第230図 110号竪穴住居跡出土土器実測図 (2) (1/3)

内面は横ハケのちナデを施す。30は山陰系の脚付鉢である。杯部外面は横ハケ、内面はハケのち粗い幅太の横ミガキを施す。25・30は灰黄褐色、28は黄褐色、他は橙褐色を呈す。

31は畿内系小型精製器台である。口縁端部は欠失する。外面は横ミガキ、内面は磨滅で調整不明。橙褐色を呈す。32は山陰系鼓型器台の底部である。外面は縦ミガキ、内面はケズリで調整する。淡黄褐色を呈す。

33は製塩土器である。口縁部は欠失するが、脚部に比べ杯部が大きく、胴部が張る。外面はタタキのちケズリ、内面はケズリのちナデを施し、器壁を薄く仕上げる。胎土は雲母を多く含み、黄茶褐色を呈す。(大庭)

111号竪穴住居跡 (図版46、第231図)

3中3区東端、110号竪穴住居跡の東に隣接する。南東隅が116号竪穴住居跡に切られるように発掘したが、この切合いはかなり不安。北西部を攪乱により失うが、南北4.7m、東西4.3mの長方形住居跡と考えられる。中央やや北で攪乱に切られる粘質砂高まりが検出された。他住居跡のカマド構築土と類似した土で、本住居跡も北西部にカマドを設置していた可能性が大きい。埋土上部黄灰褐色細砂、下部褐灰色細砂。出土遺物の一括性は良好か。土器以外に磨石(第251図63)が出土。

出土土器 (第232図1~16) 1・5・6は在地系壺の破片か。1は頸部片で頂部にタタキを施したコの字突帯をめぐらす。5・6は胴部片で、いずれも突帯巡らす。5は刻め目突帯、6は非常に低いコの字突帯。2は大形の山陰系二重口縁壺。3は中形壺で外面はハケ後ミガキ、内面ナデ。4は小形丸底壺で外面ハケ、内面は口縁ハケ、胴部ナデ。いずれも灰黄褐色~淡黄褐色。

7~9は口縁が内湾する布留系甕。7は肩部に櫛描直線文巡らす。8は縦ハケ部に微かに左上りタタキ残る。8は外面胴下半、9は外面全面に煤が付着。いずれも灰黄褐色~淡黄褐色を呈す。

10は高杯脚部。外面縦ハケ後ミガキ、内面ケズリで白黄褐色を呈す。

11は外反口縁鉢で外面~口縁内面ハケ後横ミガキ、胴部内面横ミガキ後縦ミガキ。調整丁寧であ

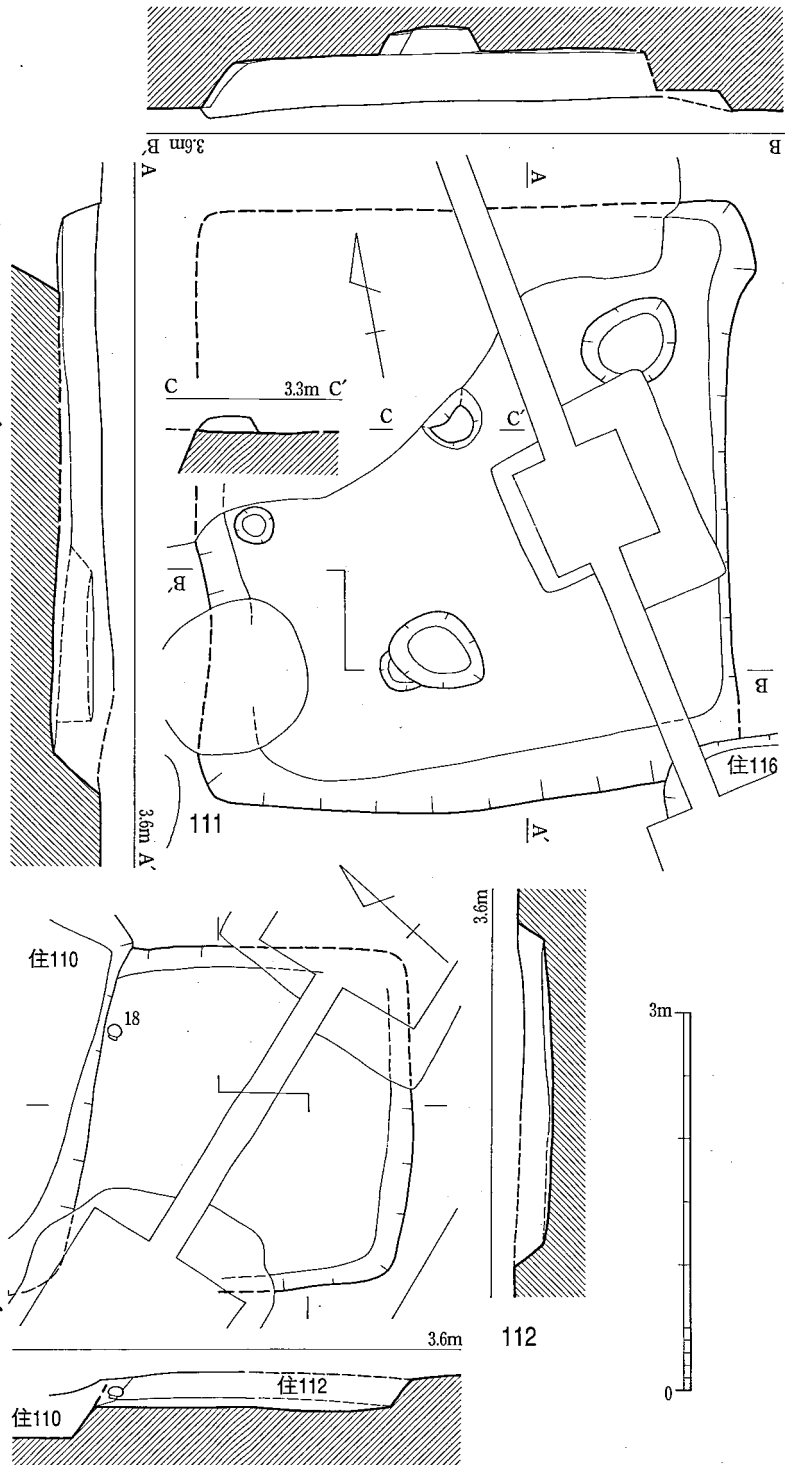
るが器表凹凸激しい雑な作り。
12~14は直口縁鉢。12・13は外
面底部ケズリ後内外ミガキ。14
は外底部はケズリ後ハケと粗い
ミガキ。他はハケ仕上げ。15・
16は脚付鉢で15は内外ハケ後外
面横ミガキ、内面縦ミガキ。16
は外面粗雑なハケ、内面ハケ後
ミガキ。14黄褐色、16暗黄橙色、
他は橙褐色。(重藤)

112号竪穴住居跡 (図版47、
第231図)

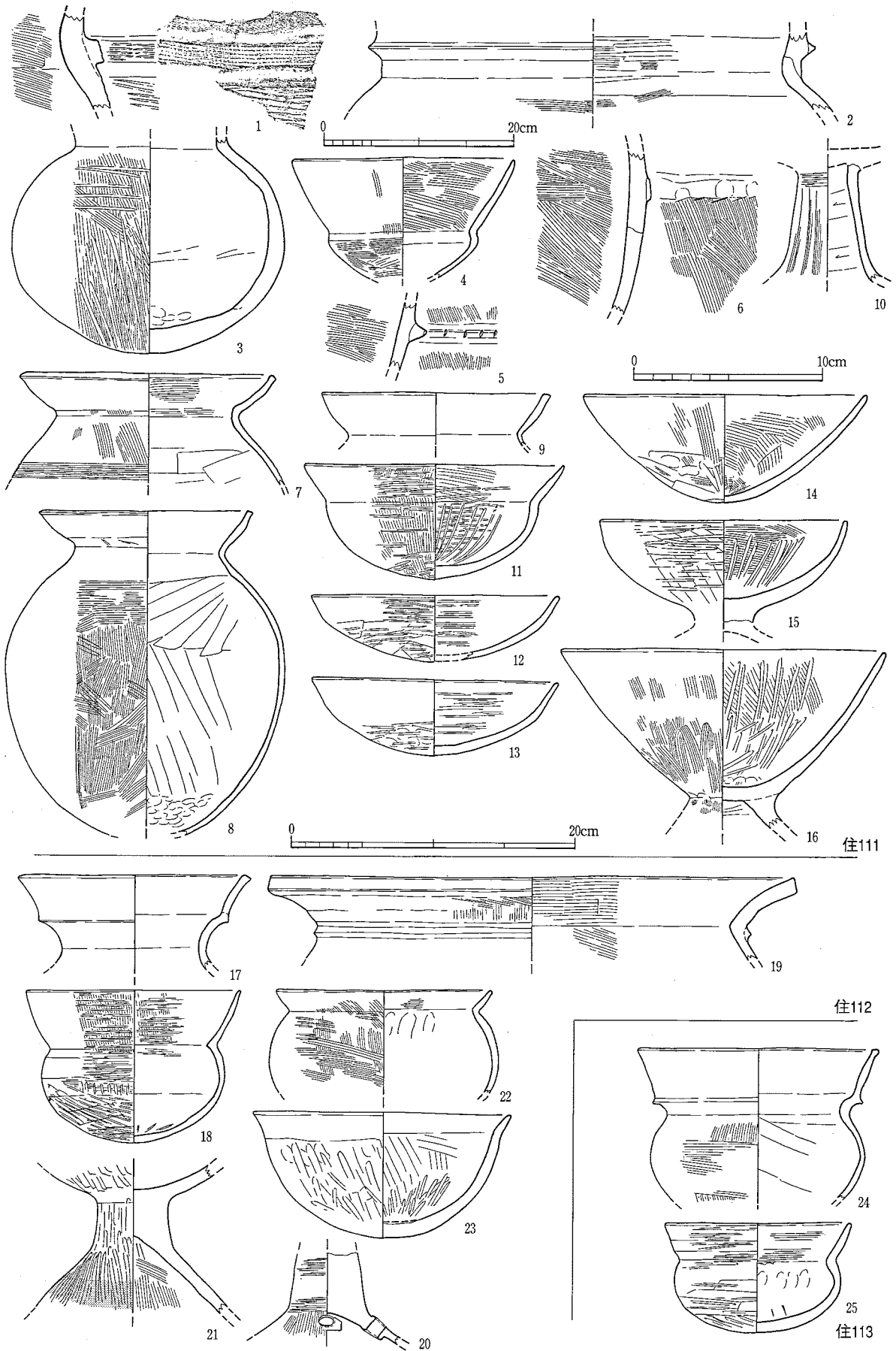
3中3区南寄りにあり、北側
を110号竪穴住居跡に切られて
いる。幅2.6mと狭く、110号住
居跡と比べると床面が高い位置
にあることから、住居跡ではな
い別の機能を想定するべきか。
第232図18は本住居跡に伴うも
のとしているが、出土位置から
考えて110号住居跡に伴う可能
性もある。埋土は斑状に黄褐色
細砂の混じる暗褐色細砂。

出土土器 (第232図17~23)

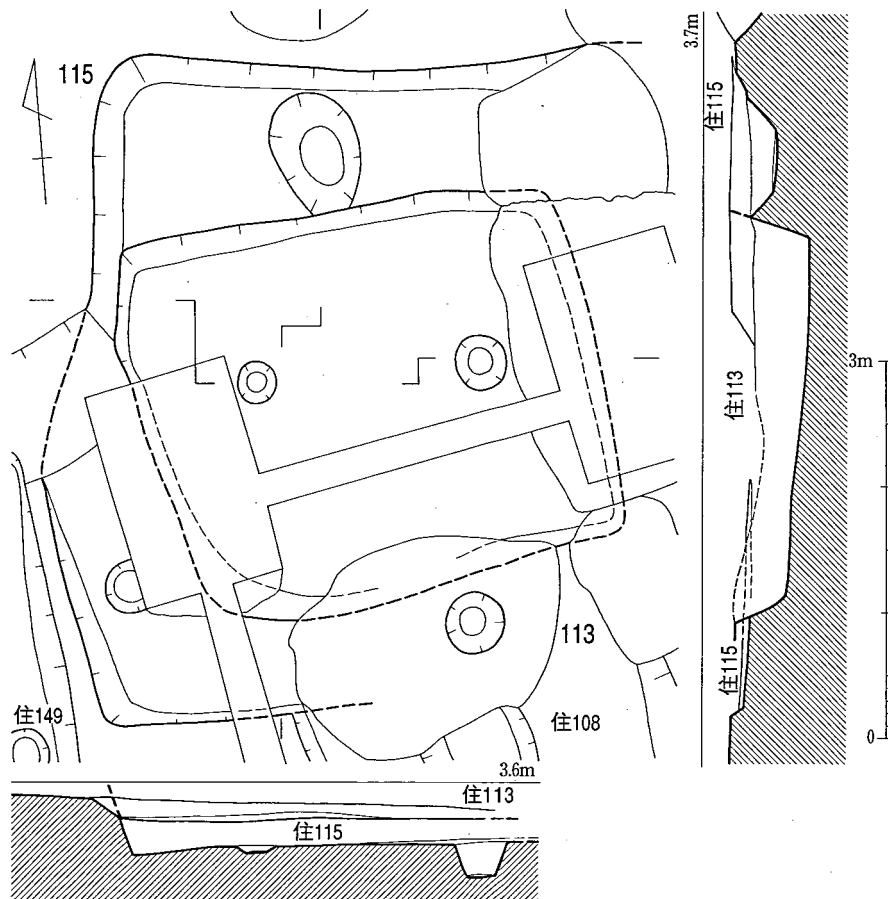
17は山陰系二重口縁壺。18は
小形丸底壺で外面は底部ケズリ、
その他ハケ後横ミガキで、胴部
最大径付近に縦方向工具痕が残
ることが特徴的。内面は口縁縦
ハケ後横ミガキ、胴部ナデ。19
は大形在地系甕で内外ハケ。20
は高杯脚部片で外面縦ハケ後横
ミガキ、内面ナデ。脚裾部に乾燥前穿孔。21は脚付鉢で脚裾を赤彩する。外面縦ミガキ、鉢内面ナ
デ、脚内面ハケ。22は器形の深い外反口縁鉢で外面タタキ後ハケ、内面ナデで仕上げる。23も外反
口縁鉢で外面ナデ後一部太い縦ミガキ、内面粗いハケ後縦ミガキ。黄橙色の18・23以外は灰黄褐色
~淡黄褐色。(重藤)



第231図 111・112号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第232図 111~113号竪穴住居跡出土土器実測図（2は1/6、1・5~9・17・19は1/4、他は1/3）



第233図 113・115号竪穴住居跡実測図 (1/60)

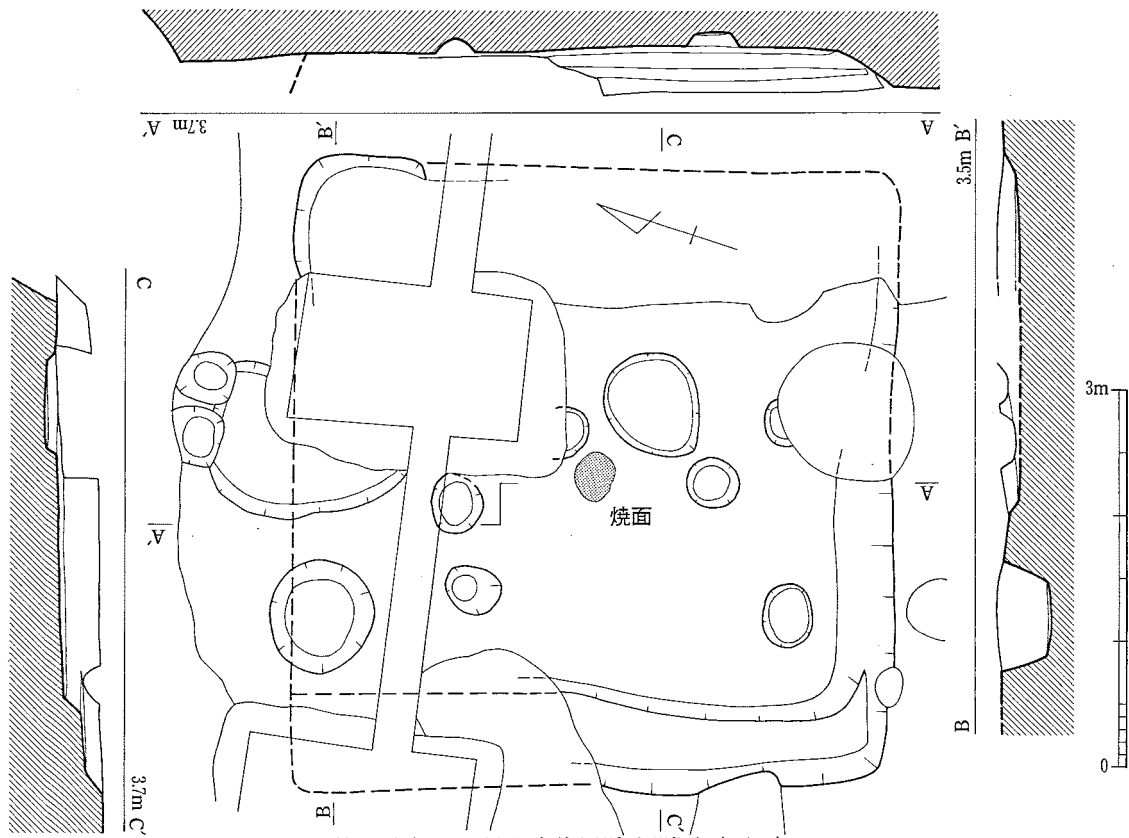
113号竪穴住居跡 (図版47、第233図)

3中3区西北隅、115号竪穴住居跡の中に位置している。当初、両者を一連のものと考えて115号住居跡床面まで掘り下げたところ、本住居跡の輪郭がはっきりとして115号住居跡を切り込むものと判明した。108号住居跡を切るように表現しているが、これも不安。本住居跡は東西壁にあたる位置に校舎基礎が残っており、検出したのは北壁と南壁の一部のみである。規模も小さく、炉跡も検出していないので住居跡以外の性格も考えておく必要がある。埋土は暗灰褐色細砂。土器以外に砥石(第251図65)が出土。

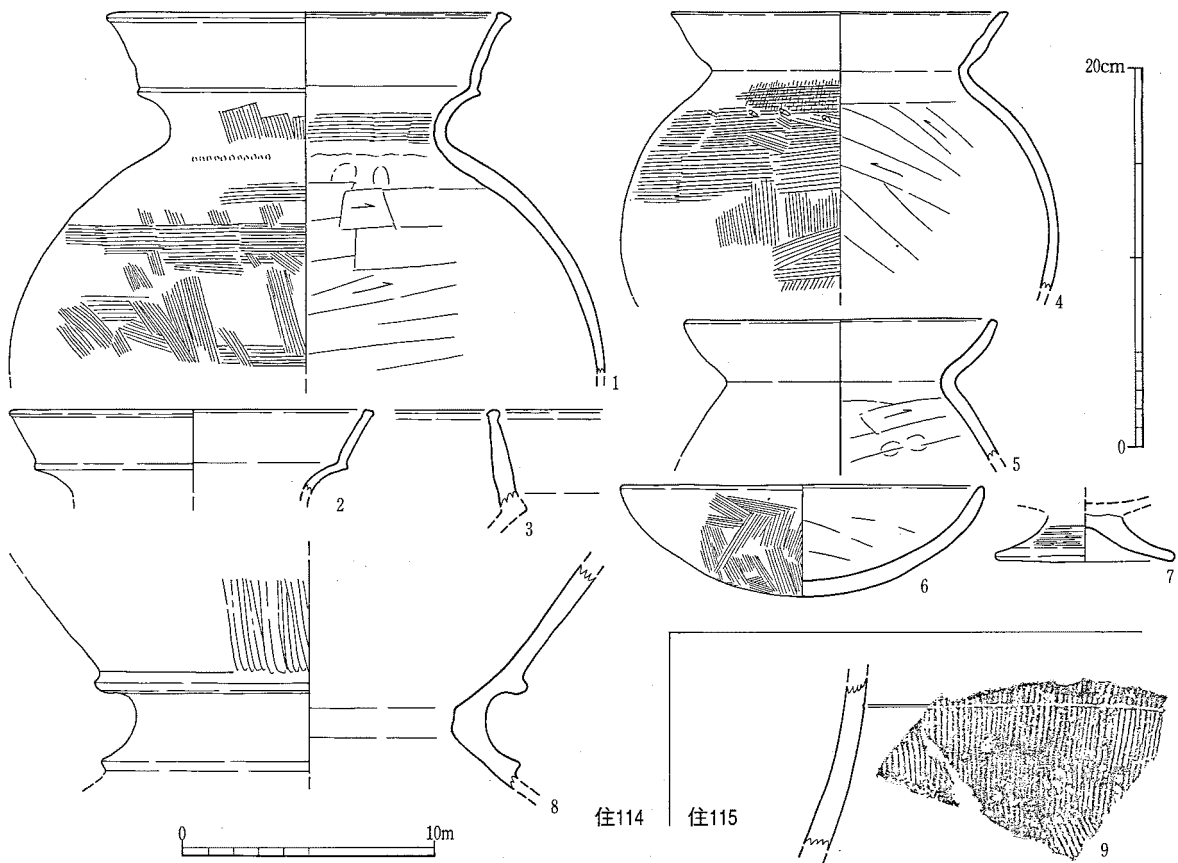
出土土器 (第232図24・25) いずれも本住居跡と115号住居跡のどちらに伴うか不明となったもの。24は二重口縁小形丸底壺で胴部外面ハケ、胴部内面ケズリ。25は外反口縁鉢で、胴部外面ケズリ後横ミガキ。内面は口縁部横ハケ、胴部ナデ。ともに淡黄褐色。(重藤)

114号竪穴住居跡 (図版47、第234図)

3中3区中央北、110号竪穴住居跡の北に位置する。東に大きな攪乱があり、北も校舎基礎により壁がほとんど削平される。壁を検出できたのは西壁～南壁と北東隅のみ。西壁はテラスを形成しているが、外側は掘り間違いで内側が本住居跡壁か。中央に焼面があり上面に土器が多数堆積していた。これを炉跡と考えていたが、土器を取り上げたところカマド支脚に適当な大きさの石が出土したのでカマド焼面の可能性もある。カマド壁体は検出できなかったため、あったとすれば壁の削



第234图 114号竖穴住居跡実测图 (1/60)



第235图 114・115号竖穴住居跡出土土器実测图 (1~3・7は1/4、他は1/3)

平された北西隅から伸びる平面L字形のカマドと想定される。他住居跡との切合いもなく出土遺物の一括性は良好。灰褐色細砂を埋土とし、埋土中より土製ガラス勾玉鑄型（第241図1）が出土。
出土土器（第235図1～8） 1～3は山陰系二重口縁壺である。1は頸部下の一部に小さい竹管文を微かに施す。3は口縁部が内傾。4は1/2周残る布留系甕破片。口縁端が水平面をなす点特徴的。1/8周のみ肩部に棒状工具刺突文施す。5も布留系甕で外面全体に煤が付着。6は直口鉢で外面ハケ、内面ケズリ後ナデ。7は脚付鉢で外面ミガキ、内面ナデ。8は山陰系鼓形器台で口縁部外面縦ミガキ、口縁内面摩滅、他はナデ。黄橙色の7以外は白黄褐色～淡黄褐色。（重藤）

115号竪穴住居跡（図版47、第233図）

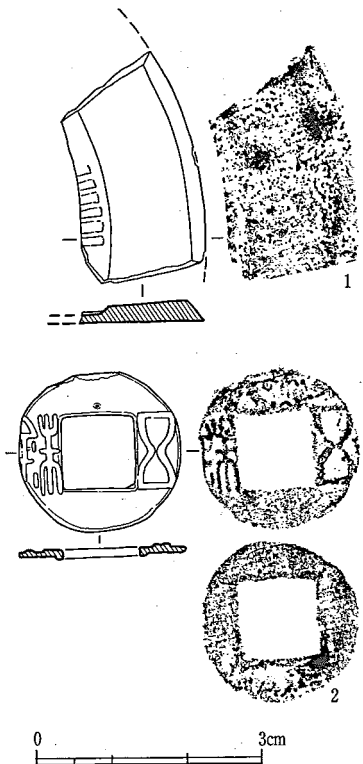
3中3区西北隅に位置し、113号竪穴住居跡に切られる。中央に113号住居跡と校舎基礎があり、東側は攪乱も多い。そのため検出できたのは北壁の一部と北西隅、南西隅のみで、炉跡もはっきりしない。また西壁のラインもいびつとなっており、平面形は不安である。埋土は暗褐色細砂。
出土土器（第235図9） 本住居跡に確実に伴うものとして床面ピットから出土した半島系土器片10がある。胴部片で外面平行タタキ後横沈線、内面ナデ。胎土精良で灰黄褐色。（重藤）

2. 青銅器（第236図）

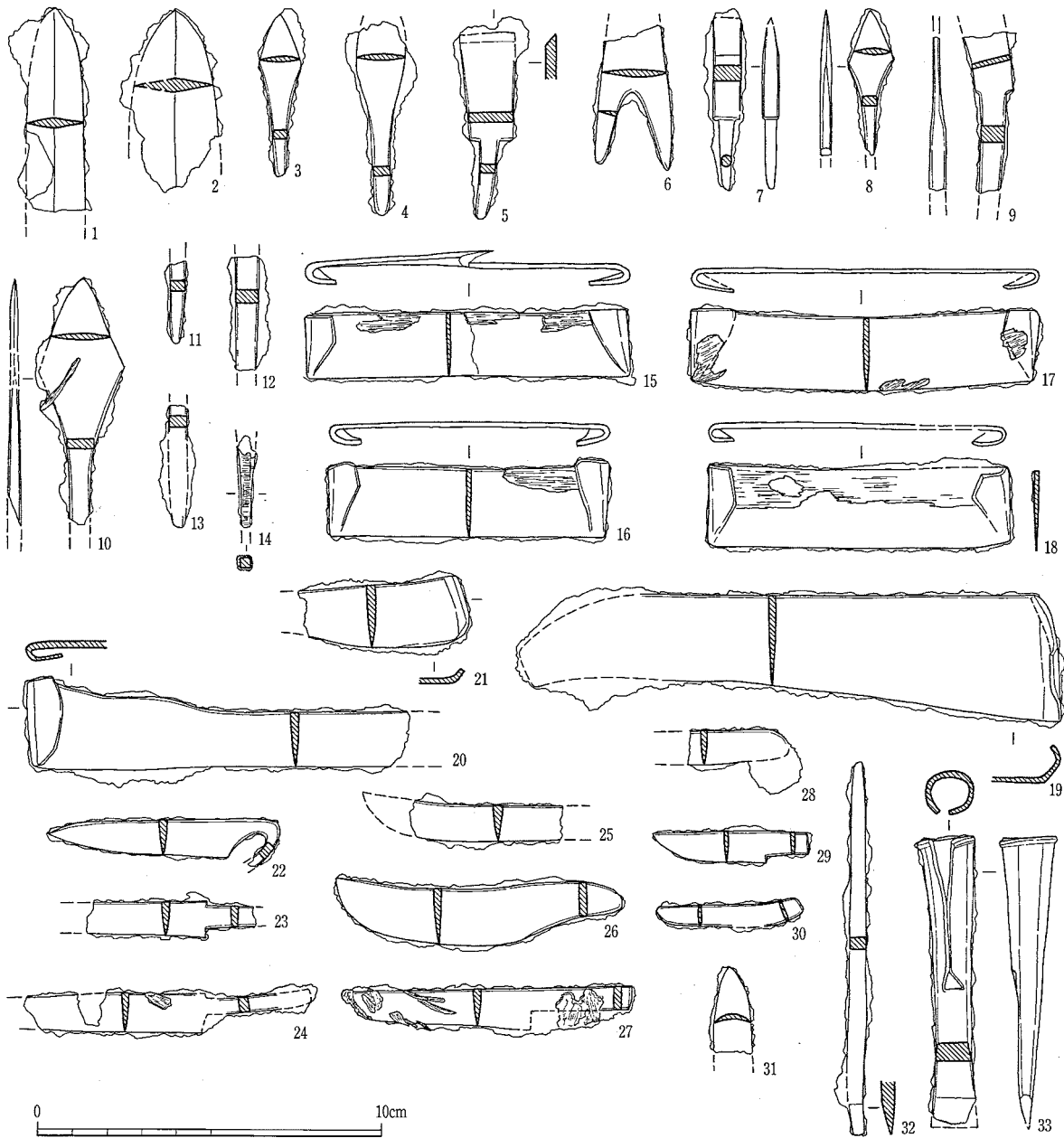
ここでは12次調査で出土した古墳時代の青銅器について説明する。

1は41号土坑から出土した銅鏡縁片である。1/8周ほどの破片となっており、復元すると直径9.4cmになる。縁は無文で幅は1.3cmを測り、外側がわずかに厚くなっている。その内側には密な橢圓文がわずかに残っている。厚さは縁0.3cm、橢圓文部分0.1cm余りである。鏡面はほぼ平らである。銅質は良好で残りの良い部分では黒緑色を呈しているが、緑青がかさぶた状にふきだした部分がかかり見られる。縁の形態、橢圓文の存在、銅質から考えて舶載の後漢鏡と思われる。

2は96号竪穴住居跡の床面近くから出土した五銖銭で、弥生、古墳時代の遺跡出土例としては九州では北九州市守恒遺跡、長崎県壱岐原の辻遺跡について3例目となるであろう。周縁の隆起帯（周郭）からその内側の銭体にかけて削られたいわゆる剪輪五銖銭である。そのため「五」字の右上、右下が欠け、「銖」字は金属が半分になっている。上部は少し欠損している。現状では直径2.1cm、厚さ0.1cm、保存処理後の重量0.8gを測る。方孔（穿）は1辺0.95cmのほぼ正方形を呈するが、右下にわずかに甲張りが残る。裏は穿を縁取る隆起帯がある。「五」字は上下に椀形を呈しているが、中央では交叉せずに砂時計形を呈している。「銖」字の金属上部は正三角形をなすようであり、4点は縦にやや長いようである。朱字の頭と下筆は円折している。穿上の中央に突起した円点があり、いわゆる「穿上半星」となる。このような字体、剪輪五銖銭となることから、岡内三真氏〔1982〕の分類による「Ⅲ a 式五銖銭」と考えられる。



第236図 青銅器実測図(実大)



第237図 鉄器実測図 (1) (1/2)

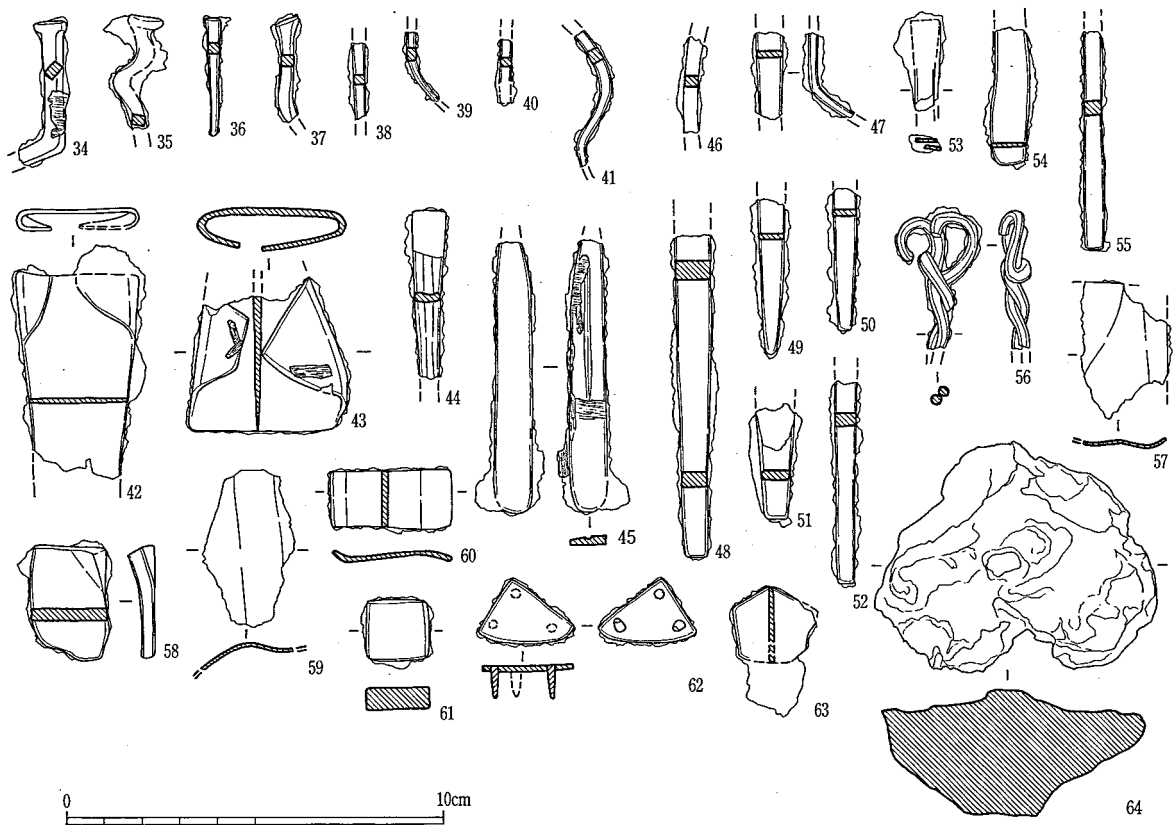
その製作時期は後漢後半にあたとされている。(重藤)

3. 鉄器 (第237・238図)

第237・238図に掲載したのは12次調査の古墳時代の遺構から出土した鉄器で、来年度報告予定の遺構出土品も一部含まれる。

1・2は鉄剣鋒部の破片で、1は93号竪穴住居跡覆土上層、2は116号竪穴住居跡覆土から出土した。1は幅1.6cmと細身であるいは鉄鏃の可能性も考えられるだろう。

3～14は鉄鏃の破片である。3は15号住居跡覆土、4は15号住居跡P 8、5は63号住居跡、6は89号住居跡、7は93号住居跡覆土中層、8は97号住居跡覆土下部、9は105号住居跡覆土、10は116号住居跡上面より出土した。7は有稜形を呈するもので、集落からの出土としては希少例であろう。



第238図 鉄器実測図 (2) (1/2)

11～14は鉄鏃頸部、茎部と考えられる破片で、11は49号住居跡、12・13は81号住居跡東包含層、14は94号住居跡覆土上層の出土品である。14は茎部に植物繊維と思われる有機物が付着している。

15～18は手鎌で、15・16は3号住居跡から、17・18は93号住居跡覆土中層より出土した。15・18は袋部にわずかに木質が遺存し、17は表面に二次的に木質が付着している。

19～21は鎌である。19は49号住居跡から出土した。折り返し部分まで刃部としており、先端の形態は明らかではないが遺存状況からわずかに下方に曲がるものと思われる。20はやはり49号住居跡から出土したものである。とりあえず鎌と考えるが、折り返しが19と逆に左にあり、強く身と接している。また脊が曲線をなすように見え、通常の鎌とは異なる。21は41号土坑より出土したものである。これは折り返しが弱く、刃部が曲線を呈している。このような点から20・21は他器種となる可能性もあるだろう。

22～28は刀子で、22は1号住居跡、23は29～31号住居跡間の遺構面、24は73号住居跡、25は92号住居跡覆土上層、26は89号住居跡、27は100号住居跡、28は41号土坑より出土した。22が現状では茎部が曲がり、素環頭状を呈している。23・24は古墳時代前期には珍しい両関を呈する可能性がある。26は関がはっきりせず、切先が上に屈曲する特異な形態を呈している。28は茎部が錆で膨らむと考えたが、あるいは蕨手刀子となる可能性がある。なお、24と27に付着している有機物は二次的に付いたものと思われる。

29・30は小形で作りも華奢であるため、雛形刀子とした方が妥当と思われる。29は関まで刃をつくり、関も明確であるが、30は刃もなく、関も不明瞭である。29は89号住居跡、30は41号土坑から出土した。

31は160号住居跡覆土出土品で、鏑鉋先端部分であろう。

32・33は鑿である。32は71号住居跡覆土より出土した茎鑿でほぼ完形である。片刃を呈し、茎先端はやや細くなっている。一方、33は鍛造の袋鑿で137号住居跡より出土した。刃部は先端を欠損するが片刃を呈すようであり、身は太くしっかりした作りである。袋は下方の合わせ目が綴じているが、上方がやや開き、口がわずかに外側に折り返したようになる。

34～41は鉄釘と考えられるもので、近世以降のものが混入した可能性が高い。34・35は3号住居跡、36は18号住居跡、37～41は93号住居跡覆土上部から出土した。

42～63は不明鉄器である。42、43は板状鉄板の側縁を折り曲げて袋状にしたものである。43は下縁が直線をなし薄くなるので、刃部となる可能性がある。実用的な器種とも考えられず雛形鉄斧と類似するが、時期的には隔たりがある。42は26～28号住居跡の周辺から、43は35号住居跡覆土から出土した。44・45は片面に溝を有する細長い板状鉄器で、44は77号住居跡覆土、45は105号住居跡覆土から出土した。いずれも刃を造っていないようであるが、鏑鉋、あるいは鑿などの工具になる可能性も考えられる。46は3号住居跡出土で棒状を呈す。47は36・38・43号住居跡上層より出土した鉄板。48は65号住居跡から出土したもので、鑿の茎部になるか。49～52は細長い鉄板で、比較的しっかりした造りのものであるため、工具の茎部の可能性が高い。49は43号住居跡覆土上層、50は71号住居跡、51は81号住居跡東包含層、52は76号住居跡より出土した。53・54は薄い鉄板状のもの。53は2枚が有機物とともに錆付いている。53は157号住居跡、54は41号土坑から出土した。55も41号土坑から出土したもので下端は本来の形状を留めている。56は2条の断面円形の鉄棒を振じったもので、77号住居跡より出土したが混入した近世遺物の可能性も否定できない。57～63は鉄板状のものである。62は鉄鋸をうつ三角形の鉄板をなしている。57・59は26～28号住居跡周辺、58は42号住居跡、60・61は71号住居跡、62は109号住居跡、63は41号土坑出土のもので、63以外は近世・近代遺物の混入品の可能性を否定できない。

64は65号住居跡からの出土で、鉄滓の可能性があるので図示した。全体にスサ入り粘土が付着した状態のまま図示したもので、鉄滓としても鉄分は少ないものと考えられる。(重藤)

4. 玉類 (第239・240図)

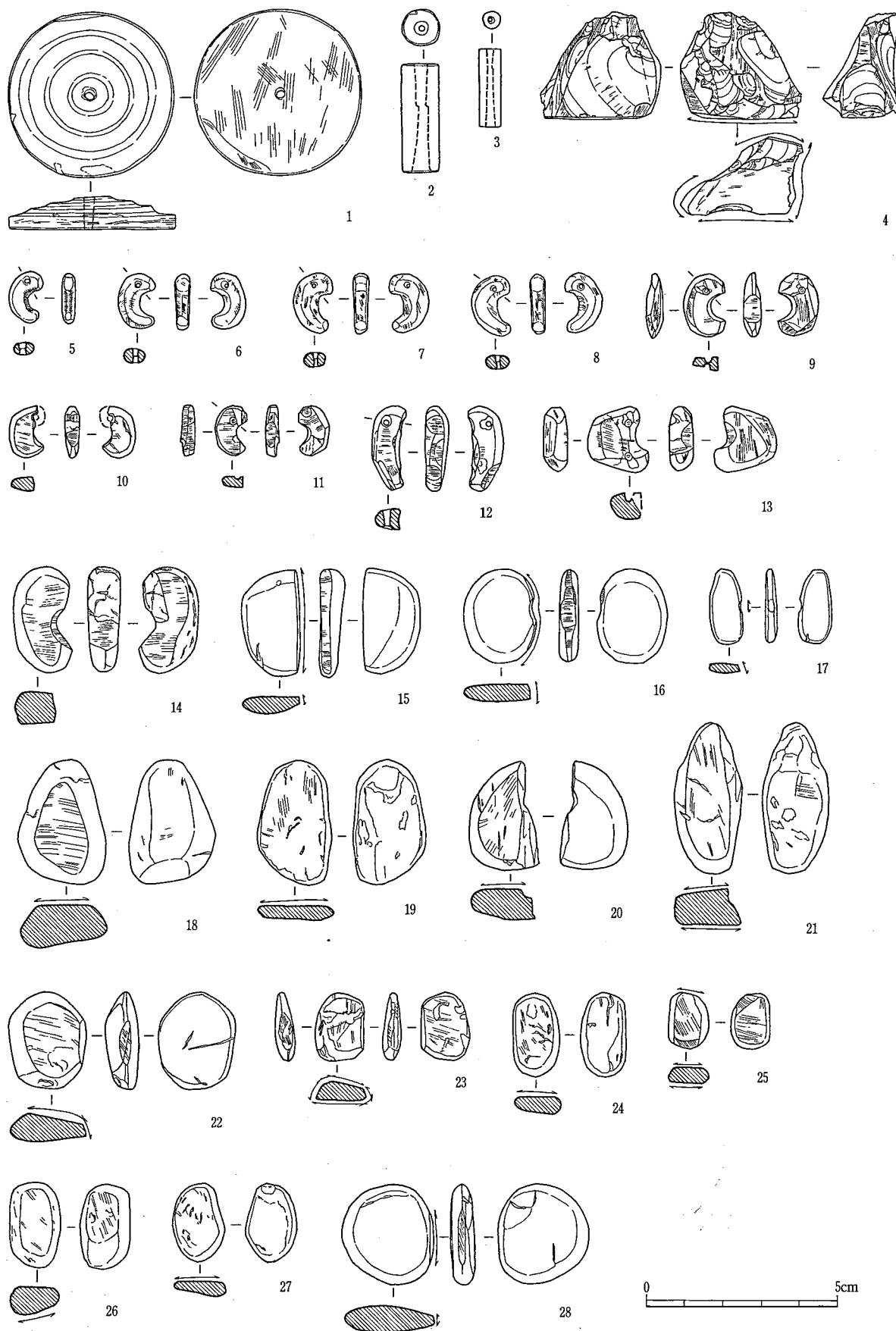
第239・240図は古墳時代の遺構から出土した玉類と古墳時代以外の遺構出土品でも古墳時代と考えられる玉類を示した。

1は108号住居跡覆土上面から出土した碧玉製紡錘車形石製品である。4段からなるが、水平ではない。裏面、側面に擦過痕があり、砂に洗われて稜が甘くなっている。緑灰色を呈するグリーンタフに近い石材である。九州では熊本県八代市楠木山古墳、佐賀市熊本山古墳に次いで恐らく3例目の出土であり、集落遺跡からの出土は全国的にも珍しい。

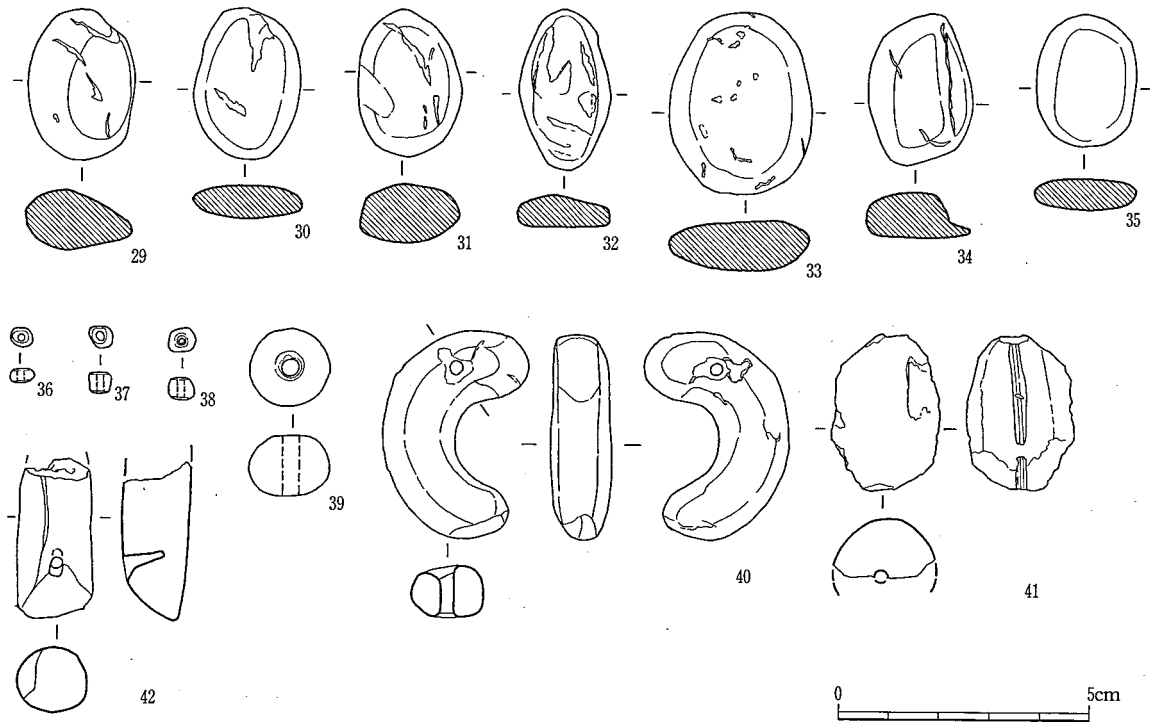
2・3は碧玉製の管玉である。2は97号住居跡周辺の遺構面から、3は64号住居跡覆土から出土した。2は黄緑色、3は灰緑色のグリーンタフに近い石材である。

4は119号住居跡P2から出土した碧玉製玉未製品である。不定方向に打ち欠いた後、研磨を行っている途中で放棄されたものである。特に図の下面の研磨は丁寧で、擦痕をほとんど残さない。深緑色を呈する良質の石材であるが、一部に緑灰色のグリーンタフ状の脈がある。17.1gを測る。

5～8は蛇紋岩製の勾玉で、5は3号住居跡から、6～8は39号住居跡南部の覆土床面近くから



第239图 玉類実測図 (1) (2/3)



第240図 玉類実測図 (2) (2/3)

出土した。いずれも研磨時の擦痕を良く残している。

9～28は凝灰質泥岩の勾玉未製品で、29～35はその原石である。9は74・78号住居跡上層、10は65号住居跡覆土上層、11は131号住居跡覆土、13は97号住居跡覆土上層、16・26は75b号住居跡覆土下層、17は65号住居跡床付近、27・28は65号住居跡覆土より出土したもので、それ以外は96号住居跡から出土した。96号住居跡出土品は覆土からの12、34を除けばいずれも床面P3中の一括埋納品中のものである。遺構の説明時にも述べたように、96号住居跡P3には玉原石と玉未製品が一括して納められており、当住居が玉製作工房であった可能性が高い。

9～11はほとんど勾玉に近い形に仕上げているが、最終仕上げの直前の穿孔時に失敗して放棄されたものと考えられる。12は穿孔には成功しているものの、外面を粗く削った段階で放棄されている。13は勾玉形に近付ける途中で上下2ヶ所に穿孔を試みたものであるが、いずれも孔は貫通していない。14は比較的勾玉に近い形態に屈曲部を造り出しているが、上部が欠けており、恐らく穿孔時に剥離したのと考えられる。15は適当な大きさの自然の半円形の礫を磨いて勾玉に適した半円形に近付けたものである。17・18は自然の円礫の一側面を溝状に研磨している。18～28は図中の矢印で示したように自然の円礫の表裏、側面を研磨したものであるが、玉の形態に近付ける前に放棄されている。

これらから製作工程を考えると第1段階として15のように屈曲部を造る面を整形するもの、16・17のように円礫に研磨して溝を造り玉屈曲部を造り始めるもの、18～28のように全体の自然面を研磨により落とすものに分けられる。次の工程としては13・14のように粗整形の段階で穿孔した後、12のような勾玉形に近付けるための研磨を再度行うものと、9～11のようにほとんど製品に近い形まで整形した後に穿孔を行うものに分けられる。

29～35は96号住居跡から出土した玉原石である。図示したのも含めて96号住居跡では256点の

第1表 玉原石一覧表

No.	出土遺構	色	長さ	幅	厚さ	重さ	No.	出土遺構	色	長さ	幅	厚さ	重さ
1	住96 P3	白	3.6	1.7	1.1	7.0	56	住96 P3	黄白-白緑	3.0	2.1	1.3	9.6
2	住96 P3	黄白	2.8	2.3	0.9	8.1	57	住96 P3	黄白-黄緑	2.4	1.7	0.7	3.2
3	住96 P3	白	2.1	1.1	0.6	0.9	58	住96 P3	黄白-白緑	3.7	2.1	0.9	9.0
4	住96 P3	白	3.0	2.0	0.6	4.4	59	住96 P3	黄白-白緑	3.1	1.9	1.1	6.8
5	住96 P3	黄白	28	22	0.8	6.3	60	住96 P3	黄白-白緑	3.8	2.1	1.2	11.6
6	住96 P3	黄白~黄緑	4.3	2.4	0.8	13.1	61	住96 P-3	黄白-緑	2.0	1.6	0.8	2.8
7	住96 P3	黄白	2.6	1.4	0.6	2.9	62	住96 P-3	黄白-白緑	2.1	1.0	1.0	2.0
8	住96 覆土	白	1.6	0.7	0.6	0.5	63	住96 P-3	黄白	3.1	1.8	0.9	5.5
9	住96 P3	黄白~黄緑	1.5	1.4	0.6	1.7	64	住96 P3	黄白-緑	2.0	1.2	0.7	2.0
10	住96 P3	黄白	3.8	1.8	1.2	8.3	65	住96 P3	黄白-緑	3.5	1.9	0.8	8.7
11	住96 覆土	黄白~緑黒	1.8	1.4	1.0	2.6	66	住96 P3	黄白	3.1	1.6	0.7	4.6
12	住96 P3	黄白~白緑	26	13	10	3.9	67	住96 P3	黄白	2.4	2.3	0.7	4.9
13	住96 P3	黄白~緑黒	17	13	0.7	1.9	68	住96 P3	黄白	2.6	1.3	0.6	2.6
14	住96 P3	黄白	18	13	0.4	1.0	69	住96 P3	黄白	2.7	1.7	0.8	4.0
15	住96 P3	黄白~黄緑	31	20	1.1	8.4	70	住96 P3	黄白	3.1	1.9	0.4	2.5
16	住96 P3	黄白~緑黒	1.7	1.4	0.7	1.7	71	住96 P3	黄白、黄緑	2.4	1.9	0.6	3.7
17	住96 P3	黄白	2.0	0.8	0.7	1.2	72	住96 P3	白	2.5	1.9	0.8	5.9
18	住96 P3	黄白	3.6	1.3	1.0	5.0	73	住96 P3	黄白-黄緑	1.8	1.1	0.7	1.7
19	住96 P3	黄白~黄緑	2.4	1.2	1.1	3.6	74	住96 P3	黄白	3.1	2.2	1.3	11.3
20	住96 P3	黄白~黄緑	3.6	2.2	1.1	10.0	75	住96 P3	黄白-黄緑	2.6	2.3	1.5	8.9
21	住96 P3	白	2.7	1.5	0.5	2.8	76	住96 P3	白	1.7	1.7	0.9	1.9
22	住96 P3	黄白~白緑	1.7	1.1	0.5	1.1	77	住96 P3	褐色	2.7	2.3	0.9	6.1
23	住96 P3	黄白	3.1	1.9	0.9	5.6	78	住96 P3	褐色	4.1	2.0	1.8	20.2
24	住96 P3	黄白~緑白	1.9	1.3	0.9	2.8	79	住96 P3	褐色、一部緑	2.8	1.9	0.9	0.8
25	住96 P3上層	黄白~緑白	3.6	2.4	1.1	11.6	80	住96 覆土	褐色、一部緑	2.7	2.2	1.0	8.8
26	住96 P3	黄白	3.7	2.2	1.2	13.3	81	住96 P3	褐色	3.5	1.6	1.2	9.4
27	住96 P3	黄白~緑黄	2.8	1.9	0.7	4.6	82	住96 P3	褐色	2.5	2.0	1.1	5.6
28	住96 P3	黄白~白緑	26	15	0.6	3.1	83	住96 P3	褐色	3.0	2.1	0.9	7.9
29	住96 P3	白	2.1	1.8	0.7	3.1	84	住96 P3	褐色	2.8	1.5	1.1	6.2
30	住96 P3	白	2.2	1.0	1.1	4.1	85	住96 P3	褐色	3.6	1.8	1.0	10.3
31	住96 P3上層	黄白~白緑	3.2	1.8	0.9	7.3	86	住96 P3	褐色 少し緑	2.4	1.5	0.8	4.3
32	住96 P3	黄白~黒緑	2.1	1.6	0.9	4.0	87	住96 P3	褐色	29	20	0.8	7.3
33	住96 P3上層	黄白	3.0	1.8	0.9	4.5	88	住96 P3	褐色	2.7	2.4	1.0	8.7
34	住96 P3上層	黄白~黄緑	4.6	2.6	1.2	16.4	89	住96 覆土	黄緑色	3.7	2.1	1.1	10.5
35	住96 P3	黄白~白緑	1.5	1.4	0.7	1.3	90	住96 P3	黄緑-緑白	2.7	1.9	1.2	9.2
36	住96 P3	黄白~緑	1.8	1.6	1.0	3.6	91	住96 P3	黄緑-白緑	1.6	1.2	0.5	1.4
37	住96 P3	黄白~黄緑	3.3	1.8	1.2	10.3	92	住96 P3	黄緑	3.5	1.7	1.1	8.6
38	住96 P3	黄白~白緑	3.7	2.0	1.1	8.6	93	住96 P3上層	緑白	3.0	1.5	1.2	8.0
39	住96 P3上層	黄白~黄緑	2.1	1.4	0.8	2.2	94	住96 P3	黄緑	1.8	1.7	0.6	2.7
40	住96 P3	白色	1.7	1.3	0.7	1.9	95	住96 覆土	黄緑-緑白	4.7	2.2	1.2	18.2
41	住96 P3	黄白~緑	1.6	1.6	0.5	1.5	96	住96 P3	黄緑-緑	3.2	2.0	1.2	7.6
42	住96 P3	黄白	2.0	1.4	0.5	2.3	97	住96 P3	黄緑-緑	2.4	1.8	0.8	4.5
43	住96 P3	黄白	1.7	1.4	1.3	3.5	98	住96 P3	黄緑-緑白	3.0	1.8	1.0	5.4
44	住96 覆土	黄白~緑	2.6	1.7	1.0	4.7	99	住96 覆土	黄緑-緑白	3.1	2.5	1.1	10.6
45	住96 P3上層	白	3.2	2.1	0.9	6.7	100	住96 覆土	黄緑-緑	2.7	1.6	0.8	3.7
46	住96 P3上層	黄白~緑	2.0	1.4	1.0	3.7	101	住96 P3	黄緑-緑	1.9	1.8	0.8	0.4
47	住96 P3上層	白	1.4	1.0	0.7	1.1	102	住96 P3	黄緑-緑	2.9	1.6	0.8	4.5
48	住96 P3	黄緑-黄白	2.9	1.9	0.7	5.6	103	住96 P3	黄緑-緑	2.3	1.3	0.9	3.1
49	住96 P3	黄白-黄緑	2.8	2.0	1.2	10.0	104	住96 P3	黄緑-緑	2.0	1.8	0.6	2.7
50	住96 P3	黄白-黄緑	2.8	1.7	0.6	3.6	105	住96 P3上層	黄緑-緑	2.3	1.5	0.9	4.0
51	住96 P3	黄白-緑白	2.4	2.2	0.7	4.7	106	住96 P3	黄緑-緑	3.1	2.1	0.7	6.8
52	住96 P3	黄白-緑白	2.3	1.3	0.7	2.5	107	住96 P3	黄緑-緑白	1.8	1.4	0.8	2.4
53	住96 P3	黄白-白緑	2.8	1.5	1.2	6.3	108	住96 P3	黄緑	2.3	2.0	0.6	3.5
54	住96 P3	白色	3.0	1.6	0.9	4.5	109	住96 P3	黄緑-緑白	2.9	1.4	0.7	3.8
55	住96 P3	黄白-黄緑	2.1	1.4	0.4	1.7	110	住96 P3上層	黄緑-緑白	2.4	1.0	0.9	3.3

(表1 続き)

No.	出土遺構	色	長さ	幅	厚さ	重さ	No.	出土遺構	色	長さ	幅	厚さ	重さ
111	住96 P3	黄緑	2.5	1.4	0.6	2.2	166	住96 P3上層	緑-黒緑斑	3.1	1.7	1.0	6.7
112	住96 P3	黄緑-緑	2.9	2.1	1.3	9.6	167	住96 P3	緑-黒緑縞	2.9	1.8	0.5	3.9
113	住96 P3上層	黄緑-緑	2.6	1.6	1.2	7.4	168	住96 P3	緑-黒緑縞	2.7	1.4	2.7	4.6
114	住96 P3	黄緑-緑白	2.6	1.2	0.4	1.6	169	住96 P3上層	緑-黒緑縞	2.9	1.4	0.8	4.4
115	住96 P3	黄緑-緑	1.7	1.1	0.5	1.2	170	住96 P3上層	緑-黒緑斑	2.5	2.2	0.8	6.6
116	住96 P3	黄緑-緑白	2.9	1.8	1.2	6.4	171	住96 P3	緑-黒緑斑	2.8	1.4	0.5	3.7
117	住96 P3	黄緑-緑白	3.1	1.9	1.1	7.4	172	住96 P3	緑白-黒緑斑	3.5	1.8	1.1	10.3
118	住96 P3	黄緑-緑白	3.0	1.5	0.8	4.2	173	住96 P3	緑-黒緑斑	2.6	1.7	0.6	4.5
119	住96 P3	黄緑-緑白	1.9	1.1	0.7	2.0	174	住96 覆土	緑-黒緑斑	2.7	1.9	0.7	5.7
120	住96 P3	黄緑	2.7	2.2	0.7	7.5	175	住96 P3上層	緑-黒緑斑	3.1	2.0	0.8	7.4
121	住96 P3	黄緑-緑	3.2	1.6	0.9	6.9	176	住96 P3	緑-黒緑斑	2.6	2.4	0.9	6.9
122	住96 P3	黄緑-緑白	5.8	2.5	1.2	23.5	177	住96 P3上層	緑-黒緑斑	3.6	2.4	1.6	12.2
123	住96 P3	黄緑-緑	1.9	1.8	0.8	3.4	178	住96 P3	緑-黒緑縞	2.5	2.4	0.7	5.2
124	住96 P3	黄緑-緑白	2.3	1.5	0.6	2.2	179	住96 P3	緑-黒緑斑	2.8	2.1	1.2	10.0
125	住96 覆土	黄緑-緑白	2.5	2.2	0.9	6.3	180	住96 P3	黒緑-緑斑	2.8	2.2	0.8	6.4
126	住96 P3	黄緑-緑	2.7	2.0	0.9	6.7	181	住96 P3	黒緑-緑斑	2.9	1.8	0.6	5.0
127	住96 P3	黄緑	3.4	1.6	0.7	5.4	182	住96 P3	黒緑-緑斑	2.5	1.6	0.7	5.1
128	住96 覆土	黄緑-緑白	3.0	1.8	1.2	6.5	183	住96 P3	黒緑-緑斑	2.3	2.0	0.6	5.6
129	住96 P3	黄緑	2.7	1.7	0.9	6.2	184	住96 P3	黒緑-緑斑	2.8	2.0	0.7	7.5
130	住96 P3	黄緑-緑	2.1	1.0	0.8	2.1	185	住96 P3	黒緑-緑斑	1.9	1.6	0.7	4.0
131	住96 P3	黄緑-緑	2.0	1.4	0.8	3.2	186	住96 P3	黒緑-緑斑	2.8	2.1	0.5	5.9
132	住96 P3	緑白	1.4	1.1	0.4	0.6	187	住96 P3	黒緑-緑斑	2.4	1.5	1.1	6.6
133	住96 P3	黄緑-緑	3.1	1.8	0.8	7.0	188	住96 P3	黒緑-緑斑	2.8	1.5	0.5	5.4
134	住96 P3	黄緑-緑	2.0	1.5	0.7	2.2	189	住96 覆土	黒緑-緑斑	2.5	2.1	0.5	6.4
135	住96 P3	黄緑-緑白	4.0	2.0	0.9	9.4	190	住96 P3	黒緑-緑斑	2.0	1.7	0.5	4.0
136	住96 P3	黄緑-緑	2.7	1.8	1.0	5.6	191	住96 P3	黒緑-緑縞	2.6	2.3	0.7	8.7
137	住96 P3	黄緑-緑	2.9	1.5	0.8	3.9	192	住96 P3	黒緑-緑斑	2.4	2.0	0.5	3.8
138	住96 P3	黄緑-緑白	3.2	1.5	0.8	4.6	193	住96 P3	黒緑-緑斑	2.5	1.4	0.7	3.5
139	住96 P3	黄緑-緑	3.3	2.2	0.9	9.5	194	住96 P3	黒緑-緑斑	3.5	1.9	1.1	9.4
140	住96 P3	黄緑-緑	3.5	2.6	1.1	14.3	195	住96 P3	黒緑-緑斑	2.6	2.0	0.6	4.8
141	住96 P3	黄緑	2.3	1.7	0.8	2.9	196	住96 P3	黒緑-緑斑	2.5	1.9	0.6	4.3
142	住96 P3	黄緑-緑	3.4	2.1	0.9	9.1	197	住96 P3上層	黒緑-緑斑	2.8	2.2	1.6	10.4
143	住96 P3上層	緑-黄緑	3.7	3.0	0.9	14.8	198	住96 P3上層	黒緑-緑斑	2.4	1.5	0.9	4.7
144	住96 P3	黄緑-緑白	3.3	1.8	1.0	6.0	199	住96 覆土	黒緑-緑斑	3.5	1.8	1.1	9.5
145	住96 P3	緑白	3.7	2.3	0.7	6.4	200	住96 P3	黒緑-緑縞	2.5	2.0	0.9	6.3
146	欠番						201	住96 P3	黒緑-棕色斑	2.5	1.7	0.6	3.4
147	住96 P3	緑-緑白	3.2	1.8	0.7	5.2	202	住96 P3	黒緑-緑斑	3.5	2.1	1.2	11.6
148	住96 P3	緑色	1.6	1.1	0.8	2.0	203	住96 P3上層	黒緑-緑斑	2.8	1.8	0.9	6.5
149	住96 P3	緑色	1.7	1.2	0.5	1.3	204	住96 覆土	黒緑-緑斑	3.2	1.6	0.8	5.2
150	住96 P3	緑色	1.9	1.5	0.5	2.2	205	住96 P3上層	黒緑-緑斑	2.4	1.7	0.5	3.3
151	住96 P3	緑-黄緑	2.1	1.2	0.6	1.9	206	住96 P3	緑-黒緑斑	2.5	2.2	0.7	5.7
152	住96 P3	緑-一部黒色	2.2	1.2	0.7	2.5	207	住96 覆土	黒緑-緑斑	2.9	2.2	9.6	9.1
153	住96 P3	緑	2.3	1.7	0.7	3.7	208	住96 P3	黒緑-緑斑	2.6	1.6	0.7	4.6
154	住96 P3	緑-緑白	1.5	1.0	0.6	1.3	209	住96 P3	黒緑-緑斑	3.0	2.3	1.0	10.7
155	住96 P3	緑、緑白	3.6	2.9	1.0	16.2	210	住96 P3上層	黒緑-緑斑	2.6	1.3	1.0	4.9
156	住96 覆土	緑-緑白	3.0	1.4	1.2	6.7	211	住96 P3	黒緑-緑斑	3.0	2.0	0.9	8.1
157	住96 P3	緑-緑白	1.9	1.8	0.6	3.0	212	住96 P3	黒緑-緑縞	2.4	1.5	0.8	4.4
158	住96 P3上層	緑黒色縞	3.4	2.1	1.0	10.6	213	住96 P3	黒緑-緑斑	2.7	1.6	0.6	3.7
159	住96 P3	緑白-黒緑縞	3.8	2.2	0.8	10.7	214	住96 P3	黒緑-緑斑	3.0	2.0	0.9	7.5
160	住96 覆土	緑白-黒緑縞	2.3	1.8	0.7	4.5	215	住96 P3上層	黒緑-緑斑	3.3	1.5	0.8	5.6
161	住96 覆土	緑-黒緑縞	3.1	2.1	1.0	8.5	216	住96 P3	黒緑-緑斑	2.3	2.0	0.5	3.4
162	住96 P3	緑-黒緑斑	2.6	1.6	0.8	5.0	217	住96 P3	黒緑-緑斑	2.7	2.0	0.7	4.9
163	住96 P3	緑-黒緑縞	2.8	1.4	0.9	5.1	218	住96 P3	黒緑	4.0	2.9	1.0	19.4
164	住96 覆土	緑-黒緑縞	2.4	1.9	1.0	7.0	219	住96 P3	黒緑-緑斑	2.3	1.7	0.6	3.7
165	住96 P3	緑-黒緑斑	2.9	2.0	0.7	6.4	220	住96 P3	黒緑-緑斑	2.5	2.0	0.7	3.9

(表1 続き)

No.	出土遺構	色	長さ	幅	厚さ	重さ	No.	出土遺構	色	長さ	幅	厚さ	重さ
221	住96 P3	黒緑-緑斑	2.5	1.8	0.8	5.2	248	住96 P3	黒緑-緑斑	3.2	1.6	0.7	6.0
222	住96 P3	緑-黒緑斑	2.3	1.5	0.6	2.9	249	住96 P3	黒緑-緑白斑	3.0	2.2	0.7	7.4
223	住96 P3	緑-黒緑縞	2.5	1.5	0.6	3.0	250	住96 P3	黒緑-緑斑	1.9	1.6	0.9	4.3
224	住96 P3	黒緑-緑斑	2.0	1.4	0.8	3.3	251	住96 P3上層	黒緑-緑斑	2.4	2.0	0.7	5.5
225	住96 P3	黒緑-緑斑	2.5	1.9	0.8	5.3	252	住96 P3	黒緑-緑斑	3.5	1.7	0.6	6.4
226	住96 P3	黒緑-黄緑斑	2.4	1.9	0.6	4.4	253	住96 P3	黒緑-緑斑	2.7	1.6	0.7	5.8
227	住96 P3上層	黒緑-緑斑	3.9	1.8	1.0	10.0	254	住96 P3	黒緑-黄緑縞	3.5	2.2	1.2	14.6
228	住96 P3	黒緑-緑斑	3.0	1.7	0.9	6.8	255	住96 P3	黄白-	3.4	2.4	0.9	11.4
229	住96 P3上層	黒緑-緑斑	3.2	2.0	0.9	8.7	256	住96 P3	黄白-黄緑	1.9	1.5	0.7	3.0
230	住96 P3	黒緑-緑斑	2.5	1.8	0.7	4.1	257	住3	黄白	3.3	2.1	1.0	11.4
231	住96 P3	黒緑-黄緑斑	2.1	1.9	0.8	4.0	258	住40	緑白	3.5	1.5	1.4	11.2
232	住96 P3	緑-黒緑斑	3.1	2.3	0.9	8.8	259	住65	緑色	1.4	1.1	0.5	1.4
233	住96 P3	黒緑-橙緑斑	2.8	2.0	0.5	4.6	260	住65	緑白-緑	3.0	2.1	0.4	4.0
234	住96 P3	黒緑-緑斑	2.7	1.6	0.9	5.9	261	住65	黄緑	3.2	3.0	1.2	17.0
235	住96 P3	黒緑-緑斑	3.9	1.8	1.0	10.8	262	住65	黒緑-緑縞	2.3	1.2	1.0	3.6
236	住96 P3	黒緑-緑斑	2.6	2.0	0.7	5.9	263	住93	緑-緑白斑	3.1	2.1	0.4	4.6
237	住96 P3上層	黒緑-緑斑	2.8	1.9	0.8	5.8	264	住93	緑白-黒緑斑	3.2	2.4	0.8	9.5
238	住96 P3	黒緑-緑斑	1.7	1.2	0.8	2.4	265	住93	黒緑-緑白斑	2.2	1.9	0.6	4.3
239	住96 P3	黒緑-緑斑	2.7	1.6	0.9	5.2	266	住93	黄緑白色	3.1	2.5	1.0	11.8
240	住96 P3	黒緑-緑斑	2.9	2.0	0.8	6.7	267	住97	緑-黒緑斑	2.6	1.7	0.7	5.6
241	住96 P3	黒緑-緑斑	2.3	1.6	0.7	4.3	268	住97	黒緑-黄緑斑	3.3	2.2	0.8	10.0
242	住96 P3	黒緑-緑斑	3.0	1.7	1.0	8.2	269	住100	黒緑-緑斑	3.0	1.8	0.6	5.6
243	住96 P3	黒緑-緑斑	2.5	1.8	0.8	5.5	270	住100	黄緑	2.6	2.0	0.6	5.1
244	住96 P3	黒緑-黄白斑	3.4	2.7	0.8	12.7	271	住100	黒緑-緑斑	2.3	1.6	0.5	3.4
245	住96 P3	黒緑-緑斑	2.6	2.0	0.5	4.7	272	住100	黒緑-緑斑	2.4	1.3	0.6	3.5
246	住96 P3	黒緑-緑斑	2.4	1.6	1.1	6.4	273	北1区 遺構面	緑白色	2.3	1.8	0.6	4.1
247	住96 P3	黒緑-緑斑	2.0	1.4	0.5	2.1	274	北1区 遺構面	緑白色	1.8	1.5	0.7	3.0

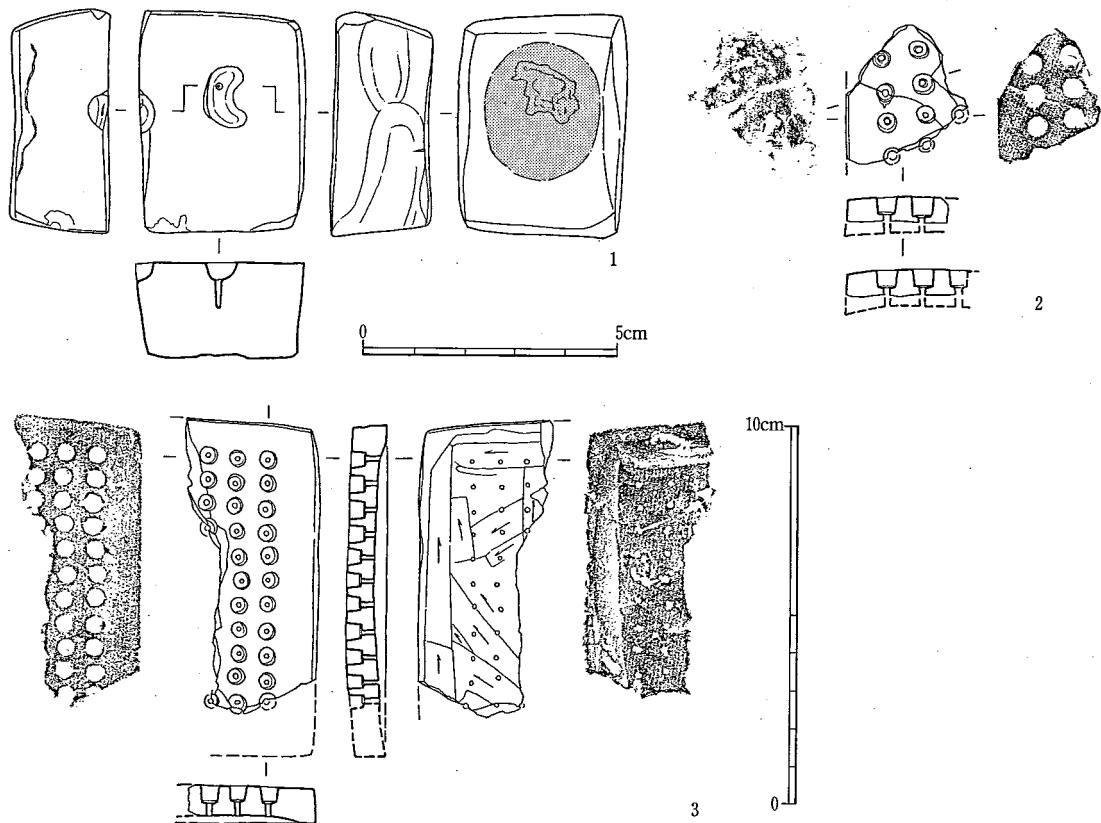
(長さ、幅、厚さはcm、重さg単位)

玉原石が出土したが、第1表に示したように大小あり、色も白色、黄白色、緑白色、黄緑色、緑色、灰緑色、緑黒色、黒緑色、黒色と様々である。しかしながら9~28の玉未製品は黄白色(18・23)、黄緑色(9・10・11・12・13・14・15・16・19・20・22・24・25・27・28)、緑色(21・26)、緑白色(17)を呈し、特に黄緑色の原石が玉製作に選択されているようである。一方、白色、緑黒色、黒緑色、黒色の原石はかなりの量を占めるにもかかわらず、玉製作に用いられた形跡がうかがえない。これは白色に近い原石が脆く、逆に黒色に近い原石は硬くてそれぞれ加工に適していないことも関係しよう。したがって、96号住居跡で出土した原石は河原あるいは海辺にある適当な大きさの凝灰質泥岩を色、硬難に関係なく無作為に採取し、工房での製作時にその中から玉に適した原石を選択したと考えられる。

このような原石の選択過程の非効率性と玉製作工程の多様性の点で、これら凝灰質泥岩を用いた玉製作にはさほど高い体系性は認められない。今回の調査ではこれらの石材を用いた完成品は1点も出土せず、周辺の主要古墳でも出土例は少ないようである。恐らく生産量も少なく、短期間の生産にとどまったものと推測される。

36~38はガラス小玉である。36は濃い青色、38は青色でいずれも4号住居跡内攪乱より出土した。38は3北1区遺構面より出土した。

39は93号住居跡付近の遺構面から出土した水晶玉である。上下にわずかに短い球形を呈し、平



第241図 ガラス玉鑄型実測図 (2・3は1/2、1は2/3)

面形も正円をなす。このような形態の水晶玉は古墳時代では例が少ないので近世以降のものの可能性が高い。40は土製の勾玉で116号住居跡の覆土より出土した。

41・42は玉類に含めて実測図を提示したが、正確には用途不明土製品と称すべきもの。41は61号住居跡覆土より出土したもので、長楕円形を呈する。割れ口にスサの圧痕と思われる溝が見られる。42は棒状の土製品で側面に斜め方向の貫通しない孔がある。暗褐色と赤褐色の粘土を用いており、その接合痕が断面に示すように明瞭である。(重藤)

5. ガラス玉鑄型 (第241図)

1は土製のガラス勾玉鑄型で114号住居跡より出土した。鑄型は裏がやや小さいが直方体を呈している。鑄型の中央やや上方に長さ1.2cm、幅0.5cm、深さ0.35cmの勾玉形のくぼみがある。くぼみの中央には径0.1cm、深さ0.6cmの貫通しない小孔がある。これとは別に左側縁中央にほぼ同じ深さの平面半円形のくぼみがある。これは製作時、保管時の目印の可能性も否定できないが、大きさ形態から考えて勾玉製品を押し付けた痕跡の可能性もある。全体をナデで仕上げている。裏面は中央、ほぼ勾玉形くぼみ直下が焼けはじけたように薄く剥離しており、その周辺が熱変する。二次的に火を受けたというよりも、製作時に熱が裏面まで通じたためではないだろうか。

2、3は土製のガラス小玉鑄型で、2は131号住居跡、3は45号土坑より出土した。2は表面に径0.5cm程の小玉形くぼみが9個確認でき、中央に径0.1cmの小孔がある。図の左側縁は直線的な鑄型外形をとどめているが、他は割れている。表面は中央に向かってわずかに突出している。表面、玉孔、中央部小孔は全面が黒色に変色しており、使用に供したものと思われる。裏面は全体が剥離

しており、恐らく玉製作時の熱のためと思われる。精選された粘土を用い、淡白褐色を呈する。

3は近世の土坑出土のものであるが、形態から考えて古墳時代のものとして間違いない。右側縁と上縁をとどめた大きな破片で、表面に3列、現状では37の小玉形くぼみがあり、各孔の中央には直径0.1cmの小孔があり、裏面まで貫通している。側縁、裏面は丁寧にヘラケズリを行って仕上げている。表面、裏面ともに中央が高く、周辺が低くなるような弧を呈する断面形をなす。この断面形からあえて推測するならば、6あるいは7列、各列12~13個のガラス小玉（全体で72~91個）を製作するための長さ9cm、幅7~8cm程の鋳型になる。表面には2のように黒変せず、また裏面にも1・2に見られるような加熱の痕跡は無いので、使用する前に捨てられたかのような感もある。胎土は精良で硬質に焼成されている。このような胎土と焼成は当遺跡で製作されたと思われる土師器類よりは搬入品の可能性の高い22号住居跡、89号住居跡出土の甑と類似している。

さて、このような古墳時代の小玉鋳型は九州では初めての出土である。古墳時代のものとしては近畿、関東地方にいくつかあるが〔東京都北区教育委員会1995の集成による〕、3の裏面のケズリはこの鋳型にのみ見られる特徴的なものである。この特徴は日本出土品よりは韓国の京畿道河内市漢沙里遺跡、全羅南道海南郡郡谷里遺跡出土例と類似している。3の鋳型の胎土、焼成の特徴と合わせて、朝鮮半島のガラス小玉製作技術と非常に関連の深いものと言えるだろう。（重藤）

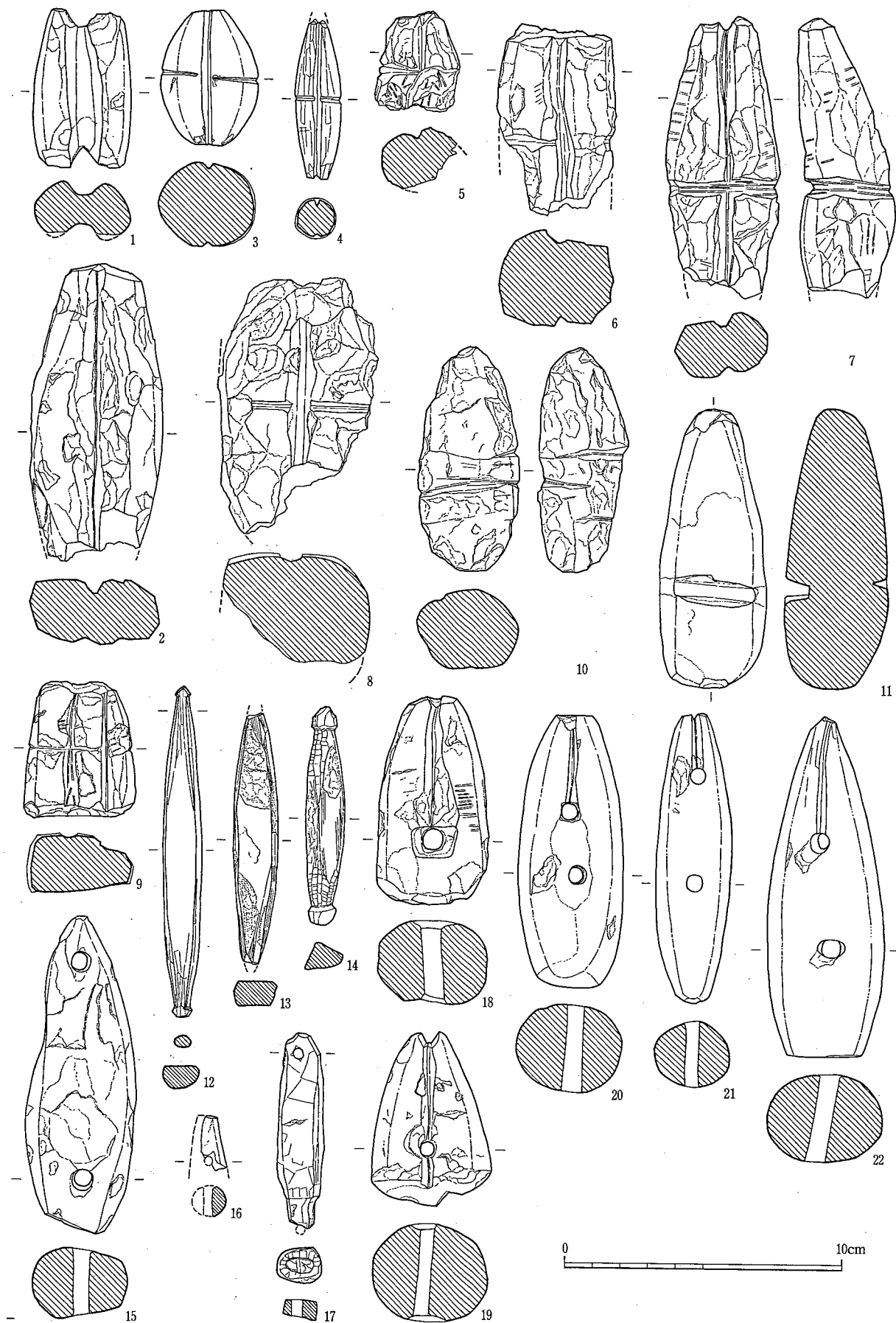
6. 漁撈具（第242~244図）

竪穴住居跡・土坑及び遺構面などから未製品を含め石錘47点、浮子に使用したと考えられる軽石21点、土錘2点が出土した。石錘の形態は多種多様であるため、御床松原遺跡報告書における分類〔木下1983〕に従った。なお蛸壺も漁撈具であるが、出土量が多いため住居出土土器の中に含めた。

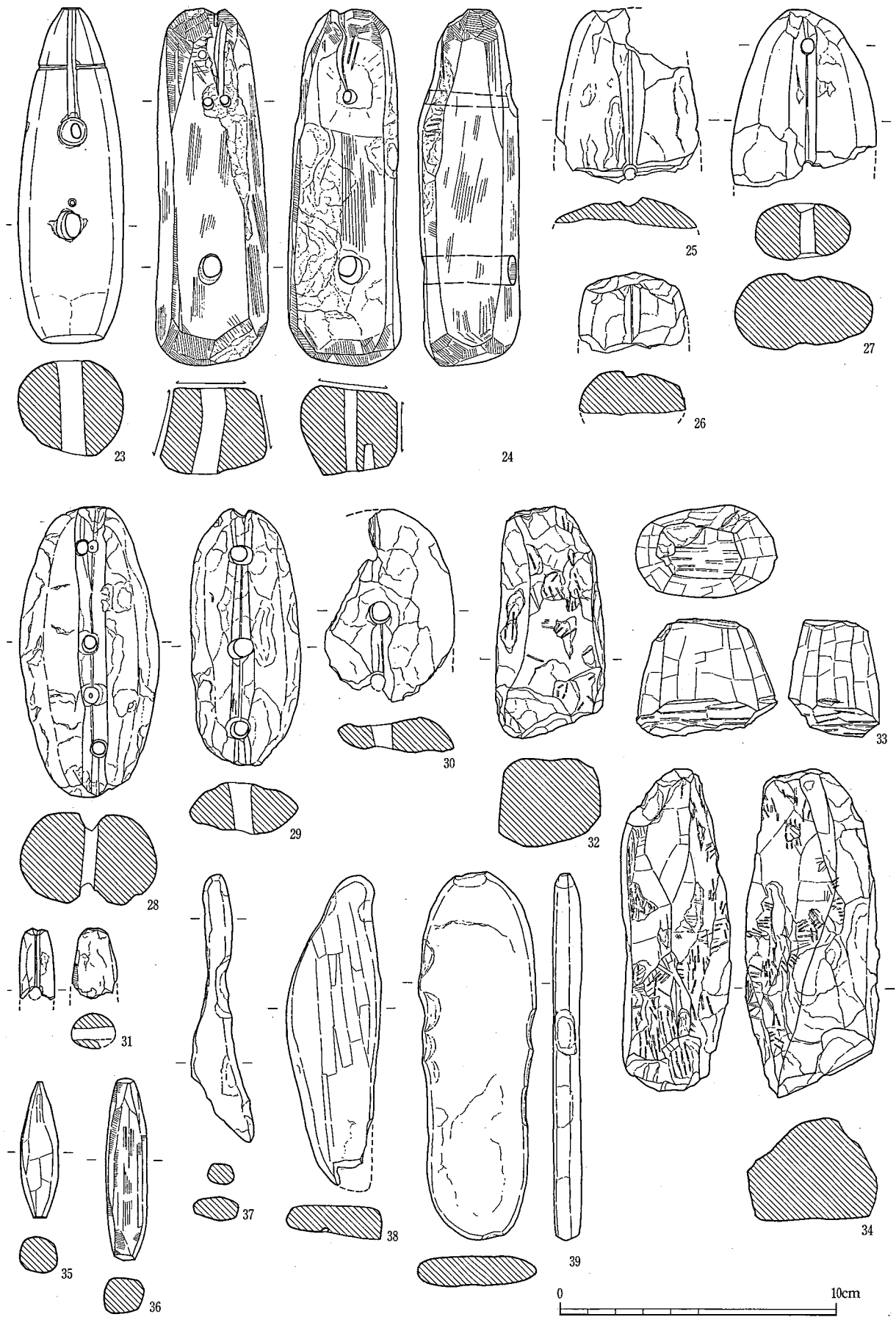
1~14は有溝石錘である。1は3区ピット内出土。長さ6.7cm、重さ54.1gで滑石製。2は98号住居跡上面出土。長さ10.6cm、重さは185.5gで滑石製。3は1区東拡張区攪乱出土。俵形を呈し、端部を水平に研磨する。長さ4.8cm、重さ70.3gで滑石製。4は74・75号住居跡上層出土。長さ5.7cm、重さ19.8gで滑石製。5は119号住居跡出土。破損後、再加工したもの。長さ3.6cm、重さ26.4gで滑石製。6は93号住居跡覆土上層出土。短軸溝は片側のみ。長さ6.6cm、重さ97.6gで滑石製。7は144号住居跡付近遺構面出土。弧を描くような形態で、今回の報告の中ではこの例のみ短軸溝が長軸溝を切る。加工痕が良く残る。長さ11.1cm、重さ159.5gで滑石製。8は3南3区遺構面出土。大型の石錘で、破損後、再利用した痕跡がある。長さ8.9cm、重さ224.7gで角閃石製。9は119号住居跡出土。長さ4.8cm、重さ60.6gで滑石製。10は43号住居跡出土。幅広の、浅い溝をもつ。長さ8.0cm、重さ107.9gで滑石製。11は3中3区攪乱出土。短軸溝は一方のみで、もう一方は浅い小孔をもつ。長さ10.1cm、重さ156.0gで砂岩製。12~14は両端に紐掛け用の溝をもつ。出土例が少ないタイプである。12は3区中1区攪乱出土。中央部を半円形に加工する。長さ11.8cm、重さ19.3gで滑石製。13は125号住居跡出土。側面以外は研磨がない。長さ9.9cm、重さ19.7gで粘板岩製。14は4号住居跡出土。中央部を三角形に加工する。長さ7.8cm、重さ12.6gで滑石製。

15~17は有孔石錘である。15は43号住居跡上層出土。長さ11.5cm、重さ170.8gで滑石製。16は154号住居跡出土。長さ1.9cm、重さ2.4gで滑石製。17は21号住居跡出土。下端部は開孔時に破損し、溝状に再加工したものである。長さ6.9cm、重さ22.4gで滑石製。

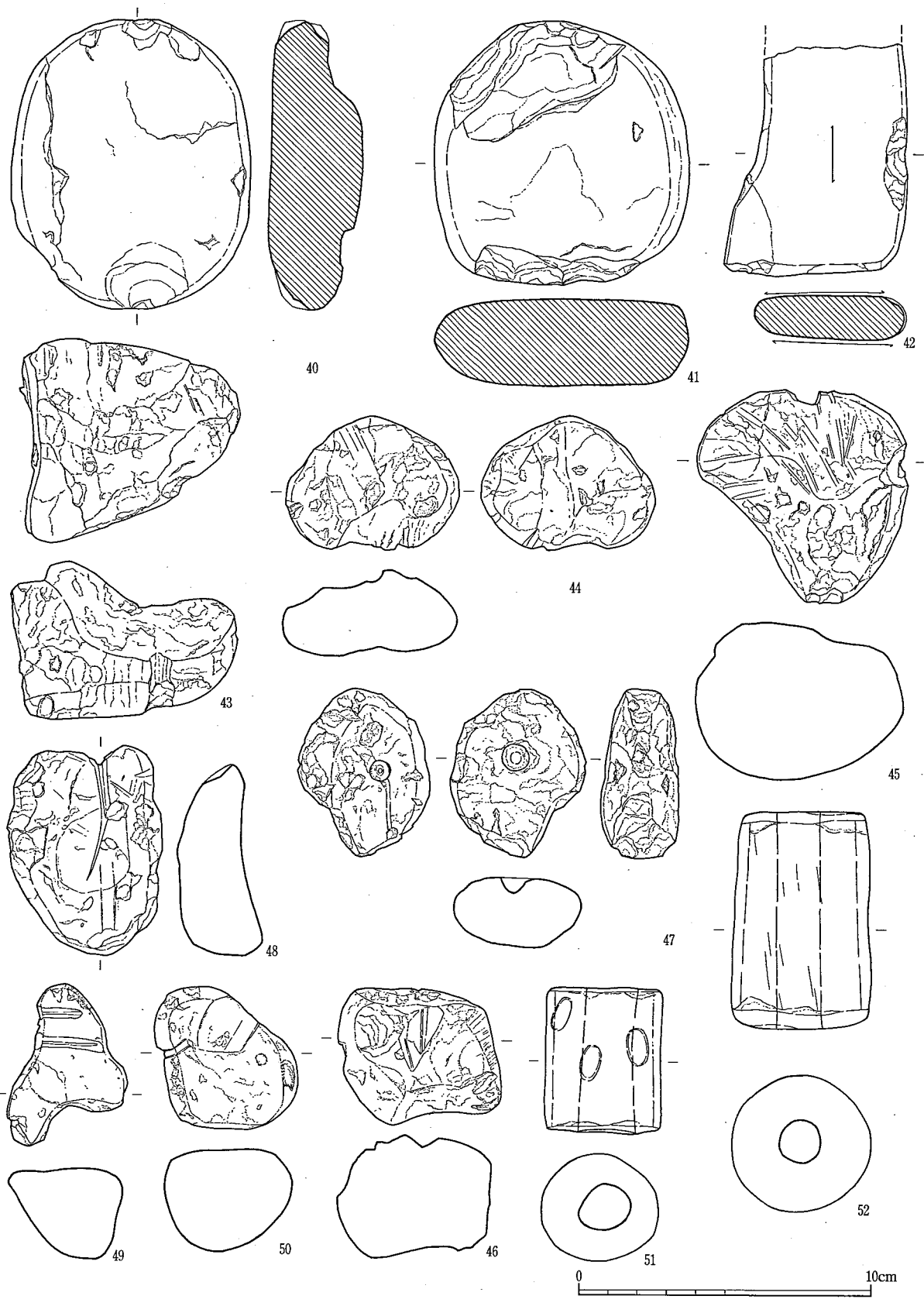
18~31は有溝・孔石錘である。形態は長軸溝が全周し、1孔を持つタイプ（18・19）、上下2孔



第242图 渔捞具实测图 (1) (1/2)



第243图 渔捞具实测图 (2) (1/2)



第244图 漁撈具実測图 (3) (1/2)

をもち、上位孔間を巡る溝をもつタイプ（20～24）、全周する長軸溝に複数の孔を持つタイプ（25～30）、側面溝に直交する1孔をもつタイプ（31）の4タイプに分類できる。18～21は下端部が丸みをもつ博多湾型石錘〔下條1984〕である。18は144号住居跡出土。長さ7.4cm、重さ126.1gで滑石製。19は19号住居跡出土。分銅型を呈する。長さ6.2cm、重さ114.7gで緑色片岩製。20は29・30号住居跡付近遺構面出土。上端部を水平に研磨する。長さ9.8cm、重さ175.3gで滑石製。21は30号住居跡出土。長さ10.2cm、重さ105.9gで蛇紋岩製。22・23は下端部を水平に研磨する糸島型石錘〔下條1984〕である。22は139号住居跡出土。長さ12.1cm、重さ179.0gで細粒砂岩製。23は72号住居跡覆土上層出土。上孔間を巡る長軸溝に直交する短軸溝をもつ。長さ11.9cm、重さ185.8gで砂岩製。24は166号住居跡出土。砥石の転用品。長さ12.7cm、重さ274.3gで凝灰質泥岩製。25は43号住居跡検出面出土。3孔もつと考えられる。長さ6.2cm、重さ35.8gで滑石製。26は64号住居跡覆土上層出土。小片のため孔はないが、形態から孔をもつタイプと考えられる。長さ2.6cm、重さ23.8gで滑石製。27は43号住居跡出土。3孔もつと考えられる。長さ6.1cm、重さ116gで角閃石製。28は43号住居跡付近遺構面出土。3孔もつが、開けかけの孔が2つ存在する。長さ10.4cm、重さ239.4gで滑石製。29は43号住居跡検出面出土。長さ9.3cm、重さ102.9gで滑石製。30は50号住居跡出土。4孔以上あると考えられる。長さ7.0cm、重さ46.4gで滑石製。31は78号住居跡出土。長さ2.5cm、重さ6.9gで滑石製。

32～34は石錘の未製品である。32は1号住居跡覆土下部出土。長さ8.3cm、重さ156.8gで滑石製。33は119号住居跡出土。分銅型を呈し、19のようなタイプの未製品と考えられる。長さ4.1cm、重さ108.9gで滑石製。34は119号住居跡出土。長さ11.4cm、重さ295.7gで滑石製。35・36は12～14のようなタイプの未製品か。35は3北1区遺構面出土。長さ4.9cm、重さ9.8gで細粒砂岩製。36は95号住居跡出土。長さ6.5cm、重さ14.5gで細粒砂岩製。37は97号住居跡出土。中央部に加工痕があるため、石錘として使用したものか。長さ9.7cm、重さ17.1gで緑色片岩製。38は65・66号住居跡上層出土。上端部に紐掛け痕があり、石錘として使用したものか。長さ11.1cm、重さ45.6gで砂岩製。39は68号住居跡覆土下部出土。側面には手に持つのに適した挟りが各3つあることや形状からアワビおこしの可能性がある。長さ14.1cm、重さ94.2gで砂質片岩製。図示してないが、105号住居跡から滑石製の石錘片1点、同一個体になる石錘片4点が出土した。

40～42は打欠石錘である。40は39号住居跡出土。長さ9.8cm、重さ358.6gで玄武岩製。41は139号住居跡出土。長さ8.9cm、重さ372.1gで玄武岩製。42は81号住居跡出土。砥石を転用したもので、片側のみ挟りがある。長さ7.8cm、重さ109.5gで砂岩製。

43～47は浮子に使用したと考えられる軽石である。図示したのは加工痕がある8点である。43は40号住居跡出土。側面に束縛用の挟りがある。長さ7.5cm、重さ42.5g。44は64号住居跡出土。束縛用の加工痕がある。長さ5.9cm、重さ12.9g。45は75号住居跡出土。束縛用の挟りがある。長さ7.2cm、重さ53.7g。46は98号住居跡出土。V字の溝と挟りがある。長さ5.2cm、重さ20.4g。47は101号住居跡出土。両面に未貫通の孔がある。長さ5.8cm、重さ18.3g。48は41号土坑出土。上端部に長軸溝と裏面を加工する。長さ7.1cm、重さ21.8g。49は41号土坑出土。上端には浅い溝が2条ある。長さ5.5cm、重さ10.0g。50は41号土坑出土。束縛用の加工痕がある。長さ4.9cm、重さ14.5g。図示してないが、4・21・65・71・77・98・127・136・139・143号住居跡から軽石が各1点出土した。最も重いものは22.8g、最も軽いものは7.0gを測る。

51・52は土錘で、計2点出土した。51は49号住居跡出土。長さ6.0cm、重さ85.9g。胎土は精良で、黄褐色を呈す。52は97号住居跡出土で大型品。長さ7.4cm、重さ215.9g。胎土は精良で、白黄褐色を呈す。(大庭)

7. 石器 (第245～251図)

ここでは石器として主に砥石・台石・磨石等を記載する。本稿では1～119号住居跡出土のものを扱い、それ以後の住居と住居跡以外からの出土石器は次年度報告とする。

1は1号住居跡から出土で砥石か。裏面剥離し欠損多い。109.5gでヒン岩。2は2号住居跡出土の叩石である。105.4gで砂岩。3は3号住居跡出土の叩石もしくは磨石か。308.7gで砂岩。

4～6は3号住居跡からの出土。4は台石で裏面剥離し、欠損する。477.3g。5は砥石?。二面に数条の溝を有するが一部に集中しており全面に線刻されていない。同住居では手鎌2点も出土しており、セットになるのであろうか。1516.1g、砂岩。6は磨石と思われるが使用痕は顕著ではない。1466.9gで花崗岩。

7～10は4号住居跡からの出土である。7は玉砥石か。中央に浅い溝を有する。15.5g、砂岩。8は仕上砥石。四面使用するも一部欠損。88.4gでシルト岩。9は叩石。467.4g。10は台石。被熱による赤変か、表面が赤化している。926.4gで玄武岩。

11は6号住居跡出土で用途不明。人為的?な凹みがある。9.1g、砂岩系。

12は7号住居跡出土の砥石。二面使用。32.6gでシルト岩。

13は15号住居跡東遺構面出土の砥石か。一面使用しているようだが、欠損多い。28.6gで砂岩系石材。14は15号住居跡出土の砥石。三面使用で7.3g、シルト岩。

15～18は21号住居跡出土である。15は用途不明だが台石か。被熱によるものか、表面赤化している。414.2gで玄武岩。16は磨石かもしくは叩石。243.0g。17も磨石か叩石。232.5gでヒン岩?。18も磨石か叩石。使途不明の削痕あり。279.6gで玄武岩。

19は23号住居跡出土。台石で一部に使用痕がある。3.9kg。

20・21は26号住居跡出土。20は砥石? 12.8gで砂岩。21は砥石?。二面使用か、ただし顕著な使用痕なし。44.5gで凝灰岩質砂岩。

22は29号住居跡の砥石。数条の溝がある。25.4gで砂岩。23～25は29・31号住居跡付近の出土。23は砥石で22同様数条の溝がある。12.4g。24は砥石で二面使用も欠損・剥離が多い。10.5gで砂岩。25は叩石で447.1g、花崗岩系。

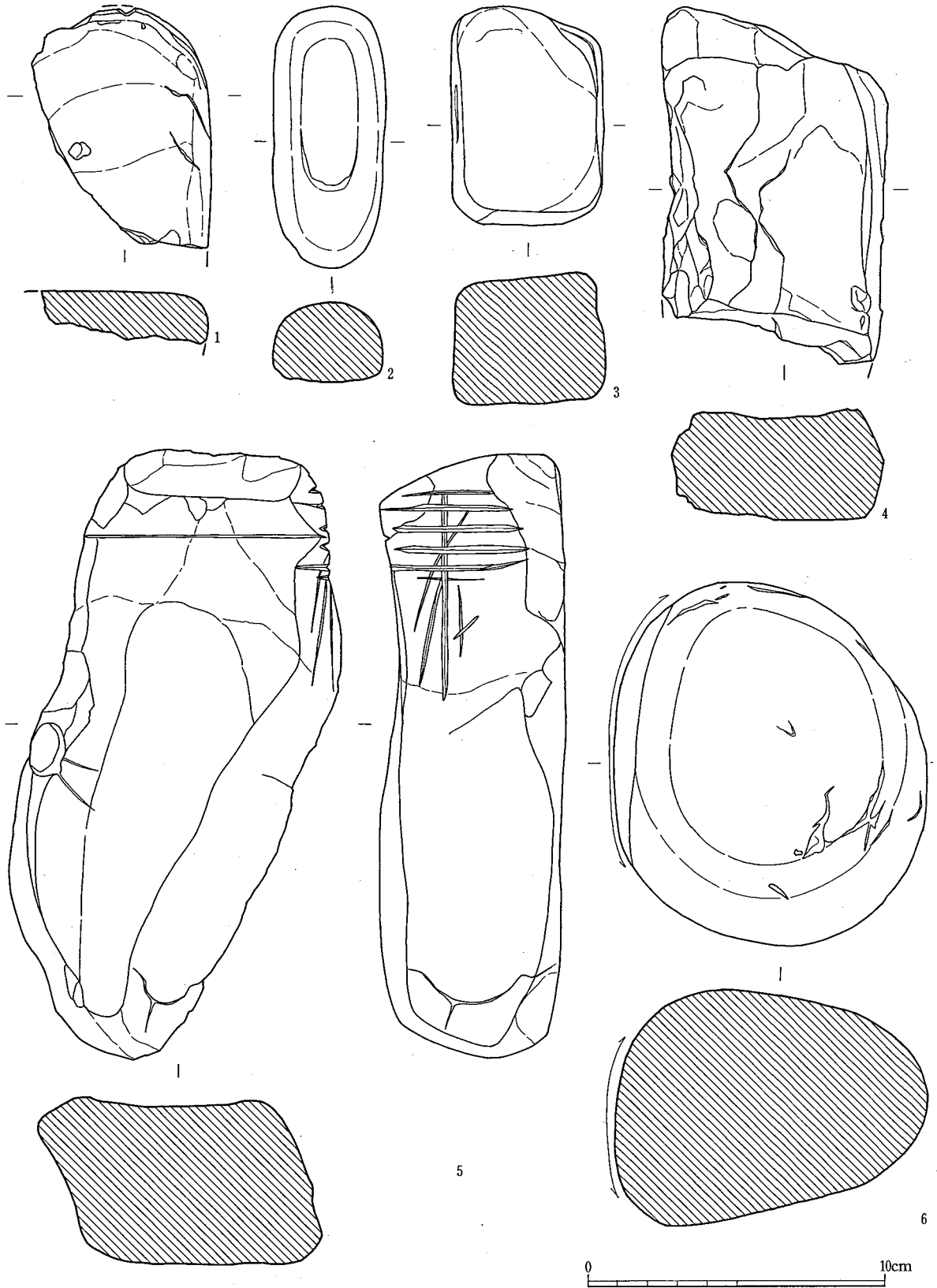
26～28は30号住居跡出土である。26は砥石片だがほとんど欠損した破片。35.2gで砂岩。27は台石。数条の削痕が見られる。2884.3gで安山岩。28は砥石で四面使用。254.1gで凝灰岩質砂岩。

29～31は40号住居跡からの出土である。29は砥石で三面使用、一面は剥離しており全面使用していた可能性もある。803.1gで玄武岩。30は台石。中央部に打痕が残る。2277.4g。31も台石で中央部に使用痕らしい痕跡が見られる。1658.7gでシルト岩。

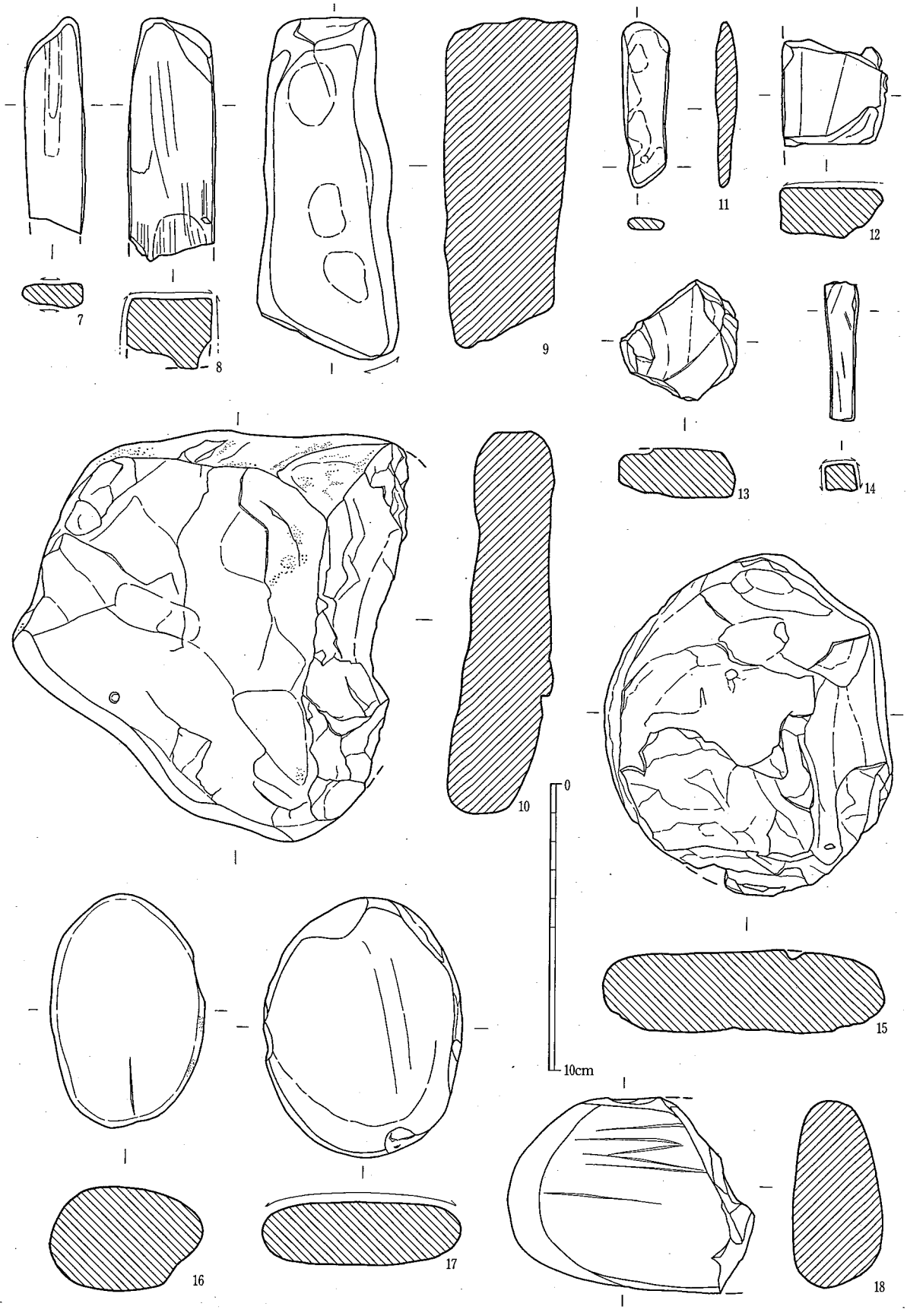
32は41号住居跡出土の砥石。四面使用も少し欠損する。116.1gで凝灰岩質砂岩。

33は43号住居跡の石製支脚。一部に被熱を受けたか、赤化している。448.2gで砂岩系石材を使用。34は44号住居跡出土の砥石。三面使用で一面に打痕あり。1146.0gの砂岩製。

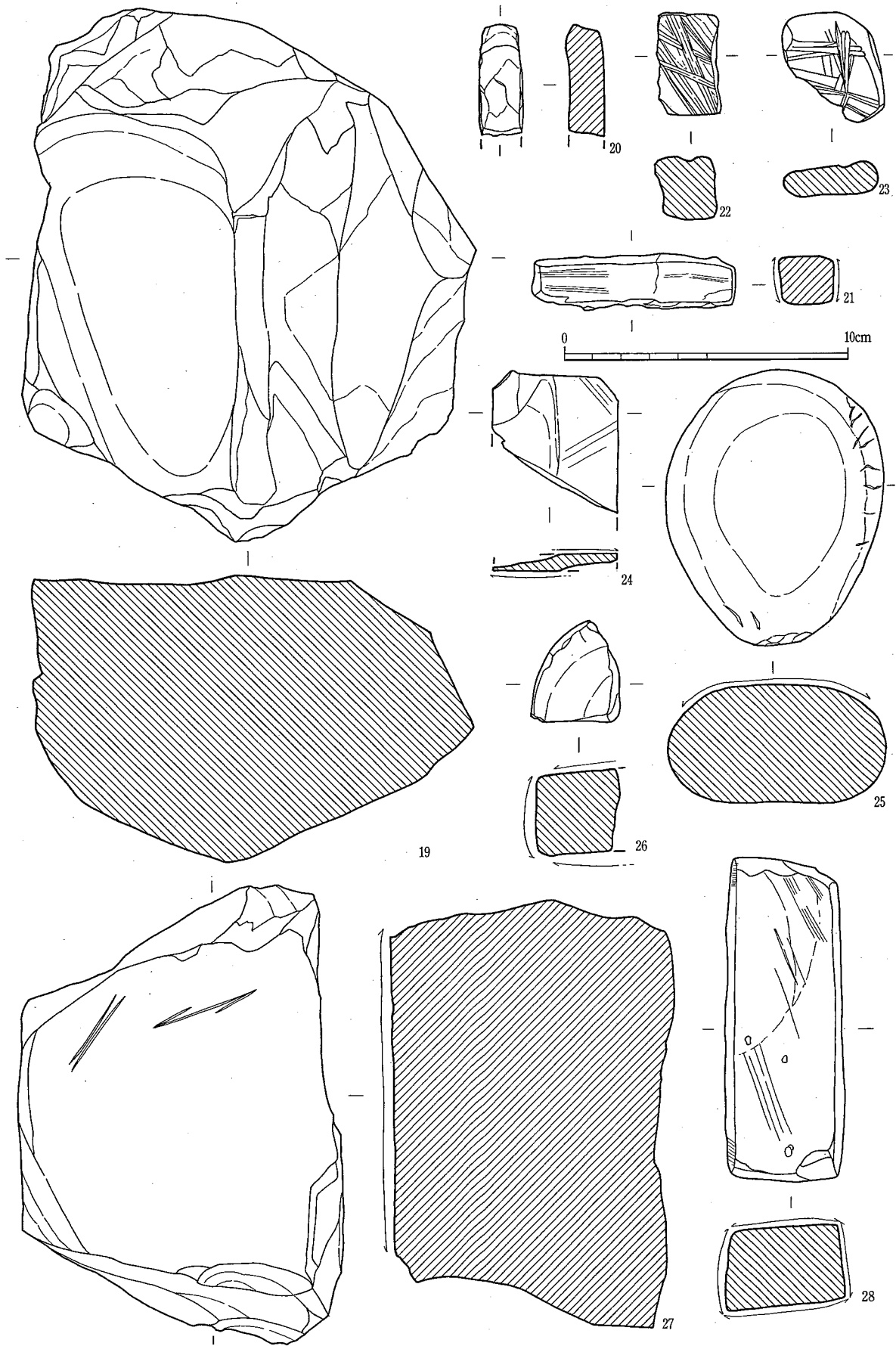
35は50・51・52号住居跡付近出土。叩石で端部に打痕あり。194.5g、砂岩。



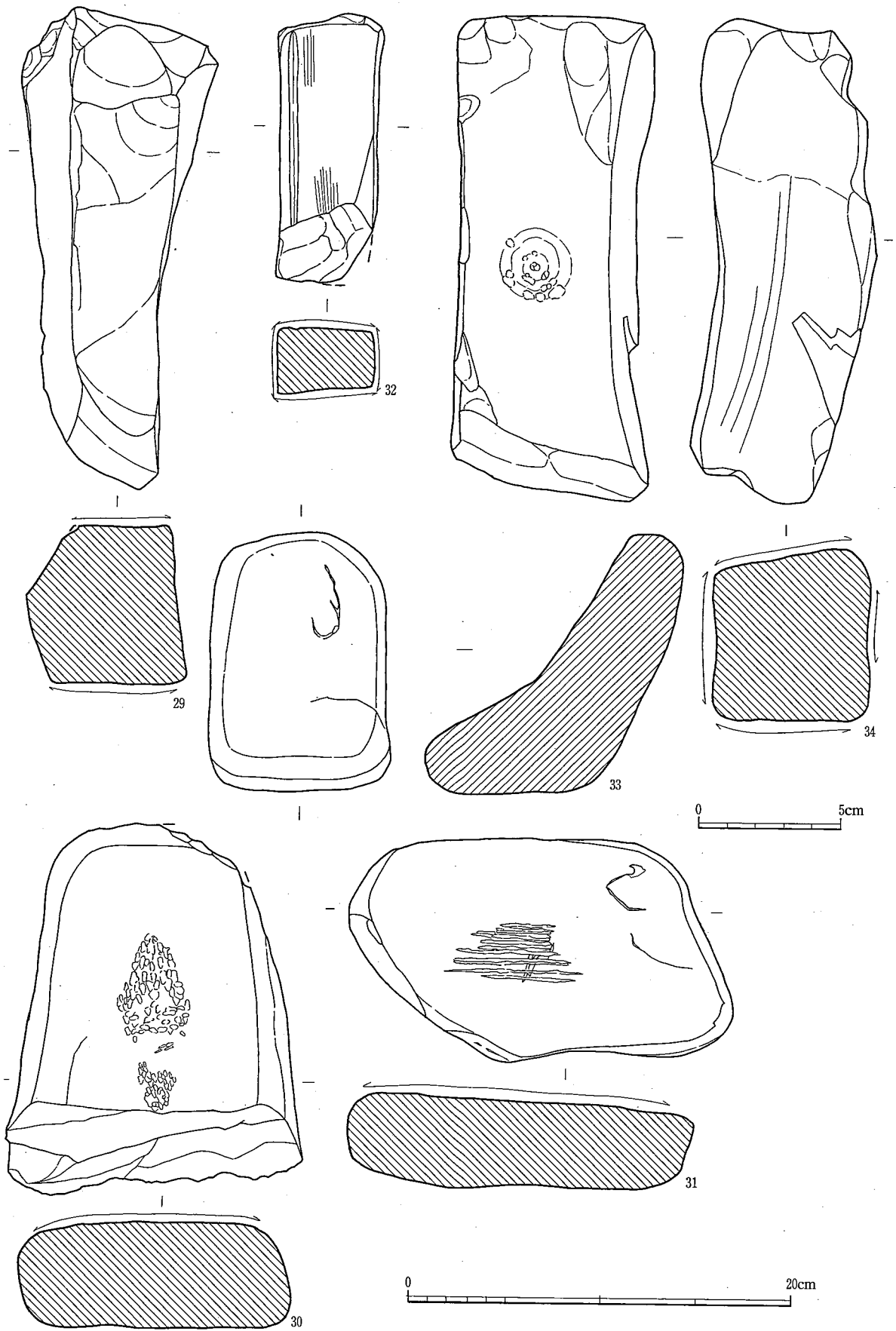
第245图 石器实测图 (1) (1/2)



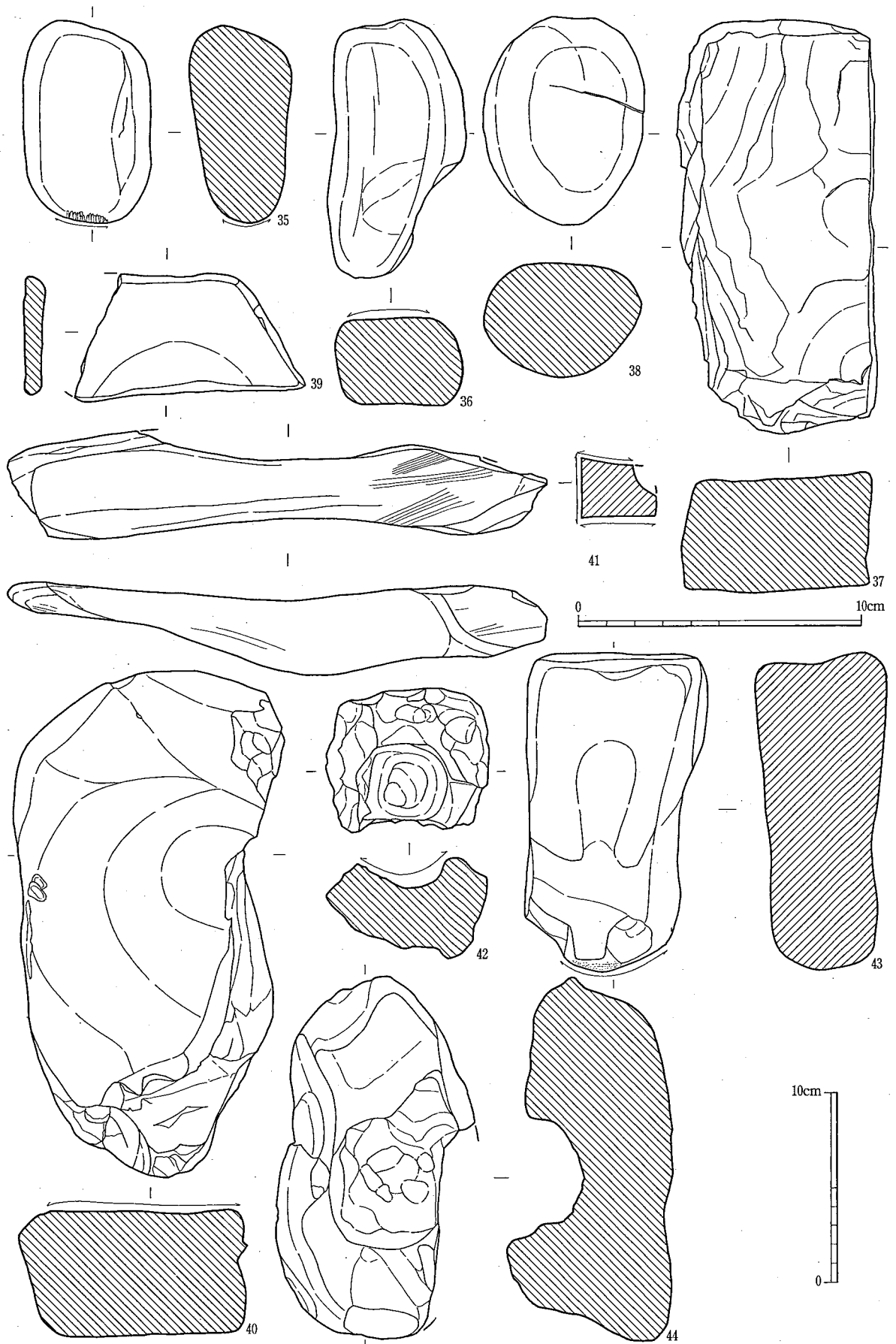
第246图 石器实测图 (2) (1/2)



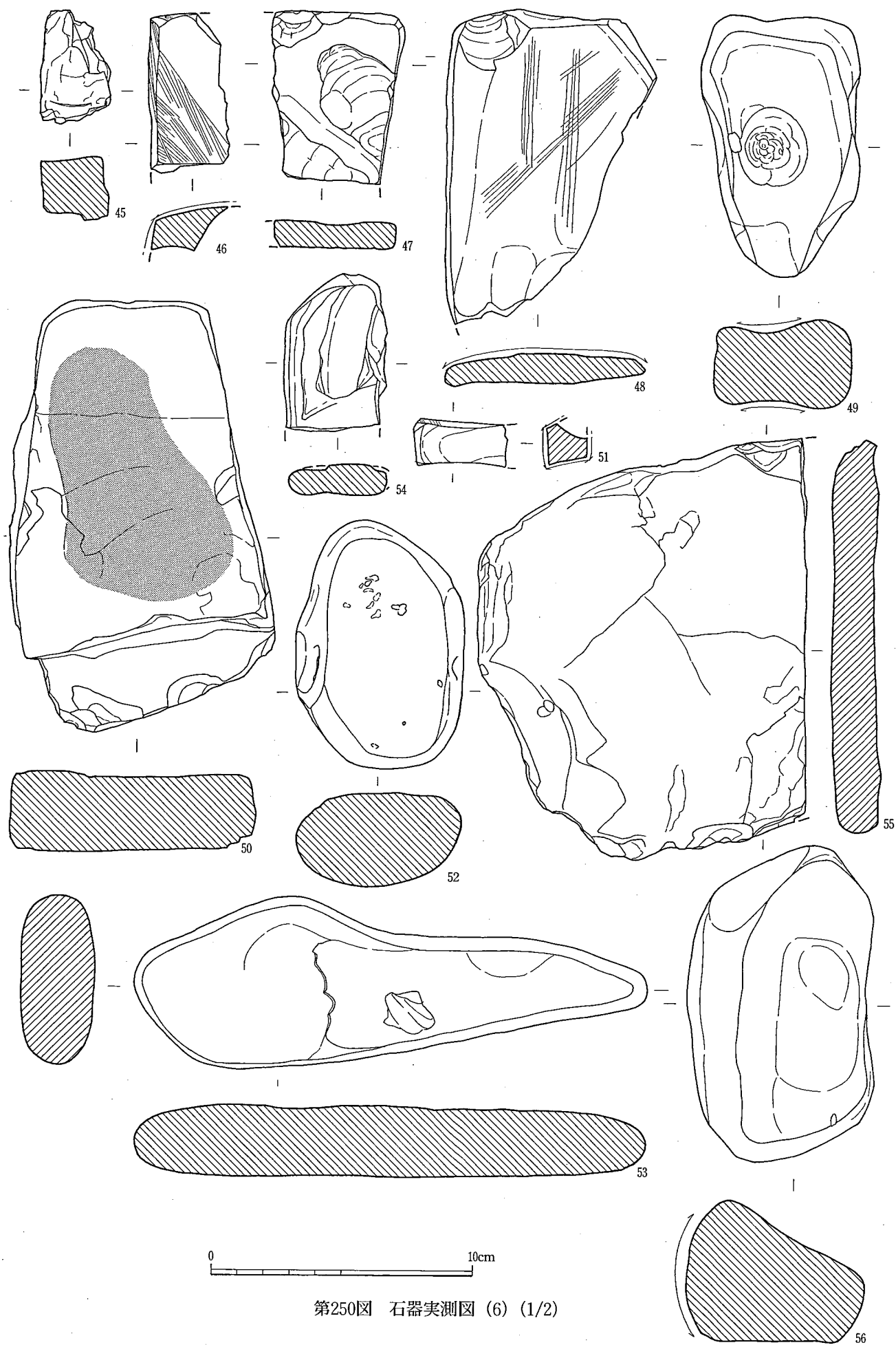
第247图 石器实测图 (3) (1/2)



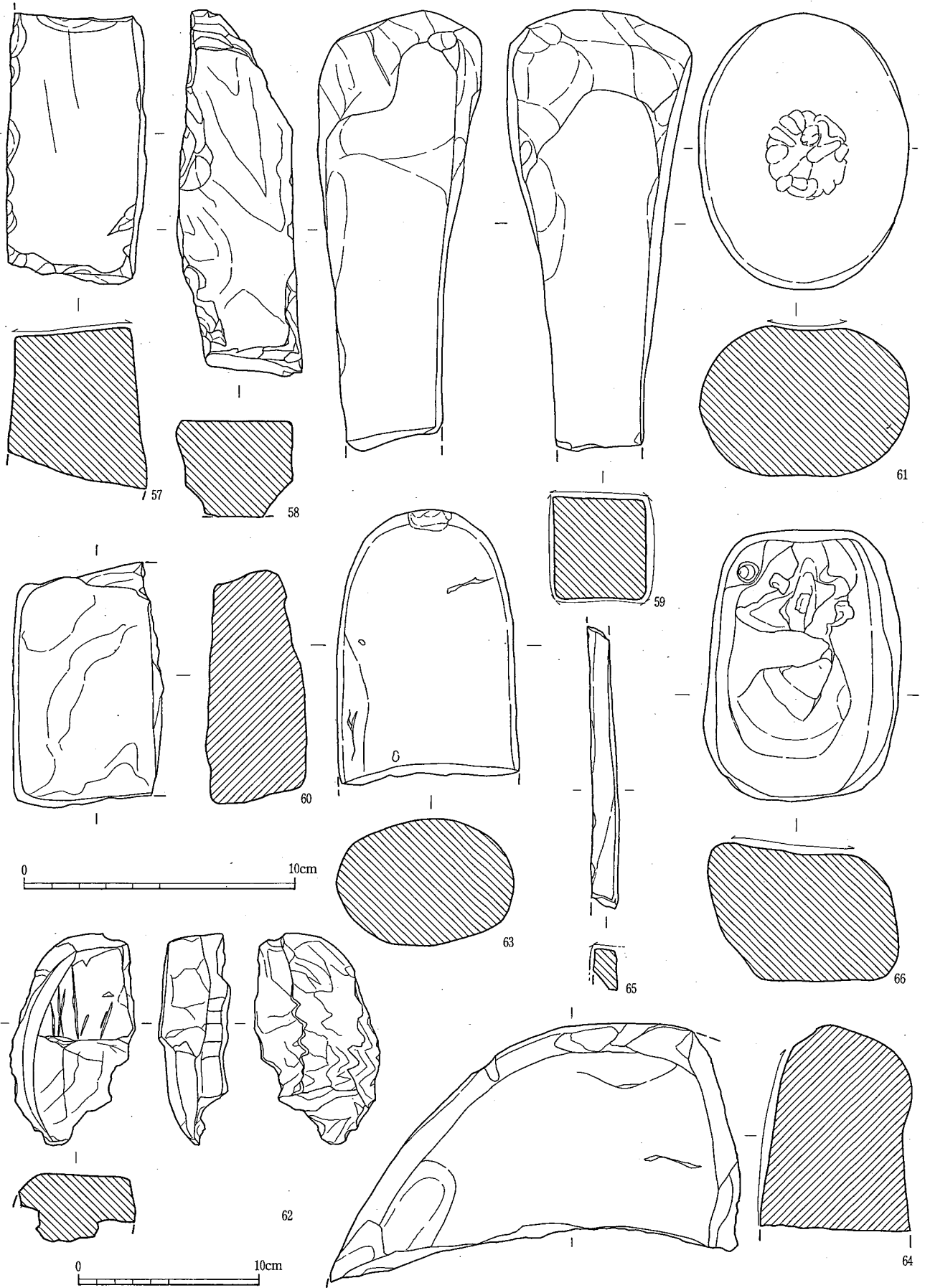
第248図 石器実測図 (4) (30・31は1/3、他は1/2)



第249図 石器実測図 (5) (40・42・44は1/3、他は1/2)



第250图 石器实测图 (6) (1/2)



第251図 石器実測図 (7) (62・64は1/3、他は1/2)

36は55号住居跡出土。砥石か。一面使用痕らしい削痕も見えるが不確定。208.0gで砂岩。

37は63号住居跡出土の台石もしくは支脚として使用か。一部に被熱し、747.0gで凝灰岩質砂岩。

38は64号住居跡出土の叩石。219.2gで粗粒砂岩。

39は65号住居跡出土。砥石か。欠損が多く不明。35.2gで凝灰岩質砂岩？。

40は72号住居跡出土の台石。中央部がやや凹む。4.95kgで砂岩系石材。

41は73号住居跡出土砥石。三面使用で、一部欠損もほぼ完形の仕上げ。184.3gでシルト岩。

42～44は77号住居跡出土である。42は凹石で中央部が大きく凹む。409.3g。43は77号住居跡の竈付近からの出土。支脚として使用か。558.2gで砂岩系石材。44は凹石。中央部大きくえぐれたように凹む。1822.2gでレキ岩。

45～47は81号住居跡出土。45は砥石。一面以外欠損。33.3gでシルト岩。46は砥石。二面使用するも欠損多し。31.9gでシルト岩。47は砥石か。剥離・欠損多く判然としない。61.6gで砂岩製。

48は83号住居跡出土砥石。一面使用も欠損・剥離する。149.7gで砂岩系石材。

49は89号住居跡の凹石。中央部がやや凹む。279.3gで砂岩系石材。50は89・90号住居跡出土の台石。中央部に朱（図アミ部）が付着する。725.8gで砂岩製。

51は91号住居跡の仕上砥石。四面使用も欠損する。12.9gでシルト岩。

52・53は93号住居跡出土。52は支脚か。一部被熱し赤化。274.9gで砂岩系石材。53は叩石。右手で握ると握りやすい形状をしている。449.1gの砂岩。

54～56は97号住居跡出土。54は何らかの未製品か。34.7gで砂岩。55は台石。顕著な使用痕は認められない。597.5gで砂岩。56は叩石か磨石であろう。顕著な使用痕はない。647.8g。57は97・100号住居跡付近出土の砥石。一面のみ使用も欠損があり二面使用していた可能性がある。523.9gでシルト岩。

58～60は101号住居跡出土。58は砥石で一面のみ使用か。風化著しい。325.2gでシルト岩。59は砥石で四面使用。829.2gで砂岩。60は砥石か。全面風化しており判然としない。292.9gで砂岩。

61は104号住居跡出土の叩石。一面中央部が凹む。663.8gで砂岩。

62は105号住居跡の滑石素材片。少なくとも2片の素材は取っているようであり、片面に波形の痕跡が残る。311.2gで滑石。

63は111号住居跡出土の磨石。端部のみ使用か。471.8g、花崗岩。64は111号住居跡の台石。3.4kg。

65は113号住居跡砥石で二面使用も欠損多し。21.0g、シルト岩。

66は119号住居跡出土の凹石。人為的な穿孔か、一面に径7mmの円孔があるが用途は不明。624.3gで砂岩である。（森井）

参考文献

- 崔夢龍・崔鐘澤編 1997 『発掘遺物図録』 ソウル大学校博物館
- 岡内 三真 1982 「漢代五銖銭の研究」『朝鮮学報』第102輯
- 東京都北区教育委員会 1995 『豊島馬場遺跡』 北区埋蔵文化財調査報告第16集
- 木下 修 1983 「漁撈具としての土製品・石製品について」
『御床松原遺跡』志摩町文化財調査報告書第3集 志摩町教育委員会
- 下條 信行 1984 「弥生・古墳時代の九州型石錘について」『九州文化史研究所紀要』第29号
- 塩屋勝利・力武卓治1997 『小葎遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第541集 福岡市教育委員会

第4章 おわりに

本書では西新町12次調査で検出された竪穴住居跡の一部とその関連遺物を中心に報告を行った。本書は次年度刊行予定の報告書とあわせて西新町遺跡12次調査の全体の報告を構成する。そこで、調査の総合的まとめは次年度に行い、ここでは次年度以降の課題とすべき問題点を述べてみたい。

西新町遺跡は本格的な調査以前には弥生時代後期終末の北部九州の土器型式である「西新町式」土器の標式遺跡として著名であった。その後、12回に及ぶ発掘調査により弥生時代後期終末に限られない多様な時期の遺構・遺物が明らかになっている。本調査以前は弥生時代中期後半の集落と甕棺墓が遺跡の上限であり、その後、弥生時代後期終末～古墳時代前期に集落の規模拡大の頂点に達するとされてきた。

今回の調査では縄文時代の西北九州型石銚、弥生時代前期の土器が出土しており、少量ではあるが遺跡の上限との関連で注目される資料である。弥生時代前期の遺構は、これまでの西新町遺跡における発掘調査では検出されていないが、弥生時代前期土器は周辺から二次的に本調査地点に移動した可能性が高い。同一砂丘上に位置する藤崎遺跡では弥生時代中期甕棺墓を中心にした墓地が形成されているが、その中に弥生時代前期の甕棺墓が少数ながら検出されている。また弥生時代早期にまで遡る墳墓供献用小壺が多数出土している。藤崎遺跡と同様に西新町遺跡でも弥生時代中期甕棺墓地周辺に前期以前の墓地があるのではなかろうか。今後の周辺地での遺構の発見が期待されるとともに、遺跡の立地する砂丘の自然地理学的な解明と関連づけて考えねばならない。その場合、本調査出土の縄文時代石銚は、縄文時代の状況を垣間見せてくれる資料となろう。

今回の調査の中心となったのは古墳時代前期の集落である。検出した竪穴住居跡は住居とするには問題のあるものも含め158棟を数える。これまで12次におよぶ西新町遺跡の調査では総計250棟余りになる。これまで調査が実施されたのは遺跡範囲の10%に過ぎず、遺跡全体の古墳時代前期の竪穴住居跡数はかなりの数になると予測される。砂丘上の遺跡立地から自然災害による頻繁な住居建て替えを想定し住居耐用年数を少なく見積もったとしても、同時期に併存した竪穴住居は50棟を軽く超えるのではなかろうか。同時期の博多湾沿岸域で屈指の規模の集落となることは間違いない。

今回報告した竪穴住居跡はいずれも古墳時代前期の土師器編年で述べれば柳田康雄氏〔1982〕の編年によるⅡ a～c期、すなわち布留式古・中段階平行期に限られる。それほど大きな時間幅は認めることができないが、このような古墳時代における人口推定のためにも細かな土器編年にあてはめて、各竪穴住居跡出土土器の時期決定を行う作業が必要となるであろう。

このような人口推定の問題はあくとして、集落内の集団構成の多様さ、複雑性を物語るのが様々な外来的文化要素と各種生業、手工業関係資料である。

外来的文化要素で第一に問題となるのが竪穴住居造付けカマドと朝鮮半島系の土器であろう。これまで西新町遺跡のカマドは、日本の他遺跡に先駆けて古墳時代前期にまで遡る資料として注目されてきた〔西谷1983など〕。今回の調査ではカマド壁体だけでなく、支脚、燃焼部、煙道からなるカマド構造を詳細に明らかできる資料が多く得られた。的確な調査を実施できなかった例を除くとしても、カマドは住居壁中央にあり壁に直交するもの（6・42号竪穴住居跡）、対角線にのびるもの（30・39・40・89号竪穴住居跡）、隅に煙出しが有り煙道が住居壁に沿って伸び、壁中央近くで住居中心方向に屈曲してL字形の平面形を呈するもの（75b・78・81号竪穴住居跡など）に大き

く区分できる。このうち対角線にのびるもの、L字形のものは焚き口から煙出しまでの距離が長く、煙道が竪穴住居内に位置するものが多い。このような特徴は韓国畿道地域を中心に検出例が増加している百濟時代竪穴住居の造付けカマドと共通している。煙道を竪穴内に設けることにより、暖房としての役割を持たせていたと考えられるが、韓国の例との比較検討が必要となろう。また、このような構造のカマドは日本各地の古墳時代中期、後期の造付けカマドにも一部見られ、その系譜の解釈においても今回の調査例は大きな意義をもつ。

またカマドに伴う土器を明らかにできたことも重要である。土器はカマド、竪穴住居跡の時期決定資料となることに加え、カマド廃絶時の諸行為を物語るものでもある。例えば本報告の22・72・81・89号竪穴住居跡ではカマド近辺から完形の土器が多く出土している。これらの中には甕、甑のようにカマドで用いる土器がカマド近辺に置かれていたと解釈できるものもあるが、一方で精製の小形器台、小形壺などが出土した例も多い。中には煙道、壁体を廃棄した後に意図的に配置したと思われる例さえある。土器の器形、出土状況から考えて儀礼的な色彩が強く、古墳時代中期以降の手捏ね土器などを用いたカマド廃絶時の儀礼〔佐々木1984〕との比較が必要であろう。

朝鮮半島系文化要素として次に問題となるのが各種半島系土器である。これまでの調査でも多数、出土しており、韓国慶尚南道、全羅道地域にその系譜が求められてきた〔武末1998〕。本報告でも破片を含め多数の半島系土器を紹介したが、その中で特に注目されるのが22・81・89号住居跡出土の完形甑（第57図9、第155図87、第168図52）、21・63号住居跡出土の両耳付平底短頸壺（第54図78、第115図55）、29・93・96号住居跡出土の二重口縁壺（第67図2、第183図89、第188図47）である。まず甑は平底で多数の孔を穿つことが特徴である。朝鮮半島では地域ごとに多様な形態の甑が作られていたことが明らかにされているが〔酒井1998など〕、このような形態は全羅道地域に多いとされる。また22・89号住居跡出土品は胎土、焼成も全羅南道大谷里遺跡出土品と類似し、また郡谷里貝塚出土品とも酷似するという教示をいただいている（木浦大学校博物館李正鎬先生による）。81号住居跡出土品は西新町遺跡出土土師器と胎土、焼成が似ているので製作地の判断に悩むが、22・89号住居跡出土品は全羅道地域より舶載されたと考えて間違いのないであろう。

両耳付平底短頸壺、二重口縁壺の器形も忠清道、全羅道地域に多い器種であり〔金1999、常松1984など〕、特に後者は全羅南道に特徴的な甕棺墓に共伴する例も多い。63号住居跡出土把手付平底短頸壺は黄褐色を呈すもののやや硬質であり、29号住居跡出土二重口縁壺はやや硬質で赤褐色を呈し、明らかに土師器とは区別できる。29号住居跡出土二重口縁壺は肩部に三角文を巡らしているが、このような文様も全羅道に分布の中心があるようである。93号住居跡出土の二重口縁壺は炭素を吸着させたかのような焼成であり、これも日本の土師器には見られない技法である。

このように今回の半島系土器は全羅道、忠清道地域に系譜が求められるものがとりわけ目立っている。ただ、本遺跡出土半島系土器の中で最も出土数の多いのは縄蓆文タタキ、平行タタキ、格子タタキの短頸壺である。これらはタタキ文様、焼成、色調が多様であり、恐らく産地は複数の地域にまたがるものと思われる。上述した土器の中にも、突き詰めると朝鮮半島製か日本製か判断に悩むものもある。したがって、考古学的な詳細な比較はもちろん、理科学的な胎土分析も行って最終的には産地を判断しなければならないだろう。

外来的な文化要素としては半島系土器以外にも畿内系、山陰系など各種の外来系土器も注目される。このうち畿内系土器は北部九州一円で弥生時代終末以降、強力に浸透し、古墳時代前期には在

地系の土器と交替するように土器様式の中心を構成すると考えられてきた。今回、出土した土師器も布留系甕に代表されるように畿内系が大半を占める。

これに加え、西新町遺跡ではかねてから山陰系土器の多いことが注目されてきたが〔常松・折尾1982〕、今回の調査でも畿内系土器に次ぐ割合を占める。山陰系の土器は各種二重口縁壺、鼓形器台、低脚の脚付鉢が代表的であるが、北部九州では例の少ない山陰系甕形土器も26・43・105号住居跡（第64図15～17、第97図64、第218図43）から出土した。また、高杯の中にも山陰系と考えられるものが散見される。これら山陰系土器は小形品に太い縦ミガキを多様し、調整技法上でも在地系土器、畿内系土器と一定の差をもっていた可能性が高い。このような観点から見ると、特徴の少ない単口縁鉢にも山陰系の調整技法に近いものがある。したがって、西新町遺跡では山陰系の土器が器種構成全体として移入され、技法的にもある程度の独立性を維持していた可能性がある。これら在地系、畿内系、山陰系の土器が製作集団の出自の差と対応しているのか、それとも旧来よりここに居住する集団にそれらを取り入れられ、その後も何らかの意味で区別が行われていたかどうかの問題となる。

このほか東九州系、瀬戸内系、東海系の可能性のある土器も出土した。これらは量的に少なく、なおかつ畿内系土器、山陰系土器に見られるような体系的な流入という形はうかがえない。このような差を理解するには西新町遺跡を始め北部九州各地の古墳時代前期土器において、外来系土器の有無のみならずそれが土器のどの部分に影響を与え、どのように流入したか整理が必要である。

次に各種生業、手工業関係の資料について考えてみたい。本遺跡の生業に関する資料として最も量の多いのは、砂丘上の遺跡ということもあり漁撈具である。ただ手鎌、鎌も出土しており、水稻耕作を始めとする農耕もある程度、集落付近の可耕地で行っていたものと推測される。

手工業関係の資料として注目されるのは玉生産にかかわる遺物である。96号住居跡では床面ピット中に凝灰質泥岩の玉原石、未製品が納められており、そこが玉の製作工房であったと考えられる。この凝灰質泥岩の産出地は不明であるが、周辺古墳からもさほど例がないので、一時的で小規模な製作にとどまったと推測される。ただ、この他に古墳時代の土製ガラス勾玉鑄型が114号住居跡（第241図1）より、土製ガラス小玉鑄型（第241図2・3）が131号住居跡、近世土坑より、碧玉製玉未製品（第239図4）が119号竪穴住居跡より出土している。いずれも調査終了間際に出土したり、調査後の遺物洗浄中に気付いたため、工房を抽出する意識的な調査は実施できなかったのが残念であるが、本遺跡で広範な玉製作を行っていたことを示すものであろう。

北部九州の古墳時代遺跡で土製ガラス玉鑄型が出土した例はほとんどなく、それだけでも貴重な例であるが、ガラス製小玉鑄型が韓国全羅南道郡谷利遺跡、京畿道漢沙里遺跡出土品と類似していることが注目される。その胎土は全羅道地域からの舶載品と考えられる甕と類似しており、小玉鑄型自体も舶載の可能性が高い。一方、碧玉製玉未製品の原石は近辺では産出しないので、山陰地域から持ち込まれたと推測される。このような玉製作の技術的関係は上述した外来系土器の動きとも符合しており、単なる偶然の一致以上のものを感じさせる。これらの製作地、技術系譜について調べるとともに、土器の移動との関連を考察する必要がある。

このほか105号住居跡では赤色顔料の保管、加工用に製作されたのではないかと推測される特殊土器（第216図14）が出土し、また住居跡に近接して赤色顔料埋納ピットを検出した。この赤色顔料は鑑定を行っていないが、次年度報告の予定の石器中に水銀朱の加工に用いるような石杵もある。

また、5次調査出土の板状鉄斧は鉄素材として持ち込まれた可能性もあることが指摘されている〔長家1994〕。このように西新町遺跡では玉製作、赤色顔料加工が行われ、鉄器製作も行っていった可能性が考えられる。古墳時代になると各地で手工業生産が発展したと考えられるが、一般の集落と比べると西新町遺跡における手工業生産は多様といえる。これが人口増大による分業の進展であるのか、それとも対外的な交通、技術の流入の結果であるのか、当時における西新町遺跡の政治的関係上の位置によるのかが問題となろう。

以上のように古墳時代西新町遺跡の特質について外来的文化要素の流入、生業・手工業関係資料の面から見てきた。これらの様相は今後、多方面に問題を提起するものと思われるが、それを担った集団の問題は集落内の集団関係、すなわち集落構成の復元を糸口として解明するしかない。

これについてはすでに過去の調査資料をもとに、遺跡東半部に畿内系、山陰系などの外来系土器が多く、朝鮮半島製土器、カマドもそこに集中すると指摘されている〔田崎1983、武末1996〕。遺跡を大局的にみれば東半部に位置する12次調査区の状況も、上述のようにこれを支持するものであった。なおかつこれに加えて本報告で明らかにしたような玉生産などの手工業生産関連資料も本調査区の東半部に集中しており、外来的土器、朝鮮半島系文化要素との相関が推測される。ただ、集落の形成は大局的にみれば新しくなるにつれ南から北に集落の中心が移動しているともとれる。したがって、土器編年を細分化し、集落の変遷を再整理することが第一の課題となるであろう。

以上のように今回の西新町遺跡の調査は様々な問題を提起する結果となった。もちろん次年度報告までの間に簡単に解決できない問題も多い。次年度報告では残りの古墳時代関係資料と今回、ほとんど触れることのできなかつた近世の遺構・遺物について報告するとともにいくつかの自然科学的分析を実施し、あわせて集落変遷についても最低限の整理を行うことを課題としたい。

参考文献

- 佐々木隆彦 1984 「竈祭祀考」『松木遺跡』那珂川町文化財調査報告書第11集
- 酒井 清治 1998 「日韓の甑の系譜から見た渡来人」『榑崎彰一先生古稀記念論文集』真陽社
- 武末 純一 1996 「西新町遺跡の竈」『碩悟尹容鎮教授呈年退任記念論叢』
- 田崎 博之 1983 「古墳時代初頭前後の筑前地方」『史淵』120輯 九州大学文学部 pp.219-61
- 常松 幹雄・折尾 学 1982 「第4章 総括」『西新町遺跡』福岡市文化財調査報告書第79集
- 常松 幹雄 1984 「浦志遺跡A地点出土の把手付壺形土器」『浦志遺跡A地点』前原市文化財調査報告書第15集
- 長家 伸 1994 『西新町遺跡3』福岡市埋蔵文化財調査報告書第375集
- 西谷 正 1983 「加耶地域と北部九州」『大宰府古文化論叢』下巻 吉川弘文館
- 柳田 康雄 1982 「3・4世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』下巻
- 金 鍾 萬 1999 「馬韓圏域出土両耳付壺小考」『考古学誌』第10輯 韓国考古美術研究所

版 图

1 修猷館高校校舎
(調査前、南から)



2 修猷館高校校舎本館
(調査前、南東から)



3 修猷館高校本館車寄





1 1区校舎基礎遺構
(北から)



2 1区西部近世～近代
遺構全景 (南から)



3 1区近世～近代
遺構全景 (東から)



1 2 南区近世～近代
遺構全景（東から）



2 3 北1区近世～近代
遺構全景（西から）



3 3 北2区近世～近代
遺構全景（東から）



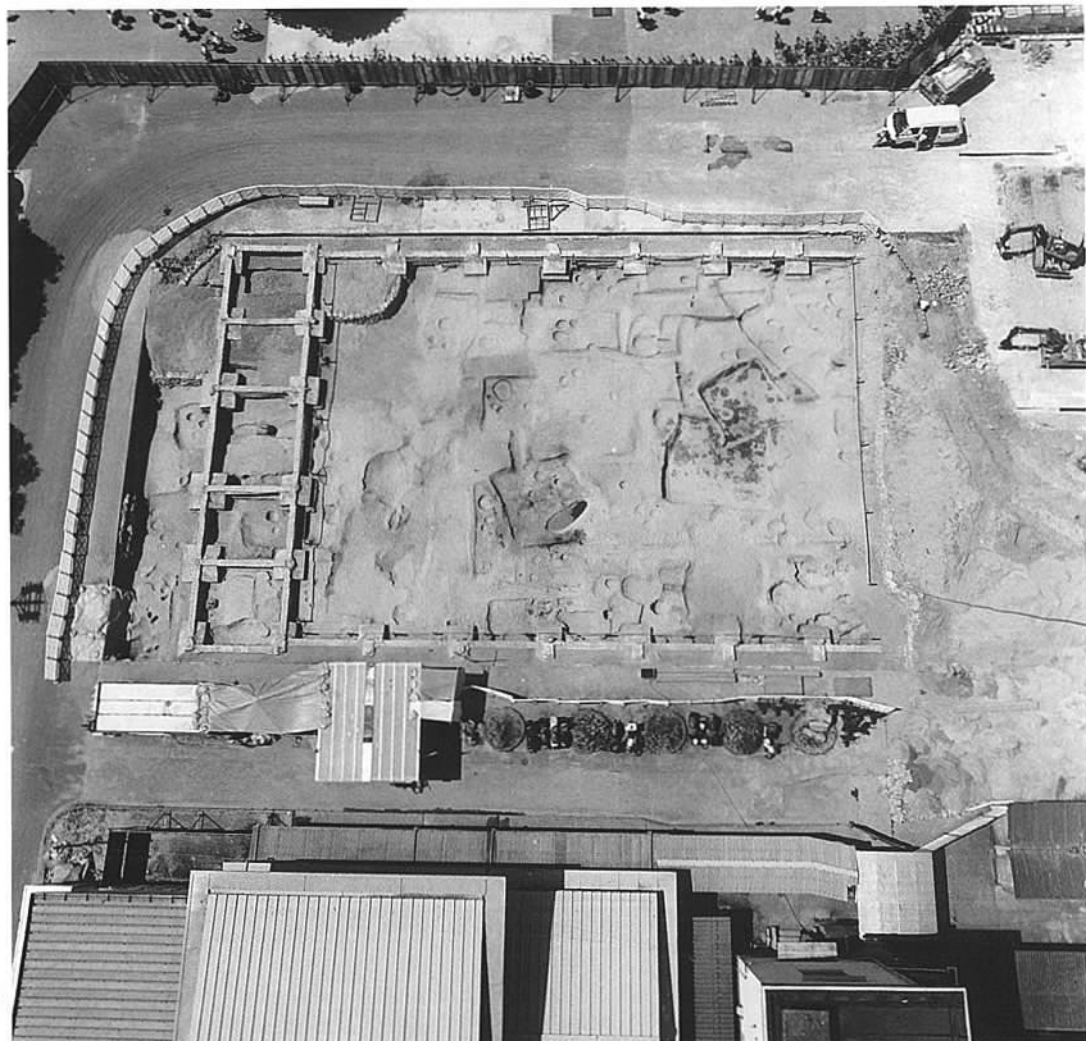
1 3中1・南3区校舎
基礎遺構（北から）



2 3西拡張区近世～近代
遺構全景（北から）



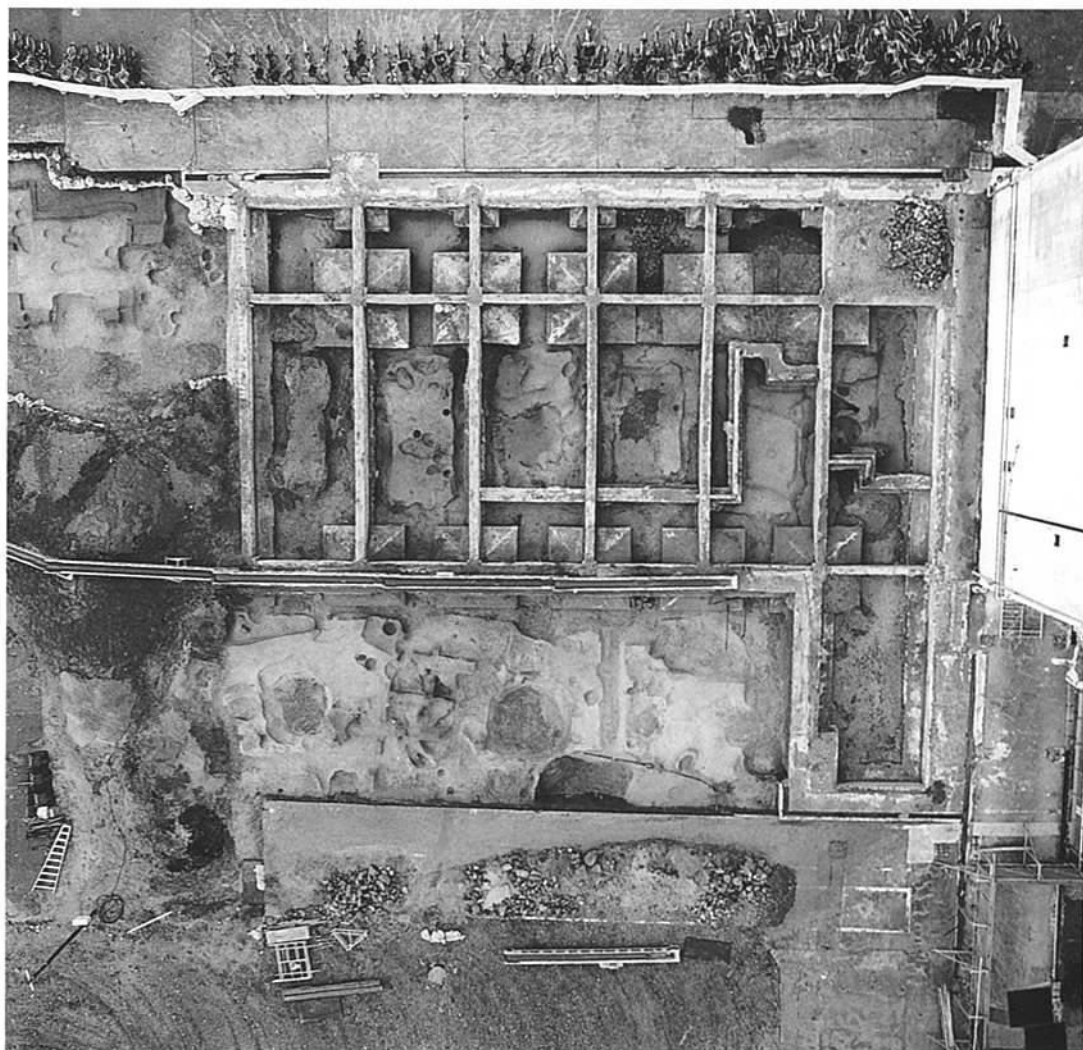
3 3西拡張区近世～近代
遺構全景（南から）



1 1区古墳時代遺構
空中写真



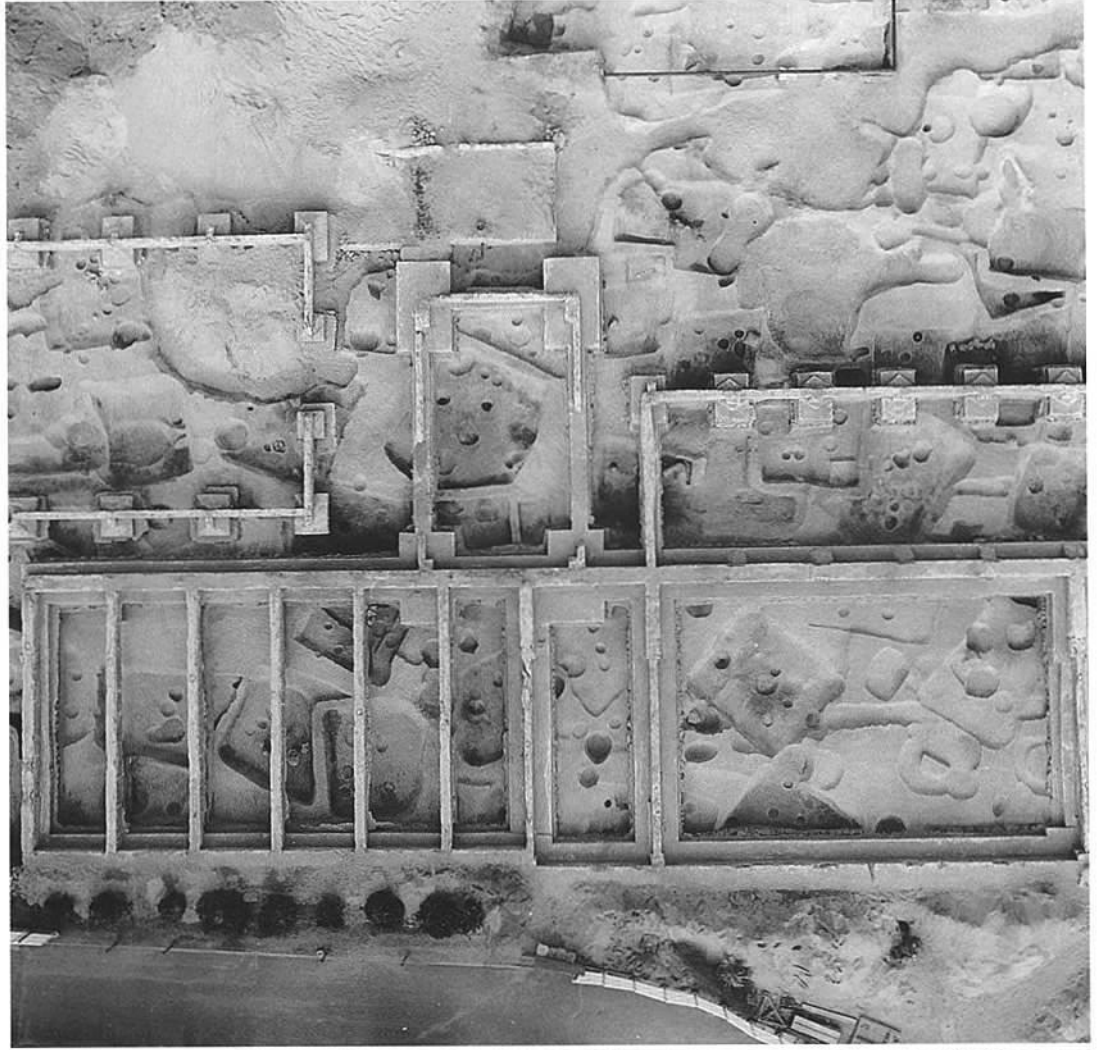
2 1区東部古墳時代
遺構空中写真



1 2区古墳時代遺構
空中写真



2 3区東古墳時代
遺構空中写真



1 3区中央古墳時代遺構空中写真



2 3西拡張区古墳時代遺構空中写真



1 調査地点遠景（南から）



2 調査地点遠景（西から）



1 1区中央部古墳時代遺構（北から）



2 1区西部古墳時代遺構全景（南から）



3 1区東拡張区古墳時代遺構全景（北から）



1 2南区古墳時代遺構
全景（東から）



2 3北1・中1区古墳
時代遺構全景（東から）



3 3北1・中1区古墳
時代遺構全景（北から）

1 3中3区古墳時代遺構全景（北から）



2 3西拡張区古墳時代遺構全景（南から）



3 3西拡張区古墳時代遺構全景（南西から）





1 1・2号竪穴住居跡
(北東から)



2 3号竪穴住居跡
(北から)



3 3号竪穴住居跡
(西から)

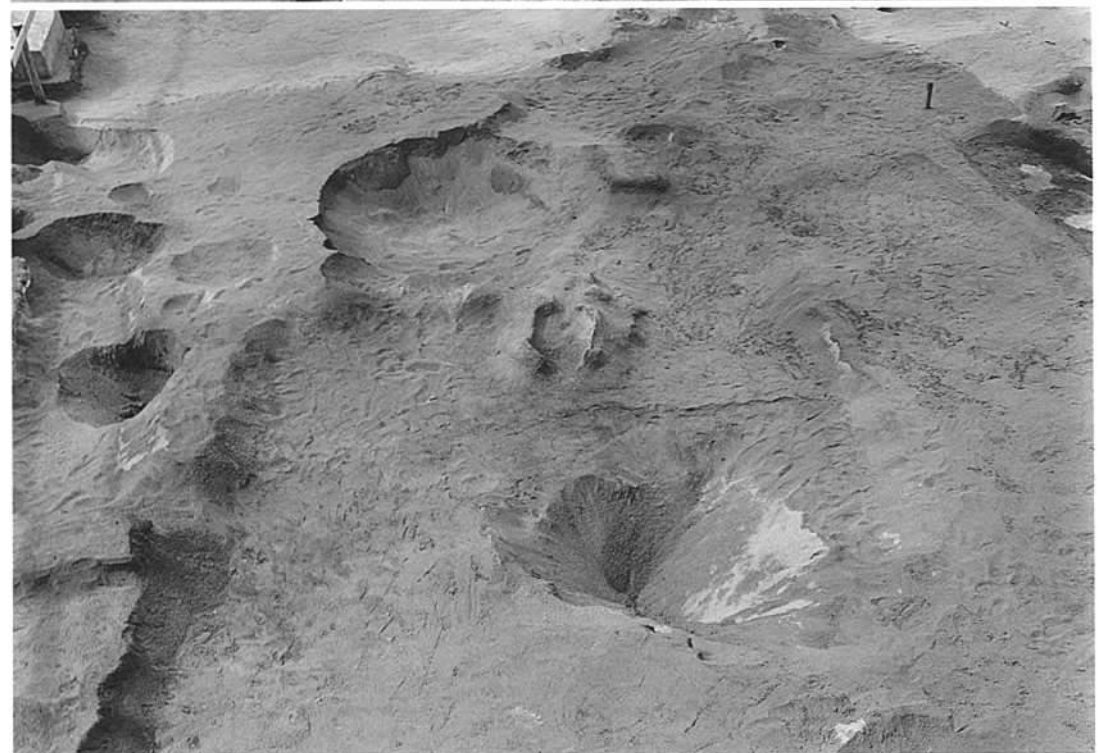
1 4号竪穴住居跡
(南から)



2 5号竪穴住居跡
(南から)



3 6号竪穴住居跡
(南から)





1 6号竪穴住居跡
カマド断面（南から）



2 6号竪穴住居跡
カマド（南から）



3 7号竪穴住居跡
（南から）



1 8号竪穴住居跡
(東から)



2 12号竪穴住居跡
(南から)



3 13号竪穴住居跡
(西から)



1 14号竪穴住居跡
遺物出土状況（西から）



2 14号竪穴住居跡
（西から）



3 15号竪穴住居跡
（南から）



1 15号竪穴住居跡北半
(北から)



2 16号竪穴住居跡
(北から)



3 17号竪穴住居跡
(東から)



1 18号竖穴住居跡
(南から)



2 19号竖穴住居跡
(北から)



3 21・23・24号竖
穴住居跡遺物出土状
況 (南から)



1 21・23・24号竪
穴住居跡（南から）



2 22号竪穴住居跡
（南から）



3 22号竪穴住居跡
カマド（西から）



1 25号竪穴住居跡
(南から)



2 26号竪穴住居跡
(南から)



3 26・27号竪穴住居跡
(東から)



1 27号竪穴住居跡
(東から)



2 29号竪穴住居跡
(北から)



3 29号竪穴住居跡
蛸壺出土状況
(東から)



1 30号竪穴住居跡
遺物出土状況
(南から)



2 30号竪穴住居跡
(南から)



3 31号竪穴住居跡
(南から)



1 32号竪穴住居跡
(北から)



2 35号竪穴住居跡
(北から)



3 36号竪穴住居跡
(北から)



1 37号竪穴住居跡
(北から)



2 38号竪穴住居跡
(南から)



3 38号竪穴住居跡
(東から)



1 39・40・42号竪
穴住居跡（南から）



2 39号竪穴住居跡
カマド（南から）



3 40号竪穴住居跡
焼土集中部
（南から）



1 41号竪穴住居跡
(北から)



2 42号竪穴住居跡
カマド (南東から)



3 43号竪穴住居跡
(東から)



1 44号竪穴住居跡
(南から)



2 45号竪穴住居跡
(南から)



3 49号竪穴住居跡
(南から)



1 49号竪穴住居跡
鉄器出土状況



2 50号竪穴住居跡
(北から)



3 52・53号竪穴住居跡
(北から)



1 52号竪穴住居跡
(南西から)



2 53号竪穴住居跡
カマド (北から)



3 55・56号竪穴住居跡
(西から)



1 63号竪穴住居跡
(東から)



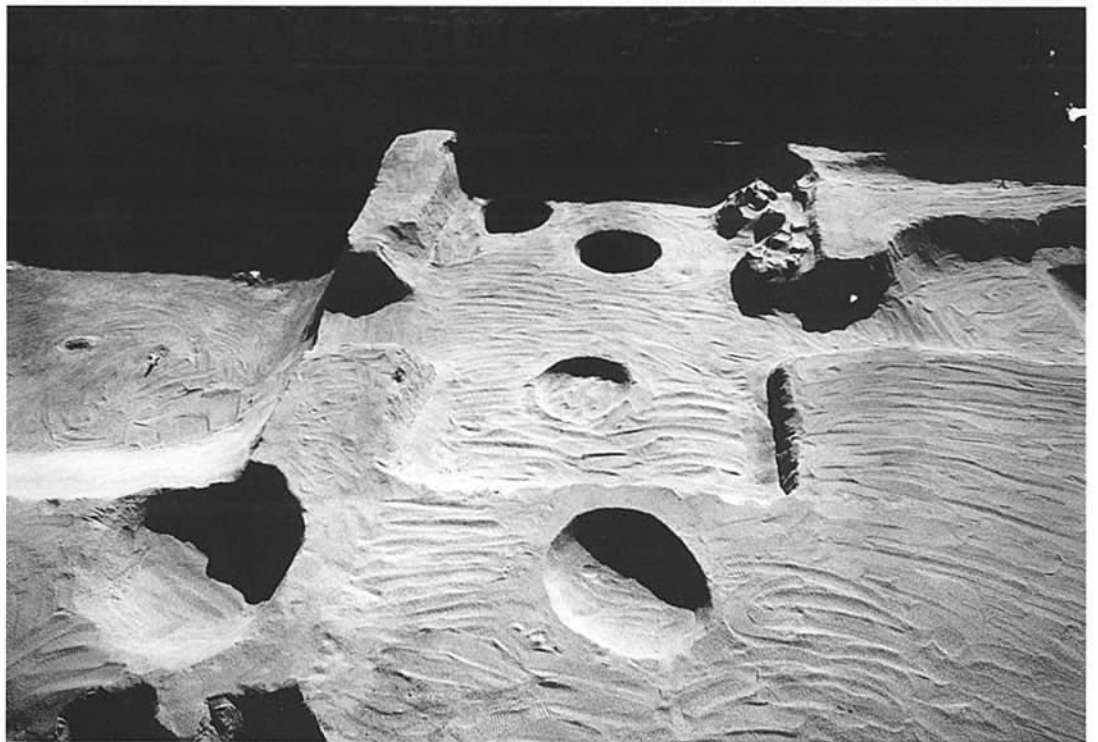
2 64号竪穴住居跡
(南から)



3 65・66号竪穴住居跡
(北から)



1 68号竪穴住居跡
(南から)



2 69号竪穴住居跡
(北から)



3 71号竪穴住居跡
(北から)



1 72号竪穴住居跡
(南から)



2 73号竪穴住居跡
(北から)



3 74・75号竪穴住居跡
(東から)



1 75b号竪穴住居跡
(東から)



2 75b号竪穴住居跡
カマド(南から)



3 76号竪穴住居跡
(南から)



1 77号竪穴住居跡
カマド（南から）



2 77号竪穴住居跡
（南から）



3 78・129号竪穴住居跡
（南から）



1 79・80号竪穴住居跡 (南から)



2 80号竪穴住居跡 (北から)



3 81号竪穴住居跡 (南から)



1 81号竪穴住居跡
カマド (南から)



2 81号竪穴住居跡
甑出土状況 (南から)

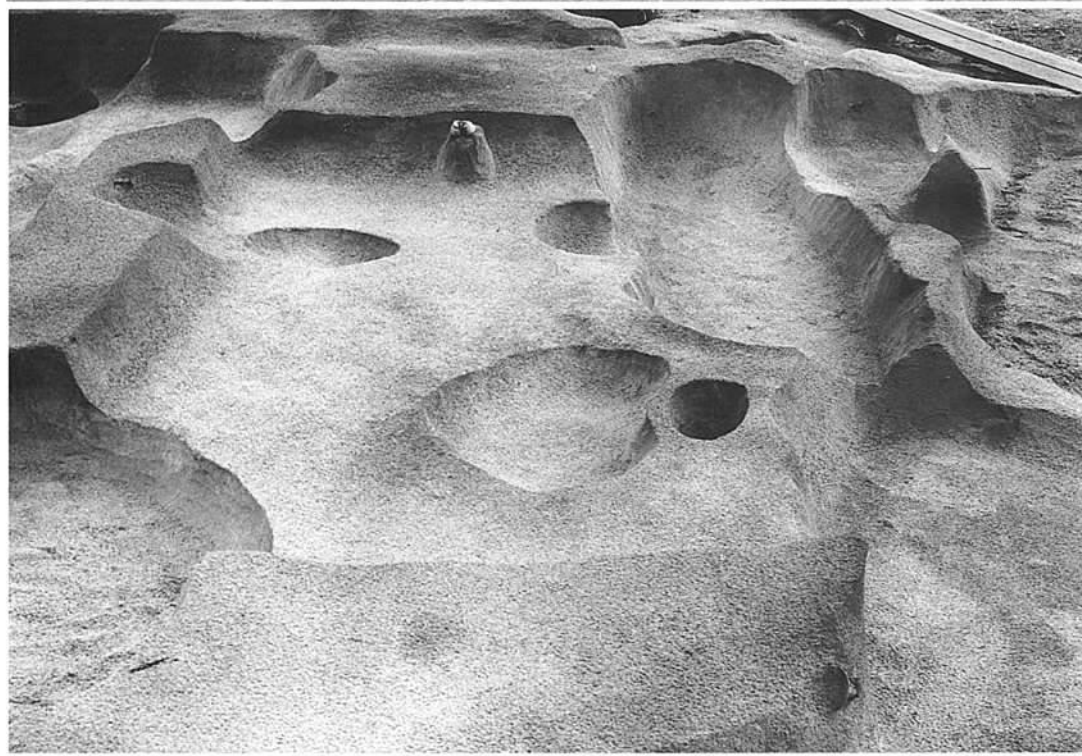


3 82号竪穴住居跡
(北から)

1 83号竪穴住居跡
(北から)



2 84号竪穴住居跡
(北から)



3 86号竪穴住居跡
(北から)





1 87・44号竪穴住居跡(北から)



2 88号竪穴住居跡(南から)



3 89号竪穴住居跡(北から)



1 89号竪穴住居跡
カマド（北東から）



2 90号竪穴住居跡
（西から）



3 91号竪穴住居跡
（北東から）



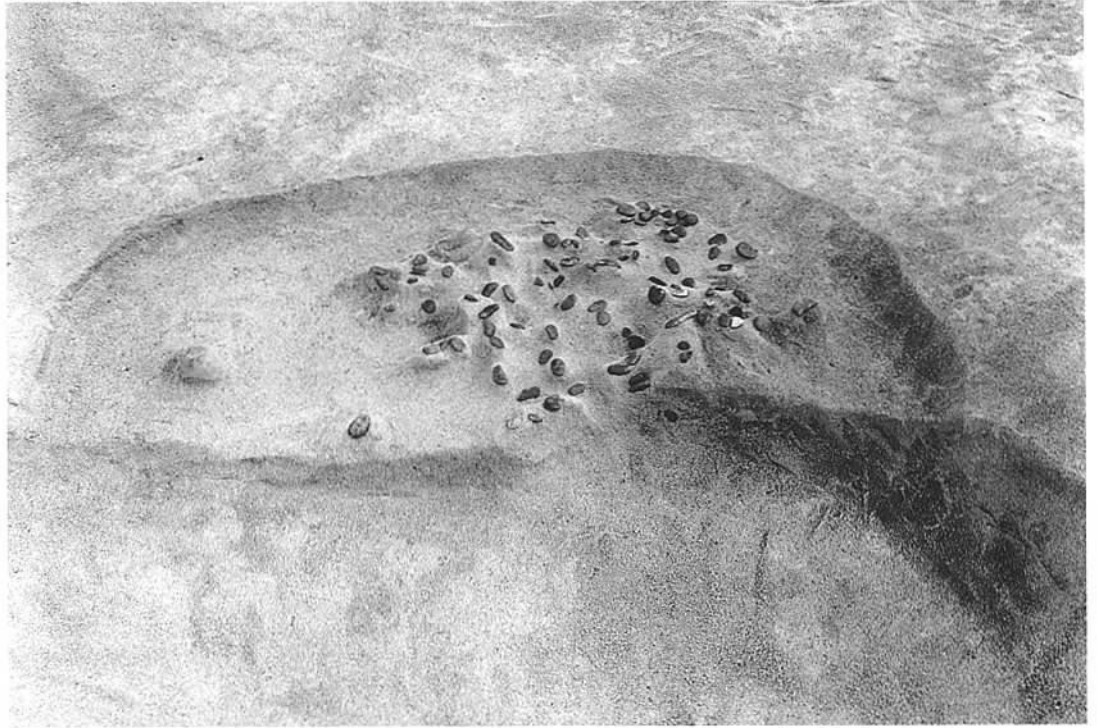
1 92号竪穴住居跡
(南東から)



2 93号竪穴住居跡
(北西から)



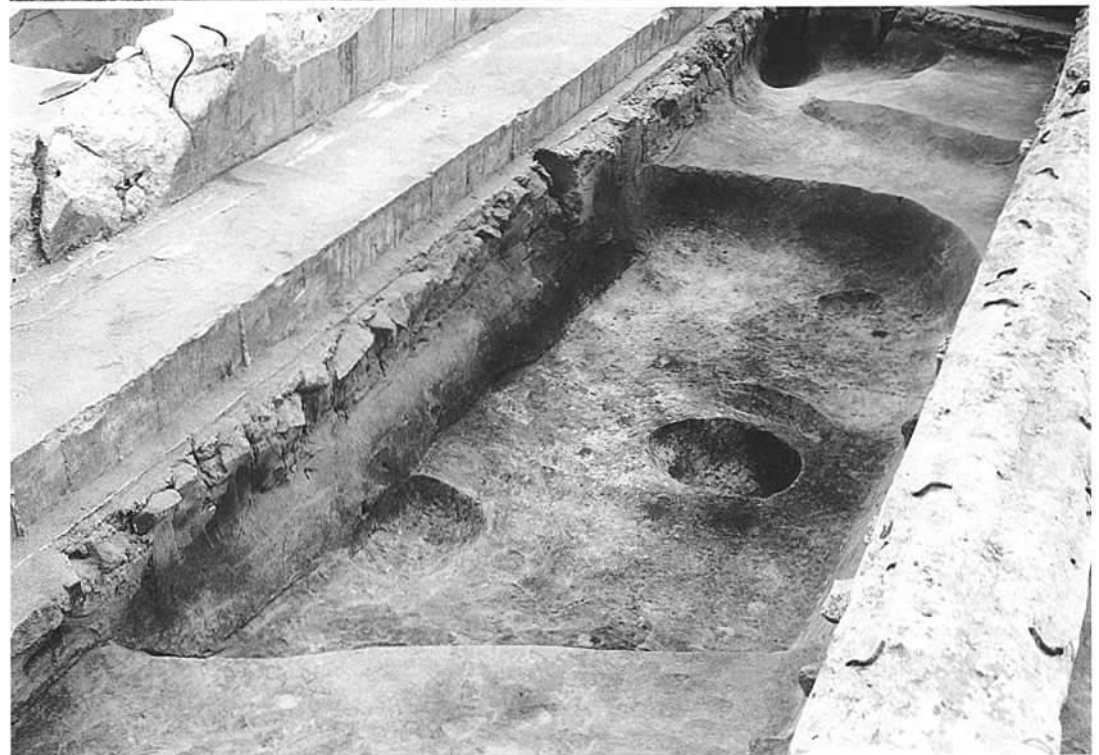
3 96号竪穴住居跡
(東から)



1 96号竪穴住居跡P 3
玉原石・未製品出土
状況（西から）



2 97号竪穴住居跡
（南から）



3 98号竪穴住居跡
（北西から）



1 99号竪穴住居跡
(北東から)



2 100号竪穴住居跡
(北から)



3 101号竪穴住居跡
(南から)

1 102号竪穴住居跡
(北から)



2 103・117号竪穴住居跡
(北西から)



3 104号竪穴住居跡
(南から)





1 105号竪穴住居跡
(南西から)



2 106号竪穴住居跡
(南から)



3 107号竪穴住居跡
(南から)



1 108号竪穴住居跡
(東から)



2 108号竪穴住居跡
碧玉製紡錘車形石製
品出土状況 (東から)



3 109号竪穴住居跡
(南西から)



1 110号竪穴住居跡
(西から)



2 110号竪穴住居跡
カマド (西から)



3 111号竪穴住居跡
(北から)

1 112号竪穴住居跡
(西から)



2 113・115号竪穴
住居跡 (東から)



3 114号竪穴住居跡
(東から)





1 116号竪穴住居跡
西半（東から）



2 116号竪穴住居跡
東半（西から）



3 119号竪穴住居跡
（西南から）

1 120号竪穴住居跡
(東から)



2 121号竪穴住居跡
(南から)



3 122～124号竪穴
住居跡 (東から)





1 125号竪穴住居跡
(南から)



2 125号竪穴住居跡
カマド (西から)



3 126号竪穴住居跡
(東から)



1 128号竪穴住居跡
(南から)



2 130号竪穴住居跡
(南から)



3 131号竪穴住居跡
(東から)



1 133号竪穴住居跡
(西から)



2 134号竪穴住居跡
(西から)



3 133・135号竪穴
住居跡 (東から)

1 137号竪穴住居跡
(東から)



2 138号竪穴住居跡
(西から)



3 139号竪穴住居跡
(東から)





1 139号竪穴住居跡
(南から)



2 140号竪穴住居跡
(南から)



3 141号竪穴住居跡
(西から)

1 142号竪穴住居跡
(南から)



2 143号竪穴住居跡
(西から)



3 144・145号竪穴
住居跡 (南西から)





1 146号竪穴住居跡
(東から)



2 147号竪穴住居跡
(南東から)



3 148号竪穴住居跡
(北から)



1 149号竪穴住居跡
(東から)



2 150号竪穴住居跡
(南から)



3 151・152号竪穴
住居跡 (東から)



1 153号竪穴住居跡
(北東から)



2 155・156号竪穴
住居跡 (東から)



3 157号竪穴住居跡
(南から)

1 157号竪穴住居跡
カマド (南から)



2 162号竪穴住居跡
(東から)

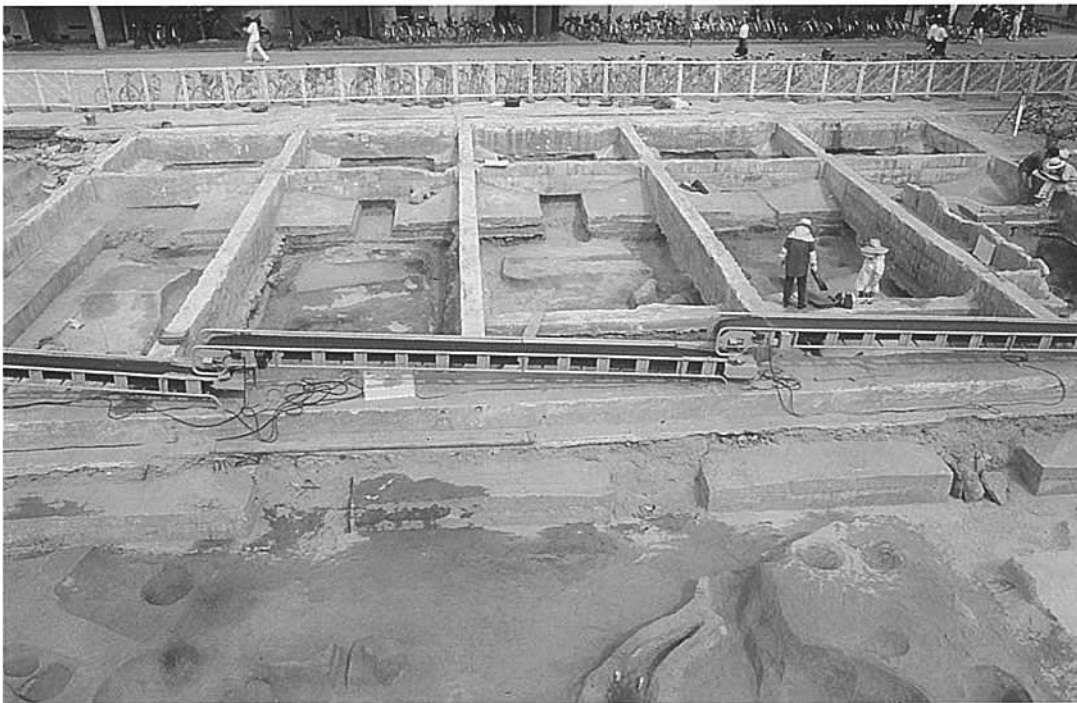


3 165号竪穴住居跡
(南から)





1 調査風景 (1)



2 調査風景 (2)



3 調査風景 (3)

報告書抄録

ふりがな	にしじんまちいせき							
書名	西新町遺跡Ⅱ							
副書名	県立修猷館高校改築事業関係埋蔵文化財調査報告1							
巻次								
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第154集							
編著者名	重藤 輝行・森井 啓次・大庭 孝夫							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8577 福岡市博多区東公園7番7号							
発行年月日	2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしじんまちいせき 西新町遺跡 12次	ふくおかし 福岡市 さくらくにしじん 早良区西新 6-1-10	401307	0240	33° 34' 50"	130° 21' 30"	19980422 } 19981228	5,214	学校改築
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西新町遺跡 12次	集落	古墳	堅穴住居跡		土師器・鉄器・石器			

福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 12	登録番号 12

西新町遺跡 II

福岡県文化財調査報告書 第154集

平成12年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 福岡印刷株式会社
福岡市博多区東那珂1丁目10-15